

心
心

ことわ

言葉は 言の和であり

何事も和であり 平和であります

言葉は 音であり

暖かい愛情であります

一 挨拶

杉並支部第三代副支部長 故片桐康一さんが、晩年に長い年月にわたり渾身のご努力によって教えを学ぶ人の手引きの一助にと編纂されました「学びの友」を、このたびご子息の片桐康喜さんの真心で『ことのわ』と題して一冊の本にまとめられ、御縁ある皆様のもとにお届けすることになりました。父から子への尊いみおしえに導かれての編集作業は、ゆうに五年を超える大事業でありまして、前支部長藤井寿章氏のご了承のもとに、杉並支部 高橋拓夫さん、小菅宣良さん、弘瀬忠夫さんの大きな協力をいただき今日の完成を見ることができました。

古い資料を掘り起こし、本会発行の様々な書籍を教学院のお許しを得て拝読させていただきました。様々な部分を訂正させていただきました。教祖様のお言葉に過ちのないようにと努力させていただきました。残念ながら、教祖ご存命のものに限られましたし、お言葉のすべてを網羅できてはおりませんが、お言葉を学ぶよすがになる、字引の一種とおもわれ、皆様にご活用いただけましたら、片桐康一さんの御霊もどんなにかおよろこびくださることと思います。

なお、コンピュータに多少の知識があれば、パソコン上に「捧誠の本棚」という本棚を置くことによりさらに深く広く勉強できるとおもいます。

終りに、出版にかかわる費用につきましては、そのほとんどをご子息の片桐康喜さんがご用意くださいました。感謝申し上げます。

平成二十三年十二月 吉日

修養団捧誠会 杉並支部 支部長 藤井 禮子

はじめに

昭和十五年頃と思いますが故父片桐康一が生前、豊島区西巢鴨に居住していた時分、まだ修養団捧誠会となる以前から、当時小学生の私も含め家族一緒に西巢鴨のお宅、その後渋谷のお宅にお話を聞きに参りました。

その後、教祖出居清太郎先生、並びに会母出居菊の先生より終始一貫終生の奉仕をせよと多くのご指導を賜り、そのご恩に報いるため晩年父は妻である しげ に捧げるとして「学びの友」一篇より三篇を作成致し発行させて頂きました。当時捧誠会より発行される会報並びに数々の教本の中より年代別に、父が一人であいうえお順に言葉を選び辞書形式に並び替えた原稿を、原紙にタイプ印字、校正、印刷、製本を致しましたので冊数にも限りがあり、不鮮明な箇所も多々有りました、その後続編を完成する事が出来ず妻のもとに旅立ちました。

改めて読み直しをさせて頂きまして父が教祖総裁先生から受けたご恩に対する感謝の念と、独力で作成した努力と、後編のための作りかけてあった資料を見ると、父の意志に添うべく「学びの友」の中の「ことのわ」のみを抜粋させて頂き、あらためて昭和十六年から昭和五十七年までを一冊に纏め完成させて頂きました。皆様方のよい友になりましたら幸と存じます。

平成二十三年十二月 吉日

使用いたしました図書

- いろは教訓 出居清太郎先生講演筆記 昭和一八年一〇月五日発行
- いのちの糧 出居清太郎 昭和一八年二月一日発行
- かむろぎかむろぎ 出居清太郎 昭和四四年四月一〇日発行
- 教訓 出居清太郎先生講演筆記・昭和一八年八月一日発行・昭和一九年六月一日発行・昭和一九年二月一日発行
- 敬霊気 出居清太郎・第一卷（昭和四〇年）・第二卷（昭和四一年）・第三卷（昭和四二年）いずれも二月三日発行
- 綱領の解説 出居清太郎先生御訓話 昭和二八年 発行
- 国民に告ぐ 出居清太郎先生御訓話 昭和二四年二月二〇日発行
- みおしえ 出居清太郎先生御訓話 昭和三四年二月三日発行
- 誠書 出居清太郎・第一卷（昭和四六年六月一五日）・第二卷（昭和四八年二月三日発行）
- 太極の響き 出居清太郎 昭和四四年一月三〇日発行
- 出居清太郎先生伝 岩井 馨世 昭和二八年二月三日発行
- ふゆのあり 教学院・創刊号昭和三五年一月より昭和五七年五月号までの二七二号
- ふりかえる 教学院・創刊号昭和四〇年一月より昭和五〇年二月までの三八号
- 捧誠会会報 渡利 千船・昭和二三年一二月の三号・昭和二四年六月の四号・八月の五号・一二月の六号
- みちびき 出居清太郎 昭和三四年一〇月三〇日発行

記号と書籍の索引説明

記号	発行年	発行月	頁	書籍名
い	一八	一〇	二〇	「いろは教訓」昭和一八年一〇月発行の二〇頁に原文があります
命	四八	一二	四九	「いのちの糧」昭和四八年一二月発行の四九頁に原文があります
か	四四	四	一	「かむろぎかむろぎ」昭和四四年四月発行の一頁に原文があります
訓	一八	三	三	「教訓」昭和一九年三月発行の三頁に原文があります
敬	四〇	一二	一	「敬霊気 第一巻」昭和四〇年一二月発行の一頁に原文があります
敬	四一	一二	一	「敬霊気 第二巻」昭和四一年一二月発行の一頁に原文があります
敬	四二	一二	一	「敬霊気 第三巻」昭和四二年一二月発行の一頁に原文があります
解	二八	一〇	一〇	「修養団捧誠会綱領の解説」昭和二八年発行の(月の表示なし)一〇頁に原文があります
告	二二	一	一	「国民に告ぐ」昭和二二年一月発行の一頁に原文があります
み	三四	一二	一四	「三百六十五日のみおしえ」昭和三四年一二月発行の一四頁に原文があります
誠	四六	六	三七	「誠書 第一巻」昭和四六年六月発行の三七頁に原文があります
誠	四八	一二	二〇	「誠書 第二巻」昭和四八年一二月発行の二〇頁に原文があります
太	四四	一一	八三	「太極のひびき」昭和四四年一月三〇日発行の八三頁に原文があります
伝	二八	一二	二七	「出居清太郎先生伝」昭和二八年一二月発行の二七頁に原文があります

ふ	三六	一	一	「ふゆのあり」 昭和三六年一月号の一頁に原文があります
振	四〇	一	一	「ふりかえる」 昭和四〇年一月発行の一頁に原文があります
捧	二三	一二	一二	「捧誠会会報」 昭和三年二月発行の一二頁に原文があります （捧誠会会報は昭和二三年二月号、昭和二四年六月号、同年八月号、同年二月号の四号分のみであります）
導	三四	一〇	三三	「みちびき」 昭和三四年一〇月発行の三三頁に原文があります

（参考まで）

- 一、平成の発行はこのなかではありませんので昭和の文字を取り除いてあります。
- 二、この本の中には現在改訂版として発行されている本もあります、その場合多少頁が変更されているところもあります。
- 三、この本に記載されている文章は総て原本に従い印字されています。従つて必要な項目の部分だけを抜粋してあるため前文及び後文の所は省略されている処も御座います。
- 記載されている中でも文章の長い物は途中で（中略）となつていますのでご了承ください。
- 四、昭和の始めに出された本については旧漢字、旧送り仮名で印刷されているところも有りますのでご了承ください。

目次

ア	一	ウ	三七	エ	四四	オ	四八
カ	六五	ク	一四一	ケ	一四六	コ	一五四
サ	二〇七	ス	二七八	セ	二八五	ソ	三〇六
タ	三一	ツ	三五六	テ	三六二	ト	三九四
ナ	四一二			ネ	四二七	ノ	四三一
ハ	四三三	フ	四七七	ヘ	四九〇	ホ	四九五
マ	五一	ム	五四四	メ	五五一	モ	五五六
ヤ	五六〇	ユ	五六七			ヨ	五七二
ラ	五八〇			レ	五八四	ロ	五九〇
ワ	五九二						
		リ	五八一				
		ン	五九八				

アの部

愛	ふ	四一	三	九
愛	ふ	四四	九	二
愛	ふ	四六	一一	七
愛	告	二四	二	六

愛は無限にして聖なり、尚、死よりも尊し。

どのように環境が変わってもさめない愛——それは地からふきでる熱愛であります。

徳と力と愛は無限であり、人知でははかり切れるものではありません。

愛と云う言霊についてお話を致したいと思います。相変わらず、相信じ、相和して協

力する時には大きな力で総ての事業が発展致しますことは疑いありません、多くの人

から愛され、己も愛されて行くところに温かい心が湧き出るので愛なき所には、愛の

心がない人は相信することも出来ず相和することも出来ず相変わらず長い間交際する

ことも出来ず實に淋しい生活を続けなければなりません。あの人に会いたいと思いま

しても会えない時もあります。会いたいと思いまして会えない時は己に愛の心の足ら

ざる所を反省しなければなりません。人を信ずる心なき時は己の心に愛なき時であり

ます。心が迷い迷いの心が湧き出る時は己の徳の足らざる証拠であります。自然の景

色を見て、自然の尊い理の話しを聞いて不愉快の心になる人は一人もないと思えます。

「ああいいな」とおもわれる心こそ清らかな美しい無条件の誠の心であります。総べ

ての物を、総べての人を、愛する心なき時は己の心が淋しい悲しい時なので、この心

湧き出る人こそ誠の愛を発揮して修行しなければなりません。己に誠の愛がなくて

人を侮り、人の愛を求めるような心を持たず己が誠の愛を努力して求め、人に与える

ところによって誠の愛が流れて恵まれて来るのであります。

女は愛敬といわれているが、愛敬はまた、愛教ともいえる。愛の心をもって教えるこ

とである。怒っても、厳格すぎてもよくない。愛は日月のごとく無限の光である。感

謝の誠をもって教え示すことが真の愛敬である。

愛	命	四八	一一	二五三
---	---	----	----	-----

合い ぶ 四九 一 二四

あのゴォーンという音は金が鳴るのか、樅木がなるのかということですが、鐘と樅木の合い（愛）が鳴るんですよ。この（愛）は心でしょう。

愛敬 ぶ 四六 二 五

愛敬というのは「愛郷」でありますから女の人の心の中は明るく暖かく、いつも和気あいあい、としていなければなりません。度胸と愛敬—そこに天地和合があります。

夫婦の和合があります。

愛敬 命 四八 一二 二八四

万物を崇拜する心構えや行いは、自らが愛し尊敬されるもととなる。

挨拶 導 三四 一〇 一〇五

あいさつする。あいさつという事は相手に心の愛情を捧げる事であります。

挨拶 命 四八 一二 一〇六

愛の心で相手の心を察するのが挨拶である。捧誠会綱領第四条の精神で相互の理解につとめることが挨拶である。

挨拶 命 四八 一二 一二〇

お疲れでしょうといわれれば、疲れたような気がする。ご苦労さまと心の底からその勤労に感謝すべきである。愛の心で相手を察し、愛の言葉を差しあげてこそ挨拶である。

愛情 ぶ 五一 一八 六

私に底を抜いた桶を使わせて、水を汲めと言いました。（中略）母がなぜ私にあんなことをさせたのだろうという疑問を解決できるまで、八年かかりました。魂の向上によって悟ってくるのであります。その間、じつと待つ。時が来ればわかる、とじつと待つ。これが、愛情であります。なにもせず待っているのではない。どんなこと

も、前の世までの天借の受け継ぎであり、未来に向って徳を積むための教科書であると受け取れなければ、天地自然の法則を学べたとは申せないであります。そう受け取れるような事柄を示しておかなくてはなりません。そしてそれから待つのであります。どんなことでも、重要なことは相対（あいたい）でやる。相互の理解に努めるというのは相対である。相対は愛が根本だ。

相手 ぶ 四三 一二 一〇

顔を知っているのは、縁につながる無数の人々の中のほんの一部にすぎないのである。ゆえに、相手を一人と思ってはならない。

愛とことたま ぶ 四三 四 八

—総裁、病気のおさとしは、すべて「ことたま」によるのですか。
—ことたまは愛である。誠の愛は万物に通うものである。

相棒	ふ三八九一五
阿吽(あうん)	誠四八一二七三
会えない	ふ四五五一〇
赤旗	ふ三八一一二四
あきらめ	み三四一二三六
あきらめ	誠四八一二三七
悪	ふ四二七一〇
悪	訓一八八五九

—だから病気にも合うのですか。

—愛だから合うのが当然だ。これは心の「合鍵」のようなものだね。

「相棒」は「愛捧」である。相棒が愛捧でない場合、人は酒と女と金に迷ってしまう。だから相棒は大事である。

人は「おあー」と生まれて「うん」と、この世を終る。これを「阿吽」(あうん)という。陰と陽とである。「阿吽の呼吸」ともいわれるでしょう。「阿吽」というのは、呼吸である。この呼吸は「行き通い」(息かよい)である。息である。息という文字は「自からの心」と書く。その意義は「靈魂」である。「いのち」である。

「会えない」というのは「愛ない」であるから、つね日ごろに、愛がないからである。赤旗の赤は垢である。

諦める心は寂しく、何処にか不満の心と迷いがあることと 생각합니다。(四月二四日)

哲学にしろ、宗教にしろ、つづまるころは太極の真理であります。真理というのは「誠」であり、無限であり、人智では、はかり知れないものであります。人智ではわかりかねるので「迷信」だと片づけしてしまう。また「ふしぎだ…」とかたずけてしまふ。これは「あきらめる」という言霊になってまいります。あきらめる—というのは淋しい心です。あきらめには「前進」がありません。壮年がそういう根性であつてはなりません。

悪は肥であり、肥あればこそ作物が育ちます。

「ああ苦しい」と云うことで、苦しむ時こそ、あくまで感謝が出来る人が尊いのであります。その悪を水に流し自由となる迄には長い年月もかかり、道中には苦勞困難をしなければなりません。人は人情として早く楽になりたい、よくなりたいたいと思うのは同じですが悪縁の線が八方につながり、その線の為に出る所へも出られず、実行も出来ず、だんだんその線が多くなつて苦しむのであります。この悪縁を絶切つて行くには、自分一人の力ではどうすることも出来ず、唯己れは奉仕の実行をする外、道はな

悪因縁を切る

ふ 四二 一二 七

いのであります。
長い年限、苦勞困難してこそ魂も磨かれ、悪因縁も切れていくのであります。

悪縁

命 四八 一二 七七

修養し心を淨めることにより、悪縁のつながりを一つ一つはずさせていただくのである。(中略) それが許されていることは感謝である。許されているありがた味がわかれば大いに努力実行すべきである。

悪縁が切れる

命 四八 一二 二七二

浄会を開いたり、実行により故郷へ足を運んだりした場合、悪いことが起こることもあるが、これによって悪縁の一つが断ち切られたわけで、大きな喜びと思わねばならない。

悪縁を切る

ふ 四二 一二 一〇

ただ奉仕の実行をするより外にみちはありません。(中略) 人は人として奉仕のみちを悟り実行したときに悪縁の線が切り開かれるのであります。

悪説を聞く

訓 一八 八 四

悪説を聞いた時には冷静となり、悪説をきかせた人を恨まず尊敬する信念を持ち、悪説そのものには智慧を以って考えて、行かねばなりません。

悪線を切る

訓 一八 八 五九

悪線を絶切って行くには、自分一人の力ではどうすることも出来ず、唯己れは奉仕の実行をする外、道はないのであります。

悪人と幸福

み 三四 一二 三九四

どんな悪人で、足らない人でも、心を改め反省して正業に励み、努力をすれば幸福になれることは理の当然であります。(七月九日)

あげる

ふ 四一 六 七

聞いてあげる…(中略) 物をあげるだけが、あげることではない。よく聞いてあげる…、このような「あげ方」は、物をあげるよりも尊い。

あげる

ふ 五三 九 二

あげますよ、と言えば動物でも寄ってくる。同じあげますでも、石をぶつけてあげれば姿を消してしまいます。私達も変りはありません。あげますよと言うと、どんな物でも、その物を見なくとも、何か貰えると思つてやつてくる。来た人に、教えてあげる。あげるには違いないが、手につかめず口にも入らぬ物でも形でもないものを、教えてあげる。

あげる

命 四八 一一 二七〇

貰うことばかり考えず、あげることを考えよ。よい心持ちをあげる、よい言葉をあげ

あさましき八つの心 訓 一九 六 二七

る、よい物をあげる、よく手伝ってあげる。

然し人の心として、欲しいとか、おいしいとか、可哀想だとか、其他憎い、恨み、腹立ち、慾、高慢のこの八つにつながる心の動きはなくてはならない心の動きなので、この八つの心の動きがあればこそ悦び勇んで実行もし、進歩も発展も文化も建設も改造も出来得るのであります。

味 ふ 三八 九 一五

砂糖の味は説明できない。その味を知ろうと思えば、食べてみるより外に道はない。神の道の実行：（中略）その実行をする時の気持ちと語れといわれても、語りようがない。知ろうと思えば、自分でやってみるより外にはないだろう。

足場 ふ 三九 四 二一

人を足場として出世する人がある。そういう人は必ず落ちる。（中略）人を足場とせず、自分を足場として上がってゆく：これが崩れる事のない上り方である。

足腹脳（アシハラノ） 導 三四 一〇 一九

世の中の人は合掌したり頭を下げますと笑う人もあるし迷心と侮る人がありますが、その人は天地自然の法則を学び修めていないから笑ったり迷心と思うのも無理はありません。足腹脳（アシハラノ）人の肉体にはかように命名されております。

足もと ふ 三九 七 三三

足もとに教えられるのですよ。

足を地につける ふ 三九 二 二〇

「足を地につけて歩む」という言葉がある。（中略）足は始めから地についている。宙に浮いている足などある筈がない。我々が地につけなければならぬのは心である。アストールという言葉のように、明日通ることができるよう今日の出発がある。

あすとーる ふ 五〇 一二 一八

「焦り」は「思いすぎ」であって、何の甲斐もない無駄苦労に終る場合が多い。食べ過ぎ、飲み過ぎ、乗りすぎ：いずれの場合でも、その後始末が大変である。

焦り ふ 三九 二 二〇

与える 命 四八 一一 二六七

暖かい心 ふ 五三 一二 二〇

暖かい心 命 四八 一一 二八〇

暖かい心持 命 四八 一二 一四一

暖かい心とは捧げる心無条件の心です。

一輪の花とも語れる人は、暖かい広い心の持主である。

暖い気持とは愛情である。食事にしても温いほどおいしい。冷い気持の人とは長い交

際はできぬ。家庭にも、職場にも、社会にも温かさが必要である。修養団の団は暖に通じるのである。

暖か味のない人

命 四八 一二 二八六

頭

ふ 五四 三 二

神、上、髪の毛と申します。頭は脳天といい、これを下から読むと天皇といい、かつてはあらひとがみと申しておりました。上、髪、即ち頭は、まが玉、胴は鏡、足は剣として、三種の神器であります。

頭を下げる

導 三四 一二 一六

暑い

ふ 四五 八 四

頭を下げる事は人の恩に感謝する事であります。おたがいに、まず健康をいただいて、この土用の暑さの中を「平和建設」を目標にすすんでいるのでありますが、私は「土用」と聞けば「親」を思いだします。暑さ——これは愛であります。

暑さの否定

ふ 三六 八 二

集まる

ふ 四四 一一 九

後かたづけ

命 四八 一二 六〇

天地の動きであるこの暑さを否定してゆく人は、高熱のために悩むこととなります。人も物も金も技術も、すべて縁のつながりから集まってくる。後かたづけという実行によって、心の力が出てくるのである。あとかたづけをさせて貰う、あるいは手伝ってあげることによって各人の徳が高まり心の力がついてくるのである。良い気持をさし上げ、手伝ってあげるといふ実行が尊いのである。

あと始末

ふ 五六 三 一八

後始末

命 四八 一二 七二

あと始末こそ、徳を積み及ぼす事なのです。後始末のできぬ人は底ぬけである。(中略) その日暮しても熱い涙のこぼれるような感謝を捧げ得る人にならねばならぬ。体内に寸暇なく働く器官に対し、夜寝る前に「ご苦労さま」と心からなる感謝を捧げ、なでさすりつつ労をねぎらいながら、眠りにつく人は後始末のできた人で底のある人である。かかる人は健康という徳が蓄えられていくのである。

あとで

ふ 四四 六 七

あなどる

太 四四 一一 一五三

あとで……は後退である。人をあなどっておりますと、人の言語動作を学び修めていけません。物をあなどっておりますと、物に恵まれず、物に守っていただけません。事をあなどっていきますと、

事業に失敗し、後悔だけが残ります。人に物に事に……すべてに敬愛のこころを注いでいくのが自然の法則に合った行き方でありますから、おのずから「四合わせ」になつてくるのであります。

雨 ふ 四四 一 一七
天地のお恵みの雨「あーめでたい」というこの甘露の雨をわれわれに恵んで下さった。誰しも、誤ちはあります。その時、済みませんと言っただけではすまない。誤ちによつて人に与えた迷惑に報いることをしなくては、万物の霊長と申すわけにはまいりません。楽なことを望み、苦しいことを避けようとする心の動きが、過ちを起すもつともになります。(二月二九日)

過ち み 三四 一二 七二五
過ちを許して戴けることが如何に尊いか、過ちにも気のついた過ち、気のつかない過ちとありますが、気のつかない過ちにしても重なれば、知らぬといつても天の裁きは免れません。悪いことと知りながら隠れてなす業等は重罪であります。(中略) 過ちを許して戴き、幸福を欲するならば、終生の奉仕に誠心誠意励まねばなりません。(十二月十六日)

アラ ふ 三八 一二 一三
人のアラを拾うよりか、人の実を拾う勉強をしたい。人のアラを拾っていて、明るいほほえみをたたえることはむずかしい。(中略) ほほえみを忘れないように勉強するために、人の実を拾う勉強をしよう。

アラ ふ 四〇 一〇 一六
人のアラを拾うな……というが、指導者は人のアラを拾ってあげてこれを浄化しお役に立ててあげる。これが人の上に立つ人の在り方である。

アラ 命 四八 一二 一七二
人の喜びをそねみ、蔭へまわって敵となるのである。人の喜びとともに喜んであげることに、即ちアラを拾わず実を差しあげることができないのだ。己を虚しうして徳をつむということが、わからないのである。

争い ふ 三五 四 五
争いは文明文化を築くための悪意のない争いはなくてはなりません。これを改造、改革、革命といつておりますが、そうして世の中は変化向上してゆきます。

争い ふ 四四 九 一三
争いがたえない、それは法にさからうからである、法を守らないからである。

争い 四 二

争い 五 四 九 三

争い 五 五 二 二

人が人の心で人を裁こうといたしますから、人の世に争いが絶えません。オレが、私が、という「が」は、先祖伝来続いています。そういう種をまいてきております。争いがつきないのも当然であります。争いは「我」によって起るのであります。家庭にも職場にも、社会にも、国家にも、国会にも、争いは絶えません。夫婦の間には、心の感情とソロバンの勘定のために争いが絶えません。国会での発言も、みなおのおの我執貪欲で発言している。決つて誠を捧げて発言していません。

いのちの親は、争えば、勝とうが負けようが賊軍であるとお論しになっておられます。親の代に勝つても子の代に負けた、というように勝ち負けは一代であつても争いは未代まで続くから、争いそのものが否定され、その種がまかれない事が大切であります。このような理は天地自然の法則でありまして、この法則を守らなければ、いつまでも争いはなくなりません。平和と叫んでもいうのみになつてしまいます。自己を中心にして、己の足らざる所を改めもせず、他人の言動のみを批判しているような事でありまして、自分の不徳を自分が力説しているようなものでありまして、人を倒せば己も倒されるという事を知らなくてはなりません。病院へゆきますと身の患いを受けた人がたくさんおります。心身ともに悩み苦しんでいる人が数多くお世話になつておりますが、感謝の誠を捧げている人は一人もないといつても過言ではないでしょう。裁判所にゆきますと、色々な係争関係に悩む人たちがたくさんきています。その苦しみの中にありながら、自分の我を反省している人もまことに少ないのではないのでしょうか。オレが、私が、という主張がぶつかり合う所に争いがおきているにもかかわらず、その自己をふり返っている人は少ない。

争いの原因 五 三 五 一 二 四 七

争いの原因は言葉の交流。心と心の対立、人と物との交流から、貧欲が出てまいりまして、昔も今も殺したり、殺されたり、だましたりだまされたりしております。嫉妬心という恐ろしい心が湧きだしてくることが争いのもつとであります。

争いを滅すには 三 四 一 二 二 五 八

言葉では平和を唱え、真実を唱え乍ら、何時の世にも争いの続くことは悲しいことで

改める ぶ 四一 六 九

あります。どうしたらこの争いを滅していけるか。それには神を信じ聖者の示された御教を守り実行する以外に道はありません。(五月四日)

「改める」というのは、毎日、明るく、清く、新しく貯蓄していく働きであって、蓄えることなく減らす一方であっては一国も一家も亡びる、心の置き処が違えば迷いが生じ、行詰る。

改める ぶ 四二 九 一〇

改めるとは新陳代謝することであり、あらたに向上する進行することでもあります。

改める み 三四 一二 五一

先ず人を見て良い所は学び、悪い処を見たり聞いたりする時には、自分にもそれ以上に悪い所の有ることを思わねばなりません。(一月二五日)

改める 訓 一八 八 四〇

新陳代謝することであり、あらたに向上する、進行することを、改めると云うのであります。又改心するとか、反省するとか云う意味にもなりますが、言霊の働きを申しますと、現れて来る出来事は、新たに浄化して善きことを貯める、貯めると云うことは貯蓄することであり、そしてよい芽が出るように栄えて来るように先が見えるように、見通しがつくことになるのであります。

アラを拾わず ぶ 五〇 五 一二

人のアラを拾わず、ミを拾えと教えられています。道路や玄関や廊下にあるアラ、ゴミは拾って綺麗にしなくてはならない。一本調子には私はアラを拾わんと言つて、チリ一つも拾わんわけにはいきません。場面場面がある。

あり ぶ 四一 三 六

「蟻」といえば「砂糖」を思う。それほど蟻と砂糖とは縁が深い。「砂糖」は「里」(さと) 故郷：親もとである。(中略) 義を重んじ、秩序正しい生活、それはまた「平和」である。

有難い ふ 三九 七 三三

難あり、有難いので、有難いと難有りとは紙一重です。難を有難いと感謝する。

有難い み 三四 一二 一二

生きとし生けるものには難業苦業が付き回つて居ります。有難いという文字は、難有りと書くように、夜があれば昼があるように、汚物を浄化するだけでも容易でない苦労があります。(一月六日)

有難い 誠 四六 六 一〇二

人生行路における「難」は苦しく辛いものでありますが、その「難」によって力をつ

有難い 誠 四八 一二 一六七

有難い 命 四八 一一 六三

有難さを知らぬ 命 四八 一二 二八一

有難さを知らぬ 命 四八 一二 二八六

ありのまま 命 四八 一二 二九八

あるがままに感謝 命 四八 一二 二九一

あわさる か 四四 四 七六

会わず 訓 一八 八 三六

けていただくのであります。いかなる「難」をも克服していくので、結果として「有難い」ことになってまいります。ですから「有難い」という文字は「難有り」と書くのであります。難有つて有難い、文字どおりであります。

艱難辛苦、難関を無事にのりこえてこそ真にありがたい、感涙にむせぶ感激がそこにわいてくるのであります。そこに平和の心が生まれてくるのであります。

有難いという気持にも数十段の段階がある。生死の境いにあつて救われるのも喜びであり、道の一里もゆけば忘れてしまうような喜びも喜びである。奇蹟としか思われぬようなこと、一生忘れられぬような喜びだけに感謝を捧げるのでなく、平常、普通に暮らせていただいていることに「ああ有難い」との心がしみじみと持ち続けられねばならぬ。常日頃この心掛けで喜びをつみ重ねてゆけば災難も少なく済むのである。

口に入るものや身につけるものは有難がり、うやうやしくいただくが、教えの言葉を百万円の金よりも尊いとしていただく人は少ない。

物をいただく和有難がるが、光や、熱や、水や、空気をいただいている有難さを気づかぬ人が多い。

ご馳走になったら悪いだろう、世話になったら迷惑だろう、というのは自由の心でない。束縛している心はつらいものだ。ありのままの姿、ありのままの気持こそ環境に順応した明るい心である。

身体の健康状態や人と人との交際において無理な心使いや、行き過ぎた心配はしない方がよい。手足しびれたときは使いすぎたと反省し、手紙などのこないときはこない方がよいのだと思えばよい。あるがままに感謝することが大切である。

あわさるといふ言霊。本会の趣旨の「しあわせ」は「四合せ」です。「しあわせ」は、ことたまから申しますと、四（し）と八（わ）です。四×八＝三二であります。

いやな人には逢いもせず、居ても居ないと、うそを云ったりするようなことがありません。逢うことがいやなら、あわずに居らねばならず、「合わず」と云うことになれば

合せ鏡

命 四八 一二 二二八

争闘をする外ないのであって、「逢わず」とは「合わず」の意味で平和なことではないのであります。平和でなければ助け合いをすることは出来ないであります。

世の中は合せ鏡で、わがことを 人がまねして教えしめせり

世の中とは心の中、家の中である。(中略) わがなすべきことをなさざれば人が真似して、実行を示し教えくださるのである。良きにつけ悪しきにつけ、その事柄は学ぶため、守るために示し下されるのである。悪しきことを見ても、聞いても、歎かず悲しまず、その悪しきことや動作を教材として進みゆくだけの徳を積まねばならぬ。

合わない

ふ 四二 九 九

「合わない」(合わない)というなら、斗争するほかはないのであって、「あわない」というのは平和ではありません。平和でなくして斗争の姿で助け合いはできないのであります。

安心立命

み 三四 一二 二二

何時迄も嘘や、誤魔化しを信じて、争うことを続けておれば利に利が重なりまして、安心立命は出来ません。(一月十日)

安心立命

み 三四 一二 五四九

宗教も学問も、身に修め学んでいくことは、安心立命の心を養うためであります。(九月二二日)

安心立命

振 四三 九 四

天地自然の法則は、皆様もご存知の通り四つの交流、これを環境に順応しておこなう。この環境に順応することが、一番素直な生活であって、これによって安心立命の境遇に達する事が出来るのであります。

安心立命

命 四八 一二 二九五

安心立命とは、現在の環境に順応できる心の持ち方、使い方をいうのである。また分に応じた生活をするのである。

安心立命の境遇

ふ 四二 三 七

平和な、動揺転倒しない心、物心共に恵まれた安心立命の境遇、それは、みおしえを信じ、教典に基づいて修養実践するところに与えられるのであります。

安静

導 三四 一二 八三

安静—あうんせい—あうん(天地)—せい(誠)—調和—和合—円満—天の道、神の道、人の道を行えば呼吸器病にならない。

呼吸器病には特に医師から安静(あうんせい)転地療法(天地療法)と注意を受ける。

イの部

あうんは天地であり、せい誠であり調和であり、和合即ち円満であります。誠は天の道であり、これを行う事は人の道なのであります。天の道、即ち神の道、人の道を行えば呼吸器病という病になる事はないのであります。

「以の中の姿を見よ」人と人との字が互い違いになってその中に一点の星を示してあります。この星こそは北進星として如何なる時も動くことなく不動の姿をして光々と輝いて居ります。この星こそは實に尊い我が日の本の大和魂の神心を現し、この星こそは尊いお方のお姿を現しているであります。この星を見て神国の尊い有難い姿を現していることを知らねばなりません。「以」この字の中の一点こそ、その真理は實に尊いものであります。

人と人とが互いに向き合い、その中心に点(天)をうつと「以」(い)となる。点は誠であり点数である。点数は誠を捧げて実行と行いに現わして始めて頂けて仕合わせになる。

胃は、い。いは、以。以という文字は、一点の星が人と人との間にある。星は「奉仕」であり、この奉仕が天借をお返しすることになる。

胃は食物を消化して廻転させる、その力を「胃酸」という。

なんでもこなしてゆくのが胃ですよ。

「胃」という言葉は家であります。家にも小ささまありますが「地球」もまた家であります。そして、この地球の「長」は神であります。「神とはなんぞや」——姿形はありません。したがって見えません。形あるものを動かしているその力、これ即ち神であります。

以	胃	胃	胃	胃	以
ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	い
四二	三九	三九	三九	三九	一八
一一	八	八	八	一〇	三
二	一九	一九	一九		
	一七	一七	一七		
	四六	四六	四六		
	六一	六一	六一		
	四七	四七	四七		

胃を病む人 命 四八 一二 一五三

まじ目で、知恵はあるが固い人に多い。心の幅がせまく、腹をたて易い。まるく優しい心、広く暖い心になれば癒えるのである。面倒くさいと思う心や威張りたいたいと思う心を感じ謝によって切りかえる必要がある。また遠慮する人に多いが、遠慮は高い心である。心から笑えるように実行することが大切である。

胃を病む人 命 四八 一二 二二八

胃を病む人は、まじめで知恵はあるが心が固くせまい。遠慮する心、威張る心あり、気づらいが高く、反省の心が少なく、母（おふくるともいう）への感謝に欠けるところがあり、笑いの少ない人に多い。

五―七 七―五 敬 四二 一一 一二二

短歌にしる、長詩にしる、その詩形は五音と七音の韻をふむ。五―七、七―五の韻は「いーな―（五―七）」であり「な―い―（七―五）」である。キリストも「初めに言葉ありき」という。命と音とは一つである。人に命あつて初めて音が生まれる。音がなくなれば命はなく、それは「なきがら」である。「いーな―」と「な―い―」というこの音は、その始め、いざなぎの命といざなみの命の発せられた第一声である。いわば人がこの世に出した初めての「音」である。また、五―七はいつも仲よくである。七―五は仲よくいつも調和するである。人と人との調和だけではない、万物に無声の声があるのだから万物と調和していく、それが五―七、七―五の韻である。

いいね ぶ 四七 一一 二七七

「よかったね―」というこの「ね―」に力がある。「いいね」というのは、亥と子である。亥と子とは隣りあわせで合掌である。亥年から子年へ……これは「いいね―」である。

いい値 敬 四一 一一 二〇七

「いい値で買う」というのは「いいね（良いね）」ということたまに通じる。捧誠会はこのに移って、ここから必ず伸びます。

いいんだよ 敬 四〇 一一 二三七

「いいんだよ」（「ええんだよ」という言葉。これを、言葉からいえば「円だよ」である。円は和である。いかなる現実の巡り合わせをも「これでよし」と受けとるのは天地自然の法則との和合であり、これ以上大きな「和」はない。世に「巡り合うのも縁」という。ここにいう「縁」は「円」に通い「和」に通じていることを思わねば

言うのみ

み三四 一二 二五九

家

ふ四五 一二 一九

家

命四八 一二 一〇七

家の長

ふ四五 一二 一九

家の長

命四八 一二 一〇三

家の長を敬う

ふ四五 一二 二〇

家の念

ふ四四 七 一二

ならない。

言うのみでなく、み教を信じて実行すべきであります。(五月四日)

家は宇宙であります。

一家において長を敬い、幼を慈しむべきことは理の当然であるが、これを人体でいえば肉体は家であり、心はその長である。一家の長も両親であり、肉体の長も良心である。(中略) また家庭はわが家だけをいわず、働いている環境はもちろん汽車の中、電車の中でもすべてをいうのである。

家の長といえば、これは私たちが崇拜している太極である。

長になる人は指導者であるから周囲から尊敬されるような行動をせねばならぬ。だから徳を積まねばならぬ。些細なことで不平を思い、不平の言葉を出し、慢心したり、誠の道を踏みはずすようなことをしてはならぬ。常に幼を慈しみ、相互の理解につとめ、責任をもたれるような長でなければならぬ。

万物を尊敬愛することは、家の長を敬えということになる。

家にも土地にも「念がのこっている」と、よくお話するが、このことを、ほんとうにわかっている人が幾人あるだろうか。「念がのこっている」というと、その家や土地の先住者の念だけを考えがちであるが、私がつねづねいう「念」とは、そのような単純なものではない。

先住者の念はいうまでもない。そのほかに、その家に入入りした多くの人々の念がある。その土地を踏んだ多くの人々のさまざまな念がある。出入りした人々、かならずしも善い念ばかりを持っていたとはいえない。思いちがい、とりちがいから悪念を抱いて出入りした人も多数あったはずである。また、訪ねてきた人々の念のほかに、その人々につながる多くの人の念もそこに運ばれていることもある。こう考えると、無量といつてよいほどの「念」が、その家にも土地にも残されていることがわかるはずである。

人々の念は、このように家にも土地にも残されていくが、同じく職場にも残される。とくに国会議事堂に国会議員は果してなをに残しているか。これを反省している国会議員が何人あるか。強く、きびしく訴えたい。

人間は生かされて生きている。ただ生きているのではない。生かされて生きているのである。ところが人々は、自分の才覚で生きなければならんと夢中になり、生かされていることを忘れ果てている。生きよう、生きようとするから天地の真理に逆行する。筋道を誤る。

食糧だけでは健康の保証は出来まい。(中略) 活かされている力、これは「私」の力ではない力である。無限の徳と力と愛によって活かされていることを認識せずにはいられない。

活かされているから「行かれる」のであり、そこに人の前進がある。生活は文字どおり生き活かされています。生きるとは人の道、活かされることは神の道。

天壤は無窮であります。その無窮の中にわれわれは活かされているのであります。無窮の中に活かされている、この富は徳と力と愛であり、無限の灯ではないでしょうか。つまり無限の財産なのであります。

活かされていく大恩等は無限でありますから、人知では計り知れません。天恩によって活かされ、人力によって生きていく両面に於ける大恩を見逃がして、気随気儘、勝手な行いをつづける為に、人の世は、身分の相違あるうとも、徳不徳の人といえども、悩み苦しみによって教えられるのであります。(一月二十日)

生きる為には肉体の交流、物の交流、活かされる為には魂の交流、言葉の交流、この四つの交流を誠を捧げて実行していけば、人の生活は清く、明るく、正しくいかれるのであります。(十二月二十八日)

活かされることは大恩、生きることは人の恩義、大恩と人の恩義に報ゆることは、終

生かされる
ふ三八 四 一三

活かされる
ふ四〇 八 一三

活かされる
ふ四一 三 八

活かされる
ふ四七 六 一五

活かされる
ふ四八 八 一四

活かされる
み三四 一二 四〇

活かされる
み三四 一二 七四九

活かされる
振四二 七 二

胃下垂 三九 八 二〇

生忘れることなく、実行と行いに現わさなければなりません。

胃下垂は、イカスイ（カス）であって、粕が人と人との間にはさまっている。粕のよ
うなものが、その人にとつては貴重のように思える。金品を人に貸し（貸す＝カス）
た。必ず返すというから同情して貸した。それが返してもらえない。この悶々とした
気持が「胃下垂」である。更に、これが高血圧につながり、気持ち、感情、言葉がも
めあつて、肝臓、心臓の病いになる。

怒り 四五 一一 一三

これは怒りという。錨というものはとんがっている。しかし船のために非常に役に立
つ。そのイカリもフントウ（奮闘）に換えれば役に立つ。

錨 三八 一一 二四

人が天地自然の法則に外れて、心の停滞をしている時、やはり錨をおろしているよう
だ。みおしえと共にあつて身も心もドンドン進行（信仰）している時には錨は不用で
ある。錨（怒り）の裏は「恨み」である。（中略）「恨み」「ねたみ」など、後生
大事に持つものではない。

錨 四五 八 一四

「錨」（いかり）を下ろして船は安定する。波に流されなくなる。神の「いかり」を
いただく。この「いかり」はまことにきびしい、その「いかり」ゆえに わが身の危な
い方向に向かおうとするのを止めていただくのである。身にしみて感謝するほかはない。
怒る——怒っているというのは魂が凍っているということである。

怒る 四四 四 七

凍っている——それは固く凝（こ）りかたまっている姿であり、融通無げのやわらか
さを失っているのである。
みなさんが、カツと怒った時の息を、すぐガラスにかけてごらん下さい。毒素が混じつ
ております。

意気 三八 五 一六

意気―息（いき）が合つて始めて和が成立する。ところが、なすことすることがイス
カのはしの食い違いになるのは、息があつていないからである。※註（イスカのはし
の食い違い＝イスカという野鳥はくちばしがハサミのように食い違っています。そこか
ら、話と実際が食い違っていることをいいます）

息 ふ 五一 一〇 二

私たちの息、呼吸もそうで、行き通うことであります。息は体温。温、すなわち熱のないとき、水・空気のないとき、地球は砂漠になってしまいました。

息 敬 四二 一二 九三

易経まで勉強していません。「易」は息でしょう。息は気であり、空気です。また「息」という文字は「自らの心」と示されてあります。これは「水からの心」です。すなわち火・水・風です。

生き活かさる ふ 五一 一九 三

生きることは人の道であり、文化の基礎を築くことであります。修養とは文字通り修め養うと示され、精神とは清き神と教えられております。

意気が合う ふ 三八 五 一六

行きかよい ふ 四〇 一二 一八

息が合う、意気が合うというのは、同時に「行き合う」ことである。あげるのは好きだが頂くのは嫌いだ、話をするのはいやだが聞くのは好きだ、世話をするのは好きだが、されるのは嫌いだ―というのでは、吐く息ばかり、或いは吸う息ばかりであって、これでは必ず行詰る。さしあげて頂く、これが正しい交流である。

「行き通う」ということは、「息かよう」ことであり、ここに「いのち」がある。これは厳然たる自然の法則である。

行き通い ふ 四二 二 一四

いき通う 命 四八 一一 四二

行き通いは息通いである、交流が止まると生き詰まり、息詰まる。いき通うというのは、いろいろのことに通じるのである。息通う、人と人が行き通う、一家の気持がいき通う。息通うは行通い、意気通いに通じるのである。いき通いの実行が平素できていないと、いざというとき最後の五分間に遅れてしまう。

活かた使い方 ふ 四二 六 九

使えば無駄のように思う人もありますが、それは使うべきところに使わないからであります。世のため人のために使うのは、どんなに使っても無駄ではありません。喜んで使う、喜んで出す、そしてまた、喜んで頂戴する、ここに迷いがありますまい。迷いのない出し入れには災難も苦痛もありません。

行きづまり ふ 四七 二 六

一・思い違い、二・聞き違い、三・とり違い、四・感違い、五・間違―この五つが誤解となり、疑いとなり、害の心になって迷い苦しみます。これを行きづまり、と諭してあります。

行き詰まり 五六一六

行き詰まりは「立て直し」の教訓であって、この行き詰まりがあればこそ、開拓ができるのであります。精神の道も、みな一致して立て直しをするところに、迷いも光明となり、細い曲がりくねった道も広いまっすぐな道になって、安心して通行できるのであります。 (裏表紙)

行き詰まり 命四八一七〇

行き詰ったら働くことだ。よい言葉を出し、肉体、知恵、物の無駄使いをせず人の喜ぶことに使え。また自らも感謝して肉体も物も知恵も使うようにせよ。

行き詰まり 命四八一七八

汚れた心を持つているために行詰まり、どうしようか、どうなることかと悩むようになるのだ。今後のことは今日にあるのだ。きょう、反省し、きょう心をとりかえ、感謝行さえしておれば、また新しい明日が来るのである。

行き詰まりの打破 命四三九一

総ての行き詰まりを打破していく為には反省と改める必要があります。

(七月七日)

行き詰まる 命四三六一二

ゆきづまって身の動きがとれないということは、重い荷物を背負って歩いていることでもあります。それはどん欲のために、どこまでもその荷物をになって、死んでも物ははなさないという不徳が、過去に沢山あるからであります。物資はなくてはならない貴重なものであります。徳の足らざるものは、物に支配されて身心の悩み苦しみが、より一層深くなってまいります。

行き詰まる 命四二一一〇

心が行きづまったときには、絶対安静の信念をもって見なおせば、必ずそこに一つの光明がさしこみ、心が開けるのであります。

生きていく 命三四二四〇

人が生きていく為には、人の勤労と慈愛によって、数知れぬ恩恵を受けるのであります。 (中略) 天恩によって活かされ、人力によって生きていく両面に於ける大恩を見逃がして、気随気儘(きずいきまま)、勝手な行いをつづける為、人の世は、身分の相違あろうとも、徳不徳の人といえども、悩み苦しみによって教えられるのであります。 (中略) 幸福になろうと思えばこの道理を自ら学び修め、終生の奉仕に誠心誠意の実行を励むべきであります。 (一月二十日)

生きる 四二 四 一〇

生きる道として最も大切なことは息であります。息の出入りは夜となく昼となく間断なく無条件であります。この息には上り下りはありません。いつも五分と五分であります。

生きる 四二 八 六

生きるために生きていくだけの物質も精神的の糧もいります。また、神のお恵みがなければ成長もできません。生きる為には善人も時によると「ほしい」ばかりに悪心をおこすこともあり、欲望の為にそれからそれと追求し、はては命をほろぼしていく場合もおおいにあります。

生きる 四七 八 一五

生きるのみの行動は片輪なり、生きて活かされるということは生活である。修養も生活である。生きることは人の道であつて、活かされていくことは神の道である

生きる 五三 一 八

このような熱と光の中に、私達は生きていますのであります。その熱と光、また空気と水、正しく火水風の中に活かされているので、地位や財産や学歴や権力の中で生きていけるではありません。この事実を忘れてしまつて、どうにかして財産を手に入れよう、高い地位につこうとして努力を致しましても、それでは長続きは致しません。そういう例は過去から現代にまで見てまいりますといくらでもあるのにもかかわらず、やはり、自分で体験しておりませんから自分でも金だ地位だと手に入れたくなるのです。そして、手に入れた時には、もう山から転り落ちるようになっているのであります。

生きる 三四 一二 七四九

生きる為には肉体の交流、物の交流、活かされる為には魂の交流、言葉の交流、この四つの交流を誠を捧げて実行していけば、人の生活は清く明るく正しくいかれるのであります。(十二月二八日)

生きる 四八 一二 二〇〇

物は生きるためには必要であるが、活かされる方は、物の力だけではどうすることもできないものである。物だけで生きようとすると戦争が絶えない。戦争を望むならば、物一本で努力するより外はない。真の平和を欲するならば、物心一如、すなわち神人合一、これによって努力せねばならぬ。

生きるだけの努力 四七 六 一七

生きる道

ふ 四四 一 四

けてゆくようでは、利子がつもり重なって悪循環し身を亡ぼし、社会を破壊し、最後には大戦となることは間違いありません。

毎日の生活には、心の持ち方と使い方を根本として、言葉も肉体も物も、有効に使っていくことによって生きていく道が開かれます。

行くべき道

ふ 四二 四 一一

行くべき道は、どうしても行かねばなりません。

一瞬一瞬に活かされておればこそであり、この自覚に立った時、心の底からの喜びが味える。いのりの詞には、このことを「いけるしるしあり」と示される。

いけるしるしあり

ふ 四一 三 八

意見

太 四四 一一 一〇九

己れの主張をいかに貫こうかと策を練り、同志を語らい、相手をつぶすことに必死になっていきます。互いに「剣」を研ぎ合っています。これを「意見」というのであります。意見と意見のわたり合い、すなわち剣と剣との戦いでもあります。

胃酸

ふ 三九 八 一九

胃酸は遺産であり、金や財産の損得勘定で感情がもつれると、廻転がうまくゆかず病の元となる。

胃酸

誠 四六 六 一三四

胃には「胃酸」という液があります。私たちの生活においても物や金や土地を持っている人を「遺産をもっている」という。遺産がある、すなわち財産がある。胃の中の「胃酸」が多すぎたり、たりなかつたりすると（過多と過少）消化不良で胃を患う。（中略）胃酸というものは多すぎてもたりなくても故障を生じるように、遺産の多少が、やはり災わいをおこす。いつも平らの気もち、純真無垢にして動揺転倒することのない心で修養実践していくところに胃がまた健やかになってくるのであります。

胃酸過多症

ふ 三八 九 一二

胃酸過多症で胃が痛み、いつも暗い顔をしている人がある。それは胃がショートを起こしているからである。胃酸は遺産に通じる。遺産問題をめぐっての不平不満が根をはりめぐらし、それが原因でショートを起こしているのである。

遺志

ふ 四四 七 九

平和の顕現は日蓮上人の意志であり、遺志である。その遺志をたてる（碑を建てる）。遺志は石である。

意志

敬 四二 一二 一三五

総裁の足跡は「足石」である。「石」は「意志」に通ずる。たしかに五十余年にわた

意志

太 四四 一一 一三

石

ふ 四四 七 一三

石

ふ 四六 二 九

石

ふ 五六 一〇

礎（いしずえ）

ふ 五一 六 四

って、あらゆるかん難辛苦の道を、真捧一つで通ってきた。この点はだれにも劣らぬという自信がある。しかし反省してみれば、必ずしも百事が百事ともそうであったとは言いきれない。石のような重い強い意志の力を持ち続けたとは言いきれない。

日蓮上人の意志―遺志（これは石に通じる）を打ち立てることに通じるのであります。石とは、意志であり意地である。

“碑”を言霊からいうと“石”は“意志”である。意志が薄弱でつねに心を迷わしている、いずれ肉体がわずらいになってくるが、その治療をするのは“医師”である。また一家の家には長がいる。“家主”（いえぬし）も“いし”に通じる。綱領四に“家の長を敬まい”とある。家の主（ぬし）を敬うことは神を敬うことになっていく。大宇宙は、いわば一つの家であり、その長上を敬うのは、世界平和の原則である。

“和石”の“石”を言霊からいうと、“石は意志”なりということになる。意志が薄弱で、つねに迷っていると、いずれ身体がわずらいとなってくるが、その治療をするのは“医師”である。また一軒の家には長がいる。“家主”（いえぬし）も“いし”に通じる。家の主（ぬし）：家の長を敬うことは、神を敬うことになっていく。大宇宙は一つの家であり、その長を敬うのは、悠久世界平和の原則である。（裏表紙）

すめらみくにのいしずえとこそつかえなん、といのちの親は諭されております。この礎という文字も、軍国時代の教育の影響からややもすると、犠牲になること、逆境に身をおくことのように解釈された場合もありました。礎とは、神の子であるという自覚を持って平和を築きあげることでもあります。いしずえのいしは、意志であります。志であります。志は魂であります。精神であります。無限であります。この魂を洗い浄め、磨いて、たとえというのが礎ということでもあります。けっして無理な犠牲を払う、人柱になるということではありません。

たしかに“誓いの詞”は昭和十六年六月二日という日に示された。しかし、この日は、“誓いの詞”が示される絶対の日であって、日華戦争中のある時期であったというこ

礎（誓の詞）

敬 四一 一一 八三

とは関係がない。時代を超越しているのが神の声である。だからいかなる時代にも金科玉条として光り輝くのが神の声である。礎というのは死ぬことではありませんよ。生きて働いてお役に立つということ、そこに礎の真意があるのですよ。私は「死ぬ」と教えたことはありません。

碑建設の根本は「誓の詞」に示されている「いしずえとこそつかえなむ」にもとづくものである。

伊豆 太四四 八三
「伊豆」は「い」の「囟」であります。「い」は「胃」であり、「家」であり、大きくは「地球」であり、「宇宙」であります。ですから「伊豆」とは「世界の囟面」であり、言い換えますと「人の道、神の道の囟面」であります。

いづれ ふ四三 七九
切つてつなぐ——とは二つ一つである。(中略) 言葉でも切りつばなしでなく、つないでおくことが大切である。「いづれ……」というのは、つなぎ言葉である。

伊勢 ふ三九 五二四
「いせ」のことたまは美しく且つ力にあふれている——ことを表している。衛生ともいわれるし、元気のよい人を「いせいのよい人」ともいわれる。「い」は、いろは四十八文字の頭初の言葉である。「い」に始まって、以下四十七音がつづくのである。「い」は何でも入る大きな袋である。「胃袋」ともいわれる。皇大神宮は「いせ」という言霊の地にまつられている。これは事実である。皇大神宮が京都や静岡にあるのではない。忙しい、忙しいという気持は、我執の心である。

忙しい 命四八 一二二九七
忙しい ふ三九 七二九
「忙しい……」と習慣的になっていきますが、これは「いそがしゅう」で我執です。忙しいほど働いても我が多く、無駄が多いから正味にならない。

急がば廻れ 訓一九 一二二六
急がば廻れ、と云う事は自然の法則に基いて、人の足の運びと同様に一步一步無理のないように進み行なうと云う事でありませぬ。道が「かける」と云う事は肉体の何処かに悩みを生じ心の迷いを持つと同じであります。

いただくと拝借 誠四八 一二二〇
「いただく」のはきびしい。拝借するのは楽です。一万円の利益をいただくよりか、一万円を拝借する方が、たしかに楽です。しかし拝借したものは返さねばならない。

このお返しは骨がおれます。みなさん、こういう経験をしておられると思う。お返しになぜ苦労するかというと、利子がつくからです。これは金融だけのことではありません。天地自然の法則によって「天借」にも利子がつきます。ですから、いのりの詞にも、―はらいたまひ、浄めたまひ……と、おさとしされてあるのであります。

一は万物の始まり

一は万物のはじまりである。いい知、いい地、いい血、位置である。誠は一筋、一筋の誠の道を外せば我執貪欲となる。我執貪欲は争いとなりついには大戦となる。運行の健やかにして止むことなき天地自然の法則のよつて生ずる大極を神として崇敬する、その源、その本が一である。一を外せば止む、病む。それは文字によつて示されている。正の字から一を外せば止むとなる。(中略) 神の道は一、位置があつて留まる。一を外せば止まる。そこに神と別れないように結んでいく。合掌でありこれが神人合一である。天地合体して万物生じ、人は地球の中に活かされている、その中に活かされているのでその恩返しは無条件であり、それは神の道である。誓いの詞、神法、綱領、教義教典全部一つにまとまるものである。

一は万物の事始まりであります。無極たる0より大極たる一が生じ、大極より陰陽二が生じ陰陽の交流により万物が生じるのであります。

十一月一日は、一が重なる日であります。一は言霊でも、いい血、いい知、また、今存在するこの位置、「いまここ」であります。一は事始であり、すべての基礎であります。正しいという字の上の一を外せば止つてしまいます。一日は一生なりという精神で、日々新たに、誠を捧げて進行しなければなりません。

万物一より始まる。十字架は、タテも一、ヨコも一。一は位置。ここです。今です。すべて、今、ここから始まってゆく。

正月の正の文字の、上の一をはずせば止(や)むという文字になる。一は、神慮に合一し、万教に帰一することであつて、この事をおろそかにしていれば、正しきことも、

か 四四 四 五六

ふ 五三 二 八

ふ 五三 一一 二

ふ 五四 一二 四

ふ 五四 一二 一九

ふ 五五 一 三

止まってしまふのであります。止まるとは、行き詰まることでもあります。

一は万物の始まりであり、一、二、三…と進み、九(苦)を乗り越えると十になります。苦を乗り越えるのは、難有り、有難しいといひます。

一は万物の初め、誠は天の道、これを行うは人の道として聖者は訓戒を与えて導き下さつて居ります。(七月一日)

敬 四一 一二 一四八
 “一”は：“位置”を誤つてはならない。“位置”を定めて行なえば有利に展開していくが、“位置”を定めずに行なえば狂つて不利におちいる。すべて人の世の行動は、その起点となる“一”即ち“位置”が大切である。人々はこの“一”をおろそかにして中途でつまづくのである。

振 四三 一一 五
 一は万物のはじまりであり、理(ことわり)であり、法則でありまして、十一月と云う月は、一年の中でもっとも尊い月なのであります。

命 四八 一二 八二
 一は万物の始まりである。いちば位置である。出発点の一(位置)を間違つては、すべてが狂つてくる。先へ行くほど狂いの幅は広くなり、また後もどりをせねばならぬようなことになる。(中略) だから朝起きる時だけでなく、一瞬一瞬を感謝で終始し、出発点をあやまらぬようにせねばならぬ。

一円 一
 か 四四 四 三四
 一円は一員だ。私も捧誠会の一員だからね。「陰」が大切だよ。私は今日まで金額にこだわるようなことを教えてはいない、環境に順応せよ、表面のことに迷つてはならぬ。わが環境に、すなおに従つたらよい。

一円 一
 ふ 四三 一一 八
 寄付の奉加帳がまわつてくると、必ずと言ってよいくらい人は迷う。(中略) 一金壱円也と書きなさい。あなたは捧誠会の一員(壱円)ではありませんか。(中略) “一円は一員なり”という信念を持ちなさい。(中略) ウラに廻つて、無記名でお餅もお酒もお金も出す。これは無記名であるから、いくら出してもよい。

一億一心 一
 敬 四一 一二 一三六
 一は“神”である。億は“民”である。全国民が真心で神に仕える、神の子として親なる神に仕えていく、これが一億一心の姿である。

一隅を照らす 一四四 一〇 一六

一膳一善 一三四 一二 三六九

一・二・三 一五二 一〇 五

一・二・三 一五五 八 六

一・二・三 一三四 一二 三

神の子の自覚に徹して、みおしえにもとづき、迷わず正しく強く前進するのみである。
(中略) 己れ自らを磨いていくことはそのまま「一隅を照らす」存在である。

一ぱいの飯を戴いたら一つ良い行いをせねばならず、一日六ぱい戴けば六つの善行を重ねなければならぬと聖者は教えられております。(六月二七日)

私は明治三十二年十二月三日の生まれであります。この数字を上から読めば三・二・一・一・二・三であります。下から読んでも同様であります。即ち、一・二・三であります。

これを言霊で申せば「ひ・ふ・み」―「火・風・水」であります。火・風・水こそ万物の命の根源であり、万物を活かし給ういのちの親そのものであります。万物の霊長たる人間がここに目覚めて、この大恩を感得し、終生の奉仕によってそのご恩に報いることこそ神人合一であり、これ平和の礎であります。

一、二、三、は 火、水、風であり、天地人であり、人体の設計であり、三種の神器であり、理、気、智であり、これは肉体の設計でもあるので、いのちの親から肉体は借り物と諭され靈魂すなわち精神、清き神であり文字通りであります。

一・二・三 四 五 六 七 八 九 十
月日の進行はこのように進み、そして、たえず回転しております。一は火であり、二は風であり、三は水、四は世の中、五は家、六はむつまじく、七は何も彼も、八はやりぬく、責任をとる即ち守りゆく、九は苦勞が重なってもその苦勞を喜びにかえつつゆけば、十即ち十分に達する。十分になるのを満足と申します。

一日は一代と信じ、朝、眼がさめたときは生まれたときであり、夕の床に入るときは死ぬときであります。一日は今日であり、一代であり、始めも終わりもありません。

一日、朝、昼、晩、朝は一、昼は二、夜は三。一日一代、旭日が東より出て西に没する迄の一日は一代と信じなければなりません。(十月二六日)

一日一代で今日一日は二度と再び来ない。

一日一善 三六九

今日一日の食糧があれば一日だけは平安であります、明日という日の為に一日一善の心がけが必要です。(六月二十七日)

一日一代 二〇

朝おきた時は生まれた時、夜寝る時は死んだ時、一日一代と思い一生懸命で、一日々々に命をかけた毎日として積徳に励み、天借をお返しすることが神の子として活かされる大恩に報いることであると、日頃から力説しているではありませんか。

一日一代 二二

人の世は一日を一代と信じ、夜休む時は死んだ時、目が覚めて起き上がった時は生れた時、日々に新たに心の塵を払い、汚れを洗い清め、各自の環境に順応し、分に応じて、地位も力も富も凡てを備えて行けば、その日の生活に迷うことは少ない。

(四月十二日)

一日一代 六一八

一日、朝・昼・晩、朝は一、昼は二、夜は三。一日一代、旭日が東より出て西に没する迄の一日は一代と信じなければなりません。(中略) 明日の日があるからという

ような自惚れや油断は決してなりません。一で出発、二で改め、三で反省し乍ら、誠業に喜び励んで行かれる人こそは、真に幸福な人であります。(十月二十六日)

一日一代 一八五

一日は一代朝起きた時は生れた時、夜休む時は死んだ時、一日一代で今日一日は二度と再び来ない。

一日一代 一〇五

一日を一代とすれば朝は生れた時、夜は死する時と思えばよい。眼がさめて生きていることがなによりの喜びである。愛の心で相手の心を察するのが挨拶である。

一年 二

一年は年号であります、心の一念は終始一貫、みおやの心にそい奉る即ち神人合一する一念であります。

一年 四

一年は三百六十五日、三十六度五分の体温、大恩を頂いて活かされている一年は一念であり、それはまことであり、一心一体であります。

銀杏(いちよう)

誠 四六 六一六三

神社、仏閣の境内には「銀杏」が植えられています。なぜかという、草木の中で最も古いのが銀杏であるからであります。そこで「いちよう」(胃腸)と命名されております。これは尊い教訓であります。

一ヶ月

振 四四 一 五

一か月は三十日、三十一日の月もありますが、一か月は三の言霊であります。

一瞬

ふ 四四 二 二四

天地自然の運行は、一瞬一瞬きれ目無き連続である。一瞬は一神であり、この一瞬が神の行動である。

一瞬

太 四四 一 三五

一瞬とは、過去と未来のその中心であります。午後十一時五十九分五十九秒と午前零時との間の、その中心の一瞬が中心であり、これを「真刻」と呼びます。太極のひびきを受けるのはこの一瞬であり、真刻であります。悠久なる大自然の流れには一瞬のゆるみもありません。一神（一瞬）また一神（一瞬）、真刻また真刻の厳肅な連続であります。その一瞬に「無」になっている受信者の教祖は神と相和し、相対して神のみ声を聞くのであつて、そこには第三者の介入もなく、また立ち合いもありません。あくまでも神人合一の場であります。

一升

敬 四二 一二 二八一

米や麦を計るのに一升、二升といった。一升はその単位であつた。米一升は量であると同時に、それは人の命の糧である。言い換えれば、米一升は人の命の一生につながる。だから、お酒一本もつて交流するとき「一生のおつきあいです」と真心をこめる。一生とは、人が生れて死ぬる間に年を重ねることだけではありません。朝起きて夜休むまでの時間も、一生と思わなければなりません。地球のあらんかぎりの時間も、また一生と思わなければなりません。

一生

ふ 四二 九 三

「一升」は「一生」に通い、「一升」はまた「一所」にも通いましょう。

一生懸命

ふ 四二 九 三

今日一日わき目もふらずに、誠の業をふみ行っていく。（中略）真心をこめて為す業が、一生けんめいであります。こころを「こめ」て、という言霊に「米」という言葉がでてまいります。

一生懸命

振 四四 一 一〇

一生命をかけると文字に現してある。

一本調子

命 四八 一二 二六五

一本の箸で物をはさむことはできない。つつくのみである。二本でこそはさめるのである。一本調子の人は心すべきである。

いつわり

誠 四六 六 二七〇

「いつわり」は「方便」とちがいます。いつわり、は人をごまかす、迷わす。これは

大きな不徳であります。冗談いって人を笑わせる。これは方便であります。この場合にも「嘘」もあります。これは方便であって、いつわりではありません。「いつわり」と「方便」これを判断してよく勉強しなければなりません。

田舎 導 三四 一二 六六

いの回復 振 四二 七 四

田舎というのはいいなか、悪い仲でない。心の患いも、身の患いも、患いを回復させてゆくには、まことの感謝を捧げながら、実行に邁進する、そこにつきますのであります

いのち ふ 三九 一〇 二五

「いのち」は神の「分けみたま」である。大地の中に「命」あり、それ故に種は大地の中から芽生える。地から芽生える―「地下ら」は「力」であり、それは火、水、風である。

いのち ふ 四〇 五 二五

「いのち」の尊さは数字で割り切れない。数字の頂上は「兆」を以て終わっているが、それから上は無限である。だから人の命の尊さは、くめども尽きぬ宝である。

いのち ふ 四二 一二 八

「いのち」という言葉のつながりは「血液」であり、清き血を「いのち」というのであります。また、いのちの「い」は「胃」であります。そこで、人の命の尊さは、血液にあり、消化を司る胃腸にあります。

いのち ふ 四七 九 一五

本会は万物是誠、命は無限であつて金にも物にも勝る尊いものが靈魂なのであります。それですからいのちの親は神の子に、人の命の尊さは汲めどもつきぬ宝なりと教えさとしております。

いのち ふ 四八 四 一一

神の子として、自らの魂を浄化する使命が与えられています。その使命をはたすべくいのちがある。ですから、人のいのちの尊さは汲めどもつきぬ宝なのであります。神の子としての使命をはたすゆえに、神の子のいのちは尊いのであります。

いのち ふ 五三 五 五

金が尊いか、名譽か、地位か、財産か、何が尊いのでしょうか。それらが欲しいのは必要だからに違いありません。しかし、もっと必要なものがある。いのちである。人のいのちの尊さは汲めども尽きぬ宝なりと明言してある。万物万霊とともに、いのちは活かされておる。

いのち 五四二四

いのち 五五一〇

命 三九八二二

一人一人の命の尊さは汲めども尽きぬ宝であり、いのちは、いのちの親のわけみ魂として頂いた尊い魂なのであります。この大切なことを忘れずと、世は闇となります。生命は大極から頂いたものでございます。いのちは靈魂であります。悠久であります。命―いのち。これは「いい脳智」であり、「いい農地」である。いい農地を耕して作物をつくる。わが持っている脳智を開発して世の中のお役に立つように使っていく、―これが平和である。

命 訓一八八五三

「命」と云う言葉のつながりを申しますと、血液でありそれも清き血を「命」と申します。又「い」は胃袋であり、胃袋の中には如何なるものが入っても、皆消化してしまいう使命を持って居ります。人の命の尊さは血液にあり、消化すべき胃袋にあり血の働きも、胃袋の働きも表面に現れず、内部的に働いて居りますことが、どれ程尊いか分りません。

命 振四二八三

人の命の尊さは汲めども尽きぬ宝なり。命即ちまごころであり、まごころ即ち命であり、これが神の心であり、命の親の心であります。

命 誠四六六二〇三

命は魂でありまして、この魂がだんだんと萎れてくる、そのうちに腐ってしまう。こうなりますと、こんどは肉体をもってこの世に生まれてまいりません。これで終りであります。

命 命四八一二四九

「人の命の尊さはくめどもつきぬ宝なり」と捧誠会誠歌にあるように命（魂）は即ち宝である。ところがこの魂を大切に切り扱っているかどうか、宝を大切に切り扱いこれをよく動かすか、悪く動かすかを教えるのが宗教である。魂を肥らせ立派なものに仕上げてゆくところに宗教がある。人の道は人倫道德ゆえにみんな知っている。人の道を超えて神の道がある。これ天地自然の法則である。

いのちの親 か四四四七七

いのちの親は自然の法則によって男女とも成人した人には三十二本の歯を貸しておいでくださるのであります。そこで「かむ」という。

いのちの親 ふ四〇一一一六

本会では「大極を神として崇敬」し、「いのちの親」と呼び奉る。「いのちの親」は、

いのちの親

ふ五五 一 六

これ以上、いい縮めようのない言葉であって、時には「親」という場合もあるが、正しくは「いのちの親」である。ともすると、「いのちの親」と「みおや」とを混同される場合があるが、「みおや」とは「聖者」をいう。「聖者」は「いのちの親」のはからいによって過去の時代、時代に応じて現れ人々を救済された聖者である。（中略）いのちの親は、この聖者をこの世にお出しになった根元である。故に、いのちの親と聖者とは次元を異にする。

無極より大極を生じ、大極より陰陽を生じ、陰陽の交流和合によって万物生ず。天は父、地は母、天地の交流和合によって地上の万物は生成発展する。一切は大極たる、いのちの親の設計による。零から一が生じ、一から二が生まれ、この和合によって、以降、三、四、五と十に至る。十から、また十一を生じ、続いてゆくことは日月における如く限りがありません。地球の始まりは泥海のようなもので、陰陽の和合によって次第に形をなし、大海も、野山も、動植物も、一切は大極すなわち、いのちの親の設計によって生みだされたものであります。天地自然の法則は、大極によって生じたものであると諭されております。修養団捧誠会は、この大極を神として崇敬しております。万物一切は、大極、すなわちいのちの親の設計によって産ませ給うたので、地球が日夜たゆみなく、日月とともに悠久に回転しておりますのも、天地自然の法則に基づいているのであります。

魂を診察下さって、魂を成長させてゆくのは、いのちの親であります。いのちの親が神の子に対して、注意をなさることが、すなわち、日常に現われる出来事なのであります。

命の親

ふ四二 一〇 一〇

一年や二年で立派な人にさせたい、なりたいというような我欲ではなりません。長き年限、苦勞艱難をしてこそ魂も磨かれるのであります。自分が自分の力で磨くのではありません。自分で功績を積むものではありません。すべては命の親のご守護によって手足も動き、言葉もするのであって、ここには人の力は全くありません。これを自覚

命の親 五二 五 四

せうに何年やってみても、暗黒におちいつて自らも病み患うことになるのであります。いのちの親は、神の子を守り、生成発展するように念じておられるのであります。そして、神の子に魂を与えているのであります。

命の親 誠 四八 一二 一四

私たちが「いのちの親」と信じておりますその親は「太極」であります。この「太極」を神として崇敬しております。「無極」から「太極」が生じ、この太極には宇宙があり、日月があり、地球がある。これは人智をもつては、はかりきれない「存在」であります。

いのちの親・教祖・総裁 五〇 一二 二二

いのちの親・教祖・総裁という三段構えであることをしつかり腹に入れておけば、そんな疑問はおきないよ。いのちの親がまずおられる。その響き、大御心（おおみこころ）を教祖がおとりつぎする。これが「みおしえ」です。このみおしえは 個人個人にとつては絶対なものですから、院長が言うように何が何でも無条件に守る。そうしたくちやならん。（中略）私が言ったから何でもかんでもそうしなきゃならんというような気持ちを持つよりは、そのように言葉の交流をして確認すればよい、修養は確認からとさえ言ったことがある。

命の親の声 五 四二 五 三

親の声こそは人の心に宿る尊い種である。（中略）子の仕合わせを願う親心の種であるから、そののみりは最高の仕合わせである。

命の親の言葉 五 四二 五 二

「先生、どうして親の言葉をきけないのか？」とたずねる人があった。（中略）わたしは「それは親不孝だから」と答えた。するとさらに「耳で聞きながら心に聞けないのは理由があるはず、その理由は：？」と迫ってきた。私は言葉を重ねて「親の尊さがわかっていないから」と答えた。

命の親の待望 五 五四 六 二

神の子の皆さん、万物の霊長である世界の人たちが、私生活のために悩み苦しんでいます。み親、即ち、いのちの親の待望は、神の子たちが、我執食欲を払い浄めて、万霊万物尊愛を誓いながら、万物の霊長である皆様とともに、親善交流に誠を捧げて悠久に努力をして、悠久世界平和の建設に邁進することでありませう。

命の親の望まれること 五二 一 四

万霊万物を尊愛し、各自に授けてある清きたまを、日夜濁すことなく、磨き清めてゆけとさとしておられるのであります。(中略) 心配という文字は、心を配ると教えられてあります。心の持ち方動かし方によって身体も、善にも悪にも動いてまいります。(中略) 万霊万物尊愛の趣旨を理解し、未来は悠久世界平和郷を実現させることを、いのちの親は期待しているのであり、神の子に待望しているのであります。

命の親のみ心 四二 四 三

「みおしえ」は、いのちの親のみ心は永劫不変でありますから みおしえも亦永劫不変であります。

命の親のみ心 四五 一〇 二四

命の親のお心は、活かされていることが第一であつて、生きることが第二であるとさとされているのであります。

命の親のみ心 五三 一二 四

神の子であり、万物の霊長である人たちは、憤慨、うたがい、憎しみ、恨みの心を持つたり、思い違い取り違い勘違いで争いをしてはいけません。そんな事をすれば、たとえ神の子でありましても、命の親は天地自然の法則によって厳しくさとされる。これがいのちの親のみ心であり、悠久世界平和建設のための教科書である。

いのちの糧 四四 二 二三

魂はなくなることがありません。なくなるのは消耗品であつて、命の糧は消耗品ではありません。

命の切り換え 四一 二 一一

「いのち」には期限がある。(中略) 借金の場合でも期限の切り換え、延長があるように、「いのちの切り換え」の道もある。教祖は、会員の為に、これを命の親にお願いする。

命の切り換え 四二 一二 二九二

多くの会員の命の切り替えに臨み、教祖はこの身に代えて会員の命を引き延ばしていただいてきた。その私が自分の切り替えの時期を目の前に見ているのである。切り替え——とは、その時に至ってさらに新しい命をいただいて人生の行進を続けられるか、それともそれで終点になるのか、この切り替えである。お役に立てば使ってもらえるし、お役ごめんになれば今生一代の終わりとなる。

命の尊さ 四四 六 三

「神の子であること」を自覚し、「借物であること」を自覚しておれば、このいのち

いのちの養い 三八一 一七

祈りと誓い 四三三 九

祈りと誓い 五五四 二

誓の詞(いのりのことば) 四八二 二六三

誓の詞を唱える心 四八二 二七六

祈る 三四一〇 五二

威張る 一八一〇 二二

違反 五五四 五

が「くめどもつきぬ宝であること」が心の底から信じていけるのであります。

我々の人生行路には、悲しいことも、辛いこともある。しかし、これは全て、心の味わい方一つによってきまる。どのようなことも「おいしく頂けるような心」になるよう、我々は日夜勉強しているのである。何でもおいしく、喜んで頂けるのが「まこと」であり、そこに「いのち」の養いがある。心の味付けを学び修めたい。

「いのり」と「誓い」とは二つで一つである。「いのり」からそこで「こういたします」と誓う。(中略) 誓った上はこれを実行する。そこに始めて平和の光りがさしそめてくる。祈り、誓い、実行する。すなわち一、二、三である。

本会の主旨に基づいて、正午という時刻に平和の祈りを致します。祈りはまた誓いとも申します。祈りと誓いはつながっており、神慮に合一する、身と心が一体であるということでもあります。

誓の詞は道徳宗教、魂の現われ、宇宙の真理、人の心の修め方、使い方を示したものである。

誓の詞は利益を願うために唱えるものではない。不慮の災難に出あったときにも「実行が足らなかつた。これから必ず実行します」と祈り、誓ってこそ救われるのである。祈るという事はお願いをする、頼みますというような事で、又宗教家などの考え方もいろいろありましようが、祈る事はのりに基く事であり、即ち法に従う事がいのりと申します。いいいのりとは正しい法であり、天地自然の法則であり、絶対のものであります。無限に怠る事なく動いている地球とおなじようなものであります。

威張る人は、人から見れば強そうに思われますが、その人は、神様から見た時に気の毒な幼稚な人であつて、俗に分らず屋と申します。素直で無条件で、各人の天職をその日その日実行して、神の道に従い、人の道を守り、人生を清く、明るく、生活してゆける人こそ立派な人であると思ひます。

道路にも信号があります。信号を守らないと違反です。天地自然の法則に反しますと

胃袋	命 四八 一一 七六
胃袋耳	命 四八 一二 二六五
戒め	ふ 四五 一一 二〇
卑しい心	み 三四 一一 一六一
いやだ	敬 四二 一一 六二
いやな言葉をきいたとき	命 四八 一二 二八八
いやな仕事	命 四八 一一 九二
伊予の国	か 四四 四 七〇
慰霊	ふ 四九 一 二三
いろはとあいうえふ	ふ 五五 一一 二二
お	

違反であります。人を恨む、ねたむ、そねむ、にくむという感情をもってはなりません。また、思い違い、取り違い、勘違いに気づいたら素直にその場で正していかねばなりません。

胃袋には、いろいろなものはいる。家の中も同様である。胃袋はいい(良い)袋と、その名が示す通りあらゆるものを消化し、よいものを入れる袋でなければならぬ。

話を聞いたときは、まず心の歯をつくれ。その話をかみしめ、かみこなし、つぎに胃袋に入れ、消化して血となり肉となるようにせよ。

戒めるということは、親の慈悲である。

努力もせずに神や仏に祈り、福を求めるような卑しい心の人も沢山ありますが、それでは努力でなくて不幸の種を蒔くようなものであります。(三月十八日)

「いやだ」「きらいだ」というのは、すべてを切っていくんだよ。

魂にひびくようないやな言葉を聞いたときには「自分はあるような言葉を人に出すまい」と思えばよいのだ。

いやな仕事とはどんな仕事であろうか。便所掃除か、靴磨きかなどと思うが、いやな仕事とは金儲けにならぬ仕事をいうのである。金儲けにならぬ仕事とは、ただの仕事である。奉仕である。いやな仕事を真に喜びはげみ、奉仕することが即研修積徳となるのである。

伊予の国は「いよいよ」の国ですよ。ですから伊予の国の方々はいよいよですよ。

ただ戦いで亡くなった魂をなぐさめることでなくて、慰霊ということは大宇宙の真理でございます。

いろはは四十八、四合わせて幸せ。これが平和の原則なんです。(中略) あいうえ

お五音で五十音になる。そういうようになっていくというのは、本来、音(オト・オン・恩)の中に幸せである仕組みがある、(中略) そういう仕組みが、天地自然の法則なんです。

いろり

ふ 三九 七 一六

この広い温かい心を「いろ(色)」という。いろり(囲炉裏)は温かい。そこには火が燃えている。「いろ」の「り」である。「り」は「裏」ともいい、心のことである。即ち囲炉裏は温かい。

岩

ふ 四六 一 四

天然自然の岩の上に建碑をみたという教訓は、「融和」であります。

(岩―融和)合掌であります。

因

命 四八 一一 五二

先方から非難攻撃された場合は、こちらに因のあることをまず悟らねばならぬ。打たれるには打たれるだけの因があるのだ。それをまず調査認識し、改めねばならぬ。その智識知恵が必要である。ただ打たれたことだけを思い、立腹するようではいけない。喜びのときは油断をしたり、慢心をおこしたりするもので、そこに落ちる因がつくられるのである。

因

命 四八 一一 二八五

まいた種は必ず芽生えてまいります。植物の種の中には地中であって腐ってしまったて、芽生えないものもありますが、因果の種は、たとえ腐つてもいつかまた同じ種が芽生えてくるのであります。ですから、必ず芽生えると申しても誤りではありません。

因果の種

ふ 五〇 一〇 二

その将来は今日にあります。その日、その場で善かれ悪しかれ種をまけば、生まれかわったときに、はつきりとその結果が現われてまいります。これを因果の理法というのであります。

因果の理法

ふ 四五 一 三

地球は天変地変に加えて人災までが加ってぐるぐるまわっております。これを捧誠会では、因果の理法とか天地自然の法則とっておりますが、人が生れて一生を過すあいだには、いろんな苦難を身に背おわなければなりません。

因果の理法

ふ 四五 一〇 二三

仲良しが敵となるのは過去に於ての因果の理法であって、人の生活には絶えず繰り返されて居ります。親子、夫婦、兄妹と結ばれた縁の近い人達の間でも、次から次と不和となり、離れ離れになって悩むことは、相互の理解が足りない為であり、毀れて行くことは我執貪欲の現れであります。神の道を自覚し人の道を踏み行っていけば、こんなことは無い筈でありますが、自己主義、自己満足、即ち自己を中心として生活を

因果の理法

み 三四 一二 二七六

和となり、離れ離れになって悩むことは、相互の理解が足りない為であり、毀れて行くことは我執貪欲の現れであります。神の道を自覚し人の道を踏み行っていけば、こんなことは無い筈でありますが、自己主義、自己満足、即ち自己を中心として生活を

因果の理法 誠 四八 一一 一三八

して行くから、ねたみ、恨（うら）みとなつて、縁ある人や恩人を敵と思ひ不徳を重ねる様になるのであります。（五月十三日）

「いのち」これは靈魂——これは不滅である。永遠の灯である。消えることのない、つきることのない「いのち」である。肉体は一代かぎり。生まれ替ればまた拝借いたしますが、男、女の区別は、大法則——これを因果の理法といいます——によつて、いのちの親がその仕組みをしてくださる。

因果の理法 命 四八 一一 二七一

因果の理法は交流する。傷つけたり、傷つけられたりした場合、武器は持たずとも心の戦いは続けられるものである。

インド ふ 四七 八 四七

インドとは（中略）インは印、ものが成り立ったときのしるしとして印を捺すように、インは縁であり縁は円であり、平和です。ドは道、みちですね。

陰と陽 ふ 五三 三 四

陰と陽とは天地自然の法則であり、男は陰で女は陽であります。また、月は男で、太陽は女であります。この陰陽が対立すれば地球はいかようになるか。知る人は知るであります。

因縁 い 一八 一〇 三二

仏教の教えに因縁と云うことを教えられてありますが、その因縁こそは連絡であり、又その連絡が運命の綱と申します。人生には何よりもこの因縁連絡運命、そのつながりがある事を知らねばなりません。道路にしましても道筋、肉体にしましても筋道、親戚にしましても遠い近いの道筋、皆連絡があるのであります。（中略）例えば肉体も血管が切れて連絡なき場合には不具となり患わねばなりません。それ故道のつなぎ、これはどうしても何処までも切れ目なきようつないで行かなければなりません。

因縁 い 一八 一〇 三九

然し長い年限の間にその道が切れてゆく場合がありますが、その時こそ不時の災難であります、このような場合には一日も早く連絡をつけ道の修繕をせねばなりません。運命とか生前の因縁とか申しております。然しそれは唯申すだけであつてその運命のつながり、因縁の道順を正しく悟つていないのであります。若しこれを悟つて居りますれば、難儀や苦勞が身にかかつてきた時に、その場に於いて感謝できるのであります。

因縁因果

み三四 一二 三〇

因縁因果という言葉がありますが、これは原因結果であって、蒔いた種は生えるのであります。原因は種であって結果は実りであります。(一月十五日)

陰陽

み三四 一二 六三八

陰は神であり、陽は仏であります。陰陽の道理は常に、円満な姿とされて居ります。糸は陰であり、針は陽であります。生物には陰陽があり、人には男女の姿を現して教えて居ります。(十一月四日)

陰陽

み三四 一二 三〇九

地上には陰陽があり、人の道にも裏表があります。地球上のありとあらゆる生物には皆、陰と陽がありまして、調和しております。陰と陽とが喰い違い、取り違いになつた時に、世の破滅となり、生命も亡びるのであります。(五月二九日)

陰陽の理

太四四 一一 一〇五

東西、天地、山海、夫婦、左右、水火……すべて陰陽の理を示すものであり、陰陽が調和して、そこにおのずからなる平和があります。火と水とは、その性質はまるつきり反対です。それこそ東と西、天と地のように異なります。火と水とが調和して、火の上に鍋をかける、鍋の中の水がわいて物が煮える、これは平和であります。火の上に水をかける、たちまち灰かぐらが起こる、火は消えて役に立たず、物を煮たり焼いたりできません。火と水とが争えば、事の大小にかかわらず破壊が起こるのであります。

ウの部

う (ン)

ふ四四 三 一一

ンというのは、本会の趣旨においては、運行の健やかにして止むことなき、天地自然の法則のよって生ずる大極を神として崇敬せよ——と教えてある。交流です。

動き

命四八 一一 一〇一

人の動きを働く(はたらく)という。人は常に働くようにできているが、手足が動かぬ時も心は常に動き、内臓も常時動いている。動は振動である。振動は神道であり、誠の道につながる。誠の道をふみ行い、誠の業をつとめ励む働きをすれば、自然に人

動きの原則

ふ 四四 四七

から信頼される。しかし、誠の道からはずれて知恵が利己にのみ働けば思い違い、とり違い、聞き違い、ふみ違い、感違いとなる。その結果、気がいという精神方面の病気になったり、また肉体にあらわれて呼吸器をわずらうようなことになる。地球も月も回転する。なぜ回転するか。それは引力によってである。エネルギーによってである。指が動く、手が動く、足が動く、内臓気管がみな動く。肉体が動くのも地球がおのずからにして動いているのも同じ理であります。

ウソ

い 一八 一〇 四六

嘘が誠になったと云う話がありますが、それは一つの方言であって嘘と云うことは無い事があるようにしたり言うたりする事を申します。例えば大昔に龍が人を呑んだと云う事がありましたと他人の人から聞いた時に、言う人も聞く人も、それを見た訳ではなくその話が伝わって来ただけのもので、それが嘘やら事実やら言う人も聞く人も分からないのであります。それをありましたと誠に信ずれば、その言葉が嘘でも誠になるのであります。

嘘

ふ 五〇 九 一一

嘘八百はいつの日か裁かれる。

天地自然の法則にのっとって素直にしてゆけばよいのに我執にとらわれ、貪欲を發揮してことをなしてゆこうとするから、真実でない事、真実から離れている事を言葉にだします。これを嘘と言う。偽りと言う。

嘘が誠

い 一八 一〇 四六

嘘が誠（真実）になったと云う話も当たり前のことであってかような話は別に犯罪にもならず（嘘を言うて人を苦しめ、迷わし、その財産を横領する場合は犯罪になります）真実の話しも嘘と思えば嘘になり、有るかないか知らざる事も有ると言われれば、嘘も真実となります。仏教で教えられた極楽地獄がありとして、地獄には地獄の景色を見せ、極楽には極楽の景色を見せて、それを仏の教えとして教えていますが、その地獄極楽が必ずこの世にあって、それを今日の文明の世に生まれた人達も言う人も聞く人も見た訳ではないと思えますが、何事も信ずる心に誠があれば己が身も救われるのであります。然し同じ信ずるにも善と悪があります。即ち仏教で教える所の地獄極

樂は善と惡との教えであります。(中略) 世の宗教家、その信者は一日も早くこの嘘この惡を浄化して行くだけの心構えと実行が必要であると思います。如何なる惡説を耳にしたり人から知らず知らず誘惑される場合があります。それを浄化しその誘惑に打ち克つて如何なる惡説も善意に解釈して日一日と皇室の彌栄えを念願すると同時に先祖を尊び、子孫に嘘惡説を流さぬよう何事もよく見分け聞き分けて国の為誠をつくさねばならん事を心がけねばなりません。

歌う 命 四一 三 八

歌えば心が晴れる。雲が散って光りがさしこむ。それは、歌えば疑いがはらえるからである。歌って、笑って、踊る。これは魂の浄化である。

歌え笑え踊れ 命 四二 一一 七〇

「歌うと言つてもね、『心の持ち方使い方』の歌を歌うんだよ。毎朝毎晩、歌って笑って踊って人に聞かせてあげるんだよ。歌えばね、疑いが晴れるんだよ。踊るといのはね、明るい心でお掃除することだ。手足を踊るような気持ちで動かしてお掃除するんだよ。

疑い 命 四八 一一 一八三

心迷う時は長上の教えをいただき、真心でその指導に従うべきである。指導をいただきたい、いただきたいと願いながら、果して真心をもつてそれをうけているであろうか。真心どころか疑(害)い心でうけている場合が多い。いただく方も、差しあげる方も命がけ、真剣、無条件でなければならぬ。

疑い深い人 命 四八 一一 二七九

打たれる 命 四二 一一 七

つり鐘のあの音は、実に尊い「ご恩」という声を表わしているのであります。つり鐘も、打てばこそ「ごおん」のこえをだすのであって、打たずにおけば、その声はでません。「打たれる」のは、辛いことであります。(中略) 打たれて「ご恩」を悟り、喜ぶ人こそは、ご恩を悟った人であり、これを悲しんだり、悔しがったりする人は、ご恩を知らない人であります。

打たれる 命 四二 一一 八

打たれてこそ反省もでき、向上できるのであって、そのご恩を仰ぎ奉るのは親に仕えるのと同じであります。人に踏まれ蹴られ笑われ罵られて、その原因と結果を悟り「ご

宇宙 五〇九八

恩あればこそ。」と感謝する。

宇宙には成長のための栄養や酵素が満ちておりますのに、そこに気がつきません。空気がもとより呼吸の上でもっとも大切であることは誰しも知っていますが、そればかりでなく、空気の中にはいろいろな栄養分さえあります。

宇宙の始まり 振 四三 一〇 二
 宇宙の始まりは無極、無極から大極が生じ、大極から万物が発生した。無から有を生じた。有は大極である。大極はかみなりであり、徳の光である。徳の光は愛であり、徳と力と愛、これが生命の糧であり、この教えが本会の趣旨である。

うちわ 命 四八 一一 六一

うちわとは平和、家庭の和、内和、内輪の意で家庭人がまちまちにならず和を以って実行することである。真心はうちわから出てくる。外からくるものではない。うちわの中からの感謝が無ければ真心は出てこない。内輪同志が相協力し感謝ができると真心も出てくる。家庭の中に一人でも感謝の心のない人があれば、その家庭から真心は生れぬ。うちわがよくなければ真底からの感謝は生れてこない。疑いや誤解の心を出さず、まず内輪をよくし、修養する心の基を定めねばならぬ。心の基は感謝である。

うちわ(内輪) 命 四八 一一 一七四

社会、国家はもちろん、電車、汽車の中もすべて「うち」である。これをなかよく真に内輪(中和)たらしめるには協力、助け合い、分けあいが必要である。また物の出し入れ、言葉の出し入れに、融和、感謝が必要である。(中略) うちわとは、我が家でなく、汽車、電車の中、社会、国家すべてである。わが家同様に美しくするよう努力せねばならぬ。

美しい顔 訓 一九 一二 一九

人の心、人の姿、人の顔、是などを美しくする事は誰一人反対する人は無いと思いません。美しい心はありのままの自然に接する時の心であり、美しい姿は其日其時ありのままの衣服を着てまじめに任務を全うする姿であり、美しい顔は年齢を問わず女子は薄化粧して笑顔を相手に見せる事、又男子は別に薄化粧しなくとも女子と同様に如何なる時にも笑顔で目上の人に接し目下の者を指導して行くべき事が尊いのであります。顔が美しく、きれいな人だけが美人ではありません。美人は徳の高き人なのであつて

美しい気持

命 四八 一二 一七三

美しい心

み 三四 一二 一七七

美しい心

命 四八 一二 二二二

うつし世

命 四八 一二 四九

うつし世に神の子

命 四八 一二 七三

うぬぼれ

ふ 四五 四 三

ウ
の
部

お互いに生存競争をして人生を過ごして行くには美人でなくてはならないのであります。

美しい気持とは「ああ有難い」「ああ嬉しい」という私心を交えない真の心である。神をわがうちに迎え得る心こそ、万人に信頼される心である。

美しい心、即ち感謝の心で努力すれば、自他共にいかに嬉しいことでありましょうか。
(三月二六日)

「今日わ」とは「今日一日」ということであり、今日一日は一生一代を意味することである。すなわち朝起きた時は生れた時であり、夜寝る時は死ぬ時である。今日一日の生活を明朗和楽にさせていただくことは、「和」であり、「和」は○であり、○は霊であり、霊は神であり、魂であり、清き神である。すなわち、美しい心である。

うつし世とは現代と書くが、その意味は写真すなわち写し世である。日常生活において落ちぶれたとか、栄えたというのが先代を考える時、それら過去の姿が判然と写し出されていることに気づかされるのである。(中略) 過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば現在の因を見よ。といわれているが、すべてはあからさまにうつし出されるのである。

誓の詞の中に「うつしよに神の子として生まれ給う」とある。この言葉をよく味わってもらいたい。人類は劫初よりいまにいたるまで生れかわり、死にかわり、流転しつつ現在にいたっている。自分一人が、今この世にいられることは古い昔から姿がうつし出されたものと思えばよい。幾億年前の人の魂が交流して現在となっているのである。善因あれば善果を生み、悪因(罪悪)あれば悪果をうむ。(中略) 飲みすぎ、食べすぎ、夜明しなどの不始末のため胃を患ったとする。これ皆自らの行為がうつし世にうつし出された姿である。これがわかれば「これでよいのだ」「これ位ですんで良かった」と感謝がもてるはずである。

自分の言語動作を正しいと自分できめこむのはアテになりません。これは、独りよが

うぬぼれ

誠 四八 一二 一七二

己は正しい、己はまちがっていないと宣言する人は真実がたりない人である。うぬぼれている人である。そこを改めなさい。と、おさとしになっています。

うぬぼれ

誠 四八 一二 一七三

私は一生けん命にやっております。こういう人が「おまえは、少しもやっていないぞ」といわれると憤慨するにちがいない。憤慨する以上は、自分の感情で、一生けん命だという自信を持っている。なれども、いのちの親は、自分から一生けん命だという人は、うぬぼれているのだよ……と、おさとしくださっているのです。この点を特に学び修めてください。お願いいたします。

うばいとる

ふ 四五 六 一四

「うばいとる」というと、物をうばいとることだけのようには考えられがちである。(中略) 人のことをささぎって話をうばいとることもある。仕事を、愛情をうばいとることもある。(中略) うばいとったものには、いずれ時がくれば利子をそえて、お返しするときに廻ってくる。

生れる

ふ 三六 三 二

両親によつてこの世に生れてくる時は、裸、裸足で土産も持たずに世の中へお客様として出てきたようであります。その時をいう言葉に「お産をした」と言葉を出します。皆さんは、この世に両親を通じて生まれてきましたが、これは皆さんが、わが意を用いて生まれてきたのではなく、天地自然の法則によつて生まれてきたのです。人はみな天地自然の法則によつて生まれてきたのでありますから、天地自然の法則にしたがわなければなりません。

うみ

誠 四六 六 四六

兄弟喧嘩をして血を見るような騒動をおこすのも、すべて、「ウミ」「血ウミ」という言霊に示される通り、血のつながりにおいて「おでき」と同じような姿となって現われてくることを心得ておかねばなりません。

海

ふ 四一 五 五

人がこの世に女子の体内を通じて出るときは、産み下ろす、産み出すといわれております。その時、女子は母としていかに厳しいか、世の母は知るところであります。海という文字には、母という文字が結ばれているのであります。

海 み三四 一二 四二

海は母であり、山は父であり、海の幸を無駄にすれば母に不孝となり、山の幸を無駄にすれば父に不孝となります。(一月二一日)

膿 (うみ) 敬 四一 一二 五三

「膿」は「生み」に通じる。

海山野 導 三四 一〇 三

海、山、野のおさとしは、海は母で、山は父で、野は子であります。

梅と運命 ふ 四三 九 八

植物の名称を示す文字に「母」の文字が入っているのは「梅」だけである。「梅」はまた、「運命」ということたまにつづく。

敬う み 三四 一二 一五三

神を敬い、人を敬うことは、誠の心を捧げることです。(三月十四日)

運 誠 四八 一二 七二

「ン」という音——これは「運」であります。あの人はうんがよい、うんがわるいというでしょう。この「運」というのは、一時的の現象であって、この現象は、実はその人の過去の姿が今のこの世に写し出されているのであります。つまり、自分ではわからない過去世の姿を、おしらせいただいております。同時に、現在において知らしていただくのは、将来はこうだよ、と知らしていただいております。昨日の過去は今日であり、明日の未来は今日にある。そこで、本会では「今日より始めて」と教えている。

運 導 三四 一〇 八七

雲仙という言葉からお話を致しますが、万人の人は、運は天に任せると言っておりますが、運は天に任せではありません。ウンゼン即ちウンは、善行の働きによって生まれて参ります。死を以って善を尽くす、即ち身命を捧げて善行を尽くす事によって運命が開拓されるのであります。

運 命 四八 一一 一二三

これほど働いているのにどうして運が悪いのだろうと嘆く人が多い。これは先祖伝来、人を傷けてきているのだ。そうすることが廻り廻って子孫に伝わってくるのである。

運 命 四八 一一 二七〇

運が悪いという人があるが、運は運ぶことであるから、一生懸命、運んで努力しなければならぬ。

運命 い 一八 一〇 三九

運命とか生前の因縁とか申しております。然しそれは唯申すだけであってその運命のつながり、因縁の道順を正しく悟っていないのであります。若しこれを悟って居ります

運命 四三九八

れば、難儀や苦勞が身にかかってきた時に、その場に於いて感謝できるのであります。梅はまた「運命」と言うことたまにつづく。利益あれば運命よし、不利益なれば運命わるしというのは人の迷いであるからどこまでも誠一つで通りきらねばならぬ。

エの部

営業の根本 四一七〇

支払いが完全に行えておれば収入も利子が入ってくる。支払いに不平不満を持って、待った待ったといっておると倒産となる。社長だけでなく、全従業員が、この一点に心を結んで支払いを喜んでいくのが営業の根本である。

英・米・仏 四七九三

英米仏の三国は大国であつて、これすなわち エビス大黒であります。

えいほう 五五二〇

胃(い)、家(いえ)、につながるのがえいほう。口で噛んで胃で消化して腸にいく胃腸は家の長。噛むのは上の歯と下の歯の合掌でしょう。家庭も国家も職場も家でしょう。

えいほう 四八二四〇

「えいほう」という言葉は誠であります。良い方であつて悪い方ではありません。誠は天の道である。人がこの道を踏み行なうことによつて幸せが生まれてくるという事実を教えられたのであります。幸せは、天から降ってくるものでもない。地から湧くものでもない。誠をささげた実行に生まれてくるのであります。

栄養 四八二一五〇

良いようにと考えることは(栄養)血が良いようになる意味にもとれる。人にしても肉体の栄養が必要であるように、魂の栄養もまた必要である。魂の栄養とはみ教えである。これにより魂を肥らせ、実らせるので、確固たる精神が養われるのである。

ええよう 四四六六

見ることに聞くことを、すべて「ええよう」に受取っていく、これがまごころである。ええように取っていくから、魂の栄養になる。

ええように考える

ふ 三九 一一 一七

不利なことを「これでよいのだ」と悟れるところまで行くのは容易でない。(中略) ええように考えるから、身、心の栄養になるのである。

易教

敬 四二 一一 九三

大極というのは中国の易経に出ている、あの「大極」のことですか。易経まで勉強していません。「易」は息でしょう。息は大気であり、空気です。また「息」という文字は「自らの心」と示されてあります。これは「水からの心」です。すなわち火・水・風です。

偉い人

命 四八 一二 一七五

難しい話をする人を偉い人という。利口な人、難しい人の意である。まじめな人とは優しい人である。学を修め業を習えと教えているが、もし学を習えば、徒らに利口となり、理屈だけが多く、実行の伴わぬきらいがある。

えん

振 四四 一 五

「えん」は線であり、糸であり、まことの道であり、人の道であります。

円

ふ 四四 三 六

円は○であり和であり交流である。

円

振 四四 三 四

円は金のことばかりでなく、神につながる縁、人につながる縁、過去にも未来にもつながる縁であります。これが○であり和であり、世界の平和であります。

縁

ふ 四四 一一 二

人と人との縁は、いまの世ばかりでなく、前の世、前々の世…と永い歲月の間に無数といつてよいほどの「つながり」をもっております。しかし自分と誰々と過去世においてどういう縁につながっていたのか、それを知る術(すべ)も証(あかし)もありませんから、(中略) 目には見えねど、縁のつながりのあることは否めません。あればこそ、この世で争ったり、うらみあつたり、語りあつたり、助けあつたりしていくのです。(中略) 親子が、夫婦が、兄弟が殺し合う。見知らぬ幼児を誘拐して殺す、ゆきずりの人を刺し殺す…と、(中略) 殺し殺されるのも深い縁のつながりである。

縁

解 二八 二〇

只、目先に現れた、其の場限りの人と雖も、縁あればこそ、現れてくださった。長い日月世話になったり、なられたりして居りましても、又時すぎればはなればなれになります。人と人との繋がりには国籍が違えども、又目に見えざるも、尊い繋がりがある

のでありますから、如何なる人と雖も侮らず、尊敬する心構えを養わなければなりません。

親子の縁、夫婦や兄弟恩人の間柄などの縁にも敵味方があり恩に報いらるゝ又報いる縁もあります。深い縁のつながりの人から、より以上に苦しめられ又助けられもするもので、この深き縁の人程気儘の心が湧き出ることが多いのであります。お互いに神より（紙撚）通ずる、神より教えらる、其日其場のよき教えに基いて徳を積まれる事を、より以上実行しなければなりません。

万物につながる縁であります。大極には万物が縁あつて皆つながっているのであります。縁というのは一つの輪でありまして、数字で現わしますと零（レイ）であります。輪は零であります。

寄り集まること、相逢うことは、みなその人たちの縁のつながりである。もちつもたれつ信じ助け合い、敵となり味方となるにしても、その日その時にめぐりあうのは、みな偶然ではないのである。（中略）縁のつながりの人は相手が足らず、みにくい心や姿をしていても誠心誠意教え導き、力にならねばならぬ。また己の足らぬ所をよくかみしめ、より以上、反省、努力、実行することが肝要である。（中略）縁には親子の縁、夫婦の縁、兄弟の縁、恩人の縁、子弟の縁などいろいろある。そしてこれらの縁にも敵も味方もある。より以上苦しめられる縁と、より以上助けられる縁との両面がある。故に前世、現世、来世（過去・現在・未来）にわたる縁のつながりは、人生生活において天地自然の法則から公平な結論が出る重要なものである。修養に志し実行する者の最も留意すべき点はここにある。縁のつながりを研究して、その筋道をややまらぬようにしなければならぬ。

人と人との繋りは、国籍は違おうとも、目に見えぬ尊い縁の糸がいずれにあるかわからぬのであるから、いかなる人といえども侮どらず、尊敬する心構えを養わなければならぬ。

縁 訓 一九 一二 一三

縁 振 四四 一 五

縁 導 三四 一二 七〇

縁 命 四八 一二 四七

縁 命 四八 一二 一六六

苑 三九 七 三三

縁のつながり 五〇 六 四

「苑」は「円」で「和」です。病む人も病まれる人も縁のつながり、見る人も聞く人も皆、過去世の縁のつながりであって、これを学び修めなさい、これによって修養実践しなさい、と厳しく命の親は神の子に諭されております。

縁のつながり 訓 一九 一二 一三

寄集る事は皆其の人達の縁のつながりであって、もちつ、もたれつ、信じ助け合いをする人たちはこの世開闢以来皆縁のつながりである事を信じて敵も味方も其日其時に廻り合うて参ります。

縁は永遠 六 四四 六 八

縁のつながり——これを前の世のつながり、いまの世のつながりと、時期を区切つてはならない。縁こそ、永遠のつながりである。

鉛筆 命 四八 一二 一〇〇

鉛筆でさえ身を削られながら役にたっている。これは小さな例であるが、しかし、身を削られながらお役にたつた人がなん人もあるか知れない。身を削られると不平不満がいたくなるのである。身を削られてもお役に立てば四合せなのである。楽あれば苦みである。後の四合せのために努力し、勉強すべきである。明日の幸を欲せば今日の努力をせよ。

円満 命 三四 一二 三二

円満に睦まじくして行くには、相手の理解と協力がなければなりません。(一月十六日) 月日と共に歩み語って行く事を円満と申されます。そこで月がまん丸い事を満月と言つております。

遠慮 命 四八 一二 一五三

遠慮は高い心である。心から笑えるように実行することが大切である。縁ある人と切れると、自分の腹を切らねばならぬこととつながり、切つて悪いところを直してぬい合す。これを「つなぐ」といい、即ち、交流である。

縁を切る 命 三九 八 二二三

オの部

お伺い 　　ふ 四五 六 一一

なんでもかでも「お伺い」せずにおられなくなるのは、常日頃勉強がたりぬからである。勉強がたりぬから迷う、迷うからあせる。あせて混とんとしてしまう。

黄疽 　　ふ 四四 一二 一五

日本国中、東西南北を飛びまわる。むりやりに飛びだし飛びまわるのは「横断」である。（中略）「黄疽」の身しらせを戴いたのは、その教訓である。

往復 　　ふ 四五 一二 一二

往復は呼吸ではないでしょうか。呼吸は天地の法則であります。また一般の人は舞をする時に使いますのが扇であります。風を呼び起しますから扇と

扇 　　ふ 四七 九 一四

も申すのでしょうか。その扇の要がはずれますと、骨はバラバラになってしまいますように、人においても肝心かなめは生命であります。誠であります。

扇（おおぎ） 　　敬 四一 一二 三九

小木（おぎ）に通ずる。（佐渡御巡教の折扇を忘れられて）「みごころ」というと普通に「御心」と解する人が多い。特に「いのりのことば」にある「おほみごころ」といえば「大御心」として天皇陛下の思召と解釈されやすいが、

おおみごころ 　　ふ 三九 六 三

「みごころ」は「身、心」である。この思い違い、取り違いなきよう、しっかりと見直して頂きたい。

太極の存在は火・水・風である。徳と力と愛である。万物尊愛である。天地自然の法

おおみごころ 　　ふ 四六 一〇 一八

則は火・水・風、ヒ・フ・ミ（一・二・三）この真理が神の心である。おおみ心であります。

肉体は借りもの。その返しかたにも、いろいろある。きれいにお返しすると、きた

お返し 　　ふ 四五 六 一三

なくおかえしするのとある。きれいにお返しすればきれいなものを貸していただける。

交通事故などで路上に血を流し、肉体を破壊してしまうことなど、もつとも、きたない返し方であろう。

お蔭さまとは目に見えないこと（蔭のこと）があらわれてくるのである。目に見えない

おかげさま 　　命 四八 一二 一六

い内からお蔭さまというように勉強せねばならぬ。

おかみ(お上) 　　ふ 四六 三 一五

政府は、いわゆる「おかみ」(お上)である。川上である。ここが汚濁すれば、国民生活もまた混乱する。政府の汚濁もまた一つの「公害源」である。

掟を守る 　　命 四八 一二 一七一

自然の法則に合致することである。夜が明ければ起き、暗くなれば眠る。(中略)太陽の恩恵によって活かされているながら、感謝をもって日の出を迎え、また感謝を以って西山に沈むのを送っているであろうか。

沖繩(地名) 　　ふ 四九 四 一〇

沖繩の歴史をひもとくと沖繩は竜宮であり、琉球であり、天国である。そういうような歴史が残されておる。

沖繩(地名) 　　ふ 四九 一〇 七

沖繩県の前の竜宮という時代、また琉球という時代、その時代には竜宮の王様と日本の皇室とは、深いつながりをもつて交流していたと聞かされております。(中略)沖繩県内に修養団捧誠会沖繩県支部が生まれ、昭和四八年十一月十八日、盛大に厳肅に発会式をめでたく挙行された由来は、これは人の知恵と見る人の心であつて何千年前からの魂の宿縁で、こうなることは定められていたのでありましたことを信じるものであります。

行い 　　ふ 四六 五 二二

神法の第一には「実行」という言葉がでている。「実行」ということは永遠のものでございます。「行い」の方は、その時に変つてまいります。「実行」は無限である。

行い 　　ふ 四六 一〇 二二

行いは幸せを作る、実行は幸せを生みだします。

行い 　　ふ 四八 一 五

人の道の「行い」さえも、いうは易く行いは難し、と教え伝えられておりますように、なかなか行いにくいのであります。実行ということは、懸命であり、文字通り命をかけることであります。人の道としての幸福は作り出すことであり、花を咲かせることであります。一方、神の道である実行は懸命であり、無条件の行動によって生み出されるのが四合せであり実りであります。

行い 　　ふ 五一 四 五

天の声によって諭されても、国王が諭しても聖者がいろいろな教科書を残しても、知るのみであり、言うのみであつて、行いも実行もしなければ、感情の動物となつて、地位や財産の奪い合いという醜い争いをして狂乱を引きおこすことが、いく万年も将

来にわたって続けられるでありましょう。真の平和を築くことにならないでありましよう。

行う 命 四八 一二 一八五
 行うことができなるとなんにもならぬ。

おこる 命 四八 一二 二六六
 おこるとは心が凝り固まり、自分の不平不満で相手を責め、人に口もきかぬような状態をいい、不徳である。

修める 命 四八 一二 二六六
 修める 命 四八 一二 二六六

修めて頂く時は、真心で教えて頂かなくてはなりません。しかし、今、現に、こうして出席をしていながら、心の中には、今ごろ学校から帰った頃だとか、娘に頼んでおいた買い物忘れずにしてくれたかなとかが浮かんでいるような場合も少なくありません。お話を聞きながら、心は乱れ、曇り、濁しているようでは、お話を修めることができません。

修める 命 四八 一二 二六六
 修める 命 四八 一二 二六六

修養とは文字どおり修め養う、修めることは只単に勉強して知るのではなく、実践して初めて身につくのであって、神の道を実行し、人の道を踏み行なって初めて、本当に知ることが出来るのであります。

唾 命 四八 一二 二六六
 唾 命 四八 一二 二六六

多くの人を押しつぶしたような戦争指導者は唾になって生まれます。
 “唾”という言葉から“押しつぶす”という言葉が出てまいります。人を押しつぶす、ということであります。日本には唾が多い。とくに、足利時代、鎌倉時代といった戦

唾 命 四八 一二 二六六
 唾 命 四八 一二 二六六

国の世には唾の子が多かったのであります。
 言葉は音である。音は恩である。恩を仇にする、親切を仇にする、世話になるばかりで恩返しが出来ていない、恩を仇にし己一人で天下をとったような気持で、わが意を用いて相手をおしつぶしてきたことが唾という姿となり現れるのである。

教え 命 四八 一二 二六六
 教え 命 四八 一二 二六六

天地自然は教えの現れである。無限の教訓がその中にひそめられている。われわれは自然の言に心耳を傾け、静かに教えを聞かねばならぬ。水の音はシャシャと感謝々々を教え、火の音はゴゴゴ（悟々）と、ご恩々々を教え、風の音はサーサースー

教え導き育てる 八

ふ 四六 五 八

と感謝、拝み合い、五分々々と調子を合せることを示している。勉強することも必要であるが勉強したことがどういふことであるか。そしてそれを修めてどう行なうべきかを身をもって示すのが、教え導き育てるといふことであると教えているでしょう、さとしていくでしょう。

教え導いて育てる——これが進行であり行進である。進行——行進というのは教え導き育てるといふことなのであります。

教え導き育てる 八
おしみ心 命 四八 一二 一六〇
惜しむ 命 四八 一二 一六〇
おしんこう 命 四八 一二 二五一

大切なことは、教え・導き・育てることです。教えることは、知識があればできますが、育てることは、真の愛情がなくてはできません。真の愛情とは、イエス・キリストの言葉にありますように、汝の敵を愛するところまでゆかなければなりません。教えみちびくには、ヒマがかかる。わかっている人と、わからぬ人との間には、八百八段階がある。八百八とは米という字に通じる。心をこめ（米）て教えを導いていかねばならないことである。

日常生活を営む上に負け惜しみ、骨惜しみ、出し惜しみのこの三つの心持ちと行為によつて、幸、不幸がわかれるのである。この三つの心と行為により人生の行詰りともなる。十分反省すべきである。

惜しむ、というと物を出し惜しむことだけのよう思う。手や足を動かすことを惜しむ人が多い。進行は、左右の脚。一步一步の前進である。これを惜しめば進行なく、止まってしまふ。止まるから、おくれる。おくれるから迷いが生じる。

大根でも抜かれて洗われて、切られて塩と一緒に桶につめ込まれ、もまれもまれて、重い石をのせられて、あのおいしい「おしんこう」となる。しんこうである。青年も多くの苦勞艱難にもまれて、立派な人になることができるのだ。

大瀬崎とは、押す、押しだす、という言葉霊であります。

大瀬崎 (伊豆) 太 四四 一一 五
おたがいに 命 四八 一二 二五一

ふ 四〇 一一 一三

「みおしえ」で命の親が我々に呼びかけられる呼称に四つの種類がある。「おたがいに」(縁の近い人)

「よものひと」（全世界の人）

「もろびとよ」（日本の人）

「みちの人」（神の道、人の道を学びおさめている人々）である。

「おたすけ」とは働くことであり、たすけることである。

「おたすけ」とは四音である。師恩であり四合せである。ゆえに人をたすけていつて真の四合せ（幸せ）が自からさずかるのである。

落ちるといふことは一つの落伍者のように思われるが、そうではない。上がるための出発点と思うべきだ。

交流とはいいながら、行つてもお客然として御馳走になつていようでは、まことの交流とはいえないでしょう。形ばかりの交流は、おつき合い。それは無駄です。

妻は他人の面倒をみたり、物を人に与えたりする場合、自分の力ですと思わず、夫あればこそこのような行為もできるのだと、まず、夫に感謝することを忘れてはならない。

痛いところへ自然に手がいく。痛いところへ手がいく、というのは、患部と手の合掌である。これを世間では「指圧」とも「按摩」ともいう。指圧は誠の愛です。広い暖かい愛である。痛いところに手がいくのは愛情であります。昔は実印の代りに手形を押したものです。今でも「手形」というでしょう。痛いところに手がいくのは本会では、「お手あて」といつております。

風の音、水の音、火の音——火、水、風のその音は太極のひびきであります。心にごれば、怒り、嫉妬、不平不満が心に充満して、見ること聞くことすべてが不愉快になり、ついには、この世に生きることさえ、いやになつてしまふ。

男は天でありますから「度胸」、女は地でありますから「愛敬」であります。（中略）

女の人の心の中は明るく暖かく、いつも和気あいあい、としていなければなりません。

男は、まず一人の男としての自覚をもつとともに、家庭的・社会的・国家的そして地球

男 五三一 一一一

男 四六二 二五

音 四八二 一三七

お手あて 四八二 七七

夫あればこそ 命 四八二 二七三

おつき合い 四一四 七

おちる 四七七 四三

おたすけ 四三二 八

おたすけ 四二二 一三

的な役割をそれぞれの水準を果していかねばなりません。歴史的な事柄の立役者となつてきた男性は、未来においては一層明白なる責任感にのつとつて行動してゆくべきであります。

男 米三四 一二 二五四

米は女子を現し、麦は男子を現わします。それ故に米は炎熱の時に芽生えて参ります。これ即ち愛情を示します。麦は寒い霜の降りる時に芽生えて踏まれ乍ら成長致します。

男子は度胸であり女子は愛嬌であることは、天地の理法であります。(五月二日)

男 誠 四六 六 八七

男性は「天」天地をかたどつて男女がつくられている。男は天でありますから「度胸」女は地でありますから「愛嬌」であります。「愛嬌」とは「愛の郷」であつて、その心の中は明るく温かく、いつも和気あいあいであればなりません。男は度胸で男らしく、女は愛敬で女らしく、そこに天地の和合があります。

男 誠 四六 六 一一三

「男」(おとこ)という名は「お床の間」であります。お床の間は畳より一段高いはずであります。女は一だん低いのでありますから、低いところへ水を流してあげる。これが法則であります。

男 命 四八 一二 一〇六

女は生み出す力であり、男は育てる力である。これで調和してゆくのだ。海という字は母という文字なしにはなりたため。女はうみの力であり、うみ出す力である。おんな(女)は温であり、熱であり、温いうるおいである。女に生れてひがみ、妬み、恨みなどといったとげのある心を持つていては顔は美しくとも値打がない。女としての品位を保つには、温い広いうるおいのある心を持たねばならぬ。

男女言霊の上からの説明

男 おとこ音・響・発言

こ 生命の本体・精虫・

精誠 忠誠

忠とは心の中心、正しい心

(中略)

男は度胸、女は愛嬌というが換言すれば男は道教を、女は愛教を信条として進みゆかねばならぬ。また男は屋根棟であり女は土台である。男女あい協力することにより、一家も一国も栄えてゆくわけである。

度胸の「度」は「道」であり、「胸」は「教」である。強く正しく堂々と道をふみ行なって、その道を教え導くところに「度胸」の真理がある。

踊る 「踊りなさい」というのは、身軽に働きなさいよ、努力しなさいよ。

同じ発音が二度重なる ふ 五〇 九 一〇
 ミミ・チチ・モモというように同じ発音が二度重なるところは協力・団結・融和である。自分だけのことではない。夫と妻、先生と生徒、親と子。すべての関わり合いにおいて、白だ黒だと理屈の論争をしないで、柔らかい心で柔らかい言葉をださなくてはならない。

人を憎む。にくしみ、うらみ、ねたみ、そねみ、これらは心の鬼であります。鬼とは、人を欺いて自分の利を得るものであります。横暴であり、困る人を救うのは尊いが、困っている人をなお困らせて行くそれが鬼であります。

鬼 ふ 五一 五 四
 人会の趣旨は、己を虚しくして無条件実行することであります。私は青年時代から修養実践してきておりますが、己を虚しくするということは容易ならぬ苦心をしてまいりました。(中略) 己を虚しくすることは、天地自然の法則を守るといふこととであります。天地自然の法則を守らなければ、己を虚しくしていません。

己を虚しく ふ 五五 九 二
 (中略) 己を虚しくするという事は、天地自然の法則のよって生ずる大極を神として崇敬すると申してありますように、大極、すなわち神のみに添わないと、己を虚しくできないのであります。(中略) 親は子だと思い、あるいは孫と思っております。

でも、皆、神の子なのです。親も神の子なら、子も孫も神の子なのであります。ですから、神の子である自覚をすることが、己を虚しくする第一歩でありまして、神の子の自覚がないと、己を虚しくすることはできない。(中略) オレが、オレが、の「が」があるうちは己を虚しくすることは到底できません。己を虚しくする訓練をしている

己を虚しく
命 四八 一一一四八

お早う
命 四八 一一二二一

おふくろ
敬 四二 一一二二三

おまいり
命 四八 一一一〇九

おまいり
命 四八 一一二八七

お前の利
命 四八 一一二六九

のであります。言うのみでなく、少しでもそこに近づこうとすることでもあります。この心棒をはずすと、車は進めないであります。

己を虚しくするとは、自分を中心とせず、神を中心にせよということである。自分を中心にするから腹が立つのである。つねによい気持を人々に差しあげ、よい言葉を出して、徳をつむようにせねばならぬ。

「お早うございます」という言葉の使い方は、朝の挨拶だけのよう思うが、この言葉の出し方、使い方には、実に尊い意味があるのである。なぜかという、月日の運行は全く間断なく進んでいるが、人の行くべき人生もこの月日の運行の如く、間断なく進み行わなければならないのである。もしこの進み行うことが遅れると、天地の法則に違反することになるから、手遅れになるのであって、「お早うございます」という言葉は、進み行うことが遅れないようにという意味を持つのである。

袋——は「おふくろ」である。「おふくろ」という母は子を生み育てる。故に「海」（生み）という文字には「母」が入っている。「海」は無限である。そのはかり知れぬ広さと深さの中に、もろもろの物を生み育てる。「袋」はかく大きい。その大きさは、だから無限である。

真の幸福は心と心の合掌、つまりおまいりである。お前は、即あなたである。たがいに尊敬し合うことはお前利である。利とは愛することである。相手を愛することである。結婚も就職も尊敬と愛がなければ結ばれるものではない。

おまいり（お前利）すなわちあなたの利をはかれば争いはない。お前の利のために働くというのが極意である。この心無きため金なし、暇なし、楽しみなしと愚痴をこぼすようになる。

おまいりはおまえりに通じる。お前の利である。私の利益のために詣るのではない。お前も私ともに親しみ、相互の理解につとめ、ともに仕合せにしていたかどうかという意味である。

オミキ 　　ふ 四四 四 八

神酒は「みき」である。「みき」は「幹」であって、幹の働き根の働きあって、はじめて葉も茂り、花も咲き、実を結ぶ。花や実にのみ心をうばわれず、この根を見よという教訓であった。

おみな 　　ふ 四九 九 一〇

おみな会を構成するおみなの方たちは、ほほえみを忘れないように努力し、明るく家庭づくりに励んでください。

思い 　　ふ 四一 五 九

人の念—人の思い（重い）が残ると、歳月を経るに従って重くなる。その思い（重い）が、重く後々の人の背にかかってくる。重さにたえかねて倒れる。

思いがけないこと 　　ふ 四五 三 九

「思いがけないこと」は必ずしも悪いことばかりではない。うれしい、ありがたい「思いがけないこと」が現われてくるのは、すべて過去に種子をまいて、「しんぼう」してきたから、それに利子がついて現われたのである。

思いこむ 　　ふ 四七 一 一五

思いこむ—あるいは「きめこむ」ともいう。思いこむのは、心のなかに強く持っているのであって、いったんこうと思ひこむと、なかなか放さない。おれの思いは正しいと思ひこんでいる。そうして、むだな苦勞をしているのである。「思い」を放してみること一つ一つの交流である。箸をもったままでは、なに一つできない。箸を持つたり放したり。その交流があればこそ、食事もできる、手紙も書ける、仕事もできる。交流の根本義を忘れてはならない。

思ったこと 　　振 四三 九 七

私達が思った事は形になって現われて来ます。勿論言葉に出して云った事、行った事は、そのうちに形になって現われて来る。自分から現わそうとしなくとも、自然に蒔いた種通りに現れて来る。言う事も言わずに我慢している。辛抱（真捧）ならよいが我慢している人が多い。それはいつか形になって現れてくる。

親 　　ふ 四三 一二 一六

なんといいても親は根である。

親 　　ふ 四五 八 五

親なればこそ、ま心こめて叱ってくださいるのであります。親なればこそ、いかなる道も連れて通ってくださいるのであります。

親 　　ふ 五〇 七 七

私の親は無限の大極である。始めもなければ終りもない。大和である。零である。零

親 五二 四 二

は大和である。それがわれわれの親である。この親に近づいていこう、この親のみ心にもとづいていこう。即ち、天地自然の法則にもとづいていこう。この信念、強く正しいこの信念であります。

親 三四 一二 二八三

親に交わると書いて親交。家庭にいれば両親と交わることですが、社会では、指導者に交わってゆく。親とはすべての指導者のことをさすのであります。（注・教えの親のような使い方もある）

親 三四 一二 四三九

どんなに人の親が足らないと申しましても、親のかけ替えは物では求めることは出来ないであります。（五月十六日）

親という文字は立木を見ると組合せて教えてあります。子供を玄関まで送り出しどの方面に向って行くのかと、姿が見えなくなる迄、立木に登って行く先を見守るのが親であるという所から文字となって万人に示し教えられているのであります。

親 四一 一二 五二

（七月三一日）
 “親”という字は、“木”の上に“立”って“見”ると書く。親は子のためには無条件である。

親 四四 一 一一

五本の指も隣どうしの四本の指は、腹と腹とが合掌出来ませんが、親指の腹には四本の指とも合掌出来ます。親とは命の親であり、みおしえであり、教典教義であります。

親 四八 一二 一〇四

親孝行をせよというならば、まず、孝行されるような親にならねばならぬ。天地の大道は一つである。みずから正しい道を行けば、人もまたその道を来るであろう。他人を責めてはならぬ。自厳他緩の精神を忘れてはならぬ。

親 四八 一二 一一二

子供の動作の一つ一つを親への教訓と悟り、日々修養すべきである。みずからの「我」で子供の行動をとがめてはならぬ。わが子、わが子と、我（が）の気持で育てるから成長するにつれ、親から離れてゆくのである。天地の恵みによって人は育まれ、徳と力と愛によって生命は伸びてゆくのである。

親子 三四 一二 八七

人の親も、子を産み養育することは、親子が争いをする為ではありません。親子は睦

ましく協力融和が出来て、明朗和楽の家庭を建設し、子孫の繁栄の為に努力するようにしなければなりません。(二月十一日)

親孝行 命 四八 一二 二九〇

親子が感謝し合う 命 四八 一二 二八七

親孝行とは親の気持を知ること、健康であること、親の心身を養うことである。子は親の労苦に感謝し、親は、子あればこそ生きぬく勇気が生れ、努力できると、感謝し合うことにより、おたがいの心の波長が一つとなるのである。

親心 ふ 四七 二 二六

草木の根は土の中で活動している。(中略) だから、根の発展にじやまをし、その発展をさえぎろうとする石があっても岩があっても、これを排斥せず、しっかりと抱ようしていく。その心、その行動——これ誠であり、親心であります。世に子の憎い親はない。たとえ人から爪はじきされるような不良の子であっても、親は広い暖かい気持で抱ようしていく。これは、よいならぬ苦心である。

親心 ふ 五五 六

子供がいくら欲しいとせがんでも与えられぬ時がある。親が与える時期を心得ている。その時がくれば子供のほうから求めなくても親は与えずにはおかない。私と会員の皆さんとの関係もこれと同じである。皆さんが一生懸命でやっておれば、皆さんの欲しいものを与えずにはいられなくなるのが理である。(裏表紙)

親心 訓 一八 八 六三

親心 命 四八 一二 一三三

子の病いは、その子の病いに違いないが、しかし親の心得違いが病いとなって、子に現れているのである。どうぞ私をとがめてください、というのが親心かと思う。反省し、感謝し、実行すべきである。

親子の争い 敬 四一 一二 五四

肉親の親子の間にも闘争があり、愛憎があり、怨念がある。それでも親であり子である。人の親と子は血を分け合っておっても、過去の縁によって感情がつきまとう。これが親子闘争の種である。

親子の交流 み 三四 一二 四七一

大宇宙は神の姿であり、生命(いのち)の親であります。人は小宇宙であって、子であります。神は親であり、人は子である以上、神の子であることを自覚せねばなりません。

おやすみ

ふ 四〇 七 一四

せん。親子の交流は霊の交わりとなります。（八月十五日）
「おやすみ」という言葉には「おや（親）」が入っている。親に反抗している人は、その環境の如何にかかわらず地獄である。

親に甘える

命 四八 一二 二七七

親に甘えられる素直さが成長への原動力である。

親に甘える

み 三四 一二 一二三

親に甘えることは、親の心を知る為で、親不孝をする為ではありません（二月二十九日）

親に近づく

ふ 五四 一一 一

いのちの親は、魂を磨き清めることに誠を捧げる事こそ、いのちの親に近づくことであると諭されるのであります。

親に仕える

ふ 三八 七 一八

親に仕えるという事は「仕事」である。月給をもらうことだけが仕事ではない。

親に報いる

ふ 五三 八 五

総裁にも副総裁の身心にもいろいろ試練があります。私はこうして大きな声で話しているが元気なわけではありません。話をさせて頂いているのであって、総裁が元気なのではありません。恩師の断腸の思いを知る教え子になってください。これが即ち、親に報いる道であり、恩師につかえる道ではないでしょうか。

親の声

ふ 四二 五 三

親の声こそは人の心に宿る尊い種である。（中略）子の仕合わせを願う親心の種であるから、そののみりは最高の仕合わせである。

親の心

ふ 三八 一二 一四

「先生に御めいわくをかけて申し訳ありません」という会員が多い。しかし、親の私は、子供からどれほど嘘をいわれても、だまされても、少しも迷惑には思わない。子供の不始末を片づけていくのは親のつとめである。私に迷惑かけて申し訳ないといつて、兄弟や友人や親戚に迷惑をかけられると、親の私は本当に困る。

親の責任

ふ 五一 一二 二四

親子の仲や夫婦の仲のいきさは、何千年何万年からのとりつきとつぎで、たとえば、運動会のリレー競技のようなものであって、すべての言語動作は、親から子へ、子から孫へとつながっていくのです。だから、まことの心を伝えていかなければなりません。それが親の責任です。その責任を感じて言語動作をつつしき、改善していくところに本会の趣旨があります。このための教科書が神法や綱領、典範です。

親の責任

太 四四 一一 一五二

親は、長年苦労した、いろんなことを体験したから、すべてを持っているとうぬぼれ

親の働き 　　ふ 三九 七 一五

親の喜び 　　ふ 四〇 一〇 一七

親不孝 　　ふ 四五 八 五

親を立てる 　　ふ 四〇 五 二四

お礼 　　ふ 四七 一二 二六

おれがおれが 　　い 一八 一〇 二五

オワー 　　か 四四 四 七五

オワー 　　誠 四八 一二 一九九

ていますが、しかし子供の持っている無邪気な明るさ、こだわりのなさ、さらには未来の可能性、こういうものをほとんど持っておりません。それが心の底から見直されるとき、そこにおのずから子への「敬」が生まれてくるのであって、敬に立つての親の愛が添うて、育てていくという親の責任が果たされるのであります。

親の働きは子供の働きの三百六十五倍に相当することもある。(中略) 親を軽く見るのは、この「働き」を知らない為である。

子が親の気持ちを知ってくれる、親にとってこれほど嬉しいことはない。

親の心に添わない――

親のいうことを聞かない――

これは親不孝であります。

親不孝をしていないかどうか、真剣にみなおしてください。

親を立てて自分の身が立つのである。

ひどい言葉を言われても「ありがとうございます」と言うのは、相手に言うんじやありませんよ。自分に言うんです。

おれがおれがで何時までも通るなれば必ず行詰り、迷わねばならないのであります。

「おれが」と云う心は離れる心であって又我慢の心であり我慢の心は己一代は通れても二代は続きません。

この世に出るときは頭から「オワー」とでてくる。「オワー」は「大和」です。平和の和、大和(オワー)でうまれ、この世を終わるときは、ウーンと息を引き取る。

第一声は、「オワー」であります。「オギャー」ではありません。「オワー」というのは「大和」である。人がこの世に出てだす第一声が「大和」である。これは天地の

法則の陰と陽、あうんの呼吸があわなはいけません。ここには人智ではかりきれない真理があるのであります。「オワー」とは「大和」。これが「大和魂」これが「日

月」であり「地球」であり、宇宙である。太極であります。

終り 振 四二 一 四

原因があるから結果がある。始めがあれば終りがある。然し始めと終り、これは人が決めたことであって、地球は黙々として始めなく、終りなく回転しております。始めも終りもない大和であります。始めと終りをつなぎ結んでゆけば、始めも終りもない零であり、○であり無限なのであります。

おん 命 四八 一二 二二 四

世の中は「おん」の送りあいである。おんとは恩、音、温を意味する。(中略) 暖い光をうけ、熱をうけ、空気をいただき、水をいただき、天地の恩、国土の恩、父母の恩、衆生の恩をはじめ、森羅万象、一切のお蔭で活かされているのである。(中略) 裸、裸足でこの世に出していただいた自分たちが万物のお蔭で今日までの生を保ち得たことに気づくならば、報恩感謝の生活、奉仕の生活に終始せねばならぬことは理の当然である。

おん(音) 誠 四六 六一 八〇

人の言葉も音(おん)であります。体温も音—恩—であり、人さまのご恩も「おん」万物のご恩も「おん」であります。音は温、温は恩に通じていることを忘れてはなりません。

恩 ふ 三五 三 九

女の人は産む力を授けられています。神様より特に恩を忘れないように、この世に生まれ出させていただいたのであります。恩は音であり、発音であり、言葉なのであります。

恩 命 四八 一二 二三四

恩とは誠の光であり、愛である。従って女はつねに誠の光となり、愛の化身でなければならぬ。女は生み出すという尊い力を与えられている。

音 か 四四 四 七五

音(おん)は五十音であります。ア、ウンでままります。ウンという音は、上歯と下歯とがギッシリかみあわされ、力がはいつたときに「ウン」であって「ウン」でままります。

音 ふ 三九 一 二一

徳を流すとは、物や金だけのことではない。言葉—一音(一恩)—をもって、明るい感謝をささげていく世界が至るところにある。

音 ふ 五二 六

人の出す「音」(おん)はたとえ記憶の頁に刻みこまれなくとも、また、文字に書き

音 誠 四八 一二 四二

残されなくとも、天のテープにはきちんとおさめられていると信ずる。ゆえに、われわれの一言一言は尊い。(裏表紙)

声は「音」であり、「発音」であります。(中略)その発音は「音」(ね)という言葉になりません。「ね」は「根」であり「元」である。根はこの地下にひそんでおります。根のない草木は「生け花」であって、一時は美しいが長もちしません。根のある花を咲かせ、根のあるみのりをしていくところに本会の趣旨がある。

恩返し ふ 三七 二 三

物を頂いて感謝をし、ご恩返しをする心はどなたでも実行しております。無限の徳を拝借し、頂いたご恩返しというものは、知らない人もあれば、わかっていながら実行しない人が多い、叱ってくださる方はみ親であり、父母であり、恩師です。

恩恵 み 三四 一二 四〇

人が生きていく為には、人の勤労と慈愛によって、数知れぬ恩恵を受けるのであります。(中略)天恩によって活かされ、人力によって生きていく。両面に於ける大恩を見逃がして、気随気儘(きずいきまま)、勝手な行いをつづける為に、人の世は、身分の相違あろうとも、徳不徳の人といえども、悩み苦しみによって教えられるのであります。(一月二十日)

恩恵 み 三四 一二 六八

人のなす業には失敗が多い。その失敗を許して戴ける恩恵がほんとうに分かれれば有り難いのであります。(二月二日)

恩恵 命 四八 一二 七九

尊い生命を活かしていただき、あらゆる人の労力によって救われているわけで、君の恩、親の恩、天地の恩、人の恩、衆生の恩などについては、人の知恵だけでは想像もつかぬほどの恩恵をうけている。(中略)肉体の患いのために心が迷い苦しむことが、いちばん苦しいのである。この苦しみを救わんと思う誠、救われんとする誠、誠と誠の合掌するところに救いがあるのである。心の底からお蔭さま、有難うのいえる時、救われるのである。

恩恵に報いる ふ 四六 三 二四

その恩恵にたいして報いるということが誠をささげることです。

恩恵を知る 命 四八 一二 二八九

光や空気は手にとってみることはできないが、それらの無限の恩恵のわかることは、

恩師 誠 四六 六 五七

手にとって見たことになる。

「師の君」とは恩師であり、また親であります。「親とも頼む恩師……」とも申します。また「恩師」というと、誰しも「人」を思うでしょうが、万物一切が恩人であり恩師であります。蟻に教えられれば蟻が、鼠に教えられれば鼠が、鳥に教えられれば鳥が恩師であります。

恩知らず い 一八 一〇 二二
人に生まれ、行詰り、迷い悶えて、道を外し己の行くべき道も暗闇となりて悩む人こそ恩知らずと申しても差し支えないのであります。

恩人 訓 一九 六 九
叱つて下さる方は恩人だと思い、後姿を拝む位になれなくてはいけない。

温泉 命 四八 一 七五
温泉とは大地から湧き出る恩線である。大地の愛、大地の度量こそ、すべてを抱擁するものである。

恩典 命 四四 二 三
（天恩をお返ししたとき恩典（恩天）をいただけるのだよ。

恩典 命 四四 二 三
尊い魂を濁して、ねたみ、うらみの心を持ち続けるようではなりません。目も見える、耳も聞こえる、手足も動く。皆、役に立っているのではないのでしょうか。そう思えば、働かして頂いている恩典を感じられるはずであります。そして、いささかでも世のお役に立つ行いをさせて頂こうという気持に切り換えてゆけてこそ、はじめて、厳しい中にも光りを見出せるのであります。

恩典 命 四八 一二 二九八
一つの善行により、三つの罪悪が解消する。誰でも過失はある。善行を積み重ねてゆけば、恩典をいただき、自分も許され、人も許されるのである。

恩典に感謝 命 四八 一二 二八四
神により活かされている恩典、すなわち許されている温情を、とくに感謝せねばならぬ。米は女子を現わし、麦は男子を現わします。それ故に米は炎熱の時に芽生えて参ります。これ即ち愛情を示します。麦は寒い霜の降りる時に芽生えて踏まれ乍ら成長致します。男子は度胸であり女子は愛嬌であることは、天地の理法であります。

女 訓 一九 一二 一〇
（五月二日）

女の人はいつも、円く、優しく、美しく、愛嬌を現し、心の底から笑えるように実行

女 命 四八 一一一〇六

なさらなければならぬのであります。喜ぶ、笑う、感謝、と云う言葉を現しますが、不愉快な顔を人に見せる事は女として一番不徳を積む事になるのであります。

女は生み出す力であり、男は育てる力である。これで調和してゆくのだ。海という字は母という文字なしにはなりたたぬ。女はうみの力であり、うみ出す力である。おんな(女)は温であり、熱であり、温いうるおいである。女に生れてひがみ、妬み、恨みなどといったとげのある心を持つていては顔は美しくとも値打がない。女としての品位を保つには、温い広いうるおいのある心を持たねばならぬ。

男女言霊の上からの説明

(中略)

女 おん 温 恩 熱 親切 同情 愛

な 生命(姓名) 正しいことを信じ行う

男は度胸、女は愛嬌というが換言すれば男は道教を、女は愛教を信条として進みゆかねばならぬ。また男は屋根棟であり女は土台である。男女あい協力することにより、一家も一国も栄えてゆくわけである。

女の人は「愛嬌」と昔からいわれているが、女の人から男の人に誠の愛を捧げなければならぬ。これが天地の法則で、男の人から誠の愛を先にいただくとするのは順序が違うのである。

女 命 四八 一一一三三

神はどんな思召によつてこの世に、女の人を生ませ給うたか。女の方は産みだす力を授けられ、また神からとくに恩を忘れないようにとの使命をうけて、生み出されたのである。恩は音であり、発音であり、言葉である。(中略) 強い剣のあるような言葉を使うことは、神から許されないものである。それに音信、出入、交際、金銭の出し入れ、物の出し入れ、物の整頓を実行せねばならぬ。(中略) また恩に報いることを忘れるようでは、母として女として立派な子供を養育することはできないのである。

とくに女の人は子供を養育するためにお乳の出る乳房を授けられている。乳を授けら

女の使命 訓 一九 一二 一〇

恩のかえし方 命 四八 一二 二八一

音は万物に通う ふ 三八 一一 二九

温容豁達なる人格 み 三四 一二 一四九

恩を売る ふ 四五 一二 一四

力の部

れているということとは子供にのませるために与えられているのではない。『ちち』とは、父親であり夫婦となった時は夫をも意味するのである。この親、この夫を真心から尊敬し、仕え奉ることは女の天職であり、いちばん大切な「恩報じ」になるのである。女の人は優しい、滑らかな、人に接しても、あたりのよい、ふんわりした気持を現してこそ、女の尊い使命があるのであります。

世話になったとき、物や金で解決することが習慣になっている。恩義を物質で解決したと思うところにいるの宿題が示される。

平和郷には霊光が満ちあふれている。平和郷に座っただけで、何となく心が静まり、浄められる。それには声はなくても、畳にも天井にも障子にも、私の音が通うているから、万物ごとごとくが、ささやいてくれるのである。

温容豁達なる人格を作る為に、信仰も修養もしなければならぬのであります。

(三月十二日)

高萩の田舎から、私の好物だというので、よく芋をとどけてくれる。そのたびに「ごころうさま」といって、八百屋の店さきで買う倍くらいの代金をさしあげる。芋の代金のほかに、交通費もふくめているのである。そのうえに、私の感謝の気もちも添えている。「それでは持ってきた人が気がねするでしょう。持ってくる気もちではありませんか」という人があったので「恩を売っておれば、そのような気もちを持たせるでしょうが、私の心にすこしも恩きせがましいところがありませんから……」といった。

ガⅡ我 ぶ 五二 八 四 「ガⅡ我」は淋しい心であります。がんばる、おねがいする、という言葉霊をふんばる、

おたのみずるとして頂きたいと申しますのは、己にとらわれ、孤立したような「ガ」の心では、広い暖かい心とは言えぬからであります。いのちの親は神の子に、広い暖かい心を持つように、自由なる意志を与えておられるので、自由なんだからなにをどう考えようと勝手だなどという浅はかな認識では大和になれません。

我とは、我執であり「落書」の「がき」であります。

私が苦労した。私がやったという「我」ではなりません。一生懸命やっているようにいて無駄になるのは、私の心を改めていないからであります。自分のみなおしめせずに、人のせいに行っているような気持ちではなりません。

お互いに己が己がの我の突つ張り、私の攻撃、私の固まりは、融和を破壊することになります。又協力も出来ず、肉体の患い、事業の失敗等を繰り返す人は、私の固まりであり、己のすることに過ちは無い、正しいのだと信じ、自己を良く見せようとして虚栄心をはり、身の行いにしても無理を通す人は我が強い証拠であります。見ても聞いても言葉にも出さず、見ても見ないふりをして、上品のようでも感謝をせず、我慢をすればそれが正しいと思っている人は、（中略）このような人も私の固まりであります。（七月五日）

「負けまい」と思う。これを「私の心」という。ですから「我」は強いようでありませんが、弱いのであります。なぜ弱いか。「すなお」ではないからであります。火・水・風は「すなお」です。しかも人知人力では計り知れぬほどの力を持っております。その「力」こそ、すなおであります。（中略）日月の運行は待ったなしで、たえず進行のみであります。天地自然の法則を学び修めていく根本は、日月の進行とともに進行するところにあり、ここに、「強さ」と「すなお」さがあるのであります。これに反する心は「我」であります。ゆえに一言で申せば「我」とは天地自然の法則に反する心であります。

怪我という我は、その人に一番不幸である。我が強ければ、その家庭には、いつと

我 我
ふ 四四 八 三
ふ 五二 三 五

我
み 三四 一二 三八六

我
誠 四六 六 一三三

我
命 四八 一二 一七〇

なく怪我をする人が出て来る。あるいは病人が絶えぬ。健康であっても国法の厄介になる人となり、世人に迷惑をかけるような人が出てくる。気の毒だといわれるような人となる。

「会」です。会は「海」です。広く大きなもので、世の人々によくある「宗派根性」を持っていません。

修養団捧誠会と云う会、これは世界一般の会と云う文字を書きますが、会は界なのであります。世界の人類の平和のために修養団捧誠会本部の建設を願うのであります。単なる宗教団体とか、単なる営利のために組織しているではありません。人類の救済の根拠を此処に建設する事を会員の皆様は自覚して頂きたい。

会員の皆様は、神の子であることを自覚して天地自然の法則を学び修めている筈であります。また、人の道として万物の霊長の自覚を忘れていない筈であります。もし忘れていれば、心は動揺転倒しているから、すぐわかる。

会員です。会員は「海縁」です。人は海に育ち海から陸上にあがってきました。海に縁があるので。

み教への精神を實行しようというのが会員の信条である。拝み信心は邪道である。実行することを誓うのである。実行して始めていただくこともできるのである。

本会会員の目的は、迷信を打破し、卑俗なる奇跡の存在を否定し、純真無垢にして動揺転倒することなき天来清浄なる心境を発見することにあることは教典に明記してあります。

身心の迷い（中略）この人心を救済するのは捧誠会会員の役目ではないでしょうか。会員は何を勉強するか―というと、親の使いが出来るようになるためである。

本会の本部旗、並びに支部、おみな会、壮、青、少年部の会旗は、会員同士が、みおしえを信じ教義にもとづいて各自が神の子である誇りを常に忘れず、人の道をおこのうて万人から尊敬、愛される会員であり社会人であることを教え示されているのであ

会 敬 四二 一二 九四

会 振 四四 一 六

会員 ふ 五四 四 二

会員 敬 四一 一二 八三

会員の信条 命 四八 一二 八五

会員の目的 ふ 四二 三 七

会員の役目 ふ 四二 三 七

会員は何を勉強する ふ 三九 四 一九

会旗の教訓 ふ 四〇 七 二

ります。

会員各自は会旗に偽りのない精神を養わなければなりません。そのためには、わが魂を磨き太らせ成長させると同時に、迷信を打破し、卑俗なる奇跡の存在を否定して純真無垢にして、動揺転倒することのないよう、修養実践すべきであります。

特に本部並びに支部、壮、青、少年部の会旗を捧持する人は万人を教え導かれるように努力しなければなりません。ただ会旗を式典に持参して持ち帰るだけの役目ではありません。また、全国会員も会旗の魂を心として生活なさねばなりません。

私が教祖として入魂式を実行する場合には、会員同士がみだりに争いをせず、己を虚しゅうして徳を積み及ぼし、家族を始め職場の人たちも協力して、万人が幸福を生み出していかれるよう……このことを会旗を通して誓いたてまつっているであります。本会の会旗の尊さを心の底から認識するよう心がけて下さい。

（昭和四十年五月二十日 正午 於平和の祈）

暑い夏の次には爽涼の秋が来る。そのように廻転してくるのが自然である。暑さを悩み、苦としてはならない。そこを通りぬけるので、涼しい秋がくる。人生も廻転する。いつも一生涯きびしい夏や冬の日ばかりではない。（中略）ただ、きびしいその期間を、辛抱できるか否か。そこに人の運命がかかっている。

地球は、廻転しております。地球自身も廻転しているし、また、太陽の回りを廻転しております。廻転は交流であります。交流は呼吸であります。春夏秋冬の移ろいも、夜と昼の移ろいも、すべて交流であり、呼吸であります。

万物を尊ぶ……と教えられて、尊重するのあまり蔵にしまいこんでいる人が多い。これは思い違いである。有効に使って世のために役に立ててこそ尊重しているといえる。「もの」だけではない、知恵を力を不動産にせず、お役に立てて廻転して欲しい。（裏表紙）

開店 四六三二六

回 五四三

回 五七三三

廻 三九一九

廻転無限

ふ 四三 九 八

がボウリングの一つの趣旨ですね。
 悩みがあればこそ努力がある。(中略) その努力の中から光明が輝いてくる。夜があれば昼がある。夜と昼との廻転は陰と陽とのつながりであり、男と女の姿であるさとされる。

海洋博

ふ 四九 一 二三

沖縄に海洋博、海洋博という言葉は、すべてこの世の中は我執貪欲を改めなければ成功しない。誠の心で誠を捧げ合ってこそ実現するんです。

改良

ふ 三九 一〇 四八

反省は伸び行くための前進です。改良は思い直して改めることです。

顔

ふ 三八 一二 一五

私は毎日、多くの会員の顔を見ている。その顔はいつも同じ顔立ちである。(中略) 同じ人の顔でも、手触りのよい顔と、手触りの悪い顔とがある。心にデコボコが多いとその顔にもデコボコが現れて、これは非常に手触りが悪い。

顔

ふ 四二 一二 二四

母親が、「いやな心、うれしい心、さみしい心、すべてすぐ顔に出るものだよ、おまへは晴れ着を着て生んだのだから、いつも晴れとした顔であるよう修養しなさいよ」と教えて下さった。

顔

命 四八 一二 一七七

顔は心のあらわれというが、ちよつと鏡を出して見るがよい。目、鼻、口なども、肉眼ではきれいに見えるかも知れぬが、心の眼を開いてみる時は、恥ずかしいことばかりが見えることであろう。まして心の中はどうであろうか。そのような処へ、果して神を客として迎えられるであろうか。

科学

ふ 三五 四 五

よりよい人を造り、社会の組織を作っていくためには、科学と宗教を融和して、人々は自然の法則に基づいて、協力、融和できますように心がけなければなりません。

科学の進化

ふ 三五 四 四

科学は時とともに進化するしておりますが、形のみ向上しても、その形を動かしてゆく無限の力を信じなければなりません。

科学の力

ふ 五一 一二 四

科学の進歩によって武器を作りだし、人を殺すことはできますが、科学によって万物の霊長を産みおろすことはできません。

科学万能

ふ 五〇 九 九

現代の科学万能時代になりますと、万物を尊愛するという気持が薄れてまいりまして、

鏡 い 一八 一〇 二四

天地自然の万物に対する関心さえも少ないと思われず。

神前に鏡を祭り奉る事は大神様の御心をあらわしているものでありまして、全世界を照らし太陽の如く円満の道を実行すると共に魂を磨き、神と人と合一して日常の生活に取り違いないよう信仰すべき事を示されているのであります。

鏡 い 一八 一〇 二五

「かがみ」の中の「が」の字を取れば「かみ」と云ふことばになります。

鏡 誠 四八 一二 一三一

鏡は、太陽であり、地球である。平和の象徴である。国旗の「日の丸」である。

鏡 誠 四八 一二 一四四

み鏡とはなにか。日月の象徴である。円満な姿である。大宇宙の原則は平和であって、円満な明るい浄らかなその姿がみ鏡に象徴されている。

鏡 命 四八 一二 一〇五

親子、はらから、うから、やから協力して、相互の理解につとめねばならぬ。要するにみ教えはみずからおさめ行うべきものである。無理に人に行わせるべきものではない。ちようど鏡は自分にむけて是非善悪をてらすもので、人にむけ人をとやかくいうためのものでないのと同様である。

柿の言霊 ふ 四三 一二 七

「柿」は「かきあがる」に通じる。たおされても、けおとされても、そこで参ってしまわずに、掻きあがつていく気骨がなければならぬ。

書く ふ 四五 一一 二三

上手に書くこうと思わず、神の心になって書いてください。その文字には人が集まってくる。 (中略) 神の心になっておれば、きれいな字を書くこうと思わなくても、きれいな字になってきます。

賭ける ふ 四四 九 七

賭け麻雀はやめなさい。「賭ける」というのは「欠ける」ことであって (中略) お父さんの徳を「欠いて」「いくからぬ」。

火事 ふ 四三 一二 一八

火事は家事。 (中略) 火事で死ぬ人は煙にまかれて迷うてしまう。 (中略) 火事で死ぬ人が多いという現象は人の事ではない、国の事ではない、世の中は余の中己れの心の中を見せられている。

火事 ふ 五二 九 二〇

火事は家事である。政治は一国の家事である。それが火事になっているのが今の世の姿である。

我執 　　ふ 四 五 一 一 一〇

あまり熱中して、あまり真剣になって、かえってそれが無理になってくる。そうしなければならん、ということだけでことをなすのは、我執であります。

我執 　　ふ 四 七 四 一 一六

自分は正しいこととわが意を用いて信じてやっている。俺のやることは正しい間違いないと、これは私の強い我執の心である。素直じゃない。

我執 　　ふ 四 七 五 一 一七

それですからこれほど一生けん命努力していながら、なぜこんな悲惨な立場に追い込まれるのだろう……と思う人がいますが、我執のための行いだからであります。（中略）天借をお返しするために、ご恩返しのための行いも実行もたりないからこういうふうになるのだと、いうような心が湧いてくれば、その地獄のようなどころから、こゝろは極楽への道につながってまいります。

我執 　　ふ 五 一 八 三

言論の自由というのであれば、他自ともに自由でなければなりません。自分の自由だけを先にして、そのあとの残りで他人の自由を認めようというような考えでいては、自由ではなく我執ではないでしょうか。

我執 　　ふ 五 一 九 四

我執にとらわれれば人の生活は乱れ、文化は破壊され、社会の機構に派閥が生じて名誉財産の争いとなり、最後には国の奪い合い、大戦にもなるというきびしいお論しを頂いております。

我執 　　ふ 五 二 六 三

人の事についても、可愛想だからとか、気の毒だからというだけの気持ちでやるのは我執ではないでしょうか。そんなことまでしなくてもよいじゃないか、というような言葉も、自分だけの自己判断ではないでしょうか。

我執 　　ふ 五 二 一 二 二二

すべての動きの心とは心です。心こそ清き神でなくてはなりません。自分さえよければという考えは我執であります。

我執 　　ふ 五 四 九 四

簡単なことでありますが、人の心には疑いという感情がある、人知があります。物事の本質をもっと深く知ろうという心ならよいが、あんな事を言っている、というような疑いの心は、我執でありまして、生成発展には役に立ちません。

我執 　　み 三 四 一 二 三 八 八

我執とは、自己主義、自己満足の心で、神仏を否定したり、尊敬と信頼の足らない心

我執 三三四 一二四二七

であります。(七月六日)
 他人には決して世話になるまい、他人から物を戴くまい等と我執をもたず、世話になり戴いた誠意に対しては、一層忠実に報いる心構えを忘れてはなりません。

(七月二五日)

我執 誠四六 六一〇四

「我執貪欲」でありますが、人が生きていくために「欲」はなくてはなりません。欲は希望であり、この希望を失なってしまうては前進も努力もなくなりません。ここに「我執」の「執」は相手に迷惑をかけることであつて、相手を踏みたおし、踏みつぶすような、そういう心を持たぬように、よく学んでください。

我執貪欲 五五三 二八

積尊の教えは善と悪、善につながるのも悪につながるのも糸である、神経である。悪に進むのは我執貪欲である。我の心を持つので魂が濁つて傷つけば、東西南北が見えない。迷いもがくことは行づまることと諭されている。我執貪欲であつては徳をつんでいるようであつても徳を及ぼしていない。口害が一番公害である。魂が濁つておれば立派な言葉を吐いても口害になり、公害になる。

我執貪欲 五五四 二四

我執貪欲の根は、生きるのみの考え方にあります。活かされている感謝がないところから、俺が、という気持ちになり、内では対立抗争し、外には平和を乱す言動となつていきます。

我執貪欲 五五四 一一一

天地自然の法則のよつて生ずる大極を神として崇敬しております私達は、みおやから魂を頂いておりますし、また、肉体はいのちの親の設計によつて、借物なのであります。それなのに、神を信じず、さらには否定してゆけば、ますます心が悩み、苦しみ我執貪欲が重なつてゆきますのでいのちの親は、魂を磨き清めることに誠を捧げる事こそ、いのちの親に近づくことであると諭されるのであります。我執貪欲というものは、自己を中心に考えることであります。

我執貪欲 三三四 一一七

幸福の道を知りながら不幸に落ちて行くのは、我執貪欲が災いを起こすのであります。

(二月三日)

我執貪欲 三 四 一 二 三 三 五

徳を積み重ね、徳を及ぼすことも、小さい所から実行して大きくせねばなりません。一時に大きく積もうとする心は我執貪欲だと思えます。初めから大きく積んで大きくなった所で、土台が崩れてしまえば元も子もありません。(六月十日)

我執貪欲 三 四 一 二 四 六 七

親子だけでなく、万人皆、我執と貪欲がどんな場合においても正しい美しい生活を破壊するということを思わず、無関心でいる人が多い。(八月十三日)

我執貪欲 三 四 一 二 五 一 六

人は神の子であり、万物の霊長であります。心の中は我執と貪欲で迷い苦しみ、妬み、恨み、僻みの卑しい気持ちで絶えず働いております。それは何故でありましょうか。人の生活は人が法律を作り、人と人との争いから、切ったり切られたり、たおしたりたおされたり、騙し合いをして、権力の争い、富の争い、生命を奪い倒そうとしての争いを起こし、強い者は天下を取り、弱い者は敗残者となり、勝てば幸福であり負ければ不幸であります。(九月六日)

我執貪欲 三 四 一 二 五

簡単に説明すれば、人を足場にして、自分が渡ろう、誰が云うたか知りませんが、人のふんどしで角力をとるとか、人の財産を当てにするとか、色々な言葉があります。結局人に負ぶさって、そして楽をしようとする事、それは一時は同情で許される事もありましょうが長くは許されずまい。長く御付き合いは出来ません。苦勞も、楽しみも、共々味わう処に親しい交わりが出来るのでありましょう。

我執貪欲(無駄苦勞) 三 四 一 二 三

どんな人にも親はある筈です。家庭もある場合が多いでしょう。一人だけで生きている筈はありません。親があれば親に、家族があれば家族に、理解を求め、協力して頂くことが大切なのに、自分一人でやってしまうのは、やっているようであっても我執貪欲であって、無駄苦勞が多い。

拍手 三 四 一 二 四

天地自然の法則にもとづく四つの交流は、一に健康・二に家庭の円満・三に職域の発展・四に物質に恵まれる、この四つが一つになって四合せというので、拍手も四つ打つのであります。無条件実行をいたしますという誓いのために、四回、手を打ち四方拝をすることが諭されております。

我心強き人 命 四八 一二 二九二

品物の置場所などをたずねられたとき、知らないから「知りません」と答えるのは正直のようであるが、一步進んで探してあげるようにしなければならぬ。知らないと言いきつてしまうのは誠たらず、我心強き人である。

風 ふ 四五 四 九

風は力であり声である。

誠の心には裏も表ありません。水にも火にも風にも裏表は絶対にありません。水は智慧であり、火は愛情であり、風は元気であります。

風 命 四八 一二 五二

風は言葉である。気が強く言葉が荒いと風の災いにあうことが多い。

台風は誰も待たねど吹いて来て すべての人をいましめてゆく。

しかしその風も福（吹く）をもたらすものとも考えられ、また下をむいて拭く（吹く）意味から低い心を教えるものとも思われる。

風邪 ふ 四〇 八 一六

約そくを常に守らず怠れば 気管をなやみ風邪をひくなり

風邪 太 四四 一一 一一五

「二月は気候の変化激しく、波乱の多い月です。不平の言葉を出したり、ひがみ、ねたみを持つ人は風邪をひきやすい。不平を思うてもならないし、口に言うてもならない。風邪はフーフー、夫婦である。今の世は口と腹とが違っている。よく確認して浄化していくこと」

風邪をひくのは身体が冷えるからである。どういうわけで冷えるか、理由はさまざまだが、まずその心がけを考えてみる必要がある。一本調子の人、私は正しいのだ、悪くないのだと自己を省みることもなく、非常に心のせまい人が風邪をひき易い。かかる人の心は、すぎだらけであるからだ。相手を温い心で許してあげるといふ、広い温い心になれば風邪はひかない。人の欠点を許してあげようになれば風邪もひかず、ひいたとしても癒りが早い。

風邪 命 四八 一二 一二九

神即ち「か」は太陽の熱であり、「み」は無限の尽きることない水であります。太陽

風（空気）

導 三四 一〇 一七

の熱も水も無限であります。太陽と水の回転によって空気が発生即ち生れて参ります。

火水風は天地のお恵みなのであります。これ即ち神と教え給う。

固い心

命 四八 一二 四一

大地の如き心であれば大地にものが生育するように心がのびてゆく。固い心は水や肥料を吸収できない岩石と同じである。石の上に石を落せば弾ね上る。柔い土の上に石を落せば穴があいてはいつてゆく。大地は草木を成長させる偉大な力を有している。その大地の心になれば徳もつめるのである。

固いと頑固

命 四八 一二 二七三

固いとは融通のきかないことをいう。頑固とはおれがおれの我を張り、自分がいなければ何事もできないというような気持をいう。

肩書き

ふ 四〇 七 一六

総裁といい、副総裁といい、会長というのは姓名ではない。孝行を万人に示すための碑には肩書きは無用である。肩書きのあるのは人の社会だけである。天地自然には「肩書き」はない。(中略) 松も杉も草も、ありのままに伸びている。ありのままの姿が「まこと」である。

肩書き

ふ 五二 九 二〇

天地自然には一片の肩書きもない。日月星辰にも、松竹梅にも肩書きはない。肩書きなしでありのまま伸びている。

肩書き

敬 四二 一二 一一二

肩書きのあるのは人の世だけである。また、これが通用するの人も人の世だけである。天地自然には肩書きはない。月にも太陽にも地球にも星にも、名はあっても肩書きはない。松も杉も一片の肩書きも持っていない。「父母恩重」と大書を刻みこんだ巨大な碑石も、肩書きを持たずに厳然と立っている。万物はありのままの姿で、ありのままに伸びて、ありのままに位して人のお役に立っている。ありのままの姿が誠である。形にとらわれるということですが、形は形ある物から生れたものではありません。無の中に形が存在するのであります。

形あるもの

ふ 三五 一二 四七

形あるものは借り物であることを理解するならば、多少でも争いはなくなるのであります。借り物の自覚が出来ない人が多いのであります。

形ある物

み 三四 一二 六九六

如何なる人も努力をして働き、得た物は我が物であるという強い心、念がある故に、借り物を自覚すること等は教えられても信じられません。(十二月二日)

かたわ

ふ 三九 五 二三

五体のそろわない人を「かたわ」と呼ぶ。我々の日々の生活においても、「神の道」

と「人の道」とを合わせ行つて始めて完全になる。「人の道」だけでも「神の道」だけでも「かたわ」である。

肉体の糧ばかり十分であつても、心の糧を忘れておれば、それは「片わ」であつて、完全な姿とはいえない。

生きることにみに全力をあげて、活かされている大恩に報いるところがなければ「カタワ」同然の人生であります。

いのちの親は、人の道の衣食住だけでは片輪なりということをとさとされた。生きるのみの行動は片輪なり、生きて活かされるといふことは生活である。

不具とは手足の悪い人だけではない。心の片輪があるのである。片輪の気持を両輪にするために修養があるのである。

片輪とは身体障害者だけではない。心の固い人もまた片輪である。近ごろよく「勝ちとろう」といふ言葉を目にしたり、耳にいたしますが「とろう」といふ強い心がもえあがつております。「とろう」といふことは「ふんだくろう、奪いとろう」といふような心であります。それでは仇き同士になつてまいります。

吾々は「我執」の為に闘うのではない。活かされている大恩のために、勝ちぬくのである。生きていくために、勝ちぬいていくのである。

「勝ちとろう」といふような我執貪欲を持たず、勝ちぬいていってください。「取る」といふのは「ふんだくる」といふ貪欲であります。勝ちぬいていくのは、天地をつらぬく誠であります。同じ争いでも貪欲と誠と、いずれが勝つか、天地自然の法則によれば、誠が勝つのは当然であります。

勝敗は時の運等と言つて居りますが、常日頃の積徳と天地の法理をあやまらず、終生の奉仕を實行した時に勝ち抜かれるのであります。(九月十六日)

常に万難を乗り越し万事に勝ち抜いていかねばなりません。同じ勝ち抜くことにしても我執貪欲ではなりません。万人の幸福をも基とし、生活の基礎を立派にし、改善し

かたわ ふ 三九 六 三

カタワ ふ 四五 九 五

片輪 ふ 四七 八 一五

片輪 命 四八 一二 一六五

片輪とは 命 四八 一二 二八一

勝ちとろう ふ 四七 五 一三

勝ちぬく ふ 四〇 五 二五

勝ちぬく ふ 五三 五 二

勝ち抜く み 三四 一二 五三六

勝つ み 三四 一二 三七四

勝つ 訓 一九 六 五三

ていく為に地上天国を作り、正義の為に勝ち抜くことでなければなりません。
(六月三十日)
金力と体力と能力と天地の無限の力が相和するところに、勝ち抜くことが出来るのであります。

確固不動の精神 解 二八 二六

日月の如く・水の如く・美しく・暖かい・搦き立ての御餅の如く、広い・やさしい・素直な心である事を申すのであります。第九条のさかしまの心を起さずと云う、「みおしえ」の心構えと同じ意味であります。鉄の如く岩石の如く、堅い・ゆるぎない心ではありません。

確固不動の精神 命 四八 一二 一六五

低い心が無ければ、どんな人とも心を合せ行うという合掌の姿は生れないし、力も授からない。低い心から生れる力こそ底力であり、確固不動の精神である。

確固不動の精神 命 四八 一二 一八四

確固不動の精神とは、日月の如く、水の如く、美しく、暖かく、搦き立ての餅の如く、広い、やさしい、素直な心である。鉄の如く岩石の如く、堅い心を用いのではない。また高い心はいちばん不安定である。どんと落されればもう立ちあがれない。低い心こそ確固不動である。

合宿 ふ 四一 一〇 九

「合宿」は「合掌」である。心身の合掌である。(中略) 「身心の合掌」によって無から有が生じる。

合掌 か 四四 四 五六

合掌すると右手と左手と十本の指が一つになる。二つの手が合掌すれば一本の筋、それが六という字の中の一の姿であります。この六が重なるとむつまじいことが重なるというのは貴方もこちらも睦まじくであって、皆が互いに合掌であります。

合掌 ふ 三八 一二 一六

心と肉体が一つにとけ合った姿が合掌である。

合掌 ふ 四〇 三 一五

生活のあらゆる場に合掌の姿が現われて、始めて平和の礎がきざされるのである。

合掌 ふ 四〇 七 一八

いやいやではなく、仕方なしではなく、喜んであげられる、喜んでもらえる、ということ、心と物と身体と合掌であり、平和の基礎である。

合掌 ふ 四一 一一 一〇

「合掌」は無上の感を表している。

合掌 ぶ 四六 二 五

合掌は、天地が、夫婦が、男女が和合していくための合掌であって、事業が栄えるように、病気がなおるようにと願って合掌するのは「我執貪欲」のための合掌であって、そのようなものではありません。これは無知、盲信であります。

合掌 ぶ 四六 二 六

合掌は調和であります。

合掌 ぶ 四六 七 六

合掌は天地の理法であって、祈り、いいのり、すなわち「のり」（法）に従うということであります。天地自然の法則と合掌した行動する。

合掌 ぶ 五〇 六 三

今日のみおしえにあります通り、合掌は平和を築くための教訓です。

合掌 ぶ 五五 五 四

手の五本の指の隣り同士の腹と腹は合いませんが、親指だけは、どの指とも腹と腹が合うのであります。これを合掌と申します。両の掌を合やすのも合掌ですが、親の腹に自分の腹を合すことも合掌であります。すなわち、いのちの親のみ心と、私達が頂いている魂とが合一することあります。清き神と、清き魂とが合体することあります。この合掌をぬきにして、木仏金仏の前に手を合わせて、大難が小難、小難が無難、家内安全、商売繁昌と祈っても、それでは迷信でありましょう。

合掌 み 三四 一二 五五三

うれしい時も悲しい時も、心の持ち方、使い方を動揺転倒しないようにすることが合掌でありまして、常に神慮に合一していかれるならば、人に悪説を流されたり、どんな不幸に追い込まれても、その環境に順応して、その日の生活が笑って、歌って、忠実に励み行われるのであります。（九月二四日）

合掌 み 三四 一二 六五一

宗教人が常に合掌することは、天地合体、万物一切の和合を示し、相協力して円満にことなすことを教えられ、実行しているのであります。（十一月十日）

合掌 訓 一八 八 五七

手を合わせる以上には、その時のみでなく、日常の生活に心と心を合掌する即ち相談して事に当たり、高き、卑しき人も、無条件の信念で上下一致して、忠實に業に励み学を修め、精神的にも事業的にも、合掌して行くべき実行を、大神様の前で毎日の如く誓って生活するのが神国に生まれた神の子としての使命であります。

合掌 振 四二 七 二

両手を合わせて、合掌する事なども、困るときの神頼み、只宗教的な儀式としてのみ

合掌

誠 四六 六一四

行うものではありません。合掌は生活であり、協力であり、平和であり、万物一切、和をもつて、実践すべき事なのであります。

合掌

誠 四八 一二 四二

合掌は、わが幸福を願うだけの個人的なものであつてはなりません。広く大きい意味のために掌を合せるのであります。社会的に、国家的に、世界的にまとまつていくように、修めていくように合掌するのであります。

合掌

誠 四八 一二 四五

一般に、これを「語呂あわせ」といいます。語呂あわせは「合掌」であります。天地自然の法則もまた「合掌」であります。これよりほかにありません。「独唱」でなくて「合唱」である。自然は「大合唱」です。いろんな声が聞えてくる。声なき声も聞えてくる。

おたがいに、もちつ、もたれつであります。「合掌」は「まつりごと」である。「まつりごと」は「合掌」である。天秤棒にたとえれば、前も後ろも、同じ重さでなければ調和がとれない。「合掌」にならない。(中略)「心と身」とは「物心一如」といいましても、今の時代は、お金のためには命もいらん、地位と名誉を獲得するためには、法を破つても……というこの心を浄化していかねばなりません。

合掌

誠 四八 一二 二四

壮年時代は人生の中心である。ものにすれば「中庸」である。「中庸」というのは、例えば天秤棒のようなもので、前が重ければ前がさがる。後ろが重ければ後ろがさがる。前と後ろが調和とれなければならん。この前と後ろとの調和、——これ「合掌」である。この前の綱領に「物心ともに救済していく」とありました。物心ともに健全に恵まれるのは「調和」である。これを「まつりごと」ともいう。

合掌

誠 四八 一二 一七〇

お金も物もなくてはなりません。生きるためには、なくてはならぬ金であり、物でありますけれども、心と身体と金と物と、その動きに調和がなければ、「合掌」とは申せません。平和建設とはいえません。ですからまず第一に「心の交流」「言葉の交流」であります。

合掌

導 三四 一〇 一六

掌を合わせる事は天地のお恵みを頂いております恩恵に感謝する事なのであります。

合掌 命 四八 一二 二三八

頭を下げる事は人の恩恵に感謝する事でありませう。

合掌 命 四八 一二 二六三

両手を合せることは、一身同体の教訓である。困った時の神頼みで手を合せるのではない。両手を合せることは、心と体を一つにし、真心に合致することを現わすしである。頭をたれることは、万物に敬意を表する。人の恩恵に敬意を表することである。み鏡の前に、神社の前に、み仏の前に、頭を下げるのは、大難は小難、小難は無難と願うのではなく、一秒一秒、一日一日を活かされている、その尊さに敬意を表するのである。心の底からお礼を申しあげる気持が、頭を下げ、手を合せることとなるのである。

勝手気まま 命 四二 八 七

自分の徳の分量をわきまえず、働きもせずに楽をして求めようとする勝手気ままから最後には罪人となって苦しんでいる人も多く見うけます。

活動 い 一八 一〇 五

殊に神様は間断なく夜となく昼となく活動しておられることを悟らねばなりません。人も高位高官の身分の者から、谷底に生活しております賤しき人に至るまで、皆活動して行かねばならぬ使命があるのであります。

糧 ふ 四一 九 六

お話を聞くのも、食物を頂くのも、共に糧（かて）であるということに於いては同じである。お話しは心の糧であり、食物は肉体の糧である。この糧が蓄えられてあれば「勝て」る。（中略）勝つためには糧を頂き、心を強く大きく育てておかねばならぬ。

家庭 ふ 三九 七 三一

家庭は安息場所や職場ではなくて教室だと思つてはなりません。

家庭 命 四八 一一 一〇三

家庭は縁のつながりの者が相つどい、相信じ、相和し、親しみをもって協力をする小さな団体である。そこには指導者、すなわち責任者がありこれを長という。長になる人は指導者であるから周囲から尊敬されるような行動をせねばならぬ。だから徳を積みまねばならぬ。

家庭 命 四八 一二 一〇七

一家において長を敬い、幼を慈しむべきことは理の当然であるが、これを人体でいえば肉体は家であり、心はその長である。一家の長も両親であり、肉体の長も良心である。

家庭円満 命 四八 一二 二七二
家庭円満 命 四八 一二 一四六

家庭円満は家族がたがいに尊敬と愛情を捧げあうこと。
家庭が円満でないのは、たらないたらないと不足をいい合うからである。そして、不足を相手のせいにするからである。(中略) 不足の点を身に引きうける人こそ、将来、大成する人である。

家庭浄会 ふ 四〇 六 一七

家庭浄会の主旨は、「綱領四」である。家の長を中心に、つながりのある人、恩のある人々に集まって頂く報恩、感謝の集いである。

家庭浄会 振 四二 三 二

支部の主催及び家庭主催の浄会について又支部主催の浄会、家庭における供養浄会、(昭和四十二年四月一日からは敬霊祭と称す)感謝浄会(昭和四十二年四月一日からは謝恩会と称す)等についても、従来思い違い、取り違い、感違いの点が多々あり、醜い場面が沢山ありました。それを見る聞く度毎に、皆様に協力していただき、本会の趣旨に反することなく、相互に堅実な行動をなし、平和建設のために努力しようと、度々その事実を具体的に教え導き育てて参りました。全国会員同士の心の摩擦、言葉の交流などにつきましては聞き違いをしたり、また我が意を用いて勝手に事を行ったり、取り違いを人に教えたりしているようなことが数々ありました。

勝てない 敬 四一 一二 一三六

お話を聞くのも食物を頂くのも同じく、「糧」である。お話は心の糧であり、食物は肉体の糧である。「勝てない」というのは「糧てない」に通じ、それは心の糧がなくなっているということである。人生に勝つ、困難に勝つ―全てに勝つていかねばならない。勝とう、勝とう……という心は下等な心である。(中略) その心はいやしく下劣である。

下等の心 命 四八 一二 五九

人を疑う心は一番下等で役に立たぬ心である。疑えばかならず迷う。迷うことは心の闇である。疑いの心を持たぬようにするのが修養上重要なことである。

悲しい時 敬 四〇 一二 三五

悲しいときは親を思え

金 ふ 四三 七 八

金(かね)という字を分析すると、人、ニ、八、一、一となる。これを読んでみると「人には辛抱が第一」となる。逆にいうと「人には辛抱が第一」とはすなわち「お金」

鐘 敬 四一 一一 一二九

である。

鐘は「御恩」の教科書だよ。鐘の音は、ゴーンと鳴る。それは天地の御恩を忘れるなよ、というひびきである。その鐘を铸つぶすというのは、国が亡びる道を国がわが手で作ることにはひどいではないか。考えてごらん。ご恩あればこそ「いのち」があるのだろう。ご恩なくなれば「いのち」がほろびるではないか。

鐘の音 ふ 五二 二 二

鐘の音は、ゴオン（ご恩）、すなわち、大恩であります。大恩によって万物が活かされているということ、このことを心からさとり、我執貪欲を滅すること、自分一代ではできないことであれば、その努力を子孫に伝え、我（が）を残さないようにしていくことの責任を自覚しなくてはなりません。

金の念 ふ 四四 三 九

一枚の札（さつ）には幾千人の念がしみこんでいるか知れない。競輪、競馬などに「しまった…」という念もこもっていよう。泣きの涙で質屋から受け取った念も入っている。

私の言葉 ふ 三八 一一 一三

「我」（が）の言葉がでるのは、「が」の心があるからである。（中略）今は現れなくても、心を持っているものは、いつかは言語にも動作にも現われてくる。肉体のわずらいにしても、「この手が悪い」「この足がわるい」、この鼻が、この胃が…とみな「が」を使っている。（中略）私は（和）、この人は（和）、この手は（和）と、「和」の精神にたっていると、自から言葉も「和」になつてくる。

花瓶 ふ 四五 四 一〇

——花瓶は過敏—敏感という言葉である。親として子供のことに敏感でない人はありませんが、子もまた神の子であるという自覚にたてば、過敏にとりこし苦労することはない。

我・不 ふ 五六 一一 三

「我」は、病のもとになります。また、不平不満の「不」も、病のもとになります。魂が濁ってまいりますと、みしらせをいただいて、反省せよ、感謝せよ、神の子の自覚をせよというように教えられるのであります。「我」も「不」も、魂を濁すものであります。病というものには、心の持ちかた使い方が重大な影響を及ぼします。

兜 ぶ 三九 七 二七

「兜」は「株太」である。株は永久に株であつて土中にあり幹にはなりません。土の中で太くなるのですね。涅槃の「ね」に通うものです。

がまん ふ 四〇 一〇 一五

「真捧」と「がまん」とは全く以て非なるものである。「真捧」は文字に示される通り、いかなる環境にあつても、まことを捧げて通ることである。そこには喜びがある。感謝がある。「がまん」にはそれがない。例えていえば、にぎりこぶしのようなものである。我執の凝り固まりである。

がまん ふ 四四 一二 一五

「がまん」は我執である。

がまん ふ 五一 一二 二四

がまんな心は開けない。がまんは無理ですから、利は出てこない。

がまん 敬 四〇 一二 一九

握りこぶしのような固いこりかたまった姿である。歯をくいしばつて耐えているだけである。

我慢 い 一八 一〇 二五

我慢の心は己一代が通れても二代は続きません。

我慢 ふ 五一 一五 一

我慢でなく誠を捧げる辛抱でなくてはならない。

我慢 ふ 五一 一六 四

我慢ではゆきづまる。

我慢 命 四八 一二 六九

我慢、辛抱、忍耐には無理がある。

我慢の心 い 一八 一〇 二五

我慢の心は無理な心であつて何れにせよ必ず時節が来れば破壊され取り返しの付かぬ境遇になるのであります。

神 い 一八 一〇 七

神の心が白紙の姿のようだと申しますと、白紙に表裏があるように、神様にも表裏があるかと申しますとそうではありません。神様は裏も表もなく、神聖なものであつて全知全能であります。(中略) 人々が魂を磨く勉強を十分にして、善と悪との道をよく悟り、神様の御心を悟つた時に神の心の姿が白紙と同一に悟られてくるのであります。人には一日も早く神様のお心を悟るまでに、辛苦艱難を実行致さねばなりません。

神 い 一八 一〇 三六

神様は実行と感謝との以外に受け取る道筋はないのであります。信仰なき人は実行も感謝も少なく、時に依れば、知らず知らず神様からも人様からも嫌われて行く場合があります。又信仰しながらも取り違い思い違いから信用を失う事があります。いつも

過ちなき様、神も人も喜ぶことを実行しなければなりません。

神は万物普遍の霊であり、人は天地経緯の支配人であることを信ずるものであります。

長上という。長の上は「神」であって即ち神は「長の長」である。長はまた「腸」である。「腸」は全てを受け入れて消化吸収していく。そこに「長」の姿が示されている。

宇宙の森羅万象ごとごとく、絶対の神の力によつて生成発展しているのであります。

(中略) 万物を生み、これを成長させるのも殺すのも神の力ではありますが、看護人の不注意のため成長すべきものが枯れてしまう場合もあります。

世の中には「私は信仰しているから神がついている、神がみちびいて下さる、神が守つてくださる…」といつて、人の道も行わず、誠のみちも踏み行わず、魂をみがこうともせず、自分勝手な信念をふりまわしている人があります。これは非常な思いちがいでもあります。神はその人の働き行いを計つて、それぞれの分に応じてご守護くださるのであつて、決して不公平ではありません。

神は万物普遍の霊であり、人は万物の霊長であることを教えられ、ここに信を置いていくならば、ただ生きるばかりでなく、活かされている大恩の尊さを忘れてはなりません。

神は命の親である。私たちはその子である。

神の子だから苦労させないのが親じやないか——と理屈をいう人もありませんが、神は道を作らずして、その道を通れとは申されません。ちゃんと道を作つて、その道を通りなさいと教えてくれています。その道が、あまりにきびしいゆえに、それに堪えることができないのであります。

大宇宙は神が産ませ給うた姿であります。大宇宙は太極であり、いのちの親であります。本会では、この太極を神とあがめ、崇拜しておりますが、太極は大宇宙の中心であります。

だるま山は人が作った山ではありません。だるま山ばかりではありません。自然は人

ふ三八 一 二四

ふ四〇 五 二五

ふ四二 六 九

ふ四二 七 七

ふ四三 二 三

ふ四四 一 一〇

ふ四六 一 八

ふ四九 八 三

ふ四九 一 二 五

神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
み三四	み三四	み三四	み三四	み三四	み三四	み三四	み三四	み三四	み三四
一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二
六二一	五七九	四三八	四二六	一六二	五四	二	五	二	三
神は陰であり 仏は陽であります。 即ち神は天であり 仏は地であります。 天地和合した	神は命の親であり、 父母は神を通じ 生き証人として 神のみ心を受け つぎ、名代とな つて子を産み育 てる責任があり ます。それ故に 孝は百行の基で 、親に孝養を 尽くす子は万人 から尊敬し愛さ れ、仕合わせに なつて参ります。 (七月二五日)	神は万物不変の 霊であります から、先の先迄 見通して、人類 平和の基礎を 築きあげてい かれるように、 時代に応じ変化 の起る度毎に 聖者を現わし、 その役割をする 人を産ませ、何 もかも都合良く していられます のであります。 (七月三一日)	神は誠であり、 万物不変の霊 であります。 (三月十九日)	神は誠であり、 万物不変の霊 であります。 (三月十九日)	神が万物を成長 させ、特に人を 産ませ給うて この世に活かさ れております ことは、人種、 国籍、信教を 問わず、地上 天国をつくり、 争いを滅し、 仲良い生活が 営まれていく ことを望んで いられますので あります。 (一月二七日)	神は誠であり、 万物不変の霊 であります。 (三月十九日)	神は命の親であり、 父母は神を通じ 生き証人として 神のみ心を受け つぎ、名代とな つて子を産み育 てる責任があり ます。それ故に 孝は百行の基で 、親に孝養を 尽くす子は万人 から尊敬し愛さ れ、仕合わせに なつて参ります。 (七月二五日)	神は誠であり、 万物不変の霊 であります。 (三月十九日)	神は誠であり、 万物不変の霊 であります。 (三月十九日)

無限の徳、愛、力を神仏の慈愛とも無限の力とも言うのであります。(十月二七日)

神の子として生み下ろした以上には必ずその本分を実行して居れば、決して苦しめさしたり、与えないと云うようなことは無い筈であります。

神の力は目にも見えず、手にも取れませんから、神の力だ、神の恵みだと申しましても、そんなことはないと思う人が多いのであります。神の力より人の力の方がよく分りますので、どうしても人の力の方に重きを置くようになります。(中略) 神を念じ救いを求める時は人の力ではどうすることも出来ず、神より外にないと信じますが、その時は少し遅いのであります。然し神は絶対のものであり、大悲大慈の所から必ずお救い下さることは間違いないのであります。その最後の時は人の力ではどうすることも出来ないであります。

神は全知全能であり絶対のものとして教えられ、その真理は親心とも考えられて居ります。

神は命の親で命をつかさどって下さいますから生命だけは人の親が如何に努力致しましても死すべき人を生き延ばす事は出来ません。即ち人の親は養育して行くだけではありません。

神は大宇宙を作り、人を作り、又人を生かして行く為にありとあらゆる物を作つて下されてあります。

地球を始め出したのは、神より(紙燃^{かみぶ})始め出したので、是こそ「かんじんより」始めるのであります。かんじん要の神を中心に始め出す事を忘れがちであります。神は本であり、根であり、人の心の働きより始めだすのでありますから、人の心が取り違い、間違いますと神の御心になして居る事になりません。人の心の取り違い間違いが、迷いとなり、疑いとなれば、人生は闇であります。心が病めるのも、肉体が病めるのも、神を中心に信じて行けない為に病み患いをするのであります。

無限の空気と光と熱と水とを供給して報いを求められない「神」——私はその「神」

神 訓 一八 八 二四

神 訓 一八 八 五四

神 訓 一八 八 六三

神 訓 一八 六 一四

神 訓 一八 六 三〇

神 訓 一八 一二 一二

神 敬 四〇 一二 一三七

神 敬 四二 一一 九三

の声をお取り次ぎしていく使命を持った、いわばお使い人である。

神は万物普遍の霊でありますから、火・水・風にも万物にも霊があり、声があります。この「声」すなわち「音」は「温」であり「恩」です。万物の発する音はすべてこれ「言霊」であって、この「言霊」が「みおしえ」です。

大極、神は独り捧誠会だけの親ではない。地上万物の親である。こう考えてみれば、みおしえの広さと深さとがよく理解できよう……と答える。

万物普遍の霊が神の存在であるならば、万物を尊敬、愛し、万物に奉仕しなければなりません。

神 誠 四八 一二 三八
神 太 四四 一一 三二

神の存在を信じなければ、神の子であるとは思えません。神とは「いのちの親」である。神とは「万物普遍の霊」であります。霊は零であると、この書の初めにも申しいていますように、零は○であって円であり、無始無終のことわりを示しているのであります。起点なく終点なく、無限の循環であって、生と死とはそれでありです。生といひ死といひますが、本来は生もなく死もなく、ただ永遠のいのちがあるだけであります。

神 導 三四 一一 一七
神 捧 二四 八 五

神即ち「か」は太陽の熱であり、「み」は無限の尽きることない水であります。太陽の熱も水も無限であります。太陽と水の回転によって空気が発生即ち生れて参ります。火水風は天地のお恵みなのであります。これ即ち神と教え給う。

「神」という文字は「示」シメス、「申」モウスと教えられて居ります。総ての生物は天地の法理に依って生れ、成長し、この世を去り是皆天地の法理に基づいているのであります。

神 命 四八 一一 五六
神 神 (かみ) 四 一〇

神とは万物を成長させ、永遠に活かしてゆく力と慈悲とを持った、肉眼では見え、掌に握むこともできぬ無限の尊いものである。人はこの力により慈悲により生れ来たものであり、神の子なのである。(中略) 天地自然の法則とは、地球の運行で、この地球を回転させてゆく力、これも神の力である。

「神は上(かみ)にして、上(かみ)は神なり」とは私の信念である。上(かみ)――

「かみ」とは「火」（か）と「水」（み）である。火と水とは天地自然そのものであって、誰のもの、彼のものという所有権がない。（中略） 世界全人類のものであることが明らかである。

神池と森の川 四九 一二 二五

伊豆半島の西側、駿河湾に向かって突き出した大瀬崎にある神池と、沖縄の森の川（宜野湾市にある泉）とは、地下のつながりがあります。真清水のつながりです。

神里 五二 一二 七

形あるものをお祀りして、両手を合わせて助け給えと縫ってくるような教えは、捧誠会にはありません。修養団捧誠会にあるのは、実行致しますという誓いであり、達磨山の悠久世界平和郷が神里と命名されておりますのは、この誓いをする里であるからに他なりません。いのちの親が、このような主旨で命名されたのでございます。

神里 五二 一二 二五

神里というのはすみみおやのみまえという事です。全世界到るところ、すみみおやのみまえであるといつも話しています。（中略） 今までの宗教のやり方には誤ったものがあります。それを、強く正しく打破してゆく信念のある人を育ててゆく使命があるのが神里です。（中略） 偶像の崇拜を打破し、霊山富士を目標に濁れる魂を磨き浄め、悠久世界平和を建設する場が神里であります。

神里 五三 五 五

迷い苦しんでいないで、無常の感謝の誠を捧げていかなる艱難辛苦も神慮の試練として迎える境地に到ることを誓う場所こそ、神里なのであります。神が現わした霊峰富士の姿の前にお誓いするのであります。

神里 五三 七 二

神里とは、自分の心を浄め、誓う所でありまして世上一般の神社仏閣のおまいりではないのであります。己の心を浄めて誓う、その信念と信行（しんこう）こそ悠久なのであります。ややもしますと苦しい時の神だのみと言い、あるいは仏にお縫りすると申しまして、助け給えと手を合わせる姿もあります。しかし、もし事が思う通りにまいませんと、こんどは神も仏もないという気持ちをもったり、そこまでいかなくとも、あっちのお寺、こっちの神社というように迷い出すような姿もあります。

神里 五三 一一 二

昭和五二年十月十日、静岡県伊豆国立公園ダルマ山聖地において天地自然の法則に基

神里	ふ	五三	一一	四
神里	ふ	五四	一一	一
神里のお守りと神里の信念	ふ	五三	四	二
神里の環境は	ふ	五三	七	二
神里へ交流する目的	ふ	五四	四	三
神様	訓	一八	八	四

づき、悠久世界平和郷の、神の道たる入魂式と人の道たる竣工式を一体として挙行了しました。同日はいのちの親のお諭しによって神里と命名され、今日はちょうど一周年をお迎えいたしました。

神里は、天地自然の法則に基づいて、万霊万物尊愛を誓い、不平を思わず語らず、憎しみを持たず持たさず、対立することなく、万人が団結、協力、融和して、悠久世界平和建設運動の大道に向かって行進し、進行をお誓いし練磨する聖地であります。

神里と命名されました聖地に、万霊万物尊愛の精神に基づいて、悠久世界平和郷が授けられましたが、これは、いのちの親から授けていただいたと同時に、法律に適用して、修養団捧誠会という団体に認めて頂いたものであります。

悠久世界平和郷は神里と命名されております。この神里をお守りするには無条件でなければなりませんのであります。ソロバン勘定もなく、人の感情もなく、無条件であります。我執食欲はさらさらありません。ひたすらに、いのちの親のみ心にお報いするところにあるのであります。

私どもが活かされておりますのは無条件であります。日月は黙々として天地を照らし、光と熱を与えて下さっております。神里をお守りし、神里におまいりする気持ちは無条件であります。無条件にみおしえに基づいてゆかなければなりませんのであります。

この無条件にみおしえに基づくということから強く正しくという信念が生まれる。これが神里の信念なのであります。

神里の環境は、神郷、であります。

「神里へ交流する目的は神の子としての己の魂を磨き浄めることにあり」であります。神様がついて居て下さる、神様がやって下さると云うような浅はかな考えを以って、自分自身は人としての道を行なわず、誠の道も通らず、この位はよかろう、あの位はやってもよいだろうと、自分勝手な考えを發揮して行くようでは、何時までたっても魂を磨くことは出来ません。神様は其の人だけの働きによって、御守護を下さるので

神様の御心に叶う 一八 一〇 二六

あつて、決して不公平ではありません。

神の道には競争がないので自然の法則は公平であります。即ち人には神様から授けられただけのことを誠心からしていればよろしいので、早いとか遅いとか云うような授けられたものに就いて、恥しいと云うことはない筈です。神の子として生まれ世に立つて向上してゆくためには、神の心と同一な心持ちで恥しい事なく若し恥しいと思うようなことは心を取り直し、取替えて心のよごれを洗い清め無限の光り輝く太陽の如き精神を以て、日常生活を実行することが神様の御心に叶うのであります。そこには決して恥しいとか、きまりが悪いとか云うようなことはないのであります。

神と共にあり 四一 一〇 八

「われ、神と共にあり」という自信に満ちあふれておった。こわい、恐ろしい、という心が起らなかった。

紙と糊 三九 一 一四

紙(神)は糊(法)で一分一厘の隙間もなくついている。(中略)我々は「法」を「糊」(のり―法)として、神(紙)にぴったりと心をつけて一厘一毛の隙もつくらなければ、迷いも動揺も生じない。雑音を耳にしたり、見にくい様を見せられて腹をたてたり不平不満を持つたりするのは、心が神にピッタリついていないからである。

神と人 四四 一二 一五

梁(ハリ)は針である。ゆえに神と人とは、針と糸との関係である。針の動きのままに糸がついていく。

かみなり 四七 一二 九

かみなりは、神成る。

神に通う心 四三 六 九

神に通う心とは、どんなことをいわれても、見ても「ハイ、そのとおり…」といえる、思えるような心である。神の心に通わねば、人の心にもかよわない。

神に仕え仏に仕える 三四 一二 五〇七

生物には男女があり、和合し協力し、苦しみも悲しみも喜びも話し合い、仲良くすることが天地の理法であります。其の理法に基づいて生活することが神に仕え仏に仕える真実なのであります。(九月一日)

神に不忠実 四五 三 一三

――汲めども尽きぬ宝である――ということをも命の親は私たちに諭しているのであります。

神に不忠実 五五一 五 五

その宝に不平を思い、不満を思い、怒りを持ち、嫉妬心を持って、毎日その宝を汚しているということは、まことに命の親に対して不忠実ではないでしょうか。

魂を濁してゆく。魂を尊敬もせず、愛しもせず、傷つける。これは神に対する不忠実とさとされていますが、知らず知らずのうちに目上に対して反感をもったり、目下に対していつくしみをもつことができず、かえってこれを抑えつけるようなこともよくあります。

神に利払い 一一八 一〇 二〇

神様に利子をお支払いすると云うのはどんなことをするのかと申しますと、神様は大御親でありますから、神様の御心に叶いますよう、忠実に人としての道を行い、人を助け、万物を奉ることでもあります。

神の愛 四〇 八 一四

「相変わらず……」と口でいいながら、すぐに変わるのが人の心である。神の愛は無限であり、不変である。

神のおゆるし 一一八 一〇 四五

この神の懐の中に生活させて貰う以上どうしても自然の法則を守らねばなりません。そうして自然の道を歩むところによって今までの取り違いや不注意のところは神様からお赦しして下さるのであります。

神の恩恵 三三四 一二 六八

人のなす業には失敗が多い。その失敗を許して戴ける恩恵がほんとうに分かれれば有り難いのであります。(二月二日)

髪の毛 四六 六 六八

髪の毛は「神の毛」であります。ほかのところにも毛はありますが、これを「髪の毛」とはいいません。

神の子 一一八 一〇 三四

神が罪の子を初めより生み出す事はないのであります。その罪は知らず知らず己の心から己が造るのであって、決して神は罪の子をこの世に生み落として苦しめさすのではありません。それ故己に罪過りのある事を悟った時にそれを改め実行しなければなりません。改める事は改心であり、この改心こそは実に尊い事であって、改心して己の罪を悟り行えば罪人でなく神の子として立派な人であり、その人こそ人格者であります。

神の子 一八一〇 一

神の子 一八一〇 三

神の子として生まれさせて頂いて居ります以上、人の人たる実行を致さねばなりません。この世の中に神の子として生まれた以上には神様のため、お国のため、社会人類のため、活動しなければなりません。それと同時に一身一家を護り、各人の為すべき実行をなしてこそ神の子として生まれ出た尊いことを知るのであります。

神の子 一八一〇 五

神の子としてこの世に生まれた以上には、神様から与えられた業務を実行して通らねばならないのであります。人には何故階級が付けられてあるか、それは高き人は高い人だけにそれだけの尊い使命を神様から持たされているので、神様はその人に徳を付け高き所に於いて活動させているのであります。

神の子 一四二八 六

神がわれわれを神の子として生みおろした以上は、その本分を実行していきさえすれば、必ず分に応じて与えられるのであって、神の子を苦しめなさるようなことをなさるはずがありません。

神の子 一四二八 八

神の子としては、どのような環境にあつても心やすらかであるべきであり、それができないというのは、神の心を知らないがためであります。

神の子 一四二九 九

人は神の子であります。神の子が、なぜ病気になるて苦しむのでしょうか。なぜ迷いを起こして尊い人生をあやまるのでありましようか。せんずれば、自己の勝手きままから行いもせず、実行もせずに過ごしたからであります。たとえ、行ったとしても我執貪欲のための行いではないかと思われまます。

神の子 一四五八 五

この親の無限の愛に添うていくのが、神の子である私たちの歩みであります。万霊と万物を尊愛できないことであるならば、神の子として、また万物の霊長としての誇りとは申されまますまい。

神の子 一四八四 一

神の子として、自らの魂を浄化する使命が与えられています。その使命をはたすべくいのちがある。

神の子 一四九八 四

人種国籍信教を問わず、相信じ、博愛衆に及ぼして神の子としての自覚を守り、万物の霊長として、言語動作を慎み、世界の楽土を建設することが、命の親の待望すると

神の子 　　ふ 四九 八 一二

ころであります。また神の子として私たちも、責任があるのであります。三三九度は二人の誓いであります。なにをどこに誓うのかといいますが、神の子として立派な働きをさせていただきますと、また、神さまからいただいた分けみ魂を磨き浄めて、我執貪欲を浄化し、つねに清く正しく、広く暖かい心を養い、万霊万物尊愛の趣旨に基き、夫婦は天地の理でありますから、その天地に恥じない言語動作をいたしますことを、天地に誓うのであります。

神の子 　　ふ 四九 一一 二

神の子として天地自然の法則を学び修めて無条件実行を、また、人の道としては教養を高め、言語動作を誤らないよう、教え導き育てるということは容易ではありません。肉体の患いも、身心の悩みもつながりがある。うからやから万人たちの不幸も、みなまいたる種があり、これを教科書として学び修め行いと実行をして、自他ともにではなく、他自ともに、平和を築くことが、人の道としても、神の道としても、神の子としての目標であり目的でありましょう。

神の子 　　ふ 五〇 二 八

神の子の誇りを持ち、身分の相違があろうとも、万物の霊長である誇りを持って魂を汚さず、常に洗い浄めて、時間を励行し職場を忠実に守り職域奉公に懸命に決意をしていただけならば、人のためのように思い、また捧誠会のために働いているように思うような人がありますが、そうではありません。自ら行いと実行したことは、その人のためであることは事実であります。必ずめぐり合つて夜がくる、夜が明けるが如く身分の低い人でも人格が高まってまいります。富が少ない人も資産が増えてまいります。物心共に健全に恵まれて、万人から尊敬愛されることであります。それが神の子としての名誉でありましょう。

神の子 　　ふ 五〇 六 六

もう死にたくなつた、この世に在るのがいやになつたと安易にいう人があります。そんなにたやすく云えるものではない。本当に神の子であるといふことを自覚した時には、不平不満、怒、嫉妬なんというものは、それほど不徳を積むか分かりません。

神の子 　　ふ 五一 六 五

私たちは大極を神として崇敬しております。大極は命の親であり、その命の親からわ

神の子 五二六六

けみたまとして魂を頂いているのでありますから、私たちは神の子であります。本会ではこのことを力説いたしております。そしてまた信じているのであります。みおしえを信じ、教義教典に基づいて努力を誓い、命の親のみこころのとおり、悠久なる世界平和建設に励むことが神の子の責任であり、義務であることを諭されたからには、どこまでも前進して行かなくてはなりません。

神の子 五二二二

天地自然の法則によって、神の子に一日は一代。肉体は借りものであるゆえに、一代でお返しせねばならんと、みおしえにさとされております。(中略) 宗教においても、教育においても、万霊万物尊愛を無条件実行し、生きて活かされる元を子孫に教え導き育てることを伝え残していくことが、神の子であり、万物の霊長としての責任であることを悟らねばなりません。

神の子 五二二五三

神の子であれば、親のお諭しを否定したり、これに違反したりしてはなりません。よろずの人が神を否定してはならないのであります。法律は窮屈だからといって、否定するわけには行きません。法律は人を苦しめるためにあるのではないことは事実であって、法律は人を守る所以说えましょう。人が作った法律ですらその通りであります。が天地自然の法則もそうなのであります。いのちの親は、神の子を守り、生成発展するように念じておられるのです。

神の子 五二一七

大極によって森羅万象ことごとくが生まれてまいりました。そのことごとくが活かされている尊さなどは、教育されておりません。本会の趣旨は、万物は火水風によって活かされており、その大恩に報いるには無条件実行というところにあります。神の子としての信念は、この無条件実行の原動力であります。そして人の恩義を忘れてはなりません。どんな些細な事にも、人の恩義はひそんでいるのであります。衣食住のすべては、人の恩義による産物と申しても過言ではありません。

神の子 五二七三

私たちは神の子の自覚をせよと諭されている。なぜかと申しますと、いのちの親の分けみ魂としての魂を頂き、しかも、身体をいのちの親に設計され、組みたてられて、

神の子 五 四 二

この大宇宙に活かされているからなのであります。人の言語動作に触れて、自分の心に憎しみが生じたり、淋しくなったり、また他人の言動に対しても感情的な批判をしたりしていることに気がついたならば、自分は神の子の自覚ができていないという点をつけてください。(中略) 神の子として生まれ給うということを真に自覚できたならば、強く正しく行動できる筈であります。ところが、人は衣食住のみに忙しく金だ金だと、金で縁を切ったり、縁をつないだりしております。

神の子 五 四 七 二

いのちの親から神の子として生まれ給うた男女が、夫婦となりまして、また、神の子を生まれ給うのであります。自分たちが作ったものではございません。神の子であることの疑いの害はもてないはずであります。

神の子 五 五 五 三

いのちの親とは、私達のこの肉体を設計しているのであります。それが組み立てられてゆく場所は母の胎内で、子宮という文字で書く器官であります。子の宮と示されております。どんな人も、世のため人のために役立つ方も、また色々な迷惑や犯罪を犯す人も、皆、いのちの親の設計の通り、子の宮で組み立てられた存在であり、この事を「神の子として生まれ給う」と諭してあるのであります。

神の子 五 五 七 三

世界各国の人種にはさまざまな相違があつても、みな神の子であります。人殺しをしている人、いろいろな犯罪を犯している人も全部神の子ということを諭されております。魂を磨き清め、思いやりというものを破壊するということは、平和を破壊するものであります。

神の子 五 七 一 四

りまして、いのちの親は、万霊万物尊愛を目的とし目標として、人格の完成に、神の子であることを自覚して修養実践しなければ神の子の資格はないと諭してあります。人は神の子であることを自覚して誠の道を踏み行い、誠の業を喜び励んでいけば、如何に悩み苦しみがありましたも、必ずや晴天白日となつて、善し悪しが決定してまいります。(十一月二六日)

神の子 三 四 一 二 六 八 三

大宇宙は神仏の姿であり、人の肉体は小宇宙であります。それ故に大極を神と称し、

神の子 三 四 一 二 七 四 八

神の子 解 二八 一

人は神の子であることを自覚せねばなりません。(十二月二八日)

神とは、万物を成長させて、永遠に生かして行く力と慈愛をもった、肉眼では見えぬ・掌に掴む事の出来ない、無限の尊いものであります。人はこの力によって・慈愛によって・男女の結合から、生まれて来るものであります。これ即ち神の子なのであります。それ故に人は神の子である事を自覚しなければなりません。

神の子 敬 四〇 一一 二三九

全てが神慮のはからいであつた。神慮のはからいならば喜んで頂いていつてこそ「神の子」である。親が子のためになさる業に、悪いことがある筈がない。感謝で受けて通りぬけて「徳」となるのだ。

神の子 敬 四二 一一 二二

助けて下さい、救って下さいと頼むのではなく、どこまでも我が心を丸く美しい姿に直していくことをお誓いする、これが神の子として正しく強く生きていくたくましい行き方でしょう。

神の子 振 四四 一 六

切っても切れぬ、叩いてもこわれぬ、如何ような新兵器を用いて破壊しようとしても、こわれぬのは、火水風であります、即ち「ひふみ」であります。この「ひふみ」一、二、三、天地自然の法則を学び修める私達は、実行してこそ初めて神の子であり、平和なのであります。

神の子 誠 四八 一一 一五二

天地の法則にしたがつて、動揺転倒しない心で、忠実に任務を果していく人こそ尊いのであります。そこに神の子としての生きがいがある。

神の子 誠 四八 一一 一六六

殺人犯と呼ばれる青年も、強盗する人たちも、みな神の子であります。その広い温かい、強く正しい心を日々に養なつていくことに専念しなければなりません。これは日月のごとく広い温かい心であります。

神の子 命 四八 一一 五六

神とは万物を成長させ、永遠に活かしてゆく力と慈悲とを持った、肉眼では見えず、掌に掴むこともできぬ無限の尊いものである。人はこの力により慈悲により生れ来たものであり、神の子なのである。それれまず第一に神の子であることを自覚せねばならぬ。

神の御意見

ふ 三八 一一 二七

人に叱られたり殴られたりすると誰でも怒る。同時にまた、その叱られ、殴られた理由もよくわかる。ところが神に御意見を頂くと、全くわかっていない人が多い。それは神は人間を救けるものだと、思いこんでいるからである。こういう人に限って、いざという時に救けてもらえるような行いを殆どしていない。

神の行動

ふ 三八 一一 二六

神の動き、それは人間の力で止められるものではない。時の流れも、風の流れも、水の流れも、人間の力では如何んともし難いのである。敢えて止めようとすれば、ハネとばされてしまうより外に道はないであろう。

神の声

命 四八 一二 一八九

神の声は、その一音が米俵十俵に相当する。一音でもゆるがせにすれば、米俵十俵を粗末にしたのと同じであることと思い、決して無駄にせぬように修養せねばならぬ。

神の声

命 四八 一二 二九六

太極の響きは、即ち神の声である。無条件で聞かねばならぬ。人の計らいの言葉は無条件には聞かれぬ。教えを通じ、誠の心から出た声をこそ、素直に聞くべきであつて、その他の声は聞き流せばよい。決して争つてはならぬ。

神のご加護

ふ 五五 九 三

どんなことに直面しましても、これは難有りだ有り難いんだ、という無条件感謝ができ、感謝の誠を捧げて行くことができれば、神、即ちいのちの親にその誠が通う。通えば、いのちの親は神の子をご加護して下さる。神の子は、いのちの親が守つて下さる。自分から守ろうとしても守れません。

神の心

い 一八 一〇 七

神様の御心はメッキや飾りではなく、白の紙姿とおなじように、如何なる場合にも剥げるようなことなく、いつまでも変わらない姿であります。

神の心

ふ 四六 一〇 一八

太極の存在は火・水・風である。徳と力と愛である。万物尊愛である。天地自然の法則は火・水・風、ヒ・フ・ミ（一・二・三）この真理が神の心である。おおみ心であります。

神の心

み 三四 一二 四四三

強く正しくということは無条件であり、相和し、素直な心、誠の心でなければなりません。この心は神の心とも教えられます。（八月一日）

神の御守護

み 三四 一二 三二九

常に身心を清め、修養実践し、神慮に合一していられるように努力し、神の子である

ことを喜び励んでいけば、み親は常に夜となく昼となく無条件で御守護を下さるのであります。(六月七日)

神の御守護 訓 一八 八 四七

神様の御守護によって手足も動かされ、言葉も出したり、目や手を動かしたりして居るので、かようなことを知らず、何年経ても勝手気儘な思い方をして居ります為に、その人達が暗黒となり、暗夜となつて自ら病み患いをするのであります。

神の子の義務 ふ 三九 一 三
誠の道をふみ行い、誠の業を喜び励むことは神の子の義務であり、これは誰にでも出来ることである。

神の子の自覚 ふ 三五 一 五
神の子の自覚は誠ささげて実行しなければ分らないのであります。誠ささげて行うことによつて、神の子の自覚が得られるのです。

神の子の自覚 ふ 四六 五 二三
その命の尊さを理解して、そうして悟るまでは容易ではありませんが、命の尊さを理解していきますと神の子であるという自覚が、そこにつながつてまいります。

神の子の自覚 ふ 五二 一 三
神の子であるという自覚ができたなら万霊万物を尊愛して誠の道をふみ行つて行く事は無条件実行じゃないか。金や物を頂いて有難うと言うけれども、人は金や物に包まれて活かされているのではない。神の子ならばいのちの親がある。

神の子の自覚 ふ 五四 二 五
泥沼の中からぬけだすには、本当の道、天地自然の法則の道、すなわち、神の子の自覚にたち帰らなくてはなりません。神の子の自覚をえたら、子でありますから、親と一体にならなくてはなりません。

神の子の自覚 ふ 五四 七 三
学問で、理論や、方程式から教育することはあるけれども、無条件実行で悟つた修養とは段違いであります。教わる事と悟る事、この違いを噛みしめて下さい。教わつたことは、その時は覚えていても年を取ると忘れてしまう。(中略) 自分で体験した

事、自分の体で覚えた事は忘れられません。まして、無条件実行で悟つた事は、けつして忘れないのであります。これは魂にしみこんでいるからです。神の子の自覚という事も、悟ることでありまして、教わる事ではありません。

神の子の自覚 ふ 五四 九 三
まことのこゝばをまことの心でささげる。こういう行動は、神の子の自覚に立たなく

神の子の自覚 　　ふ 五四 一一 四

てはできません。まことの心を養い、まことの業を喜び励む、このような趣旨に基づいて行動してゆくことが、神の子の自覚なんです。簡単明瞭です。

神の子の自覚をすることは、自らで覚ってゆく事なのである。ここに重点があるのですよ。人から話を聞く、姿を見る、本を読む、考える、そして、自分から自分の心の中で「われ神の子なり」と覚ってゆくことなのであります。そういう自覚を持てば、迷いも持たずもたさず、争いの種もまかずまかさず、大恩に報い人の恩義を忘れず、終生の奉仕に誠心誠意の実行ができるのであります。この自覚に至らず、自己を中心に、我意を用いてばかりおれば、家庭も職場も社会も国家も、いつまでも乱れてくるのであります。憎しみも消えず、争いの種は次々とまかれます。肉体は借物ですからいつの日にかお返ししなくてはなりません。しかし一代の借り物の肉体を貸して頂いている限りは悠久なる平和建設への努力を誓い、行つてゆかなければならない。「神の子の自覚」とはここにあります。

神の子の自覚 　　ふ 五六 四 八

文字通り自ら覚(さと)る。覚るということは、守る。これが捧誠会の趣旨ですね。法を守るのは人の道。神人合一をしなければいけない。天地自然の法則を守ることが、神の子であるという自覚をしなくてはならない。生活には法を守る。この二つは一致しないといけない。(中略) 神の子の自覚ができないと、たえず魂が濁っているから。(中略) 大掃除をしなければ分からない。(中略) 天地自然の法則が分らないことは、それは分りません。天地自然の法則が悟れてです、悟って、無条件実行をしてみないと分らない。無条件実行をしてみて分る。

神の子の自覚への努力の心構え 　　ふ 五二 一一 二

神の子の自覚ということは、皆さん知っております。神の子の自覚への努力の心構えは、誠というほかにはありません。そして、迷信を打破することであり、人は、とかく、分からないことを迷信としてしまいがちであります。わが意を用いて衣食住のためにだけ努力を傾けている日常であつて万物を活かし給う大恩も知らず、天地自然の法則にも無関心であつて、俺が働いているという我を、滅することもしておりま

神の子の使命 　　ふ五一　三　九

せん。

これから五十年、変革はあらゆる方面に一層著しいものがあるでしょう。その未来での幸福を作り、しあわせを生みだしてゆく。その足跡を残してゆく場を作るのが神の子の使命であります。

天地自然の法則も、国法も神の子として、又人間として守る責任と義務があるのであります。

神の子のつとめ 　　誠四八　一二　八四

身体が動けば物が動く。このコップが、こうして動く。私の手が動かしているようだが原動力は心である。この心こそ、生命である。靈魂とも申します。「不滅の灯」とも申しましょう。不滅です。不滅でありますけれども、この手でつかめない。空気のようなもの。現に空気をいただいております。なれども、つかめない。これは天地の恩恵であります。ゆえに、活かされるこの大恩にむくいていくことが、神の子としてのつとめである、と、こう、おさとしをいただくのであります。

神の慈愛 　　み三四　一二　一五九

人の身に病み患いが出てくるのは、神が大きな慈愛をもって悟らしめ、正しい心で正しい行いをすべきことを教えられるのであります。(三月十七日)

神の姿 　　み三四　一二　三二六

火水風も神の姿として日夜変わらないのであります。(六月五日)

神の力 　　み三四　一二　一〇

地球が日夜回転しておりますその力は、神の力と信じるのであります。地球には、ありとあらゆる生物が、生き生きと生きて伸びております。これらは人の力ではありません。(一月五日)

神の力 　　訓一八　八　五四

神の力は目にも見えず、手にも取れませんから、神の力だ、神の恵みだと申しまして、そんなことはないと思う人が多いのであります。神の力より人の力の方がよく分りますので、どうしても人の力の方に重きを置くようになります。(中略) 神を信じ救いを求める時は人の力ではどうすることも出来ず、神より外にないと信じますが、その時は少し遅いのであります。然し神は絶対のものであり、大悲大慈の所から必ずお救い下さることは間違いないのであります。その最後の時は人の力ではどうする

神の注流 太四四 一一 三六

ことも出来ないのであります。

レコードが回るように一音一音が心の中によみがえってまいります。天声の一言一言が、今日と未来の中心に立った「真制限」のお言葉であることを、すなおにうなずけたのであります。こういう状態を「神の注流」と言うのでしょうか。

神の使い 三九 五 二三

だから私は常日頃から「無条件」実行と教えているのである。実行ができる人こそ、神の使いのできる人である。

神のつとめ 訓 一八 八 五一

「神のつとめ」と示してありますが神（ジン）は神であり神は心であり、心は絶対なもので神とは同一の精神でなくばなりません。それは心を精神と申します。精神は清き神と書き現しますが、全くその通りで、清き神なればこそ絶対のものであります。神のつとめをして行くことは、真実であり、真実に実行することが神のつとめであり、真心なのであります。人に生まれて生命ある以上には何かにつけて実行をしなければならぬことを悟らねばなりません。

神の道 い 一八 一〇 二五

神の道には競争がないので自然の法則は公平であります。即ち人には神様から授けられただけのことを誠心からしていればよろしいので、早いとか遅いとか云うような授けられたものに就いて、恥しいと云うことはない筈です。神の子として生まれ世に立つて向上してゆくためには、神の心と同一な心持で恥しい事なく若し恥しいと思うようなことは心を取り直し、取替えて心のよごれを洗い清め無限の光り輝く太陽の如き精神を以て、日常生活を実行することが神様の御心に叶うのであります。そこには決して恥しいとか、きまりが悪いとか云うようなことではありません。

神の道 三九 一一 五一

神の道は実行で、その結果を幸せという。幸せは自分だけでなく多くの人をも幸せにすることができぬ。ひとの道には「待った」がきくが、神の道では「待った」が絶対きかない。

神の道 三九 一一 二二

本会は常に、人の道をふみ行い、神の道を修めて実行に現すことを心がけ、その趣旨をあやまらぬよう教義を宣布普及しているのであります。

神の道 四一 四七

白を黒といわれて、これを無条件に肯定するのは神の道である。神の道だから何れわかる時がくる。人の道では「いずれ」という時を待てない。そこで、その場で白黒をあきらかにしようとする。争いの種だけが残る。

神の道 四二 二八

「絶対」の神のみちには、不思議は存在しない。すべては自然であり、そうであるのが本なのであります。

神の道 四五 一七

神の道は、神がおつくりになつた道であつて、人のこしらえた道ではありません。

神の道 四五 一〇 二四

心と言葉の交流は神の道であり、肉体と物の交流は人の道であります。

神の道 四六 六四

人の道において幸せを作るとともに、神の道において幸せを生み出していくためであります。花を咲かせるのは人の道、稔らして種を生み、種によつてさらにまた“いのち”を永遠につづけていく——これ神の道であり実行であります。

神の道 四七 五九

「神の道」の中心は太極であり、そこからよつて生じてくる「みおしえ」を遵法しなければならぬことが絶対条件であります。これは「万霊尊愛」であります。

神の道 五〇 二一 一三

神の道は靈魂であり、人の命の根本であり、天地自然の法則にもとづく趣旨を宣言し、天地自然の法則に反すればこれ即ち地獄なりと諭されております。

神の道 三四 一二 四

人の道は万人知る所であります。誠の道、この道を神の道と信じていることでもあります。
(一月二日)

神の道 三四 一二 九

神の道は無限であり、忠実でありますから、永遠に変わることなく、日月の運行と同じであります。
(一月四日)

神の道 三四 一二 二八一

神の道には裏表はありません。例えて言うならば火水風には裏表はありません。雲は美しく裏表が無いように思われますが、白という色があります。雪は解けて水に変われば無色であります。地球は無極から大極となり万物が成長しておりますが、その働きは神であつて裏表なく且つ無色であります。
(五月十五日)

神の道 三四 一二 三三五

常に誠の道をふみ行い、誠の業を喜び励むことは神の道であり、又人の道なのであります。神の道は誠の道であります。
(六月五日)

神の道 三 四 一 二 五二〇

天地自然の法則は神の道であり、心の交流即ち思いやり、言葉の交流即ち言葉の出し入れを教えられます。心は常によい念を通わせ、言葉の使い方はこれを丸くやさしく、正しく強く、お互いに差し上げ戴き、交流する事を怠つてはなりません。(九月八日)

神の道 三 四 一 二 五九七

神の道は、心の素直さがなければ理解出来ないであります。(十月十五日)

神の道 三 四 一 二 七〇〇

神の道は天地自然の法則の由つて生ずる大極の根元であります。そして万物普遍の大霊であります。人の肉眼では発見出来ず、又如何に科学が進歩した所で学問や人知で計りきれないものであります。自己の魂を磨き、自然の法則に基づいて誠の道を踏み行い、誠の業を喜びはげみ、難業苦業の中から体験を重ねなければ神の道を知ること出来ないであります。(十二月四日)

神の道 一 八 八 四九

よるず世に道は二筋ないと云うことが申してありますが、この道は心の道であり、地上の形の道ではありません。地上の道は沢山ありますが、精神即ち清き神の道は一筋なのであります。

神の道 一 八 八 五三

絶対の神の道には不思議と云うことではないのであります。唯知らずに居ります為、それがはつきり悟れる迄の道中には、人の想像にならないことが出て参ります。

神の道 四 二 一 二 二六一

人と人との間において、世話になったりなられたり、すなわち義理人情によって行うのは人の道であります。人の道においては、自分の意を用いて都合によって延期しても、おくれてもさしつかえありませんが、神の道の実行にあつては許されません。

本会のみおしえには、神の道と人の道の両道が示されておりまして、この二つの道の一つに学び修めていけと教えられています。

神の道 一 四 六 六 六七

神の道は肉眼に見えません。無限の徳と力と愛であります。これは口さきの説明ではわかりません。実行して味あわなければわかりません。そこで体験しなさい——泳いでみなさい、痛い思いをしてみなさい、というておるのであります。

神の道 一 四 八 一 二 一一九

神は子供の通るべき道を、子供が通らぬ前から造つてある道だから、通りなさいと教えられます。この道は「神の道」である。「神の道」を「誠の道」と教えてあります。

この「誠の道」はきびしい。気づい気ままや、楽をしていこうという心構えでは、通りにくいのであります。なれども、いのちの親は「通れ」といわれる。「通せ」といわれる。なぜ、そのように、きびしく仰せられるのか。それは、人はみな神の子であるからであります。

神の道

誠 四八 一一一 一四五

：通らぬ道は作ってない。通る道を作ってある…とおさとしになっておる。これを「神の道」という。「神の道」は天地自然の法則によって作られたものである。その道が誰が通るのか。神の子が通る。神の子に神が通さず。すなわち親が通さず。子供が通らぬといっても、親が通さず。ですから非常にきびしい道であります。この道を通って、そこに「幸せ」が生まれるのであります。

神の道

誠 四八 一一一 一四六

神の道は「心の道」「ことたまの道」——すなわち、心の交流、ことばの交流、これが神の道であります。物の交流、身体との交流。これは人の道であります。神の道と人の道と、この両道を学びおさめて、実行に、行ないにはげむようと、常々から教えられておるのであります。そして、「神の道」は教祖が太極のご指導をうけて、この道を、こう通れよ、とおとりつぎしています。それが、やはり、なかなかきびしい。

神の道

誠 四八 一一一 一四七

神の設計せられた平和の図面です。平和建設の青写真です。心の成長が幼稚園以下であれば、やはり、わからないのが当然でしょう。神の道の平和。人の道の平和。いずれも平和であります。二つで一つであります。人の道の平和はわかる。神の道の平和はわからん、というのでは、かたわでしよう。ともかくも、神の道はきびしい。楽々の道ではありません。この、きびしい神の道も、通ればわかります。平和の青写真が読めてまいります。身心の悩み苦しみ、艱難辛苦を通りぬけて、はじめて、神の道の図面がわかるのであります。

神の道

導 三四 一六二

天地自然の法則の道即ち神の道に入る。神の道とは、心を養う道であって、人の道は又肉体を養って行く、心を養う事と肉体を養う事と両方が調和して出来るのであって、こういう処に教えの重点があるのであります。

神の道 命 四八 一二 四三

天地自然の動きは神の動き、すなわち神の道である。人の行く道は人道である。人の道は遅れ勝ちであるが神の道は遅れない。私ども修養する者は遅れないように心がけ、日月の運行の如く進行してゆかねばならぬ。

神の道 命 四八 一二 四九

魂を肥らせ立派なものに仕上げてゆくところに宗教がある。人の道は人倫道德ゆえにみんな知っている。人の道を超えて神の道がある。これ天地自然の法則である。

神の道 命 四八 一二 五二

人の道は交換条件であり、神の道は無条件である。無条件となれば世話にならぬ人も誠ささげて尽さねばならず、また汝の敵をも愛さねばならぬ。

神の道 命 四八 一二 五四

神の道は人が決めたり人の作った法律で裁くのではない。神即ち天の裁きである。やがて神の支配によりことなす時が実現しよう。

神の道 命 四八 一二 六四

神の道に裏表はない。神は火水風と同様に裏表がない。(中略) 神の道を行うには努力と手数がかかる。

神の道 命 四八 一二 二〇〇

神の道は万物普遍の道であり、無限の光の輝く道である。万物が活かされている根源は、ここにある。生活の生は生きることであって人の道である。活は活かされることであって神の道である。

神の道の開発 命 四七 五 一二

神の道の開発は心の開発であります。(中略) 心の開発ということは、まずもって天地の恩恵に、また万物の恩恵に感謝しなければならぬ。万物尊愛であります。

神の道の行事 命 四七 一二 一七

見送られる霊も、見送る誠を捧げる人も無条件、感謝感激でなくてはなりません。これが神の道の行事であります。

神の道の悟り 命 三四 一二 四一八

人が神の道を修めて悟る迄には長い年月日がかかり、難行苦行が身にふりかかってくる、何回も死線を乗り越さねばなりません。事実を身に受けて知ること、即ち体得しなければならぬのであります。(七月二一日)

神の道の実行 命 三八 七 一四

神の道の実行には、時間の猶予がない。今といえ今、即実行しなければならぬ。(中略) 地球の運行、川の流れ、風の動きに、人がちよつと待ってくれといつても通用しないではないか。待てしばしのないのが、天地自然のまことである。天地自然の大極

神の道の実行 　　ふ 三八 九 一三

のひびきを伝えるみおしえの実行にも、待てしばしのないのが当然だ。人の道に「やりくり」がある。「やりくり」するのが人の道と、その逆もいえる。しかし、天地自然の法則には「やりくり」はない。厳然として不変不動である。だから、神の道の実行にはやりくりはない。無条件即実行あるのみである。

神の道 人の道 　　ふ 五二 三 三

神の道は天地自然の法則によるものであり、人の道は理性によるものであります。この両道の調和が大切なのであります。

神の恵み 　　み 三四 一二 五九

神の恵みはその人の分に応じて与えられますから、決して不公平ではありません。
(一月二十九日)

神の理想 　　訓 一八 八 五八

神の理想は如何なる人にも、如何なる物体に対しても和合して行くことであります。

神の業 　　み 三四 一二 四六二

地球の運行は、人知人力では動かすこともどうすることも出来ません。ましてや雨を降らしたり地震を起こすようなことも到底出来得るものではありません。神を否定し、逆らう心は亡んでまいります。(八月十一日)

神より(紙撚) 　　訓 一九 一二 一二

地球を始め出したのは、神より(紙撚)始め出したので、是こそ「かんじんより」始めるのであります。かんじん要の神を中心に始め出す事を忘れがちであります。神は本であり、根であり、人の心の働きより始めだすのでありますから、人の心が取り違い、間違えますと神の御心になして居る事になりません。人の心の取り違い間違いが、迷いとなり、疑いとなれば、人生は闇であります。心が病めるのも、肉体が病めるのも、神を中心に信じて行けない為に病み患いをするのであります。

神を敬う 　　み 三四 一二 六三四

神仏を信じ敬うということは、無限の慈愛に浴して活かされていることを心から認識することであって、神仏に奉仕することは理の当然であります。(十一月二日)

神を信じる 　　命 四八 一二 一〇四

神を信ずるといふのは、素直な優しい純真な気持になることである。神を信ずる心になれば、事に臨み純真な優しい素直な心になれるのである。

神を信じる 　　命 四八 一二 一四八

神を信じるということとは、長上を信じ敬うことであるが、これを取違ひする人が多い。祖先の霊に対し、目には見えずとも真心で尊敬し、人と人と接する場合も、誠を捧げ

神を否定する 　　み 三四 一二 三三七

嘯む 　　ふ 四一 三 八

嘯む 　　振 四三 一〇 七

かむろぎかむろぎ 　　ふ 四四 七 一一

かむろぎかむろぎ 　　ふ 四四 七 一一

かむろぎかむろぎ 　　ふ 四四 七 一三

カムロギカムロミ 　　導 三四 一二 一七

我欲 　　ふ 四七 一二 一九

て話をしたり、助け合いをしたりして、信じ合い、相和してゆくことが神（上）を信じることになるのである。

雨や嵐があれば不平不満がわき、又月や日が悪いなどという人があるが、これは不敬であり、神を否定することになります。（六月十一日）

ものを嘯むとき、上あごと下あごが合掌の姿になる。天地、上下、の合掌。そこに平和がある。みごころの合掌、これが神に合一であり、これが「かむ」（神）である。

上歯と下歯が合わなければ食物を嘯む事が出来ない。調子が出ない時は丸のみだ、お酒等も、ぐいぐい水のように飲んでほならない。一杯の酒と雖も、口の中に入れツバを混えて、物を食べるようにして飲む。暴飲暴食等はみんな内臓の器官に無理な働きをさせている。

調和こそ神木である、親睦である。大きな調和の中に神業を翼賛したてまつる。これが「かむろぎ、かむろぎ」である。

いくら善意をもつていっても、相手に不平・不満をもたせては調和がとれていない。これは「かむろぎ、かむろぎ」になっていない。

心の中に詰まっているガラクタを整理して美しいものとの入れ替えであつて、心の交流は神の道、「かむろぎ、かむろぎ」である。「かむろぎ」ということたまは、かんて消化することである。またもろもろの不浄を浄化することである。

「カム」は人が口の中に物を入れて上歯と下歯で物をこなす事をかむと申します。「かみ」は無であり神の「む」と書いて「かむ」であります。それ故に南無と言う言葉が仏教に教えられてあります。「かむ」とは「なむ」であり、天と地の和合であり、男女の和合であり男女の和合によって子孫が繁栄する。万物の和合によって回転によって即ち交流してゆくから、そこに生活が出来得るのであります。

先生がいなくなつたあと、自分はどうすればいいんだろう、誰を頼つたらいいんだらうと、自分中心の人ほど、心配がひどい。この心配は我欲の心配であります。

我欲 命 四八 一二 五八

人を信ぜず、神を信ぜず、人のよい話を信ぜず、実行もしないで、病氣もよくなりた
い、商売も繁昌するようにと願うのは我欲である。

からだ ぶ 五三 七 三

私達の体は、誰が作ったものでもなくいのちの親が設計し、組み立てて、この世に生
ませ給うてくださったのであります。天の衣には縫い目はありません。人が作った衣
服には、一針一針の縫い目があります。いのちの親が設計して組み立てられた人体に
は縫い目がないという事実からも、人が作ったものと、いのちの親が生まれ給うた身
体との違いが論されているのであります。

からだ 誠 四六 六 二〇七

この尊い肉体もまた「借りもの」であります。「からだ」（身体）といいますが、こ
れは「借りた」であり、「カラのた」であります。ゆえに肉体が「つめたくなりますと」「な
きがら」というのであります。つめたくなつた時は返した時、健康のあいだが拝借し
て使わしていただく時であります。ですから、この肉体に感謝をささげて使わせてい
ただかねばなりません。

からだ（身体） ぶ 四三 五 九

身体（からだ）は借りものである。借りている田地である。すなわち「借り田」であ
るから「からだ」という。この借り田に、魂（いのち）という根源がある。ゆえに身
体は魂の器である。

借りた方 ぶ 四一 七 九

今日の世の中は、借りた方が威張っている。土地でも家でも金でも、借りている方が
威張っている。権利を主張している。そこには、恩等は考えるなどということが全く
ないといつてよい。人は黙認しても天は許さない。

借りもの ぶ 四〇 八 一三

神の子の自覚をもてば、すべての物は借りものであることがわかる。肉体をはじめ、
身のまわりのものすべてが借りものである。これを借りものと考えないと、わがもの
と思ひこむのとは大変な違いである。神からの拝借ものを生かして使わせて頂いてい
るか否か、よく見定めていってほしい。

借りもの ぶ 四〇 八 一六

肩書きや物を沢山もっているのが「徳」ではない。それは預かっているのである。徳
があつて授かっている人もあるが、徳がなくても一時預かっている人もある。それは

借りているのである。借物は返さねばならぬし、それに利子がつけば返済はさらにもずかしくなる。

借り物—というのは、貸して頂いていることである。貸してもらっているものには必ず期限がある。期限がくれば返さねばならない。

人は自分の働きで求めたものであるから自分のものだ—と思っています。そうではありません。『借り物』が悟れたならば、一時おあずかりしているのだということがわかります。

借りものであるから、元のところへ返す、これが自然の理である。

私は、ここ四年間耳鳴りに悩まされております。医学的治療を受けていますが、夜中や明け方にひどくなりますと眠れません。そういう状態の中、式典は一日も休んでおりません。この事実は、私の身体ではなく借りものだからであり、また大恩をいただいているからであります。天地自然の法則に基づいて、動かしていただいているのであります。

私どものこの身体、この存在はいのちの親が設計をし、組み立ててくださった上で、私どもに貸して下さっているものであります。私の身体ではありません。借りものです。また、夫婦の間に授かる子供も、自分の子供ではありません。神の子として拝借している存在なのであります。

借りものだから返さねばならぬ。『返す』と『借りもの』とは別々の言葉でなく、一つのすじにつながった言葉である。世の人は、全てわがものと思うから、そこに悩みが生まれる。混乱や斗争や奪い合いが起る。借りものであるから時がくれば返す。そこでまた貸して頂けるといふことになってくる。

地球上に生ある物体は借り物であることを自覚するならば、争いも病み患いも少ないのであります。(三月十四日)

借物 三三四 一一二 五一八

借物 三三四 一一二 一五二

借りもの 四一 一一二 一八六

借りもの 五三 四 四

借りもの 四五 七 九
借りもの 五〇 一一 三

借りもの 四一 一一二 八
借りもの 四二 八 七

借物 誠 四八 一一 一〇二

借りものの自覚 ふ 四五 七 一〇

枯木 命 四八 一一 一一三

感 振 四三 一〇 七

がん 命 四八 一一 一二三

癌 ふ 四三 一一 一八

りということ万人に教えられました。(九月七日)

形あるものは、すべて「借りもの」であるという自覚。この勉強であります。これまた、全人類に共通の科目であります。「いのち」は神のわけみ霊として頂戴している。そのほかの形あるものすべてが借りものである。この「借りもの」を信じていく、ここに勉強の根本があります。

「すべてが借りものだよ」と教えられると「そうですか」と頭でわかる。(中略)しかし頭でわかっているだけであって、自覚に到達していない。だからぬすまれた、落とした、とられた…という騒ぎになる。借りものの自覚こそ平和の土台である。

枯木、しおれた木は、枯れ気、しおれた気である。かかる気持でいる時「はい」という言葉を聞くと、その人たちの心は花が咲くのである。そして「はい」といった人の心も花が咲いたように、ますます愉快になり、自然に迷いもとけるのである。

物を考える、これを感じと云う。神経と云うが、神経は神の経(いと)と書きます。感は神とことたまが出る。神主、噛む々々、丁度上歯と下歯が一致して噛み合せる。かみわけ。かみしめる。

腸に出るか、肺に出るか、どこに出るかわからぬが、その質はまことにわるい。雁は高いところをとぶ。鳥と肉体的のがんとなんの関係があるか、といわれるかも知れぬが、高い心はがんにつながるのである。尊い肉がおかされ腐敗するのは、人の苦に感謝ができぬところに原因する。(中略)朝早く起き、料理をし食卓に出してくれる

みなの労力、苦心に「有難う。すまない」と感謝をしていただく気持であれば、かかる病気にはならぬ。感謝の心なく、食事その他のことについても因縁をつけ、人の気持を腐らせる。(中略)かかる肉体的の故障、教科書をいたたくのは三十年、五十

年と心を持っていたものが、そのまま写し出されるのである。それを思うとき、がん、呼吸器、中風などになるような種子を子孫に残してはならぬことがわかるのである。

蛾という虫は、毒素をもっていて、華やかな人にくいつく。人の幸せや出世をねたむ

環境 振 四二 一〇 四

根性です。雁という鳥は高い所を飛ぶ、つまり高い心で我を（蛾のような毒素のある心）押し通すようなことを積み重ねていけば、癌のみしらせとなってきました。

先ず身心を養う神の道と、衣食住を整える人の道とこの二つが一つとなって、みずからの環境がよくなり、他人の環境と自己の環境が即ち他自の環境が一つとなって世の環境になっている。「世の中」の環境も「余」の環境もつまりは一つである。自己の環境、自己の家庭の環境と共に世の中の環境もよりよくする努力をせねばならない。

環境 命 四八 一二 二九〇

環境に順応するということは大切なことであるが、環境とは神境であり、神の郷であり、神の教であると悟ればよい。

環境に順応 敬 四〇 一二 四一

環境に順応するとは、本会の趣旨の一つである。それは無為無策のままなれてしまえということではない。そこに生き甲斐を感じ、歓喜を見いだしていくことである。ともかくも、その時その時の生き方に誠を凝結することである。すると思わぬ知恵がわいてくる。仕事の仕方にも人の意表をついた工夫が生まれてくる。

環境に順応 命 四八 一二 二七六

環境に動揺してはならない。環境には順応すべきである。

感詩 命 四八 一二 二七六

漢詩として、時どきの感じたことを詩の形で綴る。感詩は、また、監視であります。

還死 敬 四二 一二 二七

ここまで帰り着いた、ここに蛙（帰る）が鳴いている。今ここにある私は普通に平凡に帰ったのではない。それは還死の帰り方である。「還死」は「神旨」であり、たしかに私は神のみ心のまにまに救われたのである。「神旨」は「監視」、万物監視、「神詩」——「漢詩」——「漢詩」に通う。

感謝 命 四八 一二 二七六

苦難をありがとうと感謝できるようになるまでには、死線を乗り越越す宿題があることを認識しなければなりません。

感謝 命 四八 一二 二七六

商店に問屋から品物が入荷したとき、店主も店員も、その商品に合掌して感謝をささげる店が何軒あろう。商品に、そこまで感謝をささげ、まことの念を通わせるので、

感謝 命 四八 一二 二七六

商品は生きて働くのである。

感謝 命 四八 一二 二七六

感謝の念がすべてをつないでいくのであります。

感謝 四三 四 六

感謝と言うと人の親切や物のありがたさに捧げる気もちであると考えられている。これは感謝の一部であってすべてではない。感謝は神謝である。活かされている大恩を心の底から感じて、この大恩にむくいていこうとする心の働きである。この心が姿に現れて奉仕となる。

感謝 四六 二 二三

感謝ということは喜びであります。厳しい中に感謝があるということを考えなければならぬ。ただ、嬉しい嬉しいという調子に乗っておりますと、足元が判らない場合がある。油断がある、すぎがある、誘惑がある。それですから、その喜びの中に感謝の中にきびしさがあるというのは、そこなんです。

感謝 五〇 六 三

心の悩み、肉体の悩み、身心の悩みというものはいかに我々の日常生活に苦難の道中を与えてくださるか。この苦難の道中を「難有り」という文字は有難いんだ」とさとされても説明だけでは納得できません。快方に向って始めて有難いということになるのが一般の常識でございます。苦しいときに感謝せよといわれましてもそれを納得できませんのが人の心の常でございます。

感謝 五二 七 五

試練にであった時、苦しい時こそ感謝が出来なくてはなりません。苦しみの場の中にあつて、少しでも感謝が出来れば大難が小難となつてゆくことは違いありません。憎しみと憎しみの触れ合いと、誠と誠の触れ合いには、天地の差があるのであります。衣食住に不自由なく、健康でいられる姿など、何ものにも変えられない有難い事と誰しも思いますが、なかなか心からの感謝ができません。有難いと思うそばから不平不満をもつ人が多いのであります。(中略) 妻の足らざる所、子の足らざる所は我にありと思うくらいでちょうどよい。それほど人は気位が高いのであります。

感謝 五四 五 三

万物一切は、天地の恩恵を戴き、成長しているのであります。その徳に感謝し、恩に報いる心持ちを忘れてはなりません。(二月一日)

感謝 三四 一二 六六

常に、どんな不利の立場に追い込まれても、己れの非を悟り、不平を思わず言わず、活かされている尊さと、生きていくために万人から慈愛を受けていることを深く思い、

感謝 三四 一二 六七

活かされている尊さと、生きていくために万人から慈愛を受けていることを深く思い、

感謝 み三四 一二 二一六

感謝すべきであります。(二月一日)
心の汚れを洗い清める為には、誠の感謝が心の底から出来なければなりません。
(四月十四日)

感謝 み三四 一二 二一七

働いて下さる完全な時に手足や肉体の器官に感謝することを忘れてはなりません。
(四月十四日)

感謝 み三四 一二 二五五

万物一切が人の生活のお役にたっておりますことを自覚せねばなりません。目にも見えず、手にも掴めない空気等、人の生命を生かして行く重要な働きをしておることに、人は無関心で感謝をしないことが多い。役にたつものには尊敬と感謝を忘れてはなりません。(五月二日)

感謝 み三四 一二 四六四

自分に都合の良い時のみの感謝ではなりません。万物に感謝の誠を捧げず、終生の奉仕も出来ない為に、幸福を望みながらもどん底に陥っていくのであります。
(八月十二日)

感謝 み三四 一二 五五〇

苦しい時には忍耐、堪忍、我慢、諦めというようなことを教えられて来ておりますが、このようなことは一時は辛抱出来ませんが、最後は火薬の如く爆発致します。始めから出て来る凡てのことに感謝をすることは容易ならぬ努力が必要です。
(九月二三日)

感謝 み三四 一二 七二〇

病床にやすんでおりましても、葉を持って来、体温を計り、お水を下さり、看護して下さる方々に「有難う」と感謝の言葉を差し上げ、一切れの羊羹でも真心から差し上げること位は出来る筈であります。(十二月十四日)

感謝 訓一九 六 七

腹を立てたり、悲観したり、迷ったりする時は、血液の循環が悪くなり毒素が出る。感謝の気持ちで一ぱいの時には血液の循環が極めてよく、何をしても気持ちよく出来るのである。

感謝 訓一九 六 八

神様と御先祖のおかげでこうして生きて居りますと云う心からの感謝を以て生活して行かねばならない。目が見えるのも、手足が動くのも自分の力ではない、すべて神様

の恩愛のおかげである。

感謝 訓 一九 六 九

感謝の心が出なければ先に進めない、進歩しない。

感謝 誠 四八 一二 一九〇

感謝といいますが、都合のよいことには感謝しております。それは感謝ではなく、その場だけの感情的な喜びにすぎません。少し不利益なことが起ると、不平不満という不が現われてくる。昨日の感謝が今日は不平不満になる。

感謝 命 四八 一二 六〇

感謝は反省によって生れる。反省の心、感謝の心無い人には神は心の力を与えてく
ださらぬ。

感謝 命 四八 一二 六一

まず内輪をよくし、修養する心の基を定めねばならぬ。心の基は感謝である。感謝の
心が無ければ真心は出てこない。

感謝 命 四八 一二 六三

迷いの心の起きるのは感謝の心がたらぬ証拠である。感謝の心を持ってば雲、すなわち
迷いを払うことができるのである。迷いの心が出た時は感謝で払う。(中略) 迷いの
心は雲であり、曇り、闇、となりやがて病みわずらいとなる。

感謝 命 四八 一二 六五

われわれの心にはゴチゴチとしたこだわりがある。この気持を柔かくするには感謝せ
よと教えてあるはずだ。感謝すれば皮膚も肌ざわりも柔くなる。皆の目をみると潤お
いがなく、目の玉にしわのよった人が多い。心にしわのよった証拠である。

感謝 命 四八 一二 六七

心がくらやみになった時は、自らの血液が濁っていると思えばよい。悩のある時は血
液が濁っているから静かに洗い清めねばならぬ。感謝によって洗い清めるの
である。(中略) 感謝は広く暖かい心である。一つの痛いところだけを気にしてい
ては感謝はできぬ。痛まず苦しまぬ他の数ヶ所に感謝ができるはずである。

感謝 命 四八 一二 六九

感謝の心には無理がない。感謝はどんな汚物をも浄化する。つらく、苦しく痛い時、
いやな顔もせず笑っていられるのも長年の訓練である。修養の結果、自然にそなわっ
てくる徳である。

感謝 命 四八 一二 七一

反省をすれば感謝が生れる。感謝によって心の塵は払われるのである。(中略) こ
のみ教えの一つの根拠は、現在の環境に心の底から感謝し、苦難をのりこえてゆくと

感謝

命 四八 一二 七二
命 四八 一二 七九

感謝

命 四八 一二 八一

感謝

命 四八 一二 八三

感謝

命 四八 一二 九〇

カ
の
部

ころにある。典範第一条にも「現在の環境に捧誠感謝の自覚を得」と示してある。修養しても底ぬけの人がある。心から感謝の実行のできぬ人も底ぬけだ。人の生活は多事多難で心痛めて迷うことが多い。この迷いをとり去るためには、感謝の心が必要である。尊い生命を活かしていただき、あらゆる人の労力によって救われているわけで、君の恩、親の恩、天地の恩、人の恩、衆生の恩などについては、人の知恵だけでは想像もつかぬほどの恩恵をうけている。この恵みと人の労力に感謝ができず、万物を敬う心、愛する心、協力する心がたらぬために、肉体の患いとなるのである。

人の心は目にも見えず、手にもつかめず、神とも教えられる。大霊であり、清らかなものである。いつもこの大霊を尊敬するとともに愛さねばならぬ。形に現れ、目に見えるものならば感謝もできるが、目に見えないため、その大霊に感謝せよ、愛せよといわれても信じられないかも知れぬが、日月がたつとかならず心の動きが形にあらわれる。現われてから感謝するのと、形に現われない前に感謝するのは大きな開きがある。万人は形に現われてから後に感謝するのであるが、それでは、なにか利益があったならば働くというのと同様である。物と物との取引の如く、物のある間は人と人との交際もするが、物が無くなれば絶交するということと同じである。誠の心には裏も表もない。水にも火にも風にも裏表は絶対がない。水は智慧であり、火は愛情であり、風は元気である。人の心には持ち方、使い方がある。これを普通一般に心を配るという。(中略) いかなる苦勞艱難があつても、誠心で各人の任務を実行すればおのずから幸福になれるのである。

現在の環境に捧誠感謝せよ、と常に教えてあるが時々刻々が次の行動の出発点となるのである。だから朝起きる時だけでなく、一瞬一瞬を感謝で終始し、出発点をあやまらぬようにせねばならぬ。

茶碗一個でも、それが作り出された労力に感謝せよ、というのである。わがものは魂

感謝

命 四八 一一一 一六

一つだけで、あとはすべては借り物である。そして、万物一切のお蔭をいただいて生きていくのである。このご恩をどうして返すか。あらゆるものに喜びの言葉を差し上げ、喜ばれることに手も足も目も耳も口も使うことである。

感謝

命 四八 一一一 一七

生れない前から有難うという感謝があれば、立派な子供がいただけるのである。つねに良きにつけ悪しきにつけ「お蔭さま」という言葉を出すようにせねばならぬ。

感謝

命 四八 一一一 二〇

病気などの場合、みだりに「どういう教訓だろう」と迷うのはよくない。ただ感謝でよいのだ、心の無駄使いをしてはならぬ。そして、言葉の無駄使いを注意せねばならぬ。不用意に心が揺り動かされると、不平不満の心が浮び出てくる。そして大切な心の要所々々にしみつく。しみがつくのだ。これを払い浄めるのは感謝よりほかにない。

感謝

命 四八 一一一 二二

心の迷いを取り去るために感謝の心が必要である。生命を生かしていただいていると同時に、あらゆる人の労力によって救われている。ましてや君の恩、親の恩、天地の恩などについては、人の知では想像もつかない恩恵をこうむり、この恩恵に対しては、誰しも深く感謝せねばならぬところである。

感謝

命 四八 一一一 二二

この苦しみを救わんとする誠、救われんとする誠、誠と誠の和合こそ感謝のあらわれである。心の底からお蔭さま、有難うの言葉を出し、病むことなく、悩むことなく健康な生活を送りたいものである。

感謝

命 四八 一一一 八六

迷えるものに、長上はなんと教えるであろうか。まず、あらゆるものに感謝せよと説くであろう。目の見えること、体の動くことを喜ばねばならぬ。片目見えずとも片目あることを、また片手なくとも他の片手あることを感謝せねばならぬ。感謝の心の湧きいざるところ、迷いの雲は次第に晴れてくるのである。

感謝

命 四八 一一一 九三

「常に確固不動の精神を養うよう心掛けること」とあるが、迷いとはむら雲であり、むら雲を払う輝く太陽の光はすなわち熱であり感謝である。迷いの心が起るのは感謝が足らぬ証拠である。感謝の心をもてば、雲すなわち迷いを払うことができる。感謝の心は力であり知恵である。迷心の出た時は感謝で払わねばならぬ。すなわち払うべ

感謝

命 四八 一二 二五二

く、みずから工夫得せねばならぬ。

生れた時はなに心なく生れて来たのである。なに心なく誕生を祝し、なに心なくとを運ばねばならぬ。しかし、無我夢中とするのがなに心なくではない。なに心なくとは感謝である。手足の動く恩寵に浴し、あらゆる人の恩恵に浴していることを思えば感謝である。

相手の欠点や仕打ちに対しては感謝できなくても、長所を見出して感謝するように稽古せよ。

感謝

命 四八 一二 二八五

かんしゃく

ふ 三九 七 三六

感謝の下に「苦」(ク)をつけると、かんしゃくとなつて自由がきかなくなりませう。

かんしゃく

ふ 四六 三 一四

「かんしゃく」をたてる。「かんしゃく」の「く」(苦)は無駄苦勞であつてこの「九」を通りこしても花も咲かず、実も結びませぬ。

かんしゃく玉

命 四八 一二 二八八

かんしゃく玉を人に投げつけてはならない。呑みこみ、心の中でよく消化すればよい。

感謝浄会

振 四二 一 七

感謝の浄会は、現在家族の者がお世話になつてゐる特別の人を招待して、茶菓子差上げて感謝の意を表し、特に家庭の円満を目的とする行事であるから感謝の浄会を家庭浄会と云うのであります。ですから、これは私から実行と云われなくとも綱領第四の教訓に基いた家庭の行事であつて、家庭の和が欠けているような家では全部行はずべきであります。

感謝でいただく

命 四八 一二 二八三

満腹のときに出されたご馳走を感謝していただくのも誠の心である。

感謝にみちた心

命 四八 一二 二九一

感謝にみちたときの心は広く、暖かく、強く、正しく、明るい。

感謝の教訓

振 四三 三 四

一、お互いに言葉のみの感謝ではなしたる業も何のかいなき
二、お互いにまことの感謝なき時は身の患いは重なりてゆく
三、お互いに人の噂をよくおさめ徳を積んだり及ぼしてゆく
四、お互いにねたみうらみを浄化して誠の感謝捧げましませ
五、お互いに生き活かされる尊さに感謝のまこととするぞ尊し

感謝の時期

命 四八 一二 二九三

健康なとき、健康に感謝せよ。物のあるとき、物に感謝せよ。苦難の起こつたときは

感謝の種 命 四二 八 一〇

「有難う」でよい面を見出して感謝せよ。

太陽は至るところ、隅から隅まで照らしておつて下さっています。その廣大無遍の尊さを感謝しておりました。ご先祖の功績を感謝しておりました。親の恩、兄弟に助けられた、先輩のご指導いただいていることを心の真底から感謝しておりました。多くなの人々の勤労に感謝しておりました。敵を愛し敵に感謝しておりました。難あり有りがたく感謝しておりました。親は子に、子は親に、夫は妻に、妻は夫にま心から感謝しておりました。世の中のありとあらゆるものを見て、喜んで己が心の浄化をしているでしょうか。

勘定 命 三九 六 一五

人の世の争いの種は、ほとんど「勘定」にある。「勘定」は「感情」に通じる。

勘定 命 四一 九 七

人はともすると感情（勘定）にとらわれます。給料を頂くから、物を頂いたから、或いは、給料が安いから、物を頂かないから—というような勘定にとらわれてやっつけては徳は積みません。勘定を外し（感情のとりこにならず）真剣につとめる、そこに始めて徳が積めます。

感情 命 五六 五 四

慢心の心、高慢の心、うぬぼれであります。これも感情であります。見れば欲しい。手に入れば惜しい。自分の好きな人はかわいいが、嫌いな人は憎い。こういうのが感情なのであります。

肝臓 命 四八 一二 三二

肝臓は、体全体に栄養分を配給するところである。髪の毛の先から爪の先まで、ここから栄養の配給をうけるのである。これを患うたねはなにか。肝は魂であり感である。腹をたてるとか、妬み、恨み、そねみ、ひがみなどのさかしま心、すなわち心の持ち方、使い方が因である。この心の使い方を勉強し、物の考え方を正しく、広く、美しくしていただきたいのである。

艱難辛苦 命 四六 一一 一〇

艱難辛苦も神慮の試練というても、一般の人には通じないかも知れん。しかし、本会の壮靑少年には、そこからお前たちのしあわせが生み出されるのだと、いのちの親がおっしゃっていることは、通じるはずで。

艱難辛苦 三三四 一二 四〇三

苦難を悲しみ、苦難から遠ざかろうとすることは心の弱さであります。艱難辛苦も神慮の試練であり、慈愛であり、人格完成への練磨であります。掘り下げて悟って行けば有難いことが判然するのであります。(七月十三日)

艱難辛苦 誠 四八 一二 一五

艱難辛苦こそは、体得するための尊いおさとしてあります。教科書であります。

かんにん 太 四四 一一 一四六

どのように辛い苦しい悲しい情けないことがあっても、怒ったり、泣いたり、嘆いたり、恨んだり、人の感情におぼれず、どこまでも「しんぼう」していく。それを、ここに「かんにん 神人」と示しているのであります。「忍」という字を見ても分かるように、心に刃やいばが突きささっています。そのように辛い、苦しい、耐え難いことを喜びにかえていけるのは、そこにこもっている神慮を悟り、神慮に添うていくからであります。ただ私一人感情をおし殺して、たえしのんでいるのではありません。これには限界がありません。(中略) 私が神慮と合一し、私が神と合掌の姿になっておりますと、そこには無限の徳と力と愛とが宿されますから人間感情の爆発がないのであります。

神人(堪忍) 敬 四〇 一二 一八

神人(かんにん)よ 教(きょう)も神人通り来た

これが私の過去の敬霊気(けいれいき)

(中略) 神人(かんにん)というのは「堪忍」に通じ、教(きょう)は「今日」に通じる。だから注を加えて書き直せば、

堪忍よ 今日も堪忍通り来た これが私の過去の経歴

ということになる。

堪忍と神人 堪忍——しんぼう——捧誠。

がんばる ふ 四三 九 五

がんばるでなく「ふんばる」である。いのちの親はかくおさとしになる。

甘露 ふ 五二 九 二一

くだものの甘露はしんから入る。しんは神である。だからくだものの汁は神(しん)の甘露である。親さまの乳である。人はこのお乳を頂いて活かされている。この尊さを悟って実行せよと教えている。

甘露 ふ 三八 一一 三〇

みおしえとは、太極の響きでありましてまた太極の甘露であります。この甘露によ

甘露 ふ 四六 五 二二

つ

キの部

甘露 振 四三 八 五

て万物が生成発展しているのをごさいます。この甘露の中には大恩があります。つきることのない空気があり水がある。火と水とのこの働きの中には大恩があつて、それを本会では徳と力と愛といつておりますが、徳と力と愛によつて万物が生成発展しております。

無限の徳と力と愛が、私達の周辺に充滿している。この甘露が充滿している。万物が生成発展して行く為には、この目にも見えない、手にも擱めない処の、この大きな慈愛が、籠っているのであります。流れているのであります。それに感謝が出来ないような事では鳥畜類にも劣つた根性であります。

気愛 ふ 三八 五 一六

「まこと」の交流を行つていると、必要な時に必要なだけ、物も金も人もささずかる。また、こういう心の持ち方を「気愛」というのである。

気合と気愛 ふ 三八 五 一六

気合いと単に威勢のよいことばかりをいうのではない。愛情のこまやかな芽生えを、気愛ともいうのである。

帰依帰一 ふ 四一 六 二

四本の指が腹と腹を合わせられるのは、親指だけであります。お互い同士は腹と腹とを合せ得ませんが、ただ一つの親指には合わされます。即ち、「帰依」できるのであり、帰一できるのであります。

奇縁 ふ 四五 三 九

奇縁とは起縁であつて、その人を起き立たせてあげることである。

機械 ふ 四七 一 七

機械の停止は気をかえることだ。心の持ち方使い方を有効につかう、つまりものごとすべてを、ええ方に使わしていただくこと、これすなわち南無真行纒法である。

きかない ふ 四三 六 七

「薬のんでも効かぬ」という人がある。一般には、医薬に見放されたキトクの人をいう。薬もきかぬ、注射もきかぬ——この「きかぬ」ということたまは「神のこえを聞

聞かない 　　ふ　四三　一〇　一〇

かぬ」「神のこえを取りつぐ教祖の言葉を聞かぬ」ということである。また「きかない」というのは「気・火ない」である。空気がない、熱がない、愛情がないというのは死である。(中略)私の患いは、神のお叱りではない。尊い教訓である。私にとつては、なにも代え難い尊い宝である。だから「身しらせ」がある場合は、いついかなるときでも感謝でいっばいである。感謝して受けるのは誠であり、不平や疑いで受けるのは誠ではない。

気管 　　ふ　四〇　八　一六

聞かない——それは、「貴下ない」であつて、この真理は相手を敬っていないことである。
「気管」は「期間」に通じ、「期間」は「時間」である。時間を尊重しないと健康を害するようになる。ひいては生命に影響する。天地自然の運行は時間通り励行されている。

気管 　　誠　四六　六　二二〇

「気管」という言葉が示されておりますが「気管」は「期間」「すなわち」「時刻」であります。日本人は概して「時間」に軽卒で無関心であります。しかし「時間」を守らず、尊重していきませんと、健康を害するのであります。

聞き修める 　　太　四四　一一　一四五

聞き修める——ということは、広く受け入れるとともに、入れて選ばねばなりません。入れて選ぶとは、すなわち「浄化」であり「消化」であります。

どんな言葉でも、一度聞きおさめることが、万人から尊敬され、愛されて行く所以なのであります。

聞き方 　　ふ　三八　一二　一六

同じ話を毎日つづけて何回も聞くと、ああまたあの話しかと、講師も話しも軽蔑してしまう。これが百回も二百回も聞くと、どうだろうか。「もう、その話はわかっている」と否定することにもなりかねない。それは、話を聞くのに「我意」を用いているからである。我々は生まれてから死ぬまで、同じ味の空気を吸い、水を飲み、米のご飯を食べている。それでいてあきることがない。真心で話し、真心で聞かぬならば、同じ話でもあきることはない筈である。始めて聞いた時の感激も、百回目に聞いた時の

聞き方 振 四三 六 五

感激も少しも変わらないというのが、「まこと」の聞き方である。石耳と云つて他の云うことは一向に入らない、又聞こうとしない、これは石耳であります。鉄砲耳と云うのは通り過ぎてしまつて何んにも残らない。ざる耳はかすだけのこり、胃袋耳は聞いた事が消化が出来る。

聞き方 命 四八 一二 一二九

人の話を心で聞きおさめ、心で整理するようにせねばならぬ。(中略) 私どもは修養することにより、心の中で立派に整理できるような人にならねばならぬ。整理のつかぬ人は、そこに疑いが起るのである。聞き修め、広い心で整理することが大切である。

聞く人聞かされる人 ぶ 四二 六 七

(聞く縁
聞かされる縁)

聞かせる人も聞く人も深い縁のつながりに結ばれております。悪説を聞かされても、大嵐の如く強い言葉を吹きかけられても、聞くだけの道があれば聞かねばなりません。たとえその言葉には尊い真理があります。聞かせる人も大事であり聞く人も大事であります。いつもの言葉のだしかたによつて相手の命を亡ぼしてしまう場合があります。

聞く心 ぶ 四八 二 九

人の道としては人の恩義をわきまえ、それに報ゆることを忘れてはなりません。このことはくり返し、くり返しとしておりますが、みなさんはもうわかつた、同じことをなん十回いうのだろう、くだいなどと反感をもつ人もありますし、(中略) 徳のある人や聖者は同じことを百回かかれても、始めて聞かれる心になるものです。この

のような心には、なかなか耐えるものではありませんが、なれども同じことを聞かされても、始めていただくような気持にならなければなりません。これが修養でございます。同じことをなん回かかれても、また教えられても、「私はまだまだ未完成なのだな、なお一層、努力しよう」という心になれるのが、修養の価値でありましょう。

聞く心 ぶ 四八 二 一〇

みなさんが毎日いただいているあのご飯をもう五十年もたべているから飽きてしまつた、きらいになつたという人は少ないでしょう。神のみ声も、人の体験した尊い言葉も、同じことをなん回かしていただいても、感謝でうける心こそ誠の心であります。

聞く人 ぶ 四二 六 七

聞く人も足らざる言葉を活かして聞く信念がなければ、尊い真理をわが血肉にもできず、尊い真理を腐らしてしまいます。(中略) 聞いてわかるまで実行し、聞いてわ

かるまで進行していくには大きな苦心がありますが、その苦心こそ味を求める一つの道中であります。

キジ 四四 二 二五

雉は時期である。なんの時期かというところ「とり違い」の時期が来たのである。「とり違い」をしておれば速やかに、「とりもどき」ねばならぬ。

キジの言霊 四四 一 二八

立派な生地（きじ）で作られた製品は長もちもするし、人からも尊敬される。

雉の「キ」は「気」であり、「ジ」は「字」である。いつわりのない、清浄無垢を現わす。雉は美しく、強く正しい個性をもっている。みだりに表へ出て威張るわけでもなく、余計なお世話もせず、山奥にこもっているが、いざという時には悪質な鳥をいましめ、指導している。

人も年老いて「喜」の字と「寿」とを書いて七十七才のお祝いをしますが、「喜寿」は「雉」である。七の字が三つ重なるのは、七の合掌である。

雉は鋭い強そうなくチバシを持っていますが、その姿は平和である。「虎は死して皮をのこす」といいますが、雉は死しても生きているのと同じような姿で床の間などにかざられお役に立っている。

喜寿 五一 一二 二〇

喜寿を言霊（ことたま）からいうと、その人の経歴、その人の歴史をかくのも記述Ⅱ記事といえます。

鳥にも雉という鳥がいます。この鳥は誠実で努力をする鳥だといえます。誠実で努力した七十七年であつてはじめて喜寿なんですね。

記章 四四 八 八

なにを示す記章であるか。（中略）それは「私は神の子です」という自覚の表示である。（中略）記章はまた「気象」である。神の子としての気象を言語動作に示しているのではないか。

徽章（捧誠会） 三八 一二 一二

私の隣席にいた人が、捧誠会の徽章をみて、「だんなの徽章は何ですか？」とききた。それから私とその人との一問一答が始まった。「私の徽章であり、私の声明（生命）です」「生命ですか？」「生命でもあり、また、声明です」「私は世界各国を廻り、

氣随氣儘

み 三四 一二 二三九

いろいろな人と会いましたが、徽章を「声明」（生命）と聞くのは今日ではじめてです。何の声明ですか？「平和建設の声明です。捧誠というのは平和建設の生命です…」（中略）「しんぼう」という言葉がある。それは、苦勞、艱難を齒をくいしばる思いで我慢せよというのではない。「しんぼう」の「しん」（神）は「誠」である。「ぼう」は「捧」（ささげる）である。まことをささげるその姿、その心こそ、平和そのものではないかと教えられているのである。

何時迄も氣随氣儘で通るなら行き詰まりは開かれず、幸福にもなれず、人に嫌われ、寂しい人生を送らなければならないことになります。（四月二五日）

奇蹟

ふ 四〇 八 一五

「奇蹟」とは、尊い積徳の人、誠の人に現れる「貴誠氣」の意である。

奇蹟

命 四八 一一 二六八

奇蹟とは日々積徳のあらわれである。

奇蹟

命 四八 一一 二九六

奇蹟が現れるというが、これは貴い積徳の人、誠の人にあらわれる「貴誠氣」の意味である。

きたない

ふ 四二 九 七

天地の間にはきたないというものは無いはずであります。それにもかかわらず、きたない、きらいだ…などと思われるのは、自分の心の中がきたないのであります。

汚い

訓 一八 八 三三

この天地間に汚いと云うものは無いのであります。それなのに、これは汚い、これは嫌いなものだと思われる中は己の心の中がきたないのであって、心の汚い人が一家の中に一人でもあれば、その家にはよりつかず、しまいにはその一人の為に折角の徳も逃がしてしまうようなことがあります。

きたないところ

命 四八 一二 一一七

きたないところというが北は神の座である。これがなくてはならぬ。せまいところというが背は前ではない。感違いをしているわけであるから、かかる言葉を出している、人とすれ合いを起したり、とり違いをしたりする。

切ってつなぐ

ふ 四三 七 九

切ってつなぐ——とは二つ一つである。（中略）言葉でも、切りつばなしではなく、つないでおくことが大切である。「いずれ…」というのは、つなぎ言葉である。

氣堂

ふ 五〇 四 一一

私は「氣堂」と号しております。「堂」は、堂に入るといように「悟り」でありま

軌道 敬 四一 一二 七三

記念式典 ふ 五一 四 四

昨日 今日 明日 ふ 四二 一〇 三

気の毒な人 ふ 三八 八 一六

きびしい 誠 四八 一二 一四六

厳しさを乗りこす ふ 四六 三 二六

希望 ふ 四六 六 八

きまり ふ 四二 五 八

きまる 命 四八 一二 六一

して、また、誠をつらぬくことでもあります。

軌道―は、「氣堂」に通じる。この元旦から私は「氣堂」と号した。

発会式、記念式典は奉仕であります。

昨日の行いは今日の行いに現れ、今日現在の姿は明日の姿になるのであって、日に例えますと「三日」であります。

人の悪口ばかりいい、毒説を流すから、自分自身が、「気の毒な人」といわれる身になるのである。

「きびしい」ことを「つめたい」という。うちの親はつめたい、というのは、きびしいということです。(火)水、風はつめたい。そのつめたい中に平和がある。きびしい道をのりこさせることによって平和が生まれる。

若い人にしても「きびしい」のがいやだといっているような人は希望が、うすいのではないですか。もし、あつても……。希望があれば、かならず苦しさを乗り越えていくと信じます。

希望には、人の道の希望と、神の道の希望があります。物にそこがれをもつ、これは人の道の目さきの希望です。(中略)物や形には限度があります。すべて有限であります。しかし神の道の希望はご承知のように無限であります。(中略)神の道の希望は、一身一家の繁栄や幸せのみを対象としていません。多くの人々や、子々孫々にまでつづく幸福を生みだしていく大きな希望であります。

いつも「きまり」がつかず、混乱しておりますと迷いが生じます。心の「きまり」がついていなければ、やはり混沌とした事がらが次から次へと発生してまいります。

物ごとのきまりをつけるとか、物ごとがきまるとか、きまらないという。入学がきまるとか、結婚がきまるとかいう。きまるとは気円で心が円くなることである。心がまるくなると物ごとがきまるのである。角ばった心、とげとげしい心を取り去り、まるく優しい感謝の心になればなにこともきまりがつくのである。

君 四九 一 一五

君のためなら命もいらんということ、これはもう考え違いであって、君というと天皇陛下のことだけしか思っていない。君というのは「懐かしい」という親しみの心なのであります。

君が代 五二 八 三

君が代を歌いますと皇室中心であるという考えをもつ人もおりました。どんなに説明をしたところで分りません。君という言葉は、キは空気、ミは水であって空気と水であります。君というと、天皇であり皇室であるとか考えられない人に、君の言葉を説明しても分る筈がない。言葉の力は世界を結ぶという本会の趣旨を学んでいればともかく、そのようなことに関心もない人にくら言葉を説明しましても、かえって迷信のように思ってしまうものであります。

君が代 四二 一一 二三

君が代は天皇陛下お一人の代をいうのではない。「君が代」は「君の代」であり、「君」と呼ぶその人の代である。あなたに許し合い助け合っていく国民の代である。私も国民、君も国民、みんなが協力互助、お互いを称え合っていく、それが「君が代」の祝福である。「君」は「貴美」である。また「キミ」は「幹」であり元である。お互いに人を敬って、愛と愛とを捧げ合い、尊敬と尊敬を捧げ合っていく、それが「平和の元」である。「君が代」を心の底から歌う真意はここにある。

君が代 四二 一一 二四

広く温かい心で人と人とが和合して協力の実を示していく「君が代」のこの心は「大和魂」といい、これが国旗「日の丸」に象徴される。故に「君が代」と「日の丸」とは二つで一つであることが心からうなずけるのである。

君ヶ代 五二 一一 三

「君」は「貴美」である。また「キミ」は幹であり元である。お互いに人を敬って、愛を捧げ合い尊敬を捧げあっていく、それが平和の元である「君ヶ代」を心の底より歌う意味はここにある。

義務 三四 一一 六七

常に徳を積み及ぼすべく、小さい所から人の喜ぶ行いをして、協力互助の実を示し、喜びを分け合うようにするのが人としての義務であります。(二月一日)

義務 三四 一一 八六

親子は睦まじく協力融和が出来て、明朗和楽の家庭を建設し、子孫の繁栄の為に努力

きめこむ

ふ 四七 一 一五

するようにしなければなりません。又人は生きるのみでなく、活かされている大恩(体温)を弁え、人としての尊い姿を永遠に自覚して、楽しく麗しい生活をする事が、神も人も望む所であり、それを実行に現していくことが義務でなくてはなりません。

(二月十一日)

思いこむ——あるいは「きめこむ」ともいう。思いこむのは、心のなかに強く持っているものであって、いったんこうと思ひこむと、なかなか放さない。おれの思いは正しいと思ひこんでいる。そうして、むだな苦勞をしているのである。「思い」を放してみること一つ一つの交流である。箸をもったままでは、なに一つできない。箸を持ったり放したり。その交流があればこそ、食事もできる、手紙も書ける、仕事もできる。交流の根本義を忘れてはならない。

救済

ふ 四二 一一 一一

真心から救済しても、後で恩が仇となる場合があります。しかし終始一貫して真心であれば、たとえどのような悪説をあげられても、ひどい目に会わされても、決して不平不満はありません。利益のからだ救済であれば、ちよつとした不利がかかっても、「ここまですくしているのに」と、思わず不平不満のとりこになつてしまいません。救済には、恩恵に報いる救済と、無条件の救済とがあります。真実、真心の救済は、恩がないにかかわらず実行することであつて、浦島の家族が亀に救われたという話は書いてありません。即ち恩を受けていないのに無条件の救済をしたのです。

救済

訓 一八 八 一一

救済することは真心からでなければなりません。真心からの救済は、救済をして後に恩を仇で受けても、決して不平不満は無い筈であります。利欲の為に救済するのであれば、なにかの時に不利がかかって来ると、これ程世話をして救済しているのに、何と云う災難に逢うのであろうかと、不平が起こり又救済を受けた人も、その救済が何の効もなくなつてしまう場合があります。

救済

誠 四八 一二 一〇七

救済とは「救つてあげる、助けてあげる」という言葉にもつながります。そこで「私のような、経済的にも肉体的にも恵まれない者が、とうてい人さまを助けることなど

救済

誠 四八 一二 一〇八

できません」という言葉もでてまいります。こう思う人もずいぶんあります。なれども、毎日、一円づつ貯金して、百円にしてお役にたてる、これは救済の一つである。本会の趣旨は「四つの交流」である。心と肉体と言葉と物、これを正しく強く交流していくように教えられております。一言の言葉といえども、お金を頂戴するより有難い場合がある。また、物を頂くよりも愛情・親切をいただいで生涯わすれられぬほどの感謝を覚える場合もある。ところが、これが逆しまになりますと「かわいさあまつて憎さ百倍」となることもある。これでは救済にならない。ねたみ、そねみを持って施すというのは、結局、仇になっていくのであります。

救済

誠 四八 一二 一一〇

一言の言葉をさしあげる。一枚のお煎餅でも四つに割って四人にさしあげる。そうしておけば、どこからか、いつかは、縁のつながりの人々から回ってまいります。それが、なかなか待てない。待つておれば必ず回ってくる。これは嘘ではありません。ですから人のために、世のために、国のために一生懸命にやっておれば、いずれ、わが身に、わが子に、わが孫に、あるいは兄弟に必ず回ってまいります。これはまことに尊い美しい姿であります。これを「救済」というのであります。

救済

誠 四八 一二 一一一

救済は「まこと」であり「恩返し」です。ですから、この世に生まれてきたご恩に、また、生き活かされてきたご恩に報いていくようにしていきましょうと、教えみちびいているのであります。

救済

誠 四八 一二 一一三

心の救済は最高の救済であります。皆さんも、人の心を救済していこうとすれば、やはり、こちらも心の訓練をしていかねばなりません。やはり、心の浄化につとめていかねばなりません。

及第するには

命 四八 一二 二八二

成績がよくても落されることがある。及第するためには人にかわいがられることが必要である。威張らず、憎まれず、人を尊敬する、日頃の心構えが影響して拾いあげられるのだ。

今日

ふ 四一 三 一四

一日も今日であり、教え導くことも教化である。

今日 四三 一一 三

今日（きょう）という言葉は「教」であり「協」であって、万事万端「協和」（今日わ——きょうわ）であります。

今日 誠 四八 一一 二五

「今日」（きょう）という言葉でありますが、「今日」は「教」であり「教道」であります。「教道」は「郷土」でもあります。「教道」はまた「道教」であり、「道教」は「同居」である。そしてこれは「度胸」であります。「度胸」とは、動揺転倒しない心と体とであります。五年や十年で、この度胸はそなわりませんが、ゴタゴタの中を通りぬけていくうちに——感情的な争いを通りぬけていくうちに、一步一步、度胸がついてくる。——七転び八起き。七転八起。

教育 み 三四 一一 三四

教育に於いても、人格の完成と生きるために、凡ての事柄を身につけて役立つようにすべきであります。（一月十七日）

教育 み 三四 一一 二〇三

教育は人が生きる為に、生活に必要な学問を学び、それを実行する為の学びの道であります。（四月七日）

教育 命 四八 一一 一三一

教育とは教行くである。教え行ずることであって、今日行くべき道を誠捧げて教え行ずることである。今日は（今日ゆくべき道は）教話であり、教え話すことである。話は○で円い心、零は霊であり、無条件、無限、明朗である。広い大地の心をもって、今日わ今日わと進行すべきである。

教育勅語 ふ 五二 一一 五

教育勅語は、今では教育の場で用いられてはおりませんが、その中には平和な家庭の像があり、健全な社会の構成が説かれ、協力互助による国際関係が論されていました。

教育勅語 ふ 五三 一一 三

教育勅語は大極のひびきであり、天地自然の法則であります。勅語には、日本が世界に類のない皇統連綿たる天壤無窮の皇運を扶翼すべしとのいのちの親の大御心が示されています。

今日一日 ふ 四三 一一 三

今日一日を一代なりと信じそれゆえにこそ、今日一日に真剣に身心を養うていかねばなりません。

今日一日 命 四八 一一 四四

今日という日は一日であり、今日一日は二度と再び来ない尊い日である。人生一代を

教科書 　　ふ 四 五 九 五

教科書 　　ふ 四 七 六 一 六

教科書 　　ふ 五 〇 八 二

教科書 　　ふ 五 二 六 二

教科書 　　ふ 五 二 一

教科書 　　み 三 四 一 二 二 五 三

教科書 　　み 三 四 一 二 三 〇 五

教科書 　　み 三 四 一 二 三 三 一

縮めていえば、今日一日は一代であり、夜が明けてさめた時は生れた時であり、夜になり眠りにつく時は死する時である。(中略) 今日一日こそ大切であり、今日一日を一代と信じ、今日一日を一大事と信じ、おたがいに一分の隙もなく学び修めただけの知識を発揮し、悟つただけの教訓を実行してゆかねばならぬ。

世の中のできごとは、すべてが人が学び修めるための教科書であつて、その時その場にあらわれてくるのであります。

現在現われてくるものはみな学ぶがための教科書である。

関東大震災は、大きな教科書でありました。天地の理法であり、いのちの親の教科書でありました。

いのちの親は、お前の過去はこのような過去だと、今、お前はこうして苦勞艱難していても未来はこのように開けてくる。また、次の世には立派に生まれ変わってくるんだといつて、過去と未来の教科書を、その人々について、いのちの親は行動で示して下さっているのであります。

天地自然は一言も説明しません。ただ黙々と行動するのみであります。そこに無限の眞の教科書があります。もつともすぐれた人：すなわち聖者と仰がれる人々は、この自然を師といたしました。その次の人は人を師とし、その次は經文を師といたします。(裏表紙)

常日頃、人の生活には喜びも悲しみも出て参ります。(中略) すべて出てくることは教科書と思わなければなりません。(五月一日)

人の言動を見聞して自己の足らない処を改め、他人の足らない所を教科書として学び、悪いことは切り離し、水に流し、若し足らない所を拾い上げた時にはそれを淨化して役に立つ様に工夫体得することが指導者の任務であります。(五月二七日)

どんなに苦勞艱難が有りましても、魂を磨き、万事修める為、学ぶために身の行いを改め、心の持ち方を切り替えていく為の教科書として万事が身にかかつて来ることを

教科書

み三四 一二 三六八

気づかなければなりません。それを悟り実行する所に花咲き実る時も来るのであります。(六月八日)

教科書

み三四 一二 四五八

地上に春夏秋冬があるように、人生生活にも苦楽が繰り返されます。(中略) 苦し
いからといって思いつめ、人の行いを見、言葉を聞いて迷わず、他人を良く見直して、
悪い所を見たり聞いたりした時には、それを教科書として学び、良きことは手本とせ
ねばなりません。又喜びが現れた時には自惚れず、万人により以上の奉仕を忘れては
なりません。(六月二十七日)

教科書

み三四 一二 五四〇

草木は雨風を受けても悲しまず、怒りも迷いもなく、雨風に感謝しつつ成長しており
ます。この姿を見て、人は手本とし学ばねばなりません。(八月九日)
目に見えぬ心の中を見きわめる為に、周囲の人が言動をもつて教えて下さるのであり
ます。他人の善し悪しを見た時は、自己の心の中に其の善し悪しが写って参ります。
人を批判し、あの言動は間違っている、あの人の言葉や行いは自分の心に添わないな
どと思う間は心が清められていないのであります。(九月十八日)

教科書

み三四 一二 六三六

森羅万象ごとごとく人格を作る為の教科書と教えられております。(中略) 教科書
になる人は其の場だけで終わることもあります。人だけでなく鳥畜類もその通りであ
ります。(十一月三日)

競技

ふ四七 一一 七

スポーツは競技であり、誠の道を教えみちびくのも教義である。

教義

ふ四二 四 三

教義―は、総裁を中心にして、その筋の徳高き人々との話し合いできめられたもので
あり、具体的に申しますと、「綱領」「典範」「偶感」であります。

教義

ふ四二 四 五

いのちの親のみこころが教祖に直通して示されるのが「みおしえ」、次に教祖の心を
通じて表わされた言葉が「教典」、総裁の心を通じて表わされたものが「教義」―と、
いつも申し上げますように、ここにもはつきりと一、二、三、の順序が示されてお
ります。

教訓

誠四八 一二 一八四

この身体に教えられることは「身しらせ」と申します。病気とは申しません。いのち

教訓 命 四八 一二 一八七

の親は、身に知らせて私たちを教えみちびかれるのであります。これをまた「教訓」とも教えられております。それによつて勉強せよということでもあります。長い道中には宿題があらわれる。それは教訓ともいう。宿題、教訓のあらわれた意味はわからないとしても、それに対して捧誠感謝することを忘れてはならぬ。教訓の意味は指導者の言により悟ればよい。そして、その言に従い、素直に実行すればよいのである。

恭儉己を持す ふ 五〇 一二 四

狭心症 ふ 四〇 八 一四

恭儉己を持すとは万物を尊愛し万人を尊重することであります。十二時は時計の針が合掌する時刻である。本会ではこの時刻に「平和の祈り」を行い、平和の念を送っている。十二時が来ても、これを行わず平気で行くのは、時計を持っていても、その時計がやくにたたないのと同じである。(中略) 時間を守らず、でたらめな行動をしておるとどうなるか。一軒の家にしても、出入り口があるのに、そこから出入りせず、またこれを塞いだり定められたことを守らないとどうなるか。高血圧とか狭心症とかいうようになる。「狭心」は「教信」に通じる。教信、信教、心境、新境、神境—とつながっていく。狭心症は心臓の動きが止まり、血管が圧迫されて息を引きとるようになる。「引きとる」とは、嫁がせた娘を引きとる、納めた製品を引きとる、勤めに出した者を引きとる：など、不利を引きとつて苦労することにながる。

教祖 ふ 三八 一一 二五

教祖 ふ 三九 一〇 三

教祖 ふ 四一 七 四

教祖 ふ 四五 四 一〇

神のお供をするのは教祖である。教祖のお供をするのは総裁である。教祖としての私は、命の親の命に従つて行動する。私は総裁として教義を教え導き、教祖として天稟によつて、会員の皆様の悩み苦しみを我身に「みしらせ」を受けながら払い清め、皆様の不徳をおぎなつてまいりました。私は教祖として命の親のお取り次ぎする徳と力と愛の持ち主であり、神の子である子等達の悩み苦しみを払い清められるだけの天稟を持っております。

総裁は体験にもとづいて教義を説く。教祖は「ことたま」にもとづいて、おさとしを

する。

私は教祖として神のみ心を神の子に伝え、神の道を説き、徳と力と愛により靈光を送り、神の子を教え導き育てる。

教祖は、典範第一条に示されているとうり、大極の響きによって、すなわち、みおやの心をさとされ、その心を神の子の皆様に伝えるという使命をもっているのです。この使命は天稟の資質をもつが故に、させて頂けるのであります。

大極のひびきは宗派を超える。これをお取り次ぎするとき、教祖の言語動作もまた一宗一派に拘泥せず、これを超越する。

『出居清太郎は神の子である。神すなわち親のみ心を伝える取り次ぎ人である。「教祖」と出居清太郎の頭に書いてあることは、出居清太郎の頭の上に教祖がおることを知らねばならぬ』

一言の言葉でも実行として伝えた言葉は、私の考え、知識でなく、神の取り次として伝えたのである。なにがなんだかわからぬ人もあろうが、実行したか、しなかったかで、その言葉の真がわかってくる。自分の迷いを解決してほしいと、いろいろ話しかける人があるが、この時の言葉は相談である。実行は教祖としての立場から伝えるのである。

修養団捧誠会の典範第一条（中略）に示されてある通り、教祖という資格と責任があることを心得なければなりません。また、研修積徳ということは、総裁の資格であり責任であることを考えなければなりません。

教祖は大極のひびきによって、神の子に命の親のみ心を諭します。総裁は教義・教典を宣布普及し、出居清太郎個人は体験を語ります。

教祖並びに総裁出居清太郎の専門は、大極の声―声なき声―を神の子におとりつぎすること。

―教義教典を宣布普及することでありす。

教祖 　　ふ 四七 六 一九

教祖 　　ふ 五五 一 八

教祖 　　敬 四二 一二 一〇七

教祖 　　敬 四二 一二 一五一

教祖 　　命 四八 一二 一八八

教祖と総裁 　　ふ 三八 一〇 二

教祖と総裁と個人出居 　　ふ 四六 五 二六

清太郎 　　誠 四八 一二 一二六

教祖並びに総裁出居清太郎の専門

教祖の行動 　　ふ三八一〇　一八

実行は無条件だ——といつも私は説いている。（中略）命の親の御命のままに行動するのは、実に非常である。非常の場合には、非情にならなければ、非常をのり越せないのである。教祖としての行動は総裁の上にあることを承知してもらいたい。

教祖の行動 　　ふ三八一〇　一九

木の枝は動いている。それは人間の目に映る。その枝は一体だれが動かしているのか？風の姿は目に見えない。私は誰から動かされているのか。私は人から動かされているのではない。目に見えない命の親によって動かされているのである。

教祖の行動 　　ふ四七一　二七

教祖としての行動は、おぼえようとしくなくても、忘れてしまうことはない。

教祖の三信条 　　ふ三九一　一四

私の信条は次の三つである。

一 神は自ら真心を持つて実行することによって 知ることが出来る

二 信じて行えば断じて勝つ

三 愛は死より尊し

教祖の信念 　　ふ四六五　二二

教祖の信念として表の方は——太極のこの徳の光というものは百万億土、燦然と照らす——とあり、裏の方には——日月の運行は自然なり——というように出ております。

教祖の責任 　　ふ三八一〇　三

教祖の責任は、大極と交流し、声なき声を肉声に現わし、また天の響きを言葉に、文字に現わして、み教えとして会員に実行を示します。常に教祖としての実行は神の道であり、無条件であることを強く力説します。時に会員同士は人の道の行ないを無条件実行と聞き違いしたり、思い違いをしたり、誤解して自ら迷いもがくようなことがないでしょうか。無限の徳、力、愛。この三つを及ぼす時は靈光をさずけると教えられております。そのときこそ、教祖の責任であり、かような時こそ己を空しうして無条件実行で聞きおさめ、実行をしなければならぬのであります。

教祖の責任 　　ふ四四一　一五

教祖は神の使いとして、神の子である皆さんに対して、靈光を送り、靈光を授ける責任が教祖の責任である。

教祖の天稟の認識 　　ふ四〇一〇　二

教祖が享受せる天稟の資質を正しく認識せよ（中略）これを一口に申しますと、善行を積み重ねて行けよ ということでありませう。——朝起きすること。——お掃除するこ

教祖の発言 　　ふ 五 一 七 四

鏡台 　　ふ 三 九 八 二 二

鏡台 　　誠 四 六 六 一 九 〇

教典 　　ふ 四 二 四 三

キョウド 　　ふ 四 五 九 二 一

教養 　　誠 四 八 一 二 三 〇

と。一人に喜ばれること。—あらゆる人に信用されること。—あらゆる人に愛されること。この行いが教祖の天稟の認識であります。

教祖が発言することは、天地自然の法則に基づいて実行せよと、神の使いとして神のみ心をお取り次ぎしているのであります。

女性が鏡をみて顔や姿を見直している。このような鏡を「鏡台」という。同じ姿を映すから鏡台（兄弟）という。鏡台はまた「教台」である。この世の中のすべてが教えの台である。

「鏡台」という言葉は「兄弟」に通じているのであります。兄弟がよく似ている。父親に似ている、母親に似ている。鏡に映るように兄弟は父母や祖父父母のおもかげを伝えておるのは事実であります。ここを、みおしえには「うつし世に神の子として生ませたもう……」と教え示されているのであります。

教典—は、教祖の魂を通じて、人格の完成に万人の心を養う糧としてお諭した言葉を申します。これを具体的に申しますと、「誓いの詞」「神法」「聖感」であります。キョウドという言葉は生れ故郷のことも考えられるが、教える道もキョウドウである。それを反対に下からいきますとドキョウドです。教える道は度胸であり、ふるさとであります。ここに言霊の真理がある。これが命の親のお心である。

「教養」とはなにか。本会の趣旨にもとづいて申しますと、人格の完成に邁進していくことであります。これは一代や二代、百年、二百年で完成の域に達しませんが、完成に近づいていくように前進する。これ即ち「進行」である。（中略）徳をつみおよぼし、善行を重ねていくことを「教養」と教えられている。（中略）「教」（きょう）は「今日一日」の「今日」（きょう）である。「養」は、心を養ない身を養なう。身を養なうのは生きるため。心を養なうのは、活かされているこの大恩に報いるための奉仕を、いそいそとできるようにするためである。今日一日を一生懸命に努力する——この教養を高めて青少年を善道にみちびくために徳をつみおよぼしていく。

きようよりはじめて 命 四五 一 一二

昨日の不愉快だった気持を今日まで続ける、昨日の嫉妬心などが今日まで続くのではなくして、昨日のうちに過去のうちにそれを整理して、きれいな気持で朝を迎える。つまり一日一日をそういうようにしてゆくことを（今日より始めてまことのみちを踏み行なうことである）と教えています。

協力 命 四〇 一一 一七

気の長い人、短い人、身の重い人、軽い人―魂の歴史が異なる通り、それぞれ異なっている。そこに「協力」がある。皆、同形であつては「協力」の必要もあるまい。湯わかし一つでも、曲つたつると、とがった口と、丸い蓋と、大きな胴とがある。それぞれに形も役目も違つている。それが互いに協力するので、用がつとまる。

協力 命 三四 一一 二七四

病む人も病まれる人も過去に深い因があればこそ、恩の送り合ひであり、両者共に苦しい悲しいことではありますが、世の中はもちつもたれつ協力していくことが教えられています。（五月十二日）

協力 命 三四 一一 六六八

親指が如何に力があると申しましても、親指だけで物を持つことは不可能であります。二本の指が相和してこそ物が持たれるのであります。世の中は持ちつ持たれつ、話し合つて協力する所に愛も力も徳も備わつて来るのであります。（十一月十九日）

協力 命 三四 一〇 一六六

協力という事は団結であります、一人で成り立つ世の中ではありません。甲乙手をつなぎ仕事をする事だけが協力ではない。掃除に、炊事に、勉強に、仕事に、心身ともに打ち込むこと、すなわちなりきることが心体協力である。心体協力ができれば真に生き生きと美しい生活ができる。事業もまた赤字を出すようなことはい。神慮に合一する、己を虚しうする、隙間のない気持、真剣な態度、みな心体の協

協力 命 四八 一一 八七

力であり、心体の合掌である。

協力合掌 命 四八 一一 二九二

若いⅡ和解Ⅱ協力合掌することⅡ平和となる。心の底から感謝の心を捧げあえる人は心やすらかにやわらぎ、いつまでも若いのである。

協力互助 命 三七 一一 二

人は病気になる、その当人だけを治療して直そうと考えておりますが、身の悩み、その他の災難によって失敗しますと、その当人だけを責めて、その人だけをよくなら

しめようとして訓戒を与えているような事にめぐりあいますが、それでは協力互助とはいわれません。

言葉の力と物の力の両面において導いていかれる人にならなければ、協力互助の実を示すということにはならないのであります。(十一月二十日)

心体が真に協力し、神慮に合一するには相当の年数がかかる。神慮に合一した時には、無限の光明が与えられるのである。協力互助はなに^にことをなすにも、またいついかなる時にも必要なことであるが、心体の協力はその第一段階であり、また必須条件である。いくら親指が力があっても、物を動かすことはできても、つかむことはできません。

親指に、四本の指が協力して物を持ち、つかむことができる。この理を知ってください。人種・国籍・信教を問わず、隔壁せず、よい言葉、よい行いを示し、常に暖い、広い、

清い心で、協力と融和を計らなければなりません。(中略) 言葉や物量のみの協力融和では、一時だけのことであつて、精神的のつながりが無ければ永遠にはつづきません。(一月一日)

人と人との協力と融和が最も肝要であります。先ず物量よりもお互いの心と心が謙虚でなければなりません。それは誠を捧げる以外にありません。(一月十四日)

日常生活には不平を思い、腹も立ち、迷うことが数々湧き出るのであります。それを打破して、明朗化していくには、協力と融和がなければなりません。(二月二十日)

清き水、汚れた水と申しましたが、それは、清き水が汚れ、汚れた水が清くなるのであつて、絶えず循環しているのであります。この根本が悟れますと、清き水も、よごれた水も、共に尊しということが心の底からわかるのであります。即ち、いつも姿や形にとらわれることなく、この根元に心の目をむけていくことが大事であります。

言いたいことは己を虚しうして言え。最大の響きがある。

常に風雨あることよって地上は清められ、地上の革命ともいふべき天変地変によつて改造され、進歩してまいります。破壊されることは誠に残酷であります。目に見

協力互助
み三四 一二 六七一

協力互助
命四八 一一 九一

協力の理
ふ四六 一一 八

協力融和
み三四 一二 二

協力融和
み三四 一二 二九

協力融和
み三四 一二 一〇四

清き水と
ふ四二 五 一〇

虚心の言
命四八 一二 二七三
清める
み三四 一二 二七二

きらいだ

敬 四二 一一 六二

嫌う

誠 四六 六一 一六

えた所であればお互いに分かるのですが、目にも見えず手にもつかめない心の中は常に汚れていることに気がつきません。(中略) 内外共に整理整頓して美しく清めることを常に忘れてはなりません。(五月十一日)

「いやだ」「きらいだ」というのは、すべてを切っていくんだよ。

みおしえに「ことたまのまにまにみおしえをまもりつつ……」とあります。ところが、ややもすると、「私のまにまに……」になってしまう。わが意に添わなければ相手を言葉で斬る。足で蹴らなくとも「嫌って」「いく。人を嫌うのは斬ることであります。ここに「毒舌」と示されておりますが、言葉と言葉との交流を斬る、これが即ち「毒舌」であります。

「真楽」は「気楽」と違つて神の道である。飲んで食べて遊んで……は人の道であつて、これは気楽である。「読書真楽」とは、誠を捧げて読むことである。といつて、疑り固まつて読めというのではない。真剣の中に楽あり、これはいいかえれば厳しさの光りでもある。「真楽」は厳しさの中に光を見出すことである。

気楽

ふ 四一 一 一七

嫌われぬようにせよ

命 四八 一二 二七〇

きらわれる

命 四八 一二 一〇八

笑われるうちはまだよいのだ。嫌われないようにせよ。

きらわれるとは切りわれることである。この心が出てくると家庭も国家も乱れる。人とのよいつながりが切れる。不明朗な場となる。低い心で相互の理解につとめてきらわれぬようにせねばならぬ。

嫌われる

誠 四六 六一 二九一

もうあの人とはものをいうまいと思う。心と言葉だけではありません。言葉がきれると、おのずから肉体と物の交流も止まります。こうして縁につながる者同志が縁を切つてしまいますと「嫌い」「嫌われる」。嫌われるということは「こわれる」ということ。なにをなしても成立しない。すなわち「切」ら、「割」れるのであります。

義理

ふ 四四 一〇 一八

義理という言葉は「ぎりぎりいっぱい」である。「精いっぱい」である。義理は人の道であるから人の道に、ぎりぎりいっぱい、精いっぱいの誠をつくすことである。

昔の人はこの義理を固苦しく解釈して、義理にしばられ、いろいろの悲劇をおこして

切り替え 五〇 四 一三

いる。堅苦しく考えるから「苦しく」なるのである。今日は自由、平等の世の中である、ゆえに義理が消えうせんというのではない。ひとたび受けたご恩は忘れず、これに報いていかねばならぬ。

なやみを喜びに回転する、苦しみを喜びに回転する。これが誠であり、切り替えであります。

切り言葉 命 四八 一二 二六五
切り言葉 五三 二

言葉で人を切り、人の魂を傷つけることは、刃でその人を切ったのと同じことになる。大根を切ったり鉛筆を削ったりする時に、刃物によって事故をおこすのであります。言葉の調和を欠いた、いわゆる「切り言葉」「切り口上」は刃物で刺すより罰が重い。言論によって人の魂に傷をつける、言葉一つで人の心をまどわす。こういうことは天地自然の法則によって重罪であります。（裏表紙）

切る 切れる 四二 四 一一

「切る」「切れる」というと、なにかにつけて良い方に解釈しないものですが、よくないことであるとは限りません。時によれば、切ってつなぐこともあります。切ってつなぐことを知らなければ不自由しなければなりません。

気をつけ 振 四二 九 七

毎日毎日気をつけてゆかねばなりません、「気をつけ」と云うことは捧誠会でも使います。それは、わき目もふらず、心も動揺せず、冷静な（靈性）美しい気持になれよというのであります。

気をつけ 振 四八 九 七

「気をつけ」の号令をかける趣旨は昔の軍隊の復活でなく、現代の容易ならぬ危機の時代を万事「気を付けよ」との注意である。

気をやむ 五〇 四 一二

「気をやむ」とは、思いちがいです。感ちがいです。みなさんの生活においても、毎日のように、聞きちがいがい、思いちがいがい、感ちがいをしております。

氣丸 四八 四 六

世の人が神木というておりますが、年数を重ね、山に聳え、また地上に聳ゆるその木に、注連（しめ）を巻いて神木というておりますが、言霊によつての神木は男に授かつておる大事な生殖器であります。またそれにつながる大事な玉を氣丸というております。その玉はどなたも二つあるはずであります。目の玉と同じであります。目は魂

きんちよう

振 四四 一 四

であります。種をまいても芽が出なければなりません。また辛棒とも申しませう。捧誠という文字は真を捧げるですから、言霊によつて下から読めば真捧とも読めます。金鳥と云う鳥は目も鋭く視界を見張つて、その役目を果たします。金鳥は緊張する、号令する、神仏に合流する。神慮に合一することが、「きんちよう」であります。又「きんちよう」は「ちよきん」金を貯金する。金の運営に対する善し悪しの心を使うことでもあります。

緊張

ふ 四〇 五 二八

固い気持ちや不動の姿勢を「緊張」という。肉体にしても緊張のれんぞくでは長続きしない。固い凝りかたまつた心では伸びない。だから「冷静」でなければならぬ。

金鳥

振 四四 一 四

神武天皇が東征のみぎり苦戦に落入られた時に、弓の上に鳥が留まつた。その鳥の金色の光に賊の目がくらみ勝利をおさめられた故事があります。

勤労

ふ 四八 二 九

人は国造りとして、形あるものを研究し勤労によつて造り出してゆきますから、勤労に対して捧誠感謝の誠をささげよ、といのちの親はさとしております。

勤労

解 二八 六 六

地球は無条件で運行しております。利益のために争つて居りません。地球上に生きて活かされている万物は、凡て動いて居ります。即ち働いてるのであります。これ皆尊い尊敬すべき姿であり勤労なのであります。

勤労

誠 四六 六 一三七

勤労は人に課せられている義務であり責任であります。義務である以上、理に反し人の道にはずれた勤労に対しては断固いましていかねばなりません。たりる、たりないはおたがいさまであつて、たりぬからとて不平不満をいうたり、嫉妬心を起したり、ひがみ心を持つたりしますと、この肉体の柱になつて居る。「骨」に故障を生じ、だんだんと弱つてまいります。

勤労

誠 四六 六 一五〇

勤労とは普通にいえば、「まじめに働く」ことであります。そう考え、そう教えられております。まじめに働く——とは、天地自然の法則にもとづいて動きなさい。地球が回転していると同じように一日一日、一步一步の前進をしなさい、ということになります。勤労は人のみのことではありません。地球の回転もまた勤労であります。

勤勞 命 四八 一二 九五

勤勞は神聖で人生々活においてなさればならぬ尊い使命である。勤勞を怠る人は、人に嫌われ不幸になることを希望するようなものである。勤勞をみずから求め、勤勞を愛し、尊び親しんでこそ明るい生活ができるのである。

勤勞 命 四八 一二 九八

勤勞の尊さを思えば、職業、地位、身分のいかんを問わず、あらゆる人の働きに「ご苦勞さま」といえるはずである。また家族の人々にも、その勤勞を謝し、感謝の言葉が出るはずである。勤勞感謝の心こそ、天地自然の法則にかなうから、災もなく迷心にもとらわれず、誘惑にも負けず、動乱も起きず、正しい、明るい、うるわしい生活の根元となるのである。

勤勞 命 四八 一二 九九

病床にある人に、勤勞の実行の示されることがあるが、この点を反省し、心体は動けなくとも「有難う、ご苦勞さま」と感謝の目でお礼の気持をあらわし、「有難う」と声を出すぐらいはできるはずであるから行うべきである。

勤勞 命 四八 一二 二五三

高価な金、砂金は大地や砂の中から出るように、低い心は最も尊い心であつて、おたがいに低い優しい心で協力することが勤勞の実行になるのである。

ク の 部

九 か 四四 四 四六

ここに示されている「九」は「空」（くう）であります。「天」であります。己を虚しくした心、その心が日月であります。北辰星として輝いている絶対うごかない、あの星でございます。その星の光、光明：その空（ソラ）であります。空（くう）であります。

九 ふ 四五 一〇 二七

九を忘れることは邪念をなくすこと。九は空であるから邪念が空となれば苦はなく無条件となる、無条件となれば捧誠感謝である。

苦 ふ 四四 九 八

苦（九）をのり越えて十になる：七、八、九：と、この苦の峠を越えるのが、苦勞

苦 五二九 四

である。「七苦八苦」というのがそれである。
九を乗り越えて十、十九を乗り越えて二十、二十九を乗り越えてようやく三重丸が頂
けます。苦を乗り越えて、人生に光がさし、難あつて有難しという心境に到るのであ
ります。

悔い改め 三四 一二 五五五

一日も早く悔い（杭）改めて、迷っている人を救い、争う人の無いように万人協力融
和に進むべきであります。（九月二五日）

悔い改め 四八 一二 一九一

この悔い改める——これが私たちの人生行路において、力強い前進の足場であります。
例えば、会社の公金を使いこんだ。それが露見した。こういう場合、「やめればよい
のだ」と辞職願いを提出する。常識的な行動であります。これでは不忠実であると思
う。本会の趣旨にもとづいて申しあげるならば、——やめるとは、なにごとだ。改め
て、一切を捧げて復興に努力する社員であつてこそ立派な社員ではないのか。という
ことになります。

釘がきく 四三 一 七

肉体のわずらいを「病氣」という。病氣の病（びょう）は「鉦」である。鉄と鉄とを
つなぎとめるのに鉦をうちこむ。木材と木材をつなぎとめるのに釘をうつ。

釘や鉦がよくきけば、しっかりした建造物ができる。きかなければフラフラした家し
か建たない。建造物の建設に釘や鉦がきかねばならないごとく、身心（みこころ）の
建設にも病氣は大切な鉦であり釘である。

釘をうたれると痛い、つらい。これが、わずらいである。釘も鉦もよくきき、薬がよ
くきくためには、人のことばをつね日ごろから正しく聞きおさめて、身心の肥として
おかねばならない。これが「和」である。人のことばに疑いをもったり、腹をたてた
り、うらみをもったりするのは和ではあるまい。和はどこまでも輪であつて丸い。か
けるところなく丸い。

腐る 三九 八 一九

「腐る」というのは「苦去る」であつて、「丸が去れ」ば十になる。「十」は「從」
であつて、神・親・万物に從つていくことが人の仕事である。

菓 命 四八 一一 一三八

草を楽しむということ、文字で示せば菓である。一木一草も深い愛をもっていたわり、話しかけ、その美しい姿のかげにある神の尊い働きを思わねばならぬ。自然の恵みのままに活かされている草や花の心を心とし、素直な気持、我執我欲のない、温い自然な気持になればそれが、すなわち菓となるわけである。

口 口 四四 四 七五

ここから肉体を養う食料が入ります。言葉もここから出る。いうことがなると書いて誠ですから、ことばは誠であります。

口 口 四四 四 七六

「口」（くち）という字が一番さきに来たのであります。「口」は東西南北ですから、四方八方であります。四方八方というのは四合せであり、四と八とで、三十二となり、齒は正式には三十二本ある筈です。これは天地自然の法則であり原則であります。

口 口 四三 一一 三

口は就職のくち、縁談のくち、であって、これは交通であり、すじみちであります。口あつて話ができます。（中略）口あつて音が出るのであります。

口 訓 一八 八 五六

東西南北であり、即ち宇宙であります。四方正面、どこに居ても一すじの心を以って仲良くして行くと云う信念は、日本人として大神様から、その心を与えられて居るのであります。

口 敬 四二 二八七

心と言葉、体と物、この四つの交流が出来れば一つとなる。最初にできた文字は「口」である。これは東西南北を示す。四角であつて丸い。地球も太陽も丸い。この口から発する音を「言葉」という。「言葉」は「言輪（ことわ）」であり「言和（ことわ）」である。本来、丸く正しく美しく、やさしいものである。また「口」は「空地（くうち）」——すなわち天地であつて夫婦の根源である。天地自然はこれすべて行き通いである。

ぐち ぐち 三九 四 一七

グチをこぼす人が多い。（中略）これは、やかに汚水を入れて、美しい座敷や座布団の上にまき散らしているのも同様である。

ぐち 誠 四八 一二 一五八

「グチ」は不平不満から出る。そこで、そういうものを、すっかりとり払って「無条件幸福」であります。これは「無条件降伏」であります。

愚痴 命 四八 一一一 四七

愚痴をこぼしていると縁談の口、就職の口も絶たれてしまう。その他すべての口が絶たれてしまい、うまくゆかない。不徳の種子をまいたから、子孫の時代に芽ばえたのである。不足をいわないで刈りとらしていただくのだ。愚痴をいわず感謝で刈り取ることにより、不徳の芽ばえは、綺麗に掃除されるのである。愚痴をいいながら刈っていたのでは、子孫は決してよくならぬのである。

くつ 敬 四〇 一一一 一一一

靴は「苦痛」だ。靴は足にはくものであるが、私にとつては「苦痛」だ。この「苦痛」を乗り越えていけ。この忍び難く堪え難く、弱い心では屈辱の血を逆流させるに相違ない苦痛を虚心坦懐に乗り越えてゆく業そのものが、我が魂を磨くための温情あふれる教訓である……。

苦痛 命 四八 一一一 七八

有難い目標さえあれば、苦しみは無いはずだ。一つ、二つ、三つと九つまで「つ」（痛）がある。十になって始めて「ツ」（痛）はなくなるのである。難有りと有難い一つである。今日の難ありは、明日の有難さである。それを思えば苦痛はないはずである。

苦痛 命 四八 一一一 四〇

冬のあとには春がくるのである。この寒さをのりこせば春となるのである。一月月に九の日は三度めぐってくる。苦を苦しみとして、もがくからよくないのである。苦は笑つてのりこすべきである。（中略）目標さえあれば苦しみはないはずである。一つ、二つ、三つと九つまではつ（痛）がある。十になって始めて痛はなくなるのである。

国造り 振 四四 一一一 八

国の始りは国造り人造りであり、国を造ることは衣食住をつくることであつてこれは政治であり、経済であり、人造りは宗教であり、教育であると私は信じます。

国の始まり 命 四五 一一一 四

国の始まりは、人づくりであります。

工夫体得 命 四八 一一一 二七九

工夫体得とは良い方へと心の切りかえのりこえるように考えることである。世の中は泥試合のようなものであつて、その中で生活するためには一つでも良い方へと心の切りかえをすることが必要である。

供養 命 四一 一一一 八

万物に感謝の誠を捧げていくのが「供養」である。魚にも野菜にも、頂くたびに心から誠の感謝をささげていく。それが「供養」である。

供養の浄会は祖先を尊びその徳を称え又先代の縁のつながりの深い方々を招待して、恩の送りあいをし、お茶一杯、お菓子一つでも差上げて物心共に交流することなので、会員同志が集まるのが趣旨ではありません。祖先のつながりも忘れてしまい、先代が特別御恩になった人たちも忘れ勝ちなので、かような事の無いように浄会をする事が供養の浄会の目的なのであります。

苦しみ
み 三四 一二 四四

楽あれば苦あり、夜あれば昼あり、春夏秋冬もあり、雨の日、風の日もあるように心身の苦しみは絶えず巡り巡ってまいります。風雨の日があればこそ地上も清浄化されるのであります。(一月二二日)

苦しみ
み 三四 一二 七二

人の身は何故に悩み苦しみが多いか。苦しみの種を蒔き、成長させるからであります。自分は蒔かずとも自分に縁の近い人達が蒔けば、その責に於いて自分にかかって参ります。(二月四日)

苦しみ
み 三四 一二 一四

草木が風に吹かれ雨に打たれながらも素直に成長して居りますことを思えば、人生にもあらゆる苦難が身にかかって参りますが、苦しみのあることを不幸と思ったり、言

苦しみ
み 三四 一二 四六三

つたりは出来ません。苦しみによって自分の足りない所を反省し改めていくことが出来るので、苦しいということはどれ程身の為になるか分かりません。(二月二五日)

神仏の御加護を戴き、又拝借していることに報いることが出来ない為に、苦しみ、悩みが現われてくるのであります。(八月十一日)

苦しみ
訓 一八 八 五九

苦しみは過去に於いて蒔いた行いによって苦しみとなるのであります。

苦勞
み 三四 一二 一二七

万物一切伸びていく為には苦勞により生気が与えられ幸福になります。(三月一日)

苦勞
訓 一九 一二 一六

苦勞の言葉を縮めますと「クロ」であります、黒は幕にしても映りません。うつる事の出来ない人は、苦勞が絶えないのであります。あるべき所になき時は淋しくなりま

すが、あるべき所にあるから、生きて行かれるのであります。

苦勞
敬 四一 一二 二一九

「苦勞」は我執食欲の凝りかたまりである。また、取りこし苦勞の山を背負い込んでいる苦勞である。

黒と白 善と悪 五五 一二 二二

黒は苦勞で、闇で、病みわずらいの心になっていること。悟れば白紙でしょう。これが己を虚しくしてつていうのですよ。

苦をのりこす 五五 八 二

天地自然の法則に基づいたお諭しを頂いており、またいろいろなお話を聞いており、知っておりますが、それでも人の道にそい、人としての行いさえも不十分であります。ましてや、神の道にそった無条件実行といつても、なかなか厳しいものでありますから、その中をのりこえていく事は容易でない。苦をのりこすことは、この困難をのりこえることであります。神の子の自覚と諭されておりますが、自ら覚える、おのずから覚える、それは難有り、有難し、これが苦をのりこすということである。(中略)

その体験をしないと、人の苦勞も迷いも悩みもわかりません。

実行は難しいものであるが、その難しい実行がたやすくできるのは日頃の訓練によるものである。

訓練 命 四八 一二 二八九

ケの部

毛 五四 一 一五

経済と濟世 五五 二 五

頭にある毛は「髪(神)の毛」と教えられております。

開口一番「経済とは何か？」と斬り込んできました。私は即座に「経済と敬再である。敬いながら再建し、再製していくことである」と答えました。再製は濟世です。再製のために勤勞が求められ、勤勞のために人の勞働が求められ、こう考えますと、一枚の故紙もボロ布れも濟世につながっていくこととなります。濟世の経済こそ本當の經濟といえるのではないのでしょうか。(裏表紙)

經濟 五三 四 一二 一七三

物品を製造してその交流のために經濟がありますが、それぞれの正しい道をふみはずす為に身も心も煩わして、争いを生じ、迷いの心となり、誠の心も曇り、汚れ果て、病み患いが、数多く表われてまいります。(三月二四日)

経済の根元

ふ 三九 二六 三

経済の根元は「四つの交流」にあり、四つの交流が完了されて始めて、「心身の糧」となり、経済問題も平均と平和の保たれた姿となる。

形式

訓 一九 一二 二七

形式は自然の景色にも言霊がつながります。人の肉眼で見える場合には多くの人が形式に流れ易く、又迷い易く、心も形式に走って定まらず、落付かず、心のゆるみとなって来るのであります。

敬霊

ふ 四二 八 二六

敬霊とは礼法であり法礼であり、（中略）霊は万物に通います。万物を尊敬愛せよということが敬霊なのであります。

敬霊気

ふ 三九 五 二五

教祖の足跡は経歴である。経歴のことたまは「敬霊気」と書けばよく理解できるであろう。（中略）個人出居清太郎の足跡は「履歴」である。

敬霊気

ふ 四八 四 一二

教祖の足跡は、人間の意志による言動ではなく、すべて神の意志によるものであります。いいかえれば、神慮に合一した言動でありまして、そこには人間の意志は介在しません。ですから、私の伝記も敬霊気と名づけたので私の六十年の歩みを語る書は、経歴を書いたものではないのであります。

経歴

命 四八 一二 二五七

かつて私の経歴を尋ねた人につきの歌をもつて答とした。私の経歴は敬霊気である。

神人（堪忍）よ 教（今日）も 神人（堪忍）通り来た
これがわたしの過去の敬霊気（経歴）

怪我のもと

命 四八 一二 二七八

怪我のもととは私の心である。とき、しん、という劇薬が化学者により研究され完成され悪用された時は、人類、草木は惨酷である。

下駄

敬 四一 一二 六一

下駄をまちがえるのは早く「解脱」せよ、まことの道に進めという教訓ですね。

血液

い 一八 一〇 一四

血液こそは神であり、生命なので、これこそ金銭では求められない尊い宝なのであります。

血液

ふ 五一 七 三

血液は、血、道、いのち。

血液

み 三四 一二 四九八

血液は命であり、「ち」であります。力が出るのも、血液の流れにより、熱によって、

血縁 導 三四 一〇 八八

即ち体温（大恩）によつて肉体が動かされているのであります。（八月二十九日）
戸籍上に於いて近き親戚になる人達が血縁ではございません。大きく例えるならば人種は違ひましても天が下に生存している人類は血のつながりであります。

結果 ふ 四六 二 一一

種は「陽」であつて、結果は「陰」である。種という原因から実という結果に至るのは天地自然の法則である。原因と結果——これが「陰陽」である。一つで一つである。

月光の教訓 振 四二 五 四

- 一、月光はあらゆる汚物浄化して 水にもまさる尊とかりけり
- 二、月光はいつの世までも輝きて よろずの物の糧になるなり
- 三、月光はつきることなく真清水で みおしえなりと信じましませ
- 四、月光はこがねに勝る宝にて 命の親のまことなりけり
- 五、月光はやみ夜の道も照らしゆく この尊さを悟りましませ
- 六、月光は真清水なりとさとされて 之から先も教典にする
- 七、月光は闇夜の中に輝いて ねむれる中に徳を及ぼす
- 八、月光は仇なす人がありしとも 只もくもくとてらしゆくなり
- 九、月光は雲にかくれているもの いつも変らぬ姿なりけり
- 十、月光と色紙に書いてさとしたも 命の親の導きになり

欠点 み 三四 一二 二五

他人の欠点がかかる間は、それ以上我にもあると心得ねばならないのであります。
（一月十二日）

欠点 命 四八 一二 一三三

欠点は次第に解消するものである。己の欠点を指摘されても余り気にかげぬようにし、人の欠点もいわぬようにすることが肝要である。欠点をいわず語らず、徳をつめ自然解消するものである。

欠点 命 四八 一二 一四七

敵だ敵だと思つていふと、その人の立派な行為が目につかぬ。相手を悪い人だと思つていふと、その人の立派さがわからぬ。相手の欠点だけを見ていふと、その人に感謝ができない。感謝の心でことを運ぶのと、不平の心でことを運ぶのでは、天地の相違がある。

毛唐 敬 四一 一二 一三五

毛唐（けとう）は「系統」であります。これは人種国籍を問わず四海同胞という意味でしょう。みな、神の子という意味でしょう。それを侮蔑の意味で「けとう」などといっておりますと、「蹴とばされ」てしまふんだよ。と教えていた。

下品な心 訓 一九 六 五

ひがみ、ねたみ、疑いなどは一番下品な心である。

下痢 誠 四六 六 三六
下痢することは、まことに親不孝であります。いのちの親の大恩をわきまえず、人の親の恩をわきまえず、わが意のままに通ろうとする心の持ち主であることを、よく悟ってください。

けれども ふ 五五 一二 三〇

それは理屈なんです。完全に理屈なのです。けれども、何でも蹴ってしまう。身につかない。それでも、どんな理屈をいう人でも神の子だから、そこを忘れちゃいけない。

券 太 四四 一一 四〇

「券」は「権」であって、権利であります。入場券を持っておれば入る権利があります。

原因 み 三四 一二 五八四
仇をなすような人も、前世に自分が仇をしたことによつてお返しをいただくのであります。この道理を理解せねばなりません。月日が回転して、冬のあとに春がくるようなものであります。（十月九日）

原因 命 四八 一二 一五四
苦しいつらいことには、みな原因がある。苦しみを逃れようとする前に、その原因を反省すべきである。祖先の残した心や、不徳はかならず子孫に伝わるものである。（中略） 苦しみとなる原因を子孫に残さぬように親としての義務を果すべきである。

原因結果 み 三四 一二 一五一
原因結果は因果であり、始めと終わり、昼と夜の如くで、人体の呼吸を考えればわかるのであります。（三月十三日）

謙虚 み 三四 一二 二九

人と人との協力と融和が最も肝要であります。先ず物量よりもお互いの心と心が謙虚でなければならぬ。それは誠を捧げる以外にありません。（一月十四日）

謙虚な心 誠 四八 一二 一七三

己は知っている、なにもかも、わかっている、あなたに聞かなくても、それくらいのこと承知しております。ということであれば誰も信用しない。一人ぼっちである。野中の一本杭ではないが、花も咲かず実もみのらない。誰一人、みむきもしない淋しい人生を送らねばならない。自分で、おれは正しいとか、一生けん命だとかきめない

で——そういうことにこそ無関心で、万人から尊敬、愛されるよう、万物から愛されるような心を持って、言葉と行ないをしていく——これが平和の大道を踏み行なっていく証拠であります。

健康であることは、すばらしく儲かっていることである。お金を儲けることだけが儲けではない。今日一日健康——これは金銭に換算できぬ恵みである。思いこころに至ると、ああ今日も儲かったという喜びがわき上がってくる。

衣食住も大切であります。いのちの親からのごほうびは無条件実行によつていただくのであります。そのごほうびは何かと申しますと、健康であります。身体はいのちの親が設計し、組み立てたものでありますから、この身体の健全なる働きは、いのちの親から授けていただくものであります。自分の力や医学の力だけではないのであります。

健康でいられる姿は人のお陰と神の慈愛なのであります。神の慈愛と人の協力があればこそ生活が出来るのであります。(七月三十日)

人が生きんとすれば何よりも先ず健康でなければなりません。健は名刀に通じ、心を修め身を修める事柄で決して人を切る為の剣ではありません。何事を為し遂げるのも献身的に実行を致さねば為し遂げられないのであります。人の姿を見て、動作を見て、疲れて居るとか、弱つて居るとか感ずる時には自分自身の心も弱つて疲れて居るのであります。疲れて居る顔や姿を見て、行いを見て、悟る心の持ち方は感謝より外にないのであります。心の働きが身の働きに連がり、心の働きによつて、心の徳によつて、健康に生きられるのであります。

健康と云う発音を言葉によつて申し上げますと日常生活する上に於いて謙遜の心で他の人を尊敬して決して軽蔑しない即ち侮らない事であります。

捧誠会のみ教えによれば、健康は、笑う気持で信仰することによつて、健康になるのだということ伝えて居ります。私達がこの世に生まれて、お世話になつて居ります

健康 ふ 四一 二 一〇

健康 ふ 五三 六 二

健康 み 三四 一二 四三六

健康 訓 一九 一二 二三

健康 訓 一九 一二 二四

健康 捧 二三 一二 一

健康 捧 二四 一二 二

この感激と、この御恩に報いるおつとめは、先ず誠を捧げて笑って行くところにその御恩報じの万分の一の奉仕が出来るのであります。

健康になるうとすれば、先ず経済からであります。そしてマツチ一本でも、薪一本でも炭一塊と雖もこれを大切に取扱うことが必要です。併しともすれば、余り儉約して行くと、彼はケチだ、と云うようなことを思つて居る人もありましようが、薪一本でも大切に取扱つて行くその人は健康であります、昔は米一粒でも粗末にしますと目がつぶれると、こう云うような事も私達は聞かされて居ります。(中略) 靴下一足も大切に取扱う事の出来ないものとすればこれは天則違反であります。(これは不敬罪であります。) どうぞ水一滴と雖もこれを大切に取り扱い、十分に考え直して行かなければならない。

健康でない人 訓 一九 一二 二五

国に報ゆる、親に報ゆる、目上の人や目下の人に報ゆる実行が足りないのであります。お互いに健康の徳を積まして頂く事に努力する事は如何に尊い美しい事であるか、これに目覚めて力を尽くし心掛ける事を日夜忘れてはなりません。

健康と生活 訓 一九 一二 二三

健康と生活とは心の働きと、物資の働きのなであります。肉体の働きなくして胃袋の中が一杯になれば心の働きは休養して居る事になります。肉体の働きの時に胃袋の中が何物もなく空になつて居る時には肉体の働きが活動して行くのであります。

健康になるには 命 四八 一二 二七二

健康になるためには心の無駄使いをしないこと。肉体の栄養をとること。適度の運動をすること。

健康に報いる奉仕 ふ 四四 六 八

肉体の器官に感謝のまことを捧げるのは、健康にむくいる奉仕である

健康に報いる奉仕 誠 四六 六 一二七

目が見える、そこで目に感謝する。耳も聞こえる、そこで耳に感謝する。また、内蔵の諸器官に感謝の誠をささげていくのは、健康に報いる奉仕であります。

健康の原則 ふ 四四 四 六

「健康の原則」(中略) 私は、ことたまにしたがつて、つぎのように答える。

○権力をうばうことなく

○権力をもって高ぶることなく

○意見をされたら素直に聞き入れ

○けんそんな心を常に養い

○堅実にことをはこぶ

○喧嘩口論をつつしみ

○献身的にまなびおさめ

○献身的に実行する

○権利を主張して義務を怠ることのなきよう慎む。

金銭的には儲からないでも健康であることは大きな儲けである。

健康の得 命 四八 一二 二九四
健康をいただく根本 命 四八 一二 一七一

(1) 肉体は借りものゆえ大切に取扱いすること

(2) 夫婦喧嘩をせぬこと

(3) 飲食物を愛し敬うこと

(4) 心の持ち方、使い方を良い方に持ち使うこと

「註」(1) 自分だけでなく、相手の肉体を尊重する事

(2) 男女結合が人体のもと

(3) 肉体成長の糧

(4) いかなる時も感謝であること

言語動作 命 四八 一二 二九四

言語動作を慎む 命 四八 一二 一七一

言語動作が天から認められるよう、万人から認められるようでなければなりません。

つまり言語動作を慎むということは誠である。誠の心で行動せよ。慎しめというた

から黙っていよう、遠慮しようというんじやありません。言語動作を慎しめというか

ら今日はお使いに行くのも行かない、あそこの家へも行かない。また言葉も出すべき

言葉も出さないと、こういうふうになが意を用いて決めてはなりません。慎しむことは

誠である。文字を解釈してもリッシンベンに真という字を書いてさとされております。

現在の環境に順応して 命 四八 一二 一六七

謙虚遜讓

分に応じた生活をしてゆくことを意味している。人に厄介や迷惑をかけながら生活することは苦しい。虚栄心を去り、無ければ無くてもよいのである。できないことをし

ようとするとから無理が生じる。(中略) いろんなことがあっても日本一の四合せ者と
思うのが環境に応じた心の持ち方である。不平不満を持つことが禍いを起すたねとな
る。すべて環境に順応しないのが不幸のもとである。

研修 命 四四 一 八

研修という言葉は、研は尊び敬う。修は己を虚しうする。(中略) 敬う心を養い、そ
の責任を果たしていく、行っていくのが研修積徳である。研修である。

研修 命 四四 一 一〇

研修は献身的であります

研修会 命 五一 四 三

研修会は学び行うことであります。

研修会の目的 命 四二 三 五

研修会は総裁並びに副総裁の足跡を学び修め、神の子としての誇りを胸に抱き又社会
人として万人から尊敬愛され、家庭の円満に、職域の発展に社会の構成に平和世界の
顕現に貢献することを重点とする。

研修積徳 命 四八 一二 九二

いやな仕事とは金儲けにならぬ仕事をいうのである。金儲けにならぬ仕事とは、ただ
の仕事である。奉仕である。いやな仕事を真に喜びはげみ、奉仕することが即研修積
徳となるのである。

研修の目的 命 四五 一二 二二

真心をもってご指導をお願いする、その訓練をしているのが研修会ではないでしょうか。

建設 命 四四 五 二

「本部建設」の建設を云うことも形あるものみにこだわってはなりません。

建設献金 命 五三 八 五

ひやくは、百の縁であります。お金だけではありません。縁のある人、平和の輪でも
あります。建設はもう済んだんだから、もうよいだろうというように、金にこだわっ
た判断をしてはなりません。縁は悠久であり、日月であります。

健全な肉体 命 三四 一二 一四

健全な肉体と確固たる信念を築き上げる為には、神仏を信じ、聖者の訓戒を守り、目上
を敬い目下を慈しみ、相互の理解につとめ、協力と融和に邁進しなければなりません。
(一月七日)

賢母 命 四八 一二 一二九

賢母、つまり賢い母であると、子供が次第に冷やかな性質になる。賢い母のもとでは、
子供が淋しく育って行く。(中略) 賢母の子は強さはあっても精神的に淋しい。

賢母と慈母 命 四八 一二 一二九

賢母の子は強さはあっても精神的に淋しい。慈母の子は淋しい心は無くとも気が弱く、

懸命

ふ 五〇 一二 六

いざという時に役に立たぬ。賢慈が相通じてゆくことが大切である。すなわち慈悲あり、強みあり、賢母であり情の母であるよう修養が必要である。戦争に従軍している人たちは、皆いのちをかけております。懸命であります。その懸命の心を戦争に向けずに、万霊万物とともに平和を築いてゆく方面に向けたらどうでしょうか。

コ の 部

五 五 五 五 五

ふ 三七 六 三

人が悟りを開くことを悟道に入るといわれますが、五という数字、言葉は、御恩にかされることに感謝し、人の御恩に報ゆる——そこに芽も出、花も咲き実ってくることを教えられているのであります。

五 五

ふ 三八 一二 四

五は「悟」に通じる。

五 五

ふ 四四 五 三

五——という数字は、五分五分であり、また、五は悟であつて、さとりであります。「堂(どう)にはいった」といいますが、五倫五体が、ますます順調に成長していく時期であり、精神的には知恵が発達していく時期であります。

五 五

ふ 四四 一一 一〇

「五」は「悟」であり、悟ることであり、五倫五体であり、五重の塔であります。

五 五

ふ 四七 一一 四

ことたまによりますと「五」は「悟」であり、悟る意味であります。悟るまでの努力は徳をつみ及ぼさなければなりません。非常にきびしい道を誠をささげて通らなければならぬのであります。

五 五

ふ 五五 七 三

五は「悟る」といいます。五ということとは「悠久」であります。いつまでもいつまでもというのとは悠久であります。

孝 五

ふ 四二 五 二

親のいいつけを守る。これは孝の第一歩。よく働いて心配をかけない。これは孝の第二。親の心を悟って、その心にそいきつていく。これは最高の孝である。

孝 み三四 一二 四三

孝 誠 四六 六一 一八

孝は百行の基で孝行は善行の一步であります。(一月二一日)
親にたりないところあれば子が補なう。子にたりないところあれば親が補なう。無条件に補ない合う。これが孝であります。それがたがいに批判して対立しておりますと、その果てはいずれ滅亡してしまうのであります。

壕 ふ 三九 七 三三

根に入る―土の中で「壕」です。壕に入るから弾もさけられる。ここに到達することが悟りでしょう。

後悔 命 四八 一二 一三四

後悔は淋しく、冷い気持である(中略)後悔だけでは、またくり返すことがある。反省は、低い温い感謝の心でなされるので、後悔と同じではない。

後悔 命 四八 一二 二五二

低い心になれた時、始めて反省ができる。人の足を踏んだり、いやな言葉を出したりした後、後悔するのは反省と違う。後悔は枝葉である。

航海 導 三四 一〇 一

船が進行する事を航海と申します。それは海の上を進んでいくから航海でありましょうが、人の心の上から申しますと、こうかいは悔い改めるであります。悔い改める事と航海とは大変巾も違い人の心とどんな処に関係があるのかと思われるでしょうが、人の心は絶えず動いております。そして人が生まれる時に、生み出すという事になるので、海という文字は母という文字が入ります。女の人は子供を生み出す、生み下ろす使命をもっています。そこでお産という言葉が出ます。暑い時に使われる扇子、踊りに使われる場合の扇、婚礼の時に使われる末広、本体は同じであります。使う場所によって文字も言葉も違って参ります。

公害 ふ 四五 一〇 五

公害と騒げば、空気や水の汚染にだけ気をとられていますけれども、外界の公害は、内なる心の汚染に目ざめて、心の浄化にはげんでいけという教科書であることを忘れてはなりません。

公害 ふ 四五 一〇 一九

つまり人の肺臓やいろいろな器官に故障を起こさせていますが、これは外観的問題であって、それ以前に原因が人の魂に存在しておることや、また前の世から靈魂によって流されてきているところの毒素というものにきづかなければ、とうてい浄化され

公害 四五一 一一

るものではありません。
公害恐ることなし

それですから、そういうことを思えば公害とか、ヘドロとか、そのゴミをこわがる必要はない。私はそう思う。みなさんはどうか知りませんが、私自身はそういうことにはいろんな体験をしておりますから驚きません。それでですから私は丹毒のウミも飲みました。また肺結核の人の口から出る汚物も飲みました。といって私はほかの人にもこうしなさいとはすすめませんが、私自身はそういう汚物を飲みました。また人からもいろいろ飲まされました。それは水ばかりでない、酒ばかりでない、汚物も飲まされた。(中略) 心の迷い、心の濁った時、心に汚物が沢山詰まった時は捧誠感謝の自覚をしなさい。感謝によって浄化される。

公害 四五 一一

「公害」は「工害」ともいわれ、あちらでも、こちらでも騒ぎのマトになっている。煙やガスによる大気汚染、工場排水による川の汚染などであるが、煙もガスも、すべて「管」(くだ)やパイプから排出される。(中略) 金や物や名誉に執着心の強い人は、そのアテがはずれると寂しくなって、口から悪説という毒素を吐く。気管を通じてガスを吐く。工場の煙突から吐きだす煙だけが公害源ではなく、口から吐くガスもまた公害をまきちらしているのである。

公害 四八一 一七九

「公害」とは工場から吐きだされる煙だけではない。あるいは、自動車から吐きだされるガスだけではない。目にこそ見えねど、心のなかの公害を悟っている人は少ない。心のなかの公害は肉体の器官にも、血管にも流れております。生成発展していく万物のそのなかにも「公害」があるのであります。この「公害」に、あくせくしておりますが、公害が極端になってまいりますと「バイキン」ということになる。公害のうちはまだよろしい、ひとたび「バイキン」として肉体に潜伏すると、一夜にして失明する。骨に潜伏すると腐ってしまう。

公害 四八一 一八八

「ヘドロ」というのは、カス、ゴミです。このカスでもゴミでも使いようによっては

公害

誠 四八 一二 一九〇

肥料になる。劇薬も使い方一つで役にたつ。このヘッドロも使い方一つで役に立つように工夫することが大切ではないか。鉄でもそうです。屑鉄を溶かして立派な鉄材に仕あげる。屑紙もまた立派に再生される。ですから「公害」「公害」といって、こわがることはない。

「ふ」は汚物である。これは「公害」である。その「公害」の汚物を、まず心の中から、血液の中から撲滅していかねばならん。そのためには、きびしい道を通らねばならない。また、親は、きびしい道を通さしてくださる。親は、この道を作らずして歩めとは仰せにならない。

高血圧

ふ 三九 八 二〇

胃下垂は、イカスイ（カス）であって、粕が人と人との間にはさまっている。粕のようなものが、その人にとっては貴重のように思える。金品を人に貸し（貸すーカス）た。必ず返すというから同情して貸した。それが返してもらえない。この悶々とした気持が「胃下垂」である。更に、これが高血圧につながり、気持ち、感情、言葉がもめあつて、肝臓、心臓の病いになる。

高血圧

ふ 四〇 八 一四

時間を守らず、でたらめな行動をしておるとどうなるか。一軒の家にしても、出入口があるのに、そこから出入りせず、またこれを塞いだり定められたことを守らないとどうなるか。高血圧とか狭心症とかいうようになる。「狭心」は「教信」に通じる。教信、信教、心境、新境、神境―とつながっていく。狭心症は心臓の動きが止まり、血管が圧迫されて息を引きとるようになる。「引きとる」とは、嫁がせた娘を引きとる、納めた製品を引きとる、勤めに出した者を引きとる…など、不利を引きとって苦労することにつながる。

高血圧

ふ 四三 一二 一九

心臓を圧迫すると血管がパンクする。（中略）圧力を加えるとは、「こんなに一生懸命にやってもつまらない、だれも認めてくれない…」と己の働きに慢心して、不平不満の圧力を加えることである。

高血圧

ふ 四六 五 一九

大自然にも高気圧と低気圧とがあり、この気圧配置は刻々に変化する。流動する。小

高血圧

命 四八 一二 一六三

宇宙の人のからだにおいても、たえず血圧が変化する。それが自然である。興奮すると血圧が高くなる。興奮が静まって淋しい心になると血圧は下がる。低くなる。血圧の高い人は「憤慨」を「奮闘」にかえていかねばならぬ。低い人は、ひがみ、ねたみを持たず持たさず、互いに励ましあうことが大事である。はげましあいは力である。(中略) 身分の高い人と低い人がある。高い人は低い人を侮りやすく、低い人はねたみ心を持ちやすい。けれども、神の子として誠の道を踏み行ない、誠のわざを喜びはげむことにおいては平等である。

高血圧

命 四八 一二 一二四

血圧の高い人は心の貧乏人である。心さえゆたかであれば低いはずである。怒ることも、動揺転倒することも、その他、心の無駄使いはすべて、その人の心が貧しいためである。

万物に感謝を捧げ、謙虚な心で下から物を見あげるような心になればよい。ところが、血圧の高い人は高いところから見おろす心を持ち易い。精神的には弱い心であるが、自分で作って強そうに見せかけているのである。低い心、謙虚な心が足らぬ。

孝行の根本

命 四八 一二 一〇七

- 1 親を信じ敬うこと
- 2 親を心から愛すること
- 3 兄弟仲よくすること

人と人との交際には、いろいろの苦痛もあり楽しみもありますが、交際は人の道であり、(中略) あげたり頂いたりとは物だけではなく、言葉もあげたり頂いたりするのであります。

交際

命 四二 七 一〇

向上

命 四三 一 九

私が小学校に通っていた頃、成績は甲、乙、丙、丁で示された。それぞれに上と下とがあつて、同じ甲でも「甲上」が最高の成績であつた。つね日ごろ、よく学び、よく修めていると——すなわち日々学業に向上(甲上)の歩みをすすめていると、成績もまた甲上となる。これは学業の建設であるが、その建設が「向上」に通うところに深い意義をおぼえる。

向上する人

い 一八 一〇 一七

向上して行く人達は、人に冷たい心を持たず、己も持たず、例え人からぬれ衣のよごれを着せられても、これこそ己の魂を磨くための試験であって、これこそ尊いのであると云うところまで魂を磨かねばなりません。

向上の第一歩

命 四八 一二 二九四

未完成である自分を知ることが向上の第一歩である。

孝心

ふ 四六 五 七

信仰は孝心である。孝心（行進）は信仰（進行）である。

行進

ふ 四四 六 一三

行進と言うことは進行であって、親交——孝心にもつながります。

行進

ふ 五一 一一 六

行動することが孝心であり、誠であり、言霊によって孝心（行進）は親交（進行）であり、親孝行であり、これが天地の理法であります。

功績

ふ 四二 一一 一一

稲穂が実るのも子宝が授かるのも、その人の功績であり、真心からの救済をした証拠であります。

交通違反

ふ 四五 六 一八

交通違反がある。国道ばかりじゃない、室内でも交通違反がある。言葉の交流にしても、交通違反、肉体の動きに対しても、言葉の動きに対しても、物の動きに対しても、交通違反がある。それですから、天地自然の法則を学び修めることは、万事万端、交通違反を起こさないように、事故を起こさないようにしていることである。

交通違反

み 三四 一二 四六八

家の廊下を歩くにも、部屋を歩むにしても、通るべき道を歩まないのは交通違反と同じであります。（八月十四日）

交通事故

ふ 三七 四 三

交通事故のものは、もちろん道路上の不注意もありましようが、その事故にめぐり会わなければならぬ原因を深く反省しなければなりません。事故のあった人の過去の行いを調査してみますと、多くの場合は協力融和の出来ない「我」の強い家庭に育った人のおようであります。

交通事故

ふ 四二 一二 二八

四つの交流がよくおこなわれていないからです。交流はしているが、自然の法則にもとづかないで、わが意をもちいている。

高低

ふ 四六 五 一九

「高低」は「抵抗」である。反逆である。物の争い、心の争い、これすべて抵抗である。

公定価格

ふ 三八 五 一八

日本は王帝国ではない。皇帝の国である。軍人が政治に介入して戦争を始めると、必

幸福 ふ 三六 一一 三

ず物資に窮して公定（皇帝）価格となる。

幸福 ふ 三七 一一 三

道にそくして求めんとしても、ゆきづまるとか、人によるこびを上げようとして自らがゆきづまる、ということもありますが、それは決して悪いゆきづまりではありませぬ。かような人は一時はゆきづまっても、結果は必ずよりよい幸福を頂くのであります。物心ともに恵まれた平和：これすなわち幸福であります。

幸福 ふ 四二 一一 八

道を知り、道を通るということは、難しいことでもあります。けれども、道を知り、安心して通れるのは最大の幸福であります。

幸福 ふ 四八 一一 五

人の道の「行い」さえも、いうは易く行いは難し、と教え伝えられておりますように、なかなか行いにくいのであります。実行ということとは、懸命であり、文字通り命をかけることでもあります。人の道としての幸福は作り出すことであり、花を咲かせることでもあります。一方、神の道である実行は懸命であり、無条件の行動によつて生み出されるのが四合せであり実りであります。

幸福 ふ 四九 一一 四

幸福は、つくりだされるものであつて、交換条件であり、人の道であります。

幸福 み 三四 一一 三

通り一編の交際でなく、未永く交際していかれる人達でなければ、幸福は満ちて来ません。（一月一日）

幸福 み 三四 一一 五

病む人も病まれる人も、我執貪欲を取り去り、自然の法則に基づいて無条件実行をすれば、災い転じて幸福となれることは間違いないのであります。（一月七日）

幸福 み 三四 一一 八

その場だけの幸福では、次に出てくる大きな不幸になります。一時の幸福が十倍の苦しみとなつて、多くの人が悩みを生じて来ます。（一月二四日）

幸福 み 三四 一一 九

常に不平を思わず、言わず、毒舌を語らず、よい言葉、良い行いを実行していけば、万人から尊敬し愛され、幸福になることは間違いありません。（二月十二日）

幸福 み 三四 一一 六

人は、幸福を求めようとすれば、天地自然の法則を学び修め、人の道を誠捧げて実行せねばなりません。（二十七日）

人の生活は物心両方面に恵まれてこそこの世に生きる甲斐もあるので、幸福の根源は

幸福

み三四 一二 一七九

物心共に恵まれるところにあると言えます。(三月十九日)

知恵も肉体も富も、与えられたならそれを乱用せず、万人が喜ぶように使わして戴けるように心がけ、実行することによって幸福が実現するのであります。(三月二七日)

幸福

み三四 一二 二二一

天地自然の法則とは、心の交流、言葉の交流、肉体の交流、物の交流を言い、この四つが原則であります。この四つの交流を怠ること無く、無理の無いように実行することによって、人の生活の幸福は実現して参ります。(四月十一日)

幸福

み三四 一二 二七一

神の道、人の道、両道を学び修めて実行すれば、必ず、言わず語らずとも幸福は実現して参ります。幸福を求めようと欲するならば、神の道を悟り、霊の交わり、心と心の思いやり、神と人との交流、これを自覚していかなければなりません。人の道においても教えたり教えられたり、恩の送り合い、この交流が不十分であるならば、必ず其処に不純なものが現れて、争いになって参ります。(五月十日)

幸福

み三四 一二 三二七

常日頃、見ても聞いても誠を捧げ、言動を強く正しくし、広く暖かい心で生活が営んでいかれますように努力する人こそ真の幸福者と申されます。(六月六日)

幸福

み三四 一二 三七八

お互いに幸福を求めようと欲するならば、太極の根元を学び修め、万物の恩恵に誠を捧げ、尊敬と愛の念を持ってあらゆることにあたり、人を尊く思い、些細な商品でも無駄に使うことなく、大恩に報い、人の恩義に感謝の心を常に忘れないようにして努力をしませんと、いかに望んでも幸福は与えられません。

幸福

み三四 一二 三八〇

協力と互助によって産みだし、作り上げたものでなければ幸福とは申されません。万人幸福は望む処であります、実行が足らず、知って悟るのみで、理論理屈に拘泥し、終生の奉仕が足りないため見逃してしまう人が多い。(七月二日)

幸福

み三四 一二 三九四

些細のことに悲観したり怒りを持つたりして、幸福を掴めないような人にならず、いやな道でも心の中に誠の光を輝かせ、人の協力を融和に貢献出来る人にならなければなりません。(七月九日)

幸福

み三四 一二 五四七

神仏を信じ、天地の理法にそむかず、真心で実行すれば、凡ての悩み苦しみは転回し

て幸福になれますことは疑いありません。(九月二一日)

其の日其の場の幸福よりも、永遠に救われる幸福でなければなりません。(十月八日)

自他共に幸福を希望するならば、自己のみの和でなく他も和でなければなりません。

和と和が繋がって強い力と愛が実現し、鎖のように力強い美しさが現われるのであり

ます。(十月十一日)

この世の始まりは陰陽であり、天地の和合によつて万物が生成していくのであります

から、これに基く行動でなければなりません。人は神の子でありますから、天地自然

の法則を学び修めて実行すれば必ず真の幸福は与えられるのであります。(十月三十日)

神仏のみ心に叶うように実行することにより幸福は生まれるのであります。

(十一月二日)

己を虚しうして徳を積み徳を及ぼして実行すれば、いずれの世にか幸福になれるので

あります。(十一月七日)

素直な心を養つて忠実に実行していく人が幸福になっております。それ故に理屈や理

論を知るよりも、誠を捧げて実行することが幸福の根元であります。(十二月十二日)

天地自然の法理に基づき、人としての道を踏み行つていけば過ちも少なく、病み患

いも解消して、真に幸福な道が開かれ、楽しく明るい立派な生活が営んでいかれます。

(十二月二三日)

神の子として生まれ人として尽くすべき道を尽くさない為に幸福になれないのであり

ます。

素直な心で素直に人の話を聞き入れて浄化し、心の糧となし健康で実行の出来る人こ

そ幸福なのであります。

神を無条件で信じ、神の子たる人を無条件で信じ得られる人こそ幸福な人なのであり

ます。

幸福は休む事、其れに働く事、悟る事、飲食する事でありますが、休む事は健康にな

幸福 訓 一九 一二 一八

幸福 訓 一九 六 四九

幸福 訓 一九 六 二五

幸福 訓 一九 六 一四

幸福 み 三四 一二 七三九

幸福 み 三四 一二 七七一

幸福 み 三四 一二 六四五

幸福 み 三四 一二 六三五

幸福 み 三四 一二 六二七

幸福 み 三四 一二 五八九

幸福 み 三四 一二 五八二

り、働く事は円満になり、悟る事は教育であり、人格を高める事でありますから、商売繁昌になり、飲食する事は楽しみであり明朗無限でありますから財産ともなりません。この四合せが幸福なのでありまして是に恵まれて参りますと、苦しい中にも喜びになり、迷える心もなく、疑いや、道はずして不自由をしなければならぬような罪人も少なくなりませぬ。

幸福 振 四三 四 二
幸福を生み出し、幸福ならんとすれば協力融和なる事がなければなりません。人生は万人幸福を望まぬ人はないと思います。

幸福 誠 四八 一二 一五八
真の幸福は、生まれた時には喜んでこの世に生まれ、死ぬときには、今日まで活かされてきた恩恵に感謝の誠をささげて、ニコツと皆さんとお別れする。ここにありません。幸福とは向うにあるものではない。行なったところにあるのだ。徳をつむ生活をしておればその後に見えてくる。善行についてくるものである。道を行えば幸福は自然に成るのである。道(身血)は生命である。

幸福 命 四八 一二 一三八
真の幸福と、ただの幸福とは違ふ。真の幸福とは極楽である。極とは極めることであるが、なにごとにしても極めること、すなわち極意を身につける苦しみは、人みな経験がある。しかして極を会得して始めて楽があるのである。極とは太極の極と一致するものである。

幸福 命 四八 一二 一三二
幸福は不意にぼっかりと湧き出るものではない。心の動き、肉体の動き、物の動きが誤っていると生活も滅亡する。生活は生きて活かされることである。生きて活かされるために修養がある。生活の中に修養があり修養の中に生活があるのである。

降伏 敬 四一 一二 一九二
降伏とは幸福なりとの御教訓、今日この頃では殊のほか心の底から味えます。と、上野さん(初代本会会長)。日本はそして国民は、アメリカに降伏したのではない。降伏したために今、生活に喘いでいるが、このような目に会わせて下さる神に降伏したのでしよう。神への降伏は仕方なしの降伏ではなく、感謝を添えての無条件降伏です。それが、われわれにとって「幸福」であることを忘れてはなりません。

幸福と幸せ 　　ふ　四三　六　八

幸福というのは財産・名誉・地位などで、これは努力すれば得られる。ゆえに人の道である。四合せ（幸せ）は、子々孫々にのこるものであつて、これは実行によつて稔るものであるから神の道である。

幸福になるには 　　み　三四　一二　六四五

人は、常に善行を積み重ね誠実に働けば幸福になれるということを、知っている人もあり知らない人もあります。（中略）己を虚しうして徳を積み徳を及ぼして実行すれば、いずれの世にか幸福になれるのであります。（十一月七日）

幸福の根源 　　命　四八　一二　二七九

実行の集積が徳であり、幸福の根源である。

幸福の根源 　　み　三四　一二　一六三

人の生活は物心両方面に恵まれてこそ、この世に生きる甲斐もあるので、幸福の根源は物心共に恵まれるところにあると言えます。（三月十九日）

幸福の根元 　　み　三四　一二　七一一

素直な心を養つて忠実に実行していく人が幸福になつて居ります。それ故に理窟や理論を知るよりも、誠を捧げて実行することが幸福の根元であります。（十二月十二日）

幸福の実現 　　ふ　三七　一一　三

先ず肉体が健全であること、職業を与えられること、知恵と物が与えられること、そして与えられた健康な肉体を良い方に使わしていただく、知恵も物もそのとおりにお役に立つように使わしていただければ、我身の幸福が実現してくることは間違いないのであります。

幸福の第一 　　命　四八　一二　二七八

親子、夫婦、兄弟、たがいに信じ合えることが幸福の第一である。

幸福を求めぬ 　　み　三四　一二　五〇一

幸福を求めようと欲するならば、天地の理法を修め、徳ある人の指導を受け、誠を捧げ、素直な心で無条件実行をすることでありませぬ。（八月三十日）

公用 　　ふ　四五　一〇　一一

「実行」はいのちの親の直命です。そしてまた私との約束でもある。それに、私へこえもかけずに帰つてしまふのは、どういふことでしょうか。北海道への交流は「公用」であるといつても、いのちの親の直命ではありません。

交流 　　ふ　三八　六　一四

パツと咲いてパツと散るのは、その場限りの交流であつて、なにもみのらない。あげるのは好きだが頂くのは嫌いだ、話をするのはいやだが聞くのは好きだ、世話を

交流 　　ふ　四〇　一二　一八

するのは好きだが、されるのは嫌いだ―というのでは、吐く息ばかり、或いは吸う息

ばかりであつて、これでは必ず行詰る。さしあげて頂く、これが正しい交流である。
 “行き通う”ということは、“息かよう”ことであり、ここに“いのち”がある。こ
 れは厳然たる自然の法則である。

交流 　　ふ 四七 一 一五

思いこむ——あるいは“きめこむ”ともいう。思いこむのは、心のなかに強く持つて
 いるのであつて、いったんこうと思ひこむと、なかなか放さない。おれの思いは正し
 いと思ひこんでいる。そうして、むだな苦勞をしているのである。「思い」を放してみ
 ることも一つの交流である。箸をもつたままでは、なに一つできない。箸を持つたり
 放したり。その交流があればこそ、食事もできる、手紙も書ける、仕事もできる。交
 流の根本義を忘れてはならない。

交流 　　ふ 五〇 三 九

交流 　　ふ 五三 一 八

交流の基本は平等と調和である。

人と人との交流でも、仲の良い人達が仲良く交流する事は黙つていてもする。昨日の
 敵が今日の友になるような交流をしている人は少ないのではないのでしょうか。昨日
 の敵が今日の友になるような交流は、徳をつみ、徳を及ぼしてゆく事でありまして、
 人の道と神の道との両道を行いと実行に現わしてゆく事がなくては不可能であります。
 心・体・言葉・物の四つの交流は大切さを教えられておりますが、この四つの交流に
 しましても、求める交流ではなく捧げる交流であらねばなりません。

交流 　　ふ 五三 一 二 七

交流 　　ふ 五四 八 四

体内の胃という器官には、口から入るものをこなすという働きがあります。腸という
 器官は汚物と栄養物とを分けて、汚物を排泄する。この器官がつまると、「通じがな
 い」と昔から言います。通じは交流であります。母はやかましい、父はがんこだと子
 供は思い、親は、子を、勉強もしないで遊んでばかりだと思ふ。このような思いは、
 交流にならない。行き詰つてまいりましょう。

交流 　　み 三四 一 二 六 二

人の生活上に、最も重要なことは、(一)心と心の交流、(二)言葉と言葉の交流、
 (三)肉体と肉体の交流、(四)物と物との交流で、この四つの交流を怠ることなく
 実行出来ればよいのでありますが、これが出来ない為に苦勞するのであります。

交流 三三四 一一一〇九

(一月三十一日)
上げたり戴いたり、言葉の交流にしても物の交流にしても、両者が救われるような交流でなければなりません。只自分の感情で行うことは注意すべきであります。

(二月二二日)

交流 振 四二五 二

天地自然の法則は交流であると教えております。私共の日常生活において、心の交流、言葉の交流、肉体の交流、物の交流、この四つの交流は絶えず行なわれており、この四つの交流を強く正しく、まごころで、誤らないようにする。心と言葉と肉体と物を無駄の無いように、お役に立つように、お互いに調和し、協力互助で動かしてゆく、それが交流であり、それが法を尊敬、愛し、法に従い、仕えることであります。

交流 振 四二七 二

心と言葉の交流は神の道であり、肉体と物の交流は人の道である。神と人との両道を学び修めて、神の道を実行し、人の道を行うことによつて、平和建設が築かれるのであります。

交流 命 四八 一二二九七

さしあげること、人の価値を認めてあげること、ことわらぬこと、などを無条件に実行している、数年、数十年後になつて自分や、子孫が人に引あげられ、認められ、容れられるような結果となる。

交流の循環 敬 四二 一一一七〇

天地自然の法則とは、地球の回転と共に万事、交流循環する事柄であります。万事の交流循環正しくとは、動揺転倒することなき姿、強い姿であります。強いことは善であり和であり、平和な姿であります。平和な姿が築きあげられてこそ、強く正しいのであります、それには天地自然の法則を理解して、各自が実行しなければならぬのであります。

綱領十ヶ条 ふ 四〇 八 一五

綱領十ヶ条は私自身が身を以つて歩んできた道である。考えて造つたものではない。その一語一語に私の血が通つているのである。

綱領十ヶ条 命 四八 一二二五七

十ヶ条の綱領は私自身の歩んできた道である。私の足跡である。

綱領十ヶ条 命 四八 一二二六三

綱領十ヶ条は人として守るべき道徳であり、典範は教えの根本である。

綱領（捧誠会） ぶ 三九 一 三
綱領（捧誠会） ふ 五二 七 三

総裁として人の道をあやまらぬよう、また教義を誤解しないよう示すものであります。本会には、修養団捧誠会綱領として、会員が実践すべき目標が示されています。また、おみな会や壮青年部の各部、さらにもっと年長の方のための綱領も示されており、少年も神の子、お年よりも神の子、すべての人が神の子でありますから、壮年だ青年だおみなだというような区別はいらないのであります。老若男女を問わず、神の子へのお諭しが綱領なのであります。

号令 敬 四二 一二 四五

号令 振 四八 九 七

この号令は軍隊の号令ではない。合霊だよ。万物と一つになることだ。号令は合礼であり、合霊である。礼儀を守る、大霊に合する。神慮に合一する趣旨の号令であるとの言霊に基づくものであるから、この趣旨に基づいて実施されたい。

合霊 ふ 四一 三 八

今年の元旦の夜の聖感に「合霊」ということたまが示されている。これはいうまでもなく、神霊に合一することである。

合霊 ふ 四一 三 九

「生けるしるし」を、無関心でおつては、合霊しない。一瞬一瞬の生けるしるしを心の底から悟っていく、そこに合霊がある。

こえ 命 四八 一二 一二七

声は音、温、恩愛である。草木を成長させるのは肥料である。こえである。こえがなくて万物の成長はないのである。こえは愛である。愛する心のない時は声は出ない。声のない時は「なきがら」である。物体でも動く時は音があり、静止すれば音がなくなる。こえにも「しもこえ」（下肥）と「かみこえ」（上声）があるがいずれも肥料である。良い声をかけ、万物を成長させねばならぬ。円く、優しく人の魂を活かす、よい言葉を使わねばならぬ。

声 ふ 四二 八 一一

「肥」をたよりに進む…と示してありますが、「こえ」ということたまの働きは「肥」であります。いわばこの世の汚物であります。このようなものを頼りにせよというのは、それが無上に尊いからであります。尊び感謝していくのが真の信仰生活であります。

声 ふ 四三 七 二

声とは肥であるから、肥をかけていただくのは結構である。しかしその肥とても、二

声 訓 一八 八 三二

種類も三種類も一度にかけてもらうと、肥が肥にならない。かえって害になる
 声は言葉のみではありません。肥料も「こえ」であります。肥料は美しいものではなく、例えば人ふん、馬ふん、その他汚物は皆「こえ」であります。かようなものを頼りにせよと云うことはそれが尊いからであります。それを、きたないとか、嫌だとか云うような心を持たず、これぞ尊いものであつて、これなくしては己の生命も保ちえず、この「こえ」肥料の為に生命があるのでと云うことに感謝するよう実行することが真の信仰生活なのであります。

声 敬 四二 一一 九三

神は万物普遍の霊でありますから、火・水・風にも万物にも霊があり、声があります。この「声」すなわち「音」は「温」であり「恩」です。万物の発する音はすべてこれ「言霊」であつて、この「言霊」が「みおしえ」です。

声 誠 四八 一一 四二

声は「音」であり、「発音」であります。太極のひびきは、実に清らかな、すがすがしい、正しい声であります。これは楽器の「音」とはちがいます。楽器でも、ピアノ、太鼓、笛、みな音が違つているが、その「発音」は「音」（ね）という言霊になります。

声なき声 敬 四二 一一 一三三

「声なき声」は「無言」である。これはまた「無限」である。大極のひびきというこの言霊は、言霊のまにまにとあるように、無条件実行を示されている。「まにまに」であるから、そこに我がの意をさしはさむことは許されない。

御恩に報い み 三四 一一 六八五

活かされる御恩に報いる為には、己を虚うして奉仕の志を忘れてはなりません。
 (十一月二七日)

御恩報じ 敬 四〇 一一 一八五

「損得を忘れて、煎餅一枚でも、集まってくる人に差し上げ、お茶汲みの当番をなささい。これがご恩報じです。ご恩報じは祖先の『法事』ともなるのですよ」と宣言して、その日は帰った。

誤解 敬 四五 一〇 二二

小さくいうた言葉も誤解される、それはその人に話すべき言葉ではないからです。他人に話をすべきことをいうから食い違いになつてくる。

五月 敬 四六 七 五

五月は悟りの月であります。

古希 ふ 四四 一 二四

古希から喜寿へ、七をもう一つ重ねる方向はどこにあるかと言えば高貴或いは「効貴」にある。

呼吸 ふ 四四 九 一三

呼吸は一本調子のもものではございません、複線である合掌である。呼吸の動きというもののは合掌である。

呼吸 ふ 四五 一二 二二

呼吸 ふ 五三 二 一〇

往復は呼吸ではないでしょうか。呼吸は天地の法則であります。

息は鼻からはき出し新たに空気を入れる、出すときは濁り入るときはよい空気として入る。これが善悪である。ことたまのまにまにみおしえを守り無条件実行が平和建設であり、これが大和である。日の本は神国で大和魂と伝えてある。日の本は太陽の下である。万国太陽の下にある。その中であつて日本のみ日の本という名を頂いている。神国と云われる所以である。

呼吸 ふ 五七 三 三

呼吸は、言葉を慎めといつも力説しております。

呼吸 誠 四八 一二 一一

呼吸もそうです。出す方がさきです。フーツと吐き出す。それから、吸う。これは無条件でしょう。私は出すのが好き、もらうのは大嫌いだ、というと、どうでしょう。

また、もらうのは大好き、出すのはいや、どちらにしても苦しい。いき詰る。やはり、入れるものは入れる。出すものは出す。いただくものはいただいて、さしあげるものはさしあげる。この調和をわすれてはなりません。

呼吸器病 導 三四 一〇 八三

呼吸器病には特に医師から安静（あうんせい）転地療法（天地療法）と注意を受ける。あうんは天地であり、せいは調和であり、和合即ち円満であります。誠は天の道であり、これを行う事は人の道なのであります。天の道、即ち神の道、人の道を行えば呼吸器病という病になる事はないのであります。

黒板 ふ 四九 四 四

黒板の言霊は「黒（こく）は刻（こく）、五穀の「穀」であり、「国」（こく）であつて、一刻一刻と時をきざむことであります。（中略）さらに黒（こく）は国（酷）にも通じ、黒板が破れたときには国が亡ぶときであるともいわれています。黒板の板（ばん）は基礎であり、大地であります。

国民に告ぐ

ふ 三九 五 二五

命の親の遺言が「国民に告ぐ」である。

極楽

ふ 四一 三 九

極に達するのが「極楽」である。いいかえれば、徳を積み及ぼすことが、極楽である。しかし、この極に達する迄には、いろいろの難がある。その難を有難いと受けとって

乗り越えていく、そこに「悟り」が生まれ、そうして極に到達する。こう考えると、

「難」こそ「極楽」への一里塚である。

極楽

ふ 四二 二 二

地獄は無駄苦勞の姿である。極楽は花咲きみのる苦勞であります。

極楽

訓 一八 八 四三

死後は地獄であり、極楽浄土でありと教えられたことは、死んだ先の教えであって、その教えは幼稚な教えであり、死後に於いて地獄があり極楽があると云うことは、よい事をなさい、悪いことはしてはならぬと云う心の教育の為に教えられたものと信じ

ます。とにかく心にはいろいろな悩みがありますが、悩みがあるときに地獄であり、喜びのある時が極楽であり、この極楽の心こそ、尊い人、上等な人、立派な人、よい

人、強い人なのであります。

真の幸福と、ただの幸福とは違う。真の幸福とは極楽である。極とは極めることであるが、なにごとにしても極めること、すなわち極意を身につける苦しみは、人みな経験

極楽

命 四八 一二 一三八

がある。しかして極を会得して始めて楽があるのである。極とは太極の極と一致するものである。

「浄土」とは「上等」ということであって、「極楽浄土」というのは、ごく楽な上等の所を申したのであります。(中略) 悩みに閉ざされているときに「地獄」であり、

喜びに燃えている時が極楽であります。(中略) 終始一貫よい行いをしておれば、

極楽浄土

ふ 四二 一〇 六

よい人のところへ生まれ代ってきます、これを「極楽浄土」にいくと教えられたのであります。

よい行いをすれば、よい人の所に生まれ変わって来ることが極楽浄土に行くことと教

えられたのだと思います。悪いことをすれば、人を倒し、苦しめ、殺人強盗などをす

るような人の所へ生まれて来るのが地獄に行くことであって、「死後」とは「仕事」

極楽浄土に行く

訓 一八 八 四三

あります。

よい行いをすれば、よい人の所に生まれ変わって来ることが極楽浄土に行くことと教

えられたのだと思います。悪いことをすれば、人を倒し、苦しめ、殺人強盗などをす

るような人の所へ生まれて来るのが地獄に行くことであって、「死後」とは「仕事」

心	ふ	四二	七	八
心	ふ	四二	三	一三
心	ふ	四一	六	七
心	ふ	四〇	六	三
心	ふ	四〇	六	二
心	ふ	四〇	六	二
心	ふ	三八	一一	一五
極楽の心の人	訓	一八	八	四三
ごくろうさま	ふ	四四	一	四
護国神社	ふ	四九	四	七

であって仕事をまじめに実行した人達が極楽浄土に参って居るのであって、その日その日、その年が極楽であり浄土であり、その人こそは、上等の人なので、こんな人格こそ最上の幸福なのであります。

この極楽の心こそ、尊い人、上等な人、立派な人、よい人、強い人なのであります。「ごくろうさま」という言葉は愛の発露であり、感謝であります。

護国神社の護国は五穀で、お米であり、稲穂であります。すめらみくにの稲穂であって、この稲穂の穂の元は藁であります。「藁へ稔る」ことは「笑え・実る」であり、日出ずる日本の国であります。

人は心で道をつけて、そこを歩んでいる。ところが心がデコボコであると、そこにつけられる道も亦、デコボコである。デコボコみちには事故が多い。(中略) 心がデコボコであると、肉体の患いとなり、事業の失敗となり、人との交際もスムーズに運ばず争いとなり、そこにまた、ねたみ、そねみまで生まれる。心のデコボコを修繕して、平坦な自然の大道にするのが修養であり、その根本はみおしえである。

肉体の主導権は心であり、その心は命の親が動かしておいになるのであります。心で心が自由にならないことがあります。(中略) 命の親に主導権があるからであります。

「肉体」と「心」と「みおや」——この三つの原則を学び修めて頂きますことが、天地自然の法則を学び修めることとなります。

「心」が主であって、肉体は借物である。レンズが曇っておれば正しい映像をむすばない。同じように心が濁り曇っておれば、見たり聞いたり全て思い違い取り違い感違いとなって、おのずから迷いの渦中に入っていくことになる。

太陽は、ある場合には黒雲につつまれ姿をかくすことがあります。天上は永久に変わることなく照り輝いているのであります。(中略) なにかの縁のつながりによつ

て人から笑われ、憎まれ、踏み倒される場合があります。それは黒煙に包まれているのと同様です。黒煙は永久に渦巻き狂うものではありません。やがて時節がくれば風に吹き払われます。必ずその時節がくるのですから、黒煙の中におつても、迷わず動揺せず、黒雲の上に輝く太陽の如く明るい心を失ってはなりません。「身を飾るよりも心の錦」が大切であります。

心 ふ 四三 一二 二〇

心(こころ)という言葉は「ここ」(場所、環境)と「ろ」(労わる——これは愛)

であります。「ここ」——家庭に職場に社会に、温かい誠の愛をささげていく——それが心であります。

心 ふ 四五 一一 五

心というものは太極からいただいておりますから、私のものであるということが確実である。その通りであります。心の動きにつれて自由自在に言葉も発言する場合があります。

心 ふ 四六 三 一六

心もまた使い方一つで狭くもなり広くもなる。暗くもなり明るくもなる。

心 ふ 四六 六 二

心は「いのちの親」の分けみ魂であつて「いのち」であります。「いのち」と「肉体」とを混同してはなりません。

心 ふ 四七 四 一六

心は水であり、水は心である。この素直の訓練、素直と申しましても、ただ雑音や迷心を聞き入れてそれを行えとは教えてない。正しいことを信じて、正しいことを宣布普及していかれるように訓練をしているはずであります。

心 ふ 四九 一 二四

心という言葉霊を説明いたしますと、温かい誠の愛です。また、徳ですし、力です。この三原則が平和を生みだすわけです。

心 ふ 五三 一 九

欲しい欲しいという気持ちだけに動かされているような気持ちではなく、確固として不動の北辰星のような、動揺転倒しない心を養わなくてはいけない。心が動いて体も動く、言葉もでる。お金や物や地位に動かされてはなりません。

心 ふ 五三 七 四

手足は自由に、心通りに動いています。箸をもとうとすれば、腕も指もその通りに動いて箸を持って、食物を持って、食物を口に入れます。大阪に行こうと思えば、その

心	み	三四	一二	二八二
心	み	三四	一二	二六九
心	み	三四	一二	一三三
心	み	三四	一二	七八
心	み	三四	一二	五四
心	ふ	五六	五	二
心	ふ	五五	四	三
心	ふ	五四	五	三

身体は大阪に行くのであります。身体が動くのは、善にも悪にも、心通りに動くのであります。ですから、心が善に向かうか悪に走るかというただそれだけであります。その事をしっかりと見ていなくてはなりません。

心がいかに身体を左右するか、喜びの心、淋しい心、怒りの心、これ等の心がどれほど身体に影響を与えるかは、考えられないほどであります。

身は借り物であり、これを動かすのは心でありますから、心が第一であります。私たちが修養すべき土台は心であります。魂は悠久に頂いたものであって、借り物としての肉体のように、一代限りでお返しするものではありません。

心というものは、魂でありまして、魂はいのちの親から頂いているのであります。太陽のようなものであります。太陽の、分霊（わけみたま）のようなものであります。太陽はけっして不平不満は思わず言わず、無条件で行動しています。地球の回転もそうでありまして、これを天地自然の法則といえます。皆さんは天地自然の法則を学び修めて神の子の自覚をする。これが大事なのです。

人の心も、神のみ心と同一でなければなりません。（一月二七日）

人の心は自由にもち使われますから、善きにつけ悪しきにつけ動きます。（中略）自分の魂を磨き、何時も広い正しい明朗な心になれるように心がけることが大事です。（二月七日）

地獄、極楽、善悪と教えられていますが、各自の心の動きによって定められます。（三月四日）

人の心は神よりの分けみ魂として譲られておりますので、人の作った法律によって人の心を自由に束縛するようなことは出来ません。その心の動きによって肉体が動き、物が動いて参りますので、心の動きが狂えば肉体の動きも、物の交流も、食い違いとなり、交流することが反対になってまいります。（五月九日）

人の心は神から戴いておりますので自分のものと信じて間違いはありません。

心 三 四 一 二 四 一 五

(五月十六日)

人の心の道は、その持ち方、使い方によって、広くもなれば狭くもなり、自由であります。これ又無限であります。(中略) 心は文字に表しても清き神(精神)と書き教えられて居ります。心の持ち方、使い方を逆なコースに持つていけば、何処まで行つても迷いもがいて行き詰ります。(七月十九日)

心 三 四 一 二 七 一 三

神が万物普遍の霊であることを信じれば、人の心の永遠であることも信じて間違はないのであります。(十二月十日)

心 二 八 三

人の心は、眼にも見え手にも掴めず、神とも教えられません。大霊であり、清らかなものであります。いつも大霊を尊敬すると同時に愛さねばなりません。形に現われて、目に見えるものならば感謝が出来ますが、目に見えざる為、其の大霊に、感謝せよ・愛せよと言われても信じられない事になります。日月がたちますと、必ず心の動きが形にあらわれます。現れてから感謝するのと、形に現われない前に感謝するのとは、大きな開きがあります。

心 二 八 四

心の持ち方・使い方が、誠でなければ、艱難辛苦の場合に、不平不満が、憤慨・疑い・妬み・恨み・嫉みが湧き出るのであります。

心 一 八 二 四

この世の、よろずの物は大神様から拝借しているようなもので我物と云う物は「心」一つより外にないのであると云うことを悟るまでには中々困難であります。

心 一 八 五 一

「神のつとめ」と示してありますが神(ジン)は神であり神は心であり、心は絶対なもので神とは同一の精神でなくばなりません。それは心を精神と申します。精神は清き神と書き現しますが、全くその通りで、清き神なればこそ絶対のものであります。神のつとめをして行くことは、真実であり、真実に実行することが神のつとめであり、真心なのであります。人に生まれて生命ある以上には何かにつけて実行をしなければならぬことを悟らねばなりません。

心 一 九 一 二 二 四

自分の心の中に迷いのある時は、人の姿や、動作が恥しく見ゆるものであります。又

心

振 四三 一〇 五

自分の心に疑いのある時は、人の姿や動作が物足りなく見ゆるものであります。そこで精神修養する事は、我が心、我が行い、と他の人の心、行い、を引較べてそれによつて悟つて行かれるよう努めなければなりません。かような人を堅実な、忠実な、経験のある、徳のある、人と云うのであります。

心

命 四八 一二 七一

心を信じなさい。その心は命ですから、この心を、自分が自分を信ずると云うことが大切である。この点が大事なことで、俺はもう駄目だとか、俺はどうしてこうだろう等迷わないで、自分の心を信じ、正しい心を持つてゐるぞの自信を持つてゐることである。

心の中に神宿るといふが、誰しも修養してそのようになりたいものである。心は広くとも中が乱雑であつてはならぬ。(中略) 乱雑な所へ客人は迎えられないはずだ。塵を払い片付けねばならぬ。心の中を整理整頓し綺麗にする。汚れた心を洗い浄め、散らかつた心をかたづけける。反省をすれば感謝が生れる。感謝によつて心の塵は払われるのである。

心

命 四八 一二 八一

人の心は目にも見えず、手にもつかめず、神とも教えられる。大霊であり、清らかなものである。いつもこの大霊を尊敬するとともに愛さねばならぬ。形に現れ、目に見えるものならば感謝もできるが、目に見えないため、その大霊に感謝せよ、愛せよといわれても信じられないかも知れぬが、日月がたつとかならず心の動きが形にあらわれる。現われてから感謝するのと、形に現われない前に感謝するのは大きな開きがある。万人は形に現われてから後に感謝するのであるが、それでは、なにか利益があつたならば働くというのと同様である。物と物との取引の如く、物のある間は人と人との交際もするが、物が無くなれば絶交するということと同じである。誠の心には裏も表もない。水にも火にも風にも裏表は絶対がない。水は智慧であり、火は愛情であり、風は元気である。人の心には持ち方、使い方があつた。これを普通一般に心を配るという。(中略) いかなる苦勞艱難があつても、誠心で各人の任務を実行すればおのずから幸福になれるのである。

心 命 四八 一二 一三六

心の持ち方、使い方が狂つてくると肉体に故障が起る。反省し、気がつけば素直に改めることである。心から反省し、懺悔する時は、熱い涙も流れてこよう。この時は、神仏の心にたち帰った時である。涙はすべてを浄化するのだ。

心が動いて 振 四二 四 七

心の方は変わり易い、又仕事も色々と雑用が多い。それですからいつも話しております通り、心が動いて肉体が動く、物が動くのであります。

心掛けがよい 命 四八 一二 五八

心掛けがよいとは、心の中がよいことで美しい和やかな心で、疑い心や迷い心がないということである。心掛けがよければ、だんだん徳の分量が増すのである。そうすると病気もよくなり、事業もよくなり、生きがいを感じてくる。

心が濁る 振 四三 五 五

「めいしん」とは心の迷いであり、心の迷いは魂がにごつてくるからである。どうして濁るか、我執貪欲があるから。これを改めよと口をすっぱくして云っており、教えである。我執貪欲のために迷しんにつながつてしまう。

心が太る 振 四三 四 七

捧誠会の教えを勉強して、身に修めて、心の血、心の肉になれば、心がふとります。心が太つておれば、些細な事で不平を思ったり、云ったりしません。不平を思い、嫉妬心を持つと云う事は心が太っていない。成長していないからで、いつも心が淋しい。

心が豊かであれば、暖かさ、広さ、強さを持つておれば動揺転倒しない。

心が細る 命 四八 一二 二九六

志(こころざし) 命 四八 一二 二九八

感情ばかりに気を使っていると心が細る。自分の心を見せたり、現わしたりすることはできない。物や形によって示す、それが志である。

心で観る 命 四二 七 一一

目でものをみるのではなく、心で観るのです。心にあるから、心にあるだけのものが見えてくるのであります。

心と言葉の交流 命 四五 八 一六

心と肉体 命 三四 一二 七四

心と言葉の交流、神の道であります。すべて心の動きによって肉体は動きます。それ故に心の動きをあやまれば肉体に故障がまいります。(二月五日)

心と肉体 命 三四 一二 一三七

心が動いて身体が動き、物が動きます。(中略) 心の持ち方、使い方がくい違いま

心と肉体

命 四八 一二 一七七

心と物

命 四八 一二 四五

すと、肉体の組織に狂いが生じます。心と体は神体とも、誠体とも申しませす。
(三月六日)

心が動き、次に肉体が動くのであるから、不平不満などで、心の整理のつかぬ時は、自然と手足の動きが狂ってくる。つねに手足の使い方が狂っていると、終には病み患いとなるのである。中風などもその一例である。

物を戴き物を差上げるとは、その恩恵によってよく承知しているが、誠の心を戴き真心を差し上げるとは忘れ勝である。物と心とは車の両輪の如く、またあざなえる縄の如きものである。(中略) 心によって物を動かし、心によって物を戴き、心によつて物を差し上げるのであつて、心が先なのである。心を先にし物を後にしてことをなすべきが天則なのである。肉体にしても足が一步出て心が後から出るのではない。心の命令に従つて足が一步出るのである。心を後まわしにして物を先にすることは天の法則でない。(中略) 狂つた心狂つた行いをしながらこれを知らず、自分は正しい、善だ、間違ひはないなどと愚かな悟りを持ち、取違ひをしている人が多いのである。天則に基づく人は真心の人であり、どんな難があつても感謝感激で進行できる人である。

心の後始末

命 四八 一二 二七五

心の現われ

振 四二 一一 四

人には喜びを与え、つねに己を虚しくして徳をつむことは心の後始末である。後始末の完全にはできない人は出世することが難しい。善にしても、悪にしても心の現われが肉体に現れ、物に現れ、金に現れる。結果として現れてくる。

心の動き

ふ 三六 五 三

心の動き

ふ 四四 一 四

心の動きは目に見えませんが、まいた種の如く、年月が経てば必ず形に現れてくる。心の動きがまちがいきますと肉体の行動も物の動きも、すべてが乱れてまいります。そうして家庭が不和となり、社会が渾沌(こんとん)としてまいります、そのさきは大戦争にもなります。

心の動き

ふ 四六 五 六

心の動きが万物を動かしてゆく。心の動きが肉体に現われて、物に現われてくる。

心の動き 三三〇 一一 七二八

心の持ち方、使い方は、鏡に映るようにならずの日に肉体に現れ、物の交流に現れてまいります。心の動きが肉体の動きに現れることは事実であります。(十二月十八日)

心の動き 振四二 一一 四

心の動きが肉体の動きに、行いに出てくるのであることは繰り返し繰り返し教え導いている。

心の動き 命四八 一一 一三七

心の動きがみ教えの精神に従って動けば、生活は狂わない。狂うのは心使いのどこかに欠陥があるのだ。肉体に故障の起るのは、不幸なようだが、気がつけば有難くなる。

心の美しさ 三三四 一一 五二五

人と人とが交流する上において、心の美しさは目の光にあるのであります。(九月五日)

心の置きどころ 三三〇 一一 五二五

心のおきどころも、置き違えば迷いが生じ、行き詰まる。

心の開発 三三〇 一一 五二五

心の開発ということは、まずもって天地の恩恵に、また万物の恩恵に感謝しなければならぬ。万物尊愛であります。また、霊魂を敬うということがなくてはならない。

心の開発 三三〇 一一 五二五

これは万霊尊愛であります。

心の開発 三三〇 一一 五二五

心の開発は心の持ち方、使い方を天地の理法にかないますよう天地自然の法則を学び修めてそれに反することなく万の掟を守り、さかしまの心を持たず責任を重んじ、ながい間、日本国民として教育勅語によって示されました道徳、つまり人の道を歩み、もって安心立命の境遇にたつすることあります。

心の片輪 命四八 一一 二七一

心の片輪の人が多し。これを両輪にするために修養が必要なのだ。単線の人より複線の人になれ。

心の片輪 命四八 一一 二七一

理由をつけて素直に「ハイ」といわない。素直さがないのである。上げたり貰ったりするところに交流があり、気持ちも通う(意気通う)のである。片よった固い心は片輪である。

心の片輪 命四八 一一 二七一

かたわは肉体だけではない。(中略) 遠慮したり、辞退したり、人の好意をすなおに頂けない固い、狭い心。これは「かたわ」である。気持ちよく上げたり貰ったりするところにお互いの気持ちが通う。それが人と人との「意気通う」である。

心の糧 命四八 一一 二七一

どんな足りない言葉でも聞き直し、見直し、味わっていけば、心の糧になることが沢

心の糧

振 四三 一〇

山にあります。(十二月十三日)

生命の糧は心を太らせて成長させることにある。肉体の糧は毎日頂いている食料である。みおしえを通じて、教義教典のお話しを頂くことは心の糧を頂くことである。それは心を動かしてゆく糧であり、心の動きは心の行いである。それが心の持ち方使用の糧であり、即ち生命の糧である。肉体の糧によって生きる、生命の糧によって活かされるのである。

心の靴

ふ 五一 一一

狭い心とは小さい靴のようなものである。靴は形も寸法もきまつている。その靴に、いろいろなものを入れようとするから無理が生じる。四角い靴に丸いボーウリングの球は入らない。ふろしきなら自由自在に包めて結べる。皆さんは靴を持っているのか、ふろしきを持っているのか、この点を反省していただきたい。(裏表紙)

心の切替

ふ 三九 一〇 一六

いかりの時は水をのめ
ねたみの時は空気すえ
かなしい時は親おもえ
うれしい時は励みませ
不満の時は風呂にいる
不平の時は月を見よ
なやみの時は融和して
進まにやならぬ人よ人

心の切替

ふ 四一 一七 一一

扇子を逆を持った場合、すぐに持ちかえる。持ちかえないと使えない。この持ちかえは簡単にやれるが、心の持ち方、使い方は、むずかしい。人みな、それぞれにうぬぼれを持っている。その、うぬぼれ故に尚さら切り替えがむずかしい。しかし、切り替えていかねばならん時がある。その時に臨んで、なお躊躇しておつては、とり返しのかかぬことに会う。

心のくもり

ふ 五五 八

カメラのレンズがくもっておれば正しい映像をむすばない。同じように心が濁ってく

心の建設

ふ 四三 二 九

もっておれば、見たり聞いたりすべてが思いちがい勘違いとなって、おのずから迷いの渦中にはいつてゆくことになる。「心を浄化しなさい」「魂をみがきなさい」と、口をすっぱくして教えているのは、このゆえである。 (裏表紙)

心の建設とは濁った魂を磨くことである。(中略) 心の浄化ができていないと、それが気のわずらい、事業の失敗、いろいろの不幸災難となって現われる。いいかえると形の建設が完成しない。だから形の建設にあたっては、なによりもまず心の建設が土台であり、第一である。

こころの建設の土台

ふ 四三 一 八

建設ということたまは懸命ということたまに通じる。ゆえに形の建設も、もちろん一生懸命である。いい加減にする人はない。この一生懸命は人のみち、活かされている大恩に感じて感謝していくのが神のみち、この二つが合掌してはじめて立派な建設となる。

心の交流

ふ 五六 六 二

回転することは、交流することであり、心と心の交流は、思いやりであると諭されております。このことは、天地自然の法則を学び修め、神の子であるということを目覚めて、強く正しく誠を捧げて行動をしていけば、悟れるのであります。

心の交流

み 三四 一二 五二〇

天地自然の法則は神の道であり、心の交流即ち思いやり、言葉の交流即ち言葉の出し入れを教えられます。心は常によい念を通わせ、言葉の使い方はこれを丸くやさしく、正しく強く、お互いに差し上げ戴き、交流する事を怠ってはなりません。(九月八日)

心の実行

訓 一八 八 六二

心の実行は見ても聞いても、人に笑われても、よい事をして、攻められようと、心の奥底から感謝が出来るだけの信念がなければなりません。かように実行して行く事は、その心に知らず知らず利息がついて立派な人格者として何れの世にか認められるのであります。

心のシミ

ふ 四一 七 一〇

心の「シミ」が事に触れて「不平、不満」となり、「嫉妬」「ねたみ」となって現れる。(中略) 「なぜ、不平不満がわくのだろう…？」それは、心にシミがあるからである。

心の修理 命 四八 一二 二九一
心の消化 ふ 四一 八 八

心の浄化 ふ 四〇 六 一八

心の浄化 ふ 四三 一二 一〇

心の浄会 ふ 四一 六 八

心の消毒 ふ 四六 四 四

心の善悪 ふ 四二 一 一七

心の掃除 ふ 四〇 八 一五

心の掃除 振 四二 七 三

心の底から ふ 四七 二 二二

心の力 ふ 四三 一 六

心の力 命 四八 一二 五九

人々の通る道も修理を怠ると凹凸になる。心の道も同様で心の修理が必要である。人の言葉を聞く。耳で聞いて心で消化して腹に修める。そこで、始めてよい言葉をさし上げることが出来る。それが、心の中で消化不良のまま溜まっていると、いつかは表に現れる。怒りとなり暴言となり、疑い、ねたみ、しつととなって現れてくる。

心の汚れは報恩と感謝とで洗い浄めていく。

今日一日が生涯であるからには、心の浄化も、その日その日に行うのが本当である。

心の浄化は心の浄会である。心の浄会は「心の浄化」である。

心の消毒とは魂を磨き清めることであって、心の消毒とともに肉体も消毒し、診察をうけ治療しなければなりません。

心の善悪をきめる永遠不変の実現は、みおしえであります。

心の中の掃除は感謝である。

心の中を大掃除するには、まことの感謝を捧げ、実行に邁進すること。心の中の塵や埃、汚れる気持を浄化してゆくには、まことの感謝を捧げながら、実行に励んでゆく。又身の患いを回復させるにも同じであります。

心の底からというのは無条件であります。

種は土地の水と熱とによつて芽生え、花さきみのる。その「みのり」を人は食べて肉体の血となし肉となし、そこから力が生じる。ゆえに「力は地から」であると教えている。土地からはなれて力ではない。これを「足が地についていない」という。姿ばかりが、フラフラしているのではない。心もまたフラフラしている。酒に酔っているようである。病いはここから生ずる。この因果の循環を考えてみると、すべてが「種」そのものにつながっていることがよくわかる。

後かたづけという実行によつて、心の力は出てくるのである。あとかたづけをさせて貰う、あるいは手伝ってあげることによつて各人の徳が高まり心の力がついてくるのである。(中略) 気持のあとかたづけ、心のあとかたづけに注意せねばならぬ。人

が腹を立てた時、自分も腹を立てるようではいけない。人が腹を立てれば自らはそのあとかたづけとして和やかな心で接することが必要である。(中略) 夫の日々の働きに心から感謝する妻に神は力を与え給うのである。感謝によつてこそ、そこに力が生れるのである。

心の塵 命 四八 一二 二九三

目に見える体の垢でさえ一度ではとれない。まして心の中は塵箱のようではないだろうか。心の汚れや塵はたえざる感謝で拭い去らねばならない。

心の使い方 命 四八 一二 一四二

心の使い方は目に見えぬが、人の使い方が上手になった時、はじめて心の使い方のよくなったことがわかるのである。(中略) 心の使い方が広く暖かければ、人も集り物も集まる。おたがいに人を疑つてはならぬ。夫婦もうちとけ信じ合わねばならぬ。誠の心で人を信じるのが、真人の使い方上手といえるのだ。

心の扉 命 四三 六 六

迷っている時は心の扉は閉つており、感謝があふれている時は心の扉が開いている。心の扉を押し開きということは感謝であります。

心の扉を押し開く 命 四八 一二 六九

心の扉を閉める時には素直な低い心が必要である。静かなる反省の時である。お日さまの恵みは万物に平等である。しかし、こちらから囲いをしてしまえば、いくらお日さまでも照らすことも温みを与えることもできない。(中略) 私を薄情に扱

心の扉を開く 命 三九 二 一四

う、私に冷淡だ、私を可愛がってくれない—というが、全て自分で作っている囲いの故である。心の扉を押し開いて一歩前進してみよ、そこには願わずとも明るい光も温かい光もある。

心の扉を開く 命 三九 二 一五

囲いのある生活は冷たい生活である。このような環境では、心が凝り固まる。いくら立派なものが目の前にあつても五本指を開かないとつかむことができないでしょう。心もそのとおりです。心の扉を開かないと、教えも何も入ってこない。先のこと

心の扉を開く 命 五一 一二 二四

とも見えないから、悩み苦しみがたえない。修養団捧誠会の会員は自分も心の扉を開くと同時に、にぎっていて心の扉をとざしている人に、朝日が闇をパツと明るくするように、誠の愛によつて開いてあげなければなりません。(中略) 若い人を指導す

る場合も、遊ばせてあげる、時にはご馳走もしてあげる、というように心の扉をおし開くようにしてあげなければなりません。

心の扉を開く時には広く温い心、感謝の心が必要である。よい教え、よい話を聞く時などこの心構えでなければならぬ。

感謝の心なき時は、必ず心の中は泥海のようになり、波立つものであつて、船が航海するにしても風波高い時は出来ません。心の中の波風は我執貪欲の現われであつて、昔も今も変わることなく、名誉、財産のことになると奪い合いして心が乱れてくるのであります。

心の中 命 四八 一二 二二八

心の中が曇れば、硝子が曇ると同じように、一寸先も闇となり、迷いくるのである。心の中が曇れば、人を恨み、妬み、腹を立てて、悲しみ、歎き、人のなすこと、言うことはみな心の曇りとなり、良き話も心の中に入らず、良きことが家の中にも入らない。良き話、良き品物がだんだんつもり重なれば、その家は幸福となり、心の中にも良き話が積み重ねてあれば心迷わず、苦しまず、豊かな安心した生活ができるのである。心の中の整頓とは、感謝して働く。これが整頓であります。心の中の整頓と職場の整頓は、感謝して働く。これが整頓であります。心の中の整頓と職場の整頓をして行く処に皆さんの美しさがある、人格がある。

心の中の整頓 導 三四 一〇 一一五

心の濁り ふ 四二 九 六

心にごれば良きこと映らず迷いを生じて行きづまり肉体の患いとなります。

心の犯罪 命 四八 一二 一七三

人のものを盗みとるよりも大きな犯罪である。一家においても親子同志、兄弟同志、心を傷つけ合っている。この心の犯罪は、つもりつもって寝所という牢屋に入らねばならぬようになる。開腹手術などは大きな犯罪の結果といわねばならぬ。

心の貧乏 告 二四 二 五

己の生活の程度がいくら低くてもこれを悲観するような事があつてはならない、人を恨み己を悲観すると云う事は實に淋しい心の切ない、心の貧乏になつて居ると言わなければならぬ。

心の貧乏 誠 四八 一二 一〇八

心が貧乏になりますと、ひがみ、ねたみ、そねみというものが出てくる。これは今日

心の貧乏人

ふ 五五 二 三

にはじまったことでなく、祖先伝来からこの血の中に流れているのでありますが、それが出てくる。この心でものごとを見たり聞いたりする。善意に解釈できるか、悪意に解釈して、ねたみ、恨みを持つか、紙一重の差であります。

心の貧乏人

命 四八 一二 一六三

金も土地も家も持っていないながら争う。何もなければ何とか手に入れようという争いもありますが、何もかもありながら争う場合もございます。身心の悩み苦しみがある時には、過去を思い、足らざる所に気付いたら、少しでも天借を返すこと、また、今まで生きてきた事に、また活かされてきたことに、感謝することが必要なであります。血圧の高い人は心の貧乏人である。心さえゆたかであれば低いはずである。怒ることも、動揺転倒することも、その他、心の無駄使いはすべて、その人の心が貧しいためである。

心のふろしき

ふ 四三 四 九

「ふろしき」は自由自在につかえる。荷物が大きければ大きいように、小さければ小さいように、相手に合わせて、いかようにも働く。しかし、このふろしきも小さければ、大きいものは包めない。人の言語動作を見て学べよ、と教え示しているのはここであって、すべてを包んでしまうような自由自在の心のふろしきを常に持っていてほしい。

心の変化

ふ 四二 九 六

天候の変化が人力では如何ともなし難いのと同じように、心の変化も人の力ではどうする術もありません。

心の乱れ

ふ 四六 三 一七

なぜ心が乱れるのか？生活が安定していないからである。「物」に集中して、生きることに夢中になっているからバランスが崩れている。中心がとれない。そこに乱れが起っている。

心の道

み 三四 一二 四一四

人の心の道は、その持ち方、使い方によって、広くもなれば狭くもなり、自由であります。これ又無限であります。神の道は数理によって計ることも出来ませんし、心の道も亦同じであります。心は文字に表しても清き神（精神）と書き教えられております。心の持ち方、使い方を逆なコースに持っていけば、何処までいっても迷いもがい

心の道

告 二四 二 五

て行き詰まります。(七月十九日)

心の道は広く尊く朗らかにして行く事が捧誠会の御教えであります。ややもすると心が何時もすさんでしまつて悩むことが多いと云うことは生活の程度が不公平でありますからそう云うようになって参ります。今は不自由でも十年先には必ず幸福になる人もあります。今は幸福でも十年先には不幸になつてくる場合もあります。(中略) それでありますからどう云う場面が家庭に現れ来ても、それに対してこれが私達の生活にとつて一番仕合わせだ、この生活が一番私達の生活には幸福だと、この心が湧いて来るように修養が出来ればその人達は本当の誠の愛があるのであります。

心の無駄使い

命 四八 一二 一三〇

心の無駄使いをすれば、心は自滅し肉体も弱つてくる。そして、無限の財産が無くなるのである。心の無駄使いをする人が、決して肥えないことをみても、非常な損失であることがわかるはずである。

心の目

訓 一九 一二 六

不自由を喜び急がず、日月の進行の如く生活が出来得るならば、迷う事もなく、心の眼は開き、肉眼の光を曇らせる事はないのであります。眼を病み、眼の障害は、心の持ち方使い方が、あまり忙しく、おちつかず、時によれば「己れ我」、と云う気持ちが知らず知らずの間に積み重ねられて居るのであります。

心の持ち方

ふ 三九 二 一九

庖丁には庖丁の持ちようがある。(中略) 心も持ちようがある。「心持ち」というが、心をいつもつきたての餅(持ち)のように、やわらかく持つのが正しい持ち方である。ところがその心が何時の間にか、日のたった餅のようにコチコチに固くなる。こうなると、全く融通性を失つて、心の動きがなくなつてしまふ。

心の持ち方

み 三四 一二 三七〇

喜びも悲しみも苦しきも、心の持ち方、使い方にあるのであります。(六月二八日) お互いに自己の利益のみを計らず、他人に利益を差し上げ、その余徳を戴く心をもたねばなりません。キリストが「己れの欲するものを人に与えよ」と教えておりますが、与える心にはなかなか容易になれません。(十二月十三日)

心の持ち方

訓 一八 八 四

人の喜びを聞けば喜びとなり、悲しみを聞けば悲しみとなり、悪説を聞けば悪となり、

心の持ち方使い方 命 四八 一二 一九三

これ感情の道すがらであります。けれども喜びを聞いた時には、尚も心を引き締めてゆるみなく、尚一層浮かれずつとめなくてはならず、悲しみを聞かされた時には力強く大磐石として行かねばなりません。

心の持ち方、使い方は、目にも見えず手にも掴めませんが、月日がたてば形に現われてまいります。(四月二日)

心の持ち方使い方 命 二八 二二

心の持ち方使い方によって、万の物が動き出してまいります。それ故に、心の持ち方・使い方が狂えば凡てに狂いが参ります。狂ってまいりますと、精神も衰弱し、物も不足になってまいります。

心の持ち方使い方 命 四八 一二 一二六

心の持ち方を広く正しく暖かくせねばならぬ。もち方がしつかりせぬと、使い方もしつかりしないわけである。ナイフで鉛筆を削り、包丁で野菜を切るにしても、しつかり持たねばよくきくことはできない。(中略) まず心の持ち方を正しくし、次に心の使い方を活かし、言葉の使い方を活かして手足の使い方を活かしてゆくように勉強すべきである。(中略) 相手が勉強できるよう、実行できるよう、努力できるよう協力してあげることが大切である。

心のよごれ 命 四八 一二 一二九

心のよごれが肉体の患いとなり、事業の失敗となる。よごれた心には清らかなものも見えず、また清らかなものも集ってこない。(中略) 心がよごれると人が寄りつかぬ。いかに美しい姿でも、心がよごれていると人は集らぬ。一家庭にしても、心がよごれていると人はよりつかない。(中略) 親切だ、美しい明るい心だ、といわれるような人は、多くの人から信頼される。自分は正しいのだ、悪口をいう人とはあくまで戦ってやろう、などというような心を持つてはならぬ。われわれは反省するため知恵をいただいているのだ。

心の留守 い 一八 一〇 一九

心の留守とは心の働きがなく、いつも感違いやくい違いを起こして迷い、疑うような心の持ち主なのであります。心迷う人こそ何かにつけて、不自由も悲しさも現われて来るものであって人としての心の迷いこそ精神病者のようであって、この迷いが知ら

ず知らず人としての道を誤り、最後には行詰り人に迷惑をかけ妻や子供にまで心淋しき思いをさせ人に嫌がられ、神の子としての人でありながら人でなしと云うような事になってしまいます。このような時にはこれまた留守宅なのであります。留守宅とは何もない淋しさと悲しさとの意味合いなのであります。

心のわずらい 命 四六 四 四

心は種、肉体は畑 命 四八 一二 二九四

である。

心安らか 訓 一八 八 二六

心安らかと云うことは、実は神の子としては永遠に続かねばならないので、永遠に続くのが当たり前のことです。それが出来ないと言うことは神の御心を知らないためであり、我欲、高慢の為己の不徳を知らざるためであります。

心を清める 命 三九 二 二

心をこめる 命 四三 一二 一七

借り物を自覚して活かされている大恩に感謝することあります。わからぬ人との間には、八百八段階がある。八百八とは米という字に通じる。心をこめ（米）て教えみちびいて行かねばならないということである。

心を地につける 命 三九 二 二〇

「足を地につけて歩む」という言葉がある。（中略）足は始めから地についている。宙に浮いている足などある筈がない。我々が地につけなければならぬのは心である。

心を磨く 命 四二 一二 二二六

心を磨く——というが、心をこの肉体と切りはなし、心だけをとりだして磨けるなら案外しやすいだろう。そうはいかない。この肉体に宿っている以上は、肉体の欲望にとりまかれながら磨いていく。だから容易な業ではないのだが、さきに入ったように、それ故にこそ、「里の仙人」の修行となる。

心を磨く 命 四二 一二 二二八

——心を浄化せよ、心を磨け。
私はすでに四十年にわたって、この一事を叫びつづけてきた。くりかえし、くりかえし語り続けてきた。それでもまだ終わっていないから今日もお説きつづけている。

人に言うだけではない。私自身が毎日同じ業をくり返している。昨日も磨いた。今日もまた磨く。昨日、磨いたばかりだから今日は休むということはない。空気を吸い、

乞食 　　ふ 四八 五 六

食事をいただくのと同じように、心の練磨を休んでいない。神——親のお使いが、いつ仰せつかるか知れない。いつでも、どこにいてもスツと立ち上がれる用意、それは、日々に新たに、日々にたゆみなき心の練磨のほかはない。日々の生活を人にたよっているのが乞食であって、いまの世相も外見はきちんとして、いるようにみえるが、心の中は欲しい欲しいの渦がまいている。そういう世相の無言の警告がああ姿である。

乞食 　　敬 四一 一二 一〇四

「乞食」は「古事記」に通じる。古事記の時代は山に野に寝て草を食べていたであろう。ふとんの上に寝ることになったのは、ずっと後代である。

乞食根性 　　ふ 三九 一 一六

実行するよりも私の指示を受けて一刻も早く楽に悩みから逃れたいという弱い気持ち、下品な心になっている。それは、いいかえると、「何とかしてもらいたい」という乞食のような気持ちである。

五七 　　ふ 五七 一 二

「本年」五七という数字は、いつまでも仲よくという言葉でございませう。

御神徳 　　訓 一八 八 五七

よく社会にはお祈りする時に我欲を出して病気が癒えるように、もうかるように、家内安全になるように手を合わせるだけで、精神の汚れを洗い清めるとか、改心して精神的にも肉体的にも実行することを忘れては居りませんか、これから必ず大神様の御心に叶いますよう、国の為、社会の為、万分の一なりとも実行させて頂きますからと、お祈りすることが後回しになって居りはしないか、働かずして、改心もせず、人を怨み、紙一枚なりと粗末にし、親は子を怨み、子は親を怨み、主人は妻を怨み、妻は夫を怨み、兄弟同士喧嘩をしたりして居れば、如何に其の人が合掌してよいことを言葉で申して、神に頼んでも、それでは御神徳を頂けないのであります。

戸籍 　　ふ 三八 一〇 一六

「戸籍」は「子堰き」であり、戸籍の乱れというのは、堰が破れて水が氾濫している姿である。

こそ 　　ふ 四一 一 一八

「こそ」の言霊は、あなたがいらして下さいましたからこそのように、相手に対してつけられるもの。

こそ 四四 七一〇

こそ 誠 四八 一二三四

国旗・国家 ふ五一 一二

コップの水 命 四八 一二一〇五

今年 ふ五三 八五

ことたま ふ三九 一一一五
ことたま ふ三九 一一一五

こそこの二文字を自分につけず人につけること、とつねに教えられている。言霊は「酵素」である。「酵素」はエネルギーである。

この空気があればこそと、むこうに「こそ」をつけていく。「こそ」というこの気もち、この言葉、これは感謝であります「酵素」というのは、徳を貯えている、という言葉であります。草木の根には「酵素」がある。目には見えねど、酵素をふくんでいる。「こそ」は「酵素」である。立派な僧を「高僧」という。それは徳たかき人であります。言霊の真理からいうと「こそ」は正に「酵素」であり、「酵素」はまた「こそ」であります。「酵素」はエネルギーであります。この地球に酵素がひそんでいる。流れている。ですから、—あなたがおればこそです。

国旗を捨て国家を捨てて、どこに民族の平和があるというのであろうか。たとえ国民の多くがこの誤りに陥って反省するところがないにしても、私だけは—捧誠会だけは守りぬかねばならん。これが「道を守る」ことであると信じて疑わなかった。(裏表紙) 一パイ水のはいったコップに、さらに水を入れることはできない。わが子に対しても押し売はよくない。押し売をしながら相手がいうことをきかぬといっている場合が多い。今年、家も職場もゴタゴタするのを治めてゆかねばなりません。内の充実、心の内、身の内、内輪、内外ともにみなおして徳をつみ徳を及ぼすことが大切であります。あ言われたこう言われたというような甘えがあるような根性では、本会から遠ざかってゆくよりほかはないのであります。何のために本会の趣旨を学び修めて無条件実行をするのか。神の子の自覚はどこにあるのか万物の霊長の尊厳はどこにあるのか。会員一人一人が、己の心に聞いて見なくてはなりません。

心のひびきが「音」である。大極のひびき—魂のひびきが「ことたま」である。

「ことたま」は「言霊」と書いている。霊は○であり、○は円である。そして円は陰であり、陰は陽と裏表である。「陽」は「用」であり縁(円)あつて用(陽)をするのが、この世の社会生活である。

ことたま ふ 三九 一一 一六

「ことたま」の「たま」は丸いもの。それは「円」であり「縁」である。だから、人は縁ある人に交わって、縁ある人の仕事にたずさわる。

ことたま 敬 四二 一一 九三

神は万物普遍の霊でありますから、火・水・風にも万物にも霊があり、声があります。この「声」すなわち「音」は「温」であり「恩」です。万物の発する音はすべてこれ「言霊」であって、この「言霊」が「みおしえ」です。

ことたま 振 四三 五 三

ことたまと云う事は命の親の生命である。又我等の生命である。分け御魂である。ことたまは生命である。その生命が永遠につながっている活かされている命である。肉体は一代だけであるが、霊魂は永遠につながっているのである。ですからそれを信ずれば、人の残されている言葉の四海同胞と云うことも信じられる。人種国籍が違ってもやはり天が下に生存している我等は皆同胞である。

言霊 ふ 四六 五 二三

言霊のまにまにみおしえを守りなさいとも教えています。言霊というものは命である。つきることのない命である。

言霊 ふ 五三 一〇 四

言霊と申しますが、言葉は一音一音魂の響きであります。一音の言葉でも、判断のしかた、聞きよう、とりようで、不平を持つ、不満を持つ、多くの人の前で馬鹿にされたという人さえも会員同士にある。いろいろな不徳をつませる場合もございます。(中略) 清きみ魂でありますがその事を忘れる。忘れるとは、我が意を用いてこう言われた、ああされたという事をいつまでも根にもって、感情的になるために大事な事をおろそかにしてしまう事であります。(中略) ことたまはいのちであります。いのちは、いのちの親の分けみ魂で、悠久とさとされていることが分かれば、毎日、魂を濁すような事はございません。

言霊の力 ふ 四九 八 一五

言霊の力は世界を結ぶ、とさとされています。結婚も仕事も学校へ入るのも全て縁あつてのことである。縁あつて一円につながって

ことたまのまにまに ふ 三九 一一 一六

ゆくとすることは自然の法則である。だから、「ことたまのまにまに」とは天地自然の法則に添うていくことになる。

ことたまのまにまに ぶ 三九 一一 一六

人の道でも、あげるから貰える。(中略) 上げたりもらったり—この真理に添うた交流、これが、「ことたまのまにまに…」というのである。

ことたまのまにまに ぶ 三九 一一 一七

縁がないから不幸と考えてはならない。それを教科書として受けとつていく—これが、ことたまのまにまにの生き方である。

ことたまのまにまに 敬 四二 一二 一三三

「声なき声」は「無言」である。これはまた「無限」である。大極のひびきというこの言霊は、言霊のまにまにとあるように、無条件実行を示されている。「まにまに」であるから、そこに我がの意をさしはさむことは許されない。

ことたまのまにまに 導 三四 一〇 一五四

言霊のまにまにとは、月日とともに歩み、万物と共に語り合う、広い大きな暖かい心で、誠の道を進み行うという事なのであります。言霊は、地球の温であり、熱であり、地球を回転させております力であります。この力を自然の法則とも教えられ、無極から大極になり、大極から地球があり、万物が生成発展して、成長しているのであります。風は言葉です。言葉は自然の風のように冷たい言葉も暖かい言葉もあります。

言葉 ぶ 四一 一 五

言論の自由の現在です。いかに自由でありましても、言葉は善悪にかかわらず生きております。

言葉 ぶ 四一 一〇 七

文字は証拠というて残されるけれども、詞には証拠が残らない。(中略) みおしえには「天知る、地知る」と示されているが、これさえも「天地が知っている」という証拠がどこにあるか」と疑う人もあるだろう。それは愚者の「うぬぼれ」である。

言葉 ぶ 四二 四 三

言葉は音であり、恩であり、声であり、肥であります。

言葉 ぶ 四四 六 二

言葉は「ことたま」としてまことに重要である、これは「いのち」であります。そしてこのいのちは「人のいのちの尊さは、くめどもつきぬ宝なり」と示しております。

言葉 ぶ 四五 一一 五

言葉というものは魂の響きでありますから、心が迷った時には迷いの言葉がでる。喜びの時には喜びの言葉がでる。悲しみの時にも、ねたみ、うらみ、そねみの時にもそういう言葉がでる。

言葉 ぶ 四六 二 二三

またキリストは言葉は愛なり、愛はまた言葉なり、言葉は神なり、声なきときはなき

言葉 ぶ 四六 三 一七

がらである。キリストはそう宣言しております。
「死語」ということもいわれるが、良きにつけ悪しきにつけ、言葉は生きている。「ことば」は、心のうごき、の現われであるから、心の乱れが「ことば」の乱れとなる。「口は悪いが心はよい……」はウソである。

言葉 ぶ 四六 八 一三

言葉の交流というものはいかに尊いか。言葉は生命なり、言葉は誠なり、言うことが成と書きます。

言葉 ぶ 四八 四 三

またキリストも「言葉は神なり」と示されております。このことを本会の趣旨から解釈しますと、言葉は愛であります。キリストは「愛は神なり」とも教えられておりますが、言葉は丸く優しく、愛をこめて語れというおさとしがあるのです。

言葉 ぶ 四九 九 四

言葉というものは、多過ぎて、また足りなくても間違うものであることを注意しました。

言葉 ぶ 五〇 三 四

一音の言葉が宇宙全体に伝わる。

言葉 ぶ 五〇 九 三

よもの人 言葉は神のみ霊にて 悪説言わず慎みてゆけ
というおしえも出ております。音・恩・大恩・体温・大極のひびき・神のみ霊という関連において諭されております。

言葉は魂であります。いのちの親からいただいたわけみたまであります。一音といえども悪説を出してはならないといのちの親は戒めておられます。そう言う戒めを聞いても、学んで知っただけで行いにまで徹底してこないものですから、あるいは肉体的患いになったり、あるいは心の悩みとなつて表れてまいります。

言葉 ぶ 五〇 九 四

悪説の中には、不平の不・我慢の我・憤慨の害・これを持つ言葉を出しております。逆に感謝の言葉・反省の言葉を出すことは少い。言葉の交流によつて広く暖かい心にすることもできれば、憤慨・疑い・迷い・苦しみを人の心に植えつける場合も数々あります。

言葉 ぶ 五〇 九 四

口から発する言葉の中の汚物毒物は厳しく慎まなければなりません。

言葉 五〇 九 五

悪説を言ったならば、天に対して、いのちの親に対して謝罪する、そして改善を誓う。これが浄会でありますから、一人でもできます。

言葉 五〇 九 一一

一度言葉に出した以上には、取り消す訳にはいきません。

言葉 五二 四 一九

金より、物より、名誉より、言葉は尊いのである。言葉なき時は亡がらであり、生命肉体は亡びてしまうのである。言葉はまた好意（声）であり、音（恩）であるから愛情、勇気などは言葉一つの使い方によって示される。言葉を持って人の魂を傷つけることは、刃をもって切ると同様である。国法によって罰せられる人よりも、天地自然の法則を守らず、違反している犯罪人が多いのである。

言葉 五三 三 二

言論は自由といえども、口は食べものを頂くだけの口ではありません。口から発生する言葉が毒説であれば「口害」となります。一言のことばが、どれほど有難い幸になるか知れぬほど尊いこともあれば、それが毒説であれば相手の心に五寸釘をうちこむこととなり、にくしみの種を蒔くこととなります。本会の趣旨に、「ことたまのまにまに、みおしえを守りつつ」修養実践せよとありますが、一言の言葉によって悩み苦しんでいる心がよみがえるし、一言の毒説が一生涯わすれられない憎しみを持たれる場合が 幾億万年も前から子孫に流れてきているのはありませんか。一言の毒説とはいえその人は、それが天借になつていふことを知る由もないでしょう。

言葉 三四 一一 二六

言葉は音であり、無限の愛であります。（一月十三日）

言葉 三四 一一 二七

言葉の出し入れは最も重要なことで、一音の発する言葉によつていかに他人の心を傷つけ汚すか分かります。（一月十三日）

言葉 三四 一一 七九

言葉は無限でありますから自由に使われます。（中略）自分の魂を磨き、何時も正しい正しい明朗な心になれるように心がけることが大事です。（二月七日）

言葉 三四 一一 三八

言葉は神なり、言の和であります。言葉の無い時は音（温）はなく、体温がありませんから活動致しません。言葉の出し入れ、使い方は自由でありますから、どう使っても、多く言葉を出しても少なく出しても、法律によつて善悪を決定することは出来ま

言葉

み三四 一一一 四二

せん。なれども言葉の出し入れ、使い方を誤れば、神から戴いた尊い魂を傷つけ濁し、又人の心も汚して、相互いに迷い苦しむことになり、肉体も亡び、国家も破壊されるのであります。(三月七日)

一言の言葉の中に尊いみ光のあることを悟るまでには、長年の修養を積み重ねなければならぬのであります。言葉は音、恩であり、熱であり、光であり、誠であり、神であります。(中略) 音、即ち言葉の無い時は、智慧も尊い肉体も、何のお役にも立ちません。(三月九日)

言葉

み三四 一一二 二五六

言葉は地球上の暖かい大恩(体温)の如く無限であります。人の肉体も言葉の無い時は、姿があっても役に立ちません。人の肉体はこの世が終わった時には亡骸としてお役に立たず地に帰って土になります。言葉はこの世の始まりから存し、言葉は神とも名付けられます。(五月三日)

言葉

み三四 一一二 二九〇

一言の言葉が喜びとなり、悲しみとなり、迷いとなり、怒りとなってまいります。人の心を傷つけず、迷わせず、悲しませず、人に差し上げる言葉はその人に感謝の心が湧き出るように差し上げられるよう心がけなければなりません。(中略) 言葉を差し上げるにも、物を差し上げるにも、相手の徳の分量を見定め、相手の心と身の行いによって差し上げるように上げる人は注意すべきであります。(五月二十日)

言葉

み三四 一一二 三六〇

人は素直な心を養えば、力強い正しい、愛情のこもった、うるおいのある言葉が発音となつて人に伝えられることとなります。言葉の交流が人と人との交わりにおいて如何に必要であるかということを自覚せねばなりません。言葉の交流によって目に見えない他人の魂を傷つけ濁していくことは、人が努力をして積み重ねた財産を奪い取るよりも重罪であることを何人も知らずにあります。(中略) 目に見えない悪質の心の犯罪は取り締まることは出来ません。それ故に次から次と心の犯罪が利に利を産み、結果として人生生活そのものが行き詰まり、迷信となり、破壊されること等は重大なことであります。(六月二三日)

言葉 三四 一一 五九八

言葉は魂の響きでありまして、心の使い方、持ち方によって発する言葉が美しくもなり乱れもするのであります。如何に立派な発音を出しても、魂が汚れ混乱しているならば、他人に響く力や愛は良いように浸み込んでいかないのであります。それ故に、一言の言葉が、出し方によっては仇にもなり喜びにもなりまして、人と人との交流の時等には、言葉の出し入れが如何に大切であるかということが、わかるのであります。常に言葉の出し入れ、即ち、使い方に注意をし、魂を磨き太らせ、広い暖かい根強い心を養うて、真底から忠実に言葉が出せるように心掛けねばなりません。(十月十六日)

言葉の出し入れは無限であり自由でありますから際限がありません。(中略) 人の作つた法律に違反しなければ正しいように思いますが、他人の心を傷つけ汚すことは大きな不徳であることを自覚せねばなりません。(十月十七日)

言葉 解 二八 一〇

言葉は各人の心を表し、又言葉は人の心を喜ばせ、言葉は神の御心と同一なるもので、言葉の使い方、これなるものは人の生きていく上に於いて、何にも換え難き宝なのであります。多くの人は言葉の尊さに関心を持っていないようではありますが、金より・物より・名誉より、言葉は尊いのであります。

言葉 解 二八 一一

言葉なき時は、亡がらであり生命肉体は亡びてしまうのであります。言葉は又好意であり音(恩)でありますから、愛情・勇氣これ等は言葉一つの使い方によって示されます。言葉をもって人の魂を傷つける事は刃を以つて切ると同様重罪であります。

言葉 訓 一九 六 五

言葉は魂のひびきである。

言葉 訓 一九 一一 二〇

言葉一言にしましても、優しい、円い、美しい、言葉を出す人は量と徳のある美人なのであります。如何に顔や姿が美人でも、言葉に針の如く、槍の如く、劍の如く、言葉を使いますれば實に其の言葉は恐ろしく、人の生命を、人の心を傷つけ、時によりますと生命を殺してしもう大罪人となるのであります。何より言葉の、出し方、使い方が私達の生活には尊い財産なのであります。如何に物質が蓄えてありまして、又名誉があつても、言葉一つの使い方が、出し方が間違つて参りますと、有形の財産

言葉 敬 四一 一一 一〇五

も、無形の財産も、人格も、失われてしまいます。真善美この三つが、言葉の使い方によって、出し方によって、生きてくるのであります。又生かされるのであります。言葉は風のようなもので、姿形の証拠を残さない。いつてしまえば、それきりである。人は聞いたといつても、いわない、いつた覚えがないといえれば追求のしようがない。どんな風にもいい逃れできそうに思われているが、われわれの一言は天のテープに録音されている。これは消えることがない。時が来れば、言葉通りの現実が必ず見えてくる。それは神が見させて下さるのである。「なぜだろう」と思うのは、いつた言葉を忘れていたからである。なんの気なしに出した一言―明けても暮れても「音」の中に生活しているのだからその無数といつてよい「音」の一つ一つは、とてもわれわれの記憶に残らないであろうが、天のテープ（記録）には録音される。これは絶対に狂いが無いのである。

言葉 敬 四二 一一 二八七

口から発する音を「言葉」という。「言葉」は「言輪（ことわ）」であり「言和（ことわ）」である。本来、丸く正しく美しく、やさしいものである。

言葉 振 四三 一〇 二

言葉は一言一音がまことを現わしている。大宇宙の響きは大極の響きである。

言葉 誠 四八 一一 一七九

言葉は魂のひびきでありますから、心が迷っておれば、やはり迷いの言葉がでる。喜びのときは喜びの言葉、悲しいとき、うらみ、ねたみを持っておれば、そういう言葉がでる。

言葉 導 三四 一〇 五五

言葉は言の和であり、何事も和であり、平和であります（中略）話を語る、その話は悪説でなく万人が喜んで頂ける話を語る、言葉の出し入れ、取るに足らない言葉でも、取るに足りるように聞き修められるようにしなければなりません。

言葉 導 三四 一〇 七七

この口からは立派な美しい言葉をだしてゆかれるようにしなければならぬ。人が喜んで下さる事を心から言わねばならぬ。それでこそ始めて人の魂が洗い清められる。汚れ物は、何でこれをきれいにするか、水がなかったならば汚れ物を洗い清めることは出来ない。例えば足袋一足、ハンカチ一枚と雖も水がなければきれいになる筈がな

言葉

導 三四 一〇 一二四

い。その水は何であるか、言葉であります。暖かい言葉でございます。言葉というのは言の和、キリストも聖書の中に言葉は神なりというように宣言しております。言葉のないときは亡がら、からだ、言葉は魂でありますから矢張り言葉のないときは、亡（ナキ）がらともうします。又言の和、言葉は言の和でありますから、この和をなくしてしまった時に我々の肉体は無いのであります。

言葉

命 四八 一二 一一五

言葉は神聖であり、すべて魂の響きであり、無限の力であり、愛である。言葉一つの出し入れによって心の悩みを生じ、心の感謝となり、尊い生命を活かすこととなり、時には生命を断つようなことにもなるのである。言葉は「ことの和」であるから、丸く優しく清らかでなければならぬ。また言葉は音（オン）であり音（オト）であって、おとなしい素直な心を養えば、美しい清らかな言葉が出てくるのである。

言葉

命 四八 一二 一一七

言葉は生きているのだ。悪い悪い、弱い弱いといえ、その言葉通りになることを悟らねばならぬ。また病気などの場合、みだりに「どういう教訓だろう」と迷うのはよくない。

言葉

命 四八 一二 一一九

言葉を差しあげる時は感謝であげ、いただく時もまた感謝でいただくことが大切である。息も喜んで出し、喜んでいただくべきである。深呼吸とは深呼吸と考えるがよい。迷いの心に注射するのは言葉である。注射薬であるから適量でなければならぬ。言葉の使い方の重要さはここにある。

病む人には命の尊さを教えよ

物資に困る人には物の尊さ、金の尊さを語れ

夫婦不和の人には子供の尊さ、また子供無き人には祖先の尊さをいえ

み教えを尊び愛し、その真隨にそって真実の言葉を語らねばならぬ

無駄な言葉は雑音である。雑音を流す人は真実の愛のない人である。不浄の愛の持主である。不のつく言葉は雑音である。真実の愛で人に接するようにせねばならぬ。

言葉

命 四八 一二 一二二

望み（思）通りにはならぬが、（心）言葉通りになる。また言葉は口である。就職口、

言葉 命 四八 一一 一二二

嫁入口にもみなつながる。良い言葉を出し、人から信頼されるようになれ。言葉はことの和で、すべて円満であり、平和であり、○であるべきである。地球も円く、人や鳥畜類の目も円く、また草木一切も円く生長させられている。円満というところが自然の法則である。

言葉 命 四八 一一 一二三

言葉一つがどれほど人の心を傷つけ曇らせているか、刃物で切れれば傷害罪、殺人罪として処罰される。魂を傷つけたときの処罰法はきめてない。しかし、天地の法則では定めてあるのだ。(中略) これほど働いているのにどうして運が悪いのだろうと嘆く人が多い。これは先祖伝来、人を傷けてきているのだ。そうしたことが廻り廻って子孫に伝わってくるのである。遠い過去のこととはわからずとも、み教えに従い実行さえしてゆけば、かならずこれらの過去の罪障は消滅する。

言葉 命 四八 一一 一二四

役に立つ時に役立てねばすてられるのである。一言の言葉でもいただいた時は、心の働きを堅実にするように役立てるべきである。

言葉 命 四八 一一 一二七

み教えの話を聞きこれを咲かせ、実らせ、味わうまでには十年かかる。空気の味、光の味、甘露のうまみを知るにも十年かかる。一音一音を心の底から味わえ。言葉は風や空気のように温いものである。味わえば、味わうほど慈味のあるものである。

言葉 命 四八 一一 二二一

言葉は人の心のひびきであって、人の心が乱れていけば荒い言葉がでる。また心が迷っておれば、取違ひする言葉が出るし、疑いの心を持つておれば人を侮る言葉がでる。さらに喜びの心の時は円く優しく美しい力強い言葉がでる。(中略) 日常生活とともにする家庭の者は、相互に相信じて言葉の出し方、使い方をとくにお稽古せねばならぬ。

言葉と心 命 五五 三 五

言葉の交流によって、また、余計な神経を色々と使わせることにもなります。心は言葉に現われ逆に言葉によって心は影響を受けます。表裏一体となっていて、言葉と心とは密接につながりがあることは、誰しも体験なさることでありましょう。

言葉の味 命 四八 一一 二九一

一音一音の言葉には言いしれぬ味があるが、それを味わうためには冷静(靈性)でな

言葉の聞き方 命 四八 一二 二八六

ければならない。神慮に合一した心になったときはじめてそれが味わえるのである。み教えを通じ、誠を通じて出された言葉は素直に聞かねばならないが、そのほかの言葉は聞き流せばよいのである。決して争ってはならない。

言葉の交流 ふ 三八 一五 一五

言葉の交流について、常にやさしい、親切のあふれた、温かい言葉を差し上げるように勉強している。

言葉の交流 ふ 五〇 一〇 三

言葉の交流は、まことに尊いものでありまして、誠という文字は言が成る、言うことが成るといふ意味であります。

言葉の交流 ふ 五五 三 三

言葉は自由である。どんな言葉を使ってもよいには違いないが、しかし、言葉の使い方は、どこまでもつないでいけるように使うのが、言葉の交流の真のあり方です。もちろん切らねばならぬ場合もある。切って役に立つように、切る。役に立たぬ切り方をしてはならない。そこには工夫体得があるが、日頃から言葉の交流を学んでいけばよいのである。(中略) 言葉の交流は、言葉だけではありません。なにより暖かい心の交流がなければ、言葉の交流が丸く、やさしくいくことはありません。言葉の交流によってまた余計な神経をいろいろと使わせることにもなります。心は言葉に現れ、逆に、言葉によって心は影響を受けます。表裏一体となっていて、言葉と心とは密接につながりがあることは、誰しも体験なさることでありましょう。

言葉の交流 ふ 五六 三 四

言葉の交流は徳と力と愛によって、強く正しく交流する。

言葉の交流を切る ふ 三八 一〇 一五

二人の対話中に、そばで聞いている第三者が言葉をはさむことがある。それは、二人の言葉の交流を切ることになり、非常に大きい過ちを犯している。

言葉の重罪 み 三四 一二 三六〇

言葉の交流によって目に見えない他人の魂を傷つけ濁していくことは、人が努力をして積み重ねた財産を奪い取るよりも重罪であることを何人も知らずにおります。

(六月二三日)

言葉の消化 ふ 五四 五

人の言葉を聞く。耳で聞いて心で消化し腹に修める。聞いた言葉をよく消化しておさめるから、よい言葉をお返しとしてさしあげられる。それが心の中に消化不良のまま

言葉の大切さ 命 四八 一二 一二六

で溜まっていると、よい言葉はでてこない。(裏表紙)

言葉は人の心を表し、人の心を喜ばせ、神のみ心と同一なもので、言葉の使い方は、人の生きていく上において、なにもものにも換え難い宝である。(中略) 金より、物より、名誉より、言葉は尊いのである。言葉なき時は亡きがらであり、生命肉体は亡びてしまうのである。言葉はまた好意(声)であり、音(恩)であるから愛情、勇気などは言葉一つの使い方によって示される。言葉をもって人の魂を傷つけることは、刃をもって切ると同様重罪である。国法によって罰せられる人よりも、天地の法則を守らず、法則に従わず違反している犯罪人が多いのである。(中略) 神の分霊として活かされる人々は、言語動作をとくに慎み、過ちのないようにせねばならぬ。神法、即ち自然の法則に違反するようなことを毎日行っている、いかに人々の幸福を神が念じられてもかなわぬわけである。

言葉の無駄 ふ 三八 八 一七

言葉の交流は大事である。人様に御馳走を出すとき、「何もありませんが」とか「まずいのですが」とかいわねば気がすまぬ人も多い。しかし、それは全く無駄な言葉である。「どうぞ召し上がって下さい」という言葉だけでよい。それが正味の言葉である。

言葉を出す時 聞く時 命 四八 一二 一二三

(1) み教えを通じての話かどうか

(2) 私の心から出ていないかどうか

(3) 単なる不平不満かどうか

みずから語ろうとする前に、これらの点をよく反省すること。また人の話もそのいずれかを聞きわけ、善処すること。

子供 ふ 三八 六 一六

姿勢は至誠である。至誠が姿勢に現れるのである。正しい立派な子供を育てたいという「まこと」があれば、その「まこと」は自ら姿勢に現われてくる。

子供 ふ 四二 四 一四

人を良くする、すたり物でも活用して作物の肥にする…これは尊いのであります。(中略) その子のみにとらわれて主人をいましめ、親戚、恩人、知人をあなどり、たとえ

紙一枚、筆一本なりとも粗末にするならば、いかに母親がその子に心を尽くしても不良になってしまふことを知らねばなりません。それは万物を軽蔑し、うらみ、ねたみするので、大切な子が不良の感化をうけるのであります。

「米」（こめ）は女性であつて愛、妻は男性であつて父。（中略）知恵をさずかりたいと思えば、水を粗末にしないこと。水を粗末にしていると 知恵のたりない子となる。「勉強しなさい……」といくらやかましくいつてもしない子になる。

子供は親の鏡であり、親の生活を実演する名優である。

小さい子供は、親の言語・動作を見聞して、それをまねながら成長していくでしょう。子供のころから、毒説の聞かれない環境で育てれば、邪まな道に入っていくようなことは決してありません。否定する言葉・とがめる言葉・怒りの言葉が乱れ飛んでいるような家庭では、この点を十分に反省してください。夫婦の間といえども、親子の間といえども反省、感謝の礼をつくし合わなくてはなりません。そういう行為ができて始めて、夫婦相和し、であります。

親は、子を育てるとともに、子の指導者でもあります。見よう見真似で子は親がした通りのことをするものです。

子供がいうことを聞かぬのも、親が叱られているのだ。叱られたら大きな広い心を持ち感謝せねばならぬ。

子供が悪いのは家内が悪いからだ。子供の不成績は、夫が教育に不熱心だからだといふように自らを反省することなく、自我にとらわれ相手をせめてばかりいるからである。不足の点を身に引きうける人こそ、将来、大成する人である。

子供は両親の分霊であるから。両親に不心得があると、必ずそれは子供に繋がってくる。子供といえるのは、十五才までのあいだであつて、十五才過ぎれば子供ではない。この十五年の間に、両親が心構えや、実行すべきことを、取違ひして不徳を積めば、子供の将来にどのような影響を及ぼすものであるか、十分に心せねばならないことである。

子供 命 四八 八 九

子供 命 五〇 三 九

子供 命 五〇 四 一〇

子供 命 五〇 九 五

子供 命 五一 七 二

子供 命 四八 一一 七四

子供 命 四八 一一 一四六

子供 命 四八 一一 二五四

子供 命 四八 一一 二五五

子供が弱くなる 命 四八 一二 二七〇

子供の病氣 命 四八 一二 二八四

ことわり 誠 四六 六一三〇

ことわり 誠 四六 六一七一

五人 五 四七 二 六

このことわり 五 五〇 五 一二

このことわりをいまこ 五 五一 一二 六

ここにころのそこより さとりつつ

この世 五 四四 七 一一

わが身がかわいい、わが子がかわいいという欲が子供を弱くし自分も弱くする。子供の病氣は親に対する試練である。親の反省をうながすための慈悲である。

「ことわり」が即ち「理」であり、天地自然の法則であります。心と心の交流、言葉の交流、この二つを理と称します。（肉体と物の交流は、仁義、道徳、人の道として教えてあります）

天地自然の法則は絶対の「ことわり」であります。これを「理」と申します。地球が回転しているのは一つの理であります。理は絶対であり、待ったなしであります。いくら合掌して願っても地球の回転は止まりません。待ったなしであります。この理に添うて、心も言葉も肉体も物も動かしていけば、不自由も争いも、だんだんと遠ざかっていくのであります。

五人という言葉は、五は悟るであり、ご恩返しであり、天借をお返しすることであります。

いのりのことばのなかに「このことわり」を心のそこから悟りつつとありました。このことわりとは天地自然の法則であります。このことわりを理解し、信じていないと脱線いたします。

神の子であることを自覚せよということ、万物の霊長ということ、天地自然の法則ということ聞かされても信じない人は、自己主義・自己満足・我執貪欲であることとされておりますから、そのわが意と感情が次から次へと積み重なると互いに派閥を作り、我を通そうとして争いになってまいります。

いのりのことばの中に、「このことわりを心のそこから悟れ」と命の親は神の子にさとしておられます。

この世は「大極の台本」であり「かむろぎの台本」である。そして社会はその舞台、人は役者である。（中略）いくら台本があっても、舞台があっても役者や演出者の調和がとれなければ芝居にはならない。調和こそ神木である。親睦である。大きな調

この世 四六 一 二二

和の中に神業を翼賛したてまつる。これが「かむろぎ、かむろぎ」である。
この世というのは向うではない、こっちでもない。この世というのは自分のことである。(中略) この世とか、世界というのは、わが心の中のことをいうのであります。さらにはいいかえればこの高天原にあるということですよ。

この世 三四 一二 八六

無極より太極になり、神の世を創り、万物が成長して活かされていく尊さは、何物にも代え難い有り難い極みであります。(二月十一日)

この世 三四 一二 二八九

この世は限り無く何処迄行けども尽きない大きな和であります。(五月十九日)

この世の中 一八 一〇 一一

この世の中は、理屈によりて組織されているものではありません。天理即ち理の世界であって、理は大自然の法則であります。人は理屈を云わねばならぬような時がありますが、理屈を云うような時には、損得に関係するか、或は、どうしても負けることが出来ない場合などには理屈を以て、やり通す事が多いのであります。本当にこの世の中は、理の世界でありまして、苦痛の世界ではありません。苦痛の心を持つから、苦痛になるのであってその苦痛を何時までも胸に蓄えているために万事万端不利な障害になってくるのであります。苦痛の心あるうちは一日として安心できず、迷い疑い、尊い生命も、財産も、名誉も、役に立たぬような始末になって来るのであります。人はお互いに、心の素直ほど尊いことにはないと知っていますが、心の素直と言うことは無条件のことであり、疑いなく、迷いなく、心の底から感謝と実行の心こそ素直なのであります。

この世の始まり 三四 一二 四八

この世の始まりは、無極から太極となり、万物一切が生まれ、成長しているのであります。(一月二四日)

この世の始まり 三六 一 三

無極から太極が生じ、万物一切が天地自然の法則によつて無条件で生き活かされ生成発展しておりますことは万人知るところであります。

この世の始まり 四三 四 二

この世始まりは無限であり、南無である。太極となって天と地、陰と陽が生じ、天に日月、地に万物あり。日月の運行は昼夜たゆみなく、地上の万物一切、陰陽、男女の

五本の指

敬 四一 一二 三三

和合によって生成発展しております。

五本の指はそれぞれ隣り合っていますけれども、互いに腹を合わせられるのは、親指とだけです。人さし指と中指とは、仲よく隣り合っていますが、その腹と腹とは会いません。いくら遠くはなれておっても、小指と親指とは腹を合わせられます。親と交わる、これが『親交』であり、それが人生の根本であるということが教えられてあります。

五本の指の教訓

敬 四一 一二 三三

親指の教訓―「親に交わる」

父母ありてこの世に出る尊さを 常にわすれず努力まします

人さし指の教訓―「進み行なう」

進行は神仏のみのことでなく、生きて活かさる生活の道

中指の教訓―「信じ仰ぐ」

信頼と愛情なくして過すなら 明るい道も踏み外すなり

くすり指の教訓―「新しく興す」

修養は生活なりと心がけ 日々に新たにはげまします

小指の教訓―「信じ行なう」

お互いにまことの道をおさめつつ まことの業にはげまします

こま

振 四三 四 三

「こま」このことたまは誠の精神が無い時には、こまる、行き詰まる、進歩がない。即ち廻らないのである。こまの真棒、まことを捧げる、捧誠は誠を捧げること、此処に初めて真の平和建設が出来るのである。

米

ふ 三七 六 三

米という字は八十八と書きます。米が食卓に出て人の胃袋に入るまでの間には、八十八の手数がかかる聞こえられています。一粒の米が蒔かれて、一粒の米から二十本の茎がでまして、その一本の茎に百五十実りますと、秋になりますと、一粒の米が三千粒になります、お役に立ちます。

米

み 三四 一二 二五四

米は女子を現わし、麦は男子を現します。それ故に米は炎熱の時に芽生えて参ります。

米 導 三四 一〇 六五

これ即ち愛情を示します。麦は寒い霜の降りる時に踏まれながら成長致します。男子は度胸であり女子は愛きようであることは、天地の理法であります。(五月二日)
お米は藁へ実る、木に実るのではない。それでありますから稲の穂、ほほ、稲の穂と
いうのはお米、お米は、わらへ実るのであります。皆さんが、家の中の人達が笑って
働けるというようにして行かれる事を切に願いますのであります。

米と麦 ふ 四四 八 九

「米」(こめ)は女性であつて愛、麦は男性であつて父。よい主人をほしいと思えば、
ふまれてもふまれても感謝すること。知恵をさずかりたいと思えば、水を粗末にしな
いこと。水を粗末にしていると知恵の足りない子となる。「勉強しなさい」といくら
やかましくいってもしない子になる。

米の味 ふ 四二 九 三

米の味が変わらぬように、誠の業をはげんでいく生活を終始一貫つらぬいていくこ
れが一生けんめいです。

語呂あわせ 誠 四八 一二 四二

「語呂あわせ」といいます。語呂あわせは「合掌」であります。天地自然の法則もま
た「合掌」であります。これよりほかにありません。「独唱」でなくて「合唱」であ
る。自然は「大合唱」です。いろんな声が聞えてくる。声なき声も聞えてくる。

五六 ふ 五六 一 二

五六という数字は、言霊によって解説しますと、「いつまでもむつまじい」という言
霊になります。いつまでもということ、悠久であります。悠久世界平和建設運動は、
万霊万物尊愛でなければなりません。神の道・人の道は合掌でなくてはなりません。
神の子たちの言動が、親の心に通うということは、神人合一と論されております。人
造り、国造りが完成されなければ、平和とは申されません。むつまじいという言葉は
悠久でありまして、新兵器をもつて戦いをすることは平和ではありません。

殺し殺される ふ 四二 六 一〇

殺される人も殺す人も深い深い縁のつながりに結ばれております。これは人の悪想念
の働きであつて、この悪想念を取り去るために神も人も親も心を砕いているのであり
ます。

殺す ふ 四七 三 一六

「殺す」というと、生きものを殺すとか、人を殺すとかいうように、すぐ思う人が多

い。これは「殺生」であって、殺すことにちがいないが、「殺す」というのは、殺生だけをいうのではない。

うらみ、ねたみ：などの心の闘争は、心と心の殺しあいである。また、まだ使える品物を捨ててしまうのも、そのものを殺すことである。(中略) 「不経済」なおこないは、物を殺している。(中略) 利益にならぬことを、いつたり聞いたりしているのは、言葉の不経済である。益なきことに時間を費やしているのは、時間の不経済である。(中略) 「万物尊愛」には「殺し」はない。すべて「活か」していく。

「根性」ということばもある。「根性がある」「根性がない」という。根性がないというのは信念が足りないのである。度胸が足りないのである。信ずる誠が足りないのである。

今日の日は「こんにちわ」、「こんにちわ」は今日の日である。「こんにちわ」は平和であります。

昨日が今日に、今日が明日にと、無限の循環をつづけてゆく。その「輪」(わ)を「今日わ」という「今日わ」この言葉を、心の底から出してゆこう。ただ、習慣的にいうのではなくて、心の底からわきあがってくる「今日わ」にしていこう。この「輪」が大きくなっていくと、それが「平和」である。(裏表紙)

今日(こんにち)は、今日(きょう)は、と毎日言葉を出しておりますが、今日(きょう)はと云う事は、協力してゆくこと、和することであり、平和のことでもあります。和は無限であり、零である。地球の存在は和であって、日月の如く円満な姿、これを大和魂と云う。日本の国旗は日の丸であって、大和を象徴している。日本の国民は元来円満、平和な国民である。今日は、今日わと、ことたまのまにまにである。このことたまのまにまにと云うことは学校では教えていない。

「今日は」という言葉の出し方使い方も、また尊い意味があることを知らなければならぬ。「今日わ」とは「今日一日」ということであり、今日一日は一生一代を意味す

根性 四七 二 二七

こんにちわ 四九 四 七

今日わ 五四 四

今日わ 振 四三 一〇 二

今日わ 命 四八 一二 二二 二

今晚わ

命 四八 一二 二二三

ることである。すなわち朝起きた時は生れた時であり、夜寝る時は死ぬ時である。今日一日の生活を明朗和楽にさせていただくことは、「和」であり、「和」は○であり、○は霊であり、霊は神であり、魂であり、清き神である。すなわち、美しい心である。そして、この美しい心が、真心であり、至誠であり、仏であり、菩薩であり、全智全能であり、絶対的なる愛善であり、無条件の力なのである。この善、この愛、この美、この力こそ相一致して「今日わ」という言葉を示すのである。おたがい人に会えば「今日わ」と挨拶している。

「今晚わ」という言葉の出し方、使い方についてであるが、この言葉は昼間の各人の任務が終り休憩する時に「今日一日もあい変らず家族一同が無事に活かしていただきましたお礼を申しあげ、とりこし苦労や不平不満の心は、持たずにやすすせていただきます」ということを意味するものである。

サの部

罪悪

ふ 五三 二 四

日本は、東洋平和のためという義のもとに、全国民が身心を捧げて第二次世界大戦に努力を致しましたが、敗戦となりました。天地自然の法則に基づくと、戦いはその大小を問わず大罪悪なりとのお諭しを、昭和三年五月、私は、時の内閣総理大臣田中義一さんに公文書によつて謹告を申し上げました。

最高の真理

ふ 五一 一二 六

神の子であるという自覚は最高の真理であつて、これすなわち、みおしえとさとされ、みしらせとさとされています。

最高の道

ふ 四四 五 一二

神のみ心と人の心がむすばれてゆく。これは最高のみちです。

財産

命 四八 一二 二七一

親は子のために徳をつまねばならない。子孫に残すべき財産は徳である。

最上の心

訓 一八 八 四三

最上の心の持主こそ聖人であり、菩薩であり、菩薩の所に参つて話を聞いたり、たの

しむことの出来る人達が、この世ながらの極楽浄土に生活させて戴いて居る人たちであります。

神仏に奉仕する誠の心は最上の実行であり、生きて行く為の義務であり、責任であります。(十月七日)

天地自然の法則のよって生ずる大極の原理を学び修めることは、人として最上の勉強であります。(一月五日)

精神と云うのも、魂と云うのも、心と云うのも、良心と云うのも、一つのものであって、この良心は老いも若きも皆あるので、良心を発揮して和合すれば、これ最大の幸福者であり、何をしてもし失敗もなく、安心して生活が出来ることは事実であると思いません。

何時も清く明るく忠と云う字の如くその真理を悟り、生活をさせて頂くことが人生にとって、最大なる幸福者なのであります、その幸福者になる迄は、いろいろの道中に障害も出て来ますが、それを心から喜んで取り除くだけの信念は、その人達の信仰的努力より外にないと思えます。

災難は魂をみがきていくために 神のお慈悲になつてくるなり
一口に災難と申しますと不幸のように思いますが、その災難は「やすり」であり「砥石」でありますから、私たちにとつて敵ではありません。

思いここに至りますと全てが感謝と感激であり、大恩に報い奉る実行に邁進して通るなら災難に会はずがありません。

災難は自分を磨いてくださるための試練である。

災難を逃れようとする船が退却してかえって転覆するような目にあう。いかなる困難も感謝でのりこすようにと教えてあるはずである。

欲によつてためられた金持を財ばつという。

我執貪欲で金を貯めた人を「財閥」―罪罰―という。ここに「罰」がついている。人

最上の実行	み三四	一二	五八一
最上の勉強	み三四	一二	一一
最大の幸福者	訓一八	八	三八
最大の幸福者	訓一八	八	五六
災難	ふ四二	四	一四
災難	ふ四二	四	一五
災難	ふ四五	四	一八
災難	命四八	一二	七六
財閥	ふ四九	一	七
財閥	誠四八	一二	六〇

財閥 導 三四 一〇 四六

はどうなつても、われさえよければ、という野獸性を發揮していくわざは、「誠のわざ」とは申せません。

貫い度い貫い度いと言つてこういう風にかき寄せると向うに行つて了う。自分さえ満足すればいいとかき寄せた財産は財閥と称する。だから二代目三代目にはこういう風になつて了う、三代続きません。そういうような生活と事業をやっている人が随分ある。どうか財閥にならないで資産家になつて下さい。

財閥 導 三四 一〇 一〇六

儲けると言う事は、健康を害し事業上においても人をつつ転がして人の財産を横領するような事をして貯えたので、これを財閥、罪のばつ、罪罰にならないように、資産家にならないければならない。資産家と財閥とは大変違う。資産家になる事は大いに努力して正当な利益を持つて貯えたのであつて、遊んで寝て人を突き転がして利益を得た財産は罪の罰でありますから、天変地変によつて流されるか、競輪や競馬によつて持つていかれるか使つてしまうようになります。

さえぎる 誠 四六 六一 二五一

「さえぎる」とは切ることでありますが、切るべきものは切る、つなぐべきものはつなぐ。切つてまたつなぐ。切つてしまえば終りというのではなく、切るべきところは切り、つなぐべきところはつなぐ。ここのところの判断を、よく勉強していかねばなりません。

栄える 訓 一八 八 三七

栄えて行くと言ふことは唯一一つの心の持ち方と実行にあるのでありますが、嫌だと思えば嫌になり、くやしいと思えばくやしくなり、これ魂のひびきによつて表現されるものであります。

さかしま心 ふ 五〇 六 六

不平不満、怒り、嫉妬、即ちさかしまの心を起こさずということが教えられておりますが、このさかしまの心がいかに我々の肉体を左右するか、このさかしまの心の行動が万人に迷惑をかける、ということを深く信じてください。

さかしま心 解 二八 二二

思い違い・取り違い・感違い・はき違い・この心は感情的の心で、正しいとは申されません。これをさかしまの心と申します。

さかしま心 振 四二 一〇 四

よりよい環境をつくってもこれを破壊するものはさかしまの心であります。さかしまな心とは、妬み、恨み、嫉み、憎しみの心であり、常にそのさかしまな心を浄化することに懸命でなければならぬ。

さかしま心 振 四三 一 二

さかしまの心とは嫉妬、妬み、恨み、嫉み、怒り、不平不満等の正しくない心を云うのであつて、そういう事が目先に見え、耳にもきかされています。そういう環境に追い込まれて、色々な場面が展開して参ります。

さかしま心 誠 四六 六 一七

「さかしま心」は幼少時代から持たされております。これを浄化するには一生かかるというても過言ではありません。十年や二十年で解消できるはずがありません。「さかしま心」とは、「しつと」「ねたみ」「うらみ」「そねみ」「ひがみ」であつて、たえずこの心が動いております。

さかしま心 誠 四六 六 一八

「さかしま心」を解消せず、だんだんと積み重なつてまいりますと、「魂の濁り」となるのであります。魂が濁り、血液が濁り、ついには魂が狂つてまいります。これ即ち精神病であります。

さかしま心 誠 四六 六 二〇

有難く思いなさいといつても、病氣して苦しんでなぜありがたいのか、と、かえつてさかしま心になつてしまします。「反駁心」は「さかしま心」であります。今まで冷静にいた人に、ひとこと教えたばかりに反駁心を持たせる、さかしま心を持たせる、さらには、悩みの種をまかせるといふこととなります。「さかしま心」を持つか持たぬか、解消するための努力をするかしないか——ここに人生の幸と不幸の分岐点があるとも申せます。

さかしま心 命 四八 一二 一七二

さかしま心、即ち恨み、ねたみ、そねみ、嫉妬心は、ことある度にたえず動くのである。平常、表面には見えずとも魂の奥の方に位置しているのである。人の喜びをそねみ、蔭へまわつて敵となるのである。人の喜びをともに喜んであげること、即ちアラを拾わず実を差しあげることができないのだ。己を虚しうして徳をつむということが、わからないのである。

さかしま心 命 四八 一二 一七九

さかしま心はわが国民の間にだけ見られるものでなく、いかなる時にも見られるものであって、恐しい結果をもたらすものである。この恐しい心は、過去から現在に、また未来に交流し、禍根を残しているのです、これを思い改めさせるために宗教家も教育家も努力している。み教えは無極から太極を悟り、太極を法則とし、神法として守り行っている。

さざれいし ふ 四九 一〇 一三

すめらみくにの礎とこそつかえなん、という礎は、君が代で拝誦されているさざれ石であります。このさざれ石は人の命であり、石、意志で、志であり、靈魂であります。無限の愛の灯であります。

さし上げる ふ 四五 七 一〇

人のグチや泣き言、くどい話を聞かせていただくのは辛い。(中略) 気持よくいただく訓練をしてほしい。(中略) いただいて、さしあげる。さしあげて、いただく。そこに調和があります。

雑音 命 四八 一二 一二一

無駄な言葉は雑音である。雑音を流す人は真実の愛のない人である。不浄の愛の持主である。不のつく言葉は雑音である。真実の愛で人に接するようにせねばならぬ。

雑音を発する心 ふ 四三 四 九

私は浦和の幸楽でたおれたとき(昭・三六・一・二〇)家族に電話で通知したが、家には誰もいなかった。菊のは九州へ巡教中、茂は千葉の川鉄に勤務中、喜代子も所用で外出中であった。結局、その急場にかけてける家族は誰もいなかった。しばらくして茂が駆けつけ、つづいて喜代子もきた。(中略) しかし、しばらくすると、それぞれに用があるといつて帰っていった。この現実をみて「先生の家庭はなんとつめたいのである。大事な先生がたおれているというのに、その子たち夫婦が介抱もせず、にさつさと帰ってしまう、なんということであろう……」と思ったにちがいない。雑音はここから生まれる。このような雑音を発する心は狭い心である。ただウワベだけを見て、許せない、冷淡だ、どこに教えがあるのだ、…」と批判する。一切を許せず、包みきれないのだから、ただ狭いとしかしいようがない。

里の仙人 ふ 四二 六 三

「里の仙人」は忍耐、勘忍、真捧に終始一貫している。(中略) 無条件実行の人で

ある。

さとりを開くことは、天地自然の法則を学び修めて実行と行いに励むことであります。けつして、逆境を我慢することではありません。

「学ぶ」のは人の道である。悟りは、痛い目に会って始めてわかる。我が身の病では、なかなか悟りに達せられないが、縁のつながりの深い者に病まれると悟れることが多い。霊魂は目に見えず手にも取れないという。そうに違いないが、悟りを開けば、目にも見えるし、手にも取れるのは事実である。

艱難辛苦に身をけずりつつあるときに尊い「ひらめき」がさずかる。人生の悟りもまたそうである。

平々凡々な楽ななかに「悟り」はありません。かりものことわり一つでも真に悟るためには実いきびしい道があります。きびしい道を「いのちの親」が連れて通してくださるのであって、(中略) 信じて通りきる。悟りはその中に生れてまいります。

悟るということは学問ではございません。数学のように計算して得られるものでありません。(中略) 実行しなければ悟れないのであります。

おたがいに神の子の自覚をすること、身の借りものであることを悟ること、そのためには天地自然の法則を学び修め実行しなければ、自覚も悟りも得られないのであります。火水風をつかめたって、つかめないでしょう。つかめないものをつかんでゆくのが「悟り」でしょう。

人が神の道を修めて悟る迄には長い年月日がかかり、難行苦行が身にふりかかってくる、何回も死線を乗り越えねばなりません。事実を身に受けて知ること、即ち体得しなければならぬのであります。(七月二一日)

肉体をわずらう教訓などをいただいても、おそらく嬉しくはないだろう。物により感謝ができないのは、なんのためにかかるものをいただいたかがわからぬからである。

この理を心の底から悟らねばならぬ。この理を悟ればいただくものが、たとえ不利で

さとり

ふ五一 六三

悟り

ふ四〇 一〇一五

悟り

ふ四一 四九

悟り

ふ四三 一一一〇

悟り

ふ四六 六一〇

悟り

ふ四六 七五

悟り

ふ五〇 二五

悟り

ふ五五 一二二四

悟り

み三四 一二四一八

悟り

命四八 一一八〇

悟る 訓 一八 八 四六

あつても感謝ができるはずである。(中略) み教えを勉強し、年とともに悟りの道へと進行せねばならぬ。

心の思いは人の肉眼では見えず、悟れもせず、それを悟るまでには長き年月と魂を磨いた功績と、因縁の道すじとによらなければなりません、早く悟りたい、早く功績を積みたい、早く悪因縁を切つてしまいたい、早くよき人になりたい、早く業をしたいと云うことは、誰しも思います。然し思うだけで実行できざれば何の甲斐もないのであります。一年や三年で功績もつめず、徳も磨かれず、従つて一年や三年で立派な人にさしたい、なりたいたいと云うような我欲ではなりません。長き年月苦勞困難してこそ、魂も磨かれ悪因縁も切らして下さるのであります。

さとるとわかる ふ 五五 一一 一九

さとるといふのは無条件。わかるというのとは人の道の教育ですね。人格は教育だけでは成りませんから。神の子の自覚は容易じゃない。

裁く ふ 五〇 一一 三

確認があれば、法に基づいて裁判官が裁くことができます。人の道の法律によつて人が裁くのであります。天地自然の法則に基づいての判決は人が下すものではありません。法に基づいて裁くのであります。人が人を裁くではありません。

裁く ふ 五一 七 三

善といふ悪といふますが、善・悪のこの裁きは人がするものではありません。天が裁くのであります。

裁く 命 四八 一一 五四

人と人との間では、みずからの知識経験により、ものの善し悪しをきめる。また法律で善悪をきめる場合もある。しかし最後の決断、天の決断は人の知識ではない。天地自然の法則、すなわち神の法則である。(中略) 神即ち天の裁きである。やがて神の支配によりことなす時が実現しよう。(中略) 動揺転倒することなく、一瞬々々誠の業を喜び励む人となるべきである。

さびしいところ ふ 四五 五 一一

なやみ苦しみの渦中にある人が「尊いみおしえを学びおさめつつ、いつまでもこんなことではと本当に申しわけありません」といつて泣く。これは淋しい心である。(中略) 神の子として正しく強く、いかに進んでいくか。その道を勉強しているのである。

さびしいころ 命 四九 一 二二

人はさびしい気持ちを起すと、ひがみ、ねたみ、うらみ、そねみ、怒りというのがでてくる。

さびしいころ 命 四八 一二 一〇八

淋しい心の人は、たいがいむこういきがつよい。しかし体は弱い。胸は棟に通じる。両親をたてぬことは一家の棟をつぶすようなものである。親をたてぬような人に胸を病む人が多い。

さびしいころ 命 四八 一二 一四八

淋しい心はよくない。淋しい気持ちには反省も感謝もない。感謝をすれば重い荷物も軽く、足も肉体も軽いのだ。頭が重く、体調がすぐれぬ時でも、感謝の心がでればなおってしまふのである。禍いはみずから作り、善も悪もみずから招くのだ。

さびしい心 訓 一九 六 八

淋しい心の起きた時は、徳のある人に接近して行くようにする。淋しい気持ちの起きた時が一番危険である。

淋しい心 命 五五 三 三

悲観をすると淋しくなります。心が淋しくなつてくると、行き詰まります。心はいつも日月のごとく、円満に、融和して、団結して、協力していけるように、修養するのであります。心が淋しいと、とかく言葉が切り言葉になりがちです。

淋しい心の人 命 四八 一二 二八六

淋しい心の人には「胃液」があり、これに「胃酸」があつて、この酸の働きで消化されるのであります。胃には「胃液」があり、これに「胃酸」があつて、この酸の働きで消化されるのであります。胃には「胃液」があり、これに「胃酸」があつて、この酸の働きで消化されるのであります。

さん 誠 四六 六一 四九

にしても——妻でも子供でも「××さん」と、さんづけで呼ぶように教えてあります。「さん」は敬称です。そして言霊として「酸」に通じますから消化していく言葉であります。

生み出すのも産(三)、天地自然の法則も三の理、天地人、火水風、キリスト教の(三)讚美歌、釈尊の三部経、捧誠会のみおしえにも、徳と力と愛の三、三という原理は人生行路にとりましては、最も大事な時であります。

三 命 三六 三 三

本会の教義も、一、二、三——火、水、風——天、地、人——智、仁、勇であり、

三 命 四一 三 一四

三はみ。みなおしであります。また山(さん)であり、産であり、産みだす事であり

三 命 五三 五 四

三はみ。みなおしであります。また山(さん)であり、産であり、産みだす事であり

山(さん)

産

ふ 五二 九 一九
ふ 四二 一〇 三

ます。三種の神器という。神の子の肉体も、まが玉は頭、鏡は胴、剣は足であると論
されている。また種であります。酸素であり、呼吸であります。呼吸はとどまりませ
ん。まさに運行の健やかにしてやむことない天地自然の法則のもと安心立命の心にな
り、その心境に立ち返って、豊かに、円満に、よるずの人、よもの人が相和すること
であります。これが種であり、悠久であります。

山(さん)は産であり、三であり、火水風であり、真善美であります。

三という数字の持つ意味―この「ことたま」は、あらゆる方面につながります。「天、
地、人」、「火、水、風」「過去、現在、未来」とすべて三であります。人がこの世
に生まれれることを、「産」といいます。胎内との縁を「切って」「出して」「この世
に「つなぐ」のでありますから三段階であります。頭は「まが玉」であり、胴は「鏡」
腰から下は「剣」であって、三種の神器はここに教え示されているのであります。

産

命 四八 一二 一一

お産は三つの理である。天地人の理、徳と力と愛によってこの世に生れてくるのである。

胎内を離れること……第一

胎内を出ること……第二

胎内を出で、この世につながる……第三

この三つの不可思議な業が、神の手によって行われているのである。

太平洋は母であり、日本海は父であり、大西洋は子供である。この三つの大海は、両
親と子供をかたどった教訓であります。

産(三)

ふ 四九 八 四

駿河湾・霊山富士・だるま山、この三つはすなわち、天地人、火水風、真善美。また
肉体は、頭・胴・足、頭はまが玉、胴は鏡、足は剣であり、三種の神器であります。

三猿

振 四三 一 三

見まい、聞くまい、語るまいというのではなくして、よく両方の目で見、双方の耳
で双方をよく聞いて、互いに語り合うことに専念し、油断なく一步一步、力強く、大
地をふみしめて前進して頂きたい。

三月

ふ 五〇 四 三

三月の三は、山であり、産であり一・二・三と立ちあがり、起動であり、動機であ

ります。すなわち起立であり、神動であります。

起動。気堂は総裁出居清太郎の号であり、その意味は、動機であり、悟りであります。ここに重点があり、教祖・総裁に、この神道（新道）の建設作業開始に当たり実行が生まれたのもそのゆえんであり、また、皆様も実行であったのであります。

三月三日
 三は生まれるときの産であり、天地の法則は三―すなわち火・水・風であり、この三つがなくなつたときはどうなるか、ということは容易に想像できるところであります。過去・現在・未来。火・水・風。天・地・人。徳と愛と力。すべてが、一・二・三であります。人体も、頭・腹・脚。となつていて三原則であります。徳と愛と力。これは火・水・風の教科書であつて、この火水風に万物が包まれて活かれておりますことを心から悟らねばなりません。

三三九度
 三三九度は二人の誓いであります。なにをどこに誓うのかといいますと、神の子として立派な働きをさせていただきましたと、また、神さまからいただいた分けみ魂を磨き浄めて、我執貪欲を浄化し、つねに清く正しく、広く暖かい心を養い、万霊万物尊愛の趣旨に基き、夫婦は天地の理でありますから、その天地に恥じない言語動作をいたしますことを、天地に誓うのであります。

三時
 「この誤りを午前三時に啓示されました。三時は、三字に通じ、また惨事につながつてくるのであります。」

三十
 この三十の、いのちの親の声なき声のおさとしを、言霊にもとづいて解釈するならば、三は生みだすことであり、十は従うことであり、無条件であり、十分ということは世界の平和を実現させるおさとしであります。

三十六
 三六年、これは「みろく」の発音ともなります。釈尊のお言葉にも「みろく世界」とも「みろく浄土」とも申されております。これは釈尊滅後五十六億七千万年来に現われる平和世界を表しておられるのであります。本会発会三十六周年に「みろく」の言霊に通う悠久世界平和郷、神里が建設されたのであります。

三種の神器

ふ 四五 一一 一九

つまりマガタマ、ミカガミ、ツルギである。三種の神器は哲学からいきますと真・善・美、本会の趣旨を通じていきますと、火・水・風、ヒ・フ・ミ、ここに心が集中していくことを神慮に合一せよ、合一できるように努力せよ、と教えてある。

三信

誠 四八 一二 六四

―活かされている、ということを感じる。
―この身は借りものであることを信じる。
この三つを信じる。

三信条

ふ 三九 一一 一四

私の信条は次の三つである。

- 一 神は自ら真心を持つて実行することによって知ることが出来る。
- 二 信じて行えば断じて勝つ。
- 三 愛は死より尊し。

三星

ふ 四七 七 一四

三星の三は、天地人、火水風であり、大海においては三つの海がある。太平洋は母であり、日本海は父、大西洋は子供であり、これによって子孫が繁栄するのであります。三星ボウルの趣旨は、他のボウリング場と違ひまして、利害をもとにして建設したものではありません、終生の奉仕としての教科書でありますから、天に輝く星 ―文字は違ひますけれども奉仕であります。

哲学におきましても真・善・美の三つが教科書であります。人の肉体の組織も脳と腹と足の三つからなり、これをかたどって三種の神器とされているのであります。胃のなかにある胃酸も食物を消化するためにあります。火水風の三がなくて万物は生成発展できません。これは言霊の信念によって名づけたものでございます。

賛成

ふ 四五 一一 一九

賛成(さんせい)は清算であり、一切をきれいさっぱりすることであります。

賛成

ふ 四七 一一 一五

「さんせい」は平和である。「さんせい」とは「三誠」であつて火・水・風であり、徳と力と愛である。

「さんせい」はまた、生産である。「さんせい」して事をなすから、そのなかから、

三の教訓

ふ 四七 一七

ものごとが生まれ得る。すなわち「生産」である。
 三は協力・融和・団結、徳と力と愛、火・水・風、天地人、生みだすの産、真・善・美、三種の神器、頭・胴・足である。

三の真理

導 三四 一〇 一二七

私たちの肉体は三つに分かれております。首と胴と足、足腹脳、みずほの国、この手の指も三つに分かれております。筋が示してあります。全部三になっております。天地自然の法則は三、火水風、今迄の日本の皇室は皇位をつぐ場合には三種の神器、鏡、曲玉が伝えられる。又智仁勇、というように、そういう三つの真理がある。

三六五

ふ 三九 七一八

体温三十六度五分、一年は三百六十五日である。人間が今日のこの姿に成長するまで、三十六億五千万年の海中住まいと、三十六億五千万年の陸上住まいとをされている。これが人間の歴史である。

三六五

誠 四六 六一八五

肉体の体温は三十六度五分、一年三六五日と同じ数でありますのは、大恩―体温―によって活かされているからであります。

シの部

字

い 一八 一〇 四

例え一字に致しましても、神様が其の時其の場合に教えられて造られたものであって唯「以」の字だけではありません。皆尊い神様の御心を打込まれているのであることを知らなければなりません。即ち一字の姿が神の心であり、神の姿であるということを知ったときには本当に尊いことであると思えます。

痔

誠 四六 六一四三

自我をとおす。慈悲を無視して親切を仇にする。自我の「じ」も、慈悲の「じ」も「痔」に通じているのであります。

慈愛

み 三四 一二 七三

世の中には、何故こうなる何故だろうと、心痛める人がありますが、その人のつながる過去、現在、未来に於いて、学ぶが為に、また教えて下さるがために迷い苦しみが

慈愛 三 四 一 二 四 〇 二

生じます。必ず、その迷い苦しみは不幸でなく、将来に於いて力をつけて下さる大なる慈愛であることを思わねばなりません。(二月四日)

慈愛 三 四 一 二 四 〇 八

地上に春夏秋冬があることは、万物が成長していく為に最も必要であって、神の慈愛なのであります。寒いから暑いからといって誠業を怠ったり、人の道を踏み外し、気随気儘で日々を過ごすようなことであれば、自然の法理によつて戒められます。

(七月十六日)

慈愛 三 四 一 二 六 五 三

神と人との霊の交わりは人の生活に最も必要なことで、万物の慈愛は神とも仏とも信じ、愛し尊敬しなければなりません。熱も風も一滴の水も生成発展の根源で、この偉大なる慈愛があればこそ万物は成長していくのであります。(十一月十一日)

しあわせ 四 四 四 七 七

「しあわせ」とは四をあわせること。齒は(は、わ)平和の和であり、齒(し)は、四和であり、四×八であり、だから三十二であつて、いのちの親は自然の法則によつて男女とも成人した人に三十二本の齒を貸しておいてくださるのであります。

しあわせ 五 〇 四 一 一

「学び」「修め」「行い」「実行する」この四つの交流をする。そこに、しあわせが生みだされる。しあわせを生みだすために四つを実行するために「みなおす」「研修する」のであります。

しあわせ 五 〇 五 二

天地自然の法則を学び修めてまいりますと、しあわせは実行にありということになります。神法一にありますように、大恩によつて活かされている私たちが、大恩に報いることが「しあわせ」になってまいります。

幸せ 三 七 六 五

不平を思わず、艱難辛苦も神慮の試練としてよろこびはげんで事に当たり、その環境に身をおさめ、努力するところによつて幸せを生みだす。

万物と共にあり、万物と共に生かされ、相共に生かされている仕合わせを思い、役に立つことこそ幸せである。これは人間の考えや工夫で造った幸せではない。

幸せ 三 八 一 一 二 九

幸せ 一三 一〇 一五

幸せ 一四 一〇 一三

幸せは自分だけでなく多くの人をも幸せにすることができるのである。真の仕合わせは、「無」になって―即ち、己を空しうして徳を積み及ぼすことにあるのであります。真の仕合わせは、そこにこそ実るたった一つのものであり、その他の所謂世にいう「幸せ」は全て虚飾であります。

幸せ 一六 二二 二二

物が豊かになり、便利な道具が作られている今日の世の中、人は気楽に生活できることのみを「幸福生活」と思っているが、きびしい中に幸せのあることを悟らねばならない。難あり、あり難し―という文字に示されるごとく、感謝の中にきびしさがある。(中略) 春はきびしい冬のつぎにあり、秋はまたきびしい暑さのつぎにあることを忘れてはならない。

幸せ 一七 七三 三

人は神の子であるから、万霊・万物を尊愛することを、日夜忘れず、実行と行いを継続すれば、幸せを生みだし、幸福を作ることになる、と教え示されております。

幸せ 一八 八七 七

どんな方でも平和を希望しない方はない、つまり平和は幸せである。幸せは平和である。幸福にならなくてもいいと、死んだらいいと云う気持をもつ人もありましようが、やはりその本心は、他自ともに幸せを念願し、幸せを生み出してゆくことにある。それには厳しいということを自覚しなければならない。

四合せ 一九 四七 六

本会の趣旨の「しあわせ」は「四合せ」です。「しあわせ」は、ことたまから申しあげますと、四(し)と八(わ)です。すなわち四×八＝三十二。

四合せ 二〇 四八 五

人の道の「行い」さえも、いうは易く行いは難し、と教え伝えられておりますように、なかなか行いにくいのであります。実行ということとは、懸命であり、文字通り命をかけることでもあります。人の道としての幸福は作り出すことであり、花を咲かせることでもあります。一方、神の道である実行は懸命であり、無条件の行動によって生み出されるのが四合せであり実りであります。

四合せ 二一 四八 〇

四合せとは東西南北・春夏秋冬、これ即ち天地自然の法則であり、ご神前で四つ拍手をうつのもまた、四合せであります。

四合せ 一 一六

その仕合わせというのは、どこにあるかといいますと、すべて自分の行いにあり、実行にあるのであります。(中略) 仕合わせは、ただお金がたくさんあるから、立派な家に住んでいるから、立派な車に乗っているから仕合わせというのではありません。

(中略) 誠の業を喜び励んでいかれる人が幸福の人、四合せな人であります。

仕合わせと幸福 一 一六

仕合わせ——四合せは神の道であり、幸福は人の道である。幸せになろうと思えば、神の道の無条件実行より外に道はない。人の道を行えば幸福になることは出来る。しかし、それは幸せ——仕合わせ——ではない。

幸せと幸福 一 一六

幸福というのは財産・名誉・地位などで、これは努力すれば得られる。ゆえに人の道である。四合せ(幸せ)は子々孫々にのこるものであって、これは実行によつて稔るものであるから神の道である。

幸せと幸福 一 一六

そこで「しあわせ」と「幸福」とは、どう違うのか、という人もありますが、これは一つであります。頭と手と脚と、こういえば三つになりますが、この三つは切っても切れぬつながりを持っており、一つであります。

仕合せの種 一 一六

仕合わせの種は、神の子であることを自覚して天地自然の法則を学び修め、終生の奉仕に誠心誠意の実行を続け、己を虚しくして、悩む人の為に他を祈り、救い導くことによつて作り出されるのであります。(七月八日)

幸せの基 一 一六

「心」「言葉」「肉体」「物」の四つの交流は四合せ(仕合わせ)と幸福の基になる尊い教えである。

思親 一 一六

「先生、どうか長生きしてください」という。「私がなくなければあなたが困るからそういうのだろう」とたずねると「はいそうです」と、泣いていた。(中略) 親を思う「ほんもの」の思い方ではありません。親の長生きを願うのは誰もがもつ真情である。それならば、教典、教義にもとづいて行いを実行することでありませぬ。(中略)

「先生がなくなれば、その後を堂々とやります」という心がまえ、これが会員のみなさんのま心である。

しおれた木 命 四八 一二 一一三

枯木、しおれた木は、枯れ気、しおれた気である。かかる気持でいる時「はい」という言葉を聞くと、その人たちの心は花が咲くのである。そして「はい」といった人の心も花が咲いたように、ますます愉快になり、自然に迷いもとけるのである。

歯科 か 四四 四 七六

歯科は、死か生かであります。内科よりも外科よりも原則につながっています。（中略）本会の趣旨は天地自然の法則を学び修め、ひとことひとこと、一音一音から勉強していきますから歯科の専門家には特に教えをわかっていたいただきたいのであります。

自我 誠 四六 六 三七

「わが意」とは「自我」であって、「我執」と「食欲」とを「自我」という。いつまでも自我を押し通していくと「胃酸」にかかわってくると示されております。

自我 誠 四六 六 一五四

自我が強いというのは、淋しい心の動きであります。淋しい心の動き、それが強い自我となって現われる。それですから行き詰るのであって、真理がそうなっております。鼻の中の故障、これは「息き詰まる」教訓であります。

司会 振 四二 八 六

司会は四海であり、死界―霊界―例会―浄会である。四海同胞―同望、全部を見渡して、大局から見て順調に運ぶようにするのが務めである。

歯科医 か 四四 四 七六

歯科医というのは、「視界」であり、「四海をながめる」ことであります。歯をなおすだけが歯科医ではない。行事にしても司会者の命に従うでしょう。

歯科医師 か 四四 四 七七

歯科医は―四海、歯科医師は―視界（四海）をながめる、視界を見聞してよく四海を見ていくということになります。

四海同胞 振 四八 九 三

四海同胞―同望、全部を見渡して、大局から見て順調に運ぶようにするのが務めであります。

自覚 ふ 五六 五 三

自覚というのは、悟る。わかるのではなく、悟る。悟るということは終生のものでありまして悠久でありまして、それに対してわかるということは一時的のもので、今日わかつて明日忘れてしまう場合もある。そういうもので、心の底から神の子の自覚を悟る。

自覚 ふ 五六 五 一六

神の子の自覚というでしょう。自覚ですから、自らです。みずから。みず（水）は素

直だし、また力強い。迷信を打破せよ、と教えてありますが、やはり強く正しく、でなくちゃね。

死活 命 四一 三 三
「死活」とは「死に勝つ」ことであります。人々は生きる事だけに夢中になり、活かされる大恩については全く無関心であります。そこに、生活の破綻が生じ、危機が生じます。そこで「死活問題だ」といつて騒ぐことになりませんが、「活かされている」ことに心の扉が開かれ感謝の念が起りますと、「死に勝つ」事になるのであります。四月、しあわせにという言霊であります。今日は四月二十二日、四はしあわせであり、二十二は合掌であります。

叱られる 命 四五 四 一七
叱られるということは、教えていただくことである。(中略) いかにかに尊いかということを知るには、やはり訓練をしなければならぬ。

叱られる 命 四八 一二 六六
叱られることは尊いことだ、有難いことだ。人生にはいろいろの誤解、反逆、無実の罪がある。その人に対し近ければ足を運び、遠ければ合掌してお礼をいうべきである。叱られることを恨んだり、恐れたりしてはならぬ。喜ばねばならぬのだ。ほめられたら反省、叱られたら感謝、行詰つたら実行の三原則通りである。人から叱られずとも、自ら気づかずにおれば、天地自然から叱られることが多い。「天網恢恢疎にして漏らさず」である。

しかる 命 四五 七 二三
叱る叱られるということは、最も信用があると信じなければなりません。

叱る 命 三八 二 四四
叱られたら感謝せよ、ほめられたら反省せよ。

叱る 命 四八 一一 二六七
叱るとは反省をし、感謝をしてから注意することをいう。

時間 命 四七 一二 三三
時間を尊重しない者は成功しないということです。成功、時間は精巧としている。

時間厳守 命 四〇 五 二五
食べ過ぎたり飲み過ぎたりする人は、時間の観念がないからである。時間を尊び、時間を励行しておれば、「過ぎる」ということはありえない。一瞬一瞬は「いのち」である。

自緩他厳の人 命 四八 一二 二八一
自らを責めずに人を責める人が多い。自分が反省すれば相手も必ず反省するものである。

時間励行 振 四二 一〇 二

宇宙の進行は待ったなし、その宇宙の進行に添わざれば、即ち時間の励行を行なわざれば、人の交流も円滑を欠き、人の信用も得られない。又人の健康も、その事業の経営も事故を起す。時間の励行は天地自然の法則の励行であり、身心を守る励行である。

時間励行 命 四八 一二 二九七

時間励行を怠っていると、すべてが手遅れとなる。子供の知恵も遅れる。入学も、就職も、結婚も、仕事の取引も遅れる。

子宮 か 四四 四 七五

子宮は子の宮であり、われわれが宿るのはこのお宮です。都です。故里（ふるさと）です。

子宮 ふ 四九 一〇 九

人も、母の子宮の中で成長している間は肉眼では見えません。文字どおり、子の宮と書きまして子宮という発音になります。子宮が元であり、人が成長する子の宮であり、その場が大極であり、地球の中心であり、元であります。

子宮 ふ 五一 三 三

女性の方は毎日忙しい。あれもこれもと多用な毎日を送っております。女性の体の中に、子宮という大事な器官がありますが、子宮はすなわち至急であり、生活の上の忙しさは非常なものがあるのでしよう。この女性の日常に、男は感謝しなくてはなりません。男は天、女は地。海には、母という字がはいつております。

子宮 振 四四 一 三

母の母体の子宮と人の行動すべき業に対する至急と云う事になりますと大変へだたりがあり、語呂合わせのような事に受取る人もありますように、至急とは又きゆうし、それは臼歯であつて、一番奥にある大切な歯であります。又急死、世に急死一生と言ふ言葉があります。

子宮 誠 四六 六 四九

「子宮」は「地球」であります。子供がそこに宿るから「子宮」であります。人が宿っている地球もまた「子宮」であるといつても過言ではありません。女性の体内に存在している「子宮」も大宇宙に存在している人の住み家としての地球も、同じ筋のものであるというのであります。

子宮 誠 四六 六 二二三

子宮は至急な事です。しかし、単純です。単線では融通がききません。この狭い心が慈愛を無にする。こういう人は腰がひえる、神経が混線する。一つのことかまとまら

子宮 誠 四八 一二 一九九

ないで次から次へ無駄な働きをしていきますから、当人は明けても暮れても、忙しい、ひまがないと、毎日が「至急」（子宮）であります。「至急」は急行列車のようなもの。脱線しやすい。感ちがい、思いちがいをする。おせっかいをする。

子の宮の「子宮」、それは太極なのであります。ですから、これを「腹」という。「高天ケ原」という。その下に、足（葦）。あし、はら、のみづほの国——これが、火、水、風——これが皇位継承のしるしとして三種の神器——まが玉、み鏡、つるぎ——これを哲学でいうと、真、善、美——本会の趣旨で申しますと、火、水、風。——ひ、ふ、み。ここに心が集中していくことを「神慮に合一」といい、合一できるような努力せよと教えてあります。これが平和建設に精進していく心構えであり、教えなのであります。

事業の発展には 捧 二三 一二 三

誠の心を以て人の使い方、誠の心を以て資本の使い方、誠の心を以て機械の使い方、誠の心を以て運営の方法この四つの方法を獲得して行けば事業も発展して行く事は私は信じて居ります。

事業を伸ばす み 三四 一二 四四九

人の生活に必要な製品には、人の勤労の尊い念が通っておりますから、値段の高低に拘わらず尊び愛し、長く役にたちますように取り扱いを丁寧にした時、その功績によって人の寿命も伸び、事業も伸びて、人から破壊されるようなこともなく、長く事業が続いてまいります。（八月四日）

時化（しけ） ふ 四四 三 九

海が時化（しけ）ると船は欠航する。時化をおかして行動すれば転覆という事故になる。心が時化しているとき——迷い乱れているとき——行動するから事故を起す。

死後 訓 一八 八 四三

「死後」とは「仕事」であって仕事をまじめに実行した人達が極楽浄土に参って居るのであって、その日その日、その年が極楽であり浄土であり、その人こそは、上等の人なので、こんな人格こそ最上の幸福なのであります。

事故 誠 四八 一二 一六七

人の世はまことにあやまちが多い。なれども、責任を重んじ、義務を果し、法則を守っていくならば事故もすくない。事故のおこるような毒素も浄化していかれるのであ

ります。

我〓自己〓事故。おれがおれがの心は自己主義の心である。このような心はやがて事故のもととなる。

われわれの人生には障害が多い。これは自己の意を用いて行うから事故となるのである。事故即ち故障、誘惑など、生活に不安を与える不幸を少くするためには、天地の理法をよく学び修め、法に従ってゆくようにすればよいのである。自己の意を用いた行動がすべて病的の因となる。

“時刻”は“地獄”である。時刻を守らず、時刻をちがえる人は次に地獄におちる。時間れいこうする人は、“靈交”する人であり、靈と交わってゆく人が幸せになることは当然である。

地獄は無駄苦勞の姿である。極樂は花咲きみのる苦勞であります。

人の心には常に悩みがあります。払えども払えども、この悩みは消えませんが、この悩みに閉ざされている時が「地獄」であり、(中略) 悪いことを重ねますと、人を倒したり苦しめたり殺人強盜をするような人の所へ生まれてくる。これが「地獄におちる」ことだよと教えられたのであると信じます。

天地自然の法則に反すれば これすなわち 地獄なりと諭されております

死後は地獄であり、極樂浄土でありと教えられたことは、死んだ先の教えであつて、その教えは幼稚な教えであり、死後に於いて地獄があり極樂があると云うことは、よい事をなさい、悪いことはしてはならぬと云う心の教育の為に教えられたものと信じます。とにかく心にはいろいろな悩みがありますが、悩みがあるときに地獄であり、喜びのある時が極樂であり、この極樂の心こそ、尊い人、上等な人、立派な人、よい人、強い人なのであります。

救うて欲しい、助けて欲しいは利害関係につながる自己満足自己主義であります。紹介者もまた、救うてもらえますと宣布普及することが多かったと思つたのであります。

事故 命 四八 一一 二八一

事故 命 四八 一二 一二五

時刻 ふ 三九 七 一九

地獄 ふ 四二 二 二

地獄 ふ 四二 一〇 六

地獄 ふ 五〇 二 一三

地獄極樂 訓 一八 八 四二

自己主義 ふ 四二 一一 三

自己主義 三 四 一 二 七 一 一

自己の魂も磨かず、神の意思にも添わず、神の示されるみ教えも信じ行わず、己れの足りない処を改めもせず、救って戴きたい、こうもして戴きたいああもして戴きたいと、戴きたいことだけを要求するのは自己主義であり、それは許されないことであります。(十二月九日)

自己主義の人 命 四 八 一 二 二 八 一

我Ⅱ自己Ⅱ事故。おれがおれがの心は自己主義の心である。このような心はやがて事故のもととなる。

仕事 三 九 八 一 九

仕事―死ごと―死んで生まれ変わる―生まれてまた仕事に従う。これを終始一貫という。この廻転の理を悟ってほしい。

仕事 二 三 一 二 四

仕事と云う文字は仕える事であり、妻が夫に誠を捧げて仕えて居るかどうか、夫は妻に誠を捧げて愛し導いて居るかどうか、子は親に対して無条件の誠を以て親に仕えて居るか、この点を皆さんがよく会得致しまして、綱領の趣旨を誤らんよう、又些細のニュースを即ち雑音を聞いて感情的に心を悩まし乱すことがないようにつとめなければならぬと思います。

事故の種 五 二 七 二

現実の世の中は、あらゆる面で事故があいついで起きています。この事故の種は過去幾千年に亘って残されてきております争いの種、戦いの種によるものであって、その芽生えであります。

自己反省の糧 五 五 二 五

他人の言動を見聞して自己反省の糧とするということは、自分だけが悪いと、己を責めることではありません。むしろ、自分が、情にからまれて、注意すべき事もしていないのではないか、厳しく諭すべき事を遠慮しがねして言わないではないか、こういう事も自己反省しなくてはなりません。

自己を敬う 四 四 一 八

自己を敬うということは (中略) 神の子である誇りを持って。これを忘れるな、というのである

自殺 三 四 一 二 三 〇

常に狭い心やら迷いの心から、我が身を軽んじ、尊い生命を自殺させるような心になる人は、周囲から認められず、愛されず、忠実さが足らず、修養も信仰も心に持たず、

資産家

導 三四 一〇 四六

只物のみに心奪われ、協力と融和性の無い心の持ち主であります。(一月十五日)
儲けるのではなく儲かるようになって下さい。儲けるという事は財閥であります。も

うける、ける、人はどうなってもいい自分さえ叶えば太ればと言うのはける。儲かる
という事はあの店で買って頂戴、あのお店も繁昌さして上げて下さいと教えて上げ
る、そうすると、こちらに廻ってくる。

四四

振 四四 一 三

昭和四十四年は、四が重なる年である。即ち四合わせでありしし(四四)であります。
お祭りに獅子舞をする事は、もろもろの罪穢れを払い清めると云う教科書なのであり
ます。

四十二才

敬 四二 一一 二二

「四十二という年は、男の世に(四二―よに)出る年である」というのは、ここにそ
の根拠がある。かん難辛苦や病氣病難からのがれよう、うまく身をかかわそうというよ
うな安易な精神では堂々と世に出るわけにはいかない。それを乗り越えてお役に立
うとする決意と、命がけの実行があつて初めて世に躍り出るのである。

地震

ふ 四五 四 九

地震は自信を持つという教訓であり、地震は「神動」(振動)である。

地震

ふ 四七 四 六

地震は震動であり、神道でありまして、神の道を否定してはならないという教訓であ
ります。これからみかかずかずの惨事が発生して、いろいろとさとされるであります。

地震

敬 四二 一一 一九七

「地震」は「自信喪失」に通う。自信を失えば心が動揺して迷いを生む。心のぐらつ
き、それが「地震」である。(註)昭和三十九年六月十六日、新潟を中心に大地震起る。

姿勢

か 四四 四 六九

われわれのこの肉体を身体といひます。これは「神体」なんです。この身体の姿勢が
―姿勢は至誠であり、政治であり、まつりごとであります。―大切なのであります。

姿勢

ふ 三八 六 一六

姿勢は至誠である。至誠が姿勢に現れるのである。正しい立派な子供を育てたいとい
う「まこと」があれば、その「まこと」は自ら姿勢に現われてくる。

姿勢

敬 四〇 一一 二二九

「姿勢」は「至誠」である。至誠あればおのずから姿勢に現れる。正しい強い子を育
てていこうという至誠があれば、その至誠は姿勢に現れる。人はよく、形式などどう
でもよい、魂がこもつておればよいと言うけれども、それは理屈にすぎない。心に「ま

至誠 五二 八 五

こと」が充滿しておれば姿、形に現れてくるのが自然の理である。至誠天に通えばなに事も成らざるはなしということとは真理であります。これを信じれば、不平も不満もなく、また、焦りも迷いもないのであります。

至誠天に通ず 五二 七 五

「捧誠会に入ったから救われた」のではなく、捧誠会の根本ともいべき、誠を捧げることには徹したから、至誠が天に通じたから、救われたのであります。

姿勢と至誠 四六 六 六三

いつも姿勢を正しく——歩くにも坐るにも姿勢を正しくするということは、脊髄を曲げずに立てていくことでありまして、これを「至誠」というのであります。姿勢は至誠、至誠はまた姿勢であります。親を、祖先を、神、仏を立てていくそれが至誠であり、至誠であつて姿勢もまた正しくなっていくのであります。

至誠と姿勢 四八 一二 二七四

至誠は姿勢に通じる。頭の姿勢、目の姿勢、手の姿勢に心の姿はあらわれる。至誠あるところには必ず正しい姿勢がある。

自然 四四 六 八

自然をながめても感動をおぼえない。なにかも淋しく見える。悲しく見える。つまらなく見える。それは人の心に「不」がまじっているからであり、心がごつていと自然と対立してしまふ。

自然の働き 一九 一二 五

自然の働きは人の力で支配することは出来ず、そのまま、ありのまま動いて居ります。

自然の法則 一八 一〇 一〇

自然の法則は神の法則でありますから、よく守り、法則に従い、道を守る人こそ尊い日本人であると思ひます。

自然の法則 三四 一二 三三六

時間空間にしても、運行においては一分一厘も狂うことなく、自然の法則通りの活動をしております。(六月六日)

自然の法則 四八 一二 一二二

重体で病床にあつても、笑顔でご苦労さまといえぬはずはない。(中略) まして、家族の人々に対して、常日頃この言葉の出せぬはずはない。ご苦労さまの言葉を出せば、それ対しなにかがあることは自然の法則である。

自然の法則 四八 一二 一二二

地球も円く、人や鳥畜類の目も円く、また草木一切も円く生長させられている。円満ということが自然の法則である。

自然の法則 命 四八 一二 一七一

宇宙間のすべては進行を続け、瞬間も停つてはいない。従つて後ずさりの生活は、自然の法則に合致せぬわけである。ところが世の人の多くは、後ずさりの生活を平気で行っている。かかる人は結婚もおくれ、結婚しても出戻りとなる。

自然の道 い 一八 一〇 四五

何事をなすにも自然の法則に従い、自然の道を歩まねばなりません。自然の道、その道こそ神の道であります。自然の法則、自然の道に従うと云うことは万物一切が自然に依つて生まれ、自然に依つて成長しているのであります。自然の道は決して無理をしません。

自然の道に逆う い 一八 一〇 四五

この自然の道に逆らいこれを無視した時には、そのお返しが大不時の災難となつて神様から無視したことを教えられるのであります。故に若し不時の災難に直面した時には、自然の道を正しく歩んでいるか否や考えねばなりません。

自然の道に従う い 一八 一〇 四五

自然の道に従うと云う事は万物一切が自然に依つて生まれ、自然に依つて成長しているからであります。自然の道は決して無理をしません。日月にしましても時間にしましても、間断なく一日二日一時間二時間と運行しております。そのように人生も為すべき務めに於いては、自然の道と共に実行することが最も肝要であります。

自然の道を歩む い 一八 一〇 四五

自然の道を歩むことによつて今迄の取り違いや不注意のところは神様からお許し下さるのであります。何事にも取り違い不時の災難のなきよう日常生活をさせて頂きたいと念願をして勉強することが最も必要であります。

思想 敬 四〇 一二 一八九

私も「反戦論者」である。徹底的な「平和論者」である。ただ、私の場合は、彼等のように「思想」ではなく「神の声」であつた。思想は学んで身につけたもの。つけたものならいつでも取り外し、取り替えは可能である。より高いより立派な思想に触れば、それに移行することも出来る。「神の声」は、そのような思想ではなかつた。根元的ないのちの親のみ声であつた。思想とは全く次元が異なつていた。

時代 命 四八 一二 八〇

小学時代は理屈であり、大学となれば理論である。父母といわれるころは教養の時代であり、祖父母となるころは悟りの時代である。孫をもち、悟りの時代に理屈をいう

自他共に
ふ 四〇 五 二六

七
ふ 三七 七 二

七・五・三
誠 四六 六一七八

七十八
ふ 五二 一〇 四

地鎮祭
か 四四 四 六九

地鎮祭
ふ 四一 六 八

地鎮祭
ふ 四一 七 八

のは中学生であり、理論にとらわれるのは大学生と同様である。み教えを勉強し、年とともに悟りの道へと進行せねばならぬ。

「自他共に：」とは（中略）自己中心の考え方に立っている。本会の教えではこれを「我執」という。人を立てて我が身が立つのである。人を助けて我が身が助かるのである。

七という文字は頭をちよつととなりによせると亡という文字になります。人もちよつとした頭の使いかた、つまり心の使いかたで、生かされたり亡びたりいたします。

われわれのこの肉体は子宮のなかで成長いたします。三カ月たちますと男女の区別がつく。五カ月すると、ほぼ完成いたします。そして七カ月になると、もうこの世に出てもよいほどに完成する。そこで、七・五・三のお祝いをするのでありますが、波が打ってくるのも、七五三と打ってきます。これは自然の法則であります。

私の七十八才は、ダルマの教訓の「七転び八起き」に通じます。まさしく私の歩みは七転八起きでありまして、この聖地ダルマ山にご縁をむすばれたことに大極のきわみなく深いおはからいを覚えるのであります。

「地鎮」というのは「じしん」という言葉であり、「じしん」は「神事」であり「神示」であります。神示とは神のお示し、神の声、神の縮図、神の道であります。「みち」というのは「身の血」であり、「身の内」であり、これは「自身」であります。また、自信であります。地震であります。「祭」この祭（さい）ということはおまつりでありまして、これは一本の天秤棒のようなものであります。前が重くとも後ろが重くとも調和が取れません。

地鎮祭は自信を持つてということである。（中略）自信を持つて行動する。そこに始めて立派な姿形が現れる。

平和の基礎を築く。これは地鎮祭である。材料があり、大工の手がそろっていても、地鎮祭が先である。

地鎮祭 　　ふ 五 四 二

何を建設するにも、まず基礎が第一である。基礎なくしては建設は成り立たない。平和建設にも基礎がある。その基礎は人々の心である。建設には必ず地鎮祭が行われる。「地鎮祭」は「自信を持つ」ということである。教義の信仰に徹して自信が生まれる。自信をもって行動するから立派な姿、形が現われる。自信のない行動は地鎮祭をやつてない。基礎のない行動であつて、そこには何も現れてこないのが当然である。みなさんは「平和建設」を叫んでいる。果たして、その基礎かためのための地鎮祭をやつたかどうか反省して頂きたい。（裏表紙）

日月 　　ふ 三 九 五 二 一

月・日はいかなることがあつても、その光りを失わない。それが日月の本質である。

日月 　　ふ 五 〇 八 一 三 二

日月の進行は、一日・二日・三日と進行しておりますのが正式で、三・二・一とは回つておりません。

日月の根本 　　ふ 四 九 一 〇 九

東洋は太極であります。文字に書きますと、東の洋と書きます。すなわち、太陽であります。日月であります。日月の根本は天地自然の法則でありまして、黙々として世界を照らしております。

実行 　　い 一 八 一 〇 一 五

実行するには決して理屈なく、無条件の信念を以て実行しなければならないのであります。

実行 　　ふ 三 八 八 一 三

実行は直線的な行動である。現在から幸福への最短距離は直線であり、それを具体化するのが実行である。自分の都合を条件にして即実行が出来ない、実行するにも条件をつける。それは回り道であつて、直線距離と比べると、非常に遠まわりとなる。

実行 　　ふ 三 八 一 一 二 八

人に殴られ、蹴られたら、服装を正し菓子折りの一つも持つてお礼に行くのを実行という。

実行 　　ふ 三 九 五 二 三

私は常日頃から「無条件」実行と教えているのである。実行ができる人こそ、神の使いのできる人である。

実行 　　ふ 四 〇 七 一 五

教祖として会員に示す「実行」には五分間で終つてしまう実行も、三年、五年とかかる実行も、或いは数日で終わる実行もある。数分間、数日で終了する実行を、いつま

でも続いているように考えている会員がある。これは思い違いである。

「実行」を示されるのは、命の親に信用があるからである。我々の間でも、信用していない人には用事は頼まない。大事な用事を頼むのは信用しておればこそである。

「実行」はいのちの親の直命です。そしてまた私との約束でもある。それに、私へこえもかけずに帰ってしまうのは、どういうことでしょうか。北海道への交流は「公用」であるといっても、いのちの親の直命ではありません。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

神の道の実行によって、幸福を生みだしていくことが急務であります。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

「実行」ということは永遠のものでございます。『行い』の方は、その時に変わってまいります。『実行』は無限である。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

いろいろんな理屈もある、理論もあり、我執もあり、貪欲もある。なれども実行には、我執とか貪欲とかそういう理屈はないのであります。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

「実行は信じて行なえば断じて勝つ」、実行でないもの、我執と貪欲でやったものは骨折ってくだびれ儲け」という諺があります。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

行いは幸せを作る、実行は幸せを生みだします。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

実行は活かされておるこの尊いことを悟り、神の子であるという自覚を心に修め、身の借りものを心から信じて、大恩に報いることが実行なのであります。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

人の道の「行い」さえも、いうは易く行いは難し、と教え伝えられておりますように、なかなか行いにくいのであります。実行ということは、懸命であり、文字通り命をかけることであります。人の道としての幸福は作り出すことであり、花を咲かせることでもあります。一方、神の道である実行は懸命であり、無条件の行動によって生み出されるのが四合せであり実りであります。

実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行 実行

たとえ人の道の考えや感情がいかように働こうとも、ひとたび神の道にのっとって教祖が天の啓示により実行を示した時には無条件で、家族一同の一致団結・協力・融和

ができるよう叫んでおりますが、皆さんは鉄砲耳であります。

実行 五〇 五 四

実行は、行えば実る。ただの行いでは花は咲くが実らない。実ってこそ、なん代にもわたって続くしあわせになるんだ。

実行 五〇 六 五

「言うは易く行いは難し」と聖者もいうておる。行い難いのですから実行はなお難しいのであります。二十年や三十年の人生で、そこまで心が成長するのは千人に一人もないと思う。(中略) 私達の肉体は一朝にして成長するものではございません。また魂もその通り一朝にして大胆になれるはずはありません。日々に新たに訓練を重ね、こうして磨き伸ばし太らせ人格の完成に邁進して行くのであります。

実行 五〇 七 三

みおしえが骨に徹し、血に滲んでいくには、実行よりほかはないのであります。その実行こそ、無条件でなければならぬのに、やはり、どうしても条件が付きがちであります。祖先伝来から親ゆずりで条件付きのことばかりやってきておりますので、なかなか「無条件」になりきれません。

実行 五一 四 三

私が申すことは、何でも実行だ、無条件だと聞き違いをして、人の道の交換条件の交流を無条件実行のように思い、人にも、実行だ公用だと宣伝する先輩の会員が今でもあります。そのために、団体としてもいろいろの教科書が現われております。

実行 五七 一 四

実行といいますが、わが意を用いた実行は許されません。文字どおり、行えば実る、と諭されており、そのように教えております。実行を破壊するような我執貪欲は犯罪であります。罪悪であります。罪悪の種をまくということは、一代や二代でなく、悠久に子孫に影響が及ぶのであります。

実行 三四 一二 七六

実行と云う文字も、行えば実ると書いてあります。行ったことが実ってこそ万人の幸福なのであります。(二月六日)

実行 三四 一二 三三三

知るのみ言うのみで、学びの道に誠意があっても、行う道に誠意がなければ花は咲いても実るところまで参りません。(六月四日)

実行 訓 一八 八 五二

絶対の神の御心と同一の気持ちで、その日その場に出て来る仕事に従事してこそ、立派な実行で有ると思います。同じ実行でも真の実行と我欲の実行とは先になって、ど

れ程の損得があるか分りません。

実行は天の命令である。無条件に行わねばならぬ。天の命令に反くのは天則違反である。すなわち神に抗するものである。神に抗すれば天罰をうけるのは当然である。

病氣、失敗は神の慈悲である。気づかせるためにあるのである。(中略) まず実行である。行えば実るのである。もちろん行うには難がある。しかし、その結果は有難しとなる。み教えを信じ、誠の尊さを知れば、ただ行いあるのみである。

ほめられたら反省
叱られたら感謝

行詰ったら実行せよ。

心に誓うことは神に誓うことである。精神は清き心であり、誓心である。心に誓ったことはかならず実行に現わさなければ徳は積めない。捧誠会の尊いことは、実行を第一とする点にある。実行とは「行えば実る」である。行って実ることは、進み行わねばならぬ。進み行うことは進行である。進行はすなわち信仰である。

実行とは天地自然の法則に基いた誠の行いである。良きに悪しきに流れのあることを思い、良きことは広く流し、悪しきことは、みずからの実行により、浄めつくすことにつとめねばならぬ。

実行は教祖としての立場から伝えるのである。(中略) 人誰しも迷いはあるものである。心に迷いのある時、実行を示されれば、信じて行えばよいのだ。その結果は、かならず明るく四合せになるのである。

実行することを神に誓い、約束をしていながら行わぬ時は、どんな結果が出るであろうか。誓ったことはどんなことがあっても実行せねばならぬ。不可能な実行は一つもないわけである。

実行を示された時には「ハイ」と答えて、即実行することが大切である。実行しないうちから自分の浅薄な知識で判断をし、くよくよしてはいけない。

実行で悟れ 命 四八 一二 二九〇

「おはよう」一つでも心の底から真心をもって言うことにより、ほのぼのとした暖かい何かが悟れるものである。実行によって悟ることができ、尊い体験が得られるのである。

実行と行い 命 四九 一〇 一四

この天地自然の法則によって実行することと、人の道によって人が行うことは、同じようでも本質的にまったく違うので、その点を思い違いしてはならないのであります。困った時の神頼みは許されない。誠心で実行し、徳を積んでこそ神助がある。

実行と徳 命 四八 一二 二六九

実行とは悪因縁の解消であり、天借のお返しである。

実行と勇気 命 四八 一二 二六九

実行には勇気が必要である。その人の勇気の足りない場合は周囲の協力が必要である。

実行の教訓 命 四三 三 四

一、お互いに実行などと云うけれど まことの心ならばならざる。
二、お互いに実行すればわざわいも 思わず知らず取り去られゆく。
三、お互いに金や名誉にとらわれず 実行すればよみがえるなり。
四、お互いに事の道理はわかりても 実行せよばゆきづまるなり。
五、お互いに反省感謝実行を あやまちなきよう学び修めよ。

叱咤激励 命 五一 五

信ずるということは絶対であります。ですから、ここには裏切られるということはありません。神を信じ、みおしえを信じているから、みおしえに示されるままに実行していくだけあります。そこには裏切られるなどということのありようがありません。

(裏表紙)

失敗 命 一八 一〇 四九

それは皆お互いの修養も足らず、つつしみもなく、心眼を開いて道を求めることも知らず、唯勝手気儘な心からそのなすべき事をつとめても失敗を生ずるのであると思いません。

指導 命 四八 一二 一二四

かんで含めるから神のみ教えも福が見えてくるのである。これが指導の極意である。み教えを丸呑みにして伝えるから、話す人も聞く人もわからなくなり、結局もらっても有難さを感じないのである。

指導者 命 四八 二 二二

人の心はたえず動いてますが、人の心を読む。人の心を読めないと指導者にはなれま

指導者 五二 一二 五
指導者 五三 二 一〇

せん。

指導者の一人が誤れば、何万の人が誤ちをおかすことになります。

一は万物のはじまりである。

いい知、いい地、いい血、位置である。まことは一筋、一筋のまことの道を外せば我執貪欲となる。(中略) 一人の指導者が誤ればすなわち一を外せば迷い人となり、百万人の人が迷いの道に入る。全世界の指導者が一を外さないよう神の道、軌道を外し、罪悪を作ることのないよう善行を重ねていかれるよう、(中略) 指導者も指導を受ける人も神の子であって、神と神の子は一体とならねばなりません。

自動車 四〇 五 二七
死ぬ 四〇 二 二六

自動車は指導者だよ。そのひとは全く指導者の教えを踏みにじっていた。いかね。自動車は指導者だよ。そのひとは全く指導者の教えを踏みにじっていた。国の為に死ぬ、陛下の為に死ぬといいますが、私はその「為」に死にません。勤労報謝の為なら喜んで死にます。

じば(爺婆) 三四 一〇 二
支配人 四七 一一 三

天の啓示によって、そのHさんを支配人に任命しました。Hさんが支配人に任命された理由は、会社の支配人ばかりが支配人ではなく、ことたまから説明しますと、教義の支配人として、つまり指導者として従業員を育成しながら、おのれの徳をつみおよぼすことが、本当の支配人であるというところから任命したのであります。

支払 四一 七 一〇
慈悲 四八 一二 七八

支払いが完全に行えておれば収入も利子が入ってくる。支払いに不平不満を持って、待った待ったといっていると倒産となる。社長だけでなく、全従業員が、この一点に心を結んで支払を喜んでいくのが営業の根本である。

り、尊い目に見えぬ慈悲の有難さを知らぬ。また空気をいただき、水をいただき、光と熱をいただいていることに心からの感謝を捧げているであろうか。物を得ることに忙しく、心を養うことを知らぬ。そして、感謝することを知らぬ。だから尊い命を失うのである。

病氣、失敗は神の慈悲である。気づかせるためである。ゆきずまっつてからでは遅い。しかし気づかぬよりは良い。どうやら暮せる間に次の徳をつめ、幸福になろうと思えば、まず実行である。行えば実るのである。もちろん行うには難が有る。

いのちの親は支部長は神の子として、神の子の自覚をもって人作りのために実行せよと、教祖が総裁として支部長に任命している。

慈母、つまり慈悲の母であると、子供は雨が降った、風が吹いたというぐらいのことにも、心を痛めるような性質になる。いくちの無い弱い子供となる。(中略) 慈母の子は淋しい心は無くとも気が弱く、いざという時に役に立たぬ。

島は四万の数字をあらわします。

しみぬきには布をもまねばならぬ。心のしみも人中でもまれることによりとれる。その度に侮辱された、馬鹿にされたなどと思う人が多いが怒ってはならぬ。感謝せねばならないのだ。有難いは難ありと書くことをしみじみと味わうべきである。

人は、万靈万物尊愛を使命として与えられているのであります。おれが、おれが、と、自分中心に考えたり、言ったり、行動したりするような使命を与えられているのではありません。

教訓とはうつつし世にうつつし出されたことだからである。示し申すと書いて神とよむ。何事も教訓としてうつつし出され示し申されるのである。

ただみずからの生活だけを願うのは蛇の道、鬼の道、すなわち邪道である。

米という文字は八十八とかき示されております。八十八才になりますと米寿の祝いとして寿であります。寿はすなわち末広でありまして、めでたい時に使用される姿を現

慈悲

命 四八 一二 八八

支部長

ふ 五〇 八 五

慈母

命 四八 一二 一二九

島

ふ 四七 六 八

しみぬき

命 四八 一二 六三

使命

ふ 五六 一一 五

示し申す

命 四八 一二 二七七

邪道

命 四八 一二 一四一

寿

ふ 四七 九 一四

ふ 五〇 二 二

わしていることはご承知のことでありましょう。

一千集も感詩集も集であります。集という字は鳥がたくさん木にあつまることを示します。大衆であります。またことたまからいいますと「しゅう」は宗教の宗であつて、神祭りの家であり、元であります。

十 ふ 四三 一〇 二 二
十 という文字は神の姿を表しており、一すじの誠を示されています。言霊から申しますと、従順であり、十分であります。

十 ふ 四七 二 二三
十 といえはこれはもう神である。キリストも十という。十字架というのは神として横も縦も一筋である。

十 ふ 五五 一 一二
十 という文字は、縦横一であつて、縦の一は神人合一、横の一は他自一体と示し、これは天地であり、天地の間に万霊万物が生成発展しているのであります。

十 振 四二 一〇 一〇
十 月の十は従順であり、神であり、神無月と教え伝えられております。

十 振 四三 一〇 四
十 と云う字はことたまから云いますと、従順、言葉をかえて素直と云う。これは仲々言葉通り、素直に、従順になり切れない。こうしなさいと云えば、ハイと云いながら、すぐその場から忘れてしまう。

十 振 四三 一一 五
十 はやはり人生の一番尊い教科書であります。よく十の字をえがくキリストの十字架、十分とか十字路とか十(とう)番とか云うような言葉が出ます。

自由 ふ 五一 一二 二二
自由 というものは、どういうところに目的や根拠があるのかというと、借り物の理がわからないと、その目的も根拠もわからない。だから身は借り物であることを心からさとり、感謝しなければなりません。これが若人への根本的指導方針でなければならぬと思います。借り物などというと、それは迷心だ理屈にあわなひと言つたり思つたりしている人が多いようですがこれは実にあさはかな考え方です。

自由 ふ 五三 七
借りものの肉体も自由を示している。便所にいきたくなければいけません。誰もそれを止められない。眠くなれば眠ればよい。誰も止めることはできない。その自由に守られているのがこの借りものの肉体である。それを、わがの意を用いて自由を束縛して

十音の教訓

振 四二 四 三

いる場合が非常に多いのではあるまいか。(裏表紙)
 十音の教訓 出居清太郎

一、なぜこの世に生まれた 国造りのためです

二、なぜ人は死ぬのですか 肉体がかわるだけ

三、なぜ病気をするのですか 奉仕が足りないから

四、奉仕とはどんなこと 徳を積んで及ぼす

五、なぜ心をなやむか 貪欲が重なるから

六、なぜ争いするか 借りものを知らないから

七、恋愛は悪いのか まごころであればよい

八、事故を防止するには 協力融和である

九、徳と力のもとには 天地自然を悟る

十、魂を磨くには 神の实在を知る

宗教は自然の法則を悟り、人身の救済に励んでゆくことであります。

宗教は「生まれて死ぬことなり」、終始一貫であると主張し、私自身もその主張
 どろりに進んでいます。

宗教 ふ 四八 九 五

宗教は平和の大道を確立し、平和建設への指導者を育成していかなければなりません。
 宗教を否定することは、音楽を否定するようなものですよ。昔から人の心の中には、

音楽があり、宗教があるんだ。

宗教は終始一貫(宗旨一神)でなくてはならず、派閥をつくって他を排することは宗
 教の本質ではありません。汝の敵を愛し得るまでに万霊万物を尊愛し、自らの生活を

修め養うことに懸命であることが、天地自然の法則にそう姿であります。

宗教の根本は魂を磨き浄めることにあり、ということを感じていただきました。魂
 を磨き浄めてさえいれば、神仏は、うそいつわりなく救って下さるといふ真理に到達

したのであります。

宗教 ふ 五三 四 三

宗教 ふ 五一 九 四

宗教 ふ 四九 一二 二五

宗教 ふ 四〇 二 二三

宗教 ふ 三五 四 五

宗教 三三四 一二三 三五

宗教も、強く正しく清らかに、人の心が安心立命の境遇に導かれるよう、そして我執貪欲を取り去り、正道なる天地自然の理を悟らしめ、無駄のないように、争いせず、魂を磨き清め、永遠の幸福を自覚できますよう、我も人も悟るべきであります。

(一月十七日)

宗教 三三四 一二二 二〇二

立派な人をつくる為に宗教も教育もあります。宗教は魂を磨き、太らせ、成長させて行く為の教えであります。(四月七日)

宗教 三三四 一〇 一二

日本だけでなく、各国の歴史をみますと、さかしまの心即ち、妬み、恨み、嫉みの心が如何なる時代にも起っております。この事が如何に恐ろしい結果を及ぼすか分かりません。今迄の歴史を省みしてもわかる事であります。現在も、未来もこの恐ろしい心は次から次へと交流して参ります。早く改めて、この恐ろしい心の動きを洗い浄める事が宗教であり、教育であり、人と人との協力であります。

宗教 命 四八 一二 四九

命(魂)は即ち宝である。ところがこの魂を大切に切り扱っているかどうか、宝を大切に切り扱いこれをよく動かすか、悪く動かすかを教えるのが宗教である。魂を肥らせ立派なものに仕上げてゆくところに宗教がある。

従業員 命 三三八 一〇 一

総理大臣以下、全国民が従業員である。

宗教の根拠 命 五五六 四 四

宗教というものはどういうところに根拠があるのかと申しますと、その根拠は一つであります。魂をみがき清めることであります。拝み祈祷(きとう)などで大難は小難に、小難が無難にといいようなことは、我執貪欲である。

宗教の根源 命 五五一 九 二

宗教の根源は天地自然の法則のよって生じる大極をもととして、大宇宙の真理を学び修め、悟ることにあり。(悠久世界平和郷地鎮祭並びに起工式の「誠文」より)

宗教の根本 命 五五三 九 一

宗教の根本とは魂を磨いて浄めることにあるのであって、そのためには一日一日をいのちの親のみ心に添ってゆかなければならぬのであります。

宗教の根本 命 五五四 二 五

一日は一生であり、今の心と書いて念であります。念仏という文字は、神仏を信じる毎日毎日、かわることない誠を信じる、それが今の心であり、宗教の根本であります。

宗教の本質 五五五

宗教の本質 命四八 一二 二七八

住居の心得 命四八 一二 二八四

十九 命四八 一二 二七八

終始一貫 命四八 一二 二七八

十字架 命四八 一二 二七八

終生 命四八 一二 二七八

終生の奉仕 命四八 一二 二七八

世には色々な宗教がありますが、宗教の本質は、一つの井戸の中から湧きだしている清い水と変わりないのであります。どの桶に汲もうと、水はいつでも清い。その水は、あるいは岩に砕け、砂を通り、地下に流れている水です。素直であり、清らかです。たとえ、一杯の桶の中にあやまって泥を入れてしまっても、元に戻せば、その流れの水はやはり綺麗な真清水になるのであります。自分の足りない事を反省し、気がつかせて頂けた事に感謝し、実践してゆく、これにつきます。一人の世の中ではない、人の世です。色々な人と共に生きるのです。感情も理屈もあります。人格の完成をはかり、日常生活を堅実にし、安心立命の境遇に達するのが宗教の本質である。

間借り生活にしても、きたないとか、せまいとか思ってはならぬ。そうした心のある間は立派な家には住めない。

十九はトク(徳)です。

「終始一貫」は私の信条である。終始、まことをもってつらぬきたい。

仕事―死ごと―死んで生まれ変わる―生まれてまた仕事に従う。これを終始一貫という。この廻転の理を悟ってほしい。

この私の行い―実行は「宗旨一神」(終始一神)を示している。

人が生まれて死ぬ迄の間を終始一貫と教えられております。生まれる時に喜ぶならば、死ぬ時も喜ばなければならぬ訳であります。それが人の心の常として分かっているから実行出来かねます。(四月二五日)

「終始一貫」は本会の趣旨である。終始一貫変わらざるが「まこと」である。

地球上には東西南北あり、天地自然の法則を十字架に譬えてあります。(十月十四日)

終生とは永遠であります。また、悠久であります。

何の為に「終生の奉仕」を誓うか。それは、終生、活かされる上に天地のお世話になり、生きていく上に肉体のお世話になっているからである。「終生の奉仕」とは、切

終生の奉仕 　　ふ 四八 二 二四

終生の奉仕 　　敬 四二 一二 四三

宗祖 　　敬 四二 一二 二二三

十二時 　　導 三四 一〇 三

十八 　　振 四四 一 六

重病人 　　ふ 四四 七 一三

修養 　　ふ 三六 九 三

修養 　　ふ 三八 一二 一五

修養 　　ふ 三九 六 一五

修養 　　ふ 三九 六 一六

れめのない、続き放しの奉仕である。これを怠るから肉体の病み患いとなる。

万物尊愛といっておりますが、万物尊愛どころじゃない、軽卒にしている。しかも気がつかない。これが天借になる。それから、心、言葉のムダ使い。これも天借になる。この天借を、一人一人がつみ重ねていった時に、補いをするのが終生の奉仕である。手も足も、動かして下さっている間はいかようにもお使い下さいという気持ち、その実行、これが、大切な使い方であります。これが裸の心、一切を捧げた心、終生の奉仕の心であります。

宗祖と仰がれる人々は、しかし、神仏のみ声を直接聞いたのではなかった。積尊の残された經典に基づいて、独自の境を開いたのである。言い換えると、創造、創作ではなくて、原典（これは天直接の声）を受け継ぎ、これを学び修めたのであった。

九死に一生という事をもうしますが、これは生か死か、紙一重のときのことを申すので時間に例えれば、十二時であります。十二時という時には長い針と短い針が合致いたします。一秒でも針が進めば日が変わります。十二時の時は刻限であり真であります。十八日と云う日は数字におきましても、言霊の教訓にいたしましたとしても、大事な数字であり、言霊なのであります。十は神であり、十字架なのであります。八は平和であり、寿であり、富士山の姿なのであります。

病気が重い、重病人だ、という。それは非常に重いものを抱きかかえているのである。役にたたぬ石をかかえているのである。石とは、意志であり意地である。

修養は即実行であり、物心共に恵まれる完全なる生活を営んでゆく根本であります。心のデコボコを修繕して、平坦な自然の大道にするのが修養であり、その根本はみおしえである。

修養とは働くことです。（中略）心・言・物・肉体、この四つをひっくるめての働

きが本当の働きます。修養の修は「おさめる」である。「おさめる」とは「納める」ことである。物品を納

めるから代金をもらえる。(中略) 我々の、呼吸一つを考えても、この理は一つである。吐くから吸える。吸えるから吐く。これが自然の法則である。

修養 四〇 二 一六

修養は生活であり平和であり物心共に堅実に恵まれるにあり。

修養 四〇 一〇 一五

修養は厳しい道である。これはおつき合いではない。おつき合いから光りは見えぬ。

修養 四三 三 三

ゆえに修養は生活です。生活は修養であります。

修養 四四 一〇 一一

修養とは修め養うことで、文字にもそのように現わしている

修養 四六 二 五

“修”は男、“養”は女であります。修め養うて一つ、男と女と協力して一つの力が

生まれてくるのでありまして、これを“合掌”ともいいます。

修養 四六 七 二〇

修養は万物の霊長としてなさねばならないことであります。生きて活かされることを

知ることです。修養という文字は修め養う、つまり生活である。生活そのものが修養

であります。

修養 四九 二 六

生活そのものが修養であります。(中略) 修養即生活なのであります。

修養 五三 九 四

本会は誠を捧げる会でありまして、不平の言葉、不満の心を捧げる会ではありません。修養とは修め養うのでありまして、顔を綺麗にお化粧する、ご飯をいただく、みな修

養であります。洋服を着替える、気替える、気持ちをかえる、己の心を見直すのであ

ります。心を清めて身を養うということは一日一日であります。森羅万象は流転して

おります。流転の中に日月は黙々と回転し、霊峰富士はそびえております。(中略)

誠を捧げるということは、神の子の証しであります。この証しを実行と行いによつて

現わしてゆかなくてはなりません。我執貪欲で不平を持ち人を侮っているようでは野

獣にも劣る存在であります。どんな境遇におかれても真実が分るまで努力をしてゆか

なくてはなりません。心を磨いて浄めるところに重点があるのであります。

恨み、ねたみ、憎しみというような感情を抱くことは、天借であります。こういう事

修養 五四 五 三

を聞かされ、自らも信じて、過去に抱いた恨み、ねたみ、憎しみなどの気持ちはけっ

して明日には持ちこしはいたしませんと誓い、そのように工夫してゆくことが日々修

め養う修養なのであります。

修養 三 四 一 二 六一
修養は信頼と尊敬であり、信仰は神仏を否定せず、信じ敬うと同時に、魂を磨き太らせ成長させるように努力し、協力をすることであります。(一月三十日)

修養 三 四 一 二 五三八
修養即生活であります。(中略) 修めることは例えて言うならば、製品を作り会社に納めるとか、努力して得た利益を税金として政府に納めるとかと同じで、それは責任であり、義務なのであります。それによって生きていかれるのであります。養うことも、心を養い、身を養うことは日夜忘れられないことでもあります。(九月十七日) 神様が修養すべき宿題を出して下さい。

修養 訓 一 九 六 八
修養 振 四 二 一 一 二
先ず修養団捧誠会という旗じるしに就いて云えば、修養とは文字通り、修め養う。身心を修め養うことである。教典として「いのりのことば」神法があり、教義として綱領十か条があり又典範として第一条、本会の趣旨、第二条、会員の心得、第三条、宣布普及に対する心構が示されて、夫々教え導いております。

修養 導 三 四 一 〇 三六
修養は即生活であります。生活即修養であります。文字通り修め養う。修めることは人に喜びを与える、養うことは頂くこと、そうして上げたり貰ったりすることが修養であります。

修養 導 三 四 一 〇 九三
修養という事を聞いただけで、何だか固苦しい窮屈な事のように考えておるのが習慣になっております。なれども私が皆さんに申上げる処の修養はどういう事であるか。ご飯を食べるのも修養である、寝るのも修養である、文字通り修め養う、修めるという事は差し上げる事であります。養う事は頂く事であります。

修養 導 三 四 一 〇 一五九
修養と申しましても別に堅苦しい事でなくして、修め養うことでもあります。おさめるとは納める、製品も納入する、差上げること、奉ることであり、それから養う事は頂くこと、栄養を又報酬を頂くことでもあります。従って修養は私たちの生活であります。生活即修養であります。

修養 命 四 八 一 二 四三
病気を癒すため、ご利益を願うため、自己の利欲のために修養するのは思い違い、取

違いであるから間違いを生じて進行が拒まれ手遅れとなる。また行き過ぎ乗り過ぎをしたときは、後もどりをせねばならぬように、心の行き過ぎ、思い過ぎ使い過ぎも結局後戻りをするようになる。日月星辰に後戻りはしない。

すべてを許し、受入れる気持は修養の極意である。修養とは腹へおさめることだともいえる。

人生には、次々と疑問が生れ、判断に苦しむことがある。これが迷いである。疑問があればこそ修養もできるのである。人々の成長の過程にも、病いがあり、高熱が出る。これは生きてゆくための力試しである。疑問、迷いはそれと同じである。迷いによって邪道にゆくか、努力して正道にゆくかの岐路である。

宗教家などには冷い世捨人が多い。山に入り木の実を食し修行したとて真の修養とはいえない。我田引水で凍り固った人が多いのである。

修養とは信頼される人となることである。難しい人だといわれるより、優しい人だといわれるようになれ。

枯木に花を咲かせるまで努力せよ。多くの人は花の咲かぬ間に倦きてしまうのである。倦かずに初志を貫くところに修養があるのだ。

修養とは語るべきものでなく、行うべきものである。修養団捧誠会は、人格の完成、物心ともに恵まれ、健全に与えられて健全に奉仕することができるよう修養実践してゆく会であります。

のれんに偽りがあつてはなりません。お茶屋ならば、そこにおせんべいを売っていてもよいかもしれんが、お茶は必ずなくてはなりません。それなのに、お茶屋にお茶がない、それでは世の信用を得られません。修養団であれば、会員は日々身を修め心を養うことが必要であるし、捧誠会であれば、会員は常に万霊万物の尊愛に誠を捧げていなくてはならないのであります。

生活は生きて活かされることである。生きて活かされるために修養がある。生活の中

修養 命 四八 一二 七五

修養 命 四八 一二 八一

修養 命 四八 一二 一〇〇

修養 命 四八 一二 一七五

修養 命 四八 一二 二五六

修養 命 四八 一二 二八七

修養団捧誠会 ふ 五〇 九 一三

修養団捧誠会の会員 ふ 五四 五 四

修養と生活 命 四八 一二 二三二

修養とは	命	四八	一二	二七二
修養の方向	ふ	四一	七	一一
修養と生活	振	四三	八	五
宗教・教育・科学	ふ	五四	一二	四
宗教・教育・科学	ふ	五五	一	四
宿題	ふ	五〇	五	三
受験期の人	命	四八	一二	七三
趣旨	ふ	四四	二	一七
修善寺	ふ	四四	二	一五
寿命を伸ばす	み	三四	一二	四四九

に修養があり修養の中に生活があるのである。

修養とは、まず、己を省みることである。徳も足らず、勉強も足らぬ自らを発見するであろう。魂の価値（徳の分量）を知ることである。

人に愛され信頼されるようになって頂きたいと力説している。ここに修養の方向がある。目的がある。

生活は文字通り生きるのみでなく、活かされて行く。修養は、修め養う。修養も生活も一つである。これは本会の専売特許であります。神の子である事を自覚して、天地自然の法則を学び修めて、まごころを持って、身心共に健全に恵まれていくと云う事は、本会の趣旨として、忘れてはなりません。

宗教も教育も科学も、この三つは切っても切れない火水風であり、天地人であります。宗教と教育と科学とは、一・二・三であって天地の理法であります。火・水・風、天・地・人これは悠久であります。

まさか病気を恵まれたという人はいないでしょう。しかし、病気をしたおかげですべての天地の法則が分かってきました。病気は宿題だった。宿題が何のために与えられたかということが分かってきた。

受験期にある人のもっとも大切な心がけは、素直になることである。素直になれば知恵をいただくことができるのである。

趣旨もシシという言葉であります。

本部建設の地は、はじめに述べました日蓮上人につながる伊豆、弘法大師の縁のつながりの地である、言霊も「しぜん」（自然）につながる修善寺の近くを目標に致しております。

人の生活に必要な製品には、人の勤労の尊い念が通っておりますから、値段の高低に拘わらず尊び愛し、長く役にたちますように取り扱いを丁寧にした時、その功績によって人の寿命も伸び、事業も伸びて、人から破壊されるようなこともなく、長く事業

旬(しゅん) 八四八

が続いてまいります。(八月四日)
一度その旬(しゅん)をはずすと、次の旬がめぐってくるまで待たねばならないのである。

旬刻限 捧五〇 五三二

零時の一瞬まえば昨日であり、一瞬あとは今日である。零時という一瞬が昨日と今日の中心であつて、これを「真刻」(しんこく)という。これは、ぬきさしならぬ一瞬である。

大極のひびきをうける靈感は一瞬のひらめきである。

「旬刻限」とは「真刻限」である。これを分析していえば「刻」は今日、「限」は昨日、「真」(旬)はその中心の一瞬。ゆえに旬刻限は三位一体である。この旬(真)をはずしてはならぬ。靈感をいただくと私は時を移さず実行する。それは、この真刻限の理に添うためである。

天地自然の運行は、一瞬・一瞬のきれめなき連続である。一瞬は一神であり、この一瞬が神の行動である。典範に「悠久なる平和世界の顕現……」とあるが、真刻の一瞬が一瞬が悠久につづくのである。悠久であつて永久ではない。悠久には一瞬のゆるみもない。悠久は厳肅なる一瞬一瞬の連続である。

食う事に一生けん命になることは、順序が違っている。我々は天地の真理を悟ることに賢明(懸命)でなければならぬ。(中略) 天地の真理を悟ることに一生賢明であつて、平和と繁栄とが許される。

順序 命四八 一二五五

神の子であることを素直に自覚するためには順序がなければならぬ。(中略) 人のきめた順序と、神の広い心できめられた順序と二つあるわけである。神の順序を素直に守り、わが子でも祖先と思ひ尊敬できる広さ、素直さが必要である。

純情 誠四八 一二七六

人々は「純情」——「純」はすなわち「神」(じん)である。純情になつて、神のみに徹底していかなければ、協力融和はできないのであります。

消化 命四八 一二二一九

消化は唱歌に通じる。唱歌をうたうような気持、笑つてゆかれる明るい気持や感謝す

浄化 四三 一一 九

ることにより消化は早いのである。食べすぎた時も感謝して働く、すなわち誠の業を喜び励めば、すぐ消化する。そして、なにを食べてもおいしく、決して腹を立てず、丸い優しい暖かい広い心になることが必要である。

浄化 四五 一一 一一

公害恐ることなし

それですから、そういうことを思えば公害とか、ヘドロとか、そのゴミをこわがる必要はない。私はそう思う。みなさんはどうか知りませんが、私自身はそういうことにはいろんな体験をしておりますから驚きません。それでですから私は丹毒のウミも飲みました。また肺結核の人の口から出る汚物も飲みました。といって私はほかの人にもこうしなさいとはすすめませんが、私自身はそういう汚物を飲みました。また人からもいろいろ飲まされました。それは水ばかりでない、酒ばかりでない、汚物も飲まされた。(中略) 感謝によって浄化される。

浄化 四八 一一 一六八

一人一人の心の中に毒素があつてはなりません。この毒素を浄化すること、そこに本会の趣旨の重点があります。また教義、教典があります。教えの指向するところは、一にこの「浄化」であり、浄化のその向うに「平和」がある。

紹介 四三 一一 六

「紹介」というのは「正しいものを買え」「正しい言葉、正しい動作を買え」ということである。

浄会 三九 一一 二〇

今日、只今から、こうします、こうして前進しますと心を洗い浄めて誓うのが浄会であることを忘れず、日々に新たに前進して行つて頂きたい。

浄会 三九 一一 一七

浄会は社交場ではない。どこまでも魂の教室である。

浄会 四〇 一一 一七

浄会を人集めの会と思つている向きが多い。これは非常な思いちがいである。浄会の意義や目的は明示されている通りで、根本は各人の魂の浄化である。一人でも出来る。

夫婦二人でも出来る。魂の浄化——であるから、これはまことに厳肅な座であり場

ある。大勢集まって、人の悪説を流したり、飲んだり食べたりで事おわれりとするようなことであってはならない。

「浄会」は文字の示す如く、心を家を浄める会である。みおしえを信じ教義にもとづいて教えを行なっていくけるよう訓練する場である。

浄会は「勉強の場」であり「みなおしの場」であり「相互の理解につとめる」場である。心を清め、心の埃を払うこと、これを「浄会」といっております。

不平不満、怒り、嫉妬——こういう、邪念をもちますと、それがこの肉体の血潮に、器官に、神経に流れる。これを浄めていくのが「浄会」の趣旨であります。（中略）

「浄会」とは、その家の人たちの一人一人の心を浄化してあげる。家の中を美しくしてあげる——これが「浄会」です。

地球に春夏秋冬あるごとく、私もまた、うれしいと思つたトタンにまた淋しくなり、淋しくなれば不平不満も出てまいります。これを浄化するのに努力いたしますが、一日ではむずかしい。なんとか三日のうちに浄化する。これを「浄会」という。「浄める会」です。

捧誠会は人から話を分け譲っていただく。そして己も差しあげる。一言いただければ、一言差しあげるべきである。物品ももらったら差しあげる。こちらの意見をのべると同時に先方の話も聞かしていただく。素直に話したり、話されたりする心構えこそ、徳を積むことになるのである。

一、支部主催の支部浄会、おみな会総て本部を見習って行うこと、特に注意を要することは

1 個人的な、自己の感情利害中心の体験談に落入らず、日常みおしえを通じ教義に基いて勉強したこと、体験したことを語り合い、又行いに現わして、浄会の教訓に準拠した勉強をし、物心共にめぐまれるよう、これを日常生活にきざみ込むことに重点を置く。

浄会の行事

振 四二 一 六

浄会

命 四八 一二 一八三

浄会

誠 四八 一二 一六九

浄会

誠 四八 一二 三六

浄会

ふ 五〇 四 一三

浄会

ふ 四一 一二 三

浄会

ふ 四一 一二 二

2 茶菓子等は本部に見習って一切出さないこと。

二、会員の家庭における浄会

昭和四十一年迄は特別に個々の家庭に対し、供養の浄会或は感謝の浄会を、人の道として行なうように教え又神の道として実行するようお諭しを頂いて、お諭した場合がありました。(中略) 修養の目的は迷信を打破し、卑俗なる奇跡の存在を否定し、純真無垢にして動揺転倒することなき天来清浄なる心境を発見することにあつて、これが本会会員の目的であり急務であることを常に念頭に置かねばなりません。詳しくは昭和四十二年一月二十五日発行「ふりかえる」第十号に記載。

浄会の趣旨
障害も変わる

ふ 四〇 六 一七
ふ 四一 五 一一

家庭浄会の趣旨は綱領四である。家の長を中心につながり恩のある人の集いである。人生にはいろいろの障害がある。しかし日が変わり月が変わっていくように障害も亦幸せに変わる。

正直

命 四八 一二 一四〇

正直とは正しく直すことである。自分の前に不正直な人が現れた時「私はあるようなことをすまい」とみずから正しく直すことをいうのだ。自分は真すぐだ、正しいのだと一人ぎめすることではない。

上等の心

命 四八 一二 五九

一番上等の心は感謝の心である。感謝の心の起せる人、持てる人が一番上等の人である。極楽の心の持ち主こそ、尊い人、上等の人、立派な人でありましょう。

消毒

振 四二 一〇 三

清潔とは只自己の環境を又肉体を清潔に保つことばかりでなく、魂を磨くことも清潔である。清潔の「せい」は誠、誠意であり、「けつ」は決行、決意、強く正しい心である。又清潔は衛生、消毒、しょうとく、正しい徳、正しい徳を積み及ぼすことである。

衝突

ふ 四四 三 一〇

衝突とは、やはり食い違いであります。

小児ガン

ふ 四六 一 二七

小児ガン、この「みしらせ」の原因は「不平不満」である。人を見て不平不満をもつ。お金持ちを見て不平不満をもつ。なぜ自分だけがこんなに苦労するのかと不平不満を持つ。どうせ生涯、社会の下積みになったまま終わるのだと不平不満をもつ。このよくな不平不満が、ながらく積み重ねられてきて今日に到った。その結果が血のわずら

少年 ふ五〇 九 五

いのちの親が下界をご覧になりますと、私どもはすべて少年であります。私どもが言っている少年だけが少年ではございません。

少年部綱領 ふ五〇 九 二

少年部綱領は、少年部を中心に思われますが、少年部を育ててゆくのは家庭が第一であり、家族の人たちの心構えが先でありますので、少年部綱領は家族一同の心構えが示されているものであります。

勝負と進退 ふ四二 八 九

勝つことを知って負けることを知らないのは、進むことを知って退くことを知らない人であります。

定命 誠四六 六一〇三

「みおしえ」からいきますと、男女ともに、一五の五倍の年数だけ——つまり七五才までこの世においていただけることになっております。それ以上は恩典です。徳を積みかさねたその徳分だけ恩典となって年数が伸びてまいります。三十や四十でこの世を去るのは、前の世から好き勝手なことをして、すべてに無駄使いをしてきたからであります。これは、こう断定しても間違いありません。

勝利（正利） ふ三九 四 二〇

努力をして利益を得るのは勝利である。勝利は「正利」であって「悪利」ではない。

勝利（正利） 命四八 一二 一六三

勝利（正利）を得るとは、相手をつぶして勝ちぬくことではない。商売にしても相手をつぶして、自分だけが栄えるというのは真の商売ではない。また正利ではない。相手を喜ばせ、みずからも利益を得て喜べるようでなければならぬ。両方の利益がともなうてこそ正利である。み教えを遵奉し、愛と徳と力をもって実行すれば勝利（正利）が得られるのである。

正利 命四八 一二 八五

己を虚しくして働いておれば正利はかならずある。せっかく努力して苦労艱難しながら、路頭に迷うような結果とならぬよう、たがいに親しみ交し、信じ合い、愛し合つてゆかねばならぬ。誠の教え、誠の愛につながり、正利を得て最後の勝利者になるようにせねばならぬ。

昭和五十一年 ふ五一 一 六

昭和五十一年は、悠久世界平和郷の建設が、いよいよ建物にまでおよぶ年であります。

昭和五十三年 　　ふ 五三 一 六

器が生みだされるのであります。

五十三年は厳しい年であります。このお諭は厳しくきております。迷いも多く、生活も苦しく、思想は混沌としてまいります。社会面では、労使の対立は一層激しくなり、不平不満に基づく対立が悪化の一途を辿ることになりました。そのため各界に派閥が生じ、対決が生まれるであります。　（中略）　そこで、人と人とが真に心から敬愛してゆくことが必要なのであります。昨日の敵は今日の恩人となって頂けるように、心からの真の交流に励んでゆかなければならないのであります。

昭和五十四年 　　ふ 五四 六 三

昭和五十四年、五はいつまでも、四はしあわせにという言霊であります。

昭和五五年 　　ふ 五五 一 四

昭和五五年、悟りが重なる年、五と五は十であります。縦も横も一筋であります。万人等しくこの理を悟り、人種国籍信教を問わずに、悠久世界平和建設に進行してゆかなくてはなりません。これが天地自然の法則であります。　（中略）　昭和五五年を油断なく、国難に当っても動揺転倒することなく、自ら立ち上がるように修養実践あらんことを切にお頼み申し上げ、年頭のみおしえと教訓と題してお伝えいたしました。

職域発展 　　命 四八 一二 二七二

職域の発展は己の欲するものをまず人に与えること。

食道癌 　　誠 四六 六 五二

食道癌は食道にガンができて食事が通らなくなる病気ですが、いつも申しますように「食道癌」は肉体上のなやみだけではないのであって、「職」の道がつかず定まらず、転々としていくのも「職道癌」であります。肉体は健康でも転々として職が定まらないのは、肉体の「食道癌」と同じであるとも申せるのであります。

職場 　　ふ 四九 一 一七

職場の職も「しよく」でたべることも「しよく」でしょう。職場は食事に通じます。

諸国鳥 　　ふ 四一 一 一五

「国民に告ぐ」の中に「諸国鳥」という言葉がある。「月給取り」（鳥）に通う言霊であって、経済的に不平、不満が爆発することをいう。　（中略）　「蚊のなく如く」ということたまが出ています。これは「諸国鳥」に通ずるのであって、大掃除が始まれば必ずそうなるのである。

署名 　　ふ 三八 一〇 二〇

ある人が、みおしえに署名してほしいとやって来た。　（中略）　神の子に、親なる神

除夜の鐘

ふ 五二 二 二

が与えたものですから、出居の署名は無用です。
除夜の鐘は「百人の煩惱を去る」という意味でその鐘の音はゴオン（ご恩）すなわち大恩であります。

知る

ふ 四四 一〇 二

道理とか道徳とかそういうことは教育上において教え導かれておりますが、なかなかそれを行うということは聖者もいうております通り「知るは易く行いは難し」というております。

試練

ふ 五二 三 五

人の道の常識から一步進んだ神の子の自覚に立つのが、本会の趣旨であることを忘れてはなりません。いかなる試練も、命の親の慈悲であるという気持ちになって初めて、試練を乗り越えることができます。学者が書いた論文だけでは、人生の試練を乗り越えることはできません。

試練

ふ 五四 一〇 一

誰しも、とかく生きる方が先で、活かされる方が後になります。当然の事のように思えますが、そういう考えだけに囚われておりますと、その為に試練を頂くことになりません。

信

ふ 三九 四 四〇

信は芯であります。芯棒がなかったらから廻りするばかりです。

信

ふ 四二 三 一四

「真実」をつかめない。「信」がないから「真」が生まれて来ないのは当然である。

信

命 四八 一二 一七五

「信じて行えば断じて勝つ」である。信じて行うことがなにより大切である。おたがいに信頼し、信頼されるよう、愛し愛されるよう努力し、生活も神から保証されるまにに進まねばならぬ。

神意を悟る

い 一八 一〇 七

神様の御心を悟るには、その日その日をよく自重して、如何なる不時災難の場合にも不平不満なく、心の勉強をするより外にありません。

人格

ふ 五四 七 三

人格を形成する事は、道なき所に道をつけ、家なき所に家を建てる事に比較すると、容易ではありません。道をつけたり、家を建てたりする事は目に見えますが、人格は、誰にでも見えるものではない。

人格者

い 一八 一〇 三四

人格者と云えば名誉もあり、財産もあり、権力のある人々のみではありません。心に

人格の完成

ふ 四一 七 一一

妬み、恨み、嫉みなく、よく改め、私欲を忘れ、心の成人した人も人格者であります。その人格者になるまでには難行苦行の道を喜び勇んで実行しなければなりません。

人格の完成

ふ 四二 八 二

人格の完成——と、一口にもうしますが、これは何万年かかるか知れません。しかし一歩一歩ちかづくように心がけているのであります。

人格の完成

ふ 四五 一 三

自由と平和とが合掌してこそ、人格の完成であります。

人格の完成

ふ 四七 二 二〇

本会の趣旨を学び修めて、修養実践しておればおのずから人格の完成になると、私は思っております。

人格の完成

み 三四 一二 三三八

人は一生一代かかっても人格を完成させるというようなことは不可能であります。なれども日夜心がけ努力することが肝要であります。(六月十二日)

人格の完成

誠 四八 一二 一四一

ひとたび事にあたって、心がどう動くか。善か悪か。そこに人の悩みがある。その悩みによって悪を打破していく。また、悩みによって打破する。この悩みが、だんだんと大きくなる。いくら大きくなっても、それを打破していく。ここに人格完成への道があるのであって、これを突破しきった人を「聖者」と申します。

人格の完成

誠 四八 一二 一七七

心の使い方、言葉の使い方、肉体の使い方、金の使い方、物の使い方——この四つの使い方を学び修め、有効に使っていくところに、みなさんの人格の完成もあります。

人格の完成

導 三四 一〇 九二

人格の完成と申しましても五十年百年では完成できません。何回も肉体が生まれ、又肉体が消えて、魂が次から次と交流されて、少なくとも四百年五百年練磨してこなければ人格の完成というような事は到底出来得ないのであります。

人格の完成

命 四八 一二 四六

また自分一人が正しいと信じるだけで価値のない場合もあるので、それを知らずため心身の悩みを生じ教えられることもあるから、この悩みあって始めて人格の完成にもなり、また失敗があつて事業の改革もできるのである。神仏は誠の愛であり、徳であり、力であるから己の心の中に誠の愛と徳と力を修め養えば、神仏は己が心にあるわけである。

人格の完成 命 四八 一二 二九五

人格の完成とは善行を積み重ねることである。よい心を持ち、よい言葉を出し、よい行いをするのである。己を虚しうして徳をつみ、徳を流すことである。

人格を作る み 三四 一二 六三六

森羅万象ごとごとく人格を作る為の教科書と教えられて居ります。(十一月三日)

心眼 み 三四 一二 一七六

心で見ること、即ち感じ悟ることは心眼でありますから、心に塵や埃がつもって汚れて終えば、見ても聞いても、真実も迷いの種となり、正しいことも悪く考えられます。

心を磨くということが如何に尊いことでありましょうか。(三月二六日)

心筋梗塞 ふ 四三 四 七

心筋——ということたまは「きしん」である。結論をいうと「奉仕(きしん)がたりない」のである。奉仕がたりないというのは、活かされている大恩に無自覚で、誠がたりないのである。「心筋」は「真謹」であるから、ことたまからいっても「真—誠」がたりないことがよくわかる。(中略) 心筋梗塞を病む人は総じて社会的地位の高い人に多い。経営者として、長として、新規なこと(心筋)に走ることもあろう。また金(きん)に心をなやますこともあろう。だからといって、社会的地位の高い人がすべて心筋梗塞にかかるというのではない。心の使い方が、金や新規なことから走るなかにおつても、大恩を感得して奉仕の道にはげんでおれば、こういう病気はないはずである。

神経 ふ 五六 五 五

神経という文字は、神の糸と書きます(注・経は織物のたていとであり、すじみちの意もある)その神経が絶えず動いています。自分で動かしているものもあるし、動いているものもある。心臓・肺・胃・腸・その他、人が動かしているのではない。天地自然の法則によつて動かされている神経なのです。

神経 誠 四六 六 一八九

神経とは神のすじみちと書き示されております。神経が弱る、神経が切れるのは、天地の恵みに感謝せず、大恩に報いる実行のたりないことを教えられているのであって、この点をよく認識してください。

しんこう ふ 五〇 五 一五

本会のしんこうは、親に交わる親交、進んで行く進行、信じ仰ぐ信仰、新たに興す新興、信じて行く信行の五つがあります。

しんこう 導 三四 三七

しんこうは親に交わると書いて親交であり、新しく興すことも新興、進み行なうことも進行、正しい事を信じて行いう事も信行、目を敬い先祖を尊んで敬してゆく、これも一つの信仰であります。

しんこう 命 四八 一二 二二八

「しんこう」という言葉のもつ五つの意味と五指及び内臓とのつながり、心の持ち方と病気についてその数例を示してみる。

親交 〓 親指 〓 胃

進行 〓 人差指 〓 腸

信仰 〓 中指 〓 肺

新興 〓 薬指 〓 心臓

信行 〓 小指 〓 肝臓

しんこう 命 四八 一二 二五一

大根でも抜かれて洗われて、切られて塩と一緒に桶につめ込まれ、もまれもまれて、重い石をのせられて、あのおいしい「おしんこう」となる。しんこうである。青年も多くの苦勞艱難にもまれて、立派な人になることができるのだ。

信仰 い 一八 一〇 三六

信仰は罪滅ぼしの為や、苦しき時の神頼みで、その時のみ神を祈るようではありますが、日々常に改心して行えば、これが一つの罪滅ぼしであり、苦しむ事はないのであります。苦しむ時よりも喜びの時こそ神も喜び人も喜び、これこそ日常の信仰であります。本当の信仰は苦しきときよりも喜びの時でなければなりません。苦しむ時の信仰は幼稚なものであって、時と共に進化向上して行く世の中に是と共に一致向上する喜びの精神こそ尊いので、その心こそ信仰（進行）なのであります。心の苦しみや改心できざる人は信仰の心なく喜びもなく不憫なひとであります。不憫な人には尊い信仰の信念はない筈であります。神様は実行と感謝以外に受け取る道筋はないのであります。信仰なき人は実行も感謝も少なく、時に依れば知らず知らず神様からも人様からも嫌われて行く場合があります。又信仰しながらも取り違い思い違いから信用を失うことがあります。いつも過ちなきよう、神も人も喜ぶことを実行しなければなりません。

信仰 三九 四 三八

信仰 四二 一一 一〇

進行も親交も新興も信行も、みなひとしく信仰です。信仰も教育も「迷い」のない人生を送る為にするのでありますが、ともすると、信仰に却って不良になっていく人もあります。方向を誤っているが故に「迷う」のでありますから、果たして、天理天則を破っていないかどうか、心静かにみなおさねばなりません。

信仰 四七 七 一〇

そこでもまず、捧誠会のみおしえを通し教義教典には――親指を教科書として親に交わるとかいて親交。人差指にたとえて教科書として進み行なう進行。中指は一番高いそれですから敬う信仰。この薬指は新しく興すとかいて新興。小指はこれは恩師から正しいことだと教えていただいて、それを信じて行なう信行。

信仰 四九 五 一五

信仰というのは、ただ宗教的な拝み祈祷をいうのではない。宗教的なことだけが信仰ではない。信仰というのは人生行路において軌道はずさないように進んでゆくのが信仰である。これは大事なことです。

信仰 五〇 一一 三

信仰というと迷信的にとる人もあります。中には「信仰は弱者の救いであり、敗者の逃げ場である」と思っている人がおります。しかし、食堂に行くのも、便所に行くのも、みな進行であります。進行は一歩前進することであつて、進み行うことでもあります。また 新しく興すことも新興であり、親しく交わることも親交であります。ですから、信仰は拝み、祈とうばかりでなく、日々の行いすなわち、進行であり、進み行うこと、一歩づつ前進して行くことがすなわち進行であり、信仰であります。

信仰 五二 八 五

信じて行うことも信行であるといつも申しております。木仏金仏を前に手を合わせることだけを信仰と思っておっては狭い。いのちの親からのおおみ心を信じて。行いに表してゆくことが大切なのであります。

信仰 五六 四

元来、信仰とは、ご神前で祝詞を奏上することや仏前でお経をあげることのみではありません。農夫がクワをもつのも、商人が商品を扱うのも官吏が筆を持つのも、各々が務むべき実行をよく信じ、まじめに感謝し、太陽の運行がつねに不変であるように

信仰 三三四 一一一 六一

不平不満なく努力することこそ信仰であります。(裏表紙)

修養は信頼と尊敬であり、信仰は神仏を否定せず、信じ敬うと同時に、魂を磨き太らせ成長させるように、努力し、協力をすることであります。(一月三十日)

信仰 敬 四一 一一二 三三三

信仰といえは神や仏を信じ仰ぐ意味の「信仰」をすべてのように思われていますが、「親交」「進行」「新興」「信行」そして「信仰」と五つあって、それが五本の指に教へ示されているのです。

進行 ふ 四〇 三 一五

進行は開発である。利己主義の信仰ではない。(中略) 進行していくので始めて新しいものを見出せるのである。進行は「いきおい」である。正しい心で、みおしえのまにまに進行する、前進する、その「いきおい」には誰も勝てない。

進行 信号 ふ 四六 五 五

命の親から十年ほど前に進行は行進こういうような言霊をいただいております。

信号 ふ 四三 二 七

信号に合わせて前進するから無事に通れる。信号に合わせて——というのは誠の道である。だから「信号」と言うことたまは「真合」である

深呼吸 命 四八 一一二 一一九

深呼吸とは神呼吸と考えるがよい。物でも言葉でも感謝の心であげたり、貰ったりせねばならぬ。

真刻 ふ 四四 二 二三

零時という一瞬が昨日と今日の中心であって、これを「真刻」という。

真刻 ふ 五五 三

天地自然の運行は、一瞬、一瞬、きれ目なき連続である。一瞬は一神であり、この一瞬が神の行動である。典範に、「悠久なる世界平和の顕現」とあるが、真刻の一瞬一瞬が悠久につづくのである。悠久であって永久ではない。悠久には一瞬のゆるみもない。悠久は厳粛な一瞬一瞬の連続である。(裏表紙)

真刻 太 四四 一一 三五

一瞬とは、過去と未来のその中心であります。午後十一時五十九分五十九秒と午前零時との間の、その中心の一瞬が中心であり、これを「真刻」と呼びます。

神国 い 一八 一〇 八

神国とは月日の源のくにであり、この月日の出ずる場所も日本が本となっているのであります。

神国 敬 四二 一一二 四一

「神国」とは「真国」であって、「真(誠)一つの国」である。

神国 振 四三 八 七

日本は神国とも云われております。これは嘘じゃない、神国は真国である。真はまことである。真捧の国である。どうか我慢でなく、捧誠精神は、真捧と云うのはまごころであります。まごころで成したる業は其の場は、どう思われようが、云われようが、必ず時が来れば立派な光となってお役に立つ事になります。

真刻限 ふ 四五 七 一七
真刻限とは、天地の理法であり、法則なのでありまして、人の呼吸と同一であります。万物の呼吸がとまれば、生物は絶命し、人類破滅であります。一瞬一瞬の時、真の言葉は呼吸である。

真刻限 刻(今日)限(明日)との中心が「真」(旬)である。

人災 ふ 四五 一〇 一八
そういう形に現われてくるころの天災、人災はこれは結果であります。

人災 誠 四八 一二 七一
お金の貸借、名誉の奪いあい、権力の争奪に人の世は迷いもがいて、つねに破壊をくりかえしております。これを「人災」という。

信じ方 ふ 五四 一
みおえを信じているといいながら、みおしえの真髓を信じていない人がある。どう信じているかというと、みおしえを自分の都合のよいように解釈して、それを信じている。これは我執のまにまにの信じ方であって、ことたまのまにまに、になっていない。

(裏表紙)

真実 ふ 三八 一〇 二二
一升瓶をほうり出して飲めというのは中途半端である。最後まで徹底的にやりぬくのが真実である。

真実 ふ 三九 五 二七
私は天稟によって「真実」(神術)という術をもっている。これは「法術」である。いざという時に、この術が生きているのである。全て、古今の教祖と仰がれた人は、この「法術」を持っていた。

真実 ふ 四〇 一二 五
何が良かったか悪かったか、その真実を一番よく知っているのは天であり地であります。手伝って上げよう、と思えば、黙ってやればよい。それが真実である、誠である。あつたりの人にとらわれて「きまり悪い」などと思っている間は、「我」であつて、神と合掌してはいない。それでは神の救いの手がとどかないのは当然である。

真実 ふ 四〇 一二 一七

眞実 ふ 五二 三

誠・眞実という。眞実とはシンが稔ることである。みかんも柿もシンから甘露がはいる。シンが腐れば全体が腐る。不平、不満、怒り、ねたみ、…これはシンに虫がついていると同様であつて、シンが虫食いになつておれば、みごとに稔らず、腐つてしまう。

(裏表紙)

眞実 み 三四 一二 三八二

眞実誠の心は無限であり、無条件でありますから、物を秤にかけて計り、物尺で計算するようなわけにはまいりません。数理に於いては計算出来るものであるならば、直ちに一分一厘の狂いもなく計算出来るのでありますが、神仏の慈愛、父母の眞実、誠の心は、数字で表すことはどんな人でもその人知人力では到底出来ないであります。(中略) 汲めども尽きぬ大海の水のように、地の底から湧き出る清水のように、計り切れず無限であります。(中略) 神仏の慈愛、父母の温情は、言葉や筆に表すことは出来ません。計りきれないものであります。(七月三日)

眞実の人 命 四八 一二 二八〇

眞実の道 ふ 四二 一一 六

眞実のみち―とは、理屈ぬきの無限絶対のみちであります。分毫も曲つておらず、広い無限のみちであると信じております。

信じて… 敬 四一 一二 一六七

世の指導者は果して「みおしえ」を信じていたでしょうか。信じていたのは、神風であり、僥倖であり、武器であり、軍艦であつたでしょう。「みおしえ」は何度いっても信じるどころか踏みにじつていました。指導者ばかりではありません。多くの国民も亦そうでした。「信じて行なえば…」の「信じて…」は「みおしえを信じて…」という事ですよ。

新車のことたまは「神謝」であり「慎謝」です。

新車 か 四四 四 五〇

―捧誠会の信者は何人ありますか？

信者 敬 四一 一二 八三

―ここには「信者」という「蛇」(じゃ)はおられません。―おかしなことをいいますね。―信者なんて、鬼や蛇のようなものはおられません。

—それで何というのですか？

—会員です。会員は「海縁」です。人は海に育ち海から陸上にあがってきました。海に縁があるのです。

何を信じるか？事実を信じるのである。その事実とは、真・善・美であり、火・水・風である。これは即ち自然である。

信じるとは尊び愛することであります。信じる心には大きな力が生れてまいります。

信じる 信じる

ふ 四〇 四 三
ふ 四〇 一二 四

「信じる」ということは「まこと」であります。

皆さんの一人一人が信じて行えば断じて勝つと云うことを深く心に刻んで下さい。信じて行なえば断じて勝つと云うことは皆さんも聞いておりましようが何を信ずるか、それは活かされている事を信ずるのです。活かされておればこそ生きてゆかれるのだ。神の子として活かされているんだと云うことを信ずれば大恩に無条件に報ゆる心になる又生きてゆこうと云う一つの信念、これを信ずる、信ずると云う心がまことでなければならぬ。まことの心で信ずると云うことがなければ何一つ出来る筈がない。

信じる 信じる

太 四四 一一 一六八

何を信ずるのかと言いますと、神の「誠」、みおしえの「誠」を信ずるのであります。

信じる 信じる

太 四四 一一 一六九

ですから何千年昔の人でも、何万里離れている人であっても信じられるのでしよう。信ずるといふ絶対の境地におりますと、たとえその人から殴られ蹴られ罵倒されても腹も立たず、にっこり笑って通りきれはらずです。また、その人の言うとおりにやっけて失敗に終わっても、うらみ心が起こってまいります。「信ずる」というのはこういう姿であります。

人事を尽して 人事を尽して

ふ 四七 一二 八

人事を尽して天命を待つなどというようなあきらめでは事は成らない。どこまでもやり抜く、人事を尽しというが尽きつてしまつてこれ以上尽すことはない、だから天命を待つのだという、理屈の上ではその通りかもしれないが、人事を尽しきるといふことはありません。どんなにやっても、まだ完全ではない。なにかやっていないことがあるのです。だからもうこれ以上やることはない、などと思つてしまつてはなら

ぬぞ、（中略）やることは全部やった、というようなことは思いあがりだぞ、と戒めも厳しくしました。

身心一如 四〇三 一五

神人一体 四三九 五

身と心は常に一つになっていなければならぬ。堪忍——しんぼう——捧誠。これは一つの意義であるが「かんにん」を何故に「神人」と書くのかと質問をうけたので、つぎのように答えた。

神と人とは一体、大宇宙は神であり、小宇宙は人である。人がいかなる境遇にのぞんでも誠をささげて歩むのは、神と一体になった姿である。出居清太郎は、いついかなる場合においても、神とともに行動してきた。——即ち、いのちの親にお仕えしてきたのである。神と人とは親と子であり、本来一心同体であるから、そうなれるはずである。

神人合一 三八一 四

神人合一 四八九 八

心身の健康なることよって神人合一なのであります。神の子であるから、神とともに行動するという精神を、くり返しくり返し、三度の食事をいただくと同じように、厳しく教え諭していることを忘れてはなりません。

神人合一 五四一〇 二

身心ともに一体になって、神慮に合一してゆけと諭されており、神人合一であると諭されておりまして、その境地に到達してゆくまでには容易ではありません。一代や二代では無理なのであります。一日一日とつみあげていって、子から孫、孫からヒコへと伝えてゆかなくてはなりません。それは、天借という目に見えない存在が伝えられてきているからなのであります。

神人合一 五五八 三

人の生命は、いのちの親の設計によつてこの世に生まれ給うたものであつて、霊魂は悠久、肉体は借りものなのであります。借り物の肉体を大切にし、霊魂をきよめ磨き、憎しみをもたずもたさず、日月の運行の如く、地球の回転の如く、無条件実行をすることが、悠久世界平和運動にもなり、神の子の自覚になるのであります。これを神人合一（しんじんごういつ）と諭されています。

神人合一 四八二 一〇四

素直な和やかな明るい美しい心こそ、神の心と合一する心である。

人生 四一九八

人生とは「神聖」である。(中略) この人生は大宇宙のあらゆる物体を一つ一つ生かして利用する為に授けられている。それほどの人生を活かすこともできず、万物を活用することもできない場合は既に人生は人生でなくなっている。

人生 敬四一二一三八

人生を分解すると、

人Ⅱ神

生Ⅱ聖

である。人は全て生き甲斐のある魂の持主であり、この魂は、宇宙の万物、あらゆる物体を一つ一つ活用していくために授けられている。魂を活かしも出来ず、物体を活かしてもできないならば人生は人生でなく、それは闇夜同様であり、そこには只、苦しみだけが残る。

「人生」はまた逆にいえば「聖人」である。聖人とは人格の完成した、神人合一、仏人合一の境にある人をいう。人生は、そういう境に達するように平素の努力をかさねていくところに人生の意義が存する。ただ動物的に生きるだけ、酔生夢死のような日々を生きるだけでは人生の意義は全く失なわれているのではないか。

誰の人生にも、いろいろの障害が現われてくるのが普通でありまして、人生行路は平坦な道ばかりである訳ではございません。

あの二人の肖像画をかけてある部屋のことを応接間といっているが、あの部屋は「真誓室」と呼びます。真を誓い、誠を捧げることがを誓い、みおしえ・教典・教義を語る場であって応接間のように客をもてなす場ではありません。

人生には身心(みこころ)の調和と協力が基礎であります。

物心ともに健全に恵まれていくことは平和の条件であり、人生の基本であります。世の人々の言語動作をみておきますと、生きるがための我執貧欲ばかりであって、活かされている大恩には無関心であります。

人生の出発 三三七一〇三

人生の出発は新郎新婦の門出を祝って頂くその日のみではありません。日々に新たな

人生の道

い 一八 一〇 三二

のが人生ですから、朝目覚め夕にやすむその一日を一代だと心得て、一日一日真剣につとめてゆかねばなりません。

最も大切な事は人生の道であり、その人生の道は親子の道、夫婦の道、兄弟の道などでありますが、その道が何かの出来事で切れてしまい、連絡が出来ざるような事がありません。時々は、忽ちまち身の禍いとなり、営業の妨げとなり、お互いの不徳となり苦しむことになるのであります。

神石 神石 神石
ふ 四八 一 一〇
ふ 四九 五 六

京都の建勲神社「大平和敬神」は、神石と呼びますが、このことは、同神社松原宮司のご指示に従ったものであります。

石は精神であり、清き神であり、霊魂であります。ですから神石であり和石は、単なる記念碑といったような、軽率なものではないのであります。要するに神石、和石にこめられた実践すべき目標は「悠久平和世界建設運動」なのであります。

神石 和石 御足跡碑
振 五〇 二 一〇

建立年月日順に記載すれば次のとおりであります。

一、昭和33年5月5日 静岡県、賤機山御足跡碑

二、昭和34年10月19日 因島、平和一神和石

三、昭和37年12月5日 箱根宮ノ下、箱根御足跡碑

四、昭和39年2月12日 伊東、御足跡碑

五、昭和39年7月8日 岐阜、平和一神和石

六、昭和40年9月11日 高野山、父母恩重碑和石

七、昭和42年7月23日 高遠、万景一観碑

八、昭和44年4月20日 松山、世界平和和石

九、昭和45年2月1日 伊豆、世界平和誓願和石

一〇、昭和45年11月10日 京都、大平和敬神神石

一一、昭和46年3月25日 高知、亜細亜開発和石

一二、昭和46年10月11日 静岡、万物尊愛和石

しんせつ

誠 四六 六 八五

一三、昭和48年9月13日 香川、世界一観和石
 一四、昭和49年9月22日 沖繩、人命尊愛神石

空気にしても太陽の光と熱にしても、無限の親切をうけておりますが気付いておりません。親や師や友人からも親切をうけていますが、これを「あたりまえ」のように思つて、そう感じない場合がある。親が子供を養育するのは義務だ、責任だ。それに親孝行を要求するのは間違っている。こういう若い人も一人や二人はあるかも知れませんが。親が子を思い、親が子を育てていく心情は筆舌につくせません。それで「しんせつ」の「しん」「親」（しん）を用いて教えてあります。

親切は誠の心で行わなければなりません。真は神であり、誠であり、誠は霊であり、霊は礼であり、信じることであり、信じればこそ、親切も有難く差し上げたり戴いたり出来るのであります。（八月二二日）

親切

命 四八 一二 一一八

親切を尽してきらわれるのは、誠がなくお世辞やサービス程度ではなからうか。利害関係からのものでなく、一歩進んで奉仕までゆかねばならぬ。

親切

命 四八 一二 一五二

真心と親切とは違う。親切とは人として、意を用い行うことであり、真心は神のみ教えを信じ行うことである。親切とは、人としてのご恩返しにすぎぬ。これは私の意を用いたものである。故に親切でなす程度のもものは不平不満が出る。

神前

ふ 三九 二 一五

「神前」というと、み鏡の前とか、神社仏閣の前だけのよう思っている人が多い。万物是誠—という本会教義にたてば、我々の日常生活は絶えず「神前」にある。至る所が神前である。便所の中におつても、事務所、電車、汽車の中におつても、その場その場が神前である。「神前」は「親善」であるからである。人と人、人と人が親善の交流をする。

神前

導 三四 一〇 一〇三

お宮の前ばかりが神前ではありません。お宮の前を神前といいますが、「しんぜん」と言いますのは、お互いに仲良く協力してやろうという時は親善であります。

神前

命 四八 一二 七八

私たちの日常生活は、絶えず神の前で動いているのだ。神前は神社の前だけをいうよ

親善交流

ふ 四七 四 二〇

うに思っているが、家庭においても、社会においても、行住坐臥みな神前である。（中略）多くの人の勤労のたまものと思えば、おのずから感謝の言葉も出るわけである。神前に額づく気持でおれば、事故などはないはずである。いついかなる処も神の前である。神の前に常に親善であることが人のつとめである。

親善交流

誠 四八 一二 一九四

親善交流とは誠を捧げて交流する。また、恩の送り合い。人の道としては恩の送り合いの交流。活かされている大恩においては無条件交流。天借をお返しすることは無条件交流。また無限の財産をちようだいするには無条件実行であります。

まず「健康」である。家庭が「融和」している。職域が「発展」する。物資に「恵ま」れる。この四つの要素は、われわれが生き活かされていくうえに、欠かすことのできない要素である。

真善美

訓 一九 一二 二〇

真は頭であり、善は胴であり、美は足であり、又顔を美とも教えられ、胴を善とも教えられ、足を真とも教えられますが、どちらにしましても、この三つは尊い教科書として教育上、民心教化すべき上に於いても最も肝要であります。

真善美

訓 一九 一二 二二

大宇宙の真理はこの三つの教え（真善美）が示されてあります。この教えに基いてこそ、美しい笑顔にもなり、美しい姿にもなり、是が健康になり、家庭円満になり、商売繁昌になり、物質豊かになるので、是に恵まれてこそ美人であり、徳の高き人なのであります。

心臓

ふ 三九 八 二〇

胃下垂は、イカスイ（カス）であって、粕が人と人との間にはさまっている。粕のようなものが、その人にとっては貴重のように思える。金品を人に貸し（貸すーカス）た。必ず返すというから同情して貸した。それが返してもらえない。この悶々とした気持が「胃下垂」である。更に、これが高血圧につながり、気持ち、感情、言葉がもめあつて、肝臓、心臓の病いになる。

心臓

命 四八 一二 二二〇

心臓を病む人は、すべて考え方がせまい。そのため、偽りをいわれ、ごま化されたり、

曲ったことをされれば、ギクッとするのである。心臓は血（身の血）であり、道である。誠の道をふみ行えば、血が逆流するなどということはない。思い違い、聞き違い、感じが悪い、取りちがいがいい、気がいいなど、みな道を間違えた結果である。（中略）心が迷って道もわからず、動揺してゆくべきところへもゆかず、音信もせず、出入もせず、呼吸器を患う人と同じような原因を重ねていると心臓病になり易い。この病気にならぬようにするには、大きな広い温い心で、相手の足らぬ点は足してあげるように心がけねばならぬ。

神体 　　み 三四 一二 一三七

身体 　　か 四四 四 六九

進退 　　ふ 四二 八 一一

人体の動き 　　ふ 三五 四 四

人体の無駄 　　み 三四 一二 一五三

人知人力 　　ふ 五四 一〇 二

神動 　　ふ 四五 四 九

震動 　　ふ 四〇 一 一八

勝つことを知って負けることを知らないのは、進むことを知って退くことを知らない人であります。

人体が動いてゆくのも、動かしてゆく目に見えない働きがあることを悟らなければなりません。

人体の取り扱いを無駄にすることは、親に対し、神に対し、不敬であり、不忠実であります。（三月十四日）

草一本といえども人知人力で成長しているわけではありません。目に見えなくとも、種の尊さ、根の尊さを忘れてはなりません。

「神動」ということたまは「童心」に通じる。童心には、地震の恐怖はさらさない。三つ子の心、童心は、なにもおそれない。火事も地震もこわくない。それは無心であるからである。

ある時、私がこの世を去らんとして死を決したとき、私の頭脳に「声なき声」がひびいてまいりました。これ即ち「しんどう」（震動）であります。「しんどう」は神の道であり、動きであり、動悸であり、―即ち「実行」なりと心に銘じ、万物の動きを学

震動 命 四七 七 一一

人徳 命 三四 一二 七三七

信念 命 四三 一二 一七

信念 命 三四 一二 二二八

信念 命 四八 一二 一〇六

新年 命 三八 一一 三〇

新年 命 四五 二 二

眞の会員 命 四八 一二 二六八

眞の幸福 命 四二 一二 二

眞の幸福 命 三四 一二 一六七

眞の幸福 命 三四 一〇 一三

眞の幸福 命 三四 一〇 一八六

び修めよとの天のみしらせであり、天の声であると真底から信じたのであります。つまり震動であります。動きであります。神の道も神道、この動きも震動。

徳を積むこと即ち善行の蓄積が人徳であります。(十二月二二日)

自分に弱みがある——信念がない——だから強さがでてこない。

何を為すにも信念がなければならぬと人は言いますが、信念とは只岩石のような、鉄棒のような心を言うものではありません。堅い心、揺るぎの無い心だけでは、自分の心で決めた信念でありますから、他人から嫌われ、仇をされ、失敗も多く、最後は不幸に陥る人が多い。信念とは、暖かいつきたての粘り強い餅のような心、どんな汚物も浄化する日月のような、風のような、自然に湧き出る湯のような心で、尊く、得難い心構えであります。(四月二十日)

信念とは堅い岩石のような心を用いではない。新しい、うるおいのある、己を虚しうした謙虚な愛情を用いのである。不をと除いた、平らかな、満ちた姿である。ちように新年の麗わしい心持のように。

新年は信念である。どういう信念かという、毎日を元旦のような気持でいこうという信念である。

「新年は「信念」なり」

百万人の会員をつくるよりも、百万人の仇に対しても尊重できるような眞の会員をつくりたい。

生きることと活かされることとが調和すれば眞の幸福であり平和なのであります。

真心の心に近づくように努力してこそ、眞の幸福となります。(三月二一日)

天の道、人の道は無限でありますから決して変らないのであります。変らない道、無限の道に基づいて行動すれば、これこそ眞の幸福であり仕合せなのであります。

眞の幸福というのは一生懸命苦労艱難して造り上げて行く。これを皆さん眞の幸福という。

真の幸福 命 四八 一二 一三八

真の幸福と、ただの幸福とは違う。真の幸福とは極楽である。極とは極めることであるが、なにごとにしても極めること、すなわち極意を身につける苦しみは、人みな経験がある。しかして極を会得して始めて楽があるのである。極とは太極の極と一致するものである。

真の幸福 命 四八 一二 二七八

実だけの幸福は人の肉眼で見ただけのもの、すなわちその場だけの幸福である。真の幸福は悠久の平和である。

真の幸せ ふ 四一 一〇 三

真の仕合わせは、「無」になって―即ち、己を虚しうして徳を積み及ぼすことにあるのであります。真の仕合わせは、そこにこそ実るたった一つのものであり、その他の所謂世にいう「幸せ」は全て虚飾であります。

真の幸せ 振 四三 八 六

一人の世の中でもなければ、一人の財産でもない、一人の名誉でもない、国に報ゆる、親に仕える、そして徳を積み及ぼして万人から尊敬愛されてこそ真の幸せではないでしょう。幸せにやらんとして不幸になるその事柄は実に淋しいと思う。

真の幸せ 振 四三 八 九

捧誠会の綱領第一に強く正しく…と示されているがこれは真心の事である。真心は強く正しく、真心は両方の為になり又此方も立つ。即ち両方立てて自分の身が立つと云うのが誠であります。捧誠会の趣旨は両方立てて自分の身が立つと云う事が真の幸せである。幸福です。

真の宗教 太 四四 一一 三五

あくまでも神人合一の場であります。誰人の介入も許さぬ神と人との合一、合掌――そこにこそ真の宗教があると信じます。

真の信仰生活 ふ 四二 八 一一

肥料が美しい姿をもっているわけではありません。よい匂いを持っているわけでもありません。(中略) 無上に尊いからです。これを、きたないからとか、嫌いだと思わずいわず、これなくしては己れの生命が保てないのだと、尊び感謝していくのが真の信仰生活であります。

真の信仰生活 訓 一八 八 三二

声は言葉のみではありません。肥料も「こえ」であります。肥料は美しいものではなく、例えば人ぶん、馬ぶん、その他汚物は皆「こえ」であります。かようなものを頼

りにせよと云うことはそれが尊いからであります。それを、きたないとか、嫌だとか云うような心を持たず、これぞ尊いものであって、これなくしては己の生命も保ちえず、この「こえ」肥料の為に生命があるのでと云うことに感謝するよう実行することが真の信仰生活なのであります。

心から尊敬する人なら、その人に殴られても蹴られても倒されても満足であって、少しでも腹がたったり、うらみごころがわくようでは尊敬しているとはいえませんが、難にたえてこそ始めて真の喜びを知るのである。

心配は文字通り心配ると教えられております。心の持ち方、使い方は、心配ることであり、目に見えないことでありますから、持ち方、使い方、その動きは微妙で、凡人では計り知れない尊さがあります。(五月二六日)

心配とは心を配ると書く、然し私心で心を配るのはいけない、心の無駄使いとなる。心配は善行につながる。「心配」は、心を配ると書く。いゝ方に心を配る心配は、毎日していかなければなりません。迷惑は、人をおどかしたり誘惑することで、人の心に迷心を持ちこんでいく。

心配することはよいが、相手の心を濁してはならぬ。徳を積みまねばならぬのに、不徳を積みような心配をしてはならぬ。つねに善なる方に進むように心は配るべきである。言動に十分注意し、徳をつむむためには責任を重んじてゆかねばならぬ。

艱難辛苦も神慮の試練であるという事を、理論的に考えまして、神仏や両親は恵みを与えて、お救いするのが理の当然のように、わが身勝手の解釈で過ぎた慈愛もありました。自分の希望も叶わず、全てが不利な境遇にめぐりあうと、神仏があるのかないのか、あるとしたならば、この時こそ我を救い導いて下さるのが当然であるというような、慢心した心をもっておった時もありました。そうしたことを深く思う時、慙愧にたえません。

神仏は無限の親であり、万物の成長には無限の慈愛を与えて下さるのであります。(十

真の尊敬

ふ 四四 九 三

真の喜び

命 四八 一二 二九〇

心配

み 三四 一二 三〇二

心配

訓 一九 六 四

心配

誠 四八 一二 一二四

心配

命 四八 一二 一五一

神仏

ふ 三七 一 三

神仏

み 三四 一二 七〇八

二月八日)

神仏は誠の愛であり、徳であり、力であるから己の心の中に誠の愛と徳と力を修め養えば、神仏は己が心にあるわけである。

神仏一体 命 四八 一一 四六

「神仏一体」である。これは「物心一如」にも通じ、又「身心一体」にも通じる。

神仏の恩恵 命 四八 一一 四六

神仏の恩恵とは無限の慈愛であり、無限の徳であり、力なのであります。(二月八日)

神仏の存在 命 四八 一一 四六

神仏の存在―これは無相、無限でありますから、単なる説明だけで納得できるものはありません。(中略) 神仏の世界のことは、先ず一つでも行い、実行していくこ

進歩 命 四八 一一 四六

とが、私たちの日常生活の急務で有ると思っております。

進歩 命 四八 一一 四六

どんな物事でも納得のゆく説明がなくてはわからないし、また実験してみなくては証明になりません。人生にでも体験をしなくては味わえない事が多い。分ろうと努力する事と、そんな事あるものかと頭から否定してしまう事とは天と地の差があります。

進歩 命 四八 一一 四六

頭から否定しては、進歩しない。これが、疑いの害であります。

進歩 命 四八 一一 四六

時がくれば陽も昇る、月も出る。雨も降れば風も吹く。その時がくるまで「しんぼう」

しんぼう 命 四八 一一 四六

することが、人生行路において、なによりも大事な心がけである。

しんぼう 命 四八 一一 四六

「しんぼう」は「真捧」であります。これは、「がまん」や「かんにん」ではありません。

しんぼう 命 四八 一一 四六

せん。もう一段も二段も高い位のものであります。真に「真捧」ができますと、知恵

しんぼう 命 四八 一一 四六

をさずけていただけるのであります。

しんぼう 命 四八 一一 四六

「しんぼう」という言葉が出ております。「しんぼう」は「がまん」ではありません。

しんぼう 命 四八 一一 四六

捧誠という文字は「真捧」であります。真(まこと)を捧げる。つらい、苦しい中も、

しんぼう 命 四八 一一 四六

まことを捧げていくことであります。

しんぼう 命 四八 一一 四六

神の子は、すこしくらいのことです不平不満を持つてはなりません。また、恨んだり、

しんぼう 命 四八 一一 四六

ねたんだりもなりません。そこを、誠ささげて前進する。これが「しんぼう」です。

しんぼう 命 四八 一一 四六

真捧です。誠をささげていくんですよ。みなさん、胸に「捧誠」という記章をつけて

しんぼう 命 四八 一一 四六

いるではありませんか。

しんぼう

命 四八 一二 二九一

「しんぼう」とは苦しくとも我慢する（辛抱）のでなく、真捧、すなわち誠を捧げる謂である。

真捧

ふ 四〇 一〇 一五

「真捧」は文字に示される通り、いかなる環境にあつても誠を捧げて通ることである。そこに喜びがあり、感謝がある。（中略）「真捧」の姿は、五本の指をひろげた手である。ジャンケンでも、石は風呂敷に負ける。（中略）広げた手は平和の姿である。我慢は人の道、真捧は神の道。

真捧

ふ 五一 六 四

真捧

敬 四〇 一二 一八

いいかえれば、私の今日までの歩みは「真捧」（しんぼう）の二字に尽きる。「真捧」は「捧誠」と同意義であることはいうまでもない。まことを捧げる——その真捧は、また「辛抱」に通じる。いかなるかん難辛苦に会つても、これを神慮の試練として受け取り、反省と感謝で乗り超えてきた。

辛抱

命 四八 一二 六九

我慢、辛抱、忍耐には無理がある。辛抱は文字を変えれば心棒である。心棒は重い歯車をまわすために無理がある。

神法

ふ 四四 八 二四

神法の一から十までは、世界平和を建設するために心得と実行と行いが教えさとされており。

神法

命 四八 一二 一二七

神の分霊として活かされる人々は、言語動作をとくに慎み、過ちのないようにせねばならぬ。神法、即ち自然の法則に違反するようなことを毎日行っている、いかに人々の幸福をと神が念じられてもかなわぬわけである。

神法

ふ 四四 八 二四

大恩に報ゆることは、万物を尊敬愛護することができなければならない。人の恩義を忘れずということは、万（よるず）の人の勤労によって生き活かされていることを悟ることでもあります。

あの人にはお世話にならない、この人にはお世話にならないと思うたり、いうたりする。しかし、あの人にもこの人にも、前の世ではお世話になっているし、また、たとえ自分が世話にならなくとも、祖先の人たちがお世話になっているはずであります。

神法

ふ 四四 八 二五

人の魂に落書きをされて、不平を思い怒りの言葉を出して、さかしまの心になってい

神法三 　　ふ 四四 八 二五

るかどうかを、これも毎日みなおしてゆかなければなりません。自分の肉体だ、自分の物だと「我」を通しているか、いないか。大切に取扱いをしなからお役に立つよう使っているか、どうかをみなおしてゆく必要がある。

神木 　　ふ 四四 一 二二

神木は親睦なり

神木 　　ふ 四八 四 六

世の人が神木というておりますが、年数を重ね、山に聳え、また地上に聳ゆるその木に、注連（しめ）を巻いて神木というておりますが、言霊によつての神木は男に授かつておる大事な生殖器であります。またそれにつながる大事な玉を睾丸というております。その玉はどなたも二つあるはずであります。目の玉と同じであります。目は魂であります。種をまいても芽が出なければなりません。また辛棒とも申しませう。捧誠という文字は真を捧げるですから、言霊によつて下から読めば真捧とも読めます。なすべきことをなす責任を持たねばならない

親睦 　　ふ 四四 二 二〇

親睦 　　振 四四 一 五

大極と調和して実行と行いをする事が、「親睦」なのでありまして、ここに世界の平和が実現するのであります。

親睦会の教訓 　　振 四四 三 五

- 一 本部をはじめ全国会員は神の子の誇りを持つこと。
- 二 教義、教典をわが意を用いて、みだりに宣布普及しないこと。
- 三 みおしえと一心同体となり、言語動作をつつしむこと。
- 四 全国会員は、常に、実行と行いの出来ないことは約束しないこと。
- 五 本会は本部と支部との交流を常に綿密にすること。

親睦会の目的 　　振 四四 三 五

悠久なる平和世界の建設と実行と行いに取いかかることにあるので、今後みこころの建て直し、建設の新しい方向への話し合いはこの親睦会の教訓に基いて行なわらるべきであります。即ち大極と調和し実行と行いをする事が親睦なのであり、ここに平和世界が実現するのであります。

親睦の言霊 　　ふ 四四 二 二二

親睦は神と人との道筋を 　　学び修めて実行にあり
心眼を開いて見ればなにもかも 　　不平不満はさらになかりき

万物は天地の恩恵あればこそ 生きて活かさる尊かりける
信ずればあだなす人がありしとも 花咲き実るときもくるなり
親なればたとえ苦難のみちあれど 強く正しく進みゆかなん

人命とは人の魂であり靈魂なのであります。人体を亡ぼし失くしております事の結果が、心臓に戒めをうけるのであります。それ故に心臓を患う人は、うからやから諸人達と共に徳を積み徳を流して万事に協力して行かれるように心掛ける事が実行すべき事でありませぬ。

人命尊愛は、単に人の命が長らうことを祈るものではなく、また沖縄の散華した人々の供養のみのためでもありません。(中略) 人のいのちを尊愛するとは、人の与えられた役目を果たすことの尊愛であり、それへの協力であります。

この神石建立の教訓は、今までのような戦争で亡くなった人の忠霊塔などは、まったく違うのであります。

人命尊愛の神石が建立されましたが、この建立は、文化の時代の新兵器による戦争で、清い美しい正しい地球を濁し、破壊し、人命を奪い、皆殺しにするような大戦は、天則違反として許されぬ時代が来たことを示すものであります。

人命尊愛神石は、君が代で拝唱しておりますさざれ石、この石は志であり、清き神、精神であり、人の靈魂であり、いのちなのであります。

沖縄県護国神社の聖地に、天の声により、本会の趣旨を通じて人命尊愛の神石を建立いたしましたことは、人と人との話し合いでなく、神代からの約束であったことを信じます。

沖縄に人命尊愛の神石が建立されますことは、国家が協力してなすべきことであります。が、いのちの親のみ心を知らないために、わかったものから協力団結融和して実行したものであります。

このたびの行事は、天の啓示によって、仕組がはつきりとできていたようなもので、

人命 導 三四 一〇 八八

人命尊愛 五 四九 一〇 五

人命尊愛神石 五 四九 一〇 一三

人命尊愛神石 五 五〇 二 一三

人命尊愛神石 五 五〇 二 一三

人命尊愛神石建立 五 四九 一〇 一〇

人命尊愛神石建立の教 五 四九 一〇 一四

訓

人命尊愛神石建立の行 五 四九 一〇 八

事

一分一厘も違がないというお諭しであります。

信用

ふ 五一 三 七

信用であります。神の用であります。我が世ではなく、君が代であります。

信用

ふ 五一 一〇 三

一人一人の言動を通しての信用こそ、幸福の元であります。青少年は世界の人から信用される言動をしなくてはなりません。（中略）

一日を一代と思い、一は万物の始まりであることに思いを致して、家庭の円満に、職域の発展に、そして社会に奉仕を

して信用される人になれば天は、いざという時に必ず救ってくださいさるということは、

私自身何十年もの経験を語るものでもございます。（中略）信こそ誠であり、神で

あります。用は地球であり、地上の仕事に励むことであります。

信用

ふ 五一 一二 二一

言語動作によって、信用というものがあらわれる。もう一歩進めていうと、天地自然

の法則を学び修めていくと、神の子としての信用がうまれる。この信用は神用ですか

ら、天地自然の法則を学び修めていくと、立派に神のご用をつとめることができるよ

うになります。そのような人を昔から聖者といわれていますが、聖者とまでいわれな

くとも、人の道として万人から信用されるよう、また尊敬愛されるようにしていくと

ころに、万物の霊長としての人造りがあります。

信用

命 四八 一一 一七〇

信用ということは、誠の業であります。言葉も労力も喜ばれるように、感心されるよう、信頼されるよう、信用（神用）され

るよう使わねばならぬ。おたがいにみ教えにつながり、和を枯らさぬことが大切である。

汚れた心には神は宿れない。神来されないものである。もちろん人の信頼もない。

尊敬され、信頼され（神来）、愛される。神のみ心をわが心に迎えようとするには、わが心を美しく整理整頓し、浄らかな大き

な心でなければならぬ。美しい心で迎え、美しい心を差しあげ、美しい心で送る、こ

れが神来（しんらい）である。美しい気持とは「ああ有難い」「ああ嬉しい」という

私心を交えない真の心である。神をわがうちに迎え得る心こそ、万人に信頼される心

である。

信頼（神来）

命 四八 一二 一七三

信頼

振 四二 六 九

神来

命 四八 一二 二八〇

信用

命 四八 一一 一七〇

信用

命 四八 一一 一七〇

真楽（読書）

ふ 四一 一 一七

「真楽」は「気楽」と違って神の道である。飲んで食べて遊んで…は人の道であって、これは気楽である。「読書真楽」とは、誠を捧げて読むことである。といって、凝り固まって読めというのではない。真剣の中に楽あり、これはいいかえれば厳しさの中の光りでもある。「真楽」は厳しさの中に光を見出すことである。

森羅万象

み 三四 一二 四八

森羅万象悉く生あるものは、人が生きて行く為に必要であり、お役に立って居るのであります。（一月二四日）

真理

ふ 四五 七 一八

真理

捧 二四 八 三

真理は神であり、物の理は仏であります。人の心だけでなく、万物総ての真理は和合すべき物でありまして、それが和合出来ざるといふ事は神を信じ行いの足らざる所であります。

神慮に合一

ふ 三五 一〇 四

十分という言葉聞きますが、十分の時こそ神慮に合一したことでありまして、十字を描くキリストの十字架も、平和の象徴であります。心を修め、家を治め国家を治めてゆくことが十分できれば、神慮に叶うのでありますが、それができざるために宗教や教育があるのであります。

神慮に合一

ふ 四一 六 二

「神慮に合一」すると申しますが、いいかえると「大極に合一」することである。また大極に帰一することでもあります。

神慮に合一

ふ 四六 一 二九

神慮にピツタリと合一しておれば影はうつらない。例えば手の影が机に映っている。手を机から遠くはなすほど、影は大きくなる。うすくなる、影を消そうと思えば、ぴつたりと机に合わせればよい。人の心が神慮に合一しておれば、影は映らない。肉体のわずらいは消えてしまう。

神慮に合一

ふ 四六 六 三

神慮に合一

ふ 五四 八 四

神慮に合一することは、いいかえれば、「おおみ心」にもとづくことであります。親指には、ほかの四本の指の腹が合います。このように、いのちの親は設計されました。この設計は、団結・協力・融和することでありまして。親指にピツタリと腹が合うことは、神慮に合一する、神の心に近づく事でありまして。

神慮に合一

振 四三 一〇 二

神慮に合一するとは物心共に健全に恵まれてゆくことである。それが合掌であり、ま

つりごとであり、政治であり、生活であります。この調和、協和がなかったならば平和とは申されませぬ。

艱難辛苦も神慮の試練であるから喜んで迎えなさい——と教え諭されても、その時は反発して、理屈でかたづけようとするではありません。

天地の理は「生成発展」やむことのないのでありますから、そこには寸分のうそもありません。このように「種」を悟る、種を芽生えさせた天地自然の誠を知る——これが神慮を悟ることであり、悟れば——「ああそうか、こういう種もまいてあったのだ。よし刈りとうろう！」という素直な心になれるのであって、これが「神慮に合一」であります。

ス の 部

す 四一 四七

臍臓 四六 六二四九

臍臓病 四五 一一

「す」ということたまは、寿—酢—進む—すみやか—すこやか—と、澄みきった、そして速度のある、美しいことたまである。常日頃に魂の浄化が出来る人、すみきった人はこうしてす—つと救われる。

血がにごると害になります。これを「血害」といいます、肺臓の弱い人は、聞きながい、とりちがい、感ちがいをし勝ちでありまして、そのために血が害になってきます。血害になりますと肺臓が弱つてくるのであります。ですから思いちがい、とりちがい、感ちがいを早く改めるよう努力することが大切であると教えられているのであります。

よく「腹がすいた……」「おなかがすいた」という。臍臓を病み患うのは、心のすいた人である。心に栄養分のたくわえなく、心の貧乏人といつてよい。(中略)

臍臓の働きは汚物を浄化する。汚物は、いわば「ヘドロ」のようなものである。ヘドロをいっぱい持っていて、その浄化もせず、そこから毒ガスを吐く。人に用事を頼

スーッと 捧 二三 一二 三

むにしても、お金をわたさないで「酒かってこい……」と命令する。「お金ありません」というと「あとであげるよ……」という。これが種である。臍臓を病む種である。「臍臓」の「スイ」は「末」（すえ）に通じる。いまわるい種をまいておくから、末には病み患いによって、いきづまりをさとされる。みおしえに、いつまでも きずいきままで通るなら すえはおそろし病めてくるなりと、さとされている。すえーとは「すい」であり、臍臓である。

捧誠会の皆さんは常日頃スーッと、素直にということをお癖のように申して居りますが、スーッと、ということは数量であります、量も数であります。量がなければならぬ。数量ということはこの人生活に最も肝要なる生命の糧であります。皆さんの肉体を養う根本なる数量が如何に尊いかと云う事を捧誠会のみ教えはそこを教えて居ります。

好き ふ 四〇 五 二五

すぎる ふ 三九 二 二〇

「好きな」人の心を診察すると、心が隙き間だらけである。

「焦り」は「思いすぎ」であって、何の甲斐もない無駄苦労に終る場合が多い。食べ過ぎ、飲み過ぎ、乗りすぎ―いずれの場合でも、その後始末が大変である。

救い ふ 四一 五 九

「救い」とは身心（みこころ）ともの救済であって、これは神の道。「助け」とは物を以ての手伝いであって、これは人の道である。会員の中でも殆どは肉体（身）の救いを有難く思い、「おすくい頂きました」と感激しているが、魂の救いに気のついて居る者は稀である。

救い ふ 四六 五 二〇

救い み 三四 一二 一〇七

「救い」は無条件である。ここには人間の感情はない。「助け」は人の道である。神仏に救いを求めるには、誠実な行いをしなければなりません。それには、大恩（体温）に報い人の恩義を忘れず、終生の奉仕に励むより外にありません。（二月二日）

救う ふ 四一 一 一五

救う ふ 五〇 五 七

助けて頂くことも必要であるが、救って頂けることはさらに大事である。その為に「我」とれと教えられる。感涙にむせぶ心で母親にぬかづけよと教えられる。

人を救うのは、自分が踏み台になって、その上を人に渡って貰うのでなければできな

救う ふ 五四 七 五

救う み 三四 一二 二六五

救う み 三四 一二 二七五

救う み 三四 一二 四九二

救う 振 四一 一〇 四

救う 命 四八 一二 二八八

救う と 助ける ふ 五三 六 四

いのです。助けることと救うことには、天と地の差があることを知らなくてはなりません。(中略) 今さえ、その場さえよければよいというような考えでは、人を救うようなことは、絶対にできません。絶対という言葉を使って申し上げます。

人生には、いろいろな悩み苦しみがあります。(中略) いのちの親から救って頂けるように、常日頃の魂の練磨が大切なのです。いのちの親しか救って頂く事はできないのです。この事を忘れてはなりません。教祖は、お取次ぎをします。救うのは、いのちの親なのです。

迷っている人を救うということは実に困難であります。誤りなく人を導くには一生涯かかります。(五月七日)

努力の無い人に恵むことは、却って苦しみを与えるようなもので、人を救う意味にはなりません。(五月十二日)

苦しい時の神頼み、人頼みは許されません。神も人も、常日頃の積徳が無ければ、救おうとしてもどうすることも出来ません。(八月二六日)

徳と力と愛の持ち主でなければ人を救うことは困難であります。徳も力も愛も、その人夫々に備わる分量でありますが、授かっている徳と力と愛を他に及ぼして、努力をする人こそ、教え導き育てる尊い人なのであります。

(1) 貝も中味があれば物をすくうことができない。人もこれと同様に身をすててこそ人を救うことができるのである。

(2) 人を救うためには言いにくい、はなしもしなければならぬ。言いにくいというのはまだわが身がかわいいのである。

人は人知人力では救われぬ。人を救うのは天地自然の理法によつてしかないのである。人は情けや行為によつて助けたり助けられたりしておりますが、助けることと救うこととを混同してはなりません。紙一重の違いではありませんが実は天と地との差であります。

救つて頂く 　　ふ 四一 一 一四

救つて救わる 　　み 三四 一二 六五九

すぐに果たす 　　ふ 四三 一〇 九

救わる 　　ふ 三八 七 一三

救われる 　　ふ 五二 九 五

救われる 　　命 四八 一二 二〇〇

経（すじみち） 　　太 四四 一一 一三八

許してあげたい、救つてあげたいとおもつても、その人が慢心している間はとうしようもない。我執貪欲がある人には靈光がとどかないからである。

自己の家庭の生活さえも満足にできない今日の世の中に於いて、人のことなどどうしてできましようかと思う人が多い。なれども、天地の理法は、国の為、世の為に人類を救済することによつて我が方も、我が家庭も救われることを教えております。

（十一月十四日）

すぐに果たすから：神に通じる。（中略）
「さて、しばし」がないのが直通ではあるまいか。

「私はこうして捧誠会で救われました」という人がある。しかし、これは思い違いをしているようである。本当は、みおしえを信じ、その実行と総裁の徳の流れによつて救われたのであつて、捧誠会が救つたのではない。

いのちの親のみ心を通して、誠を捧げて無条件実行した人だけが、いのちの親によつて救われるのであります。ここのところを感違いして、捧誠会に入っていれば救われるというような宣伝がなされていた頃もありました。今現在といえども、このような盲目的、迷信的な人も少なくない。

不平不満があつたかどうか、我執にとらわれた事があつたかどうか、毎日毎日自分のことを思い返してみれば分る筈であります。

神人が合一すると無限の徳と力と愛が働いてくる。そして、徳と力と愛によつて救われる。物だけでは決して救われない。

「みおしえとは、幾千年の後までも光り輝く経（すじみち）である」と言つておりますように、この経（すじみち―天地自然の筋道）を説くのが説経であります。説経であつて説教ではありません。筋道を説くのでありますから字句の解説ではありません。また、その意味の説明でもありません。私はこれを味わつていきたいと思ひますので「味講」といたしました。

筋道 　　ふ 三 八 四 一 三

一本の指でも、骨があり肉があり皮があつても、筋がきれていると動かない。すじみちを切っている人は、如何に働いても無駄になる。灰になる。人間も家も灰になる。それが真理である。

頭痛 　　ふ 四 八 二 二 七

耳鳴りは雑音、頭痛はとりこし苦勞なのであります。

スツス サツサ 　　ふ 四 一 四 九

スツス、サツサ…と教えている。心に迷いあれば、スツスと長上の教えをうけ、それに従えばよい。そこに濁りが澄みきつていく理がある。

捨身 　　ふ 四 一 九 九

命を投げだして誠の業に励む。(中略) 命を投げ出して真剣につとめてこそ、生命が延びて生き生きした働きが出来る。人のために世のために命を投げ出して、その人の命がなくなるのではない。人を助けて我が身がたすかるのであつて、人の心を活かし、万物を活かしてこそ己の心が生きていくのである。

すなお 　　誠 四 六 六 一 〇 一

「すなお」といえば、進歩のない、いじけたよわいもののように思われがちであります。が、「すなお」は即ち「水」でありますから、これほど強いものはありません。この強さを養なつていかれるような心がけていただきたいのであります。

すなお 　　誠 四 六 六 一 九 四

「すなお」は「水」であつて、水というものは実に恐ろしい力を持っております。水は切つても切れず、叩いてもこわれぬその姿、その力——それが「すなお」であります。この「すなお」な心にならねば、目に見えざる靈魂を信じられません。

すなお 　　誠 四 六 六 二 三 五

大地の熱と力と愛とが、すべてを浄化する。水にしても、いわゆる「かなけ水」は砂を通して浄化するでしょう。昔、田舎の井戸水などは、こうして使つたものです。「砂を通す」ということは「心の砂を通す」ことであつて、これ即ち「すなお」であります。ところが心の砂を(すなお)通さないで「我」を通してあります。

すなお 　　誠 四 六 六 二 五 二

「すなお」とは、いつも申しますように、広く暖かく、根づよく、わだかまりのない心です。そういう心になっておりますと、是非善悪の判断がつく。知恵と徳により、また、いのちの親は陰になり日向になつて導いてくださるのであります。

素直 　　い 一 八 一 〇 一 一

人によると素直になれば損のように思い、又素直になれば人に軽蔑されるような趣が

素直 ふ三八 一一 二八

あるなどと思ひまして、表だけは、威張り高ぶり、力ありそうに見せている人もありますが、威張る人こそ気持ちの弱い人であつて、その人は気の毒な人であります。

自分は座敷の入口の廊下などに座つていて、後から来た人に、「どうぞ向うへ、どうぞ、どうぞ……」といつてゐる。(中略) この人は、ずい分「が」の強い人である。

人にすすめるくらいなら自分がすなおに前に出ればよい。入口に座つて人の出入り口の邪魔をしているのをすなおな、へり下つた姿でも思つてゐるのであるか。

素直 ふ三九 二 一四

素直 ふ四七 四 一六

濁つた水は砂を通すと清くなる。砂を通す—ということとは「素直」を通すことである。この素直の訓練、素直と申ししても、ただ雑音や迷心を聞き入れてそれを行へとは教えてない。正しいことを信じて、正しいことを宣布普及していかれるように訓練をしてゐるはずであります。

素直 ふ五二 四 五

素直とは、清い魂、浄められた心を言うのであつて、何んでもハイハイと言うことではありません。

素直 ふ五五 一二 二〇

心の感情は自分を中心にするからね。大極を中心にして物事を考えれば素直にいかれるんですよ。

素直 告二四 二 一三

水の力こそ弱きようでも全く考えもつかない力なのであります。特に素直な心、やさしい心を養うことが精神修養の根本であります。如何に濁つた泥水でも「砂を」通せば後に出る水は清水になつてまいります。

素直 導三四 一〇 二一

み教えには素直な心になれよと教えられております。素直こそ強い正しい広い大きな暖かい心なのであります。

素直 命四八 一二 七三

素直になることである。素直になれば知恵をいただくことができるのである。

素直 命四八 一二 二二四

自我の強い人は気が弱いのだ。自我で強く見せかけるのだ。素直な人は動揺転倒しない。バセドー氏病の徴候が現われてきましたら、「我」をすてて「すなお」な心を養つて

ください。すなおな心は強く正しい心、動揺転倒しない心であります。この心を養うよう努力してください。

素直な心 ぶ 四六 一〇 一八

素直な心というものは至誠天に通ずる、その厳しい無条件の心こそ、水であり素直である。

素直な心 み 三四 一二 三五八

素直な心とは神の心であり、誠であり、偽りの無い大きな広い暖かい包容力のある心で、例えて言うならば、つきたての暖かいねばり強い餅のようなものです。

(六月二二日)

素直な心 み 三四 一二 三六〇

人は素直な心を養えば、力強い正しい、愛情のこもった、うるおいのある言葉が発音となつて人に伝えられることとなります。(六月二三日)

素直な心 み 三四 一二 五八一

先ず活かされている大恩を自覚せねばなりません。同時に神の子であることを自覚して、終生の奉仕に努力する心がけこそが素直な心なのであります。(十月七日)

素直な心 み 三四 一二 五九七

素直な心こそ、強い、美しい、尊い満月のような輪(和)の精神であります。(十月十五日)

素直な心 訓 一九 六 二五

素直な心は真心であり、真心は神の御心であり、すめら皇国の尊い国に生まれた人として又神の子として素直なやさしい、美しい、清らかな心の持ち主でなければならず、このような人こそ如何なる人にも感謝され、尊敬されて生かされて参ります。

素直な心 誠 四六 六 一九四

人のお世話になつていて、そのお返しさえもできかねる私たちが、どうすれば靈魂に報いられるのでしょうか。やはり、靈魂を信ずるしか道がありません。目に見えぬものを信ずるには「すなお」な心になることあります。

素直な生活 振 四三 九 四

天地自然の法則は、皆様もご存知の通り四つの交流、これを環境に順応しておこなう。この環境に順応することが、一番素直な生活であつて、これによつて安心立命の境遇に達する事が出来るのであります。

スポーツ

スポーツは競技だが、スポーツ場は平和の郷である。

澄み

心が澄み切つて、家庭が住みよいようになれば隅から隅まで美しい国が建設されて子孫は益々繁栄する事であります。

すみません

「す」の言葉には「すみません」という詞もある。(中略) 「すみません」といえ

すみません ぶ 四一 四 八

「す」の言葉には「すみません」という詞もある。(中略) 「すみません」といえ

すみません 命 四八 一一 二四六

ば謝ることのように思い、だから、いえない。「すみません」とは感謝であり、反省であってあやまることではない。

すみませんと言えばすむのだ、スーという気持は良い気持だ、「すみません」というのは反省であって、悪い行いをしたから「すみません」というのではない。それには感謝の心が含まれているのである。荷物をもってもらい、手伝いをしてもらって「すみません」というのは感謝の心からである。

すめみおやのみまえ 命 四七 八 一四

車中において一人でよろしい、お風呂のなかでもよろしい、便所の中でもよろしい、いたるところがすめみ親のみ前であります。

スメラミクニ 命 四九 四 一四

スメラミクニとは太極であります。

すめらみくにのいしず えとこそつかえなん 命 四九 一〇 一三

すめらみくにの礎とこそつかえなん、という礎は、君が代で拝誦されているさざれ石であります。このさざれ石は人の命であり、石、意志で、志であり、靈魂であります。

すれあう 命 四八 一二 一六

無限の愛の灯であります。

来客の場合、謙遜したつもりで「マッチ箱のようなせまい、きたないところへよく来てくださいました」などと言葉を出して挨拶する。マッチは擦れ合えば火が出る。あやまれば火事ともなる。

セの部

誠意 命 三四 一二 三三三

知るのみ言うのみで、学びの道に誠意があっても、行う道に誠意がなければ花は咲いても実るところまで参りません。(六月四日)

誠歌 命 四八 一 七

四十八年をお迎えするにあたって一層明確にすることが大切であります。そこで、次のことを宣言します。捧誠会歌・支部歌・壮年部歌・青年部歌・少年部歌・世界平和行進曲・国造り奉寿歌および眞水歌をすべて誠歌と統一し呼称して、平和郷歌を世

界平和郷誠歌と呼ぶ。また、これらの歌を斉唱する場合には、「誠歌拝唱」という言葉を使う。

生活 生活 生活
ふ三七 三 五
人の生活というものは、文字通り生きて活かされることでありますから、正しく生きる努力をして、物心ともに恵まれてゆかねばなりません。

生活 生活
ふ四四 一〇 一一
生活とは文字通り生きて活かされることで、文字が教えているではないか。
生活は生きて活かされることだと教えさとされております。人の道は衣食住であつて、生きることであります。この生きることだけでですから争いが循環して、さらにそれが

天借となり、人の恩義も重つて、最後には我執貪欲となつて清きみ魂をにごし革命となり、大戦がはじまつてまいります。

生活 生活
ふ四九 二 六
生きて活かされていること―つまり、生活そのものが修養であります。(中略) 修養即生活なのであります

生活 生活
ふ五二 一 三
生活は、生きて活かされる。生きるとは人の道、活かされることは神の道であります。それゆえ、万霊万物尊愛であるとさとされます。

生活 生活
ふ五二 三 一
生きて活かされていくことこそ、文字通りの「生活」であります。生活の改善はまた開発は、万霊万物尊愛の趣旨を理解して、実行と行いをしなければ、平和は実現するものではありません。

生活 生活
み三四 一二 一二八
生活という文字は生きて活かされると教えられます。生きるのみに力を入れ、活かされていく尊さを自覚しないと、調和が出来ず、片輪の人生を送ることになります。

(三月二日)

生活 生活
み三四 一二 六六一
生きることにのみ努力するならば、その人は片輪同然であります。生活は生きて活かされるのであります。片輪では鎖になりません。人の生活は鎖のようなもので、輪(和)

と輪(和)がつながり合つて協力も融和も出来るのであります。(中略) 努力しながら行き詰る人は、輪(和)と輪(和)が繋がらず、利己主義で、生きる為に自我を通し、我執貪欲で、片輪の生活をしておりますことを反省し改めることが急務であり

生活

解 二八

一四

ます。(十一月十五日)
万物を愛し尊敬すると同時に徳を積み、徳を流し、己の感情的自我を取り去り己を虚うして行動するならば、何時も清く・明るい心で、正しい善なる生活が生まれてまいります。

生活

解 二八

一六

人の生活には衣食住が定まらなければ何事も行動がとれません。人の生活には限度がありません。足りないと思えば足らず、足りると思えば足りる。家ある人も無い人も、富ある人もない人も、同じく生かされて居ります。富なき人から、富ある人を見たり聞いたりする時は、羨うらやままず、尊敬と感謝の心を持たねば、誠心と云えないのであります。徳ない人から徳ある人を見たときも同様であります。但し富ある人、徳ある人を見たり聞いたりした時は、良いところを学び、全身全霊をこめて、全員こぞって誠捧げて努力する勇氣を持たねばなりません。

生活

訓 一九

六

人生の幸福は生活であり実行であり生きて生かされて行く事であります。

生活

導 三四

七一

さかしまの心即ち、妬み、恨み、嫉みの心が如何なる時代にも起こっております。この事が如何に恐ろしい結果を及ぼすか分りません。今までの歴史を省みましてもわかる事でもあります。現在も、未来もこの恐ろしい心は次から次へと交流して参ります。早く改めて、この恐ろしい心の動きを洗い浄める事が宗教であり、教育であり、人と人との協力であります。武器を手にして争わなくても、この恐ろしい事が日夜動いております。事は、人生生活の最も危険な事で、一日として安心は出来得ないのであります。修養は即生活であります。生活即修養であります。文字通り修め養う。修めることは人に喜びを与える、養うことは頂くこと、そうして上げたり貰ったりすることが修養であります。

生活

導 三四

一〇

三八

信仰即ち生活であります。生活が即信仰であります。そういう点に重点を置いたみ教

生活

命 四八

一二

二〇〇

生活の生は生きることであって人の道である。活は活かされることであって神の道で

ある。

生勝 物心ともに豊かに恵まれるためには四つの交流に勝ちぬく、これは生勝（生活）である。我執貪欲に勝って、まことの交流にはげむ——そこには戦争はない。

生勝（生活） 命 四八 一二 五三 心の動き、肉体の動き、物の動きがあやまつてくると、われわれの生活は滅亡する。

これらの動きをあやまらぬように修養することが即ち生活（生勝）である。

生活の根本 命 四一 三二 二 「生活」問題につきましては「それは死活の問題である…」という言葉もあります。

「死活」とは「死に勝つ」ことであります。人々は、生きることだけに夢中になり、活かされる大恩については全く無関心であります。そこに、生活の破綻が生じ、危機が生じます。そこで「死活問題だ…」といって騒ぐことになりませんが、「活かされている」ことに心の扉が開かれ感謝の念が湧き起こりますと、「死に勝つ」ことになるのであります。「生活」問題につきましては、「それは死活の問題である…」という言葉もあります。

清潔とは只自己の環境を又肉体を清潔に保つことばかりでなく、魂を磨くことも清潔である。清潔の「せい」は誠、誠意であり、「けつ」は決行、決意、強く正しい心である。又清潔は衛生、消毒、しょうとく、正しい徳、正しい徳を積み及ぼすことである。太極のひびきが「みおしえ」であり、過去に聖者が残された聖言もまた太極のひびきであると信じます。

清潔 振 四二 一〇 三

聖言 太 四四 一一 四 金銭に恵まれることだけが成功ではない。健康に恵まれ、清く正しい心の持主となることも亦、成功の一つである。

成功 命 三九 七 一六

成（誠・生）はまことであり、生きて活かされる尊さであります。功（孝）は功績であり、親孝行であります。（八月十七日）

成功 命 三四 一二 四七五

精巧ということは、更生ですよ。更生ということは開発だ。改造だ。そういう深い意味があります。

精巧 命 四七 一二 三三

味があります。

成功するには 命 三四 一二 四七五

成功しようと思えば、大恩を忘れず、人の恩義を自覚し、終生の奉仕に誠心誠意の実

成功のひけつ 敬 四一 一二 二一九

行をせねばなりません。(中略) 凡てを捧げて迷うことなく、疑うことなく、神に仕える誠実さをもって進まなければなりません。(八月十七日)

本当のことを信じて、本当のことをいうて、本当のことを行なえば、大勢の人から認められ信用されます。雑音を聞いて迷ったり、自分のはからいで悪く思ったり倒したりすると成功しませんよ。本当のことは誰にもできることです。誰にもできることをやらないから不幸になってくるのです。

成功の秘訣 命 四八 一二 八八

成功の秘訣などと、とりたてて考える必要はない。ただ、われわれは神の子であることを自覚し、人としての道を行い、誠心誠意大きな広い暖い心で本当のことを信じ、本当のことを行えばよいのである、不平不満を思わず、いわず、人が喜んでくださるように、信頼されるようにすればよいのである。

生産(誠産) 命 四八 一二 二七一

品物を甲から乙へと送ることは容易だが、作ることは難しい。捧誠会員となっても魂にみが入らねばならない。受け売りのはなしは荷物のやりとりである。はなしを消化し、身につけることは生産(誠産)である。

生死 命 四八 一二 三五四

人が産まれるのも死ぬのも、人知人力ではありません。(中略) それ故に人の生死につきましては、人の業で無く、肉眼には見え、人知では考えられぬ大自然の偉大な慈愛とその力であることを信じなければなりません。この偉大な慈愛と力の根源を仏とも称し、大自然の大極を神とも称します。神仏の御加護によって活かされております尊さを自覚せねばなりません。(六月二十日)

聖士 命 四八 一二 一七

生死の悟りを開いた人を「聖士」と呼ぶが、「生死」に通じているからである。

聖旨 命 四〇 四 三

「万物是誠」「大極を神とする」のは、天地自然の法則を信ずる聖旨であります。

聖詞 命 四二 二 一一

聖詞

一、神法を修め、国法を守り、皇室の彌栄を祈り、人命を尊ぶこと。

二、国の始を敬い、国を愛する心を失わず、常に謙虚な行いを示すこと。

三、大恩に報い人の恩義を忘れず、神の道と人の道を学び修めること。

四、生成発展の万物と調和し、理を悟り、徳を積み徳を及ぼすこと
 五、勤労の尊さを自覚し、融和を計り、協力互助の実を示すこと。

政治 政治は聖旨とお世辞の間である。

政治 政治は「祭り事」であり、政は「誠」で、また「清」であります。治は「事」であり、

行うことでもあります。すなわち、誠をささげて行うことが政治の基本であると思います。

政治 政治は誠のことなり

であり、言霊のまにまにみおしえを信じてゆく私たちの趣旨は、学んでいる天地自然の法則は政治は誠事なり、誠のことなり無条件であるということでもあります。

政治はまつり事であり、日常生活が文化的に恵まれていくように、国民が安心出来るようにすることでもあります。（一月十七日）

政治 政治は祭り事であり、思いやり、助け合い、話し合いであり、祭りの神輿を祭り上げることも、神を信じ敬うと同時に目上を尊び目下をいつくしみ、協力融和して生活の安定を続けられるようにという意味で、このようにすることが政治であり、祭り事でもあります。（十月一日）

政治は誠事でありますから、平和建設の協力となり、平和の基礎としての本部建設につながっていくのであります。

政治家は橋となれ

政治家は、国民のために、「いしづえ」となってこそ本当であるのに、実はその国民を足場にして権力と名誉とを争っている。政治家が自ら「橋」となって国民をしあわせな環境に渡していかねばならないのに国民を「橋」にして、自分が自分の都合のよいところへ渡っている。これでは真の祖国再建はむずかしい。

誠実

会も教えも立派であったところで、子供から「お母さんは修養しているのにちつとダメじゃない」と、そんな事を言われるのは母親の言語動作が誠実でないからであります。

聖者

人の道の善悪は、よく伝えられています。知らない人はいませんでしようが、これを行っている人は少ない。真に善悪を判じ、これを信じて行くと聖者と言われるが、そ

聖者 誠 四八 一一 一四一

ういう人はまことに少ないのであります。

ひとたび事にあたって、心がどう動くか。善か悪か。そこに人の悩みがある。その悩みによって悪を打破していく。また、悩みによって打破する。この悩みが、だんだんと大きくなる。いくら大きくなっても、それを打破していく。ここに人格完成への道があるのであって、これを突破しきった人を「聖者」と申します。この場合、自分ひとりの悩みだけではなく、世の人々の悩みをわが悩みとし、多くの人々のために悩んでいく。悩んで悩んで、この世を終わっていく。人を救うために悩む。これが聖者の悩みであります。

聖者の道 ふ 四四 一一 九

まごころをもって人にほどこすのは容易なことではない。靈光をさすけ、徳を及ぼしていくのは、さらにきびしい。徳と力と愛と——これは目に見えない。この無限の財産を、夜の目も寝ずに、あぶら汗をながして人にさし上げる、これが聖者の道である。

聖者の道 敬 四一 一一 一三九

聖者の道は、いづれを拝見しても家族との絆はうすく、人の世の常の情のこまやかさは尽されていない。むしろ聖者その人の身辺には、肉親の悲劇さえ起っている。しかも、「神・仏の使者でありながら、何故、あのような悲しみに会うのか？」と疑問を持たれてもいない。わが身をさえ衆生のために捧げた聖者であった。しかし、神も仏も、この聖者には人よりも尚痛烈な人の世の悲しみを味わせ、きびしい道を通らされたのであった。それを超えていくのが聖者の道であったのだ。

清酒 振 四二 一一 一一

清酒は生死に通ずる。本会においては、生まれることは死すること、死は生をあらわし、又生まれることを示します。即ち生死は一つであることを示されています。

精神 ふ 四二 五 九

精神に有ることは肉体にあり、精神になきことは肉体にもありません。故に、肉体の患いは精神の患いであります。霊主従体であって、肉体は精神の器であって、生命そのものでないからであります。

精神 ふ 五〇 一一 七

精神は、清き神であり、私たちの心であります。その汚れ、その曇りは、言語動作にあらわれてまいりますことをよく悟つて、努力あらん事を期待しております。

精神 五三 七

人の歴史には、勝敗があります。競走があります。その繰り返しですから、今は立派な衣服を着ておりましたが、前の世では何をしていた人かは分かりません。分からないことを示されて素直に受け取る心こそ清き神であります。

精神 五三 九

精神は文字通り清き神であります。清い心で通じ合えれば尊敬愛することは誰でもできるであります。

精神 一八 八

精神と云うのも、魂と云うのも、心と云うのも、良心と云うのも、一つのものであって、この良心は老いも若きも皆あるので、良心を発揮して和合すれば、これ最大の幸福者であり、何をしても失敗もなく、安心して生活が出来ることは事実であると思いません。

精神 一八 八

精神即ち清き神の道は一筋なのであります。例えばうまい、まずい、よい、悪いなどと云うようなことを一度に考えることが出来ないのが証拠であると思います。どれを先に考えるか、考えることは精神でありますから、二つのものを一つに考えることは、到底出来ないであります。何方も精神を二筋には出来ないであります。一筋にしか考えられない精神を、地上の形の道路と同じように、千筋万筋に考えるから迷うのであります。

精神 一八 八

精神には決して区別はないのであります。お互いの精神こそ絶対のものであり、人の力ではどうすることも出来ないであります。

精神 四〇 一一

精神は『清神』で清き神です。

精神 四八 一一

心に誓うことは神に誓うことである。精神は清き心であり、誓心である。心に誓ったことはかならず実行に現わさなければ徳は積めない。

誠心 四八 一一

誠心という心は、みな神から天与されたもので、その誠心が徳不徳によって、多いか少ないかというだけのものであるから、各人はその誠心を生かしてゆかねばならぬ。

(中略) この誠心という心は神聖であり、絶体の光明輝く精神、すなわち清き神である。精神という神が誠心であり、誠心が清き神である。(中略) 誠心の徳を積み、

誠心誠意の実行

ふ 四七 二 二〇

成人

ふ 四一 一二 七

成人

ふ 四九 二 一六

聖人

敬 四一 一二 一三八

聖人

ふ 五二 三 四

精神修養

訓 一九 一二 二四

誠心の糧を求め、そして、その徳をその糧を子孫や人に流し与えることが尊いのである。(中略) 誠心なれば悩みの心や迷いの心を持つ必要はない。尊い誠心で成した製品は、生々として長持ちするもので、製品でさえ生きて行くのであるから、ましてや、人の親となり特に子供の教育にあたらねばならぬ母親は、その誠心という尊い心の糧を子供に植えつけ、持たせてやらなければならぬ。(中略) 心の底から感謝感激の心が湧き出て、安心していかれる人こそ、誠心の人であり、誠心の持主である。かかる人になるまで、つとめてゆくことが私たちの念願である。

親の願いは、ただ子供の「せいじん」だけにかけられる。「せいじん」とは、金銭をちよちくするようになることをいうのではなく、「無限の信用」というその精神的な貯蓄をしてこそ「成人」の姿である。

成人になったということは、人の道からいいますと、万物の霊長としての資格がそなわったということです。また神の道からいいますと、神の子である資格がそなわったということです。成人は誠人でありまして、誠をささげて万霊万物尊愛の心がけをもつて精進されんことを期待致します。

聖人とは人格の完成した、神人合一、仏人合一の境にある人という。どんな迫害を受けても、その厳しさの中に、「汝の敵を愛せよ」という大きな気持ちになってこそ、聖人であります。多少でも、その方向に前進してゆけるように努力をしようではありませんか。

自分の心の中に迷いのある時は、人の姿や、動作が恥しく見ゆるものであります。又自分の心に疑いのある時は、人の姿や動作が物足りなく見ゆるものであります。そこで精神修養する事は、我が心、我が行い、と他の人の心、行い、を引較べてそれによって悟って行かれるよう努めなければなりません。かような人を堅実な、忠実な、経験のある、徳のある人と云うのであります。

つまり誠心誠意の実行を励むことであります。誠心誠意の実行というのは、なんら理

屈もなく理論もなく、疑いもなく、怒り、そねみ、しつともなく無条件という心でなければ実行ということにならない。

精神的の地図は徳のある指導者が地図のようなもので、その指導者に道を教えて頂くのであります。

精神と肉体は陰陽と同じようで、天地、父母、親子の如く切っても切れぬ、離すことの出来ない一体のものであります。天と地、父と母、親と子が離ればなれになるから精神の悩みとなり、肉体に故障が生ずるのであります。(十一月十日)

物があつての精神でなく、精神あつての物である。食事が先でなく働くことが先である。働くことは、精神が動いて、肉体が従うので、精神が狂い、迷い行づまれば肉体の動きも狂ってまいります。

精神の道 　　ふ 四一 一二 九

精神の患らい 　　ふ 四二 五 九

「精神」即ち、清き神の道は一ト筋である。精神そのもののわずらいは何時の世までも消えず、それからそれと利息が積みます。年月とともに大きくなりますから現れてくると大きな悩みとなります。

精神の患らい 　　み 三四 一二 四九七

精神の患いは、医師の努力、薬品の治療のみでは如何とも出来ません。心身の患いを取り除くには、神の道、人の道を学び修め、実行する以外にありません。(八月二十八日)

精神病者 　　訓 一八 八 四一

精神病者と云うことは、十人が十人精神病者のようなもので、常に疑う心、迷う心、怨む心、みだりに鼻高くいばる心、或は己の不徳も知らず、人の足らざる所を見て笑い、そしり、つきあいすべきにつきあひもせず、顔で笑つても精神と精神とは互い違いとなつて、不満を生じ精神的争闘のたえない心、かような心こそ原因となつて、最後は精神病者となりますが是は神が教え給うのであります。

精神病者の発生原因 　　い 一八 一〇 一四

精神病者の発生する因は心の持ち方が食違ひをして行くのであつて、それは血液の流れが濁つてしまいその血液の働きが逆戻りして行くのであります。それでありますから精神病者として神様から教訓を示されるご家庭はその日その日の出来事が何時もハンプでお互いの心持が調和せず理屈や反抗心をもつて、心と心の衝突であり、衝突す

ればする程血液が濁り智恵の働きが食違いになって、段々血の流れが狂ってくるために精神病者となるのであります。

生成発展 四二 四三

ぜいたく 四六 四九

いくら種をまいても肥がなければ、大恩がなければ生成発展はありません。「ぜいたく」とは、ただ美しく、きれいというばかりでなく「うぬぼれ」「慢心」である。

清太郎伝学 四四 四七

「清太郎伝学」とは、ただ私の伝記、敬霊気を学ぶことだけでなく、これは同時に「清太郎田楽」であります。

清太郎田楽 四四 四六

一 こんにやく——
心魂をこめる ま心をもって行動する。

二 いも——

立派な人と家を作り、人の家と交流する。

三 こんぶ——

己の欲するものを人に与え、終生相互に祝福しあう。

四 とうふ——

不平不満を思わず云わず、マメで平和を建設する。

聖地 四九 二四

ダルマ山は聖地です。聖地というところはなくてはならない。よい考えが閃く所だね。私利私欲の知恵でなく、人のため社会のために役立つにはこうしたらどうだろう、という暗示を受けられる所なんです。よって聖地なり、霊地なりといわれる。ダルマ山はそういう所だ。

聖地 四九 二五

ダルマ山では、人は暗示を受けるといいましたが、清い精神にはかならず教えて下さるものです。

聖地祭の趣旨 四二 四八

一 天地自然の法則に基づき万物を尊び愛護すること。
二 祖先の徳を畏み子孫の繁栄に努力すること。

三 常に生きて活かされてゆく大恩と恩義を忘れないこと。

四 まことの道を修めまことの業に協力すること。

五 万人徳を積み及ぼし平和建設に心掛けること。

精虫は忠精、これは「誠」です。精虫はまた精子であり、聖旨です。聖旨といえば、生死であり、生ませたもうのも、この世を終わらせたもうのもすべてこれ聖旨、神のみ心にもとづくことであります。

「精虫」は「忠誠」であり、忠誠は——「誠忠」であります。神に仕えるにも、親に仕えるにも忠実でなければなりません。これを「無条件」とつねに教えております。神を敬し、君を敬う、また目上に仕えて忠実——これ誠であり、誠の行いを軽んじてはなりません。

成長とは、背丈が伸びて大きくなり、金銭財産の貯蓄ができたりするのをいうのではありません。その子自身の財産が貯蓄され、無形の信用が大きくなることをいうのであって、親の望みはこの一つに尽きるのであります。

魂を太らせるのは、神の子であることを自覚して実行することであり、魂を成長させるのは努力であります。(十一月三十日)

心の成長。心が太って心が伸びていくこと。そして経済的にも、皆さんの家庭も職場も発展して、物心共に健全に恵まれるように常に念願しておるのでございます。

政党は正当であります。国民一人一人の清き一票によって議席をいただいたからには、清く明るい政治をしなければならぬと思えます。

生まれるのは死ぬことであり、死ぬことは生まれることであります。いただくことは、さしあげること、さしあげるとは、いただくことである。(中略) 物と金との交流、心と肉体との交流、心と心との交流。四つの交流は、たえず訓練しているのだからかっているでしょう。この四つが調和がとれていけるように訓練する。物の大小、寡多にとらわれず、つねに、天地自然の法則にもとづいていかねばなりません。

青年は若人だけではないほどに 真心なりと親はさとせり

精虫

ふ 四六 六 一一

精虫

誠 四六 六 二八

成長

ふ 四一 四 二

成長

み 三四 一二 六九一

成長

振 四三 一二 四

政党

ふ 四三 九 三

生と死

誠 四八 一二 一一二

青年

ふ 四六 九 一九

青年 四六 九 二二

「せいねん」、「せい」は誠であり、「ねん」は念ずる祈りであるということであり
ます。(中略) 神の道からいいますと、「誠念」、祈りであります。太極のひびき
によって「誓りの詞」として教え導いております。

青年 四八 七 五

青年は「誠念」であって、たとえ八十八の米寿を祝うような年令の人でも精神は「誠
念」であるべきであって、青年部綱領は、ただ青年部のものだけでないことを強調さ
れている。

青年 五六 七 二二

青年の青は、誠に通じますからね。誠の年ですから、青年は。

政府 四六 三 一五

政府は、いわゆる「おかみ」(お上)である。川上である。ここが汚濁すれば、国民
生活もまた混乱する。政府の汚濁もまた一つの「公害源」である。

生物 三四 一二 三七八

宇宙は無極から始まり、生物は勿論、森羅万象悉くが人類の平和とその生活に役立つ
為に存在し、活かされ成長しているのです。(七月一日)

姓名 四四 一 九

この姓名(生命)は命である。(中略) 生命はくめども尽きぬ宝である。
神様から拝借しているものでありますから、神様に利子を払わなければならないこと
になります。

生命 一八 一〇 二〇

生命は根であり肉体は枝葉である。

生命 三八 一一 二三

人はまた、これほどまじめに働いておつても何も求められない、折角、もともとす
ぐなくなつてしまふ…と、不平不満をこぼし、嘆くことがあります。たとえ裸一貫で
ありまして、生命が与えられているという事実は、金銭で替えがたい宝を持つてい
るに等しく、これほどの結構はありません。

生命 四七 九 一四

また一般の人は舞をする時に使いますが扇であります。風を呼び起しますから扇と
も申すのでしよう。その扇の要がはずれますと、骨はバラバラになつてしまいますよ
うに、人においても肝心かなめは生命であります。誠であります。

生命 四七 一二 一七

肉体は借りものとして一代限りであります。生命は無限であり、霊魂であり、不滅
であります。

生命 三 四 一 二 九 六

人の生命の尊さは汲めども尽きぬ宝であることを信じなければなりません。
(二月十六日)

生命 三 四 一 二 二 八 三

如何に物を蓄えても生命のかけ替えにはなりません。(五月十六日)

生命のあるもの 五 二 一 二 三

この身体は、内臓器官は、金で買うことはできません。人知で設計もできません。現代では科学も進み技術も発展してきましたが、生命のあるものは、植物にしても、動物にしても、作られない、産ませ給う存在、活かされている存在は、いかに科学が進んでも、人によって作られるものではない。

生命の糧 四 三 一 〇 二

宇宙の始まりは無極、無極から大極が生じ、大極から万物が発生した。無から有を生じた。有は大極である。大極はかみなりであり、徳の光である。徳の光は愛であり、徳と力と愛、これが生命の糧であり、この教えが本会の趣旨である。

生命の糧 四 三 一 〇 三

生命の糧は心を太らせて成長させることにある。肉体の糧は毎日頂いている食料である。みおしえを通じて、教義教典のお話しを頂くことは心の糧を頂くことである。それは心を動かしてゆく糧であり、心の動きは心の行いである。それが心の持ち方使用方の糧であり、即ち生命の糧である。肉体の糧によって生きる、生命の糧によって活かされるのである。

生命の財産 訓 一 八 八 六 三

光も金も智慧もこれ皆、人の生命に対する財産なのであって、これを求めんと欲すれば全知全能の、神の御心と同一となって、己のなすべき使命をなし遂げて行くべき事を忘れずに、辛抱の出来た人たちが光も智慧も求められるのであります。

生命を失う人 命 四 八 一 二 二 八 六

物を得ることに忙しく、心を養うことを忘れている。そして尊い生命を失う人が多い。生命を尊び、大切に切り扱う責任は、万の掟を守る責任よりも重大であります。

生命を尊ぶ責任 解 二 八 二 二 二

大掃除をすると、そこに屑が出る。捨て場に困るような屑や廃品がでる。(中略)ただ使えるものを撰りだす。これは物の整理である。人の世も、天災や人災によって整理される。捨てられるものにならず撰りだされる人になるよう、つね日ごろから徳を

整理 四 七 三 一 七

積み及ぼしていかなければならぬ。

整理整頓

命 四八 一一 二九三

物は置くべきところにおくということが家族全員で実行できれば、家庭内の整理整頓は満点で、掃除も早くすみ、いろいろの無駄が省け、生活が明るくなる。

世界

ふ 四六 六 二

世界は各自の心の中にあり、心は「いのちの親」の分けみ魂であって「いのち」であります。「いのち」と「肉体」とを混同してはなりません。

世界平和の建設

ふ 四四 八 二五

世界平和の建設は、恩のおくり合いから出発する。親善交流も同じことであります。

世界平和の建設

ふ 四六 七 六

世界の平和を建設するには、まず神の子であるということを見識しなかりやならん。悟らなかりやならない。そして活かされているということの尊さを悟る。活かされているんだと、神の子として生まれ給うた私であるということを見識しなかりやならない。

世界平和郷建設の真意

ふ 四七 三 四

霊山「富士」を仰ぐこの聖地に、全世界のあらゆる人々の霊をお祀りします。国のために戦地でなくなった忠霊だけではありません。世のため、人のためにつくして、この世をさりましたすべての霊をお祀りいたします。(中略) 全世界の人々が、ここに礼拝する——(中略) お釈迦様のごとくに、「怨親平等」ということがあります。

世界の万霊をお祀りする、万人がそこに礼拝する——(中略) これが天地自然の法則であり、(中略) ここに「聖地」なるゆえんと、世界平和郷の根本義を明らかにします。

せき

振 四三 一 六

昔から関所を越すには許可がなければならぬ。お札がいる即ち許可のお札がなければ越せない「せき」を越さねばならぬと云う事はきびしいのである。

積徳

ふ 四三 七 八

人の悩みを払ってあげる、人の借金を払ってあげる——これが徳である。

積徳

み 三四 一二 三八四

千里の道も一歩から進まねばならないと同様に、積徳も小さな目の前から善行を積み重ねることに心掛けねばなりません。(七月四日)

積徳

ふ 四一 一〇 三

真実誠の業が真の積徳であります。

積徳

ふ 四四 七 二二

万物を尊敬愛せよと、命の親は、子供たちに万物を愛せよと教えたとされる。そこに徳を積みおよぼすことができるのだ、そこに仕合わせがあるのだ、そこに心の迷いも肉体の患いも健全になってくるのだ。せまい心、いやしい気持、嫉妬心をおこすよう

な、怒りをもつような、不平をもつような心も清浄化して、強く正しく、どんなことをいわれようが誤解されようが、それを浄化しながら前進してゆく。よいことをいわれれば、調子にのって喜び、毒説をいただければ、それに反ばくをする。これが普通世の中の人の心である。

責任 振 四三 一 二
責任を重んぜよ、この責任という事はその人の人格であります。責任を失った時に、義務を捨てた時にその人の人格というものは零であります。どうぞ責任を重んじ、その責任に対してはまことを捧げて行なつて下さい。

責任 誠 四八 一二 一六二
ほんとうのことを信じ、ほんとうのことを教える責任があります。この責任を忘れてはならない。

責任 命 四八 一二 一六九
人と人との約束や物量だけに心を奪われ、それらに対してだけ責任をおく人が多い。生命を尊び大切に取り扱うべき責任は、よるずの掟を守る責任より重大である。国宝的の物品を取り扱う場合の責任も重要であるが、生命の取り扱いに関する責任は、さらに重大なのである。

責任 命 四八 一二 一七六
人と人との関係において、責任を果すことだけが責任の全部ではない。(中略) 神から与えられたり、拝借した心や身体を取り扱いを大切にすることが、責任の最たるものであることを忘れてはならないのである。

責任を果たす 振 四三 一 六
東京都内に来るにしても東海道の道があり、北陸の道があり、夫々各方面から通る可き道はちがつても、寄つて来る場所は東京都内である。そして寄つてくるには夫々目的がある。その目的を達成するという事が責任を果たすと云うことである。

せく ぶ 三九 三 五
「せく」と「くせ」がでると教えられます。せいしたり、ひがんだりしてはなりません。「せく」と知恵と力をうしない、「ひがむ」ときは徳を失います。

節季 ぶ 四二 二 三
「節季」の季は「氣」であり「心」であり、更にいえば「樹」であります。草木は花を咲かせ実を結び、私達の生活に役立っております。「節」(せつ)は、その時その場の環境に順応して、分に応じた行いをするようにとのことであります。

絶対

誠 四六 六 六八

絶対——とは最高の言葉でありまして、無条件であります。絶対信ずる——無条件信ずる。無条件には批判も弁解もないのであります。

切腹

ふ 五六 九 四

誰にも欠点がある。間違ひもする。疑いのガイ(害)もあり、憤慨のガイもある。そういうことに腹を立てるといふと、腹を断つ、つまり、切腹ということに言霊がつながるのであります。

節分

ふ 三九 二 二

二月は節分という行事があり、(中略)本会では、その趣旨にもとずき「福は実行、内は感謝、鬼は反省」と声をはりあげて叫び、先ず心を清め、日常生活を新たに堅実にしてゆくことを契っております。

節分

命 四八 一二 二四五

節分とは大寒が明け、春に向かう季節である。(中略)寝ていて、ぜいたくをして、人に迷惑をかけて福が得られるはずはない。一つ年をいただいた以上は実行して幸福にならねばならぬ。「福は実行、鬼は反省、内は感謝」と唱えるのである。

説法

ふ 四六 一 二八

宗教家が説法する。これを「法を説く」といふ。この説法にも、上手下手がある。あの説法はなかなか聞かす——あの説法は聞いておれない……などという。だから上手に法を説きたい気もちに走りがちになっているが「法を説く」だけが「徳」ではない。恩に報いていくことがすべて報徳であり「法を説く」である。大恩を忘却しておつて法を説いても「徳」にはならぬ。人の恩義をふみつぶしておいて説法がいかに上手でも徳にならない。報徳が根本である。

是と非

誠 四八 一二 一五二

善と悪との道がわかつて、是と非との道がわからない。善いことをしたのに、なぜ悪いことが現われたのだろう。善因は善果となるのが本当ではないか、こう思う。それは前世からのつながりのご恩返しである。

是非と善悪

み 三四 一二 八三

善悪の道は分かつて、是と非の判断のつかないこともあります。(二月九日)人の行いの是非善悪の判断は、その時にはつき難い。誰も、己は正しい、己は間違っていないと思つてやつている。それが判然とするのは後日のことである、天が裁く。

是非と善悪

ふ 四一 一〇 八

善と悪とは承知しておりますが、是と非は見わけ難いもので、それがために、今さえ

是非と善悪

ふ 四二 四 一三

是非と善悪

ふ 四二 一一 九

せまい

命 四八 一二 一一七

狭い心

ふ 四三 四 九

良ければと、精神的にも肉体的にも無理な活動をいたします。

お互いに善と悪とは承知しておりますが、是と非を悟るようになりたいと思います。

せまいところというが背は前ではない。感違いをしているわけであるから、かかる言葉を出していると、人とすれ合いを起したり、とり違いをしたりする。

私が浦和の幸楽でたおれたとき（昭・三六・一・二〇）家族に電話で通知したが、家には誰もいなかった。菊のは九州へ巡教中、茂は千葉の川鉄に勤務中、喜代子も所用で外出中であつた。結局、その急場にかけてる家族は誰もいなかった。しばらくして茂が駆けつけ、つづいて喜代子もきた。（中略）しかし、しばらくすると、それぞれに用があるといつて帰つていった。この現実をみて「先生の家庭はなんとつめた

いのであろう。大事な先生がたおれているというのに、その子たち夫婦が介抱もせず

にさつさと帰つてしまふ、なんということであらう……」と思つたにちがいない。雑音はここから生まれる。このような雑音を発する心は狭い心である。ただウワベだけ

を見て、許せない、冷淡だ、どこに教えがあるのだ……」と批判する。一切を許せず、包みきれないのだから、ただ狭いとしかしいようがない。

世話

ふ 三九 九 二〇

「世話」とは「世輪」とも「誠輪」とも書く。我々は人様にお世話になつたことを、こうして感謝感激するのだが、毎日、手や足や目や耳にお世話になつていながら、それを忘れている場合が多い。鼻にお世話になつていことがわかれば「おはなさん、おはなさん……」と、心からお礼をいえる。これが「まこと」に「輪」になつた（誠輪―せわ）心の姿である。

世話

ふ 三八 一〇 一四

人さまをお世話したことは忘れ、お世話になつたことは忘れるな……というのが母の訓戒で、そのような人になりたいと努力しているが、全部が全部そういうようにいきま

せん。

み教えを通じてさせていただく親切は世話である。世話とは一時的でない。誠和である。誠も和も絶対の真理である。世話とは終生の奉仕でなければならぬ。

世話とは一時的の手伝い程度のものではない。誠和でなければならぬ。終生の奉仕に誠心誠意の実行をすることをいう。

千は線、すじみちであり、道である、神の線、神の道であります。

この肉体には無数の「線」（腺）がある。この線に支障が出来たり切れたりすると、身体の自由がきかなくなる。金銭の「せん」も同じ「せん」であり、この線がきれると行詰りとなる。

善悪を理屈で判断して口論する人もありますが、善も悪になり、悪もまた善になってゆくことを知らず、わが意を用いて、正しい・正しくないと思っただけでは苦痛になり、悩み苦しみの教科書であります。自己の意を中心にせず、天地自然の法則からさとされるのが正しいのであります。

人生行路に善悪があることは、どなたもよく教えられているし、知っておりましょう。また人の道として、憲法を核としてあまたの法の体系が制定されております。善悪の裁きは、この法に基づいて行われるのでありまして、どんな権力を身につけた人であってもその権力によって善悪を決定することはできないのであります。社会の秩序はこれによって維持される。

そこに浅間神社があります、宣言神社と言霊でつけられている。つまり宣言をする。なにを宣言するのかということは誓いの言葉であります。誓うということ宣言するのであります。

善行を重ねるには人並み以上の苦勞を重ねなければなりません、その苦勞も我執貪欲では善行にならないこととはご承知の通りであります。

一つの善行によってさえも、真剣に行えば過去の罪障は解消する。しかし、実行もせ

世話 命 四八 一二 二〇八

世話と誠和 命 四八 一二 二八九

千 か 四四 四 五六

線 ふ 三九 七 一九

善悪 ふ 五一 一二 五

善悪の決定 ふ 五二 四 四

浅間神社（静岡） ふ 四六 一一 一八

善行 ふ 四二 二 二

善行 命 四八 一二 二三

ず罪障がかさなれば、ついには褥牢屋につながれ、肉体のさしおさえとなる。心すべきことである。

前進 前進 前進 前進 前進 前進 前進

ふ 四一 一 四 四四 七 一〇

右足が一步前に出れば左足は後ろに待っているではありませんか。一步一步の、しっかりとした前進であります。

前進 前進 前進 前進 前進 前進 前進

ふ 五一 二 三 五二 九 四 四八 一二 三七

進行する、行進する。——これは「孝心」である。(中略) 「前」は「善」であり、「禅」である。「進」は「真」である。真・善・美——というが、前進はその真と善とを併せているのである。

前進 前進 前進 前進 前進 前進 前進

ふ 五一 二 三 五二 九 四 四八 一二 三七

立てば時には転び、歩めば時には退くこともあります。なお前進、すなわち親善であり己を虚しうして徳を積み及ぼしてまいりましょう。

前進 前進 前進 前進 前進 前進 前進

ふ 五一 二 三 五二 九 四 四八 一二 三七

前進こそ自然の姿であります。

前進 前進 前進 前進 前進 前進 前進

ふ 五一 二 三 五二 九 四 四八 一二 三七

道を踏み行なっていくことを「進行」と申します。進行する。前進する。「前進」とは「善進」であります。仏教にも「禅」という言葉があり、哲学には、「真、善、美」という言葉があります。哲学にしろ、宗教にしろ、つづまるところは太極の真理であります。

全身 全身 全身 全身 全身 全身 全身

ふ 四一 六 六 四一 六 六 四一 六 六

全身(みこころ共に)は前進である。全身で前進せよと提唱している。頭で学び、心に修め、手と足を動かして前進する。これが本当の前進であり、仕合わせ(幸せ)である。

前進と後退 前進と後退 前進と後退 前進と後退 前進と後退 前進と後退 前進と後退

ふ 五四 三 四 五四 三 四 五四 三 四 五四 三 四

退歩する気持ちと前進する気持ちとは同じではありません。前進と後退とは、心の持ち方・使い方がまるで異なります。うしろに一步でもさがる心は淋しい心であります。前進する心は感謝の心であります。感謝の心も、淋しい心も、それぞれに言語動作に現われてまいります。

戦争 戦争 戦争 戦争 戦争 戦争 戦争

ふ 四八 一 六 四八 一 六 四八 一 六 四八 一 六

人の道は衣食住であって、生きることではありません。この生きることだけです。争いが循環して、さらにそれが天借となり、人の恩義も重って、最後には我執貪欲となつて清きみ魂をにごし革命となり、大戦がはじまってまいります。

戦争 ふ 五四 一二 三

いのちの親から、天地自然の法則によると「戦争は罪悪である」というお諭しをいただき、終始一貫、大戦に反対を続けておりました。

喘息 ふ 三九 二 一六

呼吸は吐く息と吸う息と五分と五分である。その平均を破っているのが「喘息」である。喘息は出す方が少なく入れる方が多く。それは出し惜しみ、骨惜しみ、負け惜しみを現わしている。喘息を病む人には、生一本ながん固な心の狭い人が多い。

善と悪 ふ 四〇 六 一七

「善」も「悪」に負ける場合がある。善だからとて必ずしも悪に勝つとは限らない。そこで、へこたれてはならぬ。

善と悪 ふ 四二 七 一〇

善と悪とは誰しも区別してはいますが、善あればこそ悪が生きてくるのであります。悪は肥であり、肥あればこそ作物が育ちます。故に、悪といえども粗末にせず、これを活かしていくように心がけねばなりません。

仙人 ふ 四二 六 二

仙人とは、すべてをお任せできる人、信頼できる人である。すべてをお任せできる人であるから「専任」といえる。

仙人 ふ 五三 一

仙人とは、すべてをお任せできる人、信頼できる人である。すべてを任せられる人であるから「専任」ともいえる。もつぱら任せられる人である「千人力」というのもこの謂であつて、千人の人がおまかせできる人である。だから聖者である。（裏表紙）

千人力 ふ 四二 六 二

前項 仙人 の項参照
宣言普及というと専ら教義を説くことのように考えられるが、言語動作をあやまると、

宣言普及 ふ 四一 一一 八

いくら立派なことをいっても効果はゼロになってしまう。人を導き育てるのは「真実」がその全てである。

宣言普及 ふ 四二 八 二

いかにして宣言普及すべきか？といえ、自らの行のうて人格を高めていくのが第一であります。

宣言普及 ふ 四五 三 八

宣言普及とはいつもゆうように教えみちびき育てることであり、宣言普及するということは、自分の言語動作を見ていただくことが宣言普及をするこ

宣言普及 ふ 四七 二 二二

となのであります。

宣布普及 五〇 一一 二二

池の中に石（意志）を落とすと、輪（和）が広がるよ。まず、しっかりやろう、強く正しく宣布普及してゆこうという意志をもって、やさしく暖かく交流してゆくことだね。この言葉を良く味わってほしい。意志は強く正しく、交流は暖かく優しくという言葉を噛みしめることですね。

宣布普及 五二 三三

天借を重ねておりますことを懺悔し、無条件実行と行いによって改め、みなおしながら前進してゆくという趣旨は、気づいた者から始めるのです。気づいて始めれば信用される。その信用によって、気づかないでいる人たちに、さらに気づいて頂く、それが真の宣布普及であります。このことをよく理解すれば、呼吸のように、吸ったら吐く、吐くことによって人に伝わってゆくのです。喜んで頂戴したら、喜んで差し上げます。これでこそ物も生きる。

宣布普及の目的と目標 四七 二七

一・思い違い、二・聞き違い、三・とり違い、四・感違い、五・間違い——この五つが誤解となり、疑いとなり、害の心になって迷い苦しみます。これを行きづまり、と論してあります。この悪循環を見直せ、研修せよ、と力説し、叫んできているのではないでしょう。いままで、くりかえし、くりかえし、あらゆる言語動作をして教え諭しておりますのに、この悪循環をくりかえしておりますから、その点に重点をおいて、悪循環をしないように、また、させないように、いのちの親に誓ってください。また、人々にも話しあって、お誓いしてください。

一六五〇年 五四 七五

万霊万物尊愛という所までゆくには、十年や二十年ではどういできません。いのちの親から諭された年限は一六五〇年であります。どんな苦勞も、過去の種はわからないから、今日の前に出てきた事だけを中心に話しております。

雑布

ふ 四〇 七 一六

雑巾（ぞうきん）は「蔵金」である。雑巾で廊下ふきするのは「蔵金」である。

相互の理解

ふ 四三 一二 一八

相互の理解につとめるといふのは相対である。相対は愛が根本である。

相互の理解

命 四八 一二 一〇七

相互の理解とは人と人のみならず、万物に親しみを持つことである。禽獣虫魚、一木

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

一草にも愛情を持つ心境こそ、一家が明朗和楽の根源である。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

相互の理解につとめよとは、日光、空気、水、人などすべてに對する心構えをいうのであつて、それらに對し愛と尊敬を捧げることである。森羅万象はいうまでもなく、

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

わが肉体にも日常感謝を忘れぬことである。もつたいないと感謝合掌の心をもつこと

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

である。この心があれば、いかなる時も笑つて働けるのである。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

相互の理解とは、人と人とのあいだのみでなく、あらゆるものを見聞きして、それに

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

心を合せることであつて、合掌の意味である。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

教義は総裁として相談するが、指導は教祖として授けるのである。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

私の一代で会員を大きくふやそうとも、大殿堂を建設しようとも考えておりません。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

（中略） みおしえを信じ、みおしえにより、ひたすら人格完成に邁進してくださる人

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

が何人かでも現れることが総裁出居清太郎の念願であり、目的であり、これが総裁の

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

心です。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

総裁のいうことは、命の親の言葉である。（中略） その総裁の言葉を疑つたり、或

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

いはその総裁の言葉に腹を立てたりするのは、命の親に反逆するのも同様である。疑

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

つていても、腹をたてていても、総裁はこれを何とも思わぬし、その為立腹するこ

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

ともない。しかし、それでは命の親は許さない。必ず、命の親のお叱りがある。その

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

場合、総裁におわびする必要はなく、命の親におわびしなければならぬ。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

「終始一貫」は私の信条である。終始、まことをもつてつらぬきたい。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

総裁は本会の趣旨を教え導く責任があります。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

総裁の足跡は本会の教義である。これを文字で示したのが綱領十ヶ条である。

相互の理解

命 四八 一二 一〇八

天地自然の法則によつて発生する全ての言動を学び修めてきたのが総裁の足跡であり、

総裁への用件 　　ふ三八　九　一六

敬霊気であります。

多くの会員の方々が、何でも先生に先生にといつて会いに来る。しかし、私に対する用件は、挨拶と報告と相談と御指導の四つに分けられ、そこには自ら軽重がある。

挨拶なら、わざわざ総裁室に来ることもない。食堂で充分に間に合う。(中略) 挨拶にはまた多くの言葉は無用である。報告は大事である。これは公務に関する事が多い。私も聞き違いのないように、十分聞かねばならない。相談は主として一身上の問題、或いは家庭の問題である。これは代理者が聞いて、後刻、私に伝えてくれれば殆ど片づく場合が多い。(中略) 御指導の場合は、天の啓示を受けねばならぬことであるから、代理では片ずかない。だから本人に会う。こう考えると、どうしても私がお世話ねばならないのは、報告と御指導である。しかし、この場合も、事務所を通じて、順序を立てて運ぶということが肝要である。

そうですか 　　導 三四　一〇　二二

そうですかという言葉を説明しますと、「それで」という事は大勢の人の総力を示し、「すか」という事は万人から好かれる、可愛がられる、尊敬される、そういう人は何を為してもすらすらと障害物を通り抜けられる徳があります。

そうですか 　　命 四八　一二　二六七

意に反することでも弁解せず「そうですか」と聞きおさめれば必ず実ってくる。総出で応援されることにつながる。

想念 　　ふ 五〇　三　四

一瞬の想念が山にも川にも草木にも通う。

足跡 　　ふ 四〇　一　二四

「足跡」は「足石」である。「石」は「意志」である。「志」とは誠を捧げてふみ行うことである。ここに要求されるものは、ただ一つ「勇気」である。

足跡 　　命 四八　一二　二五七

足跡とは、即誠記であり息誠気である。

足跡の教訓 　　振 五〇　二　一一

一、足跡の行事行う事柄は 　　み教通じ実行にあり

二、足跡の行事行う事柄は 　　徳を積んだり及ぼすにあり

三、足跡の行事行う事柄は 　　万の人と交流にあり

四、足跡の行事行う事柄は 　　各自の魂を磨くためなり

足跡をふむ

ふ 四〇 一 二六

五、足跡の行事行う事柄は 平和建設築くためなり
総裁の足跡を踏むことは「迷信」を打破することである。「神の子」の自覚に立つことである。

底力

ふ 四六 一 二八

人の目は地上の姿だけにとらわれる。たしかに地上には高低がある。美しいところも穢いところもある。この目でみるかぎり、たしかに不平等である。しかし大海の底を貫けば、そこには高低も清濁もない。「大海の底を貫く捧誠会」と叫ぶのは「悟れば平等である、不平不満をもってはならぬ」という意味にほかならぬ。

底力

み 三四 一二 四八七

これを「底力」という。これは「腕力」ではない。大海の底をつらぬく誠である。大海の底は平和であります。地下資源等は目に見えませんが、努力をして行けば目に見え、手にも握めます。底力、そこだという気合のかかる時は、心の底に汚れは無く無条件であります。(八月二三日)

底力

導 三四 一〇 二三

山の底海の底には高い低いがありません。一番低い処を底と申します、これ即ち低いやさしい美しい大きな心なのでありましてこれが誠の心と申します。

底力

命 四八 一二 四一

力は地からである。血(地)から力が出てくる。血の気が無くなると力(血から)は出ない。血液があれば力が出る。底力が出る。血のめぐりがよいと心から笑える。笑える心は尊い力のある心である。不慮の事件に出あった際も笑う心になれる人は底力のある人である。大地の心になるよう修養して底力を養わねばならぬ。

底力

命 四八 一二 一六五

低い心が無ければ、どんな人とも心を合せ行おうという合掌の姿は生れないし、力も授からない。低い心から生れる力こそ底力であり、確固不動の精神である。

底力

命 四八 一二 二七一

底力とは確固不動の精神をいう。

組織

ふ 四三 六 七

「組織」は「葬式」である。死ぬことは生まれることであり——即ち改造改革である。故に組織を活用する、活かすのは改造改革である。

祖先

ふ 四四 一七 九

祖先——元——を尊ぶという行いである。

ソ
の
部

ふ 五一 一 六

両親を遡ると、ついには万物を作り給うた神にまでいたる。

育てる 四五三 八

「みちびく」ためには共に行動してあげねばならぬ。「育てる」ためには、物心ともに与えていかねばならぬ。それも一十月や二ヶ月のことではない。長い年月を要する。このひの「しんぼう」がまことに尊い。

そつとしておく 四六六 一一

「そつとしておく」という言葉は「卒倒」です。卒倒した人は、いたずらに、さわれません。どうや、こうやと思わず、いわず、そのまま、そーとしておくでしょう、です。すからやはり、そつとしておくのがよろしい。

袖 四二一二 二六

そのとおり 命 四八一二 一五八

袖は四枚で四合せ、身頃は六枚で睦まじいことなど悟りました。

正しい言論であり、正しい行いであると信じている自分に対し、他の人から意見をされたり、あるいは馬鹿だ、足りないのだと思われたり、いわれたりしたとき「全くその通りであります」と思えたり、いえたりすることが、心を修め洗うことになるのである。そして、ますます美しく尊く清らかな心の持主となれるのである。馬鹿だ、たりにないのだと非難攻撃された時、腹を立て不足の心を持つ人こそ、まさしく馬鹿であり、たりないのである。(中略) 「その通り」という言葉こそ、弱いようでも実に美しい、清らかな尊い無限の力である。形に現れた力よりも、無限の力を信じて勤め励み、心を洗い浄め修めることが、修養の第一歩なのである。「その通りです」と思い、またいえる人は、無限の力が拝借できるのである。しかし、この無限の力は目に見えぬため、力が弱いように思っているが、無限の神徳を授かるのである。

その通り 四三三 六九

損 四一八 九

「損」は「尊」であって、損をするのは尊いことである。(中略) 損をするというのは、我が身の不徳の故に、今までおあづかりしていた物を先方にあづけたようなものであって、広い意味からいえば、「損、徳」はない。

損 訓 一八八 八

損と云う言葉の働きを知った時には、損は尊敬であり、粗末にしないことで、尊敬して奉ると云うことになります。損をして「奉る」とか損をして行くことを感謝せよと申されてもそれは出来ないかも知れませんが、損をしたのではなく己の誠の足りない

為又不徳の為に今迄あずかつて居りましたのを先方に又あずけるようなもので、決して損徳はないのであります。

尊愛 ふ 五六 一一 三 尊愛には、不平も不満もないのであります。

尊敬 い 一八 一〇 三三 尊敬すると云う事は最大の教育であり、尊敬なくしては何事も治まらず国家も乱れ、

一家も乱れ、これが地獄の生活であり亡びてしまう原因なのであります。

尊敬 ふ 四二 七 七 「そんなもの：」と思わずに尊敬していく、これが誠であります。

尊敬 ふ 四四 九 三 心から尊敬する人なら、その人に殴られても蹴られても倒されても満足であつて、少

しでも腹がたつたり、うらみごころがわくようでは尊敬しているとはいへません。

損は尊 ふ 四二 七 七 「損」という言葉は「尊敬」の尊であります故に、何ごとも何ものも、粗末にしない

で尊敬し奉ることあります。損をして「奉る」とか感謝せよといわれても、なかなか得心しかねますが、損をしたのではなく、不徳の故に今までお預かりしていたものを、先さまにおあずけしたのであつて、決して損でも得でもありません。

そんなもの ふ 四二 七 七 なにかにつけて、「そんなもの：」という觀念があれば損をすることになります。

そんなもの 訓 一八 八 八 例え悪人に対しても、腐敗した果物に対しても「そんなもの」と云うような心を持た

ぬようにしなければなりません。何かにつけて「そんなもの」と云う觀念があれば損をすることは、間違いないのであります。万事に於いて如何なる出来事が身にかかっても、又不利なことが出来ても、罪にかけられても、尊敬し奉るよう心がけることが大切であると思ひます。

夕の部

大 ふ 五〇 五 六

京都の建勲神社には、私が揮毫しました「大平和敬神」の五文字を刻んだ神石があります。この「大」という字を書いた時は、まず「人」を書いて、そこへ一と一本棒を

引いて「大」になりました。字は人が作ったものですから、まず人を書いたのであります。大は台であり、土台であり、土台がしっかりしていなければ、いかなる建物もしっかりはいたしません。また台は踏み台であります。人のふみ台になるのが「誠」であります。

大宇宙は神が産ませ給うた姿であります。大宇宙は太極であり、いのちの親であります。本会では、この太極を神とあがめ、崇拜しておりますが、太極は大宇宙の中心であります。

大宇宙は神の殿である。そこには回転があつて、静止ではありません。地球の回転は目には見えませんが、春夏秋冬の移ろいを見ますと、止つていてのではないことを知ります。

大宇宙の行動は交流であり、始めも終わりもなく、丸い円であり、尽きることはありません。時来れば太陽は東から昇り、時来れば西に沈みます。天地自然の法則によつて太陽は動いております。それを学び修めて、みおやの心にそうてゆけるように、みおしえがさとされているのであります。

大宇宙 三 四 七 一

大宇宙の真理 訓 一九 一二 二一

大宇宙は神の姿であり、生命の親であります。(八月十五日)
大宇宙の真理はこの三つの教え(真善美)が示されてあるのであります。この教えに基いてこそ、美しい笑顔にもなり、美しい姿にもなり、是が健康になり、家庭円満になり、商売繁昌になり、物質豊かになるので、是に恵まれてこそ美人であり、徳の高き人なのであります。

体温 三 四 一 一 三

体温がなくなると音がなくなるのであります。体温がなくなり音がなくなつては平和はありません。体温——大恩——を無視しているのが時局の姿であります。無視は無歯に通じるからであります。

体温 三 四 一 二 一〇七

人の肉体に於ける体温は、一年三百六十五日の日月の回転を教えて居ります。三十六度五分の体温は、人から戴いているのでなく、これこそ神の慈悲であります。

(二月二一日)

大恩 ふ 四六 五 二二
つきることのない空気があり水がある。火と水とのこの働きの中には大恩があつて、それを本会では徳と力と愛といつておりますが、徳と力と愛によつて万物が生成発展しております。

大恩 ふ 四九 二 七
人類を月へ送りこんだロケットの原料はなにか、といひますとすべて地球上の資源であり、エネルギーであります。このエネルギーを、活かされている大恩をわきまえず、ただ科学の発達だけを追求するだけではないことを悟らなければならぬのであります。

大恩 ふ 四九 一二 四
大恩は無限であります。悠久であります。期限はありません。

大恩 ふ 五〇 一 九
日本は日の本、東洋の中心である、東洋は太陽の出ずる東の方であり、洋は太陽の陽であり大恩は熱であり愛である。また平和の和である。日月である。日月は陰陽であり、夫婦なり、天地は父母であり、また父母の上には祖先、その大本は太極、その教科書は地球上においては万霊万物尊愛であることをさとされました。

大恩 ふ 五〇 八 一二
大恩に報いることが第一の出発、人の恩義に報いることが第二の教科書であつて、大恩は神の道で無限、是即ち大和であつて始めも終りもなく、出発も終点もありません。何よりも「大恩」によつて活かされている。体温がなければ亡骸となつてしまいます。大恩に報いるのは終生の奉仕であり、無条件奉仕でなくてはなりません。

大恩 ふ 五四 三 二
この世に火水風がなくなる時は、地上は砂漠となつてまいります。火水風、この大恩によつて活かされているのであります。大恩に報いるのは無条件実行であつて、厳しいのであります。なぜ厳しいのか。それは、人の考えとしてどうしても衣食住が先に立つからであります。

大恩 命 四八 一二 八〇
己の意を用いた愛情には不公平があるが、神仏の慈悲に不公平はない。人様に三百年六十五日、三十六度五分という平均のとれた熱をいただき活かされている。(中略)
体温をいただいている大恩を知らねばならぬ。感謝せねばならぬ。

大恩と人の恩義 五〇九三

科学万能時代と申しても、大恩と人の恩義というこの両道の教科書に変わりはありません。

大恩にむくい 五〇四一一

大恩に報い 三九一〇二〇

「大恩にむくいる…」ことは無条件奉仕であり、実行であります。どのような人でも全て「神の子」である。それを否定してはならない。人の目には、しようのないような人にも、真心を尽きる。

大恩に報い 四一一二一一

大恩にむくいるのは、人智で計り知れぬ御恩を頂いているから、それにお報いしようというのであって、これは無条件である。（中略）大恩に報いる業をしながら、人

にお礼をいつてもらおうと考えてみたり、ほめられるようと期待したりする人が多い。

これは根本的に間違っている。「おむくい」は「お返し」である。これにおつりをアテにするのは、おかしな話である。

大恩に報い 四一八九

先祖伝来、火、水、風の大調和の世界に活かされてきた。この大恩のお世話になって来たが故に、今日現在「私」というものの存在がある。こう考えると「大恩」に報い

るのは当然であり、神の子ならば、報いずにはおられないはずである。

大恩に報い 四二四一五

思いここに至りますと全てが感謝と感激であり、大恩に報い奉る実行に邁進して通るなら災難に会はずがありません。

大恩に報い 四六五二二

活かされているこのご恩に報いるには、やはりその終生の奉仕でなくては、無条件でなくてはなりません。理屈はそこにはないのであります。

大恩に報い 四八七六

どんなに孤独であっても、一人ぼっちであろうとも、命の親と一緒にあるというこの精神を養うことによつて、大恩に報いる心が湧いてくるのであります。

大恩に報い 五〇五二二

神法一に大恩に報いるとありますが、活かされている事も知らないで大恩に報いられません。日月は無条件、時間、空間も無条件、人と人とは交換条件であります。

大恩に報い 五三一〇

人と人とが神の子として信じ合つて、心からの団結協力融和によつてゆくことがなくてはなりません。神の子同志が真に仲よく生きてゆく姿をいのちの親はお喜びになる。

いわば親孝行であります。それが、いのちの親の大恩に報いることであります。

大恩に報い 振 四三 一 一一

神の子として活かされているんだと云うことを信ずれば大恩に無条件に報ゆる心になる又生きてゆこうと云う一つの信念、これを信ずる信ずると云う心がまことでなけりやならない。まことの心で信ずると云うことがなければ何一つ出来る筈がない。

大会 ふ 四五 五 一八

(壮年部大会に関し) : 大会は「大海」でありまして、生みだす、生みおろす、というこでなまやさしいものではありません。(中略) 大会は団結への基本訓練であります。(中略) まさかのときに、つねに団結してやれるだけの心がまえを訓練するための集まりであります。

退却 訓 一八 八 二八

退却の言霊の働きは、「退」は大であり大地であり、大変であります。魚にすれば鯛であり、大事の事は大事として取扱う、言霊につながるようになります。「却」はお客様であり。珍客に席を譲ると云うことや、客を取扱うのに尊敬することでもありますから、結局後へ引いて己の非を悟り客を奉ることが「退却」と云う言霊につながるのがあります。

退却 訓 一八 八 二八

「後に引く」と云うことであり、この真理は「人に席を譲る」と云う尊いことなのであります。

胎教 命 四八 一二 二五四

子供が胎内で成長するあいだは、両親とも、困るというような心を持ち、言葉に出し、不和のためにこらえるという心を持つてはならない。そのような心をもつと子供の成長は完全に組織されず、どこか弱いところができて、子供を苦しませることになる。

太極 ふ 四五 一一 一七

太極は私たちの命の親である。太極によって万物が生成発展しているんだその元を度外視したら、これは平和にはならない。

太極 ふ 四五 一一 一七

太極も肉眼では見えないが、この宇宙の中に霊がある、霊の中に声がある。宇宙は黙々として行動しております。日月の行動にしても黙々として行動しております。草木にいたるまで黙々と成長していることは事実であります。これは誰でもわかる。

太極 ふ 五〇 一 一九

日本は日の本、東洋の中心である、東洋は太陽の出ずる東の方であり、洋は太陽の陽であり大恩は熱であり愛である。また平和の和である。日月である。日月は陰陽であ

り、夫婦なり、天地は父母であり、また父母の上には祖先、その大本は太極、その教科書は地球上においては万霊万物尊愛であることをさとされました。

私たちの信じております太極（神）は、いのちの親であります。即ち、神と人とは、親と子でありますから、その親にすべてを捧げつくして親のみこころに添うていくようはげんでいるのであります。

太極は底知れず、幅もまた計られず、聖者もこの無限の宇宙を三千世界と教えておられます。

大極は神であり、命の親であり、万物が活かされている根源であることをさとされました。

万物が生成発展していくその根源は大極であります。すなわち、万物一切が大極の姿であります。

太極は大宇宙の中心であります。

大極は大宇宙を生まれ給うた元であります。故に、いのちの親とさとされております。神の子であることを自覚したというとき、親はなんであるのか。それは人ではない。

大極であります。大極は、一切を産み出したのであります。

目に見えない空気が、目に見える枝や葉を動かしているのです。天地自然の法則の真髄は、大極にあり、目に見えぬ大極を神として崇敬してゆくのが本会の趣旨なのであります。天地自然の法則を守り、無条件で行う。これこそ不断の課題であつて、容易なことではありません。辛い、苦しいといつて後戻りしていたのでは進歩はありません。前進はありません。

私たちは、両親によつてこの世に生を受けました。その両親にはまた両親があります。その一番の自家本元の両親は大極であります。この大極からの分けみ魂として、私たちは魂を頂いています。いのちを頂いています。また身体は拝借しています。

大極は神の姿であり、大宇宙であります。万物はそれによつて活かされております。

太極 誠 四六 六 六七

太極 太 四四 一一 四

大極 ふ 四四 二 一八

大極 ふ 四五 一 七

大極 ふ 四九 八 三

大極 ふ 五二 一 二

大極 ふ 五二 四 五

大極 ふ 五二 九 四

大極 ふ 五四 五 二

大極 み 三四 一二 一六二

(三月十九日)

大極 敬 四二 一一 九三
―宇宙をしてかくあらしめているもの、それを「大極」というのですね。それが神で
すか―「神として崇敬する」のです。中国の思想でも「大極」を神として崇敬してい
ますでしょうか。これを神として崇敬するのは本会だけでしよう。

大極の根元 大極の根元は火、水、風

太極の根本 大極の根本は作るのではなく、産みだすのであります。物や製品は人が作るもので、産
ませ給うたものではありません。

太極の存在 太極の存在は火・水・風である。徳と力と愛である。万物尊愛である。天地自然の法
則は火・水・風、ヒ・フ・ミ(一・二・三)この真理が神の心である。おおみ心であ
ります。

太極の響き 太極の響きが修養団捧誠会である。

太極のひびき 神の道と人の道の両道を学び修さめ、神の子の誇りをもち、万物の霊長としての責任
を重んじ、太極のひびきをおおみ心と悟り、聖者の教義教典を人の道として学び修め
人の道において幸せを作るとともに、神の道において幸せを生み出していくためであ
ります。

太極のひびき 声は「音」であり、「発音」であります。太極のひびきは、実に清らかな、すがすがし
い、正しい声であります。これは楽器の「音」とはちがいます。楽器でも、ピアノ、太
鼓、笛、みな音が違っているが、その「発音」は「音」(ね)という言葉になりす。

太極のひびき 人のいのちの尊さは、くめどもつきぬ宝なり―捧誠会誠歌の第一章にあります。こ
れは出居清太郎が作詞したではありません。また、考えたのではありません。また、
専門家に依頼して作ってもらったものでもありません。これは太極のひびきでありま
すよ。太極のひびきは、いのちの親のみこころであります。

太極のひびき 今まで、いのちの親のみ心を神の子に取り次ぎせよとの役目をいただき、文字や言葉
で力説してまいりました。太極のひびきが「みおしえ」であり、過去に聖者が残され

大極のひびき 五二七

た聖言もまた太極のひびきであると信じます。

大極のひびきを伝える教祖のことたまは、雲のような、空気のような、体温のようなものである。つかみどころがあるようでない。現実を指摘しつつ、その核心は遙かに高く遠いところにある。とても手がとどかない。そこで夢のようなものと思われて、かえりみられない。(裏表紙)

大極のひびき 五四六二

今の世相をみ親は嘆いております。み親にお仕え下さい。み親の心と一体になってください。これが神の子であり、万物の霊長である皆さんの誇りであります。(中略) 憎しみを持たず、持たさず、人種国籍が違えども、住んでいる国が違えども、大宇宙は一つの家であります。国も社会も職場も、いかなる場所におきましても、万物の霊長である皆さんは悠久世界の平和を待望して下さい。どうぞ、争いを慎んで下さい。金や名誉や権力で争いをしないで下さい。鳥畜類にも劣った行動は慎んで下さい。これは大極の響きであります。(中略) 神の子の誇りを持って下さい。万物の霊長の人格を高めて下さい。大戦は、いのちの親に不忠実であり、神の子である万物の霊長が、殺したり殺されたりすることは、罪悪であることを信じて下さい。これは私の言葉ではありません。大極の響きであります。いのちの親のみ心であります。

大極のひびき 敬四二一二九三

大極のひびきは「無声の声」です。万物をしてかくあらしめる根源のひびきですから、万物のいのちの糧です。これをお取り次ぎするもの、これ教祖です。

大極のひびき 振四三一〇二

宇宙の始まりは無極、無極から大極が生じ、大極から万物が発生した。無から有を生じた。有は大極である。大極はかみなりであり、徳の光である。徳の光は愛であり、徳と力と愛、これが生命の糧であり、この教えが本会の趣旨である。

大極の響き 五五一一三

大極の響きは、悠久でありまして天に輝く日月のごとくであります。日月は黙々として、地球上至る所を照らし、止まることなく運行しております。

体解(たいげ) 五四四一一一五

つかめないものを確認するということは容易ではない。実行して体験して、すなわち体解(たいげ)して始めて「つかめる」のである。

体験 五三 四 三

人の歯の痛みは分らないのです。自分の歯が痛んではじめて、人の痛みを分ることができるのであります。体験により分るのであります。知識だけでは不十分なのです。ですから、どんな優秀な成績で最高の大学を卒業し、社会的な地位も高く、名譽もあり、財産のある人でありましても、苦しい時には藁さえもつかむようなことになる場合があります。その人の気持ちも知識では分りません。教科書による勉強だけではわかりません。身を持って体験して初めて、血にも肉にもしみこむようにわかるのであります。

体験 五三 一〇 四

どんなに一生懸命に話を聞いていても、家に帰って何かの事に当たると忘れてしまう。聞いただけでは忘れるので、体験ということが必要なのであります。痛い思いをする、その痛さは本人にしか分かりません。人の痛さは、わが身におきないから分からない。講義だけでは不十分なのであります。

大黒様 四七 一〇 九

大黒さまはウチデノコズチをもって米俵の上に座っているその姿は、瑞穂の国Ⅱ日本のその国民は、団結・協力・融和して世界の平和を打ち出せという、いのちの親のおさとしなのであります。

大根 五〇 一二 五

人の排泄した汚物を畠の大根にかけて、大根はその汚物をかけられて、喜んで生成発展しております。人參もそうです。ところが、人は、心から注意して下さる有難い言葉をいただいても怒ってしまいます。「そういう余計な事を言っている暇があるんならご自分の頭の蠅でも追つたらよさそうなものだ」という悪態について、いささかの反省もしないし、感謝もしません。こんな気持を持つようでは、万物の靈長といながら、大根にも劣るといわなくてはなりません。

大根 命 四八 一二 二五一

大根でも抜かれて洗われて、切られて塩と一緒に桶につめ込まれ、もまれもまれて、重い石をのせられて、あのおいしい「おしんこう」となる。しんこうである。青年も多くの苦勞艱難にもまれて、立派な人になることができるのだ。

胎児 三六 三 二

宿って三ヶ月で男女の区別がつき、五ヶ月で健全な肉体の組織ができ、七ヶ月でこの

大事 ふ 四二 一〇 一〇

世に出ても完全に育つだけの健康体になる。そこで七五三の行事をする。大事なことは大事な心構え—即ち静かな心になって悟るべきであります。人生を夢のごとく無我夢中で通るようなことなく、一つでも功績をつみ、世のため人のためにならしていただけるように心をつくし身をつくしていかねばなりません。

大事 ふ 四六 五 二八

大事とは 無駄な苦勞を浄化して 言語動作をまもりゆくなり

大事 命 四八 一二 五〇

大事とはなにかからなまでに守ることである。大切とはなにかもなげ出して私心を忘れ働くことである。守るべき時と投げ出すべき時は、その日その時変化してくる。(中略)

妊娠十ヶ月の間においても大切な時は始めの三ヶ月であり、後の七ヶ月は大事な時である。(中略) 心の持ち方、使い方、手足の動かし方においてその進み方が天の法則通りつとめ行われぬため病身となり、心が迷い、大事な時に障害を来たし、大切な時に行詰るのである。行詰りを開拓するためには大切の実行をなさねばならぬ。もったいないもったいないとしまいこむことが、あなたが大事にしていることにはならぬ。上手に使うてこそ、はじめて大事にしているといえるのである。人の子も大事々々と外へも出さず育てるのが、真に大事にしていることではない。雨風にあて、力をつけるのが真に大事にしたことなのだ。実行しておれば金も、物も、人も授かる。(中略)

大事 命 四八 一二 九四

大事と大切の教訓 ふ 四六 五 二九

1 大事は守るためであり大切は前進である。

この理法を学びおさめて実践してゆくことは急務であります。

2 修養も生活も修め養うことであり、生きて活かされることなので、前進するのみ

大戦の起こる原因	ふ	三七	四	四
大地と水の心	命	四八	一二	二七五
大道	ふ	四四	六	七
大難も小難	い	一八	一〇	四〇

でもならず、まもるのみでもならない。

3 まもりながら前進することが修養であり、生活なのであります。

かずかずの命の親の心をさとし示せど知るよしもなし

病む人も病まれる人も慎しみて 協力互助ですすみゆかなん

言葉のみにかに上手にいうたとして 思い違いなんのかいなき

実行と行いすべきことがらを あやまりなきよう学びましませ

大切と大事なことをよくおさめ あやまちなきよう努力ましませ

大切は進行なりとおさめつつ まことの道を進みゆかなん

大切とはなにもかもなげ出して私心を忘れ働くことである。守るべき時と投げ出すべき時は、その日その時変化してくる。守るべき時に投げ出したり、投げ出すべき時に守ったりすることは取り違いとなるのである。家族においては朝が一番忙しく大切な時であり、昼と晩は大事な時である。一日の朝は一家一同総動員でなにもかも投げ出し、心を結び協力してなすべき時である。

大戦の起る原因は、人間の利己主義、自己満足、即ち我執貪欲の現れであります。交通事故は戦争に比較すれば、豆粒のように小さいことですが、この我執が大戦のもとであることを深く反省しなければなりません。

大地の心、水の心とは低い心である。感情的な愛でなく、誠の愛である。大地のような、水のような心で、いかなる汚物も素直に受け入れ浄化していく心である。

——どうだい教えた通りにやっているかね。(中略) どうだいという言葉、これは「土台」である。みおしえによって行なうこと、実行すること、これが平和建設の「土台」である。これをまた「組」(まないた)という。

「どうだい」というのは、また「大道」である。この大道は世界平和への大道である。苦勞も喜びも、この世のあらん限り現われてくることを知らねばなりません。それは必ず原因があり、結果として現われてくるのでありますから免れないのであります。

例え如何なる難儀苦勞が出て来ても、その原因と結果を悟り実行したその人のみが喜びとなり大難も小難と変化してくるのであります。この事を知れば難儀苦勞が来ても不平不満はないのであります。

太平洋——という言葉靈。太平は「天下太平」の太平であります。すなわち悠久なる世界平和という言葉靈につながっています。そして洋は、世であり、予（自分）であります。ですから太平洋の言靈は、そのまま「太平世」「太平の世界」——世界の平和ということであります。

地球上において太平洋は母であり、日本海は父、大西洋は子であります。夫婦は天地の法理であり、その夫婦によって子供がさずかり、子孫がつづいてくることは理の当然であります。

遠慮、気嫌して行なわざれば退歩である。（中略）退歩は逮捕である。前進もせず、じっとしていると、「停滞している」と考える人がいる。しかし、本当は停滞でなく退歩である事を知ってほしい。

タイヤ（大和）の中に存在するチューブに小さな穴があいてもパンクする。空気が抜ける。チューブの中に存在する空気が無くなった時に車は走れません。四つの車が健全に廻ってゆく、又エンジンにしてもあの中に流れる油が、肉体にたとえれば血管、その血管がつまればどうなるでしょう、これが切れば半身不随となる事は理の当然であります。（中略）肉体の器官は目に見えない、手にも取れないが、働いている事には間違いない。これに感謝せねばなりません。

ダイヤモンドは、山で、川で、五千年も磨かれております。（中略）地上の仕事に励む事であります。

太陽に対しては、万人が敬意を表しております。黙々として、巨大な熱と明るい光を宇宙に放っております。それによって、月もまた明るく照っております。太陽は母で女、月は男であります。

太平洋 太 四四 一一 一七五

太平洋・大西洋 ふ 四七 九 三

たいほ ふ 四〇 七 一六

タイヤ 振 四三 一〇 六

ダイヤモンド ふ 五一 一〇 五

太陽 ふ 五三 一 八

太陽 命 四八 一二 九九

対立 命 五〇 一二 六

対話の根本 命 四三 一二 一八

高い心 命 五〇 一〇 三七

高い心 命 四八 一二 一六四

高い心 命 四八 一二 二七六

貴き鳥 命 一八 一〇 一二

タカの言霊 命 四四 一 二七

太陽は万物にわけへだてをもっていない。あまねく光を万物に与えている。太陽のよ
うに広く暖かく、あまねく、美しい愛情ですべてに接するようにせねばならぬ。

作物に農薬をまき虫がつかないように、雑草が生えないようにしましたが、それが体
の内でもう変化していくか測りしれません。これらは皆、対立であり、対立した二つ
のいずれが優つても、それを倒す新たな対立を生みだしてゆこうという悪循環がくり
返されているばかりであります。

わからない人に教えるのは、ちょうどコップに溢れるほど水が入っていて、そこへ、
さらに水を注ぎこもうとするようなものだ。(中略) まず古い水をくみとってあげ
る(中略) 対話の根本は、この心である。

「高い心は落ちぶれる」と教えられるのはそのためです。高い心つまり、虚栄心の強
い人は、高い基準を求めますから、現在の生活に満足できず不平不満の言葉をだしま
しょうし、低い心の人は基準を低いところに求めますから、今の生活がおかげさまと
感謝ができるのです。

人の欠点が目につく間は、自分の心がまだまだ高いのである。地についていないので
ある。

高い心や慢心はよくない。捧げる生活、すなわち誠の生活でなければならぬ。親の
高い心は子供が良くできるのに試験に落ちたり、乗物から落されたりする。

鳥が鳥を生むのではなくして、神様の御力によって生まれ成長しているのであります。
それでありますから貴き鳥も、賤しき鳥も、使命があつて、それぞれの働きを神様が
させているのであります。人は神の子として成長していますので、鳥の業は人に出来
ませんが、實に鳥の働きは尊いものであつて鳥によって学び、鳥によって悟るべきこ
とが多くあるのであります。

タカ(鷹)は高い所から下を見下ろして、警戒する使命をもっている。人のよいとこ
ろも悪いところも高い所におれば目にもつく。耳にもはいつてくる。高いところにい

宝 命 四八 一二 八九

宝 命 四八 一二 一一

出し入れ ふ 五四 三 三

出し入れ み 三四 一二 六一六

出し入れ 誠 四八 一二 一一九

出し入れ 命 四八 一二 一一一

る人とは指導者である。指導者が人を指導する場合、うぬぼれ、慢心といった高い気持ちで導いていくと、人はすなおに動かない。常に、己を虚うして水のごとく太陽のごとく、清らかでなければならぬ。いかなる泥水も大地にしみこんでいけば清水になる如く、私に足りないのは「すなおな心」であると、常にわが心をいましめている。宝は他からである。温い熱(愛)、徳、力、無限の資源は地下にある。宝を得んと欲せば根すよい、優しい、温い心を持ち、信じ、和し、協力すればいただけるのである。「人の命の尊さはくめども尽きぬ宝なり」とうたわれているが、形あるものだけを宝としている人は多いが、魂や生命を宝として、毎日手入れをし、大切にする人は少い。魂の狂い、心の狂いは家を混乱させ、国をつぶすことにもなるのである。

さしあげて頂くのであります。呼吸は往復でありますから、吸って吐くのも、吐いて吸うのも五分五分であると思っている。貰ったら上げるというのも、上げたから貰ったというのも五分と五分と思っている。捧げるのが先であります。捧誠会は誠を捧げながら頂くのであります。ところがどうしても貰ったから上げるとなります。同じようですが天地自然の法則は、出して入れるが原則であります。

生きて活かされるということは、例えて言うならば人のほく息であつて、はくいき、ひくいきであります。出すことは生きることであり、入れることは活かされることでもあります。(中略) 出すことは生きることであり、入れることは神の道で活かされることを、人として学び修めなければなりません。(十月二五日)

あげるから、もらえる。あげもしないでこうしてもらいたい、ああしてもらいたい、というのは食欲という。あげてこそ、もらいたいと思わなくとも——たとえその人からもらわなくとも——太極から無限の徳を、愛を、力をいただく。これは、ものや金ではありません。万物が生成発展して活かされているのは、徳と力と愛です。この無限の徳をいただくことになるのであります。

出さねばいらぬといわれた場合、懐にはいらぬものを出すわけにはゆかぬという人が

他自共に ぶ 四〇 五 二六

他自共に ぶ 四〇 一一 一六

他自共に 敬 四二 一一 二四

ある。これは金や物だけに執着しているせまい考え方である。物を出さねばならぬと物にだけ執着している。重体で病床にあつても、笑顔で「苦労さまといえぬはずはない。」「自他共に：」とはよく口にされる言葉であるが私はこういう言葉を使わない。」「自他共に：」という場合は自己中心の考え方に立っている。本会の教えではこれを「我執」という。人を立てて我が身が立つのである。人を助けて我が身が助かるのである。」「自他共に：」は人の道であり、」「他自共に：」は神の道である。人を助けて始めて我が身の真の救いがあるのであつて、この天地の理からいえば、」「他自共に：」が本当の道である。

普通は「自他共に」である。自分がよくなれば、その喜びを人にもわけていこうと考へられている。自分が苦しみにあえていて人さまの幸福を祈るとか、人さまの幸福がまだおさまっていなかった昭和二十五年前後は、自分一人が生きていくのが精いっぱい、とても人のことにまで心が向かず、力も出なかった。そういう中でも、私はずばら「他自共に」と力説してやまなかった。君が代であれば、どこまでも、いつの世でも、他自共にでなければなるまい。

助け ぶ 四一 五 九

助け ぶ 四六 五 二〇

助け合い ぶ 四二 六 一一

助ける ぶ 四二 一一 三

「助け」とは物を以ての手伝いであつて、これは人の道である。」「助け」は無条件である。ここには人間の感情はない。」「助け」は人の道である。一枚の着物を考えてみても、一人でマユを作り糸にし織り上げるのではなく、多くの人々の勤労によって作られます。これ即ち「助け合い」であります。人に頼まれなくても、気がつけばするのが最高のわざであり、これをするのは最高の人であります。助ける。この文字には日に力を書く。日と力との合掌である。日々に新たに、もちつもたれつ、融和して誠捧げて努力することが、助けることになり、そこにまた恵まれる境地が開ける。

出すべきとき ぶ 四五 二 一一

「ガス」も「便」も出るときに出さなければ、あとで困ることになる。言葉も出すべ

出せば入る 命 四八 一一 二三七

きときに出さず、後で…と思っていると、出しおくれとなって生きない。出せば入る。これは一つの道であって、このつながりの道をあやまれば不自由することになります。また身の患いとなって病みふすことになります。或いは迷いにおちいつて難儀しなければなりません。

戦い 敬 四一 一二 一八三

戦いは正に深刻になりました。生きんがために、生きのびるために、世の中も心の中も家の中も、清く明るく美しくするために戦うのであります。

正しい い 一八 一〇 二六

正しいとか正しくないとか言うことは自分一人で定められるものではないのであります。神様から見ても又目上の人から見ても正しいのはよろしいが、自分勝手に決める正しいと思う道は一時正しいようであっても、後で間違っていることがあります。それだけに改心すべき事を見出さないのは、魂が濁っているため改心すべき事に気がつかないのであります。若し毎日改心すべき事を悟り実行した時には、世に犯罪もなく病気もなく安心して生活が出来るのであります。犯罪も病気も改心する教訓と宿題であります。

正しい 命 四八 一一 一六五

正しいということは丸い平和な日月のようなものであります。(十一月二三日)

正しい 命 四八 一一 一六五

正しいということは、一本調子のことではない。二本の指、二本の箸で物をはさむ時のような、持ちつ持たれつの姿が、尊く正しいのである。

正しい心 命 四八 一一 一六五

お互い同士が協力和合して、己を虚しうした心をもって実行することが正しいのであります。(九月八日)

正しい心 命 四八 一一 一六五

正しい心とは正直の心のように思いますが、正しいということは何事も話し合いの出来る平和を言い、和は霊であり、礼であり、和をもってなせば争いは起りません。(十月十五日)

正しいこと 命 四八 一一 二三七

悪事は千里を走るといふ。良いことは千里を走るとは聞いていない。しかし、正しいことは一時消えても、何代か後には、これは確実に現われてくる。ただし、良いことは現われるのが遅く、悪事は早く知れるのである。正しいことは、私たち一代でわか

正しく強く

誠 四六 六二〇一

らなくとも、かならず代が変ればわかってくる。そこで「真捧」とは綱領第一であります。強く……とは動揺転倒しないこと。正しくとは、広く暖かく円満な心（中略）「水の心」で、神靈に帰依する心、神慮に合一した心であります。

辰

ふ 五一 一四

辰は、竜という架空の動物になぞられたもので、竜は、智慧も力もあり、努力をする動物であると聞いております。

他人

訓 一八 八五五

母親の胎内が違うだけで、皆其の人達の衣食住に用いる材料は良否こそあれ同じであり、受ける光が違うわけでもなく、空気が違うわけでもありません。

狸

ふ 四〇 五二六

「たぬき」（狸）について、いろいろの考え方がだが、要は、「たぬき」とは「他抜き」で自己中心のことである。

種

ふ 三九 八一八

まいた種は必ず生える。実って種となって地上に落ちて、再び芽生える。自然は絶えずこの廻転を繰り返している。今、蒔いた種は、今生その芽生えを見なくても、来生みることが出来る場合もある。自分がその実を収めなくても、子や孫が収めてくれる場合もある。この縁（円）は無限に続いていることを悟れば、おさとしの意味もおのずから解ってくるであろう。

種

ふ 四五 一〇二八

世界の平和を築くためにお金を貯め、世界平和のためお役に立つようにと貯めるとよいのですが、病氣したら困るからと貯めると病氣して使わなければならなくなる。困った時に使うためにとって貯めると困ることが出てくる。これは自分で種を播いているのです。困った時にか、病氣したらとかいう心をみなおして、世界平和のためお役に立つようにという心になって貯えはして下さい。稲は外にまき実れば自分の家の倉に入る。よい種をたくさんまけば実ったらたくさん倉に入るが、その実るまでのしんぼうがなかなか出来ないのがつねであります。

種

ふ 四五 一一一七

その元なくして、種なくして実るはずがない。種の中に根もあり、幹もあり、枝もあり、花もあり実りもある。その種を人工によって作ることはできません。種そのもの

は、やはり太極の大恩によつて作られるものであります。

種 四六 二 一一

種は「陽」であつて、結果は「陰」である。種という原因から実という結果に至るのは天地自然の法則である。原因と結果——これが「陰陽」である。一つで一つである。

種 五〇 一〇 二

まいた種は必ず芽生えてまいります。植物の種の中には地中であつて腐つてしまつて、芽生えないものもありますが、因果の種は、たとえ腐つてもいつかまた同じ種が芽生えてくるのであります。ですから、必ず芽生えると申しても誤りではありません。

種 五〇 一〇 五

尊い種をまけば、必ず芽生え、幹ができ、枝ができ、葉が茂り、実はみのり、一粒の種はやがて何倍にもなつてくるのであります。

種 五一 二 三

前世のことは知らずといえども、善悪の種をまいたことは、現在に必ず実現してくることは事実であります。

種 五四 二 三

世界の識者はこの状況を憂い、人類の平和を熱望していることは事実であります。それには平和の種をまかねばなりません。戦いの種をまいては平和は生まれません。まいた種は、その通りに芽生え、花咲き実つてくることは理の当然であります。天地自然の法則であります。戦争の種をまいておいて、いかに世界平和を力説しても、戦争は芽生え拡大するに違いありません。

種 五四 七 四

他人の言動を見聞して教科書として学べ、と申してあります。他人の言動が自分にとって好ましくないと、その人の言動を批判します。言う人も、いわれる人も、直接ではないにしても、過去に種をまいている事は間違ひありません。

種 五四 八 三

他人の言動を見聞して自己反省をするよう諭してあるが、それでも、他人の言動に接するとその人を否定しがちであります。その人のみではない。人には必ず両親があり、その両親にもそれぞれ両親があるのです。いのちの親から、その人の言動の種がどこに有るかということまで諭されても、その人の天數（天の裁断による本来の点數）は人にはわからない。それですから、目に見える現在だけをもとにして判断し、批判するのであります。では、その種は何によつて諭されるのかと申しますと、みしらせに

よつてであります。

一人の人の一つの言語動作にも、種がある。

種は生命でありまして、人の努力が無ければ成長できません。(一月二六日)

種は「いのち」であり、魂であります。「いのちの糧」は、目には見えませんが存在

している種であつて、科学的にいえば「エネルギー」——また、ことばを換えていえば「精虫」であります。

毎日の生活に悩みのたねをまかず、喜びの種子をまけ。よい種子をまけばよいみのりがある。しかし、よい種子をまいても、人からほじくられることがある。まいてもまいても被害がある。よいことをしたからよい報いがあると安心してはいられぬ。ほじくる人があるから用心せねばならぬ。また手入れをせねばならぬ。反省をし、感謝をし実行することがすなわち手入れである。

種をまいても時期が来ないと芽も出ないし花も咲かない。また、時期がきても、種をまいていなければ、やはり芽生えもなく花も咲かない。人間の悩みも苦しみも、解決する時期がある。その時期に、解決の喜びを味わうためには、やはり、「種」がなければなるまい。「真捧しなさい」というのは、そこである。不平不満ばかりに明け暮れておつては、時期が来ても芽生えない。稔らない。

種をまかねば芽もでないし、実もならない。一たび種まけば、花咲き実るまで、人はただ黙々と丹精をこらすことが大切である。それをどうかすると、自分でいいふらす、宣伝する。それは種をほじくりかえしているのと同様である。(裏表紙)

よい種を蒔けばよくなることを知っているので種まきをする人は多い。ところが、私はいはこういふ種を蒔いたと、ペラペラと人に語る人がいる。本人は何の気なしに語っているのであるが、そのために折角蒔いた種が人にほじくられていることを知らない。

神仏に頼み、目上の人にお頼みする以上は、誠心誠意凡てを捧げ、己れの意を用いることなく、無条件でお頼みしなければならぬのであります。己れの意を用いての頼

種 五四 一〇 二

種 三四 一二 五二

種 四六 六 二八

種 命 四八 一二 一五二

種と時期 四〇 一一 一六

種まいて 五四 一二

種をまいても 四〇 一 二三

頼む 三四 一二 五二五

たま 訓 一九 一二 二

むことは偽りの頼み方であります。汚れた心をもち、我執と貪欲の卑しい心で頼んだ所で聞いて戴けないのは理の当然であります。(九月十日)
言葉も、大砲や銃の弾も、大和魂も、頭(あたま)も、如何に尊いか、この「たま」が破壊して無くならないように努力しなければなりません。

たまごの白味 ふ 四六 六一 一一

たまごの白味は「糊」です。「法」(ノリ)です。
魂は一つではない。一つの魂は百にも二百にもなる。今の世でお互いが親しくでき

るのは、その故である。

魂 ふ 四一 九 八

魚でも野菜でも新鮮なものは値もよく味もよい。(中略) 人が神から頂いておるこの魂を、いつも清新発らつとした魂にしておくと、自らその人の値打ちが上がつてくる。

(中略) 心が腐れば肉体も腐る。常に心を生き生きとした、清々しい状態にしておくためには、間断なく「進み行う」より外に道はない。じつと停滞するから腐る。

魂 ふ 四二 二 九

人各々の徳によつて二十年くらいで死ぬ人も八十年で死ぬ人もありますが、魂は無限であります。

人生は長いようであつて短いもの：と申しますが、それは肉体について言つた言葉であつて魂は永遠のものであります。

魂 ふ 四二 四 一一

私どもが夢を見るといふのも、魂がこの世に通いあつていからであつて、すでに肉体をお返しした方の夢でさえも見るのであります。

魂 ふ 五〇 三 四

私達の肉体は一朝にして成長するものではございません。また魂もそのとおり、一朝にして大胆になれるはずはありません。日に新たに訓練を重ね、こうして磨き伸し

魂 ふ 五〇 六 五

太らせ、人格の完成に邁進して行くのであります。

私たちのいのち、すなわち、魂は不滅であります。肉体はお返しすることがあつても、

魂 ふ 五〇 一二 七

魂は滅びることなく永遠であります。心の中の汚物を、毎日毎日お掃除して行きましよう。

魂 ふ 五二 五 四

神の子として、命の親から預かっている魂は、レンズであります。このレンズを磨い

ておけば、どんな小さな物でも見える。また、目には見えない、眼のレンズでは見えないものさえも魂のレンズには写るのであります。魂のレンズを磨くには、三百年も五百年もかかるのであります。この世に、聖者として出現してくる人の魂は、これだけの年月の間、磨かれているのであります。(中略) 縁という字に糸扁がついているように、糸のごとくつながっているものであります。このつながりは、悠久なものであって、命の親から頂いております魂なのであります。(中略) この魂のレンズを磨いてゆくには、試練が限りないのであります。(中略) 一人一人が、反省もしないで万人に迷惑をかけていながら、なお、うぬぼれているような心を解消してゆかなくてはならないのであります。こういう心構えをもたないうちは魂は浄められません。磨かれるはずもありません。

何でこうなんだろう、なぜあのようにならないんだろうという嘆きばかりで日を送っているようでは、魂は錆びついていると言わねばなりません。どのようなことが生じてしようと、不平不満なく迎える心構えを養ってこそ、みおしえを信じ修めることになるのであります。

一人一人の神の子に与えられております魂は無限の存在であります。現世だけではなく、過去から現在に至り、現在から未来に続いていくのであります。(中略) うちの親が示してくださる行動を見るのは、人であります。人の魂は、いのちの親が示される行動を見るレンズであります。レンズが曇っていたり、濁っておりますと物が正しく見えません。それと同じで、濁った魂、曇った魂では正しく、いのちの親のみ心を見せて頂くことはできない。なぜ出来ないかと申しますと、魂を濁し、曇らせるのは我執であり、食欲であり、感情でありますから、いのちの親のみ心を正しく見せて頂く前に、我が、欲が、感情が、自己中心に事柄をゆがめてしまうためであります。(中略) 夫婦は、生まれも家庭も教育も違う男女が一緒になるものです。お互いに我を張り合っている、けっして円満にはゆきません。俺が、私がと我を張っている

魂 五二八 三

家庭は平和にはなりません。親子も同じで、相互に理解し合わねばならない。魂のつながりは無限ですから、恩人の魂が子供に与えられているかも知れません。私たちが子だ、と思っても、それは借り物の身体のことであって、魂は誰が作ったものでもない。いのちの親の分けみたまであります。また、借り物の身体にしても、手足、頭、胴と部分品を持ちよって組み立てたものではなく、その発生には神秘的なところがたくさんあります。人は単独で生きているのではなく、社会的に生きているので、一人立ちではありません。その最小の単位は家庭であります。家庭を構成している人々は、皆、違った魂を与えられている。しかも、今は、生活とともにするようになっております。異なる魂の人が相寄って一家を構成していることにも、天地自然の法則の深い深い現われがあるのです。

人は、魂が与えられております。魂は悠久に与えられているのでありまして、それゆえに、つねに磨き浄めてゆかなければならないのであります。借り物の肉体は寿命がくればお返しをするのであります。しかし、魂は悠久でありますから、一人一人の肉体のようにお返ししてしまえば終るのではございません。

魂 五二九 三

私達の魂はどれだけ濁っているか私達には分りません。金や物とは交換できない、悠久に授けられている魂であります。人はこの世開びやく以来、魂を頂いておりますが、魂だけでは役に立たない。そこに肉体を拝借している意味がある。魂が動いて肉体が動くのである。肉体が動いてから、魂が動くのではありません。

魂 五三七 三

魂はいのちである。悠久である。いのちの親とともにあるからこそ悠久なのであります。人の命の尊さは汲めどもつきぬ宝なりと諭されているのは、この事に由来しております。何ものにもまさる尊い、悠久なる魂を頂いておりますが、その尊さに気づいていないようでは捧誠会員とは申せません。

魂 五三七 三

魂の清らかさは、心の動きを強く正しく導くものであります。心と身の動きが対立してはならないのであります。よく、心配という言葉聞きまます。心配とは、心を配る

魂

ふ 五四 四 五

と文字で論してあります。あっちこっち、こうしようかああしようか、と心が働き過ぎて、手も足もバラバラになったらどうなるでありませんか。

魂は悠久であり、身体は一代であります。悠久な魂こそを、磨き浄めなくてはなりませんのに、とかく人は衣食住が先になります。本当の事、すなわち、魂を浄めることが後回しになります。順序が混線しています。体が動いてから心が動くのではないのですよ。心が動いてから体が動くのです。その心の動きは、魂が浄められていれば、スーと環境に順応し、なにごころなく自然に動いてゆく。ここが一番大切なところですよ。

魂

ふ 五四 七 三

魂は悠久だという事など、簡単にはわかりません。あなたの三代前の先祖は、こういう天借を積んでいるから孫に出てきたのだ、と言つても、心から信じる人はおりません。信じる心は仏教でもキリスト教でも、無条件の心と諭されており、言葉は、空気なくしては伝わりません。熱がなければ出ません。言葉は魂であります。魂は何か、どこからであるのか、という事は分りません。わからないから、わからないという心が出るのであります。(中略) 私たちの魂も千六百五十年の間、魂が磨かれ、あるいは農民となり、あるいは漁夫となり、あるいは戦場に出たりしております。この一六五〇年の間、魂は清められながら回転しているのです。肉体は借り物です。から、男に生まれ女に生まれますが、これも人の力によるものではありません。

魂

ふ 五五 一 一

魂は大極、すなわち、いのちの親からの分けみたまとして頂いている事、その他は、身体も土地も家も何もかも一切借り物である事の認識も不十分であります。私のものだ、私の子だ、私の名義だということには違いないが、だからといって、私のものだという事はどういう事か、本当にわかっている人は少ない。(中略) 大極の響きに よりますと、魂を浄め磨くことが第一なのであります。これは、一代や二代ではできないでしょう。磨いても、浄めても、すぐに濁ってしまう、乱れてしまう、そこに、誠の精神誠を捧げる行いがあるんですよ。

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

肉体がありましても魂が無ければ何の役にも立ちません。肉体の患いは、魂を患うから、それによって肉体が不自由になるのであります。(一月二六日)

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

霊魂不滅でありまして、肉体は亡んで地に帰りますが、霊魂は種のようなものであり、肉体を動かすエネルギーのようなもので不滅であります。この霊魂も人知人力で作ることは出来ません。(八月十一日)

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

神から与えられた魂は月よりも花よりも星よりも美しいということを目覚めなければなりません。(十一月五日)

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

製品は新しく取り換えることが出来ますが、魂を作り直すことは出来ません。それ故に日夜魂を磨き養うことを忘れてはなりません。(十一月十八日)

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

各自の魂は永遠のものであって、日月星辰のように地球のあらん限り消えることなく無限であります。(十二月十日)

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

若い者は老人を愛し、老人は若い者を愛し、老いも若きも魂に於いては決して区別はないのであって、生神様から頂いた分け分けたまであることを悟らねばなりません。神からいただいた分け御魂を常に洗い清め、清浄な本来の姿に立ちかえり、常によい心で、よい言葉を出し、よい行いをするよう心掛けねばなりません。これ即ち奉仕であります。

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂が腐ってしまえば、もう再びこの世に生まれ代ることはありません。永遠の滅亡であります。しかし、この尊い魂を磨き太らせ伸していきますと、一つの魂が五人にも六人にも殖えてくる場合がありますことを申しておきます。

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂 魂

魂は「いのち」であります。また「心」であります。この心を浄めないで「こんな口惜しいこと一生わすれないぞ。この仇はかならずとつてやる。この恨み死んでも忘れぬ……」などといっておるようでは救われません。救ってあげられませんが、救っていただくことも、救ってあげることもできません。これは、もらうこともできず、あげることのできないのと同じです。

魂 誠 四八 一一一 四四

平和を実現さしていくのは「まがたま」といって、わが魂である。わが命である。両親を通して太極からいただいたこの魂は、み鏡である。この魂を、円満に広く正しく強くしていくためにこそ、この「み鏡の教訓」がある。また、み鏡を目標にして、そこで誓うのであります。

魂 命 四八 一一一 三九

食事をいただいても、消化せねば役に立たぬ。話も消化せねばならぬ。文字で見、話で聞いたことは、心で消化し、血とし、肉とすべきである。かくすると魂が肥るわけで、魂が肥れば雑音に拘泥せず、少々のことがあっても弱らない。負けるのは、結局、弱いわけで、雑音に負けるのも弱いからだ。

魂 命 四八 一一一 四二

天受の魂を濁さぬように心がけねばならぬ。魂が濁ると傷つくことが多い。不平不満の出るのは心が曇り濁った時である。(中略) 繃帯をし静かにいたわることである。繃帯をするとは反省し、懺悔し、大きな広い暖い心で、どんな汚物も浄化することである。

魂 命 四八 一一一 五二

み教えによつて常時勉強すべきであるのに、世話したことが忘れられなかったり、私心を出して不平不満をいったり、とりこし苦労をしたりする人が多い。絶えず心の浄化をせよ。浄めても浄めても、魂は毎日汚れてゆくものである。

魂 命 四八 一一一 九二

泰然自若とした心魂をいただくためには、少なくとも百五十年の魂の修業が必要である。私の魂は二百五十年の修業がなされている。

魂 命 四八 一一一 二五

人の魂は、親となり、子となり、夫となり、妻となり、師となり、弟子となり、兄弟姉妹となり朋友、知人となり、世話になったり、なられたりしてなん代もなん代も生き替り、死に替り、流転と変化をつづけているわけである。

魂 命 四八 一一一 五四

魂(胆)を鍛錬し、丹精するのには太極からだちに伝わる教えをいただき徳をつむように心がけねばならぬ。

魂が肥る 命 四八 一一一 七三

魂が肥つてくると悩みを打破する力がつよくなる。

魂の薬 誠 四八 一一一 一四

魂には魂の薬がある、肥がある、肥料がある。魂のわずらいには、それでなければな

らなぬ薬がある。その薬は、「言葉」であります。念であります。金や物では一時的の救済はできません。魂は永遠のもの、不滅のものでありますから、物や金では薬にはなりません。これを救済するには、よほど徳を積み、およぼした人でなければできません。

魂の浄化 　　ふ 三九 二 一四

魂の救い 　　ふ 四一 五 一〇

我々の魂の浄化をする只一つの道は、天地自然の法則にすなおであることである。誰も魂の救いに気についている者がいない。目に見えることの救いだけを全てのように思っている。

魂の成長 　　み 三四 一二 六九一

魂を太らせるのは、神の子であることを自覚して実行することであり、魂を成長させるのは努力であります。（十一月三十日）

魂の点数 　　ふ 五二 四 三

本会では別に会員一人一人に通信簿があつて、そこに何点というように点はつけられていませんが、こういうことではありません。大極から分けみ魂として頂いている魂

の点は、大極によってつけられているのでありますから、人の常識では分りません。

どれだけ徳をつんだか、また、どれほど天借があるか、数字に現われませんから計算

はできません。けれども人の世の言語動作に、あるいは繁栄に、あるいは争いに、その証拠ができてきていることを知らなくてはなりません。

暑さにつけ寒さにつけ、また悩み苦しみにつけ、人の心の弱さから魂がにごり迷いを

魂にごり 　　ふ 三八 五 二

生じてまいります。

魂にごり 　　誠 四六 六 一八

「さかしま心」を解消せず、だんだんと積み重なってまいりますと、「魂の濁り」となるのであります。魂が濁り、血液が濁り、ついには魂が狂ってまいります。これ即

ち精神病であります。

魂にごす 　　誠 四六 六 二八〇

もつとも魂にごすものは、恨み、ねたみ、そねみであります。不平のつぎは怒り、

怒りのつぎは「がまん」、怒りのつぎは嫉妬、嫉妬のつぎは「ねたみ」となつてまいります。これが尊い魂を汚すのであります。

魂を太らす 　　ふ 三九 一二 一六

魂を太らせるということは、環境に順応してもまれることである。もまれてる中に、

自から魂が太ってゆく。いいかえれば、困難を克服していく努力、これが魂を太らせるのである。

魂を太らす
み 三四 一二 六九一

魂を太らせるのは、神の子であることを自覚して実行することであり、魂を成長させるのは努力であります。(十一月三十日)

魂を太らす言葉
ふ 四八 二 一二

三度の食事をいただくように、いのちの親から魂を太らせ成長させる、徳と力と愛の言葉をいただける全国の会員は、この理を理解せねばなりませんし、また太極の響きであるみおしえを信じなければなりません。

魂を磨く
ふ 四二 二 一〇

いかなる悪説を聞きましても、また、塵やほこりを見せられても、これは魂を磨くための立派な教科書であることを悟り、不平不満なく喜び勇んで修養しなければ何時まで立つても魂はみがかれません。魂を磨き上げた暁には全てに不自由がなくなるのであります。

魂を磨く
誠 四六 六 二八〇

なにぶんにも目に見えないところがありますから、どのくらい汚れているかわかりません。"にごっている"だけならよろしいが、錆がついております。少しづつ叱られながら錆を削りおとし洗い浄めていくには"感謝"であります。それが感謝どころか不満が絶えまなく出てまいります。

魂を磨く
誠 四八 一二 一三二

「感謝でのりきれよ」「誠のわざを喜びはげんでいきましよう」とは、つねに教えられておりますが、これが、魂を磨き、天借をお返しすることになります。

ため
ふ 三八 九 一一

捧誠会のために：とか、支部のために：とか、こういう言葉を耳にすることが多い。(中略) "人べん"に"為"を書けば。"偽(いつわり)"となる。だから、人のため、支部のため、捧誠会のため、というのは全て偽りである。本当は、全てが"わがため"である。身慾をはなれてした行いは尊い種であって、その種を蒔いたのは誰でもない、その人自身である。種は必ず芽生える。その稔りは何処にも行かない。全て種をまいたその当人の庫に入るのである。

ため
ふ 四〇 一〇 一六

"家"のために働きますとか、"家のために苦労しています"とかいうが、これは非

常な思い違いである。家とは建物である。その人の気持ちでは、「家族のため」ということであろうが、家と家族とは全く異なる。人にとって一番大切なことは、「生きるため」である。

ため ふ 四〇 一〇 一六

「捧誠会のため」「先生のため」或いは「親のため」「子のため」——と人生にはいろいろの「ため」がある。しかし、「ため」を誤ると途方もない方向違いとなる。「ため」が正しいか誤っていないか、よくよく見定めなければならぬ。

たもとのほこり ふ 四三 一二 九

家の人々がよく気をつけて、袂を払っていただくが、それでも、知らず知らずのうちに、思いもよらぬほこりがたまっている。これは一つの教訓である。

頼る み 三四 一二 二九五

人に頼ることを望み、頼られると逃げ出すような人が多い。しかし頼られたら何でも引き受けるというようなことをせず、よく見定め、安受け合いをして自分の身が亡びようなことがあつてはなりません。(五月二二日)

だらく 振 四三 八 五

人生行路には幾多の障害も誘惑もあり、其の他、人災、天災あれど、其の中を乗り越し生活して行く事はまことに厳しいのでございます。その厳しい事を避けようとしてはなりません。厳しい事を避けようとするような根性であるから墮落し落第するのであります。人生行路の厳しさを避けようとする者は、世の敗残者となる事を私は言明する。これは捧誠会の会員のみならず国民に告ぐと云う中に、数々其の言葉が出ている筈であります。

ダルマ ふ 四九 一二 二三

ダルマという言葉は、法ですね、法則のことなのです。手も足も出さない。法則は、手も足もだすはずがない。じつとしてゐる。

ダルマの教訓 ふ 四六 九 三

ダルマは踏まれても、蹴られても、叩かれても、起き上がる。やはり人生は踏まれたり、叩かれたり、蹴られたりしても、死のうとか、ひがみを持つような根性ではならない。

ダルマ山 ふ 五〇 三 三

ダルマ山聖地の地形は太極を象(かたど)ったものであるとの天啓によって、悠久世界平和郷の建設が始められたのでありますから、富士を拝することすなわち太極を拝

することでありませぬ。

いのちの親は、あの土地には国王が住むべきであるというお諭しを示しておられます。団結ということは人の言葉でいいますと、人と人とが団結をするようなことに思いますが、団結は万物一切と団結をするのであります。それですから万物尊愛という言葉になります。（中略）「団」ということは「愛」であります。誠の愛であります。

無限の灯であります。「結」は「決断」であります。決心であります。誠の道を踏み行なうには我執貪欲ではなりません。その法則は本会では「天地自然の法則を学び修め」と教え伝えております。この結、決心、決断、正しい決断これが団結であります。団結・協力・融和は、人と人とばかりをいうのではなく、己の中、つまり身心の一致も団結・協力・融和であり、大きくは万霊万物尊愛なのであります。

悠久世界の平和を実現するには万霊万物尊愛の精神で、団結と融和と協力、つまりこの徳と力と愛の結集でなければならぬはずで。

団結、協力、融和これはすべての基本です。いいかえれば、徳と力と愛ですし、この頭と胴と足です。また三種の神器です。頭は曲玉、胴は鏡、足は劍。そして三種の神器の根本は大和魂です。

団子は談合、話合い。団結協力であると悟りました。

米は女子を現わし麦は男を現わします。

海は女子を現わし、山は男子を現わし、女子は子を生み育てる使命をさずかっております。

陰と陽とは天地を形どつて陰陽ともうします。男女もそれと同じようなので男が陰で女は陽であります。女は丸く、男である陰を女の陽である熱によつて陰（円）を廻して行かなければなりません。

この地球が誕生したのは、何年何月という日にはありませんが、とにかく地球には山もなければ海もなく、ただ泥海のようなものであつて、そこから万物が生成発展し

ダルマ山 五五八三
団結 四七八一〇

団結 協力 融和 四九一三

団結 協力 融和 四九一二三

団結 協力 融和 四九一二六

団子 五五一〇三

男女 四二五六

男女 四二五〇

男女 導 三四一〇一八

誕生 五五七二

てまいりました。それが地球が誕生した始めであります。皆さんが人の道で、誕生したという、子供が生まれたその日を誕生日といいます。しかし 毎日毎日が一日の誕生であります。

誕生とは鍛(きたえる)であり、丹精(毎日努力して徳をつみ重ねる)にも通じ、また、胆(大きく広い魂、胆囊、生命)をもいう。尊い生命を日に新たに、日に新たに生れさせていただくことである。

「単線」は「大平和敬神」の五文字を書いたときに太い筆を往復させて書きました。いいかえまして、これは筆の複線です。単線では衝突事故がおこりやすく、複線には事故がすくなくあります。呼吸も吸うてはいて、複線です。手も脚も右と左と二本あります。「日本」は「にほん」であり、わが日本の旗印は、大平和の象徴である。「日の丸」であることに、深く思いをいたしたいのであります。

「丹毒」は「単独」である。皆と協力しあうことなく、おれが、おれがという突っ張りあいばかりしている。そういう教科書である。一人で歌えば「独唱」。二人以上で歌えば「合唱」である。合唱になると、互いに合せていかねばならぬ。家族が合唱するように協力をしていくこと。——これが丹毒の教科書である。

「真捧」を棚あげして「がまん」ばかりしていますと、「たんのう」という身しらせをいただく。

チの部

誕生 命 四八 一二 二五三

単線 ふ 四六 一 三

丹毒 ふ 四五 五 一二

たんのう ふ 四四 一二 一五

血 ふ 四六 一 二八

「血」は「力」である。「力」といっても腕力というのではない。種が芽生える、草木が伸びる、柿や蜜柑が稔る、そしてまた石油や石炭や鉱物など、すべての地下資源——これは「地から」わき上がるものである。地下に万物を生成発展させる力がある。

血 三 四 一 二 四 九 八

この目に見えぬ力——地からをいうのである。
地の底から湧き出る清水のように、肉体の中に無数の血管があり、血液が流れております。その血液は命であり、「ち」であります。力が出るのも、血液の流れにより、熱によって、即ち体温（大恩）によって肉体が動かされているのであります。

（八月二十九日）

血 四 六 六 二 四 九

血がにごると害になります。これを「血害」といいます、肺臓の弱い人は、聞きがちがい、とりちがい、感ちがいをし勝ちでありまして、そのために血が害になってきます。血害になりますと肺臓が弱ってくるのであります。ですから思いちがい、とりちがい、感ちがいを早く改めるよう努力することが大切であると教えられているのであります。

血 四 六 六 二 八 九

「血」というのは、体内に流れている血だけをいうのではありません。天地、地、力、底力というこの力。この力はどこから湧き出るか。地から、その力というものが肉体にも心にも通ってくる。その目に見えぬ力をいただくには、自我を滅して徳をつみ及ぼしていかねばなりません。その力によって病み患いが解消していきます。その力によって力は地から回転してまいりますから事業も発展するのであります。

地 四 四 四 七 〇

この大地に——あらゆる汚物を浄化して行くこの大地に地鎮祭をしました。家とか工場とかの地固めでなく、世界平和の目標の地固めが昨日おこなわれたのであります。

地 四 〇 一 二 一 六

話術は天の和（話）と地の和（話）の合掌である。天の和（話）だけでも、地の和（話）だけでもいけない。天は徳、地は愛——どちらに片よつても話は聞きにくい。

地 四 三 九 三

「地」は「血液」であり「真の道」であります。広く温い心が大地の心である。平等無差別で、あらゆるものをうけ入れ浄化する。また砂を（素直）透せばどんな泥水も綺麗に濾過される。すべてを許し、受入れる気持

地 四 八 一 二 七 五

は修養の極意である。修養とは腹へおさめることだともいえる。

血 四 六 六 四 六

「うらみ」「にくみ」——これが「おでき」と同じように破裂する。血膿があふれる。血膿とは、「おでき」ができて、そのための血膿ではなく、憎しみ、恨み……の、こ

血ウミ 誠 四六 六 四七

の「み」であることを忘れてはなりません。愛情が逆転して、殺したり殺されたりする事件が絶えない人の世であります。

兄弟喧嘩をして血を見るような騒動をおこすのも、すべて、「ウミ」「血ウミ」という言霊に示される通り、血のつながりにおいて「おでき」と同じような姿となって現われてくることを心得ておかねばなりません。

智慧 一八一〇 一四

智慧は清水（キヨミヅ）であり、清き血液であります。血液こそは神であり、生命なので、これこそ金銭では求められない尊い宝なのであります。

智慧 四二六 八

知恵なければ学びもできず、向上もなく、楽しみもありません。知恵は血液と同じであります。血液は食物を多くいただくから増える、食べ方が少ないから減るといいうわけではありません。これこそ自然の力であって、自然の法則にしたがえば知恵も求められ、清き血しおもふえてくるのであります。

智慧 四二六 八

知恵は天則通り道を行い、法則通り活動していくところに貸し与えられます。しかし、この知恵を保存しておくようでは役にたちません。持っているものを使わず、大事に保存するばかりで活用していく道を知らねば神からも人からも責められ、最後には苦しみ悩み災害をうけていかねばなりません。

智慧 四九二 二六

知恵が狂った人ほど恐ろしい存在はない。知恵こそ徳・力・愛ですよ。無限の財産の根本をいたたく場所です。

智慧 三四二 三八

知恵は無限の富であります。（一月十九日）

智慧 三四二 五〇

人には天から最高の知恵を授けられて居ります。この知恵を良い方に使えば誠に立派であります。悪い方に使いたくなる人もあります。（一月二五日）

智慧 三四二 一八〇

知恵は無限であり、行いはそれにつながつて、これ又限りがありません。知恵は感応であり、魂であり、清き神であります。肉体と魂が一体となり和合すれば御神体ともなります。それ故知恵を無駄にすれば神に対する不敬となり、肉体を無駄に使えば両親に対して不孝となり、富を無駄に使えば万人に対して不愉快な思いをさせることに

智恵

み三四 一二五〇二

なります。(三月二八日)

人に与えられた知恵は見えません。なれども無限の宝であります。知恵を失えば肉体があつても役に立たないこととなります。知恵は血液のようなもので、血管に流れている血液が無くなるのと同じであります。(八月三一日)

智恵

誠 四六 六一七三

ここに「白痴」と示されております。「白痴」になるまでに、まず「知恵」を失う。

「知恵」という言葉は「地位」であります。知恵を失い、神経が混乱して、思いちがいをする。それから、感ちがいをする。つぎには聞きちがいをし、そうして間ちがいをする。それから「気狂い」であります。こういう経路をたどつて「白痴」になるまでは四十六年かかります。(中略) どうか皆さん方の子や孫に、こういう人が生まれてこないように、よく心がけて「ちがい」をしないようにしてください。

智恵

導 三四 一〇五五

考えるもとは知恵であり、この知恵は道であり、血液であり、肉眼では見えない肉体の中に存在して活動しているのであります。物品を見定めるのも人の心を見分けるのも人格の判断をするのも知恵でありますから、知恵を無駄に使わず又知恵のある人は知恵を人に差上げる、無い人は努力して知恵を求めようになければなりません。われわれは反省するため知恵をいただいているのだ。

智恵

命 四八 一二二六八

素直な心、水のような心になったとき、知恵は授かるものである。取り越し苦労をしたり、怒つたときには知恵は授からない。

智慧

訓 一八 八 一三

智慧と言う言葉の働きは「智慧」は「地位」であり智慧は階級で人格を意味するのであつて如何なる人の親子も、地位をよくしたい、人格をよくしたい、階級をよくしたいという、これ即ち、いい智慧を求めることになるのであります。

知恵と地位

誠 四六 六一七四

「知恵」という言葉は「地位」につながっております。「知恵をうしなう」といえば、ただ、知恵をうしなうことばかりでなく、職場における地位、社会における地位、それも失なうことにつながっているのであります。これを承知していただきたいと思ひます。

知恵をいただく 誠 四六 六 七二

神の子としての自覚を得て、神の存在を知って、己れの価値を知ったときに、この知恵をいただいて凡てのものを正しく判断させていただくのであります。

智恵をいただく根本 命 四八 一二 六七

一、目を敬い、目下を慈しみ、相互の理解につとめること。

二、腹をたてず、不平をいわず、思わず、万物を愛護すること。

三、水を無駄にせぬこと、火を無駄にせぬこと、心を無駄に使わぬこと。

誓い ふ 四三 六 九

神仏に誓うというのは、神・仏に近よることである。また「通じる」ことである。神に通う心とは、どんなことをいわれても、見ても「ハイ、そのとおり……」といえる、思えるような心である。神の心に通わねば、人の心にもかよわない。「そのとおりです」とは「我」のないことである。

誓い ふ 四三 一〇 九

誓い——は平和への第一歩である。万物にまことのわざを誓うまことの行ないを誓う、ここから平和が顕現することである。

誓い ふ 四四 一 三

「誓い」は心であります

誓い ふ 五四 三 四

神慮に合一すると諭されております。私たちの心には、精神(きよき神)という文字があてられております。つねに、大極に近づく。「近い」即ち、誓いでありませう。誓うということは親の心に近づいてゆく。合掌してゆく、ということであって、そこに強く正しい心が生まれてくるのであります。わが意のみでは片手のようなもので、物を頂くことも、持ち上げることもできません。

ちがひ 誠 四六 六 一九七

この狭い心、嫉妬心——みな持つております。そうして、思いちがひ、とりちがひ、感ちがひ、聞きちがひをする。最後には「間ちがひ」になります。始めから「間ちがひ」ではなくて、それまでには四つの過程があります。その間に改めませんと、大きな教訓をいただきます。

血害 命 四八 一二 一四一

聞きちがひ、感ちがひ、思いちがひ、取ちがひなどは、血害に通じるのである。かかる心の持ち方をしておれば、大切な血が害となり、ついには血をとらねばならぬようなこともおこるのである。

血害 命 四八 一二 一九九

人を恨み、嫉み、争いを起すようになる。これは魂が濁って来たためで、思い違い、とり違い、感違いなどの違い（血害）、つまり体の害となり、肉体を亡ぼし、家庭を乱し、大きくいえば社会、国家、人類が平和にならず、明朗にならず、苦しみぬいて地獄の状態となるのである。

誓と祈り ふ 四三 一二 九

「祈り」と「誓い」二つで一つである。（中略）「いのる」から「こういたします」と誓う。

誓いのことば ふ 五五 三 四

誰しも目先の事にとらわれるものです。そして、今何をしたらよいのか、どこへ交流したらよいかというようなご指導を頂きたいと考えます。私は、まず、捧誠感謝の自覚をもって乗り越えさせて頂きますというお誓いをするのが最初であると申し上げたい。そのお誓いが、誓いのことばであります。それもしないで、何をすべきか、どこへ行くべきかと、うるたえてはなりません。

誓います ふ 四三 一〇 九

「誓います」——というのは、地下にいますということである。（中略）心が地下にいますということである。（中略）地下に資源がある。地下の甘露が根から幹、幹から枝へと上がってくる。

心が地下にいる、地下のま清水といっしょになっている。故に動揺転倒しない。迷いもしない。地下をはなれるから迷いが生じるのである。

力 ぶ 三九 四 三八

力は地からでるのです。心が地についていないと力はできません。地から芽生える—地下ら芽生える—「地下ら」は「力」であり、それは火、水、風である。

力 ぶ 四六 一一 七

徳と力と愛は無限であり、人知でははかり切れるものではありません。

力 ぶ 四八 四 四

マホメットは、宇宙の創造主アッラーを唯一絶対の神とし、力は神なりとも教えておられません。力という言葉は腕力だけではありません。言霊によりますと「ち」は尊い血液であります。無限の熱と光を与える太陽のごとく、地球の底に熱があり、その熱によつて山が噴火する。その爆発する力は陽であります。そこで文字通り大きな陽と文

字によって教えられております。これ地下資源であり、地下資源の真理を力と教え導いてくださったと思う。

力 告二四 二 一一

力と云う言葉に就いて。総ての力を失った時は精神的にも肉体的にも行き詰りとなって何をおもい何をなしても、死するより外はないと考えられるのであります。殊に大自然の力などは何物も及ばざる無限の力があるのでこの力を俗に「神の力」とも申されてあります。地球の運行は山も海も河も土地も家屋も背負って一秒間に七里半も運行して居ります。この力などは人の力などではどうすることも出来ないのであります。又人の口から出る處の発音即ち言葉の力も是亦大自然の力に属する小さなものであります。其の言葉の力などは偉大なる力があるのであります。肉体の力、精神の力、科学の力、この力を現して行く元は大自然の力の一部分であります。そこで力とは土地も「ち」であります血液も「ち」でありまして「ちからだ」の言葉の頭の「ち」をとりますと「からだ」と云うことになります。人の肉体が亡びた時には血液は濁って自然になくなって参ります。(中略) 人が生まれて養育をなしまたの指導者から教育を学び修めて成長さす事などは大きな力であります。精神的に考えるならば素直な美しい清らかなやさしい清き水の如き低い心こそ力なのであります。水は素直で弱きようでもあの大きな岩石を打ち破り堅固な家屋も堤も押しつけて参ります。この力こそ弱きようでも全く考えのつかない力なのであります。特に素直な心やさしい心を養うことが精神修養の根本であります。(中略) 日本人であればこそ尚又日本人でなくとも、世界人類の人達は誠の愛と誠の徳と誠の力を知らざる人はない筈であります。何分ともこの三つの徳と愛と力によって平和な大道を歩むことの出来ませうように心掛けることが肝要であります。

力 命四八 一一 二九四

病気になるてみなければ真の力はつかない。精神的な悩みにしても、あらゆる不幸にしてもそれにより力がつくのである。

力 命四八 一二 四一

力は地からである。血(地)から力が出てくる。血の気が無くなると力(血から)は

命 四八 一二 七一

出ない。血液があれば力が出る。底力が出る。血のめぐりがよいと心から笑える。笑える心は尊い力のある心である。不慮の事件に出あった際も笑う心になれる人は底力のある人である。大地の心になるよう修養して底力を養わねばならぬ。

力は低い地から生れる。われわれの食糧のほとんども、また多くの資源も地から得られる。地から力が出るのだ。

命 四八 一二 二〇四

力という言葉についてお話をする。

■大自然の力Ⅱすべての力を失った時は、精神的にも肉体的にも行詰りとなって、死よりほかあるまいと思う。(中略) 地球は、山も海も河も土地も家屋も背負って、一秒間に七里半も運行している。この力などは人力でいかんともできぬものである。

■もろもろの力Ⅱ人の口から出る発音、すなわち言葉の力も大自然の力に属する小さなものではあるが、人生生活には実に偉大な力を現わすものである。(中略) 土地も「ち」、血も「ち」である。「ちからだ」の「ち」をとると「からだ」となる。人の肉体がなくなった時には、血液は濁り自然になくなってしまふ。

■教育の力Ⅱ農夫が種子をまくには土地を選び、開墾し、耕やし、芽生えてくると肥料を施し、手入れをする。これと同様に人が生れてくると養育をし、あまたの指導者から教育を学び修め、成育させるが、これまた大きな教育の力である。

■水の力Ⅱ精神的に考えるならば、素直な、美しい、清らかな優しい、清き水の低き心こそ、大きな力である。水は素直で弱いようでも、あの大きな岩石を打破り、堅固な家屋も、堤も、押し流してゆく。この力こそ、弱きようでも全く考えもつかぬ力である。(中略) それは素直さ、優しさ、美しさのもつ強さや力を知らぬのである。

■協力Ⅱ一枚の薄い紙も積み重ねれば、いかに強い力をもつかは人の知るところである。(中略) そして、家庭も、社会も、国家も世界も明朗な力強いものとなり、おたがいに生きがいのある生活ができるわけである。誠の愛、誠の徳、誠の力で平和の大道を歩めるよう心がけたい。

地球の運行	み	三四	一二	二一〇
地球の回転	ふ	五二	九	四
地球の姿	ふ	四九	四	三
地球の感恩	ふ	四九	三	四
地球の長	誠	四六	六	一四七
血染めのみ旗	ふ	四五	二	一五

地球の運行は弛みなく自然の法則に基づいて行動しております。(中略) 幸福を求めようと望むならば、この原則を信じ、誠を捧げて実行することが肝要であります。この原則の実行を怠るから行きづまりを生じ、不幸となつて参ります。(四月十一日) どんな変化がありましても、地球の回転には休みはありません。一日一日、一年一年、自転し公転しております。前進こそ自然の姿であります。

地球の姿

ふ 四九 四 三

平和の姿は地球の姿であります。丸くやさしく、黙々として強いのであります。

地球の感恩

ふ 四九 三 四

地球の感恩をさとらず、そのままいくとその結果、地球上のエネルギーが不足することになってしまつて、地球が砂漠になってしまいます。地球が砂漠になったときは、人類はもちろん草も木も、すべてが生をうけつづけることは不可能になってまいります。(中略) いまのうちから、地球の感恩をさとり、一人一人が誠の道をふみ

地球の長

誠 四六 六 一四七

行つて、誠の道を喜びはげんでいくことに努力を重ねていかななくてはならないのであります。家にも小ささまざまありますが、地球もまた家であります。そして、この地球の

「長」は神であります。

血ぞめの旗印(はたじるし)

《平和建設は命がけ》

〈今回の「みおやのことばは」2月1日におこなわれる平和大行進での旗印についての総裁のことばです。(教学院)〉

昭和四十四年十月四日(土曜)坂出支部五周年ならびに「おみな会」五周年記念式典にのぞむため教学院の森田源治さんを随行に羽田空港を出発しました。高松空港着、十五時十五分、この日は坂出市の「紅葉家」旅館に宿泊しました。

翌五日(日曜)は快晴に恵まれ、記念式典は坂出市記念館において厳粛におこなわれました。その祝賀会の最中のことです。突如、教祖に実行がくだり、高知支部の藤本楠子さんの背のわずらいを救うため、あの重い藤本さんを背おつて舞台の上を数歩

あるきました。

式典終了後、ゆっくりくつろいでいただきたいと見附支部長が五色台の「保養センター」に案内してくださいましたので、五日はここに宿泊したのであります。

六日も秋晴れの美しい日和でした。目がさめると「血染めの日の丸を書け」という実行をいただきました。いつも申しますように「日の丸」の国旗は平和の象徴であります。これを教祖の血で書けということですから命がけの平和建設ということですから容易ならぬ実行でありますから、まず身体を浄めて……と違って、朝の七時ごろ風呂にまいりました。まっ裸になって入ろうといたしますと、その刹那、ふたたび、ここで指を切って血を出せ……、という実行がくだりました。

実行ですから一瞬のためらいも許されません持っていましたカミソリで、勢いよく小指の腹を切りました。あまりにも勢いがよかったです。ハツと思うと、小指の腹が五ミリほど肉がそげおちてしまいました。

おりから満潮どきであったのでしよう。小さい傷にしては、おびただしい出血です。手に持っていたタオルは忽ちまっ赤に染まってしまいました。ちょうどその時、風呂から随行の森田さんが出てきましたが、まる裸ですから、なんともしよがありません。血のしたたりおちる手をかかえて、部屋にもどり、中沢すみさんと鈴木教之さんとの介抱をうけましたが、出血は止まらず貧血をおこしました。早速、琴平に電話して支部長の小野清美先生の来診をいただき、一時間ほどたつてから、ようよう治療をうけたのであります。

血染めのタオルは風呂にいくと中沢すみさんが出してくださったもので、よく見ると「金井」と染めてあり、横浜支部の会員の米屋さんのものでした。はからずも、このタオルが血染めになったのは、金井家は立派な家系を持っておられ、このたび横浜支部平和郷の建設にあたって、また支部の運営についても心をこめて、陰には血の出るような苦心を重ねてこられたのであります。この功績によって「金井」と署名の

あるタオルが血染めになる教科書となったのであります。

この教科書を手にして、

—ここをこめて、かなえます

と、さとりました。なにごとにも、まことを捧げて実行すれば、その「まこと」はかなえられると信じ、心をこめ、ま心で世界平和建設に邁進しようと、さらに決意を新たにしたのであります。

教祖の血で「日の丸」を書くつもりで、筆も布も用意してありましたが、この血染めの手拭いが、そのまま「血染めの旗」であると悟りましたので、アイロンをかけて保存するようにと中沢すみさんに命じ、帰途、大阪でこれを表装していただきました。「日の丸」はわが日本の国旗であります。

「日の丸」は大和を表現し、世界平和の目標であります。明治、大正を経て昭和四十五年の今日まで国民の一人一人が尊んでまいりました。

私は大正十四年六月、日蓮上人が島流しにされた俎岩を拝する日蓮崎の岩頭に立つて、はからずも天啓をいただきました。それは、

—近い将来に大戦が起る。そのときに、「日の丸」を捧げ、「日の丸」を先頭にして戦いすることは天地自然の法則に反する。これは大きい罪悪であることを一日も早く政府に謹告せよ……。

という、きびしいものであります。

この天啓のまにまに、昭和三年、堂々と打ち出したのであります。

この日蓮崎は国立公園であって、一本の木をきつてもならぬと定められておりますのに、このたび「世界平和誓願之碑」建立を認可していただきましたことは、ただ有難く、感無量であります。

昭和四十五年二月一日、この除幕式にあたりまして、壮青少年の平和大行進の先頭に、「血染めの旗」が捧げられることになりました。血染めの旗——血染めの日の丸

をふりかざして堂々の行進がおこなわれるのであります。これは実行であります。悠久なる世界平和を叫び、世界人類が戦争を絶滅して平和を実現する誓いをこの世に示す旗印してありますから、これを先頭に、堂々の行進をするのであります。

「血染めの旗」は、また、世界人類が平和を目標に、一つに団結するという目標であります。

「団結」は「決心」であり、「一生懸命」であります。世界人類が命をかけて誓願する旗印でありますから、ほかに持ち歩くものではありません。

また、悠久なる平和の顕現は口さきで、「いうのみ」ではなりません。生まれたときと同じように丸裸で誓願しなければ現在の危機も将来の危機も乗りこすことは不可能であります。教祖としての私が丸裸で血を流したという教科書が、ここに示されているのであります。

日蓮崎の「世界平和誓願之碑」は、修養団捧誠会本部が会員の皆さまの真心によって建設したというだけのものではありません。世界の全人類が一丸となつて、建設するものであります。といつても、世界の人たちは、この意味を知りません。知りませんけれども「平和を希求」する思いは一つであり、それがこの碑となつて現われていることは事実であります。

いづれ今後、百年を経たならば、人類のこの誓願が実現することは、まちがいありません。天啓によつて、そう示されているのであります。

二月一日、太平洋の寒風について「血染めの旗」は堂々の行進をいたします。この旗印を、こうして掲げるのであります。会員の皆さんは、この意を深く心に刻みこんで、平和建設に邁進してください。

日の丸はわが日の本の大和魂

この尊さをつねにわすれず

白妙に赤に心を血に染めて

世界の平和とわに誓わん

血染めのみ旗

ふ五一 七三

血染めのみ旗は、いのちの親からの実行としてさとされたものであります。

乳

誠四六 六二五五

「乳」は天地の甘露が伝わってくる大切などころであります。そして「乳」は女の人
が持つておりまして「父」という発音につながっております。父は男、男は天であ
ります。天は神であります。そこで、この乳を切らねばならぬという教訓は、天のご
とく広く大きく暖かい心を養なつていくようにということであつて、要は、真剣に「
神」に近づくことあります。

父

導三四 一〇二

父は大地から生まれ、母は海から生れ、人の始まりは最初海の中に生活しておりまし
た。それから何億年かたつて陸に上がり、何兆年かたつて文明人となりました。山が
海になり、海、山、野のおさとしは、海は母で、山は父で、野は子であります。天上
は無窮であり、奉仕（円満）であります。

地熱

ふ四五 八四

大地はあらゆる汚物を浄化いたしますが、それは「地熱」であります。「熱」という
と上を思いますけれども下にあります。地下にあります。

血のつながり

ふ四四 一二

この世では同じ腹から生まれた人を血のつながりと申しますが、過去・現在・未来を
通じて靈魂は不滅であり、この魂の縁につながる人の数はかぞえようもないほど大き
な数字になります。たとえば一人の存在には二人の父母があり、その父母にも、それ
ぞれに二人の父母があつたのであつて、こうして十代さかのぼりますと実に一〇二四
人の親をとうして今日、一人の肉体があることになりました。それでありますから憎し
み、ねたみ、ひがみ、そねみという「さかしま心」を持ちますと、それが肉体に教科
書として現われます。心こそ大切であると教えられるのは、ここにあります。

忠

訓一八 八五六

中と云う字の下に心をつきたした時に忠と云う字になります。忠は絶対のものであり
ます。何故ならば、口と云う字の中に一すじの棒を引いてあります。この口は東西南
北であり、即ち宇宙であります。四方正面、どこに居ても一すじの心を以つて仲良く
して行くと云う信念は、日本人として大神様から、その心を与えられて居るのであり

忠実

命 三四 一二 六七九

ます。

人の世は一人のみで立てるものでなく、又一人のみ忠実で正しいと思い、言いましても、常日頃の言動が天地自然の法則に反する様な行いであるならば、正しいことにはなりません。(中略) 神の道にも人の道にも叶います曲がり方ならば、曲がつておりましてそれは忠実なのであります。(十一月二四日)

注射薬

命 四八 一二 二九七

迷える心に注射するのは言葉である。注射薬であるから適量でなければならぬ。

中心

命 四八 一一 一九八

大海の底を貫く一線は、コマの心棒と同様に、一つの中心である。この中心に心を合せ、海水をも呑みほす意気で平和を生み出すべく挺身せねばならぬ。

忠誠

命 五三 七 二〇

忠誠は誠忠であり精虫である。

チューブ

命 四三 一二 一九

圧迫する、心臓を圧迫すると血管がパンクする。自動車はパンクするのはチューブが破れることで、そうなると自動車は動かない。チューブは中風でしょう。

中風

命 四八 一二 一七七

心が動き、次に肉体が動くのであるから、不平不満などで、心の整理のつかぬ時は、自然と手足の動きが狂ってくる。つねに手足の使い方が狂っていると、終には病み患いとなるのである。中風などもその一例である。

中風

命 四八 一二 二二二

はじめは半身不随である。神経系統の病いで、神経が鈍り、血管の働きが悪くなる。この現象がおきると人のいうことがまともに聞かれない。「そうだけれども」の言葉が出る。自分の心の物差しばかりを信じ、他人のいうことは、素直に信じられず、自分はいささかも間違ったことはしていないと思っている。また人のあらばかりをひろう。(中略) ひろったあらを気にし、取こし苦勞をして、次から次へと持ち歩き、人々の神経をわずらわせる。そのような種子がまいてあるから、かかる結果となるのである。

腸

命 四九 一 一四

腸というのは、お腹の中の腸も腸ですが、(中略) 綱領四にあります(長)にも通じます。(中略) 家の長とは、大宇宙とすれば長は命の親であります。(中略) 地球は家庭であります。国も家庭であります。

腸 命 四八 一二 二二九

人差指 Ⅱ 腸 腸を健康にするためには、目上を敬い目下をいつくしむ、綱領第四条の心がけが必要である。(中略) 自分は正しい、自分は間違っていない、という心は腸にさわるのである。生一本で人のすることが厭になり、自分一人でことをなしたり、負けずぎらい、勝気、うぬぼれの心などが患いのたねとなる。(中略) 地位、物などが十分でないなかにあっても、人の喜びをともに喜び、人に譲り、なにごとにもお礼をいって、相互の理解につとめ、広く温い心で誠をつくすことが肝要である。長上という。長の上は「神」であって即ち神は「長の長」である。長はまた「腸」である。「腸」は全てを受け入れて消化吸収していく。そこに「長」の姿が示されている。「長」の立場にある人は、全ての人を抱擁していつてこそ始めて、「長」(腸)たる任めを果たせる。

長 ふ 五一 七 二

長たるものは皆指導者であります。長たる指導者の心の持ちかた・使い方・言語動作はどれほどの影響を組織内に及ぼすか、測り知れません。

長 命 四八 一二 一〇七

人体でいえば肉体は家であり、心はその長である。一家の長も両親であり、肉体の長も良心である。

長上 命 四八 一二 一八五

長上とは神であり、己の精神である。精神のことを良心(両神Ⅱ両親)という。姿を現わしている父母、または長上の人だけが長上でなく、姿に現れない、人以外の長上をも意味するのである。

長上(綱領十) 敬 四二 一二 二六〇

本会の綱領第十条に「心に迷いあるときはただちに長上の教えを受け」と教えてありますとおり、天の啓示は長上の教えであります。人は目上の人を「長上」と言ったり思ったりしますが、ここにいう「長上」とはみおしえであります。

長上の教え 命 四八 一二 一八六

長上の教えとは神仏の教えであり、真実の教えである。我の心で受けず、誠の心で長上の教えをうけねばならぬ。

長上の教え 命 四八 一二 一九四

みずからの正しい知識で考えるのも、長上の教えをうけることである。この場合は、自分の意志を通して教えてもらおうわけである。

調和 　　ふ 四三 一一 四

協和——調和に重点をおいていかなばならぬと、いのちの親からさとされても（中略）
仇なす人もあり、敵にまわる人も現れてまいりまして、この人々と協和し、調和して
いくのは容易ではありません。しかし、この仇なす人、敵を喜んで迎える言語動作こ
そ、徳を積み徳を及ぼしていく最高の実行であります。

調和 　　ふ 四四 七 一一

調和こそ神木である。親睦である。

熱と水が相和すればご飯も炊けるだろう、お湯も沸くだろう。もしこれが調和ができ
なかったならば、その熱は大火となって（中略）その時は熱と水とが争わねばなら
んでしよう。

調和 　　ふ 四五 七 一〇

いただいて、さしあげる。さしあげて、いただく。そこに調和があります。

調和 　　み 三四 一二 二八

生活という文字は生きて活かされると教えられます。生きる事のみに入力を入れ、活か
されている尊さを自覚しないと、調和が出来ず、片輪の人生を送る事になります。（中
略）天地あり、天地の和合は人と人との和合を示し、生成発展していく万物に調和し
努力をすることによって幸福が産まれるのであります。（中略）両手両足両耳のあ
ることは天地の理法を示し、調和せねばならない現実を、肉体の組織によって教えら
れます。（三月二日）

調和 　　誠 四六 六 二三九

まず、太極に心をつないでいく、結んでいく。これを「神慮に合一」するということで
あり、「万物に帰依」するということです。「生成発展の万物と調和して愛護し
……」と神法第六に教えてありますが、調和するというのは帰依すること、そこから
報恩が始まるのであります。

直線と円 　　ふ 四三 六 六

正しい——というと、まっすぐな一直線であるように考える人が多い。これは思いち
がいである。直線ではなく日月の姿のように円い。円満な姿である。

治療 　　命 四八 一二 一五〇

治療Ⅱ良治Ⅱ血良Ⅱ血が綺麗になることである。医者は肉体の手当をするのだ。血が
悪い方に迷っている時は、心の動きが気随気まままで悪い方にゆくから、病いとなり、
手当が必要となる。血量にも通じる。血が増してゆくことは、徳の高まることである。

そして、血の濁らぬように修養が必要である。

ツの部

つ 導 三四 一七

一つ二つと九つまではつが付つきませんが、つが九つ寄れば苦痛であります。人として一番苦痛なのは肉体の故障であります。(中略) 心の悩みも行詰ります。絶えず動いている心が行詰まれば又肉体に故障が参りますから心身の苦痛ほど苦しいものはありません。

使い方 命 四八 一一 八六

体も心も金も考え方も無駄に使ってはならぬ。ものの判断をする知恵をいただいているのであるから、これを無駄にしてはならぬ。(中略) また物を粗末にせず、履物一足でも綺麗に掃除して片づけておくような人は、人から尊敬される。すべてのものを無駄に使わず、活かしてゆく努力が必要である。

使い方 命 四八 一一 八七

言葉も金も手も足も、みずからの衣食住のためでなく、人のために使うように心がけねばならぬ。(中略) 智能も自己のためだけに使うから忘れっぽくなり、働きのがぶるのだ。すべて逆に使うから狂ってくるのである。

使う 誠 四八 一一 五三

「使う」ということは「行なう」ことであります。それは「業(わざ)」であります。――この金を使うのは惜しい。こんど、はいるかどうかわからない。――この着物きるのは惜しい。よごれてしまったら、もったいない。着ないうちから汚れることを考えている。このような無駄苦勞をしている人が意外に多いのであります。ここを、みなおしてください。つねに、言語動作をわきまえて、誠のわざの実行に志をたてていけば、必要なときに必要な洋服も身につけてまいります。必要な和服も、必要な人も金も、どうぞお使いくださいと、役に立ってまいります。

つかず 訓 一九 六 二

「つかずはなれず」の言霊は、物事に熱心な余り、見る事聞く事に取れ違いをしたり

つかずはなれず 　　ふ 四〇 七 一五

つかずはなれず 　　捧 二四 八 二一

疲れる 　　命 四八 一二 二六六

月 　　い 一八 一〇 八

月日 　　命 四八 一二 五〇

月日の進行 　　ふ 三六 六 二

従っていく 　　ふ 五二 二

間違いをしたり致します。丁度硝子を掃除するようなもので、力の入れ所が違いますと硝子を壊してしまいます。硝子のみならず万事万端壊してしまうような事をなせば、不和となり家庭は乱れて心は迷い、疑いを抱き、相互に争いをなさなければ納まらないようになります。何時も太陽の運行の如く、間断なく進み行なうことであります。どんな時でも変わらぬつきあいの出来る人が一人あればよい。その一人が総裁であつてよいのである。

太陽のようなものですよ、太陽はいつも同じように進んで居るでしょう、早くなったり、ゆっくりしたりしないで、いつも同じに進んで居ます、人も喜びすぎて進みすぎたり、かなしみすぎて後れたりしないで、いつも同じような平らな気持ちで居るのがいいですよ。

疲れるのは感謝が足りないのである。喜びのときは決して疲れない。

月は水であり、日は熱であり、水と火とは神であり、その水と火との力こそ日本が源（モト）となり、世界に流して居ります。（中略）例えば肉体の「垢」（アカ）を掃除することや、着物のアカを洗濯することは水の力であり、又共産主義のことを「赤」（アカ）と申しますが、この「赤」がわが国に害をしようと致しましても、水の力火の力に依りて洗い流し焼き払って、消滅されることは間違いないのであります。

一年十二の月を見送り新しい十二の月を迎える。この見送り、お迎えする日々はあるが、何年・何日という日はもう来ない。永遠に過去となる日月に対し、悔いのないようにせねばならぬ。心の底から切りかえ、洗い浄め、新しい月と日を迎えねばならぬ。たゆみなく無条件で活動しておりますが、又人々の動きは言葉では無条件といつておりますが、すぐ感情に心が動かされ、肉体も動かされてまいります。

総裁について来なさい：というと、総裁にお伴することのように考える人がある。私は「みおしえ」について歩んでいる。私の歩む方向はみおしえに示されている一つの方向である。だから、皆さんも、みおしえについて始めて私と同じ方向に歩むこ

机と手

ふ 三九 一 一四

とになる。(裏表紙)

机の上に手の影が映るのは、手が机から離れているからである。影に迷ったり動揺したりしてはならない。手を机にびったりつけてしまえば影は消えてしまう。影を消そうと思わず、影と争わず、影に心を乱すことなく手を机と一つにすることを勉強してほしい。

つくとお伴

ふ 四〇 一〇 一七

総裁についてきなさい…というとき、お伴することのように考える人がある。(中略) 私は「みおしえ」について歩んでいる。だから、みおしえについて来てこそ私と皆さんとが合掌の姿である。

作る

ふ 四九 八 四

太極の根本は作るのではなく、産みだすのであります。物や製品は人が作るもので、産ませ給うたものではありません。

つつしみ

い 一八 一〇 四九

「つつしみ」と云う言葉の働きを申しますれば「何事にも包みかくしのない無条件の信念を持つ」と云うことであります。

つつしみ深く

い 一八 一〇 四九

つつしみ深く実行するには常に己の過去をよく改め、現在を見、未来を見通すだけの信念なくば慎み深くつとめることは出来ないであります。

慎しむ

ふ 四五 四 三

「慎しむ」という文字にしめされているように、言語動作に誠をささげていくということが「慎しむ」ことであります。

慎む

ふ 四七 四 二三

慎しむことは誠である。文字を解釈してもリッシンベンに真という字を書いてさとされております。

慎む

誠 四八 一二 二四

「慎しむ」とは誠であります。文字が、そう示しております。「心」と「真」の組み合わせであります。これ「誠」であります。(中略) 慎しむ——とは、誠の心で行動せよ、ということである。無駄な言葉をださない。無駄な行動をしないということであります。

つとめる

ふ 三七 五 四

つとめることは行うことでありますが、行いが良きことか悪しきことか、よく見定めて行うことが大事であります。

つながり 三三四 一二 六三七

縁あってつながる人と、其の人が過去に蒔いた種の芽生えとして教科書になる為に一時つながる人とあります。縁のある人は恩に報いられることになりませんが、教科書になる人は其の場だけで終わることもあります。人だけでなく鳥畜類もその通りであります。(十一月三日)

つなぎ 四一四 一一

その勤労に感謝の念を持って始めて「つながる」のである。人生には、万事に、切れ目のない「つなぎ」が大事である。「道を切る」のは「血管の道」を切るようなもので血管が切れると命はなく、道が切れると行詰る。「つなぎ」は金銭のことだけのように受けとっている人もないではない。(中略) それは「感謝」によってつながれていく。不平不満によって切れていく。

つなぎ 四二四 一〇

「つなぎ」は道であります。その道は千筋、万筋とあって互いに通る道は違いますが、助け合いによって、安心して通れるのであります。

つなぎ 四二四 一一

つなぐべきところにつなぎ、つながなくてもよいところへつなぐことがないよう、よく見わけていくのも助け合いであります。

つなぎ 四六五 二二

つなぎ——ということは金銭につながってくる。皮膚病を病むと一般に「かゆい。かい、かい」という。海、貝、である。貝は貨幣(おかね)の始まりである。

つなぎの人に感謝 命 四八 一二 二七二

入学、結婚、就職などに関して、縁をつないでいただいた人への感謝を忘れてはならない。つなぎ(足を運ぶ、感謝の心をあらわす)によって将来が変ってくるのである。切ってつなぐ——とは二つ一つである。(中略) 言葉でも切りっぱなしでなく、つないでおくことが大切である。「いずれ」というのは、つなぎ言葉である。

つなぐ 三九八 二三

縁ある人と切れると、自分の腹を切らねばならぬこととつながり、切って悪いところを直してぬい合す。これを「つなぐ」といい、即ち、交流である。

つねに心おく深く神の 誠 四八 一二 一〇四

鎮座を拝し

「つねに心おく深く神の鎮座を拝し」と教えられるごとく、心身を統一していかねばなりません。これを学び修めておりまして、お話し、また実行に現わしているのでありますが、事にあたって、それが出

来ておりません。ですから、どんな事にあたっても、いつでも、心の奥ふかく神の鎮座を拝しつつ身を動かしていけるよう心がけていこうというのであります。

つねに心を低くし 命 四八 一二 一六五

つねに心を低くするということは、感情的の愛でなく真心からの愛をもつことである。いかなる汚物も浄化する熱であり、またいかなる汚れも洗い浄めて、清浄にする水の心構えである。相互にこの低い心で行くならば争いをせずともよいのである。

つねに心を低くし人と争わず 命 四八 一二 一五八

争いに二つあって、私利、私欲、利害のための争いと、事業や健康になるための実行をする場合、周囲から反対され、国のため、親のため、家のためを思い、そのために反対をおし切ってゆく争いと二つある。利害や私欲のための争いはいけないが、よくなってゆくための争いはせねばならぬ。そして勝ちぬいてゆかねばならぬ。低い心は弱いようで最も強い心である。

つぶされる 命 四八 一二 六二

大福餅はつぶされるほどよい餡あんが出る。人もつぶされるほど知恵（地位）が高まる。知恵すなわちよい案、よい考えが出て人格も高まるのである。これまで頑張つて来たからつぶされるのである。（中略） つぶして来たからつぶされるのだ。人を立てれば我が身も立つ。

妻 命 四八 一二 一〇四

主人を神（上）と思え。みずからが純真で真心があれば、自分の主人を神と信じてゆけるはずである。自分の心が純真でないと主人を神と信じるような心にはなれない。主人を神と信じ得る人は、みずからの心が浄化され、神の心と同一になった証拠といえる。素直な和やかな明るい美しい心こそ、神の心と合一する心である。

爪先 命 三八 九 一六

道を歩くときは、爪先に力を入れる。（中略） 爪さき―それはまた、妻さきである。妻先に立つて信仰の道、天地自然の大道を歩む。そこで一家うちうちに、つまずきが少なくなるのである。

つまらない 命 三九 七 一七

―主人は好き勝手ばかりして、私、本当につまらないわ。―こういう奥さんが多い。「つまらない」「つまらない」と明けても暮れても思いつづけ、人にもいいふらしている、やがて「妻でない」ことになってしまふ。

積むべき財産 命 四八 一二 一九八

み教えには、先の先までのことが教えてある。二十年の後に救われるように徳を積まねばならぬ。一身一家だけを思い、物を貯えても貨幣も変り、価値も変る。子孫のために積むべきは徳の財産である。

つもり ふ 三九 六 一七

会員の中には「しているつもり」「勉強しているつもり」の人が多くようである。雪でも「積もれ」ば道が埋まって見えなくなる。「つもつて」道を失うのである。

つよく正しい心 命 四八 一二 五五

つよく正しい心とは、岩石のような固い心ではない。自分で一人ぎめした強く正しい心は我流である。自己弁護である。真のつよく正しい心とは、低く、根強く、環境に順応して謙虚遜讓な暖い心である。(中略) 低く平らかで和やかな神慮に合一した心をつよく正しい心というのである。

強く正しく ふ 四二 二 六

人の意見をやさしく受け入れて、それから強い信念を持って進んでいくのが強い正しい道であります。

強く正しく み 三四 一二 四四三

強く正しくということは無条件であり、相和し、素直な心、誠の心でなければなりません。この心は神の心とも教えられます。(八月一日)

強く正しく 振 四二 五 四

まことの道をふみ行い、まことの業をよるこび励んでゆかれる人こそ、強く正しい人なのであります。

強く正しく 振 四二 九 七

強く正しくと云うことは、腕力とか我欲ではない。動揺転倒しない心である。捧誠会の綱領第一に強く正しく…と示されているがこれは真心の事である。真心は強く正しく、真心は両方の為になり又此方も立つ。即ち両方立てて自分の身が立つと云

強く正しく 振 四三 八 九

うのが誠であります。捧誠会の趣旨は両方立てて自分の身が立つと云う事が真の幸せである。幸福です。

強く正しく 誠 四六 六 二〇一

「真捧」とは綱領第一であります。強く…とは動揺転倒しないこと。正しくとは、広く暖かく円満な心。

つり鐘 敬 四一 一二 一二九

鐘は「御恩」の教科書だよ。鐘の音は、ゴーンと鳴る。それは天地の御恩を忘れるなよ、というひびきである。その鐘を铸つぶすというのは、国が亡びる道を国がわが手

つわり

ふ 四五 一一 一九

つわり

誠 四八 一二 一九八

で作ることにはとしいではないか。考えてごらん。ご恩あればこそ「いのち」があるのだろう。ご恩なくなれば「いのち」がほろびるではないか。
つわりという言葉を使います。「わり」ということは割れてくる、子宮がだんだんと大きくなつてくるとそのももが割れてくる。
妊娠すると母胎に変化がおこる。食べもの、飲みものが変わる。この時期を「つわり」といいますが、「わり」というのは「われ」であります。子宮が大きくなると、そのももが割れてくる。そして頭から生まれ出る。

テの部

手足を切る教訓

誠 四六 六 二〇四

不平不満の心で出す言葉は、きれいな空気をにごしております。急須に泥水をいれて置や座ぶとんの上に撒きちらす人はないでしょう。ところが汚ない言葉を吐き出してこの空気をにごしていることを無関心でおります。どれほど多くの人々に迷惑をかけているか知れません。どれほど多くの人々の魂を疵つけているか知れません。こうして、いつまでも無自覚に「音」の無駄使いをしておりますと、ついには手足を切ることになる。切らなくても、動かなくなる。

低血圧

ふ 四六 五 一九

大自然にも高気圧と低気圧とがあり、この気圧配置は刻々に変化する。流動する。小宇宙の人のからだにおいても、たえず血圧が変化する。それが自然である。

興奮すると血圧が高くなる。興奮が静まって淋しい心になると血圧は下がる。低くなる。血圧の高い人は「憤慨」を「奮闘」にかえていかねばならぬ。低い人は、ひがみ、ねたみを持たず持たさず、互いに励ましあうことが大事である。はげましあいは力である。(中略) 身分の高い人と低い人がある。高い人は低い人を侮りやすく、低い人はねたみ心を持ちやすい。けれども、神の子として誠の道を踏み行ない、誠のわざ

敵 四三 一一 四

を喜びはげむことにおいては平等である。敵にまわって苦しめる人々を喜んで迎える言語動作こそ、徳を積み徳を及ぼしていく最高の実行であります。

敵を愛せよ 解 二八 二〇

よく敵を愛せよと云う事は、不合理のように思えて、無理も無い事でしよう。己を愛して呉れる人なら愛されるが、我が敵を愛せよと云う事は、出来兼ねるのが常であります。なれども敵と雖ども、人の生活は永遠のものであって、我自身も過去において知らず乍らも、敵と思われ、敵になって居た事が無いとも限らず、又己になくとも、其の周囲にあった事を悟って、改める事も、大なる精神修養なのであります。これを因縁因果とも教えられ、原因結果とも教えられます。かような事を認識するまでには説明にあらざ自らの経験にあるのであります。

敵を愛せよ 命 四八 一一 一六六

人の生活は永遠のものであって、わが身自身も過去において、自分は知らずとも敵と思われ、敵になっていたことがないとも限らないのである。また己にはなくともその周囲にあったかも知れぬことを悟り、改めるという事は、大きな精神修養である。これを因縁因果とも教えられ、原因結果とも教えられている。かかることを認識するのは説明でなく、みずからの経験によって悟るのである。

でしゃばる 命 四八 一一 二八八

手の指 振 四二 一 三

出入りの実行 命 四八 一一 二七四

よいことや人の喜ぶことは率先して行うのがよい。よいことにはでしゃばってよいのだ。四本の指は腹が会わなけれども親指には腹が合う。これ即ち合掌なのであります。出入りの実行とは心の交流、物の交流、肉体の交流をいうのである。そして出入りする場合には、敏速に、かつ八方に心を配り、人の喜ぶようにすることが肝要である。

天 命 四〇 一一 一六

話術は天の和(話)と地の和(話)の合掌である。天の和(話)だけでも、地の和(話)だけでもいけない。天は徳、地は愛―どちらに片よつても話は聞きにくい。

天 命 四九 四 六

点 命 三九 八 一九

天という字は「二」と「人」との組合せによつてできています。点は芯である。芯から甘露が入る。芯がくされていては甘露が入らない。「腐る」は

「苦去る」であつて、「九が去れ」ば十になる。「十」は「従」であつて、神・親・

点(採点) ふ 四三 二 九

万物に従っていくことが人の仕事である。

わたくしが会員のみなさま方の言語動作に点をつけるのは、皆さんの答案を見て採点しているのではない。皆さんの大恩に対する感じ方、また人の恩義に対する感じ方、これを基にして採点する。(中略) 点は天であり、天は神であり神は感である。

天恩 か 四四 四 五一

真剣に徳を積み徳をおよぼしてゆけば、新しく切りかえていただける恩典があります。

「天恩」をお返ししていけば「恩典」をいただける。

天恩天借 ふ 四二 二 一一

朝だ、昼だ、夜だと変わるたびごとに迷い悲しみ、不平不満をたび重ねていくと、思いもよらぬ天恩天借となって苦しむことになるのであります。

天恩の慈愛 み 三四 一二 一〇六

天地の間には万物一切が生きて活かされて成長して居ります。その力は皆、無限の徳と力と愛であります。この三つの理を学び修めて行えば、誠に立派な平和が建設されるのであります。天恩(てんおん)の慈愛、父母の恩だけでも弁(わかま)えて実行すれば、患いも転化して福となります。(二月二二日)

天啓 ふ 四四 八 八

出居清太郎の耳が聞えなくなっても、眼が見えなくなっても、全身の毛穴から大極のひびきは伝わってくる。

天啓 ふ 五一 一一 二

大正十四年六月、日蓮上人の遺跡たる日蓮崎俎板岩を拝したときに天啓をいただき、世界の皆様との親善交流を実行と行ないにあらわし、神の子の誇りと万物の霊長である責任とをもって、人格の完成に、平和の国造りに懸命の努力をせよ。近き将来に大戦が始まる。このことを日本政府におさとしをし、陸海軍に謹告せよ。とさとされたのであります。

天啓 ふ 五六 八 四

天啓の意味は、神の子の自覚をしなければなりません。理性や知性から理論的に理解しようとしても、できるものではありません。

天災 ふ 四五 一〇 一八

天災、人災これは結果であります。(中略) いちばん大切なことは心の中の問題であります。人の心の中の問題、これをいかに浄化するかということであり、また前の世から靈魂によって流(中略) それ以前に原因が人の魂に存在しておることや、また前の世から靈魂によって流

されてきているところの毒素というものにきづかなければ、とうてい浄化されるものではありません。

いつも魂を磨きなさい、浄めなさいと力説しておりますが、浄めれば浄めるそのたびに濁ってしまう。(中略) 濁るだけならまだしも、しみこんでしまうと一生忘れない。この苦しみは「俺をこんなに迫害して、私の事業を妨げた」とか「私の人格を傷つけた、一生忘れない」という根性が心の奥底に、自分自身はわからなくても、先代から流れてきているのです。これを本会では天借といっております。(中略) 天借とか艱難辛苦は神慮の試練だから喜んでむかえなさい、という説明には無関心であります。かえって反感をさえもつてまいります。(中略) 神の子としての責任をもつて行動をしてください、また行動できるように、ふだんから訓練をしてください。

(中略) 台風も地震もつなみも、天変地変のおさとしてございまして、それによって、みなさんが心の中の大掃除に心掛け、過去のできごとをよく調査して確認し、神の道から人の道へと進み、自他ともにでなく他自ともに恵まれるよう命の親はさとされているのであります。

地震、台風、洪水…など、天災は天体のわずらいである。すべてのわずらいはきびしい。わずらいは人の都合にかかわりなく起こってくるから、なお、きびしい。これを防止するには、徳をつむことである。終生の奉仕にはげむことである。

天使とは、天の使いであり、太極の言葉を伝えることであります。その太極の言葉を「みおしえ」と称して、教えとして、世界人類の指導者におさとしやお取次ぎする役目であります。

「天借」とは、どういうことですか？ —活かされているこの「大恩」のお返しは全く出来ていないことである。

人はみな、大なり小なり「天借」を持っている。借りているものは、おそかれ早かれ、いずれは返さねばならぬ。返す義務があるからには、早くお返しできれば、これほど

天災 四八七

天使 五〇一

天借 三九一〇

天借 四五六

有難いことはない。病んでお返しする。倒産してお返しする。いずれもお返しである。だから喜ばなければならぬ。

この苦しみは「俺をこんなに迫害して、私の事業を妨げた」とか「私の人格を傷つけた、一生忘れない」という根性が心の奥底に、自分自身はわからなくても、先代から流れてきているのです。これを本会では「天借」といっております。

天借とはなんぞやということになります。知らず知らずに積み重ねてきたその行いが、天地の理法にかなっていないことは、みな天借であります。

個人としては先祖伝来から善にも悪にも、人知で計りきれない不徳の天借が積りかさなっております。

人の道は衣食住であって、生きることであります。この生きることだけですから争いが循環して、さらにそれが天借となり、人の恩義も重って、最後には我執貪欲となつて清きみ魂をにごし革命となり、大戦がはじまってまいります。

万物尊愛といっておりますが、万物尊愛どころじゃない、軽卒にしている。しかも気がつかない。これが天借になる。それから、心、言葉のムダ使い。これも天借になる。この天借を、一人一人がつみ重ねていった時に、補いをするのが終生の奉仕である。言葉の交流というものが違反すると天借になるよ、ということにはわからないから、方程式のように教えられる。

いのちの親はその天借を教えてください。人の恩義も教えてください。どのくらいあるからお返ししなさい、それには実行だと、無条件実行だと、また行いによって人の恩義がお返しできるんだと教えてください。

ひがみを持つ、ねたみを持つ、怒りを持つ、不平を持つ、それが天借になっていくのであります。

その子宮の中で育つうちに、その母親なり父親の言動が、みな子供らに悪循環していくのであります。そうした悪循環が天借でありまして、一つでも己を虚しゅうして、

天借 　　ふ 四五 一〇 一九

天借 　　ふ 四五 一一 一七

天借 　　ふ 四六 一五 二六

天借 　　ふ 四八 一 一六

天借 　　ふ 四八 二 二四

天借 　　ふ 四八 三 一五

天借 　　ふ 四九 一 一五

天借 　　ふ 四九 一 一六

徳を積み及ぼすことによって、天借を払い、お返しができるのであります。

天借 五〇 二 五

天地自然の法則に違反すれば、その天借は知らずといえども大きいのであります。あらゆる面において不平不満や怒りを持ち、己の非を悟らず、周囲の人を誤解したり、言語動作に疑いを持ち、それを他の人に流して大きな不徳を積むようなことがあれば、自らも天借が重なり、他人に迷惑をかけます。

天借 五〇 四 一二
怒れば天則違反で天借をつむことになる。これが「病」（びょう）になり「氣」になるのであります。

天借 五〇 九 一三
天借をお返ししない限り、福はこない。天借は、奉仕によってお返ししていけるのであります。

天借 五〇 五 二
怒りの気持、不平の思いをもったならば、それは天借になるとされており。誰しも天借のない人はありません。知らず知らずのうちに天借を重ねてしまっており、とくに、一番天借になるのは言葉の交流によってであります。（中略）話す内容、話す相手を取り違えておりますと、ついには間違いを起こさせます。当たり前のことと思っておりますが、これが天借になります。（中略）人の心も変化したします。いい方に、いい方に、と心の持ち方を変えてゆく。心配という文字は心を配ると書き表わされますが、悪い方に心を配ってゆきますと、人の心は悪質になってまいります。それが天借になっている。（中略）いのちの親に許されているうちはよいが、許されなくなった時には、この世を終わってもまた次の世で生まれ変わって天借を返してゆかなければなりません。

天借 五〇 六 五
人は取り越し苦労をし、迷信に迷わされ、またそれを人に伝えて迷わしたりして、知らず知らずのうちに天借を積み重ねております。その天借を知らして頂くために、肉体に患いがきたり事業が行き詰ったり失敗したりするのであります。これを運が悪いかしかたがないとか諦めてしまうことが一般であります。

天借 五〇 七 三
各人、言語動作によって天借をつんでおります。天借はみしらせによってさとされる

天借 五 七 五

のであります。

全世界の人類は、神の子でありますから、いのちの親によって動かされているのです。その動かされる中に厳しさがありますのは、天借をお返しするためであります。天借をお返しすることは、無条件であります。わが意を用いて、好きだ嫌いだ、都合がいいとか悪いとか、骨が折れるとか言っております。

自己の悩み苦しみは天地自然の法則に反して自らが種をまき、それが年月たつにしたがつて芽生え花咲き稔っておりますのであります。先祖伝来からの天借が積み重なって伝わってきているのでございます。

天変地変も、病み患いも、不幸と思えば悲しむべきことであります。過去に天借が積み重ねてあるので、それを、いのちの親がきびしく神の子にさとされていることを悟らねばなりません。（中略）我執貪欲で天借も知らず、身の借りものもわからず、ただ、衣・食・住のために清き魂をにごし、浄めもせず、現われてきた悩みも苦しみだけにとらわれて、どうしたらよいのか、ただそれだけを聞かしていただくことが今日まで習慣づけられておりますので、先輩の人たちも、年数を重ねて修養実践しているようでも無条件実行もせず、生きるための我執貪欲で、神の子である誇りも忘れて悩み苦しみ、天借を重ねるばかりであります。

天借 三 一 三

尊いみたまを浄めもせず、磨きもせず、我執貪欲で、神の子の誇りもたず、万物の霊長としての責任もたず、天地自然の法則もわきまえず、身の借り物もわからず、生きるのみ、すなわち、衣食住のことだけで過ごしておりますから、天変地変、人災によって戒められることは事実であります。蒔いたる種は芽生え、花咲き実りくることは、くる年もくる年も、続けられております。この善悪の種がまかれ、天地自然の法則によって天借となり、幸・不幸が、地球に春夏秋冬ある如く変化しておりますことは、ご承知でありましょう。（中略）天地自然の法則を学び修め、国作り・人作り・悠久世界平和を建設して、神の子の自覚をし、身の借りものをさと、世界人類

天借

ふ 五二 三 三

が万霊万物尊愛を無条件実行し、活かされる大恩に報い、人の恩義を忘れず、終生の奉仕に邁進することによって、知らず知らずに天借を払うことができるのであります。万人に迷惑をかけ、国法に逆らうならば人が人を裁くことはできませんが、法律によって裁かれます。天借が重なれば、天変地変によって裁かれます。

天借

ふ 五二 三 四

天則に違反すれば、天借となります。誰しも、知らず知らずのうちに天借が重なっていきます。天借を、無条件実行によって解消し、さらに徳を積んでゆけるまでになるのが、まごころであり、神の道であります。神の道は天地自然の法則によるものであり、人の道は理性によるものであります。この両道の調和が大切なのです。天借を重ねておりますことを懺悔し、無条件実行と行いによって改め、みなおしながら前進してゆくという趣旨は、世界のあらゆる神の子すべてに伝えられるべきであります。

誰しも、国法によって裁かれるようなことをしたいとは思わないでしょうが、そういう経験をしたくないといけない道を通されてしまうのは、先祖からの天借が残されているからであります。そういう道筋を知れば、今から、天借を残さないようにしてゆくことが必要だとなりましょう。

天借

ふ 五二 四 四

天借は、天地自然の法則に違反することから生じるものですから、何の法律の第何条に違反したということは申せません。人には分りませんが、天は知っている。命の親は、子供の行動については、どんな過去も知っているし、どんな未来も知っております。ですから点数（天数）をつけることができる。病み患いの時に神に祈り、お頼みをしたところで、いのちの親は、その天数によって定められた恩恵を施すのであります。

天借

ふ 五三 三 二

言論は自由といえども、口は食べものを頂くだけの口ではありません。口から発生する言葉が毒説であれば「口害」となります。一言のことばが、どれほど有難い幸になるか知れぬほど尊いこともあれば、それが毒説であれば相手の心に五寸釘をうちこむこととなり、にくしみの種を蒔くこととなります。本会の趣旨に、「ことたまのまにまに、みおしえを守りつつ」修養実践せよとありますが、一言の言葉によって悩み苦

しんでいる心がよみがえるし、一言の毒説が一生涯わすれられない憎しみを持たれる場合が、幾億万年も前から子孫に流れてきているのではありませんか。一言の毒説とはいえその人は、それが天借になっていることを知る由もないでしょう。

心の持ち方、使い方は言葉や動作に現れてまいります。病気とは気が病むと書くではありませんか。心が闇みになる。不平の心を持つ。相手にこうされたなどと恨みをもつ。こういう心と心のすれあいは、絡み合って絶え間がない。利子もつく。天借も積もるのであります。時が来れば結果として表われてまいります。

今さえよければそれでよいという目先のことだけにとらわれている心は、我執であります。そうゆうとらわれがありますと、己の心が善に向かっているのか、悪に向かっているのかを見定めることができず、無我夢中であります。無我夢中の心のままに、言葉を出し、物を交流しておりますと、気のつかないうちにどれほどの天則違反を起し、天借を積んでいるのか分りません。心の感情も、そろばんの勘定も、いずれもこのように、無我夢中にしてしまうのであります。これでは、いのちの親に近づいてゆくようなことにはなりません。魂を浄められてゆきません。

天借があれば払わねばならない。天借があれば、どんなに注意しても、泥棒にお金を盗まれたり、病気になって病院のお払いしなければなりません。天借をわからせるために身知らせがある。

迷信を打破する、と本会典範第三条にあります。これは強い心が必要であります。名前を変えなさい、方角が悪い、日が悪い、などといわれて迷い苦しみ悩んでいる人があります。心の迷い、我執にとらわれた判断では、天借をお返しすることにならなればかりか、かえって天借をふやすことになってしまいます。

うらみ、ねたみ、そねみ、こういう気持ちがいかに大きな天借になるか、学校では教えておりません。

私たちの先祖から何十代、何百代と我執貪欲の心がまえが流されてきております。過

天借 五三六四

天借 五三七四

天借 五三一七

天借 五三三五

天借 五三七三

天借 五四九四

天借 五四 一〇 四
天借 五六 三 一六

去にまかれた種には利息がついております。これを天借という。天地自然の法則に反すると生じるのが、天借であります。誰でもある。どんな人にもある。天借のない人は一人もない。（中略）天借というものは、天地自然の法則に違反した事実から生ずるものと諭されていますから、過去を思えば誰しも天地自然の法則に反している筈なんで、したがって天借のない人はいないということになります。

天借 五七 五 四
天借 四八 一二 一八二

ねたみ・うらみ・そねみ これらの感情は一番の天借になってくるのであります。この我執貪欲、これが心のなかに充満しております。我執貪欲を浄化していくには、誠のみちを修め、誠のわざを喜び励んでいくより道はありません。そうしていくと、ろにだんだんと「天借」のお払いもできていくのであります。「天借」といつても、無関心の人もあるでしょう。そこで、—天借とはなんぞや？—ということになります。知らず知らずのうちに積み重ねてきた行ないが天地の理法になっていないときは、それはみな「天借」であります。

天借と神のご試練 五三 一二 一八

——その天借と神のご試練とは、どのように違うのでしょうか。
総裁 同じことです。違いはありません。

——そうしますと、苦難があった時、これは天借を払わせていただいているのだ、と受け取るのと、ご試練をいただいてありがたい、と受けとる区別はどうなのでしょう。

総裁 そのように区別しようとする心がせまい。
——と申されますと、

天借にも利子 誠 四八 一二 一二二

総裁 天借を払わしていただくことが、試練なのです。天地自然の法則によって「天借」にも利子がつきます。ですから、いのりの詞にも、

天借のお返し ふ 四八 一〇 六

—はらいたまひ、きよめたまひ……と、おさとしされてあるのであります。どうしてあんな立派な人が早死にしたんだろう、どうしてあんなに真面目に働いている人が行き詰ったのだろうといいますが、その人たちは天借を返しているのであります。

天借のお返し 五三六三

いまだに苦しい時悲しい時には助けてほしいという感情から発した我執で縋ってくる会員もないわけではない。そういう時こそ、一つでも善行に励もうと誓い、行うことであります。その誓いと行いによつて、天借をお返しするのです。

天借のお返し 誠 四八 一二 一三二

「感謝でのりきれよ」「誠のわざを喜びはげんでいきましょう」とは、つねに教えられておりますが、これが、魂を磨き、天借をお返しすることになります。

天借の支払い 四六六九

誠を捧げて実行する、行なう。これが支払いです。よし、私も天借をお返ししていう、こう決意する。その希望を持つ。希望をもって実行する、希望をもって行う。人の道の希望ばかりでなく、こういう希望を持つてください。

天借の返済 四八二九

本会の趣旨は、身心ともに養い、物心ともに恵まれるよう、己れを虚しうして徳をつみ及ぼし、天借の返済に懸命に実行しなさい、とさとされております。

天借の返済 四八二一〇

みおしえは天の声であり、無限の財産であり、不滅の灯であります。朝は愛であり、昼は力であり、夜は徳であります。この無限の財産をつみ重ねてゆくことによつて、天借の返済ができ、現在も未来も四合せとなり幸福にもなつてゆくのであります。

天借は残る 四八 一二 二八二

神に救っていただくことを簡単に思い、救われても平気でいる人がある。親の代はそれで済んでも子供の代に、その天借が残るのである。

天借を払う 四九 一 一六

一つでも己を虚しゆうして、徳を積み及ぼすことによつて、天借を払い、お返しができるのであります。(中略) 天借を払うことによつて救われていくのであります。

天上 導 三四 一〇 三

無窮であり、奉仕(円満)であります。

天壤無給 四三 七 八

天壤無給——とは天壤無給である。あめつちのめぐみゆたけくきわみなく、天地が万物への奉仕は無給である。

天職 四二 一一 八

本分を尽くす以上は、たとえ職業はいかような職業であろうとも、与えられた職業は天職であり、生命のつなぎですから、どこ迄もやりとげねばなりません。

天職 命 四八 一二 七〇

「笑う門には福来る」というのに、たえず難しい暗い顔で暮している人もある。自分の天職はなんであろうかと思ひ迷わず、与えられた仕事は天職と思ひ笑つて働くこと

天知る 　　ふ五一七三

である。

人が、他の人を悪く思っても、また悪口を言っても、それだけでは罪になりません。人の道で裁かれることもありません。どんな人から誤解されても、悪口を言われても、つぶされても、天が知っている、いのちの親が知っていると、その環境をしのいでゆけと教えられています。どのような誤解や悪口があるうと、天が知っていると安心立命する。いのちの親が、次の代にどのようにしてくださるか、いのちの親が知っていただくから、お任せすればよいという気持をもてればよいのであります。

点数 　　ふ三八一一二五
天数は寸分の狂いもない。まことのつとめをしただけが、月々年々にキチンと清算されて環境に現れる。

人と人が互いに向き合い、その中心に点（天）をうつと「以」（い）となる。点は誠であり点数である。点数は誠を捧げて実行と行いとに現わして始めて天から頂けて仕合わせになる。

点数 　　ふ四三一二二
点数は天の数ですから、神の啓示を仰がないと発表できない。
点数は天借がお返しできたときに始めていただける。
天借は、天地自然の法則に違反することから生じるものですから、何の法律の第何条に違反したということは申せません。人には分りませんが、天は知っている。命の親は、子供の行動については、どんな過去も知っているし、どんな未来も知っておりま

す。ですから点数（天数）をつけることができる。病み患いの時に神に祈り、お頼みをしたところで、いのちの親は、その天数によって定められた恩恵を施すのであります。親を否定し、恩師を否定し、大事な恩人も否定するような根性は許されません。これらはすべて天則違反になっていくのであります。

天則違反 　　ふ四八七七
言葉では不平をいわなくても、不平の不、不満の不をもつことがないとはいえない。それは天則違反であると、いのちの親から戒めをいただいたりします。

天則違反 　　ふ五一八二
人の言葉が終わらないうちにその言葉を切る、あるいは廊下を通って行っても行ける

のに部屋を横切って行く、子供の心を押しつけてしまう、これらの言語動作、あるいは心の持ちかた使い方などは、天則違反ということが少なくないのであります。

自分が人に迷惑をかけていながらその結果として信用を失ったことを淋しく思うような心は、天則違反であります。

天則違反の解消がなされていないから、個人にとつてはみしらせとなり、社会では人災、天災となり、国と国とでは戦争になってまいります。そうなつてようやく、人は自己の心のあり方を教諭されるのであります。そこまでいかないと気がつかないのが、現状であります。

濁れる魂を浄めもせずにいるということは、天則違反である。これが神の子すべてに自覚されるまではなん年もなん年もかかりましょうが、本会の趣旨はこれに尽きると言つてもよいのであります。

今さえよければそれでよいという目先のことだけにとらわれている心は、我執であります。そうゆうとらわれがありますと、己の心が善に向かっているのか、悪に向かっているのかを見定めることができず、無我夢中であります。無我夢中の心のままに、言葉を出し、物を交流しておりますと、気のつかないうちにどれほどの天則違反を起し、天借を積んでいるのか分りません。心の感情も、そろばんの勘定も、いずれもこのように、無我夢中にしてしまうのであります。これでは、いのちの親に近づいてゆくようなことにはなりません。魂を浄められてゆきません。

嫉妬心、そねみ、恨みは天則違反である。

みしらせは魂を浄めるために頂くのですから、魂の診察のできない人が、自分の憶測で何やかやと申すことは、即ち、天地自然の法則に反する事なのであります。

心の無駄使いをしていると云う事は、如何に皆さんは精神的に淋しいでしょう。物も同じであります。物がなくなつてきて、ごらんなさい淋しいでしょう。物がなくなると云う事は物を不経済に、そして大切に取扱わないと云う事は常識的に分つて居りまし

天則違反 ふ 五二 三 四

天則違反 ふ 五二 三 四

天則違反 ふ 五三 七 四

天則違反 ふ 五四 一 一

天則違反 ふ 五四 一〇 五

天則違反 捧 二四 一二 五

よう。心の無駄使い、これは精神的に淋しいでしょう。心の無駄使い、物の無駄使い、これを毎日やって居ると云う事は天則違反として罰せられます。天の法則に依って罰せられます。

天則違反 命 四八 一二 一六九

天地 命 五〇 一 七
心の取り扱いと肉体の取り扱いに対し、責任を怠れば天則違反となり重罪である。天地があつて夫婦があり、また陰と陽、昼と夜とがあります。また、火・水・風があります。

天地 命 五〇 一 九

日本は日の本、東洋の中心である、東洋は太陽の出ずる東の方であり、洋は太陽の陽であり大恩は熱であり愛である。また平和の和である。日月である。日月は陰陽であり、夫婦なり、天地は父母であり、また父母の上には祖先、その大本は太極、その教科書は地球上においては万霊万物尊愛であることをさとされました。

天地 命 五七 一 四

天地を和合して夫婦とつけられております。天は父、地は母であつて、月は父であり太陽は母であります。日月を調和して夫婦と諭されてあります。

天地 命 三四 一二 八〇

天地は常に変らず正大なものであります。誠は天の道で無限であります。これ即ち神とも称し、仏とも教えられて居ります。(二月八日)

天地 命 三四 一二 二〇六

天に日月星辰あり、地には万物あり、天と地は常に円満に行動しております。天地の行動は善なるもので、誠は天の道、これを行うは人の道。(四月九日)

天地 訓 一八 八 三六

天地は何時も和合して自然の法則通り活動して居ります。あの天を眺めた時は、太陽と月と争いをすると言ふことは絶対でないことで、このような争闘がなければ病も発せず、損害も、怪我もなく迷いもなく通られるのであります。

天地 誠 四八 一二 二〇

天は父であり、地は母である。天地だき合せによつて——男女の抱き合せによつて、お子さんが生まれる。(中略) 心のなかは見えないが、その言語動作によつて心のなかの診察ができる。肉体は心の命令によつて動いている。肉体を動かしている心は見えないが、肉体の動きは、目に見える。肉体の動きは、さらにまた物を動かしていく。

天地自然 命 三九 一 一九

人の造つたものには裏、表があるが、火・水・風には表裏がない。天地自然には表・

裏がないよと教えている。天地自然の法則を学び修める捧誠会の皆さんは、自然が示すとうり、ありのままの気持ちで、ありのままに進んで頂きたい。

天地自然は自由と平等の象徴である。太陽と月の光り、空気は地上の万物に平等である。(中略) 借りものの肉体も自由を示している。便所に行きたくなれば行けばよい。誰もそれを止められない。眠くなれば寝ればよい。誰も、止めることはできない。その自由を守られているのがこの借物の肉体である。それを、わが意を用いて自由を束縛している場合が非常に多いのではあるまいか。

天地自然には、おのずからなる調和と美とがあります。平和と秩序とがあります。その自然の中に生きて活かされ、生成発展を許されている人の世には、調和が破られ秩序が乱されて混乱と闘争とが繰り返されております。なぜでしょうか。なぜ人の世だけが自然の律の外にはみ出ているのでしょうか。(中略) 自然は巨大なる循環を狂いなく行います。春が過ぎていけば夏になる。秋が暮れていけば冬がくる。ここにも突如の変化はなく、徐々に静かに移り変わりが行われます。この運行の秩序はいつまでも変わらず狂いませぬ。

運行の健やかにしてやむことのない回転をしております天地自然の動き、黙々として地上に光を与える日月。すべて無条件に万物を生み給う自然の中に、なにも知らず、裸で生まれてきたのが私達です。

一二三と全てが三の理でありまして、一と二の間があやまりますと中心をあやまりますから、一も三も狂い、破壊されるのであります。

天地自然の法則は偶然ではありません。大自然は無限大であり、限りのない大和であります。これ即ち○であります。

神の子の自覚によって迷信を打破し卑俗なる奇跡を否定し、動揺転倒しない人格の完成に邁進する、それが天地自然の法則を行うことでもあります。

徳と愛と力が基である。

天地自然 　　ふ 四四 一〇 一八

天地自然 　　太 四四 一一 六〇

天地自然の動き 　　ふ 五三 七 四

天地自然の原理 　　ふ 三六 二 三

天地自然の法則 　　ふ 三五 三 四

天地自然の法則 　　ふ 三五 一一 五

天地自然の法則 　　ふ 三六 三 三

天地自然の法則 ぶ 三七 一一 二

天地自然の法則にしたがうということは、大恩に報いるということでありまして、すなわち真心で良い気持ち良い言葉、良い行いをしなければなりません。

天地自然の法則 ぶ 三八 一一 三〇

天地自然の法は、人の法どころではなく、もつと峻厳である。

天地自然の法則 ぶ 四〇 五 二四

天地自然の法則に伴って行く第一歩は、火水風の尊さ、その御恩を知ることから始まる。この中には時間を尊び時間を厳守することも含まれる。

天地自然の法則 ぶ 四〇 六 三

天地自然の法則は、その頃も今も少しも変わっていません。(中略) 自然の法則は永遠に不変であります。

天地自然の法則 ぶ 四〇 一二 一八

天地自然の法則を学び修めるとは、先ず「行き通い」の大切さを知ることである。(中略) 「行き通う」ということは「息かよう」ことであり、ここに「いのち」がある。

天地自然の法則 ぶ 四一 一 五

天地自然の法則には、「待った」がありません。

天地自然の法則 ぶ 四一 一二 三

天地自然の法則は無限であり、また、実に厳しい。

天地自然の法則 ぶ 四二 六 八

自然の法則に従えば智慧も求められ、清き血しおもふえてくるのであります。

天地自然の法則 ぶ 四二 九 九

天地は常に和合して法則通り運行しています。太陽と月とが斗争したことはありません。大宇宙は大調和の中につつまれておって平和そのものであります。このように斗争さへなければ病も発生せず、損害も迷いもなく通れるのであって、これが天地自然の法則であります。

天地自然の法則 ぶ 四三 六 二

天地自然の法則とは文字に書かれざる古今不磨の大原典である。(中略) この原典は無窮である。これで読みつくした…という終点がない。

天地自然の法則 ぶ 四四 二 二〇

自然の法則は「ひー」「ふー」「みー」であります。一、二、三であります。火・水・風——天・地・人であります。(中略) 万物が活かされております。生まれる時も「産」、山も「山」「胃の中の液も「酸」、経済も「産」です。

天地自然の法則 ぶ 四四 九 一一

自然の法則には偽りはありません。

天地自然の法則 ぶ 四四 九 一一

天地自然の法則は自由であり、平等なのであります。

天地自然の法則 ぶ 四四 九 一二

命の親が作った天地自然の法則というものは、これは人が自由に改造することができ

天地自然の法則 　　ふ 四四 一〇 一五

ない。

柿の実がなった。(中略) その「なった」という意味は、種があつて種が芽生え、成長し、花が咲いてみつけたことをいう。病気になるた、貧乏になった、困つたことになつた——人生においてなつてくることも、すべて種があり、それが時期を得て「なつて」きたのであり、これは天地自然の法則である。この理合いを心から悟れば、喜んで勇んで刈りとつていく勇氣がわいてくるはずである。神の子の自覚を持つておれば「どうしたらよいか」というような迷いにおちいらぬ。

天地自然の法則 　　ふ 四五 一 一二

天地自然の法則とは (中略) 人生にはいろいろ変化があります。善にも悪にも変わつてくるが、それを良い方に考えなさい、良い方に言葉も使い、心も使い、肉體も良い方に使いなさいということでもあります。

天地自然の法則 　　ふ 四五 一 一三

今日一日のおかげを身にしみて、心の底から喜びのお礼をつつしみ敬つて、そしてお礼を申し上げるとともに反省をする。(中略) 「不愉快な思いをして不平を思つた」「あの人を悪く思つた。誤解をしてア—すまなかつた」というて、夜にお詫びして明日の新しい日を迎える心構えを作つてやすむ——このように勉強してゆくこと、これが天地自然の法則を学ぶことでもあります。

天地自然の法則 　　ふ 四五 三 二

天地自然の法則は人の世の法律よりも崇高なものであります。おのれは正しい、すこしも誤まつてはいないと自信もつておりましても、厳しい理法に照らしてみると足らざるところが多々あります。人はその点に気づいておりませんが、法を犯かしているのでありますから犯罪であることにまちがいはありません。

人の世の法律は常識として、また、いろいろの場において教えられるので、心得ておりますけれども、天地の法則については学校で教えられることではありませんので、ほとんど無関心です。本会々員として、ここに意をおいて、学びおさめていかねばなりません。

天地自然の法則 　　ふ 四五 一〇 二三

地球は天変地変に加えて人災までが加つてくるまわつております。これを捧誠会

天地自然の法則 　　ふ　四六　七　　二二

では、因果の理法とか天地自然の法則とっておりますが、人が生れて一生を過すあいだには、いろんな苦難を身に背おわなければなりません。

天地自然の法則というものは、まず呼吸のようなもので、呼吸というものは寝ても覚めてもたえず息通うのであります。この呼吸のないときは肉体は冷たくなるということとは理の当然でありまして、呼吸は五分五分であります。ハァーと出して、出しただけまたいただくのです。つまり交流しておる。

天地自然の法則 　　ふ　四六　一〇　　一八

太極の存在は火・水・風である。徳と力と愛である。万物尊愛である。天地自然の法則は火・水・風、ヒ・フ・ミ（一・二・三）この真理が神の心である。おおみ心であります。

天地自然の法則 　　ふ　四七　九　　三

父あつて母なければ、また母あつて父なければ意味なく、また子なくしては子孫は繁栄しないのであります。この三原則は天地自然の法則であつて、このことわりを声なき声にさとされたのであります。

天地自然の法則 　　ふ　四七　九　　四

とつたものはとられる、借りたものは利子をつけて返さなければならぬ。これまた天地自然の法則である。

天地自然の法則 　　ふ　四八　二　　九

これは名言であります。文化生活を営んでゆくためには、汚れものや又いろいろな製品のとり扱いを心得なければなりません。とくに人のとり扱いは大切です。親、子、兄弟、この世で血のつながりの方々、また過去からつながっております魂の結ばれた人たちは、他人のような心でとり扱いせず、親戚同様に自覚し、神の子としての存在を悟つてとり扱いをしなければなりません。神の子であり万物の霊長である人を、権力や金や名誉でとり扱いをするようでは、天地自然の法則からゆきますると違反であるといふ心得ねばなりません。

天地自然の法則 　　ふ　五〇　五　　一二

天地自然の法則に従つていけば、迷信にもこだわらない筈でありますのに、日常の受け取りかた方によつて、勘違い、取り違い、思い違いで迷う。

天地自然の法則 　　ふ　五〇　六　　三

万物の過去と現在と未来を天地自然の法則に因つて支配しております。一代や二代で

は天地自然の法則を理解し悟るということは到底できるものではない。なれどもこの理を心の底から悟れよと命の親は神の子に諭されており。毎朝、私自身も心の底からこの理を悟れと、誓いの詞を拝誦させていただいております。この理を心の底から悟るには体験するより外はないのであります。学問ではありません。学問だけでは到底悟れるものではない。実行して体験をしなければ、それは知るよしもないのであります。

小さな家庭の中の日常でも、ついさっきまでは楽しい団らんをしていたのに、突然に言葉が止まり気づまりな空気となり、家庭内の対立や混乱にまでなるかもしれません。朝は元気で職場に向かった人が、白木の棺にはいつて無言で帰って来る場合もあります。このような出来事は毎日発生しています。それを防いで、そうならないようにしてゆく為には、その種はどこにあり、どう実っていくものかということを知らねばなりません。その法則が、本会という天地自然の法則なのであります。その法則にもとづいて万物が進行しているのであります。

天地自然の法則

ふ 五二 一 四

天地自然の法則は天の道であり、国法は人の道であります。

天地自然の法則

ふ 五二 二 三

地球の回転はたゆみなく、月が悪い、日が悪いという悪説を言われても、日月は黙々と進行し、世界を照らしております。この姿に基づいていくことが、天地自然の法則にかなうことなのであります。

天地自然の法則

ふ 五二 三 二

天地自然の法則は悠久で、人が決めたものではなく、この世を生みだしたいのちの親に基づくのであって、その法則は大宇宙の真理であり魂である。

天地自然の法則

ふ 五二 四 四

天地自然の法則に従っておりますことが根本であります。ここをよくさとつてくださいます。天地自然の法則は平凡であって、平凡なところが悠久であります。

天地自然の法則

ふ 五二 五 三

天地自然の法則もそうなのであります。いのちの親は、神の子を守り、生成発展するように念じておられるのです。

天地自然の法則

ふ 五二 八 五

天地自然の運行は待たなすであります。そして無条件であります。人は自由なる意

志を与えられています。この無条件の進行という姿から学ぶだけの能力も与えられているのであります。

宇宙に於ける星の交流は無条件であります。その調和の姿は天地自然の法則にそった姿であります。

天地自然の法則は呼吸である。息は吐くから入る。それは地球も宇宙も息をしている。風も呼吸している。海の引き潮、上げ潮これ呼吸である。いのちの親、神のご意志は人に、万物の霊長に、分け御魂として差し上げています。濁したり傷つけたりしないように、常々洗い浄めていくようにと示されています。もろもろのまがこと罪けがれを払い清めよと昔から諭されています。これは宇宙の息と呼吸を合わせる為である。天地自然の法則は空に輝く日月であり世界を照らす星である。又北辰星は悠久に動かない、これが天地自然の法則である。北辰星に外れる時に航海の軌道より外れる。(中略) 息は鼻から吐き出し新たに空気を入れる、出すときは濁り入る時はよい空気として入る。これが善悪である。ことたまのまにまにみおしえを守り無条件実行が平和建設であり、これが大和である。日の本は神国で大和魂と伝えてある。日の本は太陽の下である。万国太陽の下にある。その中であって日本のみ日の本という名を頂いている。神国と云われる所以である。

天地自然の法則は、太極から発したものである。どんなに時代が変わっても天地自然の法則は不変の原則であって、これに反することは大罪であります。

兵器を持つて争い、人命、財産を奪い合う戦いは勿論のこと、言論をもって人心を傷つけ損なうことも、天地自然の法則の違反であります。

天地自然の法則とは、地球が回転しているこの事実、この現実を成り立たせているものを法則と称するのであります。肉体の器官やその働き、相互の影響にも、地球の回転と同じように、法則があります。食べ物を頂けば胃に入る。胃から腸に行き、消化、吸収されて、大便に出てくるというように、目には見えませんが、絶えず物は交流して

天地自然の法則 五三 一 九

天地自然の法則 五三 二 九

天地自然の法則 五三 七 四

天地自然の法則 五三 一〇 三

天地自然の法則 五三 一二 二

おります。回転しております。法則の通りであります。

天地自然の法則
み三四 一二 二二一
天地自然の法則とは、心の交流、言葉の交流、肉体の交流、物の交流を言い、この四つが原則であります。（四月十一日）

天地自然の法則
み三四 一二 三〇九
天地自然の法則は、陰に陽に怠ることなく巡り巡って万物を成長させているのであります。（五月二十九日）

天地自然の法則
み三四 一二 四一四
天地自然の法則は偽りの無い無限の大道であり、神の道であります。何処迄行けども果てしなく、行けども行けども限り無く、誤りなく、正しい広々とした道なのであります。（中略）神の道は数理によつて計ることもできませんし、心の道も亦同じであります。（中略）神の道の人智で研究すること等は不可能なことで、研究しようとするほど益々迷うのであります。実に尊い道であります。（七月十九日）

天地自然の法則
み三四 一二 五七〇
天地自然の法則は、万物を生かし成長させて行く無限の徳と力と愛なのであります。（十月二日）

天地自然の法則
み三四 一二 六一八
一日は、朝・昼・晩、朝は一、昼は二、夜は三。一日一代、朝日が東より出て西に没する迄の一日は一代と信じなければなりません。朝は一日の出発であり、万物の始め、この世の始めであります。朝、油断をしたり、不平を思い不満を言うて、床から起きあがることに喜びもせず、（中略）先ず一日の言動から学び修めて実行せねばならないということであります。明日の日があるからというような自惚れや油断は決してなりません。一で出発、二で改め、三で反省感謝し乍ら、誠業に喜び励んで行かれる人こそは、真に幸福な人であります。（十月二六日）

天地自然の法則
み三四 一二 六七五
天地自然の法則とは恩人の処へ出入りしたり、よい言葉をかけ合ったり、物を喜んで上げたり戴いたり、良い心の念を送り合ったりすること、即ち交流であります。

天地自然の法則
み三四 一二 七〇四
（十一月二二日）
天地自然の法とは、神の道と人の道の両道を学び修め、実行することなのであります。

（十二月六日）

天地自然の法則 敬 四〇 一一 四三

地球は一瞬の休止もなく回転し続けており、従って時間もまた刻々に流れている。これは終始一貫の活動である。天地自然の運行は、すべて「待ったなし」である。これが自然の法則である。

天地自然の法則 敬 四〇 一一 二三七

いかなる現実のめぐり合わせも「これでよし」と受取るのは天地自然の法則との和合であり、これ以上大きな「和」はない。世に「めぐり合うのも縁」という。ここにいう「縁」は「円」に通い「和」に通じていることを思わねばならない。

天地自然の法則 敬 四一 一一 七三

これは出居清太郎は神の子として、どこまでも天地自然のこの道を守りぬいていくという宣言であった。神の子は神の子として歩む道が自からあるべき筈——これを「天地自然の法則」というならば、この法則にしたがって歩む出居清太郎であって始めて「神の子」としての資格があるのだとする私の信条の披瀝でもあった。

天地自然の法則 敬 四二 一一 一七〇

天地自然の法則とは、地球の回転と共に万事、交流循環する事柄であります。万事の交流循環正しくとは、動揺転倒することなき姿、強い姿であります。強いことは善であり和であり、平和な姿であります。平和な姿が築きあげられてこそ、強く正しいのでありまして、それには天地自然の法則を理解して、各自が実行しなければならぬのであります。

天地自然の法則 敬 四二 一一 二二六

祖先ありて民あり、親ありて子あるは、これ自然の理法。天地一体となりて万物生ずるが如く、男女一体となりて子は授かる。すべから須く天地自然の法則に則り、神の道、人の道を実践躬行すれば転迷開悟、生成発展の道、自から開かるべし。

天地自然の法則 敬 四二 一一 二八七

天地自然の法則

(心) 目には見えねど心こそ よきにあしきに動くなり

それを見定め理解して 心の交流するぞかし

(言) 言葉を常につつしみて まるくやさしく清らかに

出して出させていくならば 仇なす人もなかりけり

(体) 体の動きは機械なり 無理に使えばこわれゆく

よきことするもなさざるも 体の動きでままるなり

(物)物の動きも生きるため 仲よく暮らす糧として

上げていただくその時は 誠捧げてつくさなん

天地自然の法則 敬 四二 一二 二八七

天地自然はこれすべて行き通いである。運行がよくないのが不幸、不運である。これは四つの交流が欠けており、正しく行われていないことを示す。

天地自然の法則 振 四二 五 二

天地自然の法則は交流であると教えております。私共の日常生活において、心の交流、言葉の交流、肉体の交流、物の交流、この四つの交流は絶えず行なわれており、この四つの交流を強く正しく、まごころで、誤らないようにする。心と言葉と肉体と物を無駄の無いように、お役に立つように、お互いに調和し、協力互助で動かしてゆく、それが交流であり、それが法を尊敬、愛し、法に従い、仕えることであります。

天地自然の法則 振 四三 三 二

この世始まりは無極であり、無極から大極となり、大極から天地が生まれた。天地に陰と陽があり、夜と昼があり、万物には男女の別があります。陰陽の道理は常に円満な姿とされ、人には男女の姿を以て教えられています。天地の運行はたゆみなく、自然の法則に基いて円満に行動しております。天地自然の法則は陰と陽に円満に廻り、万物を生み、生成発展させております。天は男であり、地は女である。陰は男であり、陽は女である。夜は男であり、昼は女である。夜は、よる、寄る、纏る、即ち集まること、又糸にしても、ロープにしても一本では纏ることが出来ない。二本以上の糸が合掌してゆく事を纏って行くと云う。即ち合掌して、相寄り、相纏ることが、夜と云うことたまになるのであります。

天地自然の法則 振 四三 九 四

天地自然の法則は、皆様もご存知の通り四つの交流、これを環境に順応しておこなう。この環境に順応することが、一番素直な生活であって、これによって安心立命の境遇に達する事が出来るのであります。

天地自然の法則 誠 四六 六一七一

天地自然の法則は絶対の「ことわり」であります。これを「理」と申します。地球が回転しているのは一つの理であります。理は絶対であり、待ったなしであります。い

くら合掌して願っても地球の回転は止まりません。待ったなしであります。この理に添うて、心も言葉も肉体も物も動かしていけば、不自由も争いも、だんだんと遠ざかっていくのであります。

天地自然の法則 誠 四八 一一 一六

われわれは目で見て耳で聞いております。万物は、われわれの教科書として教えてくださっている。雲、風、水——その動きは天地自然の法則によっているのでありますから、それを学び修めていかねばなりません。この行動を、この教科書を現わしてくださるのが天地自然の法則であります。そこで、天地自然の法則のよって生ずる太極を神として崇敬し、その法則を学び修めて前進していく——いかに、きびしくとも前進していくぞという決意をもっておりましょう。そこに本会の趣旨があります。

天地自然の法則 誠 四八 一一 四二

「語呂あわせ」といいます。語呂あわせは「合掌」であります。天地自然の法則もまた「合掌」であります。これよりほかにありません。「独唱」でなくて「合唱」である。自然は「大合唱」です。いろんな声が聞えてくる。声なき声も聞えてくる。

天地自然の法則 誠 四八 一一 七〇

徳と愛と力とは天地の理法であって、天地自然の法則とも教えられております。また、人は神の子であるという自覚を持って、この身は借りものなりと、太極のひびきによって、さとされております。

天地自然の法則 導 三四 一〇 八六

血液は道であり、天地自然の法則の道であります。誠の道をふみ行い真の業を喜び励み、うからやから諸人達は一億一心であり同体であります。あの人は嫌いな人だ好きな人だと選り分けをする心構えなどは、誠の道をふみ行っていない証拠であります。

天地自然の法則 導 三四 一〇 一六二

天地自然の法則の道即ち神の道に入る。神の道とは、心を養う道であって、人の道は又肉体を養って行く、心を養う事と肉体を養う事と両方が相調和して、そして私達の生活が出来るのであって、こういう処に教えの重点があるのであります。

天地自然の法則 命 四八 一一 四九

魂を肥らせ立派なものに仕上げてゆくところに宗教がある。人の道は人倫道徳ゆえにみんな知っている。人の道を超越して神の道がある。これ天地自然の法則である。

天地自然の法則 命 四八 一一 五六

道はすべてのものの根源である。天地自然の法則はすなわち道である。道から離れ

天地自然の法則 命 四八 一二 七四

ば家庭は乱れ健康はそこなわれ、すべてのことが狂ってくる。天地自然の法則は自然の憲法、神の憲法である。これに基づいてゆくことが捧誠会のみ教えである。

天地自然の法則 命 四八 一二 一七九

あらゆる生物が生成発展しているが、すべてみな天地自然の法則、即ち神の法則に基づいて成育しているわけである。人類の幸福もまた神の法則に基づかねば、とうてい得られるものではない。

天地自然の法則を学び修める 命 四〇 六 三

「肉体」と「心」と「みおや」——この三つの原則を学び修めて頂きますことが、天地自然の法則を学び修めることになります。

天地自然の法則を学び修める 命 四五 一一 一八

天地自然の法則を学び修めることは、まず太極を悟ることである。花を見て喜ぶ人は沢山ある。実った柿や梨やリンゴを食べて喜ぶ人はあるがその花を咲かせ実らせた元は大地の中にある、眼に見えないひそんでいる働きの根であることに気がつかない。

天地自然の法則を学び修める 命 五三 六 二

地球は人知人力でできたものではないということ誰しも知るところであります。科学者がいろいろな原理を発見し、各種の機械を發明しておりますが、天地自然のすべての道筋が明らかになっているわけではありません。私たち、万物の霊長として生を受けたことを自覚したら、まず、天地自然の法則に従ってゆくことが大切なのであります。それには、自然の法則に従ってゆかねばなりません。この学びは、実践によるのであります。行うことなくして、天地自然の法則を学び修めることはできません。

死か生かの最後のところまでやり通して切り抜けて初めて、天地自然の法則を真に味わうことが出るのであります。そうなると無条件の感謝が生まれてまいります。(中略) すべての神の子は、天地自然の法則によって治められているといってもよいのであります。この法則は、国の法律のように六法全書に書かれたものではない。ただ実践、行いによって味わってゆくのであります。

天地自然の法理 命 四八 一二 二八八

天地自然の法則は天理であり、法理である。これを悟らせるために病氣もあり、苦勞もある。これに対して怒ったり、悔んだり、嘆いたりしてはならない。

天地の運行 ふ三五 四 四

天地の運行は協力と融和によってたゆみなく運行しております。又人の肉体の器官もその通りでありまして、どこか故障を起こした時には、身動きできないほど苦しいのであります。

天地の学修 振 四三 六 二

天地自然の法則を学び修めると云うことは、万物の動きを見聞し、これを教科書として勉強することなのであります。万物の動きを見て我が事のようにするには容易ではない。然し一つでも少しでも悟れるように学び修めてゆく心掛けが必要である。

天地の行動 み 三四 一二 二〇六

天に日月星辰あり、地には万物あり、天と地は常に円満に行動しております。天地の行動は善なるもので、誠は天の道、これを行うは人の道。人は何時の世にも善行を重ねて行く可きことが、各自の幸福であることを教えられております。(四月九日)

天地の大道 命 四八 一二 一〇四

親孝行をせよというならば、まず、孝行されるような親にならねばならぬ。天地の大道は一つである。みずから正しい道を行けば、人もまたその道を来るであろう。他人を責めてはならぬ。自厳他緩の精神を忘れてはならぬ。

天地の法則 告 二四 二 七

女の人は「愛きよう」とも古き昔から教えられてあります通り、女の人から男の人に誠の愛を捧げなければなりません。是が天地の法則なので男の人から誠の愛を頂くことは順序が違うのでありますから思い違い取り違いとなりまして心と心の争いとなり心を破壊されることとなります。

天地の法則 ふ 四八 四 六

この真理は天理であり、自然の法則であり、天理教の教祖が、地と天とをかたどり夫婦をこしらえきたるでな、という言葉霊は天地の法則なのであります。

天地の法則 命 四八 一二 二二二

人は天地の法則によって罰せられることを、「運が悪い」とか「不幸な人だ」とか「可哀そうだ」とか「気の毒」だとかといっている。そして、別にこれを恐れず、平気で当り前のように思っているが、かかる人は「天地の法則」によって罰せられることが、国法によって罰せられることよりも重大であることを知らないのである。

天地の法理 み 三四 一二 六四一

夜と昼とが絶えず回転して、春夏秋冬あり、火水風あり、それによって万物は活かされているのであります。天は父であり、地は母であります。月日の運行は生きて活か

天地の法理

み三四 一二 六六八

される天地の理法に逆らわず活動しております。人も天地の法理に基づいて実行することを誠の業と教えられ、尚、誠の道を踏み行うことは、人として大なる責任であることを教え示されております。(十一月五日)

万物凡てが成長し活かされて行く尊さは、陰と陽との協力と融和であります。(中略) 親指が如何に力があると申しましても、親指だけで物を持つことは不可能であります。二本の指が相和してこそ物が持たれるのであります。世の中は、持ちつ持たれつ、話し合おうて協力する所に愛も徳も備わってくるのであります。人は天と地との間に生きて活かされております以上は、天地の法理に基づき、万物に感謝の誠を捧げながら各自に与えられた責任と、義務を全うしなければ、幸福になろうと欲しても幸福にはなりません。(十一月十九日)

天地の法理

み三四 一二 六七二

常日頃、腹を立て、不平不満を心に抱いて居りましても、人の作った法律では咎められません。なれども天地の法理から申しますと如何に重い罪になるかということをお教えられないものですから、毎日の様に腹を立て、不平不満の心で活動している人が多いのであります。不平不満を言うことは、譬えて申すならば、薬罐の中に泥水を入れて豊や座布団に零して歩いたり、新しい襖や障子に落書きするようなものです。腹を立てるということは、他人の美しい心を濁し、又心を惑わし、破壊し、傷付けることになりしますので、重罪であることを悟れば容易に腹を立てることは出来ません。

(十一月二一日)

天地の道

命 四八 一二 五三

天地の恵み

導 三四 一〇 一六

天地の道は誠であり、その誠の道をふみ行うことが人の道である。畳の上、布団の上、又野宿しておりましてもその時は人にお世話になっておりません。なれども天地のお恵みには絶えずお世話になっているのであります。天地のお恵みに、お世話になることが八十五パーセント、人の御恩が十五パーセントなのであります。天地のお恵みの方が人のお恵みよりも大なるものがあります。

天地の理法

ふ 四七 九 一五

必要に応じては稲光という光が発生します。雷とも申します。この稲光によって稲穂

天地の理法 　　ふ 四八 一 六

が実り実らせる、ワラの根が伸び太ってまいりますことは天地の理法であります。打てば打たれる、奪えば奪われるの理で、殺人をすればいずれの世にか、みずからも自殺をするか、殺されることになることは天地の理法であります。

天地の理法 　　ふ 五一 一二 六

天地の理法は、天・地であって、和であり、また無限であります。息通う（行き交う）とくにこれを交流ときびしくさとされますが、片道ではありません。出てはいる、行って帰る、合掌であります。本会の教典においても、神慮に合一する、すなわち、神と人とは二つであって一つであります。

天地の理法 　　ふ 五四 七 二二

万物の霊長が、なにやかや私生活のために、衣食住のために、いろいろな憎しみを持つたり持たしたりしての争いは、これは許されない。天地の理法からいきますと、許されません。

天地の理法 　　ふ 五四 一二 四

神の道と人の道は天地の理法であって、悠久であります。神法一と綱領一とに示されているように、このお諭しを神のみこころとして無条件実行をしなければならぬのであります。（中略）いつまでも生きるのみで、衣食住を中心に動いているだけでは、万物の霊長としての誇りも、神の子としての自覚も失って、富や権力や名誉を争うような野獸性に陥ることを悟らねばなりません。

天地の理法 　　み 三四 一二 五〇六

夜があれば昼があり、陰陽があり、男女があり、「イザナギ」「イザナミ」の二柱の神があつて子孫が続いて参りました。生物には男女があり、和合し協力し、苦しみも悲しみも喜びも話し合い、仲良くすることが天地の理法であります。（九月一日）

天地の理法 　　太 四四 一一 一〇六

天地の理法によって地球はおのずからにして回転している。この理法を無視すれば、火と水との闘争になって地球は滅びる。

天地の理法 　　命 四八 一二 五三

天地の道は誠であり、その誠の道をふみ行うことが人の道である。呼吸器病には特に医師から安静（あうんせい）転地療法（天地療法）と注意を受ける。

転地療法 　　導 三四 一〇 八三

あうんは天地であり、せいは調和であり、和合即ち円満であります。誠は天の道であり、これを行う事は人の道なのであります。天の道、即ち神の道、人の道を行えば呼

天然自然の味 　　ふ三八 一二 一六

吸器病という病になる事はないのであります。

人間のつくる料理には、甘いこともあるし、辛いこともある。砂糖や塩加減が必ずしも同じようにはいかない。天然自然の味には、それが無い。何時食べてもおいしい。ことに米や水や空気になると、七十年たべつづけ、飲みつづけ、吸いつづけてもあきることがない。そこには命の親の「まこと」がこめられている。我々の人生行路には、悲しいことも、辛いこともある。しかし、これは全て、心の味わい方一つによつてきまる。どのようなことも「おいしく頂けるような心」になるよう、我々は日夜勉強しているのである。何でもおいしく、喜んで頂けるのが「まこと」であり、そこに「いのち」の養いがある。心の味付けを学び修めたい。

天然自然の法則 　　い 一八 一〇 九

天然自然の法則は無限のものであつて、その時に応じその場に処して変える事は出来ないであります。恰も天は天であり、地は地であり、人は人、山は山、川は川、草木は草木であつて変えること出来ざるように自然の法則は動かし変えることは出来ないであります。人をはじめ万物も法則に従い成長しているのであります。故に法則に逆らうと言うことは神に逆らい、人に逆らい、最後は必ず行詰まり、家も財産も名誉も無きものにしてみじめな生活をしなければならぬのであります。天の法則に逆らえば、心迷い、肉体の苦しみを受けてゆかねばなりません。

天然の道 　　い 一八 一〇 四八

天然の道には決していそがしい事はないのであります。天然の道はいつも間断なく如何なるものにも調和して進んでいますので、如何なる時にもいそがしいとか閑散であると言うようなことはありません。何事をなすにも、天然の道に従いつつしみ深く歩めば誤ることもなければいそがしい心を以て無理をすることもありません。(中略)

世の中に怪我也有り、失敗もある事と云うは、急がずともよい時に急いだり、緊張している時に急ぎ回ったり、己の不徳も知らず、多大な利益を得ようと思ひ、又は名譽を望み、そのために急ぎ、そのために苦しむ誤ることがありますが、それは皆お互いの修養も足らず、つつしみもなく、心眼を開いて道を求めることも知らず、唯勝手氣

天の啓示 三九 五 二五

儘な心からそのなすべき事をつとめても失敗を生ずるのであると思います。
天の啓示、これは無声である。声なき声を言葉に表して取り次いでいるのであるが、これは「生み出す」のである。

天の啓示 四〇 一 一八

ある時、私がこの世を去らんとして死を決したとき、私の頭脳に「声なき声」がひびいてまいりました。これ即ち「しんどう」（震動）であります。「しんどう」は神の道であり、動きであり、動悸であり、―即ち「実行」なりと心に銘じ、万物の動きを字び修めよとの天のみしらせであり、天の声であると真底から信じたのであります。

天の啓示 四二 一二 二六〇

本会の綱領第十条に「心に迷いあるときはただちに長上の教えを受け」と教えてありますとおりの、天の啓示は長上の教えであります。人は目上の人を「長上」と言ったり思ったりしていますが、ここにいう「長上」とはみおしえであります。

天の声 五一 一 三

私の五体に伝わってくる大極のひびきを、神の使いとして、お伝えいたしました。當時は天の声としており、みおしえという言葉を用いてはおりませんでした。（中略）

天の声は 帝王の言葉より尊し

この声を軽んずるは 最高の重罪なり

という言葉が出ております。天の声を軽んじ、天の声に従わず、天地自然の法則に反することは、大罪であるという自覚と信念が発露した言葉としてでてきたのであります。

天の裁き 四九 八 九

いまや生きるための狂乱のときであります。いずれ天の法則によつて裁きがあるでしょう。

天の裁き 三四 一二 一二〇

あの人は善人この人は悪人と、人知で決めることも悪いわけではありませんが、人知で定めることは多少狂いがあり、疑問がありまして、善良な人を悪人と誤解することが多い。（中略）然し、善と悪との判断は、努力を続けていけばいづれの世にか、天知る、地知る、人知るで、善は善として必ず輝いてまいります。（二月二八日）

天のほうび 四〇 一〇 一六

生きのびるのが何物にも替えがたい絶大なる「天のほうび」であることを知ってほしい。

天の道 命 三四 一二 一三七
 天の道 導 三四 一〇 一三三

誠は天の道、これを行うのは人の道であることを自覚せねばなりません。(三月六日)
 国の掟はその時代時代によって参ります。なれども神の法は時代の移り変わりがあ
 りましても、決して変らないのであります。それ故に誠は天の道であり、この道を行う
 事が人の道であります。天の道、人の道は無限でありますから決して変らないのであ
 ります。

天の道 命 四八 一二 一三三
 天罰 訓 一八 八 六四

相手の不徳をわが身にひきうけてゆく誠心があれば、天の道、神の道にかなうのである。
 一刻一日も早く子達が親の御心を悟り、和合して行きさえすれば天罰はない筈であ
 ります。天罰を頂く子等こそは精神的の犯罪なのであります。病身となり、嫌な苦い菓
 を飲まされ、狭い所へ押込められ、見ることも出来ず、聞くことも出来ず、食べたい
 ものも食べられず苦しむのは、これ精神的の罰なので天罰なのであります。

天罰 訓 一八 八 六五

人の生命を武器で刺さないから、人の財産を横領しないから自分は何も悪いことはし
 ないと、平気な顔をして居る人も多くありますが、人を怨み、世を怨む心で人に接す
 ると、その恨みの毒素が自然に人に流れて、その人を刺殺するようなことになるので
 あります。かような人は天罰として病身となり迷いを生じ、損をしたり、怪我をした
 りするのであります。目が悪い、鼻が悪いのも肉体的の何所かに一ヶ所なりとも痛み
 を受けたと云うことはこれ罰されたことになるのであります。

天罰 命 四八 一二 五八

実行は天の命令である。無条件に行わねばならぬ。天の命令に反くのは天則違反であ
 る。すなわち神に抗するものである。神に抗すれば天罰をうけるのは当然である。

典範 命 四八 一二 二六三

典範は教えの根本である。

典範第一条の重点 命 四八 一 四

典範第一条の最も重大な点は「神慮に合一」であります。これは「われ神とともに
 あり」という自覚―「神の子である」とい自覚を持ってという、おさとしてあります。

天稟の認識 命 四〇 一〇 二

―教祖が享受せる天稟の資質を正しく認識せよ

(中略)

―善行を積み重ねて行けよ

ということでありませう。

―朝起きすること。

―お掃除すること。

―一人に喜ばれること。

―あらゆる人に信用されること。

―あらゆる人に愛されること。

この行いが教祖の天稟の認識であります。

天秤棒の調和をとるのも容易じゃない。それは辛抱というものだ。これには意地がなくちゃならん。強く正しくというのはやっぱり意地でしょう。

生きて活かされている万物には、鳥畜類にいたるまで、それぞれ天分を授けられております。(三月二七日)

地球上には天変地変があり、それによって万物は洗い清められます。雨や嵐の起きることは人の生活を破壊するようではありますが。宇宙は親の姿であり、人の肉体は小宇宙であります。人の肉体に故障が起り、それによって精神に変化をきたしてまいりませうということも、その変化がある為に悩み苦しむことも、小宇宙の天変地変であります。(十一月十一日)

地震、雷、火事という天変地変を恐れるような心の持ち主は、頂くことのみを心に画いて差し上げる心が足りないからであります。

実行すれば天佑がある。実行しないで、お蔭をいただくというのは間違いである。実行してこそ天佑もあるのである。損得利害を考えて実行するのは、目先のことだけ考え、打算的の実行なるがゆえに、誰にでもできる。誠を捧げての実行はそんなものではない。

天与のものは魂だけである。与えられた魂を無駄に使ったり、傷つけたりしてはならぬ。

「我さえよく…」の自我をおし通し、人を省りみずに斗争しながら本分をつくすのは

てんびんぼう

ふ 四二 一 三九

天分

み 三四 一二 一七八

天変地変

み 三四 一二 六五二

天変地変を恐れる

ふ 三六 一一 三

天佑

命 四八 一一 一八三

天与のもの

命 四八 一二 二九八

天理

ふ 四二 一一 八

天理にかないません。

天理 如何に立派な種を蒔き、良い行いをして、他人が迷惑をするようなことならば、それは天理に叶わず、我が身の仕合わせにはなりません。(二月十三日)

天理 振 四三 五 三
天理と云うものは絶対のものである。天理と云うことは動かす事の出来ない絶対のもの。真実であるから、まことであるから、まことは否定する事は出来ない。又反対する事も出来ない。ですからこのことわり、このまこと、この真実、本当のことに敵対をしたり本当の事に刃向う事は出来ない。

天理の道 い 一八 一〇 一六
天理の道こそ神の道であり、この道を悟り行うことに因って、国家社会人類のために働く事になると共に子孫も栄えて来るのであります。

トの部

動機 訓 一八 八 三七

世の中の人が何かの時に「たまげる」と云う、即ちびつくりすると云うことは見た瞬間聞いた瞬間の動機であります。その動機は魂のひびきがそこに現れたもので、何事にも魂のひびきは見たり聞いたりする時であって、いやなひびき、うれしいひびき、これは日常の生活に如何なる人にもあることであります。

東西南北 み 三四 一二 五九六
人の生活には善し悪しが現れて参りますが、十字架が東西南北を教えております通り、善悪は東にもあらず西にもあらず、北(来た)と南(皆身)にあり、というように、平素知らぬ間に良し悪しの種が蒔かれ、それが成長し、結果として実現して来るのであります。神の道は、心の素直さがなければ理解出来ないであります。

(十月十五日)

東西南北 訓 一八 八 九
東西南北これ地球上の方角として教えられてありますが、この東西南北を、人生の不幸として悟った時には、災害も喜びも東にあらず、西にもあらず来(北)た所の皆

(南) 身にありと申しましようか、来た所の皆身にあり、とは己が行なって来た功績
によって幸不幸が表現すると云うことだと思えます。

倒産 　　ふ 四〇 五 二六

「倒産」というと会社が倒れることだけの様に解釈している向きが殆どであるが、
病いに倒れることも倒産である。風邪をひいても小さな倒産である。

同志 　　ふ 四三 一二 一七

通そう 　　ふ 四五 八 一三

同志というのは「道志」、つまり誠の志を持った人々が集まってやったということである。
「我」(が)を通そうとする。通そうは「斗争」である。協力一致するために誠の道
を通そうとする努力がなければならぬ。個々の「我」を通そうとするから心と心の、
みにくい斗争となってしまう。

通そう 　　誠 四六 六 二二五

こういう子供は、やはり肺が弱い。朝寝をしがちです。疲れたといつて仕事をしませ
ん。潔癖で自我が強く、なんでも自我を通そうとする。「通そう」というのは「闘争」
です。自分の思いを通そうとして人と争う、これ闘争であります。また理論的でなけ
れば承知しない。万事に計算的、打算的で、数理的にキチンとあわないと信じない。
つまり調和ができませんから、いろいろの悩み苦しみが生じてくるのであります。

闘争 　　ふ 五二 九

我(が)を通そうとする。「通そう」は「闘争」である。協力一致するために誠の道
を通そうとする努力がなければならぬ。個々の「我」を通そうとするから、心と心の
みにくい斗争となってしまう。(裏表紙)

どうだい 　　ふ 四四 六 七

——どうだい教えた通りにやっているかね。(中略) どうだいという言葉、これは
「土台」である。みおしえによって行なうこと、実行すること、これが平和建設の「土
台」である。これをまた「俎」(まないた)という。

どうだい 　　太 四四 一一 五五

「どうだい」というのは、また「大道」である。この大道は世界平和への大道である。
「どうだい？」という言葉、これは「土台」であります。いくら教えを聞いておっ
ても行いができていなければ幸せの土台は築けません。行う、進み行う、前進する、そ
のためには道がなければなりません。みおしえに基づいて進行していく道、これこそ
平和への大道であります。「どうだい」は「大道」に通じていることを確かめてください。

どうちゆう	振	四三	八	二
同点	ふ	四四	一一	一一
尊い生活	ふ	四四	一	四
尊い人	み	三四	一二	六一
尊い人	訓	一八	八	三
道徳	い	一八	一〇	四三
道徳の真理	ふ	五〇	八	三
尊ぶ	ふ	三七	三	五
糖尿病	ふ	四六	四	一〇
同胞	振	四二	八	六
東洋	ふ	四九	一〇	九

道中、堂中、胴中、同中である。

同点は（てんどう）であり、天の道であり、神の道なのであります。

万物を尊敬愛し、大恩に報い人の恩義に報いなければ尊い生活となります。

身分の高い低いに拘わらず、人は人として行うべき事柄を誠捧げて行ってこそ尊い人なのであります。（一月三十日）

一粒の白米が水に入れられ、人の手にもまれおしつぶされ、釜に入れられ、熱を以って苦しめられ最後には人の鋭利な歯を以って苦しめられ、胃袋に入っても消化するまではないは並大抵の苦勞ではないのであります。そして最期は血となり、肉となって活動して居ります。人の肉となり血となることは、實に尊いものであります。このように尊い人になるには、一粒の白米のように苦勞困難してこそ、光り輝く人格者になるのであることを知らねばなりません。

道徳は道の徳と字に現してあります通り、道の徳と云う教えは是最大の教えであつて、己の為すべき実行と人の為すべき実行とをよく悟り、よく助け合い、国の為、人の為なら忠実に実行する人こそ道の徳を悟つた人であります。

神国日本であり、これが東洋の原則であり、大和であると、道徳の真理を教えられ、学び修めたはずのところ、東洋の平和を目的に大東亜戦争をしてきた結果どうなってきたか。そこをよく学び修めなくてはならない。

金を欲するならば、先ずもって金を尊ばなければなりません。すべてのものは尊ぶところに集まつてくるものであります。

「糖尿病」という言葉も「と、ねえ病」である。つまり「徳ない病」である。ムダ使いばかりして少しも徳を積むことがなかった。つまり、徳なく、徳がたりない。

四海同胞―同望、全部を見渡して、大局から見て順調に運ぶようにするのが務めである。

東洋は神の国、誠の国、中心であるということ、昔から子孫に教え諭してありますことは事実であります。その元である東洋の民族が、刃を振りまわし、武器を持つて争

東洋 五〇 一 九

いをすることは天地自然の法則に大きな犯罪となることは事実であります。

日本は日の本、東洋の中心である、東洋は太陽の出ずる東の方であり、洋は太陽の陽であり大恩は熱であり愛である。また平和の和である。日月である。日月は 陰陽であり、夫婦なり、天地は父母であり、また父母の上には祖先、その大本は太極、その教科書は地球上においては万霊万物尊愛であることをさとされました。

動揺 命 四八 一二 四八
食糧が不足してくるとすぐに要求する。しかし、心の糧は要求されない。肉体の糧と心の糧とが平均していると、どんなことにも動揺しないものである。心の肥えていない人は天変地変、病氣そのほか起りくることに驚き、すぐ動揺するものである。

動揺転倒 命 四八 一二 二六八
動揺転倒せぬ心とは、美しく、真すぐで、正直な広い心をいう。
金よりも時は大事なもので、時をはずし時にしたがわざれば、富も名誉も求めても得がたく、生命すら失う。一般の人は時を軽んじ、生命の尊さを認識しない。火木金土

であります「とき」は日であり一年十二ヶ月を示します。

ときしん ふ 四五 七 一八
とき、しん、という劇薬が化学者により研究され完成され悪用された時は、人類、草木は惨酷である。

度胸 ふ 四五 九 二一
キョウドという言葉は生れ故郷のことも考えられるが、教える道もキョウドウである。それを反対に下からいきますとドキョウです。教える道は度胸であり、ふるさとであります。ここに言霊の真理がある。これが命の親のお心である。

度胸 誠 四八 一二 二五
「度胸」とは、動揺転倒しない心と体とであります。五年や十年で、この度胸はそなわりませんが、ゴタゴタの中を通りぬけていくうちに——感情的な争いを通りぬけていくうちに、一步一步、度胸がついてくる。——七転び八起き。七転八起。

度胸と愛敬 度胸と愛敬——そこに天地の和合があります。夫婦の和合があります。

度胸と愛敬 徳 四六 二 五
男は天でありますから「度胸」、女は地でありますから「愛敬」であります。(中略)

徳 徳 三九 四 三八
女の人の心の中は明るく暖かく、いつも和気あいあい、としていなければなりません。万物にまごころで行うことによって徳はささかるのですね。言葉でなくて行いに敬服

徳 三九 六 二〇

するのが徳―そして徳は毎日つむものです。
徳が出来ると、二年、三年或いは五年、十年の光が見えるようになる。それは心の中に宝石が光り輝くのであって、明日の日もわからないというのは、心の中が混とんとしているからである。

徳 三九 一〇 一九

大恩に報いる「実行」を「徳」といい、人の恩義に報いていく行いは人の道であつて、これは勤勉、努力である。

徳 三九 一〇 一九

天借をお返ししている間は、それがどれほど厳しい道であつても、「人の道」の行いであつて、これを「徳」とするのは思い違いである。それはどこまでも勤労であり、勤勉である。これは「努力」である。

徳 三九 一〇 二五

「神慮に合一して」行ったことが徳ということになりませんか？ ―結構です。そういつてもよろしい。

徳 四〇 二 二

善行と礼讃とでプラス・マイナス零になってしまいます。善行をして―神も認める立派なことをして、そしてなお、人の嘲笑、悪説、軽蔑をあびて始めて、一つの「徳」となるのであります。

徳 四五 五 九

徳をつみおよぼしていれば、入り用の時に入り用の金も物も集まってくるはずである。徳と力と愛は無限であり、人知でははかり切れるものではありません。

徳 四八 二 八

製品を大切にとり扱えばその徳によって、一人だけではなく、とり扱う人の家庭の人や、また諸々の人たちも救われてくるのであります。

徳 四九 一 三

我執貪欲では、人も協力してくれません。徳が高ければ、協力せよといわなくても、おのずから人は協力してくれます。権力や地位や金で協力させようとするから、人は聞いてくれないのであります。要するに「誠」であります。

徳 五〇 一二 四七

徳は得に通じるといわれますが、得は徳に通じません。

徳 五一 一 五七

現在の環境が、みずからの徳の分量である。今日もし徳の分量がすぎたと思えば、明日徳をつむようにせねばならない。徳は理であり、利であり、得である、よい気持で

よい言葉を使いよい行いをするのが理であり、やがて得となる。徳とは善行の蓄積である。

徳 五五 三 五

徳とは善行を積み重ね、万人に施して行くこと、即ち奉仕によって得られるのであり

徳 三四 一二 六六

見たり聞いたりして学び修め、日夜出てくることは、その人達の智慧によって学び、

努力によつて修め、良い行いをして万人から喜ばれるようにしますと、この喜びの蓄

積が徳となるのであります。(五月六日)

徳を積み重ね、徳を及ぼすことも、小さい所から実行して大きくせねばなりません。

徳 三四 一二 三三五

一時に大きく積もうとする心は我執食欲だと思ひます。(六月十日)

常に積善を重ね、己れを虚しうして国の為、人の為に一切を捧げて無条件実行をした

結果、身にそなわつたものを徳と言うのであります。(十二月二五日)

徳は決して変わるものでなく、色に譬えて言うならば無色であります。(十二月二五日)

親が子のためになさる業に、悪いことがある筈がない。感謝で受けて通りぬけて「徳」

となるのだ。

徳と云う言葉に就いて。徳は人生生活にとって最も重大なる生命であります。生命を

保つことは徳の分量であります。人の心は眼に見ただけのことを言葉を聞いたのみの

ことだけしかわかりません。然し徳の分量は無限と同時にこの世開闢以来より今日迄

もこの先も消えることなく積んだり壊したり行なつて居るのであります。よく聞く處

であります。正直の人が馬鹿を見た、正直な人が落ちぶれた、不自由な生活をなした

り病身となつて苦しんで参りますと、其の人たちは徳の分量を知らざる為、正直な真

面目な人が何でこんな苦勞をするのかなどと不平不満をおもひ国を恨み親兄弟をそね

むような心になりがちであります。人から見て人から聞いて放漫無礼な、常識にはず

れた、不道徳な行いをしながら物量にも豊かに健康に恵まれて生活して居ります人も

数多くあります。(中略) 然しながら徳の分量が各人に悟られるならば何も憤慨す

る必要は無いのであります。過去も現在も未来も悟ることの出来ない凡人の浅薄な為
に憤慨するようなことになりません。徳を積み、徳を流し、徳の分量は皆人に与えられ
て過去も現在も未来も悟られるならば矛盾した不公平な處はすこしもないのでありま
す。(中略) 総べて「とく」がつく言葉は最高の意味であります。お互いに徳を尊

重し徳を積み流すことは最大の急務として実行なさらなければならぬことに自然の
法則は定められて居ります。徳を積み流すことを忘れ怠って行く時に不徳となって人
生の明るい道を踏みはずすことになります。

不徳をつめば人生はマイナスになるような人につながり、徳をつめば人生はプラスに
なるような人につながってゆく。

一貫の徳をつみ五貫の徳を流せば、十五貫となって帰ってくる。百円の仕事をし、八
十円しかもらわねば二十円の損失のようであるが、やがて百六十円となって帰ってく
るものである。良いものは、まず人に差しあげよ。差しあげればどこからかいただけ
るものである。

徳

命 四八 一一一五四

徳は理(利)であり、また得である。天地の法則にもとずき、誠捧げて人の道を行う
ことは、人としてなすべき理であり、そうすることにより徳をつみ徳を流し、利とな
るのである。理にかなって始めて美しい、麗わしい生活ができるのである。よい気持
で、よい言葉を使い、よい行いをするのが理であり、徳をつむことになるのである。
心の使い方を無駄にせず、言葉の使い方を無駄にせず、これらのものを活かし有益に
使わしていただくことが徳をつみ、徳を流すことになるのである。心の中を清潔に、
家の中も清潔に、自然の美しさと同じように整理整頓をなし、職場も公共の場所も、
公德心をもって清掃し、整理せねばならぬ。道義道徳を守り行うことは徳をつみ、徳
を流す第一歩である。

徳

命 四八 一一一七六

人それぞれ責任があるが、徳とはその責任を果すことにより生じるものである。

徳 命 四八 一一 一八六

徳 命 四八 一一 二〇三

日々あらたな心で人々に喜んでいただくような行動をせねばならぬ。自分一人の喜びでなく、多くの人を喜ばしてゆけば、そこに大きな徳をつむことができるのである。徳という言葉についてお話をする。

■徳の分量Ⅱ徳とは人生々活にとって生命ともいうべき重要なものである。生命の保たれることも徳の分量である。人の心は目に見ただけ、言葉に聞いただけのことしかわからぬ。しかし、徳の分量は無限と同じく、この世開闢以来こんにちまで、またこの先も消えることなく積んだり、壊したりしてつづいていくのである。(中略) 人の肉体にしても身長、体重も違い、顔、形、みなそれぞれに違うのである。人を見、物をみて心が迷い、不平不満、悲哀を感じるようでは、人生々活をしてもなんら生きがいがないわけである。

■特別、得心、報徳Ⅱ「特別の計らい」「特別に恩をうけた」「特別にとりなす」というようなことは、いかなる時にもあることである。(中略) 得心をしたというのは、すべてを理解したということであり、報徳とは無条件で報いることである。すべて「とく」のつく言葉は、最高を意味するものである。おたがいに徳を尊重し、徳を積み流し、天則に従い、人生の明るい道を歩まねばならぬ。

徳 命 四八 一一 二八三

徳とは善行の集積である。徳とは善行の背に背負われてくるものである。徳は理であり、利であり、得である。よい気持でよい言葉を使い、よい行いをするのが理であり、やがて利となり得となる。

毒 ふ 四一 一一 八

「毒」は「劇薬」であると同時に、「名薬」である。「名薬」は「迷惑」である。こゝとたまから思案しても「迷惑」かけられたというのは「名薬」をいただいたのであり、そこには只感謝あるばかりである。

徳ある人でも み 三四 一一 一九

如何に徳ある人でも、天地自然の法則を修めず、誠の道はずして物事を行えば、法則により病めて来ることは間違いありません。(一月九日)

得心 ふ 四二 九 八

「得心」は「神徳」であります。得心と神得とは表と裏であつて、これ実に尊いので

得心 四六 一 二九

あります。
 得心しているから信じていくのである。得心は「神徳」である。（中略）得心もない。従って神徳もない。ゆえに神の道の実行ができない。そういう心の影が肉体の患いとなる。

得心 訓 一八 八 三五

自分は正しいと信じて居りましても、悪いと云われた時には「ああそうですか」と得心する心になれる迄修行しなければならぬのであります。「得心」と云う言葉は「神徳」と云うことであり、「得心」と「神徳」とは裏と表であつてこれ實に尊いのであります。

独身 ふ 四四 八 七

生涯独身です。こう思うと淋しくなる。私（教祖）と二人でいるという自覚をもってください。

毒舌 誠 四六 六 一一六

人を嫌うのは斬ることであり。ここに「毒舌」と示されておりますが、言葉と言葉との交流を斬る、これが即ち「毒舌」であります。

毒素 誠 四八 一二 一六六

蟻のような小動物も毒素を持っている。蟻や蚊だけでなく、草木もみなそれぞれ毒素を持っている。万物一切が毒素を持っている。人も、恨み、ねたみ、そねみ、嫉妬というさかしま心の毒素を持っている。この毒素を浄化していくために教科書が現われてくる。

徳と力と愛 誠 四八 一二 一一二

天借をお返ししてこそ、はじめて徳と力と愛の無限の財産をいただけるのであります。徳と力と愛——この無限の財産は、縁のつながりの人々のもとへ交流できる、配給できる。

徳と力と愛 捧 二四 八 一

万物を造化なされた神の徳と愛と力とは、無限の真理がありまして万物総ての生物人類を問わず、愛と徳と力なくてはなりません。然らばこの徳と愛と力とは何に依って生み出す事が出来ますか。是を発見し研究して会得するには神を信じ行なえば必ず発見も出来るし会得も出来るのであります。神を信ずる事も出来ず、行なう事も出来ざる人類は、唯生きていくだけの事でありまして、文化も発展も改造も開拓もなく、

徳と力と愛

命 四八 一二 九六

進化も向上もありません。私は神を信じ行なえば必ず徳を高め愛を求め力を得まして
明るい美しい清らかな根強い生甲斐のある生活が出来ます事を確信しています。

徳の余り

い 一八 一〇 四三

この尊い宝である生命を捧げ、真剣に実行するところに徳と力と愛がそなわるのであ
る。あらゆるものを無駄にせず、活かして使うということは、捧誠会の大眼目であり、
このことを命がけて実行すれば、必要な時に必要なものは、かならず授かるのである。
人に慾まれ、笑われても実行してこそ陰徳を積むことが出来るのであります。世の人
は「信仰は徳の余り」と云うようなことを云うて居りますが、徳の余りこそ大切であ
り、徳の余りがあればこそ生活が安定出来るのであります。喜んで徳の余りを積み上
げて行く信念がなくてはなりません。

徳の削り合い

命 四八 一二 二六六

夫が妻の欠点を言うのは徳を削ることになる。

徳の最高の実行

ふ 四三 一二 四

敵にまわって苦しめる人々を喜んで迎える言語動作こそ、徳を積み徳を及ぼしていく
最高の実行であります。

徳の拝借

命 四八 一二 一八九

指導の言葉をいただいても「そうですか、かならず実行いたします」との言葉が出な
い。そうした時には、教えの親は身替りとなって実行せねばならぬ責任が出てくるの
である。これが日ごろいう、徳の拝借ということである。

徳の光

ふ 四四 一 九

大極は神なり、かみなりはいなびかり。このいなびかりこそ徳の光りである、靈光で
ある——という無言の声を神からうけた。

徳の光

ふ 五七 三

くら闇の中では目があいておっても物が見えない。目は物を見る為の道具であるが、
くら闇では何も見えないという事実から思索すると、目だけでは「見ること」ができ
ないのだということがわかる。われわれの目は、物に光が添うて初めて見えるのであ
る「まことの光りが輝けば」そして「徳の光が輝けば」何が見えるかという、こと
のよしあしが判明する。(裏表紙)

徳の光

振 四三 一〇 二

宇宙の始まりは無極、無極から大極が生じ、大極から万物が発生した。無から有を生
じた。有は大極である。大極はかみなりであり、徳の光である。徳の光は愛であり、

徳の分量 四三八二

徳と力と愛、これが生命の糧であり、この教えが本会の趣旨である。よい種が沢山あれば、徳の分量も豊かであるし、よい種より悪い種が多ければ、徳の分量はマイナスである。

徳の分量 四四九九

誰しも大金がほしい。地位や名誉がほしい。(中略) しかし徳がなければ、一旦は持てても、いずれ落としてしまう。(中略) とうとう最後には、その身を倒してしまふ。力がなければ持ちきれない—ということは、徳の分量を越えたものは持ちきれないという教科書である。

徳の分量 四八一二二〇三

徳とは人生生活にとって生命ともいべき重要なものである。生命の保たれることも徳の分量である。人の心は目に見ただけ、言葉に聞いただけのことしかわからぬ。しかし、徳の分量は無限と同じく、この世開闢以来こんにちまで、またこの先も消えることなく積んだり、壊したりしてつづいていくのである。

徳の分量 四八一二二九五

現在の環境が、みずからの徳の分量である。今日、もし徳の分量がすぎたと思えば、明日徳をつむようにせねばならぬ。

徳の目 三八六一九

人には肉眼のほかに、「徳の目」というものがある。徳のうすい人には、目に見えない世界は見えない。見えるのは現実だけである。だから不安と焦燥とがつきまとうのではあるまいか。

徳 不徳 四二七一〇

良い品を安く買い、悪い品を高く買う場合がありますが、それはその人の徳、不徳によるのであります。良いものを安く買うのは、過去に良い品を安くさしあげているからです。安いものを高く買うのは、過去において安いものを高くさしあげているからです。即ち、この世の中は、まわりまわって与えられるのであります。

特別講習会 四九八一三

本会では月に一度、特別講習会という行事を行います。この行事は私(教祖)を中心に、私の話を聞くだけに終わるものではありません。「みおしえ」を信じ、教義教典にもとづいて万霊万物を尊愛し、一人一人の会員が身心を養い、物心ともに恵まれるよう、徳をつみ徳を及ぼすおけいこをすると同時に、実践することを天地に誓

いたてまつる行事であります。

読本 訓 四二 四 七

読本 訓 四六 一 三〇

この世の万物が読本であります。「読本」というのは「生活の本」であり、誠実を信じて行うところに意義がある。また「読本」とは「解く本」であつて、ものごとの、こんがらがったのを、緒口を見つけて解きほぐすこともある。(中略) 人の世のなやみ苦しみについて、まず解決の緒口を見出し、それをたぐつて、もつれにもつれた状態を、いろいろな形で解きほぐしてきた。

徳を及ぼす 訓 三九 一 二二

徳を流すとは、物や金だけのことではない。言葉——音(一恩)をもつて、明るい感謝をささげていく世界が至るところにある。

徳をけずる 訓 一八 八 二六

それが出来ないと言ふことは神の御心を知らないためであり、我欲、高慢の為己の不徳を知らざるためであります。それが徳を削り落として行く原因なので、かようなことのなきようにつとめ、この世に人として生まれ出していた以上には、息のあらん限り心安らかにさせて頂くよう心掛けなくてはいけないと信じて居ります。

徳を削る 訓 四二 八 八

我欲、高慢のために自分の徳の分量を知らないためであります。人の徳をうらやみ、不平不満、ぐち嘆きをこぼしておりますと、いよいよますます少ない徳を削つていつて、やせほそるばかりであります。

徳をけずる原因 訓 一八 八 二六

心安らかと言ふことは、実は神の子としては永遠に続かねばならないので、永遠に続くのが当たり前のことです。それが出来ないと言ふことは神の御心を知らないためであり、我欲、高慢の為己の不徳を知らざるためであります。それが徳を削り落として行く原因であります。

徳をつまない 訓 四六 六 一六五

「徳つまず……」という言葉霊がでております。徳をつまぬ、とは、当然なすべきことをしない、行なうべきことを行なわない。これが徳をつまないということであり、決して特別な行為をする、しないではなくて、人として当然しなければならぬことをしない。ですから、これは日常の生活のなかにあることであります。

徳をつみ及ぼす 　　ふ 四七 六 一六

毎日の現われてくる教科書を学び修めて、人格の完成に、家庭の円満に、社会の構成に、悠久なる世界平和の実現を志し、懸命に努力をすることは徳を積み及ぼすことであり、いのちの親のみ心にそい奉るところであります。

徳をつみ及ぼす 　　誠 四六 六 二四

徳をつみ徳をおよぼすことがらは 恩に報いる奉仕なりけり

人がこの世に生き活かされていくについては万物に、あるいは人さまに、どれほどご恩をいただいているか、はかり知れません。(中略) このお返しのできていない人が世の中には多いと思います。私もその一人であると自覚しております。それゆえにつらいとき、悲しいとき、淋しいときにも、これではならんと勇氣百倍ふるいおこし、多少なりとも人の仕合せを願う上から悩み苦しみを引き受けて楽にしてさしあげようと努力しているのであります。これが恩に報いる奉仕であります。この報恩の奉仕を毎日しているのであります。

徳を積み及ぼす 　　ふ 三八 一二 一四

卵一つ頂いても、真心と努力とで、それをヒヨコにする。更に心の丹精を重ねて親鳥に育て上げ卵を生むようにする。その卵を人々に御馳走していく。——このように、一つの卵から無限の卵を生んで人に与えていくことを、「徳を積み及ぼす」というのである。「徳を積み及ぼす」——というのは本会の眼目である。

徳を積み及ぼす 　　ふ 四一 一一 一〇

物を手にとつて、それを人に与えることは、いいかえれば、徳を積み徳を及ぼすことの一つの姿である。

徳を積み流す 　　命 四八 一二 一四八

徳を積み、徳を流すとは、良いことをなし人から喜ばれることである。人を信じ、人からも信じられるようにならねばならぬ。

徳をつむ 　　命 四八 一二 一一五

清らかな言葉を人に与えて聞いていただくことは、その人をよき人に導くことになるから、徳をつむことになるとともに協力し、相和して働くことになるのである。

徳をつむ 　　ふ 五四 一一 四

人が、自ら正しいと信じ、あの人の為なら身心を捧げてお世話をする事が徳を積みおよぼす事になります。それでも、その人があだをなしてきた時には、いのちの親は、不平不満をもたずもたさず、誠を捧げて無条件実行すれば救われると、諭されており

ます。

徳を積む 命 三八 一〇 四
教祖の取扱い、総裁の取扱いを忠実に行うのは、金や物の奉仕の何十倍にも相当する徳を積むことになるのであります。

徳を積む 命 四〇 一二 一八
天地自然の法則にそった行いを一つでもすることによって徳は積める。

徳を積む 命 四一 九 七
人はともすると感情（勘定）にとらわれます。給料を頂くから、物を頂いたから、或いは、給料が安いから、物を頂かないから—というような勘定にとらわれてやっつけては徳は積めません。勘定を外し（感情のとりこにならず）真剣につとめる、そこに始めて徳が積めます。

徳を積む 命 四一 九 七
人に笑われ、悪説を流され、踏みつぶされ、叱られ、恨まれ…、このような事態に直面しても喜び勇んで感謝感激で真心をつくし、天与の職務をなすとげることです。

徳を積む 命 四一 九 七
後片づけを感謝を以つてする事の出来る人に徳が積める。

徳を積む 命 四八 一二 二八三
① 良いことをしておけば良い結果が生れる、というような交換条件で徳は積めない。

② 虚心坦懐な心なくなしとげるところに始めて徳は積めるのである。

③ 綱領十ヶ条の実践は徳をつむための道である。

④ 人から言われてする行いと、自ら発心してなす行いとは、同じ善行でも、徳をつむという点では大きな開きがある。

徳を積める機会 命 三九 一〇 二六
勤勉、努力を積み重ねていくうちに、必ず徳を積めるような機会が到来する。親はその人の力を見定めて、必ずその時期を与えて下さる。その時に、スツと実行できるように、その土台作りが人の道の行いの努力である。

徳をなくす場合 命 四八 一二 一四九

- 1 人を恨み妬むこと
- 2 物を粗末にとり扱うこと
- 3 人の悪口をいうこと
- 4 争いをする事
- 5 不平不満をいうこと

6 生命の無駄使いをすること

7 親不孝をすること

8 目上にさからい、目下をつぶすこと

9 故人となつた人を尊敬せず、功績を敬わないこと

10 借り物を返さないこと

善も悪もひきつがれてゆきます。だから、いくら修養しても、いくら努力をしても、よいことばかりは出てこない。世の人の多くは子孫に物をのこすことに努力していますが、生きるためには物も大切だから、物をのこしてやらねばならない。文明文化をつくるためには物は大切だからね——しかし、活かされるためには善行をつんで徳をのこしてやらねばなりません。

徳を一つに心を結ぶとは、よい気持、よい言葉、よい行いを人にさしあげ、みずからも他よりいただくということである。

「床の間」は「男の間」である。

悠久世界平和郷は、いわば、お床の間であります。修養団捧誠会のすべての施設を一つの家にたとえると、悠久世界平和郷は床の間であります。床の間、お床の間、男の間であります。言霊のまにまにみおしえを守りつつ……というお諭しがあります。

どじようは同情であり、愛情であり、火であり熱である。

泥の中にいる「どじよう」は実に美しいもので、その肉は少しも泥にまみれておりません。「どじよう」という言霊は「同情」であります。同情なくしては助け合ひはできません。

土台 命 四八 一二 一五九

どじよう ふ 三九 一二 一八
どじよう ふ 四二 五 一〇

徳を一つに心を結ぶ 命 四八 一二 一二四

床の間 ふ 四四 一二 一四
床の間 ふ 五三 一 一〇

徳をのこす ふ 五三 一二 一七

台になるためには、徳をつんでつぶされぬような人にならねばならぬ。(中略) 台になるためには、徳をつみ徳を流さねばならぬ。心の幅の広い人となり、人生の苦しみに負けず、自分が土台になり、人を渡すようにせねばならぬ。大丈夫な土台になるために実行して徳をつみ、つぶれるようなことのないようにせねばならぬ。真に台に

なるという心構えがあれば、健康になり、家庭もよくなり、仕事も発展し、物には恵まれ四合せになり、大丈夫という安心立命が得られるのである。前途に不安をもつのは、みずからが台になり、礎になるといふ低い心がないからである。

突風

ふ四五 四九

突風の教訓は「強く正しく」ということである。「めいしん」打破ということである。

止まる

ふ五五 一三

正月の正の文字の、上の一をはずせば止(や)むという文字になる。一は、神慮に合一し、万教に帰一することであつて、この事をおろそかにしていれば、正しきことも、止まってしまうのであります。止まるとは、行き詰まることでもあります。

とめる

ふ三九 七一

生きたい―これは人の本能である。行きたい―これもまた、人の願ひである。―飲みに行きたい。この願望を止めると行き詰まる。止めるよりも、自分も一緒に行つて調べてみることを協力という。この協力は愛情である。(中略) 愛情を失つて、事ごとくに「やめなさい」「行つてはなりません」と止めてばかりいると、息が止まって冷たくなる。

鳥

い一八 一〇 一三

鳥が食わずに木や屋根から落ちたということもなく、いつも天然自然の法則に従ひ、活動していることを思えば、万物の靈長としてこの世に生まれています。人達、人としての使命を実行して行くなれば、安心立命して一日働き一日楽しく生活できます。ことは疑いなくと思います。

鳥

振四三 六二

ただここで天地自然の法則を学び修めなさいと申しますと、とりとめもないような、つかみどころのない事のように思う人は沢山あるでしょう。十人が十人そうであろうと私は思います。そのように広い無限の動きであります。波は現実的に七五三の形をあらわして動いております。鳥は群れをなしてそして野に留まる。そのことによつて、お湯が出るとか、石油が出るとか、地下資源があるなどおしえられることは其の人の徳であります。又犬が、猫がそこを教えて下さつたと云う事も天地自然の法則であります。

とりこし苦勞

誠四八 一二 一九〇

役にたたない心の使い方、これを「とりこし苦勞」と教えてあります。それは、

ムダな苦勞だよと、いくら教えても、すぐそのあとから「とりこし苦勞」という苦勞が、でてくる。

取こし苦勞 命 四八 一一 六九

取こし苦勞をする心にしわがよる。低い心になると知恵をいただくことができる。怒ることをつしめば、またよい知恵が授かる。我慢、辛抱、忍耐には無理がある。

取越苦勞 命 三八 一一 二三

取越し苦勞は尊い生命をむしばむ。生命は根であり肉体はその枝葉である。人は、ともすると、枝葉や花に気をうばわれて、根を忘れてることが多い。取越苦勞は、正にその尤（もつとも）なるものである。

取越苦勞 命 四五 一一 一三

役に立つその製品を無駄にするということは私たちの生活の中には多いのではない。心の使い方の役に立たないのは、とり越し苦勞と教えてありましよう。

取越苦勞 訓 一九 六 六

取越し苦勞をする人は頭が高い。潔癖性の人も氣位が高い。高い処に居ると色々の物がよく見える、色々な事が気になるのは頭が高い、心が高いからである。人に云われた事が気になる者も頭が高い。

取越苦勞 命 四八 一一 一四八

とりこし苦勞は女の人に多い。この苦勞は花も咲かず、実もならぬ。同じ苦勞をするならば、花咲き実る苦勞でなければいけない。己を虚しうすれば、とりこし苦勞はない。低い心になれず、現在の環境に捧誠感謝ができないから。（中略） またとりこし苦勞をしていると思ひ違い、とり違いをしたり、また良くゆくはずのことが悪いようになつたりする。懸命に働きながら、すべてが狂つてくるのである。

取越苦勞 命 四八 一一 二七〇

取り越し苦勞は心の無駄使いである。無駄使いをすると、魂が貧しくなり破滅する。みおしえ 教祖のおさとしを取次ぐ時は、たとえ相手が主人であっても、先輩であつても、堂々と自らは上座に座つてよろしい。子が検事になつて親を裁く事もある。（中略）

取次ぎ 命 三八 一一 三〇

天地自然の法は、人の法どころでなく、もつと峻厳である。その神の道を実行し、それを取次ぐに当つては、人間的な遠慮気兼ねは更に無用である。

鳥の言霊 命 四四 一一 二五

思い違い とり違い：そして感違いから間違えになつていく。「とりもつ」ということは一つのサービスである。（中略） この親切にわが意を用

取引 命 四八 一二 一七八

いると行ったことがあだになる。(中略) とり違いを早々に発見して、とりもどすことが、とりあえず最も必要なことである

物の取引は飽き易いが、心の取引は永遠である。恨みあい、ねたみあい、惜しみあい、憎みあいなど、みなやみ取引であって、かかる取引をしては十日で癒る病いも、二十日かかることになる。喜び心の交換、即ち取引をすれば病気も早く快復するし、事業の取引も上首尾となる。物心両方面の取引をする場合には、かならず心の底から感謝の心を持ちあうようにすべきである。

努力 ふ 四七 一 四
地位をいただくのも、金をいただくのも、名誉をいただくのも、ごほうびをいただくのも、みな努力であります。努力のたまものです。

努力 ふ 五二 一一 五一
努力は動力である。

努力 み 三四 一二 三三四
落ちぶれてから足らない所に気がつき、改め努力しようという決意は尊いが、不自由のない時にそれ以上の努力をせねばなりません。(六月五日)

努力なき人 み 三四 一二 二七五
努力の無い人に恵むことは、却って苦しみを与えるようなもので、人を救う意味にはなりません。(五月十二日)

貪欲 み 三四 一二 三八八
貪欲とは、自分の徳の分量も弁えず、知恵も力も富も名誉も、先祖代々より現在に至る迄の善行の蓄積によって貸し与えられるものであり、その人が借用しているようなものでありますのに、それを乱用し、我が物と信じ、無理無駄に交流し、思い違い、取り違い、間違いを起こしても気がつかず、改めも反省もせず、見れば聞けば、欲しい惜しいで、差し上げるものも差し上げず、終生の奉仕もせず、我さえ良くばよきことと人を侮り、天地の法理に逆らう心を言うのであります。(七月六日)

貪欲 誠 四八 一二 一一九

あげるから、もらえる。あげもしないでこうしてもらいたい、ああしてもらいたい、というのは貪欲という。あげてこそ、もらいたいと思わなくとも——たとえその人からもらわなくとも——太極から無限の徳を、愛を、力をいただく。これは、ものや金ではありません。万物が生成発展して活かされているのは、徳と力と愛です。この無

ナ の 部

限の徳をいただくことになるのであります。

なおす・なおる（病氣 命 四八 一二 一五〇
を・が）

仲がよい 命 四八 一二 七六

仲が良い ふ 四〇 八 一五

なかよく 訓 一八 八 六

病いのよくなることをなおる（折る）という。病いはなおるでなく、なおすでなければならぬ。一時的の治療はなおるであるが、折るのみでは根までとはれぬわけである。利益を獲得する上においても、もうけるというが、これはなおるに相当する。もうかるは、なおすに相当する。なおるは鎌で刈っただけであり、なおすは根こそぎ除くことである。一時的手当は草を刈ったと同様であるから根が残る。

仲がよいとは、人と人との間だけをいうとは限らぬ。心の中、家の中にも通じること、それらが汚れ、整理のつかぬことは仲がよいといえぬ。仲よくするためには掃除をせねばならぬ。心の中の大掃除は感謝である。感謝するためには、広く暖い心で反省することが肝要である。

「仲がよい」というのは人と人との間のことをいうのではない。「心の中」、「家の中」にも通じる。「心の中」も「家の中」も汚れて整理がついていないのに「仲が良い」とはいえぬ。仲よくするためには掃除をしなければならぬ。心の中の掃除は感謝である。

仲よくと云う言葉の働きは「中」は中心であり、その中心は魂であり、魂をよくする、即ち魂を磨いてよくして行くこと、云うことが、「仲よく」とつながって参ります。「外よりも中をよくする」外は家にたとえれば門であり、中は床の間であります。身につける衣服にしましても、中は襦袢であり、表は羽織であります。羽織はきれいでも、襦袢があかだらけであれば中がよいとは申されません。精神的にも物質的にも、きれいにして行くことは仲よくしてゆくこととなります。

仲よく 命 四八 一一 五八

仲よくせねばならぬ。仲が悪いということとは両者の表面の中だけでなく、おたがいの心の中をいうのである。早く悟った方から心の中をよくすることが肝心で、外見よくとも心の中が悪いようではその人は認めていただけでない。

なきがら 誠 四六 六一 一一

人に「ことば」のないときは肉体もつめたくなっている。それで「なきがら」という。まことに「ことば」は大切であります。

なった ふ 四四 一〇 一五

柿の実がなった。(中略) その「なった」という意味は、種があつて種が芽生え、成長し、花が咲いてみのつたことをいう。病気になった、貧乏になった、困つたことになった——人生においてなつてくることも、すべて種があり、それが時期を得て「なつて」きたのであり、これは天地自然の法則である。この理合いを心から悟れば、喜んで勇んで刈りとつていく勇氣がわいてくるはずである。神の子の自覚を持つておれば「どうしたらよいか」というような迷いにおちいらぬ。

七転八起 み 三四 一一 二七

万物一切伸び行く為には苦勞により生氣が与えられ幸福になります。「七転八起」転んで負傷することは一時不幸にも思われますが、転んだ為に立ちあがる工夫をし、注意も協力も改める心もわかれば、転んだことが実に尊いことになります。(三月一日)

なに心なく ふ 五三 九

むずかしいことをむずかしく教えているのではない。むずかしいことをなに心なくやさしく行う。これが「誠」である。むずかしいことをなおむずかしくするのは理論理くつである。すなおに、なに心なく行えるような人になつていただきたい。人格の完成はそこにある。(裏表紙)

なに心なく 命 四八 一一 二五二

なに心なくことを運ばねばならぬ。しかし、無我夢中でするのがなに心なくではない。なに心なくとは感謝である。手足の動く恩寵に浴し、あらゆる人の恩恵に浴していることを思えば感謝である。

なにごとにも ふ 四七 二 二二

心の底からなにごとにも感謝の誠を捧げると綱領第二にはあります。心の底からというてあります。うすつべらじやない。(中略) なにごともということはずべてに感謝の誠を捧げるといふことです。

名前を忘れる 四二 一一 二七

努力が足りないが根本は感謝が足りないのです。そうでしょう、一パイのお酒をついでいただいても、一枚の布団を敷いて頂いてもお世話になったのでしよう。そのご恩を思うと、その人の名前は忘れない筈でしょう。

波 振 四三 六 一

ただここで天地自然の法則を学び修めなさいと申しますと、とりとめもないような、つかみどころのない事のように思う人は沢山あるでしょう。十人が十人そうであろうと私は思います。そのように広い無限の動きであります。波は現実的に七五三、の形をあらわして動いております。鳥は群れをなしてそして野に留まる。そのことによつて、お湯が出るとか、石油が出るとか、地下資源があるなどおしえられることは其の人の徳でありましょう。又犬が、猫がそこを教えて下さったと云う事も天地自然の法則であります。

南無 ふ 四八 四 三

仏教には「南無」という言霊があります。これは無から有を生み出すということでもあります。これも天地自然の法則にもとづいて生み出されてくるのでありまして、なにもないところから手品のように、なにかがパツと出てくるというようなものではありません。このことを仏とも教えられております。仏の言霊も「法を説け」であります。天地自然の法則を悟りその法を説くことであり、この根本においては万教帰一であります。

南無 振 四二 一 一

人はよろこび感激した時に、万感胸迫るとか、感慨無量とか云っておりますが、かよくな時には、始めも終りも無い無量であります。無限であります。南無は大和であり、始めも終りもありません。

南無阿弥陀仏 誠 四八 一一 一七三

仏教に「南無阿弥陀仏」という言霊があります。この、ことたまは——この真理は、——私はなにもわかりません。

という心であり、そういう心であれば、

—それでは、菩薩が教えてあげよう、みちびいてあげよう。

こういう意味であります。それが、

—己は知っている、なにもかも、わかっている、あなたに聞かなくても、それくらいのこと承知しております。
ということであれば誰も信用しない。一人ぼっちである。

南無真行纓法 四四五 一

「南無真行纓法」という言霊の「えーほー」の「ほう」は「宝」である。尊い宝である。「えー」は、冠を頭にくくる紐である。ゆえに、「えーほー」という言霊は、むすばれなければ宝がさずからぬ、むすばれて努力して宝がさずかる、という意味である。夫婦が一つにむすばれる。これは肉体的のむすばれのみをいうのではない。心と心のむすばれである。その心がまた、神にむすばれていなければならぬ。このような心の「むすび」ができていないから相対（あいたい）になりきれないのである。

南無真行纓法 五〇四 一三

苦しいこと、辛いことがあります、それを「良い方」に切りかえていく。そこに「南無真行纓法」というお題目があります。

南無真行纓法 四二一〇 三

私が若い頃、誤解を受けて或る教団の人に一室に連れ込まれ、ふくろ叩きにされ、短刀を持った暴漢に刺されようとした際に「真行纓法」「よいように進む」「それでよいのだ」と称え心の底から悟った時に、暴漢は目前で倒れ、私は危機を脱したことがある。

南無真行纓法 四八二 七八

この「纓法」という言霊は、神のみ心が悟れなければ、いのちの親の尊さがわからなければ、わかりません。口で唱えても「纓法」にはならない。会員のみなさんは、辛いとき、切ないとき、苦しいとき、喉から声を出して「南無真行纓法」と唱えておるでしょうが、神の子の自覚をもって、神慮に合一して唱えておるかどうかを診察いたしますと、ほとんどできておりません。

南無真行纓法 命 四八 一二 二〇六

心を浄め、冷静にするために南無真行纓法と唱えるのである。

南無とは、天地と一体になり、父母と一つになり、誠に帰命し、みなが無になって自然の法則に合一することである。虚心坦懐となり、心の底から合掌することである。

真行とは、すなわち神行である。また真業である。真の心で業をなす。良い心、良い

言葉、よい行いを行ずる（業ずる）ところに、真の業績があらわれるのである。（個人でも会社でも業績という言葉を使う）

繯法とは、つながりとか、結びを意味するものである。

人と人がよきにつながり、神の心に人が結ばれ、和のつながりがますます大きくなり、真の道を行うことによつて、良い方に良い方にと結ばれてゆくのである。すなわち平和を確立する魂の働きである。

南無真行繯法とは不自由な時、肉体の苦しい時に唱える言葉でなく、毎日活かされている大恩に対して感謝で真行するのである。

悩みがあればこそ努力がある。（中略）その努力の中から光明が輝いてくる。夜があれば昼がある。夜と昼との廻転は陰と陽とのつながりであり、男と女の姿であるさとされる。

人の暮らし方は時代とともに移つてまいりますが、暮らしの中には喜びや感謝もありますが、また、悩み苦しみもあります。その悩みや苦しみは、何万年も前の祖先から流れてきております。借り物の肉体は大地に葬られても、悩み・苦しみは流れておりません。

どんなみしらせでも、喜んで受けとめてこそその悩み苦しみから解消されるということとは真理であります。もつと根本的には、体温こそ生命であり、大恩によつて活かされるどころまで至れば、はじめて神の子の自覚を得ることになり、神人合一に到達するのであります。

難あり、有難いので、有難いと難有りとは紙一重です。難を有難いと感謝する。

難儀すると云う事を最大の不幸のように思いますが、難儀すると云う事の本を悟った時には決して不幸とは思わず、却つてそれを幸福に悟れるのであります。（中略）

こんなに真面目に働いているのに難儀苦勞するのは生前の約束事であると、そしてあきらめてしまう人が多いのであります。然しそのあきらめも口先だけで心の奥底には不

難あり
ふ 三九 七 三三
い 一八 一〇 三八

悩み苦しみの解消
ふ 五二 三 四

悩み
ふ 五一 一二 四

悩み
ふ 四三 九 八

難行

み三四 一一 一一

満があるのであります。このような不満のある人は口先だけでは生前の約束と申して
いますがその本質を知らないのであります。
生きとし生けるものには難行苦行が付き廻って居ります。(一月六日)

二の部

二 二 三
ふ 三六 二 三

春を迎えたその年の二から始まるので、物の交流にしても、初荷と申します。この月
(二月)をあやまれば、十か月は無になる程だと聖者も教えてあります。

二 二 四
ふ 五三 五 四

二はふ。風であり、夫婦であり、男女であり天地であり、陰陽であります。

二月二十八日 二 六
ふ 四九 四 六

今日は昭和四九年二月二十八日であります。二・二・八は平和の数字であつて「二二八
(ふうふう)」であります。「二二(ふうふ)」は夫婦であり、日月(陰と陽)であ
り、「八」は、和であります。また、天という字は「二」と「人」との組み合わせに
よつてできています。

二月四日 二 二
ふ 五〇 三 二

二月四日の言霊は、天地の理法によりますと、二人が四合せになるということであり
ます。

肉眼 二 一〇
ふ 四二 一〇 一〇

人は人を見るだけでなく、万物一切を見て、それを己が心の修養にしていかねばなり
ません。

肉眼 二 五
訓 一九 一二 五

人の肉眼は日月であり、右は月であり、左は太陽であります。日月も風や雲によりて
光を失われる時もあります。

肉体 二 三
ふ 三八 一 三

一般に世の中の人には、肉体をわがものと信じている人が多い。なれども、物は借り
物であるということも信じて、間違つた信じ方ではないと信じ、また人に教えても
決して迷信でないことを自覚しております。

肉体 二 二
ふ 四〇 六 二

肉体は今生一代きりのものであります。

肉体 ふ 四〇 六 三

「肉体」と「心」と「みおや」——この三つの原則を学び修めて頂きますことが、天地自然の法則を学び修めることとなります。

肉体 ふ 四二 四 一二

肉体がなぜ拝借したものか——と疑問に思う人も多いのでありますが、顔にせよ身長にせよ、私のものであれば都合よくできるはずであります。それが、どうしても私たちの思うようにならないところをみれば、「わがもの」ではなく「拝借もの」であることがよくわかります。

肉体 ふ 四二 五 九

精神に有ることは肉体にあり、精神になきことは肉体にもありません。故に、肉体の患いは精神の患いであります。霊主従体であって、肉体は精神の器であって、生命そのものでないからであります。

肉体 ふ 四四 一 二

肉体は借り物であり物体であることは誰も知るところであります。

肉体 ふ 四四 一〇 一八

天地自然は自由と平等の象徴である。太陽と月の光り、空気は地上の万物に平等である。(中略) 借りものの肉体も自由を示している。便所に行きたくなければ行けばよい。誰もそれを止められない。眠くなれば寝ればよい。誰も、止めることはできない。その自由を守られているのがこの借物の肉体である。それを、わが意を用いて自由を束縛している場合が非常に多いのではあるまいか。

肉体 ふ 四七 一二 一七

肉体は借りものとして一代限りであります。生命は無限であり、霊魂であり、不滅であります。

肉体 ふ 四八 八 一二

私たちのこの肉体は小宇宙といわれておるのも、天体の動きに影響されているからであります。

肉体 ふ 五〇 三 三

私どもの肉体は、万物のお世話によって成長させていただいております。その万物にお礼を申す気持を抱くことによって、万物から愛されるのであります。

肉体 ふ 五〇 一一 三

「心」が主であって、肉体は借物である。

肉体 ふ 五三 二 三

人の身体は、神が設計し、神が組立てたのであります。また、悠久なる魂は、いのちの親から頂いたのであります。この根本を忘れ、あるいは、この根本に気づかずして、

肉体 ふ五三 二 一〇

肉体 ふ五四 六 四

肉体 み三四 一二 九七

肉体 み三四 一二 一五三

肉体 み三四 一二 二五六

肉体 み三四 一二 四九九

肉体 み三四 一二 七五二

肉体 解 二八 一〇

肉体 敬 四二 一二 四三

自分の国の安全のためとはいえ、同じく神が設計し、組立てた人の身体を一瞬にして灰にするような兵器を開発し、悠久なる魂の尊さを無視して、これを用いるようなことは、天地自然の法則から申しますと重大なる犯罪であります。

如何なる人も貴賤男女を問わず、命の親が人体を設計組み立てしてお貸し下さっている。これが身の借り物であると論されているのである。

肉体は借り物であります。まだご用があり、また、役に立つ日が来るのであれば、貸しておいて頂けるのであります。

先ず生命の尊さを知るには、肉体は借り物と思わねばなりません。物を拝借して破損すれば新しくして返済するのが当然でありましてその位は誰も知っている筈であります。肉体が不自由になってから、動揺転倒して迷う人が多い。健康である間に大切に取り扱い、借り物を自覚して破損しないように使わして戴き、拝借している肉体の凡ての器官に尚一層感謝がなければなりません。(二月十六日)

人体は何物にも代えがたい尊い物であります。人体の取り扱いを無駄にすることは、親に対し、神に対し、不敬であり、不忠実であります。(三月十四日)

鳥畜類は亡骸となっても人の肉体の栄養となってお役に立ちますが、人の肉体はこの世が終わった時には亡骸としてお役に立たず、地に帰って土となります。(五月三日)

人体は神から拝借したものであります。人の勤労によって作られたものではありません。(八月二十九日)

地球が回転していると同じように、人の肉体の組織等は一分一厘の狂いもなく活動しております。内臓の器官等は目に見えませんが、少しの狂いも無く円満協力して活動しております。若し胃と腸が争いを起こして離れ離れになれば肉体は動きません。

(十二月三十日)

言葉なき時は、亡がらであり生命肉体は亡びてしまうのであります。

肉体は「借りもの」であります。これをこわさないよう大切にに使わせていただくには、

肉体

敬 四二 一二 四五

この世に生まれ出たときは「丸裸」であつた姿を自覚し、あの人のためならこうしよう、この人のためならこの程度にしようというような勘定（感情）に動かされた狭い考えでなく……と話しているうちに、おのずから私の指は羽織の紐を解いており、両手が動いて羽織を脱ぎすてていた。万物一切のため、この体を、この手を、この足を使つて下さいと、心の底から実行することでありませう。そうして私は袴を脱ぎさり、帯を解いた、着物を脱いだ。この動作の間、お話は止まっていない。話しながら、脱ぎながら、二つの行動が並行して進んでいた。（中略）すべては靈感による行動であつて、そこには微塵も我がの意はなかつた。無条件にお使い下さい、一切を使つて下さいというのが、誠を捧げた姿であり、借りものを自覚した姿である。裸で生まれ出た一日の日を悟つた姿でありませう。

借りもののこの肉体をまるはだか 天の衣にぬいめなかりきと、みおしえを示した。

肉体

導 三四 一〇 一二七

首と胴と足、足腹脳、みずほの国

肉体

捧 二四 八 四

私達の肉体は三段階に分れて居ります。頭、胴、足

頭は科学であり 美であり 徳であり 天であります

胴は宗教であり 善であり 愛であり 人であります

足は実業であり 真であり 力であり 地であります

天は頭にして、地は足にして、胴は人にして、天地人これ即ち神の法理として天地の法則として示されてあります。

肉体

命 四八 一二 七〇

万物に感謝をせねばならぬが、まずいちばん手近なものを尊敬し愛せよ。いちばん手近なものとは、われわれの肉体である。心が動けばすぐ肉体が動く。（中略）自分のために働いてくれる人には感謝の言葉を出しているが、胃や腸に感謝の言葉を出している人があるか。名（姓名）がある以上は、生命あるものと思わねばならぬ。健全な内臓の働きがあればこそ、われわれの体は存在するのである。手にも、足にも、

肉体と精神

み 三四 一二 六五一

目にも、耳にも感謝のできる人は健康に恵まれる。

精神と肉体は陰陽と同じようで、天地、父母、親子の如く切っても切れぬ、離すことの出来ない一体のものであります。天と地、父と母、親と子が離ればなれになるから精神の悩みとなり、肉体に故障が生ずるのであります。(十一月十日)

肉体の生れ変わり

ふ 四七 一二 一七

いのちの親のおはからいで、この世で肉体をお返ししても、立派な肉体となって生まれ変わりをさせていただくことを、教え諭されております。

肉体の開発

ふ 四七 六 一六

肉体の開発は衣食住の安定であり、それには肉体を始め、万物はわがものでなく、すべて借りものであつて、私どもの動作は誠を奉じて行動し、それぞれ各自の天職を誠実に実行ができますよう日夜、指導してまいりました。

肉体の糧

み 三四 一二 四二

海が荒れば山は静か、親が怒れば子供は静か、海の幸、山の幸、里の幸、この三つの幸はなくてはならない肉体を養う糧であります。(一月二一日)

肉体の器官

ふ 三五 四 四

天地の運行は協力と融和によつてたゆみなく運行しております。又人の肉体の器官もその通りでありまして、どこか故障を起こした時には、身動きできないほど苦しいのであります。

肉体の欠損

ふ 四〇 八 一六

一万円の洋服を二千円で質に入れた場合、利子さえ払えば何年でも保管してもらえませんが、利子払いを怠ると流されてしまい、何処へいったかわからないことになる。肉体は借り物である。借り物の肉体に負担をかけ即ち一不徳を積み重ねるのみで徳を積まない(利子を払わない)いつの間にか流されてしまう。(中略) 五十年生きられる人が四十年で終われば十年の欠損である。

肉体の健全

ふ 四〇 八 一六

自然の法則は陰と陽とがあり、男女あり、あげる人あり貰う人あり、引く息あり、吐く息あり；で、単線ではない。全てが往復で、複線である。この理を学び修めて実行すれば肉体は健全である。

肉体の故障

命 四八 一二 一三七

心の持ち方、使い方が狂つてくると肉体に故障が起る。反省し、気がつけば素直に改めることである。

肉体の故障 命 四八 一二 二六九

肉体は精巧な機械である。故障の起こるのは、天地の恩恵に、親の恩恵に、兄弟肉親の恩恵に、心からの感謝ができていないからである。

肉体の主導権 ふ 四〇 六 二

肉体の主導権は心であり、その心は命の親が動かしておいになるのであります。

肉体の主導権 ふ 四〇 六 三

この肉体を指導せよと、いのちの親が心に命令を下される、そこで心が肉体に命令を下すのであります。即ち、肉体の指導者は心であり、心の指導者は「みおや」であります。

肉体の患い ふ 四二 五 九

知らず知らずに天理天則に違反して精神（清き神）を汚しているのでありますから、これを悟って実行すれば肉体のわずらいは消えてしまうのであります。

二十音の教訓 ふ 三九 二 一七

一、問 神の子にどうして争いができるのですか。
答 大恩と人の恩義を忘れるからです。

二、問 神の子に何故え悩みが重なるのですか。

答 清きわが魂を濁し、おこない出来ぬから。

三、問 大事と大切とはどこが違うのですか。

答 神と人とのみちを修むればわかります。

四、問 すめらみくにの礎とはどういうことですか。

答 まことの道を修めまことの業をばげむ。

五、問 よしわるしの判断を正確にするには。

答 わが魂を磨き徳を積み及ぼすことにあり。

六、問 さかしまな心を清めるにはどうするか。

答 活かされる大恩に感謝することです。

七、問 親切が仇ということはどういうことですか。

答 徳の足らざるところを悟り邁進する。

八、問 見る聞く度に気にかかる、どうすればよいか。

答 心の無駄使いをしないようにすること。

九、問 努力しても伸びないのはどういうことか。

答 我執貪欲で報いることをしないから。

十、問 平和建設はどうすればよいですか。

答 人格完成に努力を重ねること。

二十八日
ふ 五四 一二 一五
二と八とを組み合わせて、二人和。夫婦も親子も、人と人との関係は、もとは二人、私とあなたとの和ですね。天と地も二つの和。呼吸も二つの和。こういう尊い日なんだね。

日月
ふ 三九 五 二一

日蓮
太 四四 一一 二四

月・日はいかなることがあっても、その光りを失わない。それが日月の本質である。わけても日蓮上人には、まずその「日蓮」というお名の言霊を通して親しみを覚えるのであります。日蓮の「日」は、日月の日であり、日本の日でもあり、日の丸の日であります。また「蓮」は「連」であり、連絡、連合、連結というように、線のつながりであります。万物一切のつながり、筋道であります。でありますから「日蓮」は「日連」であって、あらゆるものにつながっていくという広く大きい意義を感じ、こういうお名を持たれた上人へ、つよい憧れを抱きました。

日蓮
太 四四 一一 一七四
「日蓮」は「日連」であり「日輪」である言霊によりまして、やがて西伊豆に建設を見ることになりました。

日本は世界の根元であり礎であります。枝は折れても根は折れることはありません。諸外国は枝葉であります。花は枝に咲きます。(中略) 段々と日本の力が諸外国に流れて行く事は、時と共に事実となつて現われています。この神国の国民は、一日も早く神様の御心に合一する様進行することが急務なのであります。

日本
ふ 四七 九 一四

日本
ふ 五〇 一 九

日本は稲穂の国、すなわち瑞穂の国であつてお米の産地であります。日本は日の本、東洋の中心である、東洋は太陽の出ずる東の方であり、洋は太陽の陽であり大恩は熱であり愛である。また平和の和である。日月である。日月は 陰陽であり、夫婦なり、天地は父母であり、また父母の上には祖先、その大本は太極、その

教科書は地球上においては万霊万物尊愛であることをさとされました。

日本は、神代以来神国であります。(中略) 日本の国土が神国なら世界の中心であり、源である。この根本を見なおしてください。

日本
ふ 五三 五二
日本
ふ 五四 二二
日本はすなわち霊の元でありまして、大和魂(やまとたましい)という優れた精神を持つているのが日本民族であります。(中略) 日本は、国の名も、国旗も、本来の魂も、すべて悠久世界平和の顕現を指向していることはまことに、得難い教科書であると信ずるものであります。

日本
訓 一八 八一
人と云う字は立て合いになって示されてある通り一本ではどうすることも出来ず、二本は日本であり、日本人であれば助け合いをして、たのみ、たのまれ、そのために一身を粉にしても働かねばならないのであります。勿論人に頼まれてよい事と悪い事とありますが、それは見分け、聞き分けして、よい事をたのまれた以上には成し遂げねばなりません。

日本
訓 一九 五〇
日本は全世界の根本地であり、それ故に日本は神国なり、祭政一致、君民一体と心から信じ、世界の人に伝えていくことは云うまでもありません。

日本人
導 三四 三四
誠の道を履み行って真の業を喜び励んで行く処に真の日本人としての威厳があり誇りがある。如何に田に鋤鋤をもつて働いていようと、或いは手車を曳いていようと、どんな低い身分の人でも自分に与えられた処の、その任務を、その重責を誠ささげて行う、ここに日本人としての誇りがあるんじゃないかと思う。

日本の国民
ふ 五四 二二
日本の国民といたしまして、忘れてはならないことを忘れていくのではないかと常に思うのであります。(中略) 誠これ即ち至誠天に通ずというごあいさつがあります。したが、この誠ということをおぼれているのではないかと、こころ私は信ずるのであります。日本の国旗は何をしるしとして、何を目標としておりましたか。太陽でございます。太陽はもくもくとして世界を照らしているではありませんか。この日の丸の心、これ

日本の国旗
ふ 五四 二二

日本の地形

敬 四〇 一一一六四

即ち誠、これは天壤無窮であります。

——取ったものはいずれ返す時が来る。それが天理である。無駄なところへカコブを入れて後悔するよりも、我が国土の北海道や九州の開発に力を入れよ。

とは、昭和二年以来の私の主張である。「日本の地形は竜、その頭は北海道、尾は九州、岐阜はその中心である」と天の啓示に示されたのは、昭和二年の夏、長良川畔の竹藪（現在はここに護国神社が建っており、「平和一神」の和石も立っている）に一夜の夢を結んだ折のことであった。竜の頭をなおざりにしておいて、他国のふところを掻きまわす行いを人も神も絶対に許さないと信じておった。

入会
ふ 五五 七 五

皆さんが捧誠会に入ったのは海に入ったようなものです。会は海（かい）であります。海に入って泳ぎが出来なければなりません。ただ海にぼやーと入って沈んでしまつたらどうなりますか。そんなことは言わずとも、語らずともわかっているはずだ。捧誠会に入ったら海に入ったと同じように泳ぎを習わなくてはならない。泳ぎを習うことは実行なのであります。泳ぎを習わず、研究もしないで海に入る人はなكارう。捧誠会に入ったなら、海に入ったんだと思つたなら、無条件実行することが「いのちの親」へのご奉公であります。

入魂式

ふ 四〇 七 三

会員同士がみだりに争いをせず、己を空しゆうして徳を積み及ぼし、家族を始め職場の人達も協力して、万人が幸福を生み出していかれるよう…このことを会旗を通して誓いたてまつっているであります。

鶏と卵

ふ 三九 一 一九

青年部の座談会で、「鶏が先か、卵が先か」という質問が出た。（中略）「卵—と—いうだろう。この言霊には子（こ）がついている。子であるから後だ。親の鶏が先きだ」と答えた。

鶏の言霊

ふ 四四 一 二五

鶏は一羽のとりであるのに、にわとりという言霊がでる。鶏の使命は人に時を知らせる。人は教えられる。夜が明けたぞ…と知らせる。闇から光を見出すのが鶏の教訓である。

にわとり(二羽とり)というのは、夫婦の意に通う。一人ではなくて、二人の和であるという教訓である。自然は天地一体であり、人の道では、親子、夫婦、兄弟が一身同体であることを示されている。(中略)「鶏が先か卵が先か」というのは理論であつて、本来は鶏と卵は一体である。

また時を知らせる鶏は、「時間励行」を教えている。「コケ、コツコー」と鳴くその声は「結構だ——有難い」「さア、夜が明けたぞ、光がさしわたったぞ」という言葉に続いていく「早く目覚めなさい、さア立ち上がれ」という声でもある。(中略)「積んだ徳のとりこぼし」をしてはならない。どうしてとりこぼすのかというと、不平、不満をだすから、こぼれるのである。折角、徳がみのつても、鳥に食われるということがある。

忍 ぶ 四二 六 三

人間 ぶ 三九 五 二七

抜いた刃もさやおさまるのは、忍の働きである。日月の運行を「神道」という。大地の「営み」を「仏(物)道の極」という。天地—

人間 ぶ 三九 六 三

神のわけみたまの「魂」と、借り物の「肉体」と、二つ合わせて一つ、それがわれわれ人間である。

人間 訓 一九 六 三四

天地の中に人が生活して居りますので、人は人の間と文字に現し、人間と教えられてあります。

人間 振 四二 一九 四

天地の間に人住むと云う意味において人の間と書いて人間と云う言葉が教えられています。だから天地の理法に反するものは「みしらせ」を命の親から諭されるのであります。ややもすると神も仏も無いと云うような心を持つ人がありますが、そのような人の心こそ、思わず知らず、さかしまな心を持っているのであり、さかしまな心こそ新兵器よりも、弾薬よりもおそろしいことを自覚せねばなりません。

人間の重さ ぶ 三九 六 一六

人間の重さは体重によって決まるのではない。徳の大小がその人の正真正味の重さである。

忍耐

命 四八 一二 六九

忍耐には無理がある。

ネの部

根

誠 四八 一二 四二

声は「音」であり、「発音」であります。(中略)その発音は「音(ね)」という言葉靈になりません。「ね」は「根」であり「元」である。根はこの地下にひそんでおります。根のない草木は「生け花」であって、一時は美しいが長もちしません。根のある花を咲かせ、根のあるみのりをしていくところに本会の趣旨がある。

「音」は「根」、「ね」は「根」であり「元」である。根はこの地下にひそんでおります。根のない草木は「生け花」であって、一時は美しいが長もちしません。根のある花を咲かせ、根のあるみのりをしていくところに本会の趣旨がある。

子(ね)

ふ 四七 二 二六

「子」(ね)は「根」である。草木の根は土の中で活動している。目には見えねど、不断の活動をしている。根は強いもの、広く温かいもの。だから、根の発展にじやまをし、その発展をさえぎろうとする石があっても岩があっても、これを排斥せずしっかり抱ようしていく。その心、その行動——これ誠であり、親心であります。

ねぎろう

ふ 四三 一二 一七

ねぎらうとは、愛であり、万物を包容して養っていく神の心で、これは実に大きい苦勞人である。

ねたみ

誠 四六 六 二四四

「ねたみ」「うらみ」の始まりは、思いちがい、聞きちがい、感ちがい、間ちがいであって、この「まちがい」から「ねたみ」「うらみ」になってまいります。

熱

み 三四 一二 四八二

熱は愛情であり、万物に授けられる甘露であります。(八月二一日)

熱

振 四二 七 四

暑い時、これはまことの感謝であります。熱は感謝である。皆さんを生んで下さったお母さん方も、暑い夏のあつい中を感謝して生んで下さったと思います。

熱意

ふ 四五 八 五

なぜ食しいのであろう。なぜ苦勞がたえないのであろう。もう少し、人なみに生活し

ネの部

ていきたい……と、不平不満を持ちがちであります。

これは「熱意」ではありません。人生に「熱意」を持つと、人生に謙虚になります。真剣になってまいります。

—わが身にかかってくることは前生からの教科書である。そして同時に、明日（未来）の姿である。この教科書と真剣にとりくんでいこう……。と、熱意をもって進むことになります。目さきの我執貪欲にとらわれることなく、謙虚に真剣に、熱意をもって今日一日を、進んでいってください。

熱心

い 一八 一〇 三七

熱心とは真面目であり少しも油断なく、不平不満なく、偽りのない無条件の心からつとめることを申すのであります。常にこの熱心が人にはありますが、同じ熱心でも利益の為に熱心なのはかえってその熱が破壊される場合があります。何事にも熱心につとめると云う事は大切な事でありますが、利欲の為に失敗し他の人から破壊されるような熱心では、却ってその熱心が精神的にも物質的にも消滅するのであります。（中略）人は兎も角排斥されたような場合には熱心にやるべき事もやらずかえって自暴自棄となり、不利益になるようなことがありますので、それで世の中には修養も信仰も必要なのであります。人に笑われようが、破壊されようが為すべき実行をしてこそ熱心な人であり、その人こそ精神的にも苦勞なく物質にも恵まれて安心立命した生活が出来るようになるのであります。

ねばる

ふ 五一 八

根張っているから大木も倒れません。根張りが浅く弱ければ少しの風にも倒れてしまします。「根張る」とは「粘る」ことです。根が土にねばって絡みついているではありませんか。「ねばっこい」から「糊」です。糊が水のようにサラサラしておっては糊になりません。根は土にねばっていく。人は「法」にねばっていく。そこに平和と繁栄のもとがあることを悟ってください。（裏表紙）

ねはん

ふ 三九 七 二六

「ねはん」の「ね」は「根」であり基本です。「ねはん」の「はん」は「模範」の「範」ですから、範を示すことです。ですから、真如苑は理論でなく実演であると思えます。

念 四〇 三 一七

(中略) 難を有難いと感謝する、これが「涅槃」ではないでしょうか。根にはいる土の中は「壕」です。壕に入るから弾もさけられる。ここに到達することが悟りでしょう。

人に通わず念は、その相手一人に止まらない。その相手に縁のある人々にも伝わってゆく。

念 四四 二 一七

念は霊魂であります。思う心、いうた言葉、思った瞬間に、いうた瞬間に万物にかようことを、天地自然の法則を学び修めと教えられています。

念 四四 六 六

念という字は、今の心と書く。この今が大切である。今は明日の種である。今を忘れて、ただ先のことばかり考えておつても、どうにもならない。この今のただ今を誠生きる勉強を忘れないように。

念 四四 七 一二

家にも土地にも「念がのこっている、こもっている」と、よくお話するが、このことを、ほんとうにわかっている人が幾人あるだろうか。「念がのこっている」というと、その家や土地の先住者の念だけを考えがちであるが、私がつねづねいう「念」とは、そのような単純なものではない。

先住者の念はいまでもない。そのほかに、その家に入入りした多くの人々の念がある。その土地を踏んだ多くの人々のさまざまな念がある。出入りした人々、かならずしも善い念ばかりを持っていたとはいえない。思いちがい、とりちがいから悪念を抱いて出入りした人も多数あつたはずである。また、訪ねてきた人々の念のほかに、その人々につながる多くの人の念もそこに運ばれていることもある。こう考えると、無量といつてよいほどの「念」が、その家にも土地にも残されていることがわかるはずである。

人々の念は、このように家にも土地にも残されていくが、同じく職場にも残される。とくに国会議事堂に国会議員は果してなをを残しているか。これを反省している国会議員が何人あるか。強く、きびしく訴えたい。

念 ふ 四四 七 二四 これはきれいだな、欲しいな、とそのお客が思えば、欲しいなというその念が（中略）
もう通っているのです。

念 ふ 四四 一一 九 一生懸命の念が、その人をひきよせるのである。

念 ふ 四五 一一 五 お金も時にはバイキンとなります。買収するということが絶えず、人生には行われている。昔から城をあげ渡してしまふ、田地田畑を売り払う、先祖から譲られた立派な建物もぶち毀してしまふが念はこのころ。あるいは二本の箸の割箸の中にも人の心の息が通っている。しかし、みな迂闊にしている。

念 ふ 五四 三 五 十二ヶ月を一年という。一念であり、信念であります。念とは今の心であります。座っている今の心、行動している今の心、その心と身が一体となって、合掌して、念じるところ万霊万物尊愛に向かつてゆくことが、尊いのであります。

念 み 三四 一二 四六一 鏡に己が姿が写るように、心に持つ念は万物に通います。そして又、万物の念も我が心に通って参ります。（中略）誠の念を万物に送り、万物の恩恵を信じ戴き、双方思いやりの生活こそ尊いのであります。（八月十日）

念 振 四六 一 一〇 心のもち方使い方は、つまり心の動きというものは、よきにつけあしきにつけ、その思念は万物に通うものであります。このことわりを悟る時に、綱領の第五条にさとされてある言語動作を慎むことについて、誠を捧げて実行しなければならぬということとであり、まこと心で真実の言葉を悟り、そして動作に現わすことであることが、はっきりわかると思います。

念 誠 四六 六一七七 言葉に出さなくとも、あの人は「にくい」この人は可愛いという念は、向うに通っているのです。相手の魂には「良心」がある。これを「精神」――清き神と申しませんが、この清き神が、ちゃんと知っております。

念 誠 四八 一一 一八〇 人の使っている小さい物にも、人の念が生きかよっている。例えていえば限りありませんが、女性の方々の櫛、かんざし、着物：その一つ一つに念が通っております。それに気づいておらない。（中略）愛していた人の念が強く生きております。

念 命 四八 一二 二〇七

一寸の虫にも五分の魂ありという。蟻一匹にも魂あり。誠の心を通わすよう教えられながら、ともすれば恨み、ねたみ、そねみなどを通わしている。品物を手渡すことも念を手渡すことも同様である。悪い品物を投げつけたり、手渡ししてはならぬように、悪い念も手渡ししてはならぬ。

念が残る 命 四一 五 九

念が残る―というのは「種が蒔かれる」ということである。人の念―人の思い(重い)が残ると、歳月が経るに従って重くなる。その思い(重い)が、重く後々の人の肩にかかってくる。重さにたえかねて倒れる。

念は通じる 命 四八 一二 二八五

念は通じるものである。人をなぐろうと思っただけでも、その念はめぐりめぐって、自分が人からなぐられるようになる。

念を払う 命 四四 二 二六

万物にそれを造った人の人々の念が通っている。(中略) その念を払うには、己を空しうして徳を積み及ぼすほかにない。

ノ の 部

脳 誠 四六 六 六八

脳は即ち神であります。これより上はありません。この肉体におきまして脳はもつとも上にありまして、これより上はありませんから「脳天」ともいいます。

農 命 四五 七 一七

農の言霊は人の頭であり、長上でありますと同時に、大地であり、農地であり、脳血であり、脳が狂えば、精神病者として脳みそが薄弱になります。

脳溢血 命 三八 五 一七

この頃は、成人病といわれて脳溢血でたおれる人が多くなっている。これは常日頃に行き合わないからである。血液も片道だけで還流がなければ息詰って溢れる。池の水もそうだ。入ってくるだけで、出る方の流れがなければ、たちまち溢れてしまう。血の片道旅行で行き詰まっているのが脳溢血である。これが病気の原因である。この原因をさぐって天地自然の道に合すれば、まちがいなく病気は消えてしまう。

脳溢血 四〇七 一三

それまでは親子の間がうまくいかず、いつもゴタゴタしておったのが、脳溢血（一結）によって一家が一結した。

脳溢血 四六五 二〇

脳溢血——という言葉。脳は「神」であり、血は「結」であって団結である。神のみここに一結していく。こういうおさとしが言葉によって示される。

脳みそ 四五七 一七

脳みその「みそ」とは、未曾有であり、これ以上はないということでもあります。そう（曾）は誠であり、層であり、相であり、地球上の道であります。層の真理は、地球が廻転する法則なのであります。

農薬 四五七 一七

農薬が悪に変化すれば、毒ガスとなり、毒ガスが悪化すれば、ときという言葉、しんという言葉霊につながります。ときは時間であり、刻限であります。

納涼 四三八 一七

納涼会と云えば暑いから、涼みに、気楽に、演芸を楽しむと云う普通常識的な判断がなされますが、「のうりよう」と云うことたまは、やはり私達の頭、頭の働き、頭の整理、暑いからぼうつとする頭の整理「のうりよう」の「りよう」は良き事、善良な事であり、私共は何時も「のうりよう」でなくてはならない。素直とは何でもないといと云ことを聞いてゆく事のみでなく、丸のみでなく、強く正しい心、動揺転倒しない心、迷信に拘泥しない「脳良なる」即ち善良なる事である。会員は雑音に拘泥せず、動揺転倒しないように即ち脳良な、善良な人になるために修養実践してゆかねばならない。

能力 三八五 一六

人は大自然の神の子であります。心の美が自然の美と調和すれば、身の浄化である。そこに身のわずらいはなくなる。これは不可能をいうのではない。人には、それができまず「能力」がそなわっている。能力は脳力である。

伸びる・結ぶ・開く 五六二 四

伸びる・結ぶ・開く、ということを申しますが、頭で伸びる、腹で結ぶ、足で開く。頭はまが玉、胴は鏡、足は剣でこれは三種の神器でありまして、日本を象徴しているものでもある。

伸びる・結ぶ・開く 五六二 一七

伸びたら結ぶ、結んだら開くという順番なんです、ね、本年は天地自然の法則の道を開

ハの部

いてゆく時期になったので、これは、「心の扉を押し開き」といういのりのことばのお諭しにもなります。伸びる・結ぶ・開く、これで火水風、天地人、となるんです。

歯 四四 四 七六

歯 四四 一 一〇

ハイ 四〇 六 一四

ハイ 四六 六 二二六

ハイ 三四 一〇 一八九

ハイ 四八 一二 一一三

肺 命 四八 一二 二二九

歯は正式には三十二本ある筈です。これは天地自然の法則であり原則であります。

歯は和であります。「今日（こんにち）は」であります。平和であります。

「ハイ：」という言葉の言霊は、入る、生える、であり、天地自然の法則に叶った、素直な気持からでる言葉である。

そこで「ハイ」という言葉が出てまいります。家にはいる、はいらない。会社にはいる、はいらない。学校にはいる、はいらない。種をまいてもはえない。「ハイ」（肺）という言葉が、このようにつながってまいります。

はいという言葉は非常に美しい。これは、はいはいはいと這い上る、進んでいく、こういう風に今日の皆さんは心の底から、はいはいと出るように心がけて頂きたい、腹の底からいわれるように心掛けていく。

枯木、しおれた木は、枯れ気、しおれた気である。かかる気持でいる時「はい」という言葉を聞くと、その人たちの心は花が咲くのである。そして「はい」といった人の心も花が咲いたように、ますます愉快になり、自然に迷いもとけるのである。

中指 肺 呼吸器の病気について注意すべきは、言葉の出し入れ、物の出し入れ、いき通い、すなわち体の出入りである。（中略）三つの出し入れの調和がとれてお

れば、呼吸器などを患う種子はまかぬはずである。しかし、これらのことは本人の心がけるべき大切なことであるが、両親にも、先祖にも、責任のあることであるから、悪い種子をまかず、よい足跡を残さねばならぬ。

梅花運動

振 四〇 二 六

梅花の一生にあらわれている徳と力と愛こそ誠の精神であり、総裁先生のこれまで歩まれてきた道であります。会員の胸に輝く記章となつてゐる所以もここに源を發してゐることは、皆さまも既にご承知のことと思ひます。梅花運動も、この梅花の精神を行動にあらわそうという運動なのであります。(中略) また、梅花運動は「倍加運動」にも通ずる。会員倍加運動は、梅花運動でなければならぬ。このことはまた、みおしえを伝え、教え、眞の会員に育て上げることにより、自分の魂を高め、人格向上に資し、大きくは本会の目的である世界平和顕現に寄与することになるのであります。

バイキン

誠 四六 六 二二七

「バイキン」(借金)、借財がふえていきますとお金に行き詰ります。体内に伏せこんで腐つてゐるの「バイキン」は首や血管に喰いついていきますから、つぎからつぎへと腐つていき肉体の組織を破壊してしまふのであります。肺につながるバイキンは強い。このバイキンを克服させるものは、薬もありましようが同時に、誠をささげて施していく実行がとくに必要であります。

バイキン

誠 四八 一 二 三六

この浄化をしないで捨てておくと、やがて「バイキン」がわく。バイキンは顕微鏡で見なければわからないほど小さい存在だが、この体内にくいこむと骨が腐つてしまふ。内臓器官も腐つてしまふ。このバイキンは不潔なところに發生する。みなさんの、不平の「不」不満の「不」、恨み、ねたみ、嫉妬—これはきたない。この「不浄」が心にひそんでゐると、そこに教科書として、バイキンが、つながつてくるのであります。バイキンは生きてゐる。目には見えないが生きてゐる。この空気のなかにも生きてゐる。いたるところにバイキンは生きておる。このバイキンを發生させるのは私たちの心。それは、いったい、どのような心であるのか。

バイキン

誠 四八 一 二 一八〇

バイキンというのは、バイ金という金であります。人生には絶えず買収がおこなわれておりましよう。田地畑畑を売り払う、先祖から譲られた家屋も売り払う。こんな大きいことでもなくとも、二本の割り箸にも人の心の息がかよつてゐる。

肺結核

命 四八 一 二 二二二

三代前からの両親の行いが、子孫の上に現れるのである。(中略) 呼吸は夜となく

敗残者

み 三四 一二 三九三

昼となく吐く息、吸う息とが間断なく動き五分五分である。喘息は息を入れる方が多く、出す方が少ない。喘息と肺結核とは線が違うが、呼吸につながる点では同じである。呼吸があわず、万物と調和し、万物を愛する心が少なく、(中略) いささかの感謝や合掌の心もない。父母から養育された恩恵も慈悲もわきまえず、親に反感を持ち、親の心を傷つけるような心持や行いが肺の病いのものとなる。次々と新薬ができて、治療も困難であるし、また人々と呼吸を合わせ、調和の実行も難しい。しかし、実行をして救われている会員も沢山ある。

学びにも、修めにも、協力融和にも努力せずに幸福を望む人は却って世の敗残者となり、神仏も救おうとされても救えず、自ら自暴自棄になっていき、救い難いのであります。(七月八日)

敗残者

振 四三 八 五

人生行路には幾多の障害も誘惑もあり、其の他、人災、天災あれど、其の中を乗り越し生活して行く事はまことに厳しいのでございます。その厳しい事を避けようとしてはなりません。厳しい事を避けようとするような根性であるから墮落し落第するのであります。人生行路の厳しさを避けようとする者は、世の敗残者となる事を私は言明する。これは捧誠会の会員のみならず国民に告ぐと云う中に、数々其の言葉が出ている筈であります。

拝借

誠 四八 一二 一二〇

「いただく」のはきびしい。拝借するのは楽です。一万円の利益をいただくよりか、一万円を拝借する方が、たしかに楽です。しかし拝借したものは返さねばならない。このお返しは骨がおれます。みなさん、こういう経験をしておられると思う。お返しになぜ苦勞するかというと、利子がつくからです。これは金融だけのことではありません。天地自然の法則によって「天借」にも利子がつきます。ですから、いのりの詞にも、—はらいたまひ、きよめたまひ…と、おさとしされてあります。

いつまでも拝借できるような徳を積むには、よろずの物に、よろずの人に、あんなもの、あんな人—という軽侮を持つてはならぬ。どこまでも「尊敬」し奉るので、始め

拝借できる徳

ふ 四一 八 九

肺病 誠 四六 六二二六

て徳が積める。

肺の弱い人、肺を患らっている人は、まず人に、おいしいものを食べていただく。麤（はい）物を捨てないで自分がいただく。（魚であれば人に肉をあげて自分はアラをいただく）人にみをあげて自分は皮をいただく。こういうように実行してごらん下さい。かならず恩典があります。これを知らず、よい身ばかりを食べなければ栄養がないと思っておりますが、本当の栄養は皮と身との間、骨と身との間にあります。

肺病 導 三四 一〇 八三
呼吸器病には特に医師から安静（あうんせい）転地療法（天地療法）と注意を受ける。あうんは天地であり、せいは調和であり、和合即ち円満であります。誠は天の道であり、これを行う事は人の道なのであります。天の道、即ち神の道、人の道を行えば呼吸器病という病になる事はないのであります。

博多（地名） 導 三四 一〇 五五
博多の「は」は和であり、語り合う事であります。捧げ合うことであり、協力する事があります。

博愛衆に及ぼす ぶ 五〇 一二 四
博愛衆に及ぼすとは、人種・国籍・信教を問わないことから始まり、恭儉己を持すとは万物を尊愛し万人を尊重することです。

白紙 ぶ 五五 一 五
白紙とは、何にもとらわれず、丸裸であります。

白内障 ぶ 四六 四 九
零時は〇であり和であり誠であります。又白紙は拍手であり合掌であります。

恥 ぶ 四五 一一 一〇
「白内障」という言葉は「箔（はく）ない症」につながる。一言でいえば、箔（はく）がついておらないのである。人格ができていないのである。徳がないのである。

橋と箸 ぶ 四一 三 一〇
だんだん三十、四十、五十と年月を通ってきますと、恥をかきかき丸くなるということがありますが、やはりだんだん心の中も成長して、いかに辛くとも、いかに苦しくとも、顔や姿にはなるべく現わすことのないようになってまいりました。

こっちの岸から向う岸へ橋渡しをするのが「橋」である。食べ物や皿の上から口の中へ橋渡しをするのが箸である。一日、三度の食事に箸を持つたびに、父母の恩、天地の恩、勤労の恩と知ることになれば、世界平和の橋渡しとなる。

始め 振 四二 一 四

原因があるから結果がある。始めがあれば終りがある。然し始と終り、これは人が決めたことであって、地球は黙々として始めなく、終りなく回転しております。始めも終りもない大和であります。始めと終りをつなぎ結んでゆけば、始めも終りもない零であり、○であり無限なのであります。

はずかしい ぶ 四四 八 一〇

そんなことははずかしくてできません。という場合が多い。いったい誰に対して、はずかしいのか。この点をみなおしてみると、

——自分に対してはずかしい。というのが一般である。

その自分というものを、もう一つ、つきつめてみると「神の子」である。すなわちわれわれはみな神の子であるという、その本質に対して、はずかしい行動はできないのである。

旗 敬 四二 一二 二四

旗は側（はた）である。この言霊は、先に述べた「他自共に」の趣旨に通う。「日の丸」の旗に限らず、すべての旗は利己主義の象徴ではなく、はた（側）をまず喜ばせ、はた（側）をまず満足させていこうという旗印である。

働 き ぶ 三九 六 一五

心・言葉・物・肉体、この四つをひつくるための働きが本当の働きです。

働 き ぶ 四六 三 一四

目が見えるのは、目が働いているからである。耳がきこえるのは、耳が働いているからである。手も脚も、内臓器官も働いているという自覚を持っていたきたい。お金もうけをすることのみが働きと考えやすいが、ひとはこの無条件の働きによって、活かされているのである。

働 く ぶ 四二 一一 三

働くとは「はたはたを楽させること」という言霊であるが、自分が努力して人に遊んでいなさい、ということではない。人の働きを邪魔しない、いいかえると人に迷惑をかけぬよう自ら努力することである。

働 く 敬 四一 一二 一三七

人は死ぬために働くのではない。生きるために働くのである。命を投げ出す覚悟、死んだ気持ちになって奉公する覚悟、これは天真爛漫で無条件の心である。この覚悟で働いて、いのちが生きのびる。生き生きした活動が出来る。この覚悟したが故に、い

のちがなくなるのではなく、却って、いきのびる。即ち「人をたすけて我が身たすかる」のである。一人の心を活かし、万物を活かして行ってこそ己れの心が生きてくるのである。

働く 命 四八 一二 八五

働くのは報恩感謝の心からするのである。喜んでいただくためである。功績が買われ、真心が買われて病気もなおり、また事業も成功するのである。奉仕の賜である。

働く 命 四八 一二 九三

我々は生きるために勤労するのではなく、天地のご恩、親先祖のご恩、国土のご恩、衆生のご恩を始め、万物すべてのもののご恩になっているのであるから、その恩に報いるために働くのである。

働く 命 四八 一二 九三

働くとは、はたの人らしくをしていただくためで、勤労することにより、みずから願うのではない。恩に報いるために勤労することは真に尊いことであり、またその心構えで働けることは真に幸福なことであり、有難いことである。

八 ふ 四九 九 四

会員八人の教訓は「末広」であり、「寿」であって、その八人が団結するという、まことにめでたいきわめであります。そして言葉と言うものは、多すぎても又足りなくとも間違うものである事を注意致しました。

八 ふ 五三 五 四

八は末広。霊山富士は東海の天に、白扇をさかさまにかけてそびえております。いのちの親は

東海の空に輝く神里は 世界の人の道しるべなり

と諭されております。心の道しるべであります。道を歩むにしても、海を渡るにしても、磁石や羅針盤がなくては迷いましょう。目標とする星は北辰星であります。これは、神の子の道としては魂であります。神の子の歩む道を示すのは、清く明るい魂であります。この道を踏み外したらどうなるでしょうか。天地自然の法則によって裁かれるのであります。

八時 ふ 四七 八 六

発会 ふ 五一 七 六

八時という「ことたま」は末ひろがりであり、富士山の形であります。発会は、いのちの親への奉仕であり、報恩感謝の行事である。

発声 五〇 五 一七
發明 四九 一二 二五

心も身もともなつて始めて真の「発声」ができる。
物を大切にする心や目や技術があるから發明できるんだということになります。も
つと根本には天来清浄な魂からの暗示です。(中略) 清い精神にはかならず教えて
くださるものです。

ハト コマ マメ 三八 一一 二三

われわれ明治の人間、また大正初期の人々は小学校の読本で、「ハト」「コマ」「マ
メ」と習った。ハトは平和である。コマは努力と働きである。マメは健康である。

ハトの言霊 四四 一 二六

鳩の「ハ」は齒であり「話」である。(中略) 齒が生えそろうまでは、言葉を教え
ても話せない。(中略) 「ト」は「徳」であり、また得心である。なるほどと得心
する。信ずる。

ゆえにハトとは信じて行かう使命を責任もつて行動するという教訓である。伝書バトは、
電信、電話と同じく重要な役目である。交流をあやまると事故生じ万事に自己中心に
考えたり行ったりするから平和を乱すのである。平和建設には、まず正しい交流を完
全にすること。心が乱れると万事が乱れ、とても平和建設はおぼつかない。平和の実
現が、鳩の言霊である。

鼻 三九 八 二三

鼻は人生の花道である。空気が鼻を通つて温められ、浄化されて肺に入るように、「そ
こ」を通らねば人生の舞台に行けないのである。

はなし 四八 一二 二六五

はなしは人に言い聞かせるものではなくて、自らの心に言い聞かせるものである。よ
い話でも「もう少し聞きたい」と思われる程度がよい。腹一ぱいとなれば下痢をおこす。
一輪の花とも語れる人は、暖かい広い心の持主である。

花とも語る 命 四八 一二 二八〇

「つかずはなれず」の言霊は、肉体は近くに居りましても心が離れてしまえば身心一
体とならず、心に油断が出来てすきまが出来ます。そのすきまから悪風も入りそれが
原因して微菌を生じ伝染病に罹るような事になります。心のすきまがあり油断がある

はなれず 訓 一九 六 三

程恐ろしいことはありません。心はいつも神の御心に近づきますようそして神の心か
ら離れないように致さねばなりません。それと同時に親の心、目上の人の心、徳ある

母 命 四八 一二 二四四

派閥 命 四八 一二 二四四

人の心から離れないように進み行なって近づくように心がけねばならないのであります。お母さんのことを「おふくろ」というでしょう。「ふくろ」は「鞆」です。

海は母であり、山は父であり、海の幸を無駄にすれば母に不孝となり、山の幸を無駄にすれば父に不孝となります（一月二二日）

袋―は「おふくろ」である。「おふくろ」という母は子を生み育てる。故に「海」（生み）という文字には「母」が入っている。「海」は無限である。そのはかり知れぬ広さと深さの中に、もろもろの物を生み育てる。「袋」はかく大きい。その大きさは、だから無限である。

大地をふんで進むのと、海の上を進むのとは巾が違いますが、父は大地から生まれ、母は海から生れ、人の始まりは最初海の中に生活しておりました。それから何億年かたつて陸に上がり、何兆年かたつて文明人となりました。山が海になり、海、山、野のおさとしは、海は母で、山は父で、野は子であります。天上は無窮であり、奉仕（円満）であります。

不平不満があるから反対がある。怒り、嫉妬心があるから派閥ができるのであります。

1 一家の太陽となれ。愛によって物は成長するのである。

2 大地の心をもて。どんな汚物でも吸収し、浄化するのはこの心である。

3 水の心をもて。水のように素直で低きにつき、しかも切っても切れず、石をうがつ強さをうちに持つように。

4 人を立てよ。火鉢の炭でさえ、立てれば赤々とおきるものである。親を、夫を、子を、尊敬し、たてること。子供の美点は祖父母や父のせいにし、欠点はわがせいと反省すること。

5 土台となれ。男は棟であり、屋根である。女は土台である。土台がしっかりしていないと良い家庭はつくれない。

6 良い言葉を使うこと。お早う、はい、今日わ、今晚わ、お蔭さま、ご苦労さま、

すみません、有難う、など。

7 悪い言葉を使わぬこと。困る、いやだ、駄目だ、きらいだ、できない、かわいそうだ、など。

8 誉めて育てよ。子供は誉めることが第一である。注意する時は怒らずに叱る（愛の言葉） よう心がけること。

9 口数の多いことを反省すること。いわなくともよいことをいって、子供の心を傷つけないようにすること。

10 幸福は東にもあらず、西にもあらず、来た（北）ところみな身（南）にあり。

この歌の通り子供はみずからの縮図である。親たちの通って来た道を、そのまま具現してくれるものである。

母に感謝せよとの実行を示された人は、産み出す力に感謝を捧げねばならない。したがって、人の使い方、物の使い方方に注意すること。

早起き—とは必ずしも早朝に起きることではない。起きる時にグズグズしないで、パツと起きる。いさぎよく起きる。これが早起きである。

「はらいたまひ きよめたまひ」というのは、ただ心のよごれを払い浄めることだけをいうのではない。「天借」を払って、浄めていくことも忘れてはならぬ。

天借をはらいなさいよ。そこで浄められていくのだよ…。この親心を修めてください。「浄められる」——それで、安心立命の境遇に達していられるのであります。毎日、

迷いもがいて、とりこし苦労ばかりしておりますと、清い魂をにごしてしまふ。天借のおはらいもできません。天借をお返ししてこそ、はじめて徳と力と愛の無限の財産をいただけるのであります。

心の中が、むら雲のように真暗になり、不平不満、憤がい、疑心がともすれば出てくる。捧誠会のみ教えによつて、心の中の掃除をすることを祓いといい、祓い給え浄め給えというのである。心の中の消毒、整理整頓である。

母への感謝

命 四八 一二 二七〇

早起き

ふ 三九 一一 二〇

はらいたまひきよめた

ふ 四五 六 一二

まひ

はらいたまひきよめた

誠 四八 一二 二二二

まひ

はらいたまひきよめた

命 四八 一二 一八〇

まひ

腹立ち 　　ふ三七七二

精神的に腹が立つという言葉をつかいますが、たつ（断つ）ことは切ることであります。腹を切って内臓の器官を浄化し、腐敗したところを切り取ることも腹を立つことにつながってきます。家庭内においても、意識するしないにかかわらず、不平不満からいかりをもち、ねたみ、うらみ、そねみなどの心のつかい方が種となって幾年か後に、腹を切らねばならなくなるのであります。

腹立ち 　　み三四一二六七二

腹をたてるということは、他人の美しい心を濁し、又心を惑わし、破壊し、傷つけることとなりますので、重罪であることを悟れば容易に腹をたてることは出来ません。

（十一月二一日）

腹を立てる 　　ふ五三一二五

腹を立つことは断つことで切ることでありませぬ。

腹を立てる 　　ふ五七二二

誠の感謝がないと世の中は不平不満が充満してくるのであります。それは、腹を立てること、すなわち腹を断つ（切る）ことであります。また嫉妬心を持つということは、心を闇にするのであります。

腹をたてる 　　命四八一二二六七

腹をたてるとは、思い通りにならない場合、腹の煮えくりかえるような状態をいい、不徳である。

梁（はり） 　　ふ四四一二一四

上棟式を「棟あげ」という。棟は梁である。梁が立派に上がって、家の骨組みが完成する。失敗して意気消沈している人の事を、「あの人はハリがない」という。梁がなければ家は倒れてしまう。（中略）いのちの親は、いわば神の子の梁（ハリ）である。（中略）梁（ハリ）は針である。ゆえに神と人とは、針と糸との関係である。針の動きのままに糸がついていく。

繁栄 　　ふ五〇一一五

繁栄は願えばくるのではないのです。天地自然の法則によって栄えてくるのであります。その根本は各自の心の持ち方使い方にあります。

反感 　　ふ五一一一八

反感は半感である。半分しかわかっていないのは、なにもわかっていないのも同様である。

万教帰一 　　ふ五五一四

万教一に帰するとは、世界の人が、皆、いのちの親の「はらから」であるということ

万教帰一 三三四 一五二 五六四

であります。権力や名誉や物や金などの目的で派閥を作り、自分のみを正しいとして他をしりぞけるようなことは、だんじて許されません。

政治家、教育家、事業家よりも宗教人は己れを虚しうし、宗派に拘泥せず、新たに宗派を作つて勢力争いをするようなことなく、我執と貪欲を取り去り、万教は帰一して一層団結を強くし、人類救済に当たり、国難を救い、国民の生活を強く正しく過ち無く、安心立命の出来るように導くことが急務であります。(九月三十日)

パンク 四四六 一四

時の動きを学ぶときに、腹が立つ、ひがみを持つ、しつと心によつて暴力をふり回す、人を恨み、国の大事な組織をぶちこわしてゆく、その暴力というものはタイヤのパンクと同じであると私は信じます。

バンザイ 四七二 一六

人の肉体が冷たくなって死したる時には、お経を読みあげ、生前の功績を讃えて冥福を祈るのが人の人たる道の行いであります。バンザイの言霊によりますと、みおしえを通じて行う場合には誠を捧げて亡骸をお見送りする神の道の行事も必要になってまいります。

バンザイ 四七二 一七

バンザイのにがりをとると、ハンサイとなります。ハンという言霊は善行を重ねて万人に範を示すことであり、サイは、再生、再建であり、輪廻となるのであります。

反省 三九二 三

反省は、失敗を改め、思い違い取り違い間違いなどを速く改めて前進することである。反省は前進です。形から見ると、かがんでいる姿で勇ましいとはいへませんが、

反省 三九一 四八

かがんでいる姿勢から勇ましい跳躍が生まれるのでしよう。反省は伸び行くための前進です。改良は思い直して改めることです。

反省 四〇二 一七

反省とは、わが心の中を見つめて前進することである。停滞したり、ためらったり、後退することではない。どこまでも進行であり、前進である。

反省 四五八 一七

「反省」は、ただ悪かったと思うだけではありません。「前進」です。「進行」です。「伸びる」ことであります。

反省 五〇五 一三

子供が母親である私の言うことを聞いてくれないのは、どこかに自分も聞きおさめて

反省 ふ 五四 一一

いないところがあるに違いない。私の種がこの子にできてきたと自覚して反省しなくてはなりません。そうしないといつまでも子供はあなたの言うことを聞きません。

白を黒といわれて、これは無条件に肯定するのは神の道である。神の道であるから、いずれわかる時が来る。人の道では「いずれ」という時を待てない。そこで、その場で黒白を明らかにしようとする。争いの種だけが残る。(裏表紙)

反省 み 三四 一一 五一

反省とは、広い暖かい気持で前進することであって、強い正しい心に改めて行くだけの心掛けを常に忘れてはなりません。(一月二五日)

反省 み 三四 一二 三九一

反省し改める心は目に見えませんが、この心の動きこそ前進する為には最も必要であり、急務であると思わねばなりません。総ての行き詰りを打破していく為には反省と改めることが必要であります。(七月七日)

反省 解 二八 一三

罪を犯したから、又実行出来ないから、反省しなければならぬと云う意味でもないのであります。凡てのものを、正しく考え、見て行く為には反省が必要であります。反省の心のない人は、見る事聞く事が悪に考えられ、又己が正しくないのに善と考える等、思い違いなことが多いようであります。複雑な世の中、転々と変る人の生活でありますから、次から次と思いついたら限りもなく迷い心の器に閉じ籠って、淋しい人生を送らねばなりません。只反省のみを思い詰めて行きますとかような事になります。反省の最も大切な事は、己の感情的自我を取り去る事と、万物を愛し・尊敬すると云う心の足らざるところを理解する事が、最も大切な反省の意味であります。

反省 命 四八 一二 六〇

反省は心のとことかたづけである。そしてまた感謝によってこそ心のとことかたづけが完全にできるのである。

反省 命 四八 一二 一三四

反省は低い温い心である。(中略) 反省は、低い温い感謝の心でなされるので、後悔と同じではない。

反省 命 四八 一二 一三八

今日一日に不平をいったか、いわなかったか、誠の業を喜び励んだか否か、と反省せねばならぬ。日々このように真剣に修養するところに真の幸福が訪れる。

反省 命 四八 一二 一四四

修養がたらないためまた人格も完全でないところから妬み、恨み、そねみの心を持ち、ついには心身ともに疲労するのがつねである。かかる時に精神力の休養、肉体の休養をすることも反省の一つである。(中略) 反省の最も大切なことは、自分の感情的自我をとり去ることと、万物を愛し、尊敬するという心のたらぬことを知るといふことである。

反省 命 四八 一二 二五二

反省とは低い心で自らをふり返り、感謝にみちて将来の希望に進むことである。

反省 感謝 実行 命 四八 一二 一三〇

人から尊敬された時には、反省することが大切である。尊敬される時は登りきった時であり、やがては降りるようになるため、反省が必要である。人から憎まれ、踏みつぶされるようなことがある場合は、進化向上して行くのであるから、勇気と感謝をもって進まねばならぬ。ほめられたら反省せよ、叱られたら感謝せよ、行詰ったら実行せよ。

反省とは 命 四八 一二 二八四

反省とは目的に向って喜びと希望をもって進むことである。

反省の教訓 振 四三 三 四

- 一、お互に今日が今迄みおしえを 学び修めて努力なしたか。
- 二、お互に教義教典おさめたら 協力互助で努力なしたか。
- 三、お互に俺がおれがの我を持たず 互い立て合い徳を積んだか。
- 四、お互に我が意を持たず努力して 徳を及ぼし過ぎきたのか。
- 五、お互に足らざるところ改めて 平和建設きずききたのか。

反対 命 四三 九 三

不平不満があるから反対がある。

反対 命 四七 一 一四

あたまから反対、反対で、まったく話しあいにならない。話がつれるから感情がたかぶる。声も大きくなる。その内に顔いろもかわる。やがて手と足が動き、暴力となる。ここには「平和」がない。(中略) 反対だ、反対だ。断じて妥協はできぬ。こゝういつて日をすごしている。それを正しいと思っている。しかし、そうして貴い時と日をすごしているうちに、利子がついてまわっていることを忘れていく人が多い。

万物 命 一八 一〇 五

万物一切の生物にも、それぞれの使命があつて活動しているのであります。その活動

すべき使命は神様から銘々に与えられた神とともに活動するのでありまして、何より尊いのであり而して活動は即ち労働なのでありますから労働は尊いのであります。

万物 三七一〇 四 「万物是誠」です。私は万物を愛します。そして尊敬しなければならぬのが万物です。

万物 三三八五 一七 “万物これまこと”

この天地間の万物は神に造られたものであります。私達の尊い肉体にしても拝借しているものであり、これは神法三に明示してある通りであります。

万物 四二四 一四 人を良くする、すたり物でも活用して作物の肥にする…これは尊いのであります。(中略)

その子のみにとらわれて主人をいましめ、親戚、恩人、知人をあなどり、たとえ紙一枚、筆一本なりとも粗末にするならば、いかに母親がその子に心を尽くしても不良になってしまうことを知らねばなりません。それは万物を軽蔑し、うらみ、ねたみするので、大切な子が不良の感化をうけるのであります。

万物 四四五 一七 万物一切が「大極のすがた」であります。

万物 四四九 二六 万物は生き活かされているのであります。この大地も生きております。

地上に文明文化はますます向上し、科学と技術の進歩はとどまるところを知りませんが、この地球上の万物は天地自然の法則によって活かされているということは分っております。

医学が発達し、医薬が進歩し、その上に専門の医師や薬剤師が努力に努力を重ねてまわりました。借りものの肉体を介抱して守り、助けることは医師の努力でありまして、医薬によって人の魂を救うことはできないのであります。

精神病というものは、とくにそうでありまして、精神科には立派な医師がおり、設備も整い環境に恵まれた病院も建てられておりますが、精神病になりました原因の解明も、またその治療も、完全ではないのであります。これと同じように、人の生活も衣食住の確保は一人一人の努力によるものであります。衣食住という形・物になりま

万物 五十一 二二

す前に火・水・風という三つの存在がない時には、万物の生成発展がないのであります。万物の生成発展のないところには、衣食住はある筈もございません。衣食住という形・物だけで生活ができるという考えは浅い考えであります。本会ではその根本に万物生成発展のための火・水・風の存在を知ることとされ、このおさとしから、人は活かされているということが、さとされるのであります。

万物はすべて借り物であつて私のものではない。私のものは神の分霊（わけみたま）である魂だけです。みな自分のものだ、自分が金をだして買ったものだ、と思うから、盗まれた、損をした、ということになる。とられたというのと、差上げた、おかえししたということは大変な違いです。

万物 三四 一一 一六

万物凡ての物は、生きて活かされて居りますから、蟻一匹といひましても鋭い感を持つております。（二月二十六日）

万物 三四 一二 二六三

万物無用の物はありません。害虫は無用のように思いますが害虫を食糧としている鳥もあります。どんな汚物でも肥料となり役に立つております。（五月六日）

万物 四二 一一 九三

神は万物普遍の霊でありますから、火・水・風にも万物にも霊があり、声があります。この「声」すなわち「音」は「温」であり「恩」です。万物の発する音はすべてこれ「言霊」であつて、この「言霊」が「みおしえ」です。

万物一切を見よ 訓 一八 八 四七

人は人を見るだけでなく、万物一切を見て、それを己の心の修養として行かねばなりません。

万物是誠 三九 四 二一

万物是誠無限なり

万物是誠 四〇 八 三

誠を以つて見れば万物はことごとく一つであります。

万物是誠 四一 五 一一

米一粒にも葉の一枚にも天地自然の「誠」がこもっている。

万物是誠 四四 一一 三二

生死を開悟し、無に至った時、確かに私という人と万物とが並び存しており、天地もまた私という人と共にあるという、常に万物と一つにあるという境地にこの身を置くのであります。

万物尊愛 四七 三一七

「殺す」というと、生きものを殺すとか、人を殺すとかいうように、すぐ思う人が多い。これは「殺生」であって、殺すことにちがいないが、「殺す」というのは、殺生だけをいうのではない。

うらみ、ねたみなどの心の闘争は、心と心の殺しあいである。また、まだ使える品物を捨ててしまうのも、そのものを殺すことである。(中略) 「不経済」なおこな

いは、物を殺している。(中略) 利益にならぬことを、いったり聞いたりしているのは、言葉の不経済である。益なきことに時間を費やしているのは、時間の不経済である。(中略) 「万物尊愛」には「殺し」はない。すべて「活か」していく。

万物尊愛 四七 五九

また「人の道」は、人によって作られた法律にもとずきながら、いかに「みおしえ」を実社会に反映させ、実践していくかということで、万霊尊愛に対して「万物尊愛」であります。

万物尊愛 四八 二二六

おさしみも、お肉も、野菜も、みな人々の努力によって、このようなご馳走になっております。(中略) ただ、金で買ってきた、高い、安いといううすっぺらなことではならないのであります。いのちを捧げ、勤労を捧げてくださったからこそ私どもの口に入るのであります。万物尊愛と唱えている本会の会員としては、ここまでよく肝に銘じて、感謝していただいでください。

万物尊愛 四九 一〇三

長い間使っている古いものでも心をこめ、丹精して使っていくところに、万物尊愛があります。

万物尊愛 五二 三三

最近古い物は捨ててしまう風潮がありますが、これ自体が天則違反であります。以前には米一粒でも粗末にしては目がつぶれるというような事が、厳格に教えられていました。

万物尊愛 五二 八

万物を尊ぶと教えられて、尊愛するあまり蔵にしまいこんでいる人が多い。これは思いちがいである。有効に使って世のため人のためにお役に立てていってこそ尊愛しているといえる。「もの」だけではない。知恵も力も不動産にせず、お役にたててい

てほしい。(裏表紙)

万物尊愛 五三一 七
万物の尊愛と申しますと、勿体ないから物を大切にするといい事だと考えます。それは間違いではないが、物を活かして使うということも尊愛であります。使わないで大切にする、大切だから活かして使う。

万物尊愛 五三七 五
物一つさし上げるのにも、こんな安い物でよいだろうかと思ったりすると、迷いがでてくる。どんな物でも、真心でさしあげるといふ気持ちこそ万物尊愛でありましょう。こういう真心の交流をしてゆけるように、すべての神の子たちがその気持ちを養ってゆくように、修養団捧誠会が神里に悠久平和郷の建設をしまして、その神里を本会のみで独占しないという事を申しておりますのも、その真意は正しくここにあるのですよ。一粒の米、一滴の水、これを尊ぶ、愛する。これを「万物尊愛」と教えておりますが、なぜ尊愛するのか、といえば「万物是誠」であるからでしょう。これは、いくたびもお話しているところです。

万物と一体 太四四 一一 三二
生と死と言いますが、本来は生もなく死もなくただ永遠の命があるだけであります。この悟りに立つ時、人は天地自然と、万物と一体になるのであります。人を存在せしめ、万物を存在せしめ、この天地間のありとあらゆるものをかくあらしめている根源と一つになってしまえば、万物と融合一体になれるはずであります。

万物と一体 太四四 一一 五七
「万物是誠」と提唱する私は「人は万物と一体である」という自覚に立っています。万物と対立しているのではないのであります。道の辺の名も知らぬ草にも、小さい石ころ一つにも、人の真心を通わせていけば、人は万物と一体になっていけるのであります。

万物に誓う 四三 一〇 八
人は万物の恩恵をいただいて、今日の存在がある。(中略) だから、その万物に、神の子はこのように生きてまいりますとお誓いするのである。

万物の成長 三五 三 四
皆さんは万物が成長していることは、活かされていることであるということと常に教えられ又聞かされていることと信じます。

万物の成長 　　ふ　四〇　三　三

温み、水気、五分五分で万物が成長する。その温みは、太陽の熱だけをいうのではない。大地の中に熱がある。大地の熱は太陽の熱である。

万物の霊長 　　ふ　五五　一　四

世の中の人の心というものは、自己満足であり、自己中心でありがちで、自分さえよければよいという思い違いや取り違いに陥ることも見受けられます。誠の業に励むよりは、我執食欲が重なり、これは天借の種をまくことになり、花も咲かず、実もみならず、多くの人からいやがられるのであります。しかも自らを反省せず、かえって相手を憎むような、みにくい感情に支配されるようになったのでは、万物の霊長とはいえません。いのちの親は、悠久世界平和が実現されてゆくには、万霊万物尊愛でなくてはならないというお諭しを伝えておられます。身心を常に養い、魂を磨き清め、雑音にこだわらず、迷信を打破して、万霊万物を尊愛していく主旨を、万国の人が自覚すると同時に、神の子であるという信念を日夜忘れないようにいたしましょう。

万物の霊長としての使命 　　ふ　五〇　四　一六

小さな家庭でも、両親に尊愛される子供、子供から尊愛される両親となっていけるところに万物の霊長としての使命があり責任がある。

万物は神のもの 　　命　四八　一二　一三九

道を歩みつつなにかたわらの野の花を摘む。誰もが不用意にすることであるが、しかしそれは黙って拾っていいものであろうか。無暗に摘みとってよいものであろうか。宇宙を司る神のものであるからには「いただきます」と、ことわる心掛けがなければならぬ。（中略）なお心すべきことは、そのようにしていただいた石や花は、無駄にせず、かならず役に立てることを忘れてはならぬ。

万物を愛せよ 　　ふ　四四　七　二二

いのちの親は、子供たちに万物を愛せよと教えさとされる。そこに徳をつみおぼすことができるのだ、そこに仕合せがあるのだ、そこに心の迷いも肉体の患いも健全になっってくるのだ。

万物を尊敬愛せよ 　　ふ　三七　六　三

私たち人間の一生涯は、万物の恩恵によくしなければ、生きてることも活かされることも出来ないからであります。

万物を尊敬愛せよ 　　ふ　四五　三　一四

万物を尊敬愛せよ——ということは、まずいただいたこの命を尊敬愛することです。

万霊尊愛 ぶ 四七 五 四

みなさんいただいているこの命を愛してください。尊んでください。これが親心であり、これが教祖の願いであります。平和建設の礎はここにあるんであります。最後に、聖地に建設すべき目標の言霊は〈万霊尊愛〉これが、修養団捧誠会の実行として、私の生涯における最後の建碑であります。

万霊尊愛 ぶ 四七 五 九

「神の道」の中心は太極であり、そこからよって生じてくる「みおしえ」を遵法しなければならぬことが絶対条件であります。これは「万霊尊愛」であります。

万霊尊愛 ぶ 四七 五 一四

霊魂を敬うということがなくてはならない。これは万霊尊愛であります。自分の家のご先祖だというような自己を中心としただけの考えではならないのであります。すべての神の子は、魂を頂いております。その魂を濁すような心の持ち方もまた、天則違反であります。

万霊尊愛 ぶ 五二 三 三

万霊万物は陰と陽であって、その花には無限の根があります。第一は先祖のお徳、両親のお徳の根があります。それから神の子たちの恩典。ひらたくいえば、たくさんの人にお世話になったことです。それから私自身の努力があります。

万霊万物 ぶ 五三 一二 一七

万霊万物尊愛は、なんのために実行するのでしょうか。一切の万物、すなわち牛・馬・鶏にいたるまで、私たちの肉体の糧となり、全身全霊をささげつくしてくださっているではありませんか。万霊万物は、私たちの恩師であり、万霊万物尊愛は本会の趣旨であります。

万霊万物尊愛 ぶ 四九 八 四

天地自然の法則のよって生ずる大極を神として崇敬するという趣旨の会でありますから、皆さんが、万霊万物を尊愛してゆくのであります。真に万霊を尊愛しているかと言いますと、自分の先祖だけを尊愛したり、蟻一匹、鳥一羽でも、万霊であります。これを尊愛していません。米一粒でも、炭一かけらでも、皆さんの日常使っている物を尊敬愛していません。まことに慙愧ざんきにたえません。皆、無駄が多い。心の無駄使い・言葉の無駄使い・物の無駄使い。こういうのを不経済といえます。尊愛でなくて、不敬であります。

万霊万物尊愛 ぶ 五五 六 三

天地自然の法則のよって生ずる大極を神として崇敬するという趣旨の会でありますから、皆さんが、万霊万物を尊愛してゆくのであります。真に万霊を尊愛しているかと言いますと、自分の先祖だけを尊愛したり、蟻一匹、鳥一羽でも、万霊であります。これを尊愛していません。米一粒でも、炭一かけらでも、皆さんの日常使っている物を尊敬愛していません。まことに慙愧ざんきにたえません。皆、無駄が多い。心の無駄使い・言葉の無駄使い・物の無駄使い。こういうのを不経済といえます。尊愛でなくて、不敬であります。

万霊万物尊愛堂

ふ 五四 四 三

悠久に頂いた魂を磨き浄めるべき責任に目覚め、万霊万物尊愛に誠を捧げていくことを誓う場所が、神里の万霊万物尊愛堂であります。

ヒの部

火

解 二八 四

誠の心には裏も表ありません。水にも火にも風にも裏表は絶対にありません。水は智慧であり、火は愛情であり、風は元気であります。

ビールびん

敬 四二 一一二 二四七

ビールビンという言葉は「ビル」―「事務所」に通じます。支部は本部の連絡事務所であります。

冷え症

誠 四六 六 五八

恩師、恩人、親を敬まうて、恩にむくいることがたりませんと、たとえ血管が破れるところまでいなくなるとも、血の循環が不十分になって、いわゆる「冷え症」となってしまう。冷えるのは血がたりない。血があっても巡りがよくない。万遍なくいきとどかない。頭や脚や手に片よって、全体に不同になっているからであります。こういう人は好き嫌いがはげしい。人に対しても食物に対しても、好きに片よって嫌いなものは見向きもしない。また、一事にコリ固まって、好きなことに熱中する。世間一般でいう「融通」がきかない一本調子になってまいります。

光とは

命 四八 一一二 二九五

光とは「ひ」を借りることである。「ひ」を借りればこそ、生きてゆかれるのである。火は熱であり、愛であり、これあればこそ生きてゆかれるのである。

光りを見出す

ふ 四二 三 六

迷いは苦しいものです。しかしその中から光りを見いだせと教えてあります。これが、努力であり、実行であり、行いであります。そこに進歩があり、他自共に救われる道があります。

低い心

ふ 五六 一 四一

低い心というのは、己を虚しくするということです。己を虚うして徳をつみ及ぼすことが低い心であります。

低い心

解 二八

一九

常に心を低くすると云う事は、感情的の愛でなく誠心の愛なので、如何に汚物と雖も浄化する熱であり、又水の如く如何なる汚物も洗い清めて清浄して行く心構えを、低い心と申します。

低い心

訓 一九

六 五

何事を為すにも低い心を以つてすることが大切である。低い心とは我を出さない心。低い心は結局一番強いのである。

低い心

捧 二三

一一 三

綱領の五番目に常に低き心になれば、常に低くなれと申してある事は飛び上がる一つの準備のために教えられてあるのであります。このままだと飛び上がることは困難であります。一旦低くなり腰を落として、そうして初めて飛び上がる事が出来るのであります。これは真理であります。肉体を低くして飛び上がる事、これが低くなれと云う御教訓を示されて居るのであります。

低い心

命 四八

一一 六九

取こし苦勞をする心にしわがよる。低い心になると知恵をいただくことができる。怒ることをつつしめば、またよい知恵が授かる。

低い心

命 四八

一一 七一

低い心になれば感謝が生まれ、力が出てくる。低い心にさえなければ不平はないのである。低い心になれば人の生活を羨むこともなく、自分の生活に自然と感謝の心が湧いてくるのである。海の底、大地の底のような心になればよいのだ。低ければ落ちることもなく安定していて、力強いわけである。

低い心

命 四八

一一 一六四

低い心とは素直な心であり、また誠の心である。おたがいに誠に徹し、誠をふみ行つてゆけば「万物是誠」で、誠という一点でいかなるものも一つになれるのである。おたがい同志気が合わぬなどということはない。己の意を用いるから人と合わないの

低い心

命 四八

一一 一六五

ある。積釈は慈悲を、キリストは愛を、マホメットは力を説き、捧誠会は徳と愛と力を教える。その徳と愛と力は、低い心に徹することにより高められてゆくのである。

低い心

命 四八

一一 一六五

低い心が無ければ、どんな人とも心を合せ行うという合掌の姿は生れないし、力も授

低い心

命 四八

一一 一六五

からない。低い心から生れる力こそ底力であり、確固不動の精神である。

低い心

命 四八

一一 一六五

からない。低い心から生れる力こそ底力であり、確固不動の精神である。

低い心 命 四八 一二 一六七

低い心 命 四八 一二 一八四

低い心 命 四八 一二 二九八

「ひくい」心は愛と元氣と知恵、即ち知・仁・勇をかね備えた最も勝れた心であつて、この心で徳をつめば、無限の尊い力が与えられるのである。どんな言葉をかけられても、どんな仕打をされても、人を恨まず、争わず、低い心で胸に収め、感謝に切りかえられる人は心の後片づけのできた人であり、これにより心の力が授けられるのである。低い心こそ確固不動である。地についた心は、地からの心、すなわち力である。踏まれても抑えられても、立ちあがる力のある精神こそ確固不動である。

(1) なにごとをするにも、低い心をもつてすることが大切である。低い心とは「我」を出さない心で、結局いちばん強い心である。

(2) 濁った泥水でも砂を通すと、きれいな澄んだ水にかわってくる。人の心もその通りで、人から汚されたり、曇らされたりしても、低い心でそれを素直にうけ容れると、きれいな明るい気持になってくる。

(3) こちらの気持に不平不満があれば、気持が濁っているのだから、相手に快く受け入れられない。よごれた気持を洗うには、素直な低い気持で感謝することである。

(4) 低い心、低い気持になれば、神さまから暖いお恵みがいただけるのである。空気でも高いところへ行けば行くほど冷くなる。そして、低い地の中へ行くほど暖かいのである。

(5) 人にいわれたことが気になる人は頭が高い。低い心でおれば「そうですか、有難うございます」と心から感謝ができる。

(6) 低い心は愛(仁愛)と元氣(勇氣)と智(智慧)の三徳がそなわった心、すなわち、

一 二 三

火 水 風

仁 勇 智

である。そして無限の力があらわれてすべてのものを活かす。

(7) 番茶いっぱいを接待されても心から有難うといえる人、こうした感謝の言葉が出るのは、低い心から感謝は生れ、感謝することにより力は与えられる。

低い心になったとき 命 四八 一二 二八〇

非常 命 四八 一二 二八〇

実行は無条件だ——といつも私は説いている。(中略) 命の親の御命のままに行動するのは、実に非常である。非常の場合には、非情にならなければ、非常をのり越せないのである。教祖としての行動は総裁の上にあることを承知してもらいたい。

美人 訓 一九 一二 一九

人の心、人の姿、人の顔、是などを美しくする事は誰一人反対する人は無いと思いません。美しい心はありのままの自然に接する時の心であり、美しい姿は其日其時ありのままの衣服を着てまじめに任務を全うする姿であり、美しい顔は年齢を問わず女子は薄化粧して笑顔を相手に見せる事、又男子は別に薄化粧しなくとも女子と同様に如何なる時にも笑顔で目上の人に接し目下の者を指導して行くべき事であり、尊いのであります。顔が美しく、きれいな人だけが美人ではありません。美人は徳の高き人なのであってお互いに生存競争をして人生を過ごして行くには美人でなくてはならないのであります。

左 (ヒダリ) 命 四八 一二 二八〇

人 命 四八 一二 二八〇

「左」は未来のことを示す。「左記の通り……」と書くのは、そこに意味がある。人は「ジン」であり、人は「ジンジョウ」の道を行うべき事になって居ります。従って精神的には純情でなくてはなりません。純情は道順にもなります温順しいとか、素直とか、淑やかとか云うような言葉の活力は實に尊いもので、何事をなすにも順序を外せば取り違い、障害、誘惑に陥って精神的の苦痛や、肉体的に病身となり、尊い人生を葬られてしまうことは明らかであります。

人 命 四八 一二 二八〇

人は神のため、国家社会、人類のためには身を割いても、又身を砕かれても務めねばならんと思いません。(中略) 人は如何なる場合においても誠を尽しておれば、難儀

不自由をして通らねばならぬような事はない筈です。

人の魂は万物にかよいますが、人は馬や牛には生れません。

神は万物普遍の霊であり、人は天地経緯の支配人であることを信ずるものであります。

地上の人間はみな同じ空気を吸うて生きている。生かされている。だから皆、同じである。天地の恩恵に対しては、世界万人、皆同じである。

人間、どこにおっても天地の恩恵は平等である。

人は神の子であり、万物の霊長であります。

人は、この大自然の神の子である。心の美が自然の美と調和すれば、身の浄化である。そこに身の患いはなくなる。これは不可能をいうのではない。人には、それが出来る能力がそなわっている。能力は脳力である。

人は人が作った法律によって生かされているのではなく、その以前に、天地自然の大法則があり、人はその法則の下に生かされているというこの事実に関心を心の眼を開けてほしいがためです。

人は因果によって行動する。動かされる。

人は知恵や力や名誉を求める為に苦労するのでありますが、人として、これを背負って立たねばなりません。また、これを背負うだけでなく、活用していかねばなりません。

人は学問の為に犯罪を起し、知恵を求めて迷いを起し、名誉を掴もうとして病身になります。一つの糧を求めるために、とりかえしのつかないことになる場合もあります。それは、自己の欲望を満たそうとして追求するから、こうなるのは当然であります。

人は万物の霊長であればこそ悟る力を与えられております。

万物を生み、これを成長させるのも殺すのも神の力ですが、看護人の不注意のため成長すべきものが枯れてしまう場合もあります。

尊い人となるためには一粒の白米と同じように苦労艱難を経なければならぬのであ

ふ三七 六 三

ふ三八 一 二四

ふ三八 五 一七

ふ三八 五 一九

ふ三八 六 四

ふ三八 六 一六

ふ三九 六 三四

ふ三九 一〇 三

ふ四二 六 六

ふ四二 六 六

ふ四二 六 六

ふ四二 六 六

ふ四二 六 八

ふ四二 六 九

ふ四二 七 六

つて、そこに光り輝く人格が生まれるのであります。

人という文字は立て合いを示されてあります。立て合いは助け合いです。

人は人を見るだけでなく、万物一切を見て、それを己が心の修養にしていかねばなりません。

人は肉眼で万物を見るのではない。本当はその心で観ているのであります。心に邪念あれば、その通りの物事がみえます。心にあるから、あるだけが見えてくるのであります。

人は誰しもそれぞれに「徳」をもっていて、生きる為には不自由のないように仕組まれているのであります。ところが、自己の欲望をふりまわすと真実の正道を忘れてしまい、結果として、生きられる道までも行き詰りにみちびいて、人生をあやまるのであります。

人にはそれぞれに与えられた使命があります。その使命を迷わず、不足なく、まじめに行つてこそ本分を尽くすことになりす。

人は衣・食・住のために身心を患わして工夫体得しておりますが、生きることと活かされることとが調和すれば真の幸福であり平和なのであります。本会の趣旨は、大極を目標として身心の建設、国造り、社会の構成に誠をささげて努力することであり、これを達成するには容易ならぬ努力があるのであります。

この世に生まれたのは国造りであり人造りであり、ご恩報じの為に生をうけたのであります。

人は人を殺せません。なれども人が人を創りだし、生みだすことは出来ません。人の力で可能な業にはおのずから限度があるにもかかわらず、うぬぼれのあまり、神の力でなざる業までも人の力でやろうとする人が多いのであります。人の道と神の道、この二つの道筋を、よくわきまえねばなりません。

人は万物の霊長であることを教えられ、（中略）人はみな神の分けみ霊を持つてお

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

ふ 四三二 三

三

ふ 四二九 九

ふ 四二一〇 一〇

ふ 四二一〇 一〇

ふ 四二一一 七

ふ 四二一一 八

ふ 四二一二 二

ふ 四二一二 二

ふ 四二一二 九

人

ふ 四三二 三

三

ります。しかし靈魂だけでは役に立ちませんので、肉体を貸してもらっているのです。ゆえに、人はこの世に生まれて、何をなすべきかといえば、大恩に報い、人の恩義を忘れずに、国造り、人づくりのために誠を捧げていくのが目的であり目標であります。自らの人格を高め、よりよき国を建設していく義務を課せられているのであります。

人が人を裁くことはできないことと、人の善悪も自分の智慧や努力で判断したり、否定することはできない。

人が死んで鳥畜類に生まれかわりません。人は人として生れかわるのでありますから、死後は次の世につながっており、すなわち人々の未来であり将来であります。

人が人の心で人を裁こうといたしますから、人の世に争いが絶えません。人は生きるために、衣食住のために、金や物のように目に見えた製品を宝として大事にしている人が多い。真にざんきにたえません。

人は神の子であり、万物の靈長である以上、万物から尊敬愛されなければなりませんし、また万物を尊愛しなければなりません。

人は万物の靈長として、今まで教えられてきましたが、修業練磨によって太極が地球上の親であり、すなわち大神であり、人はその太極の現れであり肉体は借りものである。霊魂は太極からの分けみ魂であるということ諭されたのであります。

人が万物の靈長であることは違いありません。もう一步進んで神の子である自覚をして、神と人との両道を学び修め、実行と行いをして、教えたり教えられたりすることが本会の趣旨であり、目的であり、目標であります。

世界の人類は、身内、親子、兄弟であります。

人は万物の靈長として、神の分けみたまでありますから、精神、すなわち清き神と文字をもって子孫にさとしてあります。

長じてまいりますと、自分の都合のよい事は進んでやる。そのかわり、自分に不都合

人 ふ 四四 一二 三

人 ふ 四五 一 二

人 ふ 四五 四 二

人 ふ 四七 九 一五

人 ふ 四八 一 六

人 ふ 五〇 一 九

人 ふ 五〇 八 一三

人 ふ 五一 七 三

人 ふ 五二 一 三

人 ふ 五三 七 五

な事は、たとえしなくてはならない事であつてもなんとかして、しないで済ませたい
 気持ちがあげえる。他自ともに四合せにする。さしあげるといふ気持ちを少しでも持
 てば、どんなによいであろうかといふことを考えない人もある。

人は神の子であり、万物の霊長であります。ただ自分だけという我執、欲しい欲しい
 という欲望だけで行動してはなりません。天には星（欲しい）はつきぬほどあります。
 欲しいと思つていたらキリがありません。

にくしみを持ち持たして対立し、互いに相争い、大戦をすることは天地の神は許しま
 せん。人は人種国籍違えども等しく神の子であり、万物の霊長であります。万人、地
 上天国を、即ち悠久世界平和を建設する尊い任務と使命があります。利害を基とする
 我執貪欲では悠久に世界平和は実現いたしません。

私たちは、神の子として、魂を悠久に頂いている。また、身体を拝借しておる。私の
 体ではない。私の妻でもない。私の子でもない。嫁だムコだと言つてはいるが、神の子
 としての尊いお姿であることを忘れてはなりません。

人はいのちの親より魂を頂き、その身体は借り物であります。その身体ができあがつ
 たのも、いのちの親の設計と組立てによるものであつて、人知人力の及ぶところでは
 ありません。人が、この現し世に出現したのは、平和世界を顕現するためであります。
 人が、この世で生を享受しているのは、いのちの親の大神によつて活かされているこ
 とと、万人万物の恩恵によつて生きていくこととの両道の合掌によつてであります。

人は神の子であることを自覚して、立派な人にならなければなりません。人は争いを
 する為に人と産まれたものではありません。（中略）親子は睦まじく協力融和が出来
 て、明朗和楽の家庭を建設し、子孫の繁栄の為に努力するようにしなければなりません。
 又人は生きるのみでなく、活かされている大神（体温）を弁え、人としての尊い
 姿を永遠に自覚して、楽しく麗しい生活をする事が、神も人も望む所であり、それを
 実行に表していくことが義務でなくてはなりません。それを忘れて争いを続けること

人 五三九 五

人 五三一 四

人 五四九 三

人 五五一 七

人 三三四 八六

は、不幸の種を蒔いているのであります。(二月十一日)

人は万物の霊長として産れて居りますから、見るもの聞くものに凡ての感は鋭く働きます。(二月二十六日)

人 三 四 一 二 一 一 六

人の生命は暖かい体温(大恩)によって活かされ、空気により水によって行動しておられます。はく息、引く息等は日夜怠ること無くしかも無理をしておりません。五分五分の理をもって行動しております。(四月十一日)

人 三 四 一 二 二 八 三

金や物によって人を雇うことは出来ませんが、つくりだすことは出来ません。

(五月十六日)

人 三 四 一 二 四 二 九

見ず知らずの人でも、自分の生活に陰となり陽となつて後援して戴いていることを知らねばなりません。(七月二十六日)

人 三 四 一 二 四 七 一

大宇宙は神の姿であり、生命の親であります。人は小宇宙であつて、子であります。神は親であり、人は子である以上、神の子であることを自覚せねばなりません。親子の交流は霊の交わりとなります。霊の交わりは無限の光と力と愛を発するものであります。(八月十五日)

人 三 四 一 二 五 三 〇

人には神より立派な魂と知恵が与えられております。(九月十三日)

人 三 四 一 二 五 九 〇

人は万物の霊長として最大の知恵(地位)を与えられ、権利を与えられております。同時に又大きな義務や責任も与えられておりますので、好き勝手なことを思つたり行つたりしてはなりません。(十月十二日)

人 二 八 一

神とは、万物を成長させて、永遠に生かして行く力と慈愛をもつた、肉眼では見えぬ・掌に掴む事の出来ない、無限の尊いものであります。人はこの力によって・慈愛によつて・男女の結合から、生まれて来るものであります。これ即ち神の子なのであります。それ故に人は神の子である事を自覚しなければなりません。

人 二 八 二

人は生きて・活かされて・正しい・円満な・行動を取らねば、天地自然の法則に違反する事になります。

人 訓 一八 八 一
人 訓 一八 八 三六

人と云う字は立て合いになって示されてある通り一本ではどうすることも出来ない。人と云う字は立て合いを示してありますが、この立て合いは助け合いであり、誰しもいやな時にはいやであり、悲しいものでありますがいやな時は実行もせず、いやな人には逢いもせず、居ても居ないと、うそを云ったりするようなことがあります。

人 敬 四二 一二 九四

すべて大極のもとに、みな活かされて、大極のひびきを人々にお取り次ぎしたのであって、私も昭和現代において、その一人です。人はみな、私は××教の信徒です……と言っておりますが、××教の信徒であらうとなかろうと、大極のもと、火・水・風を始め万物の恩恵をうけて活かされていることに変わりありません。いいかえまして、何教の信徒である前に、万人みな神（大極）の子であることにおいて平等ではないでしょうか。

人 敬 四二 一二 二六二

人はすべて神の子であります。人は万物があつて生きておられる。万物なしでは生きておられません。このように万物におせわになっていることを思う時に、万物万端心の底から感謝の心が湧き出ます。塵程のものでも尊敬、愛する心を忘れてはなりません。

人 振 四二 一〇 四

人は自分独りで生きているのではない。両親をはじめ、祖先のおかげ、神仏のおかげ、衣食住をはじめ、火水風の万物、万象、世の人々をはじめ鳥畜類のおかげで生き活かされているのである。

人 誠 四八 一二 七〇

徳と愛と力とは天地の理法であつて、天地自然の法則とも教えられております。また、人は神の子であるという自覚を持って、この身は借りものなりと、太極のひびきによつて、さとされております。

人 導 三四 一〇 二二

人体は十五に五を掛けた数字即ち七十五年、男女共それ迄の年月まではこの世に置いて頂けるのが法則であります。その間に、肉体の悩み、苦しみ、心の迷いがある事は戒められていると自覚しなければなりません。

人 捧 四八 二 一

人が人を裁くことはできない。いかに最高の裁判官であつてもその犯罪を自分の意を

人 命 四八 一一 五六

もってこれを裁くことはできない。
 神とは万物を成長させ、永遠に活かしてゆく力と慈悲とを持った、肉眼では見えず、掌に握むこともできぬ無限の尊いものである。人はこの力により慈悲により生れ来たものであり、神の子なのである。それぞれまず第一に神の子であることを自覚せねばならぬ。

人 命 四八 一一 二〇〇

いかに人種、国籍が違っても、みな神の子として生まれ給うた人である。幸福を希望しない人はない。安心立命を得て、笑顔で親しみ交し、仲良く暮してゆかれるように希望しない人はない。

人 命 四八 一一 二〇三

誠の愛をますます發揮し、生きがいのある生活をなしとげることによって、人と生れた尊さがあるのである。おたがいに神の子であり、相信じ、相和してゆくべき人となのであるから、おたがいに争いもなく、疑いもなく、破壊したり、破壊されたり、残酷な生活をなすべきではないのである。幾万の仇なすものがあっても、誠の愛に打ち勝つものは無いはずである。

一言の言葉 命 四八 一一 一一

一回の言葉によって魂が生き返り、また一言の言葉によって丸い心も角がたち、清らかな心にもごり、怒り、しつと心をもって一生涯わすれない、というような心になることもあります。一言の言葉の交流が善にも悪にも回転します。

人さし指 命 三九 一一 一七

あの人は：と行って、人指し指を前に出すと、中指と薬指と小指の三本が自分の方を向いている。(中略) 一人の人を指さして悪く思い悪口をいえば、自分は三人から悪く思われ悪口いわれていることになるのである。これは真理である。

一つ 命 五〇 一一 二

どんな豪華な食事を出していただいても、腹一杯ではいただくことはできません。また、空腹のときならば、どんな貧しい食事でもおいしくいただけます。たくさん事を知識として学びましても、一つの正しい事と信じたならそれを行いに表わしてゆかなくてはなりません。その一つが尊いのであります。

一粒の米がたくさん稲穂に実りますように、一つの善行が十年たてば実ってまいりま

人づくり 五二 四 二

人造り 振 四四 一 八

人という字 命 四八 一二 二八七

人と宇宙 命 四四 四 七

人と人 命 四二 一二 九

人の命の尊さ 訓 一八 八 五三

人の生い立ち 導 三四 一〇 四

人の恩 導 三四 一〇 一六

人の階段 命 三九 一〇 二六

人の価値を上げる 命 四八 一二 二九六

す。(中略) 一つのできごとが伝えられていくうちに、事実と言葉との間に相違がでてきます。(中略) 言葉と事実との間の確認がなくてはなりません。

人の人たる道、人の学ぶべき道を通して、万物の霊長としての信頼ある人格を作る。一口に言えば人づくりである。学校でも家庭でも、善行の蓄積という目的に対して教えていることは間違いないことでもあります。

国の始りは国造り人造りであり、国を造ることは衣食住をつくることであってこれは政治であり、経済であり、人造りは宗教であり、教育であると私は信じます。

人生は持ちつ持たれつであって「人」という字のとおりである。

人は神の子である。すなわち、大極が親である。無極より大極が生じ、大極から地球と地球上の万物が生じている。故にこの宇宙に存在する物質のすべては、この肉体にも存在する。親の子であつてみれば、親にあるものが、そのまま子にあるのは当然である。

人と人との間柄も根は一つであつて兄弟であります。(中略) つながりは一つであつて、兄弟であります。

人の命の尊さは、秤にかけたり、計算したりすることの出来ない程尊いのであります。「命」と云う言葉のつながりを申しますと、血液でありそれも清き血を「命」と申します。

人が生まれて成長し、死ぬまでの行動は、人類の先祖が発生し、陸に上がつて、だんだん文明人になる迄の行動を示しているのであります。

天地のお恵みに、お世話になることが八十五パーセント、人の御恩が十五パーセントなのであります。天地のお恵みの方が人のお恵みよりも大なるものがあります。

徳を積み及ぼす人は「上」である。交換条件の人の道を行える人は「中」である。人の道さえ行えない「ご恩になりつ放し、何のお返しもできない人は「下」である。

人をおしつぶしてはならぬ。人の価値をあげ、認めてあげねばならぬ。人の価値をあ

人の義務 命 三四 一一 六七

げることは、自分があげられ、勝つことになるのである。
常に徳を積み及ぼすべく、小さい所から人の喜ぶ行いをして、協力互助の実を示し、喜びを分け合うようにするのが人としての義務であります。(二月一日)

人の勤勞 解 二八 六

人の生活は生きる為の勤勞でなく、天地の御恩・御先祖の御恩・親の御恩を始めとして、万物凡てのものに御恩になって居りますから、その御恩に報いる為の勤勞でなければなりません。御恩に報いる・勤勞する事が、真の尊さであり・真の幸福であり・真の有難さであり、報いる御恩が一切の勤勞としての幸福を生み出すのであります。

人の心 命 四二 一〇 九

人の心というものは疑い深いものであります。大変な事になりはしないか、損をしないか、けがをしないかと、何かにつけて疑いがわいてまいります。

人の心 命 四二 一一 六

人の心というものは疑いぶかいもので、見たりきいたりしただけでも、(中略) 何かにつけて疑いがわいてきます。(中略) 常に疑いをもち、迷い心をもっておれば、人から疑いをかけられ、迷わされることになります。

人の心 命 四八 一二 四三

人の心は単純で一方的に傾き易い。常に心は衣食住の三にのみとらわれているありさまである。そして衣食住のみで文句を言い、不平不満をこぼし徳をつむことを忘れていく。(中略) 東西南北に心を配ることができないで一本調子になり易い。西から風が吹けば心は東にくればよいものを、西にのみ向うから衝突してしまうのである。東から来たら西をむけ、南から来たら北をむけ。すべては言霊のまにまに風のみまにまにである。災難、不幸は西にもあらず、東にもあらず、来た(北)とこみな身(南)にあり。善因善果、悪因悪果、であることを反省せねばならぬ。誰のせいでもない。良きにつけ悪しきにつけ種まきは、みな身にあるのである。

人の使命 命 三四 一二 五四

神が万物を成長させ、特に人を産ませ給うてこの世に活かされておりますことは、人種、国籍、信教を問わず、地上天国をつくり、争いを滅し、仲良い生活が営まれていくことを望んでいられるのであります。人の心も、神のみ心と同一でなければなりません。(一月二七日)

人の生活 解 二八 二四

人の生活は、共存共栄であると共に生存競争なるが故に、絶えず心の迷いを生じて参ります。

人の責任 ふ 五一 九 三

地球の回転は日々に新たに、よどむことはありません。世界の人々もまた、日々に新たに善行を重ね、互いに団結協力融和して親善交流に全力を尽さねばならない重大な責任が課せられているのであります。

人の責任 み 三四 一二 六四一

誠の道を踏み行うことは、人として大なる責任であることを教え示されております。
(十一月五日)

人の責任と義務 み 三四 一二 七四〇

人も見る度に聞く度に良い方向に心を配り、丸く根強く清らかな心の持ち方、使い方を学び修めて、我も人も幸福に導き、導かれるように努力することが、この世に産まれてきた義務であり責任であることを忘れてはなりません。万人に迷惑をかけ、悪事を行う為にこの世に産まれてきたではありません。(十二月二四日)

人の智慧 み 三四 一二 八二

人の智慧で計るようなことは小さいことで、その物だけのことより考えられないのであります。(二月九日)

人の力 ふ 五〇 一二 二

春夏秋冬、寒暑の循環は人の力で止めるわけにもいかないし、変えることもできません。雨が降った場合に、堤防を築いて被害が生じないようにすることはできるが、雨を降らないようにさせることはできない。風にしてもその通りでありまして、風に飛ばされないようにすることは人の力でできますが、風そのものをとめるわけにはゆきません。時もとまりません。いくら神に祈り、仏に念しても、時は待ってくれない。(中略) 夜になれば眠る。朝がくれば起きる。万物は、自然とともにこの循環を行っております。

人の使い方 命 四八 一二 一四二

使用人の仕事にしても、人に命令されてからする仕事は心がこもらぬものだ。みずから進んでする時は、掃除一つにしてもよくできる。相手がみずから進んでことをなすように心を使わねばならぬ。心の使い方が広く暖かければ、人も集り物も集まる。(中略) 誠の心で人を信じるのが、真人の使い方上手といえるのだ。

人の使い方 命 四八 一二 二八二
人の肉体の器官 命 四六 六 四

誠の心で人を信じるのが真実、人の使い方上手といえるのである。その人の体内の器官でありますから、おのずから神慮に合一していることは事実であります。目には見えねど、活動はたゆみなく、一瞬の停止もありません。終始一貫の活動であります。この「活動」こそ、おおみ心にもとづくものであります。

人のねうち 命 四四 一二 一二

地位や名誉や服装で人のねうちをきめてはならない。みな神の子である。

人の道 命 三六 六 三

月給をもらうから働くのではなく、働いた報酬でいただく。

人の道 命 三八 九 一三

人の道に「やりくり」がある。「やりくり」するのが人の道と、その逆もいえる。しかし、天地自然の法則には「やりくり」はない。厳然として不変不動である。だから、神の道の実行にはやりくりはない。無条件即実行あるのみである。

人の道 命 三八 一一 五一

人生には「人の道」と「神の道」とがある。人の道は行うのであって、得られるものは自分だけの幸福である。一方、神の道は実行で、その結果を幸せという。幸せは自分だけでなく多くの人をも幸せにすることができるのである。人の道には「待った」がきくが、神の道では「待った」が絶対にきかない。

人の道 命 三九 一 三

人の道を学んで行いに現わすことによって万人から尊敬され愛されるのであります。(中略) 物質によって恵まれるのは人の道であって、衣・食・住のためには物質がなければ生きていかれません。活かされることは神の道であり、生きることは人の道であります。(中略) 心と月とは離れていても一つであります。同様に、「神の道」と「人の道」とは人知で判断すると大部かけ離れていますが、神と人との道すじは、切っても切れぬ一トすじであります。

人の道 命 四五 一〇 二四

人の道 命 四六 六 四

心と言葉の交流は神の道であり、肉体と物の交流は人の道であります。

神の道と人の道の両道を学び修め、神の子の誇りをもち、万物の霊長としての責任を重んじ、太極のひびきをおおみ心と悟り、聖者の教義教典を人の道として学び修め、

人の道において幸せを作るとともに、神の道において幸せを生み出していくためであります。花を咲かせるのは人の道、稔らして種を生み、種によってさらにまた「い

人の道

ふ 四七 五 九

ち”を永遠につづけていく——これ神の道であり実行であります。この理は今日まで繰り返し繰り返してまいりました。しかるに今日、三十年を迎えるに到っておりますが、なお、「実行」と「行い」についても、「大事」と「大切」とについても、思いちがい、感ちがいをしております。

また「人の道」は、人によって作られた法律にもとづきながら、いかに「みおしえ」を実社会に反映させ、実践していくかということで、万霊尊愛に対して「万物尊愛」であります。

人の道

ふ 四八 一 六

人の道は衣食住であって、生きることでもあります。この生きることだけですから争いが循環して、さらにそれが天借となり、人の恩義も重って、最後には我執貪欲となつて清きみ魂をにごし革命となり、大戦がはじまっております。

人の道

ふ 五〇 九 九

人の道はソロバン勘定であり、人と人との商談によって決まるのでありますが、人の道だけの片輪でなく、人の道と神の道の両道によって学び修めてゆかなくては合掌と申せません。合掌とは単に手を合わせるばかりではないのであります。

人の道

み 三四 一二 一四五

打てば打たれる。欺せば欺される。誠を捧げて行けば又捧げられる。これが人の道であり、人の道を理解して実行する所に幸福は実現して参ります。(三月十日)

人の道

み 三四 一二 二八一

夜があれば昼があり、表があれば裏があり、人の世にも人のなすべきことにも裏表があります。裏表をよく理解して、過ちの無いように生活して行くのが人の道であります。神の道には裏表はありません。(五月十五日)

人の道

み 三四 一二 三二五

人の道は与えられた天職を怠ることなく忠実に実行することでもあります。(六月五日)

人の道

み 三四 一二 四一六

人の道は、道理、道徳、常識でありまして、道徳を尊重し守らない時には、人の道をふみ外すこととなります。(七月二十日)

人の道

み 三四 一二 四二〇

人の道に於いて礼儀作法を弁え秩序正しくすることは最も肝要であります。(七月二二日)

人の道

み 三四 一二 五二〇

人の道は肉体の交流、物の交流によって生活が出来るのであります。(九月八日)

人の道 三 三四 一二 七三七

誠の道は神の道であり、人の道は交換条件であつて、教理によつて交流するのであります。(十二月二二日)

人の道 訓 一八 八 二

人は人の道を守りよく実行して通るなら神様からも恵まれ、人からも救われる道が開かれて安心して、進行することが出来ると確信いたします。

人の道 訓 一八 八 三九

鳥畜類も生きる信念には変わりないのであります。生きんが為に実行し生きんが為に和合して行くことが人の道なのであります。

人の道 敬 四二 一二 二六一

人と人との間において、世話になつたりなられたり、すなわち義理人情によつて行うのは人の道であります。人の道においては、自分の意を用いて都合によつて延期しても、おくれてもさしつかえありませんが、神の道の実行にあつては許されません。本会のみおしえには、神の道と人の道の両道が示されておりまして、この二つの道を一つに学び修めていけと教えられているのであります。

人の道 振 四二 九 六

平和建設の第一歩として心得べき事は

一、時間の励行

二、清潔

三、ほほえみ

四、暴飲暴食を慎む

五、よりよい環境をつくる

右の五条を人の道として行うように、私は常に個人指導として教え導いて参りました。この「人の道」さえもなかなかできないのであります。

人の道 誠 四八 一二 一四六

神の道は「心の道」「ことたまの道」——すなわち、心の交流、ことばの交流、これが神の道であります。物の交流、身体交流、これは人の道であります。神の道と人の道と、この両道を学びおさめて、実行に、行ないにはげむようと、常々から教えられておるのであります。そして、「神の道」は教祖が太極のご指導をうけて、この道を、こう通れよ、とおとりつぎしてあります。それが、やはり、なかなかきびしい。

人の道

導 三四 一〇 一三

国の掟はその時代時代によって参ります。なれども神の法は時代の移り変わりがありません。決して変らないのであります。それ故に誠は天の道であり、この道を行う事が人の道であります。天の道、人の道は無限でありますから決して変らないのであります。

人の道

導 三四 一〇 一六二

天地自然の法則の道即ち神の道に入る。神の道とは、心を養う道であって、人の道は又肉体を養うて行く、心を養う事と肉体を養う事と両方が相調和して、そして私達の生活が出来るのであって、こういう処に教えの重点があるのであります。

人の道

命 四八 一二 四九

人の道は人倫道德ゆえにみんな知っている。
人の道は交換条件であり、神の道は無条件である。無条件となれば世話にならぬ人にも誠ささげて尽さねばならず、また汝の敵をも愛さねばならぬ。

人の道

命 四八 一二 五三

天地の道は誠であり、その誠の道をふみ行うことが人の道である。
人がきめ、法律がきめて裁くのは人の世、人の道である。

人の道

命 四八 一二 六四

人の道には裏表があつて、常にゴテゴテと争いの絶えることが無い。これを超越して神の道をふみ行うようにせねばならぬ。

人の道

命 四八 一二 二〇〇

人の道は物の理、科学、数理などの物の世界の道である。

人の道

命 四八 一二 二三七

人の道は道徳であり、道義であり、仁義である。それもなくてはならない、それも行わねばならぬが、さらに大切なのは、天地自然の法則を学び修めていかなければならないのである。人の道と神の道、この道筋を学び修め、この二筋の道を行うことによつて、生きがいがあるのである。

人の道と神の道

命 四八 一二 二九二

人の道の開発

命 四七 五 一二

人の道は交換条件であり、神の道は無条件である。
人の道の開発は、政治をはじめ事業家は衣・食・住のために山を開墾して、土地を開きさらには道なきところに道をつけ、家なきところに家をたてます。これも必要でありますが、そのとき名譽や金や物だけに執着しては片輪同然だと思ひます。

人の道の根本

誠 四六 六 九九

人の道は「教育勅語」に教えられております。その人の道の重点は、まず親を尊ぶこ

人の目 　　ふ 四七 一二 一七

人の目的 　　ふ 四三 二 三

人の目的 　　ふ 五三 一〇 三

人の世 　　ふ 三五 六 四

人の世 　　ふ 四二 一二 二四
 人は何をすべきか 　　み 三四 一二 七四七

人は何の為に生れたか 　　ふ 四九 五 一

と、さらには国において最も尊い存在であられる天皇、皇后両陛下に忠であること、この二つであります。君に忠、親に孝、これが人の道の根本であります。

世の人は形あるものを肉眼で見てわが心に感じますから、その場、現在だけの心の働きて、未来永劫までのことには無関心であります。そのために、生きることだけに努力をしますが活かされていく尊さは知らない人が多い。

大恩に報い、人の恩義を忘れずに、国造り、人造りの為に誠をささげていくのが目的であり目標であります。

本会の趣旨・目的は、誠を捧げるにある、ということは何だもご存じでありましょう。この世に産ませ給うた私たちの存在の目的は何かという元を知らねばなりません。ところが、多くの人は、生きるために、学校だ、就職だという事だけが目的の一切であるかのように思っているであります。ですから目的通りに実現してきませんと迷います。その迷いの種はどこにあるのか、親の見栄か、本人の怠け心か、なぜ見栄をはるのか、どうして怠けているのか、その種は誰がまいたのか。この調査は天地自然の法則に基づく調査でありますから、容易に結論はできません。

人の世は人が作って生きていくのでありますから、どうしても人を目標としてゆかなければなりません。人の言動をよく見聞して信じなければならぬし、又、信じなければ事は運びません。

人の世は、通さにやららん、通らにやららん道なのです。

悩み苦しみを未然に防ぐことは、凡てを捧げ、不平不満は更に思わず言わず、どんな事でもご恩返しのためであるということを自覚せねばなりません。終生の奉仕に誠心誠意の実行をしてこそ、神の赤子として生まれ出でた尊さがあり、幸福さがあるのであります。(十二月二七日)

天地の法則に人の魂が合一して行動するならば障害も誘惑も少ないので、美しい立派な生活ができる。

天地の道は誠であり、その誠の道をふみ行うことが人の道である。誠の道をふみ行い、誠の業を喜び励み、協力互助の実を示し、神の子として恥ずかしくない生活を営むために、この世に生れたのである。

人も集まり物も集まる 命 四八 一二 二八二

人を助ける 命 四〇 五 二八

人を使う 命 四八 一二 一一四

人を助けるためには、たとえ侮辱され、踏みつぶされようとも無条件でなければならぬ。救ってあげるといふ気持で人を使うことは、枯木に花を咲かせることになる。また氣持のすくんでいる人には、その人の心、その人の身になってあげ「全くその通り」と一つ心になってあげることである。

日の丸 命 三九 一二 三

日の丸の国旗 命 五三 一一 四

日の丸の「しるし」は神のみたまであり、尊い人の精神であります。日の丸の国旗は、日月の象徴であります。大和（やまと）は大きな和であり、無窮であり、悠久であります。太陽が、丸いまことの玉が、平和の和が輝いている日本の国旗こそわれわれの目標を、使命を現わしているのであります。

日の丸の旗印 敬 四一 一二 一六六

「日の丸」の旗印は和であります。円であります。地球上の物の動きを見ても角張っていません。まんまるいお日さまの如く動いております。

日の本 命 五三 一一 一

日の本は神国で大和魂と伝えてある。日の本は太陽の下である。万国すべて太陽の下にあるがその中であって日本のみ日の本という名をいただいている。神国といわれるゆえんである。

批判 命 三四 一二 四七八

批判することが悪いという意味ではありませんが、批判する以上は、それだけの人格と人徳が備わっていないければその価値が無いと思います。（中略）自分が実行もせず、愛情の使い方も知らず、見たり聞いたりしただけの批判は、却って自己の人格を傷つけ、知らぬ間に大きな不徳を積み重ねることになります。（八月十九日）

日々に新たに 誠 四八 一二 一二二

「日々に新たに…」というのは毎日毎日です。今日より始めて毎日、毎日、天借を重ねないようにしていくとともに天借をおはらいするため、善行を積み重ねていきなさいよ、そうしてまいります、とお誓いしているではありませんか。

皮膚病

ふ 四六 五 二一

「ヒフ病」は、この言霊のとおり「火・風病」である。火は愛情、だから思いやりを持つこと。思いやりを持つというのは、よい念を送ってあげること。つまり、心の交流である。風（ふ）は言葉。ゆえに、よい言葉の交流にはげむこと。皮膚は肉体を包んでいる「つなぎ」であるから、心と言葉とで、まるく、仲よく、長く、きれめなくつながつていくことを示されている。

火水風

み 三四 一二 四七六

宇宙には火水風がありまして、この三つを神のみ心とし、愛とも教えられております。

（八月十八日）

火水風

み 三四 一二 五七一

火、水、風は人が産み出すものでもなく、作り出すものでもありません。火、水、風の尊さは、無限でありまして、この恩恵に常日頃感謝の誠を捧げることなどは万人無関心で忘れていくことを示されています。（十月二日）

火水風

み 三四 一二 六五三

神と人との霊の交わりは人の生活に最も必要なことで、万物の慈愛は神とも仏とも信じ、愛し尊敬しなければなりません。熱も風も一滴の水も生成発展の根源で、この偉大なる慈愛があればこそ万物は成長していくのであります。（十一月十一日）

火水風

敬 四二 一二 九三

神は万物普遍の霊でありますから、火・水・風にも万物にも霊があり、声があります。この「声」すなわち「音」は「温」であり「恩」です。万物の発する音はすべてこれ「言霊」であって、この「言霊」が「みおしえ」です。

火水風

振 四四 一 六

火水風によつて活かされている。火水風は絶対のものであり、無限であります。本会の趣旨はここに重点を置いて、修養団捧誠会と命名されております。

ひやく

誠 四八 一二 九九

今度は昨年来「ひやく」（飛躍——〇〇）の言霊によつて「よし飛躍だ」ということから一〇〇円の貯金に努力していただいております。

百

ふ 四三 一二 一六

百はヒヤク——飛躍である。

百

振 四四 一 五

壹百円のまごころは金額だけに拘泥してはなりません。百（ひやく）は飛躍であり、前進であります。

ひやく

ふ 五三 三 四

神の子が悠久に飛躍するために飛躍貯金をするのであって、「ひやく」という言霊は

数字でいえば百、お金でいえば百円であります。百円の円は、まるい輪であり、魂のつながりの縁であります。この縁は神が設計された「子の宮」（子宮）の中で十月十日の間、神が肉体を設計される時に「へそ縄」という線で母体と結ばれております。（これを「へ縄」と諭されております）胎内でこの線が切れたら折角、設計された新しい人体も内臓器官もお役に立たないことになりましょう。（中略）「今日一日は一生なり」と定めて、悠久世界平和郷建設のため「ひやく」「ひやく」また「ひやく」と、いつの世までも無条件実行することが、目的と目標であり、これはまた修養団捧誠会の目的と目標なのであります。

飛躍 　　ふ 四七 一 四
 “どうぞ神の子の誇りをもってください”と申したところであります。つまり、神の子の誇りをもつこと、これも飛躍でございます。

百姓 　　ふ 四四 三 六
 農民の事を“百姓”という。それは百の種をまいて手入れして丹精こらして育てることである。

百姓 　　み 三四 一二 四六五
 農業に従事している人を、人は百姓と名付けております。その意味は、百種類の種を蒔き、これを成長させ実らせ、万人に肉体の糧を与えたり、又目を通じて心を楽しませる草花を作ったりするからであります。（八月十二日）

飛躍の献金 　　ふ 四九 一二 四
 天借のお返しの実行として、飛躍の献金があるのであります。（中略）飛躍の献金はいっ終わるというものでなく、無限であります。

飛躍の貯金 　　ふ 四七 一 三
 飛躍の貯金というのは、みなさんの子孫の繁栄のためにするのであります。また、私たちには天借や人の恩義がどのくらいあるかわかりません。それをお返しするという意味もあります。

飛躍の貯金 　　誠 四八 一二 一七〇
 私たちの家族のためであり、子のためであり、孫のためであり、また、平和実現のための指導力であります。昔でいえば「軍用金」、いまの予算でいけば、いざという時の「資金」であります。

冷やかな気持 　　告 二四 二 三
 すさんで居ると云う事は先え先えと取越苦勞をして居る、そうして冷やかな気持にな

つて居る。愛が足りない、徳が足りない、力が足りない、それがありますから冷やかな生活をして行かねばならぬ。

心の弱い人は犯罪を起こし、強い人は威張り高ぶって天則違反として病むことになりいたします。

病氣 命 四二 四 一二
肉体の苦悩も病氣です。

病氣 命 四四 九 一二
病氣といいますが、「病」は肉体のわずらいであって、これは科学的に治療しなければならぬ場合があります。「氣」は私たちの精神であります。そこで病氣になれば、まず「氣」の方から調査して、こちらをなおしていかねばなりません。

病氣 命 四二 五 四
事業の失敗も倒産も、家庭の不和も、破壊も、すべて病氣であります。人災、天災も患いがあります。人の法、天の法に逆らう時に神の御慈悲、きびしいましがありません。

病氣 命 四八 一二 五〇
心の持ち方、使い方、手足の動かし方においてその進み方が天の法則通りつとめ行われぬため病身となり、心が迷い、大事な時に障害を来たし、大切な時に行詰るのである。行詰りを開拓するためには大切の実行をなさねばならぬ。

病氣 命 四八 一二 五九
すべて感謝感激であれば病氣はなおるものである。慢心せずいつも安らかな素直な心で感謝感激の気持を養うのがみ教えの根本である。

病氣 命 四八 一二 六四
病氣になった時も動揺転倒せず、今日まで活かされてきたことに対し真剣に感謝せよ、感謝の誠を捧げて後、医師の手当をうけると三日の処が一日で癒える。一日が三時間回復する。病いのみでなく、いかなる時もみ教えを中心として行動すべきである。ことの起きた時は、まず第一にみ教えを信ぜよ。

病氣 命 四八 一二 一七
病氣などの場合、みだりに「どういう教訓だろう」と迷うのはよくない。ただ感謝でよいのだ、心の無駄使いをしてはならぬ。そして、言葉の無駄使いを注意せねばならぬ。

病氣 命 四八 一二 一二二
患いは天地の恵みと人の労力に感謝できない心と、万物を敬う心、愛する心、協力する心の不足とが因となっているのである。肉体の患いのために心が迷い苦しむことは

病氣 命 四八 一一二 一二五

一番苦しいことである。

自己の意を用いた行動がすべて病いの因となる。そして困ってくると困った時の神頼みとなり、困ったあげくに救われたいと誓の詞を唱えるようになり易いが、これはあやまりである。生きてゆくためには、肉体の栄養が必要なように、精神の栄養もとらぬとその働きが衰えてくる。

病氣 命 四八 一一二 一九三

迷いの心は、雲であり闇であり、やみわずらい、病氣となる。闇取り引とは迷いの心の交渉である。両方とも不徳である。直ちに長上の教えをうけよとあるが、長上とは天をいう。

病氣 命 四八 一一二 二六九

肉体は精巧な機械である。故障の起こるのは、天地の恩恵に、親の恩恵に、兄弟肉親の恩恵に、心からの感謝ができていないからである。

病氣となるのは 訓 一八 八 四一

空気で徳も無いのに、改めることも知らず、改めると云う教えも知らず、自我を發揮して鼻高く、いばり高ぶり、人を見下すような人こそは、万事に於いて行きづまり、迷いを生じ病身となつて参ります。

病氣の原因 振 四二 五 三

借り物である肉体を、法に基いて動かさず、忙しい忙しいと我執食欲で使うことは、動かすことは、無駄使いであり、これが病氣の原因となります。奉仕ではありません。

病氣の みおしえ ぶ 四三 二 一八

一、命の親の尊さを 知らずに暮す人もあり
信じ敬う人もあり それ故なやみ教えらる

二、腹の立つ人改めよ 何れの日にか腹いたみ

切らねばならぬ時あらば 腹を立てずに感謝する

三、足を切らねばならぬ人 腕を切らねばならぬ人

父母に感謝できぬゆえ 手足が病めてくるぞかし

四、目鼻の病める人たちよ 人に迷惑かけずして

反省感謝実行し 言葉つつしみ暮しませ

五、内臓器官悩む人 自然の法理修めつつ

病氣の みおしえ 振 四二 五 六

我が意をもちたず時まもり 誠の業に励みませ

六、時は瞬間時刻なり 月日の進歩かぎりなく

一時なりともたゆみなく 自然の希望をむだもなく

七、内臓器官を敬うて 夜ごと日ごとに暮す人

時間勵行守る人 常に健やか輝けり

八、何をなすにも喜びて 天地のめぐみ無駄にせず

人の恩義を忘れなく つとめる人は幸となる

一、人の身は病む程つらいことなきも、播いたる種を知らぬ故なり

二、人の身は病む程つらいこともなし、病む人あらば奉仕ましませ

三、人の身は病む程つらいことはなく、なれど悟れば楽になるなり

四、世の中は病の本は心から、これを知らずに尚もなやめり

五、活かされる慈悲の尊とさ知らずんば、何れの世にか病めてくるなり

六、常日頃不平不満が重なれば、病めて苦しむことになるなり

七、心こそ神のみたまの分け御魂、無駄に使えば病めてくるなり

八、病む人も病まれる人も深い縁、めぐるは神の慈愛なりけり

九、病む人も病まれる人もまごころで、誠の道に進みゆかなむ

十、病む人も病まれる人も相和して、奉仕の業にはげみまませ

心の患い―これを病人という。

心が迷うのは魂が濁っているからである。これを「病人」というのであるが、「病む」

或いは「病み(わづらう)」「は」「闇(やみ)」である。

心にせつなさや苦しきがあるときは、この人を病人と教えております。

艱難辛苦に身をけずりつつあるときに尊い「ひらめき」がさずかる。

病人 病氣の みおしえ 振 四二 五 六

ひらめき ふ 四三 一二 一〇

広い暖かい心 ふ 三九 七 一六

この広い温かい心を「いろ(色)」という。いろり(囲炉裏)は温かい。そこには火が燃えている。「いろ」の「り」である。「り」は「裏」ともいい、心のことである。

広く暖かい心

ふ 四五 一一 三二

即ち囲炉裏は温かい。

広く暖かい心とは日月のような心であり、活かされている大恩であります。（中略）
広く暖かい心とは親心、誠心、素直な心、水のような切っても切れない、叩いてもこわれぬ、強く正しい心とも教えて頂いております。水はどんな汚物をも浄化してくれます。

フの部

不

ふ 四五 一一 三三

そういなかで修養団捧誠会の教えを実行しなさい、行いなさいと言葉だけでこれを宣布普及したところで、話を聞いている間はもつともだ、いい話だと思ったりいえても、なにかそこにぶつかつた時に、昨日の感謝も、昨日のわかつたことでも、不平という「不」、不満という「不」が現われてまいります。その「不」というもの、これは汚物である。これは公害である。ガイである。その公害の汚物は、まず心の中に、また肉体のなかにある血液に流れている。

不

ふ 四六 一一 二五

そしてまた、心の中では不というものがにじんでおる。なんと私は不幸だろうという人がある、また、不賛成なんていうのがある。それは心の中に怒りがある、しつとがあるからである。それを皆さん、よく心の底にあることを考えてご覧なさい。その不を浄化する、これはなかなか浄化し切れない。次から次と重なってくる。心の中を見つめたときに、先祖伝来から怒りを持ちその怒りが伝ってきておる。不平の不というものが流れてきておる。いちばん不というものは私たちの心に災いをなしてくる。不平の「ふ」、怒りの「い」、しつとの「し」、ねたみ、うらみそねみの「み」です。

不安

ふ 四四 一一 二六

不安という言葉はフアン（芸人にフアンがある——そのフアンである）である。多くのフアンがあるようになるには、絶えず努力して徳を積みおぼしていかなばならぬ。

不安 ふ五九

(中略) 徳に守られていく生き方に、不安はさらにない。

世の中が険悪になると、この先どうなるであろうかと思わずにはおれない。不安がわいてきて安心しておれない。さきざきが不安でならぬというのは、徳を積んでいないからである。徳さえ積んでおれば不安など少しもわいてこない。(裏表紙)

夫婦 ふ四六二六

夫婦は「ふうふ」という言霊に示される如く、「呼吸」であって、行きかよいであります。呼吸なくして——息き通い(行き通い)なくして万物の生成発展はありません。

夫婦 ふ四七九三

夫婦は天地の法理であり、その夫婦によつて子供がさずかり、子孫がつづいてくることは理の当然であります。

夫婦 訓一八八五八

夫婦は天地とも教えられてありますが、天地和合することによつて光り輝くのであります。夫婦和合した其の力は百万の敵も恐れずと云う位、實に尊いのであります。

夫婦相和 命四八一〇九

相互に愛し、尊敬し、睦まじくしてゆくところに夫婦相和がある。これらはみな知つていながら行わぬのである。正しい道と知れば実行にうつすべきである。

福 み三四一二一〇六

天恩の慈愛、父母の恩だけでも弁えて実行すれば、患いも転化して福となります。(二月二一日)

福 ふ四二二三

禍が転化して福となるには、己を虚しゅうして徳を積み及ぼすにありと、教典を信じて行っているであります。

福 ふ五四三三

本会では、福は実行、内は感謝、鬼は反省といっております。福は、活かされている大恩に報いてゆく感謝の無条件実行であります。生活の上では、人の勤労であります。無条件実行と人の勤労との二つが一つであつて、切り離すことはできません。四本の指(人さし指 中指 薬指 小指)が親の心に合つてゆく(親指のハラと合う)のがしあわせであります。人体はそのように設計してあります。

福 み三四一二五四八

悩み苦しみは親の大なる慈悲であることを悟らねばなりません。悟つた時には禍が転じて福となるのであります。(九月二二日)

複線 ふ四六一三

「大平和敬神」の五文字を書いたときに太い筆を往復させて書きました。いいかえま

複線 振 四三 四 二

すと、これは筆の複線であります。単線では衝突事故がおこりやすく、複線には事故がすくないのであります。呼吸も吸うてはいて、複線であります。手も脚も右と左と二本であります。『日本』は『にほん』であり、わが日本の旗印は、大平和の象徴である『日の丸』であることに、深く思いをいたしていただきたいのであります。人が生きて活かされる呼吸も、吐く息吸う息、これも複線であります。家庭も職場も、総て出口があれば入口があり、人体にも同様、出口と入口があります。天地があつて父母がある。夫婦がある。両手、両足、目も両眼あつて肉体の活動が円滑に動く事が出来る。

不経済 ふ 三八 五 一八

役所の紙は全て国民の税金によつてある。それを粗末に使うのは、まことに不経済であり、あなたこそ不敬罪（不経済）に問われる。

不経済 ふ 五六 二 二五

不経済（不敬罪）というようなことを毎日おこなつています。その紙はすべて国民の税金によつて買われた物でしょう。それを粗末にするのは、まことに『不経済』ではありませんか。あなたこそ『不敬罪』（不経済）に問われます

不経済 敬 四〇 一二 二二 四

……と言うと、顔をまっ赤にして、「無礼者、下がれ」と、どなりつけた。お台所に於いて朝ご飯を炊く、おみおつけを煮る、どの位の燃料がいるか、どんなにお水を不経済にして居るか、この不経済と云う事は経済的のみならず、不敬と云う事は神を冒瀆すると云う事にもつながるのであります。不経済、言葉を換えますと無駄

な事、無駄にする、薪一本でも無駄にする、炭一塊でも無駄にしているかどうか（中略）如何に立派な事を言うて如何にその人が捧誠会の古い会員であつても、靴下一足も大切に取扱う事の出来ないものとすればこれは天則違反であります。（これは不敬罪であります。）

不言実行 命 四八 一二 二九 二

文句ばかり言っている人は嫌われる、まず不言実行である。

不幸 み 三四 一二 八一

人は生活していく為に、活かされている大恩（体温）を忘れ、生きていくことのみを心にかけて、身の行いも自己の利害に走り、自己主義、自己満足というように、自己中

心に何事もなそうとし、進もうとするから迷いを生じ、不幸な境遇に追い込まれていくのであります。(二月八日)

不幸 命三四 一二 五三五

これ程親切にしたのに、これ程一生懸命に行っているのに、何故こう言われるのかされるのかと悲哀を感じ、折角努力して積み重ねた富も奪われ、地位も攪乱され、不幸に陥っている人も少なくありません。このような人を見たり聞いた時に、其の人は天地の恵みに感謝しているか、祖先の徳に報いているか、目上の人の真実さを聞いて行っているかと調べてみると、右のようなことは行っていない。(九月十五日)

不幸 命三四 一二 七〇四

人は何故幸福になろうとしながら不幸になっていくのでしょうか。それは天地自然の法則に知らず知らず違反しているからであります。又知つてい乍ら実行出来ない所から幸福になれないのであります。(十二月六日)

不幸 命四八 一二 一二五

生活に不安を与える不幸を少くするためには、天地の理法をよく学び修め、法に従つてゆくようにすればよいのである。自己の意を用いた行動がすべて病いの因となる。そして困つてくると困つた時の神頼みとなり、困つたあげくに救われたいと誓の詞を唱えるようになり易いが、これはあやまりである。

不幸 命四八 一二 一六七

不平不満を持つことが禍いを起すたねとなる。すべて環境に順応しないのが不幸のものである。

不幸 命四八 一二 一八八

活かされている恩恵に報いるよう、努力せねばならぬ。恨み、妬み、そねみつつ暮してゆくから、それらが禍いのもととなり、やがて不幸になるのである。かかる生活は、結局、不幸になる種子まきをしているのである。不幸になる種子、すなわち悪い種子をまかぬようにするのが実行である。

不幸 命四八 一二 二七六

幸ならずやがて不幸となる。身体の入りがつかず、言葉の出し入れに欠け、注意されれば腹がたち、いやな気になるような心のせまい人を不幸な人という。

不幸な人 命四八 一二 二七七

不幸の種 命三四 一二 九八

肉体を粗末に取り扱い、人の生活に必要な物資を粗末にするようなことは、不幸の種

不公平 三 四 一 二 五 九

を蒔いているのであります。(二月十七日)
神の恵みはその人の分に応じて与えられますから、決して不公平はありません。一時的のことは見たり聞いたり思ったりするから、不公平と思うのであります。

(一月二十九日)

不公平 五 六 三 二

不公平というのは、身分の相違がありましても、境遇がいかに悪くても、皆、神の子であるということの自覚ができていないからであります。

不思議 四 五 一 二 二 一

昔からいろいろな聖者には、不思議があつたといわれておりますが、それはすべて神慮に合一したからであります。

不思議な人 四 〇 八 一 五

「不思議な人」とは難行苦行を感謝で乗りこし大義即ち仁義—神義に徹し、何物をも求めず貫き通してきた人をいう。

富士山 三 八 五 一 八

私は少年時代から富士山好きであつた。どれほど多くの人間のわらじに踏みつけられても怒りもしない。だから噴火もしない。いつも悠々と雲上にそびえている。

富士山 五 〇 七 一 九

富士の姿は円満であり、無条件、四合せであり、末広がりであります。(中略) 富士のことは不二、二つでなく一つであることを示しています。天地を象り夫婦を示す、天地合体して万物生じ、夫婦合体して子孫繁栄すと示めされています。これは天地自然の法則であります。

富士山 五 一 一

富士山という言葉は、人それぞれの環境がいかに不安であつても、不幸であつても、それに不平不満を持たず、思わず、活かされている大恩にむくい、生きていくための恩義に報いていくことでもあります。不幸の不をとりされれば幸であり 不満の不をとりされれば満つることでもあります。(裏表紙)

富士山 太 四 四 一 一 一 七 六

富は「風」であり、土は「地」であり、山は「産」であります。富士山は地球から生まれたのであります。地球が宇宙に生まれたその初めからあつたものではありません。火・水・風の爆発によって無から有が生み出されたのであります。富士はこの世のはじめのふるさとで、山海の珍珠ここにあるなりと、みおしえに示されているように、

不自由 誠 四六 六一三二

富士山こそは日本人の心の古里であります。主張することは一人前ですが、行なうところは三分の一にもたりない。こういうことでは、不平、不満の「ふ」、嫉妬の「し」、うぬぼれの「う」が、次から次へと渦をまくごとく出てくるのであります。「ふ」と「し」と「う」の三つが重なれば即ち「不自由」でありましょう。

不自由 誠 四六 六一〇四

「不自由」という言葉が示されておりますが、人生において「不自由」は不幸であります。この肉体において、どこ一つ悪くても不自由です。それは不幸です。不幸になつてからでは、おそい。手足も目も耳も、すべてが動いているうちに、この空気をにごさぬよう、人の心をにごさぬよう、人の魂に疵つけないようにしなければなりません。さびしい時に、ちよつと甘い言葉をかけられると、それに同情して、そこに不浄の愛が出てくる。これを「不浄の愛」という。「誠の愛」ではありません。金に困つているとき、お金をもらうと、その金ゆえに不浄の愛が生まれてくる。

不浄の愛 ふ 五〇 七三

不浄の愛 誠 四六 六四六

親は子に無条件であるはずで、親と子は、この親の無条件の愛につながっているべきはずのものでありますのに、近ごろの親子の関係は無条件とは申せません。子供に要求する親が多い。この要求が満たされないと問題を起す。そこでせっかくの愛情も不浄の愛になってしまう。要求があるのですから無条件ではない。したがって「まこと」ではありません。不浄の愛情が、わざわざの因であります。

布施 ふ 三九 七二七

布施 命 四八 一一二八九

「布施」というのは「伏せ」でしょう。布施とは伏せの意である。人に物を差しあげるときは低くなり（伏せ）感謝の心でなさねばならない。

父性愛 ふ 四五 八一二

父性愛とは「天」であり「露」であり「水」であるから、冷たく感じられる。しかしそのつめたさのなかにこそ力があり光りがある。

二つ一つ ふ 四四 四九

東は太陽を迎える方角であり、西は太陽を見送る方角である。東・西二つではあるが、一つの太陽よりいえば一つである。右の手と左の手、右足と左足、これも二つである

物心相和 命 四八 一二 二七九

が、一つの身体から出ている二つであって、本来は二つで一つである。魂を養うためには修養が必要である。肉体を養うためには物量が必要である。物心一如となって人生生活の妙味がある。物心いづれが重くても平均はとれない。物心相和してこそ天秤棒は傾かないのである。

物心ともに ふ 四〇 七 一七

物、心ともに：…という、品物と心、物心と心——と限定している向きが多い。身体もものである。〃物、心ともに〃は、〃身、心ともに〃である。

物心ともに救済 ふ 四五 五 一九

物心ともに救済するということは、一円のお金を尊び、一円のお金を貯蓄して世のため、人のために役だてるといふことであります。

物心ともに健全に恵まれ 誠 四八 一二 一〇六

物心ともに健全に恵まれということ、生活が健全にめぐまれていくということではありません。ところが、私には物がなから物では救えない、今私は病身でベットの上でやすんでいるので、なに一つ施しができない——こういうように考える人もありますが、そうではありません。(中略) 借りものですから、この肉体は返すべきときには潔よくお返ししなければなりません、お返しの日まで、たとえ一年でも半年でも長くこの世においていただければ、それだけ周囲の人々は勉強でき、徳を積ませていただける。病む人もまた病床から感謝のまことをささげて徳を積んでいく。おたがいに徳を積み及ぼしていく。これは尊い美しい姿であります。ですから、物心ともに救済していけるよう日々心にかけていこうではないかと、いつも皆さんにお伝えしているしだいであります。

物心ともに健全に恵まれ 誠 四八 一二 一二四

物心の調和 ふ 三九 七 二

物心ともに健全に恵まれるのは「調和」である。これを「まつりごと」ともいう。物・心の調和がとれず、物・心ともに乱れた時には、家庭はどうなるでしょう。また、社会・国家はどうなるでしょう。家庭が乱れ、国家・社会が乱れるのは、物・心が乱れるからであるでしょう。

不動の姿勢 命 四八 一二 九五

不動の姿勢とは、直立して動かない姿勢をいうのではない。大工がカンナをもって働く姿、農夫が鋤をもって畝をたがやす姿である。その場、その場の誠の業を喜び励み、

誠の道に従事する姿である。

自分をふり返ることもなく、自分だけが正しいと思う我執貪欲ほど不徳をつむことはありません。

お互いに人の道は分かっても神の道を否定し、知らない為に、知らぬ間に不徳を積んだり、破壊して、不幸の種を蒔くようなことになりません。(五月十日)

人のなすべき業は、その人は良いことと思つて実行しても不利になつて苦しむようなことが数多い。自分一人で正しい、過ちが無いと決めるような自己満足ではなりません。過去幾百年からの徳、不徳を省みて生活すべきであります。(五月十四日)

批判することが悪いという意味ではありませんが、批判する以上は、それだけの人格と人徳が備わっていないければその価値が無いと思ひます。(中略) 自分が実行もせず、愛情の使い方も知らず、見たり聞いたりしただけの批判は、却つて自己の人格を傷つけ、知らぬ間に大きな不徳を積み重ねることになります。(八月十九日)

分らないで不徳を積む人は其の場で許されますが、何もかも分かり、人に教えを説くような人が不徳を積み許されないのであります。(九月十三日)

生きてゆくためには、肉体の栄養が必要のように、精神の栄養もとらぬとその働きの衰えてくる。その結果は正しく物を見ることができなくなり、人の喜びを恨み、嫉み、邪魔をしたり、人に迷惑をかけるような人となる。(中略) これがいかにかに不徳となるか。かかることを知らず知らずに行つていると、ついには、みずからの不幸を招くのである。

快復を願うのでなく、実行を誓うのである。しかして誓つたことは、かならず行わねばならぬ。誓つただけで行わぬは大きな不徳である。

神の声を粗末にせぬ者が会員の中に果して居るであろうか。無駄使いをするのは不徳の至りである。かかる人はいくら祈つても、その報酬はいただけくない。

迷いの心は、雲であり闇であり、やみわづらい、病気となる。闇取り引とは迷いの心

不徳 ふ五五 二 三

不徳 み三四 一二 二七一

不徳 み三四 一二 二七九

不徳 み三四 一二 四七八

不徳 み三四 一二 五三二

不徳 命四八 一二 一二五

不徳 命四八 一二 一七三

不徳 命四八 一二 一八九

不徳 命四八 一二 一九三

の交渉である。両方とも不徳である。直ちに長上の教えをうけよとあるが、長上とは天をいう。

自分の思うように人が働いてくれぬから、と心が乱れ、心に不足を感じれば、不徳となる。心の不徳を積む人たちは、いずれの世にか滅びてしまうわけである。

ごまかされたらその人に礼をいう心構えが必要である。そうすることは先祖への奉公であり、不徳の償いであり、その人は健康に恵まれることにもなる。どんな悪口をいわれても低い心で礼をいうようにせねばならぬ。非難をされ、冷酷にされれば、されるほど礼をいうことを忘れてはならぬ。礼は靈に通じ、靈は神に通じるのである。

捧誠会に入会したからといって、それだけで過去の不徳は清められるものではない。み教えの実行が大切であります。会員になってみ教えを常に学び修めているようでも、日常の行いになりますと、できていないことが、私をはじめ多いのであります。不平不満を持たば、持った者が心を乱し、不徳を積み損をすることになります。

三年や五年くらいの修養、訓練で魂を太らせようと思うのは余りが短かすぎる。今生一代でいかなければ、来生、また来生と、遠大な気持ちで今日一日の努力精進をすすめたい。

魂を太らせるのは、神の子であることを自覚して実行することであり、魂を成長させるのは努力であります。(十一月三十日)

まわり(家族、隣人、親戚、知人)を良くすることにより、可愛いわが子の体もふとり、丸々と成長する。

万物一切にはそれぞれ階級があつて、一時間労働する人と十時間労働する人とありまして、十時間労働する人はいつも気楽に生活して通っています。そうなりますと不公平のように思われますが、決して不公平ではありません。不公平に思う人こそ原因も結果もその本を知らない人であつて、このような人は一人でも少なくなるように、又原因結果を悟つて如何なる階級に身を置いても感謝と実行の生活の出来る事を確信す

不徳 命 四八 一二 二四一

不徳の償い 命 四八 一二 一六六

不徳を清める ふ 三七 八 三

不徳を積む ふ 四一 九 九

太魂 ふ 三九 一 二二

太らず み 三四 一二 六九一

ふとる 命 四八 一二 二九六

不平 い 一八 一〇 四一

るような人を一人でも多くこの社会に成長させて頂くことが神も人も喜ぶところであり
ります。

不平 不平を思い、不平を口にするところから怒りが現れる。さらに、うらみ、ねたみ、そ
ねみ、となつて現れる。

不平不満 紙(神)は糊(法)で一分一厘の隙間もなくついている。(中略)我々は「法」を

「糊」(のり―法)として、神(紙)にぴったりと心をつけて一厘一毛の隙もつくら
なければ、迷いも動揺も生じない。雑音を耳にしたり、見たくない様を見せられて腹
をたてたり不平不満を持つたりするのは、心が神にピッタリついていないからである。

不平不満 月見、涼風、そして海、山、川：自然はただ美しい。それは自然には不平不満がない
からだ。

不平不満 不平不満を持つとそれが我が身に返つてきて、この身が病みわずらうことになる。

人にもまれると不平不満が浮き出てくる。心の奥の奥の方に沈んでも、雑用にま
ぎれ、無駄ごとに心さわがせ、不用意に心が揺り動かされると、不平不満の心が浮び
出てくる。そして大切な心の要所々にしみつく。しみがつくのだ。これを払い浄め
るのは感謝よりほかにない。感謝により不平の塊りが解けてゆく。

父母 神は命の親であり、父母は神を通じ生き証人として神のみ心を受けつぎ、名代となつ
て子を産み育てる責任があるのであります。それ故に孝は百行の基で、親に孝養を尽
くす子は万人から尊敬し愛され、仕合わせになつて参ります。(七月二五日)

父母恩重碑 父母恩重の碑の教訓は、平和をきずくための原則であり、人づくりの根本である。親
ニ孝ニ 兄弟ニ友ニ 夫婦相和シ——この三つが実行と行いにあらわされていれば平
和建設の第一歩は、すでにできていると思つてよい。

聖者が、父母の恩は海よりも深く山嶽よりも高しと教えられているのは、真実の尊さ
を理解せよということなのであります。(十月二七日)

父母の大恩 父母の大恩は海よりも深く、山よりも高く、その光こそ徳こそは誠に偉大なもので、

ふ 四六 二 一一

ふ 三九 一 一四

ふ 四四 六 八

ふ 四四 一〇 一六

命 四八 一二 二〇

み 三四 一二 四二六

ふ 四七 一一 七

み 三四 一二 六二二

み 三四 一二 四三

ふゆのあり 四一 三 六

この大恩を忘れてはなりません。親不孝をする子供をよいこととして人は認めません。孝は百行の基で、孝行は善行の一步であります。(二月二日)

「平和郷」という誌名が天の啓示によって「冬の蟻」となった。「冬」は「蜚蜮」に通じる。蜚蜮(かげろう)は朝生まれ夕べには命をおえるはかない虫である。「一日の命」というのは「今日一日を生涯として……」という本会の教義に通う。

「蟻」といえば「砂糖」を思う。それほど蟻と砂糖とは縁が深い。「砂糖」は「里(さと) 故郷」親もとである。また蟻はまことに秩序正しい生活を営む。このことは已に繰り返して説いている通りである。義を重んじ、秩序正しい生活、それはまた「平和」である。

「平和郷」といい「冬の蟻」といい、言葉は異なるが、意味は相通している。一日、一日を生涯と信じて、その一日の生活に、まことをかざし、まことを捧げていく、そこに、いのちの親のみこころに通うみちがあり、それがまた、平和建設のいしずえとなっていくのである。

舞踊病 三九 八 二三

舞踊病は「震動—神道」である。この人の魂は、神仏を否定してきたのである。

不利替え 五三 四

「みなおす」とはすなわち「ふりかえる」ことであります。省みる…ふりかえる…この言霊を文字に示しますと「不利かえる」であります。不利から平和は生まれません。不利なものや人をふりかえつてゆく。そこに平和建設への道が開けるのではないでしょう。 (裏表紙)

ふりかえる 振四〇 一 一

「ふりかえる」と命名致しました。見直し、ふりかえり、これらは一つの線であつて、もっとも大事なことであります。ふりかえるとは、ふり(不利)をかえる(変える)、すなわち、いままでの無駄をふりかえつて、堅実に行こなうことを意味しております。この言霊にもとづいて今後、支部と本部、支部と支部との交流を堅実にし言葉、心、肉体、物の四つの交流をふり返りながら間違ひなく交流を行なつて行くことのおさとしであることを汲み取り、ますます努力あらんことを切望いたします。

不良 一四二 四 一四

人を良くする、すたり物でも活用して作物の肥にする…これは尊いのであります。(中略) その子のみにとらわれて主人をいましめ、親戚、恩人、知人をあなどり、たとえ紙一枚、筆一本なりとも粗末にするならば、いかに母親がその子に心を尽くしても不良になってしまふことを知らねばなりません。それは万物を軽蔑し、うらみ、ねたみするので、大切な子が不良の感化をうけるのであります。

不良 一四五 四 一

お産は三つの理である。天地人の理、徳と力と愛によってこの世に生れてくるのである。

胎内を離れること……第一

〃 を出すること……第二

〃 を出で、この世につながる……第三

この三つの不可思議な業が、神の手によって行われているのである。産は母として重大な任務である。お産を簡単なことと考えていると子供が成人するにつれ、心の不良、肉体の不良となることがある。子供の心身の成長とともに、親もまた心身の成長に心がけねばならぬ。誠の心を養い、誠の業を喜び励むようにつとめるべきである。人の道を学びおさめるとともに、さらに神の道を歩むようにせねばならぬ。子供の動作の一つ一つを親への教訓と悟り、日々修養すべきである。みずからの「我」で子供の行動をとがめてはならぬ。わが子、わが子と、我(が)の気持で育てるから成長するにつれ、親から離れてゆくのである。天地の恵みによって人は育まれ、徳と力と愛によって生命は伸びてゆくのである。

不良 一四八 一 二 二四一

不良になって親の意見も聞かず、親の訓戒も守らず、人の意見も、人の教えも聞かぬようになるのは、母の胎内にいる間に、とくに母親の誠心という尊い信念が欠けていた結果である。

風呂 一四二 一 二 二二九

風呂は親のふところだよ。火水風の結晶で、その中にはいるのは、そのまま親のふところを温めていたのだと同じです。全く大恩によって活かされたのだよ。人の体温はまさしくいのちの親の大恩ではないか。

ふろしき 四三 四 九

相手に合わせて、いかようにも働く。しかし、このふろしきも小さければ、大きいものは包めない。人の言語動作を見て学べよ、と教え示しているのはここであって、すべてを包んでしまうような自由自在の心のふろしきを持っていてほしい。

不渡り 四〇 七 一七

事業の行き詰まりから手形の不渡りが相変わらず多い。「不渡」の「不」は、不平、不満の「不」である。従業員が不平を思い、不満をいい、それが積もり重なって「不渡り」の結論がでている。

文化 五〇 四 一六

文化とは、人の道として、万物の霊長として万霊に、万物に尊愛される人となっていくことであると思う。

紛失 四一 七 一〇

大事な物を落したり盗まれたりした時に、何の迷いもなく「さし上げたのだーどうぞお使い下さい」と思いなさいと教えている。(中略) ものが紛失するというのは不愉快なことである。(中略) これを、サラッと切りかえていく。容易ならん苦心である。

文明 五三 一〇

科学文明は人が作り上げた物の世界である。その根源に、火・水・風の働きのあることを忘れてはならない。文明もとより結構、といってこれだけに酔わず、そのよってきたる根源に心をかよわすことが大切である。一方だけに走って一方を忘れているのは片輪であり、思わぬ事故はこの片道通行から起こる。(裏表紙)

分裂症 三八 一二 一六

お話を聞いていながら、魂は家庭に帰っていたり、借金の返済期日を思い出していたり、好きな人のところへ飛んでいったりしている人が多い。肉体だけは浄会の席にいるけれど、魂が宿っていないから、もぬけのカラである。心と肉体とがバラバラになっているから、お話しも何を聞いたかわからない。分裂症は、精神分裂だけではない。こういう分裂症が多いのである。心と肉体が一つにとけあった姿が合掌である。これを神人合一という。

平気 ふ五〇 九 一三 殺人も平気、犯罪も平気、悪事も平気、すべて平気（兵器）じゃありませんか。

平和 ふ三五 一〇 四 努力して実ることこそ平和であります。

平和 ふ三六 一 五 物心共に恵まれて行かなければ、真の平和ともならず、生活ともならないのであります。

平和 ふ三九 八 二二 平和とは開発、開拓、開墾である。手をつないで楽しく仲良くするという単純なもの

ではない。一般に、親子、兄弟、友人同士が仲良くやっているのを平和と考えている

が、その中に「開発」の苦心がなければ平和とはいえない。

平和 ふ三九 八 二三 開発、開拓は容易な業ではない。そこには、いろいろな苦労がある。難儀もある。困

難もある。難有りの中に平和の種がひそんでいることを忘れてはならない。

平和 ふ四一 一 一六 国民が物心両面にわたって健全に恵まれねば浄化できない。この二つの調和—それが

本会の提唱する平和である。

平和 ふ四五 九 六 なにごとも調和と合掌とがあつて平和であります。円満を破壊することになれば、

いづれにしても多事多難で、なしたる業が仇になってまいります。

平和 ふ四七 三 三 本会の提唱いたします平和は「物心ともに健やかにめぐまれる」ことであり、こうい

う平和をこの世界に顕現していこうというのが本会の大目標であることは皆さんすで

にご承知のとおりであります。

平和 ふ五〇 一二 七 言葉に平和とだしたからには、心の中に平和を築かなければ、その宣言はなんにもな

りません。

平和 ふ五二 一〇 心と言、体と物。この四つの交流ができれば一つとなる。最初に出来た文字は「口」

である。これは東西南北を示す。四角であつて、まるい。地球も太陽も丸い。この口

から発する音を「言葉」という。「言葉」は「言輪」であり「言和」である。本来、

丸く正しく美しく、やさしいものである。 （裏表紙）

平和 ふ五六 八 二 真の平和というものは、悠久でありまして、その目的は、万霊万物尊愛であります。

平和 訓 一九 一二 三

生きる為には又生かす為には、平和のみでは進歩もなく発展もなく変化もないのであります。

平和 敬 四二 一二 二六二

平和とは「物心ともに恵まれること」であります。

平和 振 四三 八 七

どんな方でも平和を希望しない方はない、つまり平和は幸せである。幸せは平和である。幸福にならなくてもいいと、死んだらいいと云う気持ちをもつ人もありましようが、やはりその本心は、他自ともに幸せを念願し、幸せを生み出してゆくことにある。それには厳しいということを自覚しなければならない。

平和 誠 四八 一二 一六八

平和とは、まず一人一人の心の中に毒素があつてはなりません。この毒素を浄化すること、そこに本会の趣旨の重点があります。

平和 導 三四 一〇 一八

和は円でありゼロでありこの輪を動かす事は陽であります。即ち熱であります。陰と陽とは天地を形どつて陰陽と申します。

平和 命 四八 一二 二〇一

真の平和を欲するならば、物心一如、すなわち神人合一、これによつて努力せねばならぬ。

平和一神 ふ 四一 六 三

「平和一神」というのはこの謂であります。一に帰依する、大極、即ち神に合一する、そこに平和があるということでもあります。

平和郷 振 四〇 一 三

従来、「捧誠」は捧誠会のニュースを中心にした、全会員への機関紙であり、また、「平和郷」（ふゆのあり の前名）は、みおしえや教義の解説。体験談を中心にした勉強の糧であります。

平和郷建設場所 太 四四 一一 一二九

今後とも身心の建設と共に平和郷建設を進めるべきであります。教祖の信念として、また理想としては、世界のあらゆる所に平和郷を建設することにあります。まず日本国内においては各県単位に平和郷を建設し、これをもって県内の平和建設の中心として、市町村にはその枝として建設すべきと思ひます。

平和郷建設場所 太 四四 一一 一三三

平和郷の場所は、天地をかたどつて夫婦を示す、地球の運行は日月にありと、特別講習会の第一日に言葉が出ております。山は父、海は母、夫婦和合して子孫繁栄の天理

平和顕現の目標

ふ 四二 四 五

であります。山と海、海のない所は川などの水ある所を選ぶことが必要であります。本会会員は、いのちの親のみ心に到達するよう励んでいるのであります。ここに、本会の提唱する平和顕現の目標があります。

平和建設

ふ 三七 五 五

人の世は、目上も目下も、年令男女をとわず、誠と誠を捧げ合うことによって平和建設が実現するのであります。

平和建設

ふ 三八 六 四

平和建設とは国造りであり、人造りであります。(中略) 神の道を実行し、人の道を行うことによって、始めて国造りも人造りもあると信じてるのであります。

平和建設

ふ 四七 九 一五

世界の平和を建設するためには、各自の魂を磨き清め成長させることに邁進していかなければなりません。

平和建設

ふ 五四 一一 一

平和を建設するには、大極を中心に、みおやの心に沿ってゆかなくてはなりません。心と言葉の交流は神の道であり、肉体と物の交流は人の道である。神と人との両道を

平和建設

振 四二 七 二

学び修めて、神の道を実行し、人の道を行うことによって、平和建設が築かれるのであります。

平和建設

振 四二 一〇 二

只抽象的な平和運動ではなく又建物にとらわれるべきでもない。もつと身近なことから即ち、自分の健康を保持する、身なりを整える、衣食住の安定を計る、円満な家庭を築く、職場の繁栄を計る、又健全なる社会の構成を来たらすことも平和建設である。総て物心両面にまたがって国造り、人造りは平和建設であります。

平和建設

振 四二 一〇 三

平和建設は身心の建設が根本でなければならない。如何なる艱難辛苦も又他人の言動もよいように取り、よいように進行することを確信し「ほほえみ」をもってこれに対処することが最も大切な事である。

平和建設

振 四四 三 二

みおしえを通じて人類の幸せのため又子孫の繁栄のため、立派な国造り、人造り即ち平和建設に努力せねばならない。

平和建設

誠 四八 一一 一三六

「平和建設」は本会の趣旨であります。本会の趣旨は、太極のひびきである。

平和建設

誠 四八 一一 一六四

平和を建設していくには、まず「心の持ち方、使い方」と「肉体の使い方」——これ

平和建設の第一歩	ふ	四四	六	三
平和建設の土台	ふ	四六	二	六
平和の礎	ふ	五〇	五	一六
平和の祈り	ふ	四四	七	一四
平和の祈りの目的	ふ	五二	二	五
平和の基礎	ふ	四一	六	七
平和の原動力	ふ	四四	九	一一
平和の根元	ふ	四五	一一	一八

が基本であります。それから、人の使い方、金の使い方、物の使い方であって、これが天地自然の法則にかなわないと、そこに摩擦を生じて革命を起す。最後には大戦争勃発となってくる。

典範に「温容闊達なる人格の完成…」と示してあります。高天ヶ原に平和をきざずきあげていくこと、これが平和建設の第一歩であります

神慮と合掌する、夫婦が合掌する、親子が合掌する。この合掌こそ平和建設の土台であります。

平和の礎は一人一人の心の中にきざみこむものであります。石は意志であり心であります。

万物普遍の霊に合掌する。それは万物を尊敬愛することである。万物を尊敬し愛するから、人の心に万物の霊が流れこむ、注ぎこむ。このような行いをいたしますとお誓いする。それが「平和の祈り」である。

迷いがでてきたり、みしらせを頂いたら、ただ苦しんでいてはなりません。その時こそ、命の親の大慈大悲をさとり、心の持ち方を改め、言語動作を慎み、己の心の中をよく見直し、万霊万物尊愛の実行を誓い、万物の霊長として人格完成に努めるように、進行してゆかなくてはなりません。これが、平和の祈りの目的でもあります。

自分だけが真捧するのではなく、人にも真捧さす。ここに平和の基礎がある。偽りのない実行こそ世界の平和を実現させる原動力であります。

そして天地自然の法則を学び修めて、誠の道を踏み行つてゆく、そして誠の業としてこれをやつていかなければならない、そこに、平和を実現させる根本がある。これから離れて、自分の知恵や学問や哲学や科学や、そういう学問だけで処理しようということでは、平和は実現しないのであります。太極を元として神慮に合一して誠の心で誠の業でいかなければ平和は実現できるものでないということを、はっきりと命の親は神の子に申し伝えてある。

平和の根源	ふ	四四	九	一三
平和の根本	ふ	四四	五	一一
平和の根本	太	四四	一一	一五六
平和の三原則	ふ	四九	八	四
平和の条件	ふ	四五	九	六
平和の第一歩	ふ	四四	一一	一六
平和の破壊	ふ	五一	二	二
平和の目的	振	四三	九	六
平和の基	ふ	五一	九	四
平和への道	敬	四二	一一	六七

いつも平和の根源は物心ともに健全に恵まれて行かなければならない。身心ともに養っていかなければならない。

徳と力と愛、火・水・風、一・二・三、これはいつもいうように平和の根本です。

二つが一つになる場合、三つが一つになる場合、また四つ、五つ…無数が一つになる場合、いろいろな姿がありますが、いずれにしても「一つ」に結ばれていくということが平和の根本であります。

団結・協力・融和の平和の三原則にもとづいて、万霊万物を一刻も忘れてはなりません。物心ともに健全に恵まれていくことは平和の条件であり、人生の基本であります。世の人々の言語動作をみておきますと、生きるがための我執貧欲ばかりであって、活かされている大恩には無関心であります。

恩のおくりあいというものは、平和の出発点でございます。

平和を破壊するような行為は天、是を許さず。

言葉では平和平和と誰しも云っておりますが、平和の目的はやはり、幸せであり、幸福である。そのしあわせを求める心、これは人種、国籍、信教は違えども皆同じだろうと思う。

神の道と人の道の両道・両輪の調和が平和の基であります。地球上においても、天地あり日月あり、合い和しておりますように、すべての生あるものは、活かし給う大恩と生きてゆく努力との調和によって生成発展しているのであります。

平和というが、平和はただ穏やかなのどかなさまのみを言うのではない。兼山先生は家なき所に家を建て、道なき所に道をつけた。この開拓、建設、改善また改善、これが平和への道である。建設、改善のためには、一時は平和ならぬ日もある。夫婦が別れ別れになって生活することもあろう、艱難辛苦と闘う日もあろう。しかし、それは平和建設への一つの道である。また開拓、改善は国土ばかりではなく、この身心の開拓、改善、これを忘れてはならん。

平和を築く 五〇 一 八

平和を築くにはそれぞれの悩み苦しみをすなわち地獄を克服して、これを貫いてはじめて平和が建設できるのであります。

へそ 三八 一〇 三〇

臍（へそ）は平素に通じるから、平素の行いが大切である。平素はいい加減に通っていて、いざとなって頼むのはおそい。

弁解 命 四八 一二 一一四

弁解したり理屈をいうことは、相手に苦痛を与える。理屈をいうことは相手に苦痛を与え、そして不徳をつむことになる。

弁解 命 四八 一二 二九二

どんなことでもすぐ弁解したくなるのは潔癖からくる欠点である。黒いものを白いと言われたときにも「そうですか」と心から言えるようであれば相手は必ず反省する。

勉強 三 三四 一二 五二二

人は、人により言葉によつて教えられ注意されることは気がつくのでありますが、肉体の不自由さにより、万物の行動によつて教えられることは、最も肝要なことでありますから、それによつて学び修めるべきであります。（九月四日）

勉強が第一 誠 四八 一二 八六

本会に入会して勉強していく以上は、まず、天地自然の法則を学びおさめていく。万物の霊長たる、すなわち、神の子である誇りをもっていく。天地の恩恵をさとっていく。この勉強が第一です。これを学び修めていく人こそ誠の人であります。

編集 三 四〇 一二 一五

“編集”は“遍衆”であつて、大衆にとけこむことである。自分、独りよがりであつてはならない。

ホの部

法 三 四二 一一 一〇

法に従い法を守っていけば障害はありません。ところが精神的にも物質的にも行き詰るのには、法に従つて居るようでも、従っていない証拠であります。特に天理天則には、知らず知らず違反している場合が多いのではないのでしょうか。天則にかなつておれば、人の世は清く明るく、迷いも行き詰りもなく、病身となつて苦しむこともありません。

方位方角 　　ふ 四〇 三 一四

方位方角に迷う人が多い。方位・方角は、われわれの心の中にある。その方位・方角が定まっていないから迷いを生ずる。月日は魂、地球の本体は肉体である。月が悪い、日が悪いといって尊い魂をいためるのは間違っているのではあるまいか。

言語動作の方位・方角が正しいかどうか、見直して頂きたい。運び方の方位・方角が誤っていないか、見直して頂きたい。玄關払いをされる所へは足を運ばない、というのは、すでに方位・方角を誤っていることであろう。だから、方位・方角は心の中にあるということがよくわかる。

方位方角 　　ふ 四五 五 一一

方位方角にとられる人がまだ多い。「方」は「室」（ほう）であって、室は他（た）からはいってくる。そして方角は丸く、円満である。行きたくないところでも、時機がくれば行かねばならぬ。行くべきところへは行かねばならぬ。今月は東がわるい、といっても、便所が東にあれば行かねばならない。

方位方角 　　ふ 五一 四

方位方角に迷う人が多い。方位方角は外界にあるのではない。われわれの心の中にある。心の方位方角が定まっていないから迷いを生む。月日は魂、地球は肉体。この身心が一つになっているが故に万物は生成発展する。月が悪い、日が悪いというのは、尊い魂を侮辱し、ないがしろにしているのではないか。（裏表紙）

暴飲暴食 　　振 四二 一〇 四

まことの業をよるこびはげむ平和建設には健全なる肉体が必要である。借り物の肉体を養うために、神より頂いた生命の糧を感謝して、正しく生かして使うことが大切である。その生命の糧を無駄に使い、必要以上に、我欲におぼれて暴飲暴食することは、健康をそこなうのみならず、他自の心を乱し、平和建設の大きな支障となる。又暴飲暴食とは肉体を養う飲食物ばかりではなく、物欲、名誉欲、権力欲に対する我執貪欲の心を云うのである。その我執貪欲の心を改めて、正しい欲、善い欲に切り替えることに努めなければならない。

報恩 　　誠 四六 六 二四

徳をつみ徳をおよぼすことからは 恩に報いる奉仕なりけり

人がこの世に生き活かされていくについては万物に、あるいは人さまに、どれほどご

方角 訓 一八 八 九

ぼうこう 誠 四六 六 五〇

奉仕 ふ 三九 七 二〇

奉仕 ふ 四〇 七 一七

奉仕 ふ 四〇 一 一六

奉仕 ふ 四二 一 一〇

恩をいただいているか、はかり知れませんが、世の中には多いと思います。私もその一人であると自覚しております。それゆえに、つらいとき、悲しいとき、淋しいときにも、これではならんと勇氣百倍ふるいおこし、多少なりとも人の仕合せを願う上から悩み苦しみを引き受けて楽にしてさしあげようと努力しているのであります。これが恩に報いる奉仕であります。この報恩の奉仕を毎日しているのであります。

よく世上の人が「方角を誤るな」と申しますが、方角と云う言葉の働きは「法をかくな」と云うことであり「かくな」と云うことは「誤るな」と云うことであります。「角」は「わる」と云うことにもつながり「こわす」ことであります。「こわす」ことは「破つてしまう」ことであります。即ち「法を破る」と云うこととなります。

「膀胱」は「暴行」「争い」につながります。言葉の暴行もあります。腕力をふるう暴行もあります。ともかくも人と争つて「暴行」をする。このような荒々しい気もち、自己反省をせずに人に暴行を加えていく——こういう人は、やはりつね日ごろから交流をさそぎりがちでありまして、それが「子宮筋腫」とか「膀胱」とかの患いになつてくる。自分がならなくとも、その患いをする人のために苦勞する。「子宮筋腫」にならなくとも、汽車や船が転覆して暴風のために苦勞する。

働いても働いても貧しいというのは、奉仕をしているのである。生まれ変われば立派な人になる。

奉仕とは「法仕」である。「法仕」とは円く治めることである。

奉仕―は、法仕であつて、天地自然の法則に仕えることである。いくら努力して奉仕しても、天地自然の法則に添っていなければ、なんにもならない。

「奉」は絶対のみちでありますから、絶対の精神にならなければなりません。「仕」は最大の真理で、これまた絶対であります。「奉仕」という文字の尊さは神のみことろと同一であります。

奉仕 四二 一一

人は人を奉ることを知っても、塵や埃を奉ることを知りません。塵や埃を奉ることを知って始めて奉仕の道を悟ったといえるのであります。

奉仕 四二 一一

良きことも悪しきこともあればこそ、法があるのでありませんか。使うものも使われるものがあればこそ奉仕になるのであります。

奉仕 四三 八

月給をアテにしない生き方、それが奉仕である。人がこの世に生きて活かされて行く為には、先ず神仏を敬うと同時に神仏に仕える心とその行いこそ最上の美しい務めなのであります。これ即ち奉仕と教えられます。

奉仕 三四 六三

(一月三一日)

奉仕 一八 五九

奉仕と一口に申せば仕え奉ることではありますが、中々実行出来ないであります。捧は奉るのみでなく絶対のものでありますから、絶対の精神にならねばならないのであります。「仕」は最大の真理でこれも絶対のものであります。この奉仕と云う字の尊

奉仕 一八 六〇

さは神の御心と同一であります人は人としての奉仕の道を悟り実行した時、悪縁の線は切り開けるのであります。

奉仕 一八 六〇

本当に無条件の信念奉仕と云うのは本を悟り、其の実行に進行するなら、何も取り違いや、争闘はない筈であります。人は人を奉ることを知って塵やほこりを奉ることを知らねば奉仕の道を悟ったと云うことにはなりません。

奉仕 四二 九九

「終生の奉仕」が神の子のつとめでしょう。奉仕することになれば二足どころか、五足でも六足でも、いくらはいても十分ではありません。万足のわらじをはいて歩いて初めて人に満足を与えることができます。人さまに満足をさしあげる、これが奉仕ではありませんか。

奉仕 四二 四

万物に奉仕しその感謝の心によって行うべきを、不平、不満、怒り、そねみ、疑いの害の気持を注ぐので、それに染まってくる。それが重なる時に病気になる。だから毎日のように心を清め、魂を磨くことは、日々の行事であり務めでなければならぬと教え導いております。この魂を清めることも奉仕であります。

奉仕 四二 四

奉仕 四二 四

奉仕 四二 四

奉仕 誠 四六 六一三二

「終生の奉仕」と示されておりませんが、奉仕とは、ただ肉体を動かすことだけではありません。日々、時々刻々にいただいております。『活かされる』というこの大恩典に気がつけば、おむくいせずにはおられないでしょう。その「おむくい」していく実行、それが奉仕であります。

奉仕 命 四八 一二九二

いやな仕事とは金儲けにならぬ仕事をいうのである。金儲けにならぬ仕事とは、ただの仕事である。奉仕である。いやな仕事を真に喜びはげみ、奉仕することが即研修積徳となるのである。

報じ 敬 四〇 一一一八五

「損得を忘れて、煎餅一枚でも、集まってくる人に差し上げ、お茶汲みの当番をしながら。これがご恩報じです。ご恩報じは祖先の『法事』ともなるのですよ」と宣言して、その日は帰った。

ほうじ茶 敬 四二 一一七八

「ほうじ茶でございまして」と言う。「法事はね、人の亡くなった時にすることだよ」私は言葉のまにまにこういう言葉を出しておいた。

方針 誠 四六 六一九八

私たちの足や手が動くのは魂が動くからであります。ゆえに「方針」とは方角を示す羅針盤の針のようなものであります。狂ってはいけませんから、つねに「自我」を捨てて、己れをむなしくして定めることが大切であります。方針を誤まらないように怠りなく修養にはげんでいるのであります。

捧誠 ふ 四八 四三三

捧誠という文字は真を捧げるですから、言葉によって下から読めば真捧とも読めます。捧誠とは、いいかえれば万霊万物尊愛であり、天地の理法を信じ修めることであります。

捧誠 ふ 五〇 一〇三三

捧誠の捧、捧げるといことは、円満であります。誠は誠実であります。平和な言葉であります。天地自然の法であります。やさしく、根強いのであります。

捧誠 ふ 五四 九二二

人それぞれ社会で果している役割は違います。しかし、どんな相違があろうとも、神の子であるという自覚、強く正しくという心がまえ、不平を思ったり不満を言ったりしないという誓いに基づいて日々新たに生活してゆくことが捧誠であります。つねに不平不満を抱き、怒りやねたみに満ちたような日ばかりを過ごしているような事は

天が許しません。そのような事を積み重ねますと、やがて争いになる。争いは、天地自然の法則から言うとは許されません。

捧誠 敬 四〇 一二 一九

捧誠 誠 四八 一二 一五三

「真捧」は「捧誠」と同意義である。本会の旗印は「捧誠」である。なにに誠を捧げていくのか。万物に誠を捧げていくのですよ。人に誠を捧げていくのですよ。自分よりまず人々に、また万物に、感謝の誠を捧げていくのですよ。

捧誠会 ふ 四八 二 四

捧誠会 ふ 四八 二 七

太極の響き、声なき声を打出しているのは修養団捧誠会のみで他の団体にはありません。修養団捧誠会は、神のみ声によって悠久なる世界平和の建設を目的、目標に発会したのであります。

捧誠会 ふ 四八 二 二〇

なんの目的があつて修養団とつけたのか、捧誠会とつけたのか、（中略）神と人と
の両道をふみ行なつて、しあわせをうみ出し、幸福を作り出す、これを区別しながら、
しかも、二つをあわせ達していけるようにする会だと申しのべている。

捧誠会 ふ 五四 九 三

本会は迷信ではない、邪道ではない、ただひたすら我執貪欲を払い清めるのですと答
えればよい。そして、そう答えた人自身が、そのためにどのように工夫体得している
のかを語つてあげればよいのであります。

捧誠会 敬 四一 一二 八四

「捧」は「法」である。法は天地自然の法則で、この法則は天地開闢以来運行し、休
むことなくつづいて今日に到っている。「誠」は「生」―いのちである。万物のいの
ちは今日始まったものでなく、この世始まって以来のものであり、これから先も亦、
無限につづいていく。「会」は「海」海もこの地球上に海山の別が定まってからのも
ので、この世はじまって以来のものである。―故に。捧誠会は昭和十六年六月二十一
日に始まったのではなく、この世始まって以来存在する。今日ここに発会したのは法
律にきめられた「捧誠会」であつて、その根源のないのちは、この世の始まりと共に
ある。皆さんは、この一事をよく心におさめて頂きたい。

捧誠会の教え ふ 五四 五 五

捧誠会の教えは、講義を聞いてわかるというだけのものではありません。無条件実行

捧誠会の徽章

振 四三 八 四

によって体得してゆくものなのであって、講義による学習とは大変な開きがあります。一代の生では、その真髓までに到達し得ない会員もある。親子相伝えてゆかなければなりません。会員になった人から始まって、二代目 三代目とつながっていつている会員は少ない。

教への道は、火の如く、水の如く、風の如く、いついつ迄も、その恩恵に包まれてゆくようではなくてはなりません。黙々と世界を照らし暖かい熱を与える太陽、また甘露の如き真清水、常に呼吸をしている空気、いつ、どこで、誰にでも与えられる火水風とともに、みおしえに限りはありません。

皆さんが胸につけているこの徽章は、捧誠会の会員だと云うだけの印ではありません。梅の花に、真捧の誠を捧げる文字、これをさかさにしてみて御覧なさい。これは私（総裁）の人相でございます。この私の人相は十年の間、如何なる艱難辛苦の中にも微笑を持つとうとして、鏡を見ながら努力して歩いてきた顔であります。私は至って気短なところもあり、私の強い、仲々取り付き難い男でもありました。鏡をふところに十年の努力、これは山に籠って滝にかかるよりも、断食するよりも辛い。どんな苦しい中でも、どんなに誤解されて、無実の罪に落とされても、笑顔をもって迎える事は容易ならざる努力があるのでございます。

捧誠会の行

ふ 四六 一〇 一八

捧誠会の根幹

ふ 五二 七 四

水には裏表がない。水の心。水の心を養うのが捧誠会の行である。

捧誠会員は、まず、神法一にありますように、大恩に報い人の恩義を忘れず 終生の奉仕に誠心誠意の実行を励むことと示されておりますことを学び修め、自らがその奉仕の行いに、また、実行に励むことから始めるのであります。綱領一に、正しく強く示されてありますように、この終生の奉仕の行いと実行を強く正しく実践しなくてはなりません。さらに典範には、迷信を打破し、卑俗なる奇蹟の存在を否定し、純真無垢にして動揺転倒しない心境を発見するように工夫体得せよと示されてあります。これが捧誠会の根であり、幹であります。根となり幹となるご指導は、このように、

神法一に、綱領一に、典範に、はっきりと明示されております。大元ははっきりしております。元がはっきりしていれば、枝や葉はあからのことであります。まず根本をはっきりさとしてゆけば、枝や葉についてまで、私にいちいちご指導を頂かなくても済むはずであります。また、根本に基づいた枝や葉は、本部では教學院が指導しております。誤ちをくりかえすこと勿れ、と繰り返して力説いたしましたとしても、なお、生まれ変わっても生まれ変わっても、誤ちは繰り返されるので、世の中には相変らず、殺したり殺されたり、奪ったり奪われたりという事が絶えません。これが現実の姿なのであります。そのような試練にであつた時、苦しい時こそ感謝ができなくてはなりません。苦しみの場の中にあつて、少しでも感謝ができてゆけば大難が小難となつてゆくことは違いありません。憎しみと憎しみの触れ合いと、誠と誠の触れ合いには、天地の差があるのであります。至誠天に通うという処までゆけば、どんなことも成つてまいります。中途半端では成りません。「捧誠会にはいった」から救われたのではなく、捧誠会の根本ともいふべき、誠を捧げることには徹したから、至誠が天に通じたから救われたのであります。どうか皆さん、このような真の意味を、これから皆さんが一致して宣布普及してゆかれますことを待望としております。

世界の一人一人が暮している家庭が、働いている場所が、まことの徳と力と愛によつて団結協力融和していけるようになるために、どんな些細な事にも無条件に誠を捧げて実行してゆくことが本舞台に出た修養団捧誠会の使命である。

法律的に罪にならない限りは直すことができないようでありますが、強く正しく、そういう事実には立ち上がつてむかつてゆくことが捧誠会の主旨であります。それなのに会の内部においてさえも、先輩だから、お世話になつていから、頂戴物をしていから、というような気持から、見てみぬふりをして黙つてしまします。そういう気持を払い浄め、改めて教えてあげるところに、本会の主旨がある。あげるんです。腐つたもの、汚れたものをあげるんじゃないやありません。

捧誠会の使命

ふ 五二 一一 六

捧誠会の主旨

ふ 五〇 一一 五

捧誠会の主旨 五二 六 二

天地自然の法則を学び修めて、実行と行いをしてゆくところに修養団捧誠会の主旨があるということは、会員であれば誰でも知っておりますが、知るのみであっては花も咲かず、実も生じてまいりません。

捧誠会の主旨 五五 五 五

捧誠会の主旨は、万霊万物尊愛であります。神の子の自覚を胸に、悠久世界平和運動にまい進することが目的であり、目標であります。

捧誠会の趣旨 四六 五 一六

捧誠会の趣旨は国造りであり、人造りであるよ、と絶えず宣布普及しているではありませんか。

捧誠会の趣旨 四九 三 四

この世に生れてきたのはなんのためか、その原因と結果と目的目標を教えさとしていのが、修養団捧誠会の趣旨なのです。

捧誠会の趣旨 五〇 二 一四

捧誠会の趣旨は、天地自然の法則を学び修め万霊万物を尊愛し、年齢男女を問わず、教養のいかんを問わず、すべての神の子が団結協力融和して悠久なる平和世界の実現に努力することにある。

捧誠会の趣旨 四八 一二 四二

「ね」は「根」であり「元」である。根はこの地下にひそんでおります。根のない草木は「生け花」であって、一時は美しいが長もちしません。根のある花を咲かせ、根のあるみもりをしていくところに本会の趣旨がある。根の教え 修養団捧誠会の趣旨というものは、この故に、「根の教え」である。

捧誠会の本部 三八 七 一六

捧誠会の本部は、ただお茶を飲んだり、つまらない雑談に時間を使う場所ではない。もし、そうなら社交場も同じである。ここは魂の洗濯場所である。

捧誠会の本部 四四 四 一二

みおしえの存在するところ、すなわち本部であり、本部すなわち、太極なのであります。修養団捧誠会の本部は太極であります。

捧誠会の「みおしえ」 四八 二 三

修養団捧誠会のみおしえは太極の響き、声なき声を万霊万物にお取次ぎする使命をもち源であります。

捧誠感謝 告 二四 二 二

誠の愛であります。誠の徳であります。誠の力であります。この三つが捧誠感謝と云うことになる。

捧誠感謝の心 四三 一〇 二

捧誠精神 三八 九 一二

捧誠精神 五六 九 四

捧誠精神 四八 一二 九六

捧誠精神 四八 一二 一六二

捧誠読本 三八 九 一二

奉納 四三 三 九

方便 四一 一〇 一〇

法律 四四 九 一二

ホーホケキョ 四〇 二 六

ボーリング 四一 一〇 八

捧誠感謝の心は、無条件であり、満足であり、すなわち十分であります。

よその子が事故に会った―その時、親という親は思わず「うちの子でなくてよかった」と感謝する。しかしこれは捧誠の精神ではない。その瞬間、わが子を考へる前に「あ、可哀そうに、気の毒に：」という思いが起らないものか。そして遂に、わが子がその対象に思い浮ばないまで広く温い心になれないものか。

人から攻撃され誤解され、取らない物を取ったとか、故（ゆえ）もなしに憎まれたとか、そういう事柄が起きる度ごとに、天が知っている、地が知っている、人も知る、いずれは分る時がくると、こういう心掛けを持つのが捧誠精神であります。捧誠精神というのはこのような心がけをもって、魂をきよめ磨くことでありまして、このことの気づく一番大切な時期は青年時代であります。

これほどやっているのに認めてくれぬ。これほど働いているのに喜んでくれぬ、などと自分というようでは、まだまだ捧誠精神でない。自我や貪欲が根づく植えつけられていくのだ。

人の道にも勝負はある。事業の失敗、病気などは負けたのである。あの人が苦しめたから病気になるのだ、失敗したのだと恨み心を持つのは捧誠精神でない。勝つてもうぬぼれず、負けても悲しまぬ精神こそ罪惡の種子をまかぬ心、また人を立てる大神であり、われわれのもつとも必要とする心である。

捧誠読本は捧誠徳本である。ここに書かれていることは、全てが「徳の本」である。だから読本という。

誠の行為は、なにこころなき行為である。これを奉納という。

方便はどこまでも方便であつて真実ではない。

その法律も人が作ったものでありまして、人によって変えることができます。

「ホーホケキョ」（法聞けよ）と驚をして、美しく叫ばしめるのであります。

ボーリングが流行る。これから益々流行る。これは「大革命」の教訓である。

北辰星 ふ五三 一 九

北辰星は、数多くの星の中でとくに、すべての船や飛行機が自分の位置を正確に知り、航路を正しくするための目標になっております。まことの精神です。本会の趣旨たる誠も、北辰星の如く、動揺転倒しない精神を養うところにあります。動揺転倒しない精神によつて、卑俗なる奇蹟を否定し、どこまでも悠久なる魂の絶対性をもつて、北辰星のごとく信念を養つてゆくことが必要であります。空においては北辰星、地にあつては悠久世界平和郷・神里であります。

誇り ふ四〇 一〇 一七

人と生まれたのは誇りである。しかし、「誇り」は「うぬぼれ」はない。人の肉体の栄養に万物がその命を捧げて下さっていることを悟れば、とても、うぬぼれてなどいられるものではない。

星 ふ三九 八 一九

胃は、い。いは、以。以という文字は、一点の星が人と人との間にある。星は「奉仕」であり、この奉仕が天借をお返しすることになる。

北海道 ふ四五 七 二二

とくに地球が生れて、北海道は聖地である、と啓示されております。

仏を敬う み三四 一二 六三四

神仏を信じ敬うということは、無限の慈愛に浴して活かされていることを心から認識することであつて、神仏に奉仕することは理の当然であります。(十一月二日)

ほほえみ ふ五〇 六 一一

災いは口からということわざがあります。言霊によりますとそうではなく、口が開けば花(鼻)が咲いて、芽(目)が出る、ほほえみという言葉によつて諭されております。笑顔で働くという事は、幸福を作る事になります。歯の痛みの教科書によつてほほえみながら努力すれば幸福になるという事を自覚致しました。

ほほえみ 振四二 一〇 三

「ほほえみ」の根拠は神への絶対信頼であり、捧誠感謝の心を養い、身心の一切を捧げることであります。

ほめられたら ふ三九 三 五

「叱られたら感謝せよ」、「ほめられたら反省せよ」という教えの実行の出来る人こそ、幸福になれるのであります。

本会 ふ五〇 一〇 五

本会では、その交流を団結・協力・融和で、敵味方を作らないように、合掌をするお稽古をしているのであります。

本会の会員 三九 一 二二

本会の会員は、助けて下さいといつて合掌するのではない。実行いたしますと誓い奉るのである。

本会の会員 命 四八 一二 五三

修養団捧誠会の看板は国造りである。平和郷をつくるのである。その眼目は、健康にして温容豁達なる人格の完成

円満にして明朗和楽なる家庭の建設

協力互助に基く健全なる社会の構成

悠久なる平和世界の顕現

である。

しかしてこの四大眼目を達成する根本は笑って働くことである。人の批判などしてはならぬ。他人はしても自分は決してはならぬ。会員こそぞつてみ教えのもとに集い来り、笑って働く原動力をいただくのである。

本会の神 四一 七 四

本会の根本 五〇 一一 五

本会では大極を神として崇敬し、命の親と呼び奉っております。誠の心こそ本会の根本であります。この誠の心を忘れずに堂々と実践してゆこうではありませんか。

本会の根本趣旨 誠 四六 六一 九九

利己主義をふりすてて、将来の日本を背負っていかれるお子さんたちを育ててください。みちびいてください。狂いなき日本を建設し、狂いなき人物を造りあげていってください。そこに本会の根本趣旨があるのです。

本会の根本精神 四 五 六 一三

本会の根本精神は「捧誠」である。まことをささげる…すなわち、しんぼう（真捧）である。

本会の主旨 五三 七 二

己の心を浄めて誓う、その信念と信行（しんこう）こそ悠久なのであります。ややもしますと苦しい時の神だのと言い、あるいは仏にお縋りすると申しまして、助け給えと手を合わせる姿もあります。しかし、もし事が思う通りにまいりませんと、こんどは神も仏もないという気持ちをもったり、そこまでいなくなるとも、あっちのお寺、こっちの神社というように迷い出すような姿もあります。このようにして悩み苦しむ

から一時でも抜けでよう、困難をなんとかして克服しようという人の気持ちは正直には違いありませんが、そんなような、己の都合だけを中心にして、しかも一時的の事柄を対象としたような神頼みは、本会の主旨にはございません。

本会の主旨はいかなるものかという点、綱領第一にありますように、天地自然の法則を学び修めながら、神の子の自覚を持つて強く正しく誠を捧げて無条件実行してゆくことにあるのでございます。これを一人一人が真剣に励む事によって、悠久世界平和運動が進むのであります。（中略）まず家庭の平和、社会・国家の平和を実現させるには、天地自然の法則をよく学び修めて、神の子であるという自覚を強く、しっかりともち、誠を捧げながら日々新たに実践することが根本であります。

本会の主旨は、天地自然の法則を守り、無条件実行して、悠久世界平和運動を真心で建設することであり、これが万霊万物尊愛の無条件実行であります。

本会の趣旨は、特に目に見えぬ魂を磨き、成長させることに心掛け、同時に万物を尊敬愛する行いを力説しております。

一言にして言い尽くせば、本当のことを学び、本当のことを行うのが本会の趣旨で、それは「まこと」一つと行ってよいでしょう。

本会の趣旨は、大極を目標として身心の建設、国造り、社会の構成に誠を捧げて努力することであり、これを達成するには容易ならぬ努力があるのであります。

本会の趣旨は、天地自然の法則のよって生ずる大極を神として崇敬する。

悠久なる平和世界の顕現に貢献してゆく、その志その努力を重点として、修養実践していくのが本会の趣旨である。

本会の趣旨は、天地自然の法則を学び修めなさい、修めたならばこれを行いと実行に邁進せよ、こう力説しております。

本会の趣旨は、天地自然の法則を学び修めて、その法則にもとづいて行動することによって、世界の平和が実現してゆくという点であります。

本会の主旨 五五九二

本会の主旨 五六一三

本会の趣旨 五三八一三

本会の趣旨 五三九八六

本会の趣旨 五四二一二

本会の趣旨 五四四一〇

本会の趣旨 五四四一〇

本会の趣旨 五四六二二四

本会の趣旨 五四六七二二

本会の趣旨 　　ふ　四七　二　　九

本会の趣旨は万物是誠であり、万物尊愛でありますから、万物に誠を捧げることが趣旨なのであります。

本会の趣旨 　　ふ　四七　二　二〇

私は実行しております：と自分からきめた実行は、相手に通じない場合がある。他の人から「ああ立派な行いをしている」と他人から心から尊敬愛されるようになることが本会の趣旨であります。

本会の趣旨 　　ふ　四七　五　　九

本会の趣旨が「神の道」と「人の道」の両道を実行と行いにあらわすことに目標と目的をおいているのも、天地の真理にのっとっているからであります。

本会の趣旨 　　ふ　四七　九　　六

本会の趣旨は、万霊万物の尊愛でありまして、これを実践しなければ真の世界平和は実現いたしません。

本会の趣旨 　　ふ　四八　二　　九

本会の趣旨は、身心ともに養い、物心ともに恵まれるよう、己れを虚しうして徳をつみ及ぼし、天借の返済に懸命に実行しなさい、とさとされております。

本会の趣旨 　　ふ　四八　九　　八

本会の趣旨からいえば、神人合一、神の子であるから、神とともに行動するという精神を、くり返しくり返し、三度の食事をいただくと同じように、厳しく教え諭していることを忘れてはなりません。

本会の趣旨 　　ふ　四八　一〇　七

修養団捧誠会の趣旨は、万物是誠であります。万物是誠の精神を貫ぬいて歴史の一頁をいく万年も残していくことが重要なことであります。一代のうちに富を残し、名譽を得てというようなことが目標ではない。皆さまの子、孫、ひこに至るまで、その歴史の一頁を残していくことが本会の趣旨であります。

本会の趣旨 　　ふ　四九　八　　三

本会の趣旨は、万霊万物尊愛の精神を養い、これを行いと実行にあらわして悠久世界平和を実現させることにあり、これはまた、神の子としての責任であり、義務であります。

本会の趣旨 　　ふ　五〇　八　　三

日月は黙々として世界を照らす。これは誰でも聞いて知っております。その日月のすこやかな教えの運行に従ってゆくとところに、本会の趣旨があります。

本会の趣旨 　　ふ　五一　二　　四

人の道でも、万物の霊長である誇りを忘れてはならない。また、本会の趣旨では、そ

本会の趣旨 　　ふ 五 一 三 二

れ以上の教科書として、神の子であることを自覚して天地自然の法則を学び修め、悠久世界平和郷建設をする責任を忘れてはならないと諭されており。本会の趣旨は、神の道と人の道の両道の合掌にあります。神の道と人の道の混線は、どんな人にもあり得ることですから、その混線を正しくしてゆくために、みなおし・研究が必要になってまいります。

本会の趣旨 　　振 四 〇 一 一

機会ありますたびに本会の趣旨は力説しておりますが、それは、天地自然の法則を学びおさめて、強く正しく生活をしてゆくことにあるのでありまして、決して、難しいものではありません。

本会の趣旨 　　振 四 二 二 二

本会の趣旨の重点は濁れる魂を清めつつ、足らざる所改めて、神と人との両道を学び修めて反省、感謝、実行と日々新たに努力して行なうことにあります。

本会の趣旨 　　振 四 三 三 三

本会の趣旨は神の子の自覚を悟り、天地自然の法則を学び修めて、平和建設に努力することを、毎日誓っているであります。

本会の趣旨 　　振 四 四 五 三

常に健康にして温容豁達なる人格の完成、円満にして明朗和楽なる家庭の建設、協力互助に基づく健全なる社会の構成、悠久なる世界平和の顕現に邁進することが本会の趣旨であり、又本部建設であります事を力説いたします。

本会の趣旨 　　太 四 四 一 一 一 七

この口から不平不満を出したらどうなるか。こうして現実を示さなければ気がつかない。これを全国の会員に示す。ここに反省、感謝、実行がある。宣布普及しているというが、このような状況では「湯呑み」だ。教典にこうだ、みおしえにこうだというのみで、不平不満、ぐち……をこぼしている。これを浄化していくのが本会の趣旨ですよ！

本会の趣旨の根本 　　ふ 五 一 二 三

本会の趣旨の根本は、万霊万物尊愛。誠を捧げてこの実行と行いをさせて頂くことであり、とくに本年は悠久世界平和建設も、全国の会員の団結協力融和によって、半途までは整えられてまいりました。

本会の特異 　　ふ 四 二 一 二 三

本会の趣旨は、他宗教のそれとは根本に異なることがあります。それは天の声によ

つて教祖が、その時そのつど、大極のひびきを「みおしえ」としてお取次ぎしている、この事実であります。

本会の特質 本五〇三 四 修養団捧誠会は、天地自然の法則のよって生ずる太極を神として崇敬しております。

太極を拝するという根本は、本会の特質です。

本会の方針 本五〇四 一四 今後の「本会の方針」としては、神の子の自覚と身の借りものを理解して、たとえどんな苦難の道があつても、これを持ちこえていかれるだけの身心を養っていくことではありません。

本会の目的と目標 本四八 一七 本会の趣旨は万霊万物尊愛の理を悟り、世界の平和を建設することを目標とし、目的として、これを万人に宣布普及することに懸命に努力することを誓い、修養実践しているのであります。

煩惱 本三六 一一 二 煩惱を断つためには、先ずもつて善行を積み重ねてゆかなければなりません。

本番としての誓い 本五三 六 五 助けたまえと拝みきとうして自分を改めることもせず、我執貪欲でいるような根性で、物だ金だ名譽だ権力だ、と悩み苦しむようであつては、本年からの「本番としての誓い」にそつているとは申せません。本会の会員となつて勉強していくには、一步一步進行してゆかなくてはなりません。お互いに団結協力融和して悠久なる魂を磨き浄めてゆかなくてはなりません。足らざるところを改めて実行とおこないをしてゆかなくてはなりません。あやまちは誰にもある。ただすまんすまんと口先で言うのみでなく、あやまちを起した心の持ち方使い方を真剣にみなおし、改めてゆくだけの実践をしてゆくことをお誓いすることをお誓いしてお話しさせていただきます。

本部 本四三 七 三 本部には靈光がみちあふれている。

本部 本四四 一一 一二三 本部は、教祖がいのちの親の啓示をいただき、これを万人にお伝えする場所であり、すなわち教祖が太極とじきじき交流する場所なのであります。この意味において至る所、みおしえの存在する所、すなわち本部であり、本部すなわち太極なのであります。

本部建設 振 四四 一 二

本年（昭和四十四年）から全国の会員が神木は親睦なりとのことたまによって、本部建設に邁進することは会員の子孫が繁栄すると同時に国に報い親に報いる事なのであります。

本部建設 振 四四 一 六

本年から（昭和四十四年）本部建設する事は、会員一人一人の子孫の繁栄のためであり、現在知らず知らず積み重なった天借、先祖からの不徳、忘れていた人への御恩返し、国民の繁栄と四合せの確立即ち大極に基づき祖国日本を建設すると同時に、悠久なる平和世界の顕現に邁進してゆく事なのでありまして、単なる捧誠会の発展のみではありません。世界の人類の平和のためでありましょう。

本部建設 振 四四 五 二

建物にこだわって、本部の建物を建設することと思ひ、又本部と云う言葉から、憲法上の本部所在の建物と想う人もありますが、そうゆう事にこだわらず、広く建物にこだわらず会長を中心に、本部が責任を持つて行なう建設であります。必ずしも本部の法律上の所在の建物を定めるものではありません。

本部建設の基盤 振 四四 五 三

みしらせと教訓を頂いて、絶えずおさとしておりますように大御心に基づいて、みおしえ、教典、教義に従つて修養実践し、会員各自の身心の建設に精進する事が本部建設の基盤であります。

本部建設の根源 振 四四 一〇 一二

本部建設の根源は悠久なる平和世界の顕現に邁進してゆくこの根本である。

マの部

迷い児 振 三八 九 一三

天地自然の法則を信じない、信じようともしない。いいかえると、親を信じない。親を信じないから親のふところから出てしまう。天地自然の道を通らないで、我執貪欲の自分勝手な道を通る。こういう人を“迷い児”というのである。

迷い児 振 三八 九 一三

捧誠会の会員は、天稟の資質をもった親をもっている。決して“迷い児”になつては

迷い児

ふ三八九一三

ならない。

会社勤めを転々としている人は、人生に迷っているのである。一つの処に出入りしないであちらにも、こちらにも出入りする。迷い出て、迷い入る。どこに勤めても中途半端で大成せず、ついに六十年の人生、迷いのまま暮れてしまう。入った以上は信じて入りきらねばならない。

迷い子

ふ四二一三

親を見失い、親の手からはなれた子供を「迷い子」という。迷い子は雑踏の中の子供だけにいうのではない。老いて、よわい五十、六十を数えておつても、親の心を見失い、親の心からはなれてしまっている人は等しく「迷い子」である。

まいた種

ふ四一五

蒔いたる種は芽生え、花咲き実つてまいます。

まがこと

ふ三九九二四

云ったことが云った通り実現する。その言葉は「誠」である。云ったことが云った通りにならない。それは、その言葉が「誠」ではないからである。「まこと」でなくて、まことの中に「我」（が）入っている。即ち、「まがこと」である。

まごころ

ふ四四六六

見ること聞くことを、すべて「ええよう」に受取っていく、これがまごころである。

真心

ふ三七五

真心は素直であり、清らかな水のごとく美しいものであります。

真心

ふ四〇五二七

聞いてもらいたい、聞いてもらえないのが残念—というのは真心ではないでしょう。

「もらう」心を捨てなさい。あなたが、ご主人にあたえているというのは「つもり」だけであつて、本当は「もらう」ことだけを考えているでしょう。

真心

ふ四五二一一

「先生、どうか長生きしてください」という。「私がなくなればあなたが困るからそういうのだろう」とたずねると「はいそうです」と、泣いていた。（中略）親を思

う「ほんもの」の思い方ではありません。親の長生きを願うのは誰もがもつ真情である。それならば、教典、教義にもとづいて行いを実行することでありませぬ。（中略）

「先生がなくなれば、その後を堂々とやります」という心がまえ、これが会員のみなさんのま心である。

真心

ふ四七四二二

ま心は年令ではない。力持ちとかそして車をひくとか、になうとか、そういう荷物を

真心 三三四 一一一 一六七

持つことは八十になったおばあちゃんはできない。それは若い者ではなくてはなりません。なれどもま心という心は老いも若きも区別がない。

真心は、地に伏せこんである宝のようなもので、目には見えません。目に見えないものを尊び信ずる心こそ素直であり、美しい清らかな心なのです。真心の心に近づくように努力してこそ、真の幸福となります。(三月二一日)

真心 三三四 一一一 一八二

一口に真心と教え伝えておりますが、真心とは限りの無い日月のように広く正しく強く、且つ体温のように暖かい無限の愛情であります。(中略) また限りない水のようにはあらゆる汚物を浄化して万物を生かしていきます。(三月二九日)

真心 三三四 一一一 二五

素直な心は真心であり、真心は神の御心であり、すめら皇国の尊い国に生まれた人として又神の子として素直なやさしい、美しい、清らかな心の持ち主でなければならず、このような人こそ如何なる人にも感謝され、尊敬されて生かされて参ります。

真心 三三四 一一一 六一

真心はうちわから出てくる。外からくるものではない。うちわの中からの感謝が無ければ真心は出てこない。内輪同志が相協力し感謝ができると真心も出てくる。

真心 三三四 一一一 五二

真心と親切とは違う。親切とは人として、意を用い行うことであり、真心は神のみ教えを信じ行うことである。親切とは、人としてのご恩返しにすぎぬ。これは私の意を用いたものである。故に親切でなす程度のもは不平不満が出る。真心とは、神の心であって相手の出方がどうであろうと、不平不満は絶対にはずである。

真心で指導に従う 三三四 一一一 二五

真心を持つて指導に従えとは、己の精神にきけよ、古き人がよく良心に手を当てて考えなさい、と教えてありますが、その通りであります。

真心をもつてその指導にしたがう 三三四 一一一 一八五

真心をもつてその指導にしたがうとは「己の精神にきけよ」ということで、古人が「よく良心に手をあてて考えよ」といった言葉と同じである。またつねに捧誠のみ教えを自己の魂に刻み込んでおかねばならぬ。み教えを体得して肉や血にせねばならぬ。これすなわち真心を持つて指導に従うということである。

誠 三三四 一一一 一六

松も杉も草も、ありのままに伸びている。ありのままの姿が「誠」である。

誠 四一 四三 実行して心に財産をたくわえるのは誠であります。

誠 四四 一〇 むずかしいことを、なに心なくやさしくおこなう、それが「誠」であろう。

誠 四五 七九 誠の業を喜びはげむのに、このような遠慮はいらない。(中略) 人のかおいろを伺わずに勇往邁進するのが誠である。

誠 四七 一四 また一般人は舞をする時に使いますのが扇であります。風を呼び起しますから扇とも申すのでしょうか。その扇の要がはずれますと、骨はバラバラになってしまいますよ
うに、人においても肝心かなめは生命であります。誠であります。

誠 四八 一五 (誠は天を貫く、誠は地球を貫く、天壤無窮)であります。まさに地球の回転は無窮
であります。

誠 五〇 一一 やつてみようか、ではありません。してみようか、ではありません。やります！とい
う信念、これを誠というのであります。

誠 五〇 一一 誠の精神は天に通う。

誠 五〇 一一 人は、誠の精神の究極にまで容易に到達できませんが、一生懸命は文字通り一生いの
ちをかける行為であります。身も心も捧げなくてはできるものではありません

誠 五二 九四 自然の法律に基づいて迷わずに進んでゆく所に誠があるのであります。風が西から吹
くと雲は東に流れる。決して風に逆らおうとはしません。風が出て、雲が流れる。春
夏秋冬あつて地球上の季節は移ろうてまいります。(中略) 前進こそ自然の姿で
あります。

誠 五二 一三 たとえ何病といわれても、明日死ぬと言われても、有難うと感謝の心を持ってこそ誠
である。

誠 五三 一九

本会の趣旨たる誠も、北辰星の如く、動揺転倒しない精神を養うところにあります。
動揺転倒しない精神によつて、卑俗なる奇蹟を否定し、どこまでも悠久なる魂の絶対
性をもつて、北辰星のごとく信念を養つてゆくことが必要であります。北辰星は、数
多くの星の中でとくに、すべての船や飛行機が自分の位置を正確に知り、航路を正し

誠 四〇 一一 一一三

くするための目標になっております。まことの精神です。本会の趣旨たる誠も、北辰星の如く、動揺転倒しない精神を養うところにあります。動揺転倒しない精神によって、卑俗なる奇蹟を否定し、どこまでも悠久なる魂の絶対性をもって、北辰星のごとく信念を養ってゆくことが必要であります。空においては北辰星、地にあつては悠久世界平和郷・神里であります。

神とは、大極を根とした普遍の霊であります。誠も全知全能であります。その高さも幅も深さも、尺度では計りきれません。(一月二日)

誠は天の道で無限であります。これ即ち神とも称し、仏とも教えられて居ります。(二月八日)

誠は天の道、これを行うのは人の道であることを自覚せねばなりません。(三月六日)

万物是誠であります。誠を換言すれば神であり仏であります。(七月二六日)

誠の心には裏も表もありません。水にも火にも風にも裏表は絶対がありません。水は智慧であり、火は愛情であり、風は元氣であります。

終始一貫、変らざるが「まこと」である。「誠」は不変である。いかなる環境におかれても負けずに勝ちぬいていくのが「まこと」の姿である。

万物これ誠なり、と悟りがひらめいた。地上の万物は人も動物も植物も、すべて同じ一つの空気を吸い合い、同じ太陽の光と熱とを分け合って生かされている。天地の恩恵に浴して「いのち」を与えられていることにおいて万物これで一である。「いのち」に差別はない。誠をもってすれば誠は必ず通う。それは「いのち」が一つにつながっている故である。

万物はありのままの姿で、ありのままに伸びて、ありのままに位して人のお役に立っている。ありのままの姿がまことである。

本会の綱領第十条に「心に迷いあるときはただちに長上の教えを受け」と教えてありますとおり、天の啓示は長上の教えであります。人は目上の人を「長上」と言ったり

誠 敬 四二 一二 二八一

誠 振 四三 一 三

知らないものは知らないんだ、わからない事を疑ると云う事は、それは当たり前前的事だと理論的に申しませんが、わからない事でも、自分が経験しない事でも、真実を語られた時には、真実にそれを受取るという心こそ又まことなのであります。

誠 誠 四八 一二 一一〇

国のため世のためにやったことは決して無駄になりません。犠牲になった、損をしたとくやむことは、さらにありません。いずれかの日に、尊い姿として、物として、名誉として、さずかってくる。これを「誠」という。

誠 誠 四八 一二 一八七

「大平和敬神」の神石を完成したい一心であります。この一心これは誠であります。この誠、この至誠はかならず天に通じるにちがいありません。

誠 導 三四 一〇 一八八

洋服一枚でも愛するという処に誠というものがある。そこに親切、真がつく、誠は真でありますから、真から湧き出ずる処の働きでなければなりません。

誠 命 四八 一二 八九

誠を捧げてゆかれる姿こそ徳である。感謝して実行できる人、お蔭さまで丈夫で働ける、四合せである、もったいない、と思われる人こそ徳のある人だ。

誠 命 四八 一二 一三三

神心にこそ神に通じる誠があるのではないかと思う。誠は天の道であり、神の道である。誠の中には反省・感謝・実行が貯えられているはずだ。これを表に現わして実行せねばならぬ。

誠 誠 捧 げ る 命 四八 一二 二四六

誠捧げるとは、我執貪欲を取り去り、忠実に努力することでありますが、嘘やお世辞

誠 誠 捧 げ る 命 四八 一二 二四六

の中には、生花と同じように根がありませんからその場限りであります。(二月三日)

誠 誠 捧 げ る 命 四八 一二 二四六

たとえば、自分が覚えていない幼少の時の話しを親から聞かされて、そんな事あるも

誠の愛

ふ 五一 一二 二二

んか、と頭からきめてしまうような心は、冷たくて淋しい心ではないでしょうか。そうですね、そんなにして下さったのですかと受取る心は、誠に近づく心なのであります。ドロボウが入った場合、「何をしにおいてになりましたか、ご用がありましたなら、明日あかるい時においでください」と言えるようにならなければいけない。それが誠の愛です。

誠の愛

告 二四 二二

捧誠感謝である。

誠の愛

告 二四 二八

感情的に支配されるものでなく、相信じて努力をなした事が不利な結果になった場合でも誠の感謝が心に湧き出るのが誠の愛であります。誠の愛を益々發揮していきがいのある生活を成し遂げることによって人と生まれた尊さがあるのであります。

誠の交流

ふ 三八 五 一六

「まこと」の交流を行っていると、必要な時に必要なだけ、物も金も人もささずかる。また、こういう心の持ち方を「気愛」というのである。

誠の交流

ふ 四四 七 一一

忙しい家をたずねたときには、すっすさつさと手伝ってあげる。そうして、また、さつさと帰る。これが誠の交流である。

まことの心

ふ 五〇 三 二二

太極を神として崇敬する心はまことの心であり、拝することはまことの業であり、すなわち無条件であります。

誠の心

ふ 四五 一〇 二〇

この肉体をかしていただいてもつたいなかつた、よろこんでお返しします、とお返しのできる心構えこそ、まことの心と教えてあるのであります。

誠の心

ふ 四八 二 一〇

みなさんが毎日いただいているあのご飯をもう五十年もたべているから飽きてしまつた、きらいになつたという人は少ないでしょう。神のみ声も、人の体験した尊い言葉も、同じことをなん回きかしていただいても、感謝でうける心こそ誠の心であります。

誠の心

み 三四 一二 三八二

眞実、誠の心は無条件であり、無条件でありますから、(中略)人の心の中が如何に動いているか肉眼では分からない様に、神仏の慈悲、父母の温情は、言葉や筆に表すことは出来ません。計り切れないものであります。(七月三日)

誠の心

告 二四 二七

心が迷い迷いの心が湧き出る時は己の徳の足らざる証拠であります、自然の景色を見

誠の心 導 三四 一〇 二三

て、自然の尊い理の話しを聞いて不愉快の心になる人は一人もいないとおもいます。「ああいいな」とおもわれる心こそ清らかな美しい無条件の誠の心であります。低いやさしい心は誠の心でありこの心を養う為にそうして太らせ成長させて行かれるように心掛けなければなりません。

誠の心 命 四八 一二 八二

誠の心には裏も表もない。水にも火にも風にも裏表は絶対がない。水は智慧であり、火は愛情であり、風は元気である。(中略) 艱難辛苦の場合に不平不満や憤がい、疑い、妬み、恨み、嫉みが湧き出るのである。

誠の心にはこのような不浄の心は無い。いかなる苦勞艱難があっても、誠心で各人の任務を実行すればおのずから幸福になれるのである。

誠の心 命 四八 一二 八八

変らぬ心は誠の心である。金、食事などを与えられれば働くというのは、物と物との送り合いである。恩の送り合いにしても、恩になった人にはよく勤めるが、恩にならぬ人にはみむきもしないという風ではよくない。待遇が悪いから働かぬというのは誠の心ではない。

誠の心 命 四八 一二 二〇一

自然の景色を見、自然の尊い理の話聞いて、不愉快な心になる人は一人もないと思う。「ああいいな」と思われる心こそ、清らかな美しい無条件の誠の心である。

誠の熱 命 四八 一二 九

一寸したこと、すぐカツとなる。上に燃える。これは誠の熱でなく、感情の熱である。誠の熱は上へ燃え上がらず下へ下へと下がる。根を張る。根が強くなるから、どんな嵐に会っても倒れず、勝ちぬいていく。

誠の光 命 四八 一二 一九八

誠のあるところ、かならず誠の光がある。一寸先は闇というのは誠の光が消えているのだ。我執我欲の人は心も暗く、周囲までも暗くする。誠の光によってわれも人も明るく、将来に現われるという原水爆の被害をもさけてゆくようにせねばならぬ。

誠の道 命 四八 一二 七

神法十には、自分が広く温かい心を持つだけでなく、人も持ち使うように…と教えられている。自分一人だけでなく、人も亦そうするよう努力していく。これが「誠の道」である。

誠の道 　　ふ 四二 二 八

自然の法則を守り、自然の活動を手本として活動するところに誠の道が開かれ、成人への向上となるのであります。

誠の道 　　ふ 四九 八 九

誠の道にウソはありません。(中略) いまや生きるための狂乱のときであります。いずれ天の法則によつて裁きがあるでしょう。

誠の道 　　み 三四 一二 四

人の道は万人知る所でありませんが、誠の道、この道を神の道と信じていることでもあります。(一月二日)

誠の道 　　み 三四 一二 五八九

誠の道とは両輪でなければなりません。一人のみが和であっても相手が和でなければ誠の道を踏み行ふとは申されません。(十月十一日)

誠の道 　　み 三四 一二 七三七

誠の道は神の道であり、人の道は交換条件であつて、教理によつて交流するのであります。(十二月二二日)

誠の道 　　命 四八 一一 一九八

協力、合掌は平和である。誠の姿である。誠の道を進みゆけば、病める心も健やかとなり、日々なすことがみな幸となるのである。

誠の業 　　ふ 三八 一一 二二二

夫の寝ているまくら元に端座し、合掌して今日一日の無事と働きとにお礼をしている妻が何人いるかと考えることがある。(中略) 私は常日頃から「まことの業にはげむよう…」に教えている。(中略) 私は副総裁の枕元で幾たび合掌したか知れぬ。

誠の業 　　ふ 三九 一 一九九

(昭和二十二年頃高崎駅で、お子さまをつれたご婦人との出来事から) 相手がどうであろうと、最後の最後まで努力する。これが、「誠の業」である。中途であいそをつか

誠の業 　　ふ 五二 六 三

して匙を投げてしまえば、結論は出ない。不愉快な思い出だけが残る。善と悪との見定めをして進むことが誠の業であります。自分だけが我が意を用いてや

誠の業 　　み 三四 一二 一七

っておりますと、誤解される。誤解されても腹を立てず、今に分つていただければよいという太っ腹になればよいが、なかなかそこまで練れておりません。

誠の業 　　み 三四 一二 一七

お役に立つように肉体も物も使われてこそ、誠の業ともなり、幸福になるのであります。(一月八日)

誠の業 　　み 三四 一二 六四一

人も天地の理法に基づいて実行することを誠の業と教えられ、尚神の道を踏み行ふこ

誠の業

誠 四八 一一 四九

とは人として大なる責任であることを教え示されております。(十一月五日)
 捧誠感謝の心をもってするわざ——これが誠の業。ここには不平不満はない。給料が
 すくない、待遇がわるい、だから仕事に熱がはいらない、働く気になれない。なれど
 も、給料ほしいから、万やむをえずにやる。このように、心の中に不平不満、怒り、
 ねたみ、といった患らいをもってする業(わざ)は、誠の業とはいえませんが、
 得ず身体を動かしている。やむを得ず、手足や目や耳が動いている。誠の業——は、
 ここから、ほほえみながら仕事に邁進する。仕える事に送迎する。これは誠であり、
 慎であります。

誠の業

誠 四八 一一 六一

「無理」という文字には「利」がない。利のないところに誠がある。すなわち、無条
 件であります。無条件には利がない。「空」である。「無」である。そこに「理」が
 ある。無の中に「利」(理)がある。というのが、誠のわざの本質であります。

誠の業

誠 四八 一一 六四

一粒の米、一滴の水にも、ほほえみながら、仕えていく。これが誠のわざ、でありま
 す。ですから、誠のわざを行なうのは、日常のくらしの中に、かぞえきれぬほどある
 のであります。

誠の業

誠 四八 一一 七一

真実、誠の人を誘惑するのは、容易ならざることであって、これはできません。それ
 ですから、誘惑しないように、されないように努力をし、その志をもって常に心を養
 なっていくことが、また、神の子としての私たちの責任であります。公共心でもあり
 ます。そうしていけば、心が神慮に合一しておりますから誘惑されることも、するこ
 ともなく、正々堂々と天地に誓っていける。これを「誠の業」と、おさとしてあり
 ます。

誠の業

命 四八 一一 七六

子の不始末は、この親を咎めてくれとの意であるが、ここに責任、即ち誠の業がある
 のである。たがいに責任を果してこそ、誠の業を喜び励む尊さがあるのだ。

誠一つ

ふ 四三 九 六

今日は雨、明日は晴れ。空は刻々に移り変わって果てしない。変わってくる環境に心
 を迷わず、誠一つでつきすむ。これが「かんにん」である。人は病んでまい、事

業につまづいて迷う。しかし悟ってしまえば全てが一つの変化であって、変化そのものに善悪はない。

教える人が、教わる人の心の動きにそうように、また教わる人は、教える人の言葉をまごころで聞く、この合掌が、誠を捧げることなのであります。

誠をささげる

ふ 五〇 五 六

誠を捧げる

ふ 三九 二 二〇

「まことをささげる」のは、神だけがその対象ではない。万物に感謝の誠を捧げよと教えてある。(中略) そこに心と心が通じ合う平和な姿が現出する。

誠を捧げる

ふ 五六 七 二一

どこに誠を捧げるのかというと、いのちの親に捧げる、神の子に捧げる。悩み苦しむ人に徳と力と愛を捧げる。

誠を捧げる

ふ 五七 二 五

誠を捧げるということは、我執を離れ、小さな己へのこだわりを超越しなければできないものではない。純真無垢と申しましようか、神の子の自覚をしっかりと胸に抱いて進まなくてはならないのであります。

まじめな人

命 四八 一二 一七五

武夫(ますらお)

ふ 四二 八 一〇

「勝つも負けるも武夫(ますらお)の知恵」を示してありますが、武夫という言葉は、「もろとも」であって、国民もろとも知恵のちからによって勝負がつくのであります。

間違い

ふ 三九 四 一六

待った

ふ 四九 四 一二

聞き違い、取り違い、思い違いをし、最後が「間違い」となる。人生行路において「待ってくれ」というのは、よくないことだ。ものごとは時期を一年おくらせれば三年待つことになる。待ったをかけていると、家庭でも職場でも邪魔者が入って混乱をひきおこすことになる。

祭り

み 三四 一二 一三二

昔も今も祭り事は、飲む、食べる、遊ぶことでなく、尊い教訓であります。人と人が和合し、幸福を産み出し、国家も社会も家庭も円満に生活が出来るように、協力することが祭り事なのであります。(三月三日)

祭りごと

ふ 四八 五 四

まないた

ふ 四四 四 九

祭りごとは政治であり、誠の業であり、誠の道であり、徳と力と愛なのであります。

——— どうだい教えた通りにやっているかね。(中略) どうだいという言葉、これは

「土台」である。みおしえによって行なうこと、実行すること、これが平和建設の「土台」である。これをまた「俎」（まないた）という。

「どうだい」というのは、また「大道」である。この大道は世界平和への大道である。まないた——とは、まことの道をふみ行うことであり、また、みずから橋になって人を渡す。

俎は料理の台であります。魚も野菜も、すべての料理の材料は俎の上で切りきざまれます。自らは満身傷だらけになって人を喜ばせる。人の喜びのために自らは黙々とその台になる。これこそ平和の土台でなくてなんでありましょう。

天地自然の法則を「守る」から全てから守られるのである。人の道でも、あげるから貫える。乞食はもらいたいだけの生き方ではあるけれども、それでも頭を下げている。あげもしないのに、もらえる訳はない。愛するから愛される。侮辱するから侮辱される。——上げたりもらったり——この真理に添うた交流、これが「ことたまのまにまに……」というのである。

親に近づく。近づいて、親の教えを守る。また、天地自然の法則を守る。人の道の法則を守る。守ることによって幸福も知る、仕合せも生まれてくる。守ることは清らかな心をもたらず。清らかな心は健全な日常生活に導く。邪念がない。（中略）神の子に諭されていることは、年令男女を問わずに守らねばなりません。その修行をしているのであります。

守るといふ文字は、𠂔（うかんむり）に、中に十を書いて、𠂔（てん）を打つのであります。うかんむりは家であり、十は神、𠂔（てん）は言霊による天であります。神を敬い、天則に従って、家も職場も社会も国家も、秩序が保たれてゆく、そこに、しあわせがあり、幸福があるというよう真理が、守るといふ文字によって示されております。

天地自然の法則をまもらなくちゃ。いくら信じて、守っていないくは何にもならない。

まないた

ふ 四四 四 九

まないた

太 四四 一一 五五

守る

ふ 三九 一一 一六

守る

ふ 五二 四 五

守る

ふ 五三 二 二

守る

ふ 五六 八 三二

迷い 四〇 八 一四

い。守るといふ字は「かみ」とも読む。神の心に近づくんだから、神人合一ですから。神の愛は無限であり、不変である。神の愛を信じないで不浄の愛を信じるから争いとなる。いいかえれば、みおしえを信じないで、人の話し（雑音）を信じるから迷いが生じ、そこに思わぬ争いの種をまくことになる。

迷い 四一 六 七
「心」に迷いがあつては、たとえ肉体が動いておつても、その動きは無駄になる。（中略）「心」に迷いがあれば真もウソにしか受け取れない。反対に迷信も真に受けとる。迷っているのは、心の中が暗やみになっているのだから、そこに灯をつけてあげる。

迷い 四四 二 二六
大切なときに「迷い」が生じてくるというのも、すべて過去世の心の種ゆえである。我執も貪欲も、もとを正せば、俺のもの私のものというとらわれから発しているのがあります。借り物をわが物なりと思う取り違い、また、魂という与えられた物を、わが物として浄め磨こうとしない取り違い、この二重の取り違いをしているから、人の

迷い 四五 一〇 一五
心は迷うのであります。人の心は迷つてくると、月日が悪い、方向が悪いと日月のせいにし、親から頂いた名前のせいにし、その他、色々な迷信に陥りやすいのであります。

迷い 四六 一四
人の心にはどんな人でも迷いが生じてまいります。それは我執と貪欲があるからであります。（四月一日）

迷い 四七 一八 四九
一筋にしか考えられない精神を、地上の形の道路と同じように、千筋万筋に考えるから迷うのであります。

迷い 四八 一〇 四
迷いの時は闇ですから先がわからない。暗闇、やみ患い、精神的の悩み、わずらい。肉体的のわずらい。心を肉体が絶えず悩みを重ねてゆく。そして悩みの時には益々先がわからなくなる。

迷い 四九 一一 六一
これほど、まじめに働いているのに、なぜ不幸がつづくのだろう。自分はなんという不運な男であろう……。と、なげくのは当然であります。この迷いというのは、自分の知識と感情とによる迷いでありませぬ。

迷い 五〇 一二 八一
「よし、迷うものか」と決めておつても、この世は一人の世ではありません。迷う人

も迷わせる人も、殺す人も殺される人も、売る人も、買う人もある世の中です。すなわち、すべて相手があるのです。一人の手ではありません。「あいの手」があつて、「あいのよさ」があつて、きまりであります。ですから「迷い」は、つきることなく存在しているのであります。

この「迷い」を打破するには、どうすればよいか。そういう時には、どうすればよいか。そういう時には、誠のわざを喜びはげみなさい。おのれを虚うして徳をつみ徳をおよぼしなさい。そうしていけば、その功德によつて迷いの心は浄化されていくのだと教え、みちびいております。

おたがい私たちは、言語動作が天地自然の法則にかなっておりません。「交通違反」という言葉をよく申しておりますが、私自身も、交通違反に気づかずにおる場合がたくさんあります。違反を起すと「迷い」の道につながってくる。どうしたらいいだろう、なにかうまいことはないかと、迷いの心に利子がついて大きくなる。

心の迷いは心の濁つたとき。心に汚物がたまつたら捧誠感謝の自覚をなさい。感謝によつて浄化されるのであります。

むら雲は迷であり、太陽の光は熱であり感謝である。迷いの心の起きるのは感謝の心がたらぬ証拠である。感謝の心を持てば雲、すなわち迷いを払うことができるのである。(中略) 迷いの心は雲であり、曇り、闇、となりやがて病みわずらいとなる。

闇取引とは迷い心の交渉であり、両方とも不徳である。感謝ができず迷う人も不徳であるが、迷わすようなことをした人も、また不徳である。

心が迷い、迷いの心が湧き出るのは、己の徳の足らぬ証拠である。

如何に生存競争と雖も神の子である事を自覚して、天地自然の法則を学び修めて、捧誠の「みおしえ」に基いて行動するならば、迷いを取り去ることは確実であります。

その迷いを打破するにはどうしたらいいか。そういうときに誠の業を喜び励みなさい。己れを虚うして徳を積み及ぼしてゆけば、その迷わせるその人も、悩みの心も、その

迷い 誠 四八 一二 一八二

迷い 誠 四八 一二 一八八

迷い 誠 四八 一二 一八九

迷い 命 四八 一二 六三

迷い 命 四八 一二 二〇一

迷いの解消 解 二八 二四

迷いを打破する 命 四八 一二 二〇一

ふ 四五 一一 七

迷う 〇四六 四 四

迷う 命四八 一二 五九

満州 訓一九 一二 三

満心 〇三四 一二 一九二

満足 敬四二 一二 九九

万人が真に虚心坦懐 〇三五 七 六

満足 導三四 一〇 三

満心 〇三四 一二 一九二

満足 敬四二 一二 九九

万人が真に虚心坦懐 〇三五 七 六

満足 導三四 一〇 三

満心 〇三四 一二 一九二

満足 敬四二 一二 九九

万人が真に虚心坦懐 〇三五 七 六

満足 導三四 一〇 三

満心 〇三四 一二 一九二

満足 敬四二 一二 九九

万人が真に虚心坦懐 〇三五 七 六

満足 導三四 一〇 三

満心 〇三四 一二 一九二

満足 敬四二 一二 九九

万人が真に虚心坦懐 〇三五 七 六

満足 導三四 一〇 三

ニの部

三の部

功績によつてかならずや浄化してゆくんだということを教え導いておられます。こころが迷いますと、なにもかもいそぎます。

人を疑う心は一番下等で役に立たぬ心である。疑えばかならず迷う。迷うことは心の闇である。疑いの心を持たぬようにするのが修養上重要なことである。

満州事変から大東亜戦争を生み出した事になるのですが、「満」は「よろず」であり「洲」は滅私であります。英米撃滅する事は、よろずの国を指導する意味に於いて滅私奉公でなくてはなりません。是即ち勢一杯と云う発音につながります。

人にほめられ油断をすれば、慢心の心が湧き出て、正しい道もふみ外すことが多い。(四月二日)

「終生の奉仕」が神の子のつとめでしょう。奉仕することになれば二足どころか、五足でも六足でも、いくらはいても十分ではありません。万足のわらじをはいて歩いて初めて人に満足を与えることができます。人さまに満足をさしあげる、これが奉仕ではありませんか。

十分になるのを満足と申します。万の草履をはきつくしてこそ人格の完成が出来るのであります。

万人とはよろづの人であります。世界の神の子であります。

みおしえは天の啓示として教祖の責任と立場とを以つて会員におとりつぎをしている。「みおしえ」は人間の予言ではない。見ぬき見とうしの命の親のお言葉である。だから必ずその通りになつてくる。

「みおしえ」は「身おしえ」であり「実おしえ」である。そしてこれは「親」の心で

みおしえ

みおしえ

みおしえ

みおしえ 四〇 五 二八

「みおしえ」は、この世はじめの根のようなもので、根を軽んじ根をないがしろに扱って、花咲き実る試しがない。

みおしえ 四一 六 三

私達は「絶対」を目標といたします。(中略) 「みおしえ」は不動でありますから、信じて従っていけるのであります。

みおしえ 四二 四 三

みおしえは、万物生成発展の生命の種・根・糧であります。万物が活かされ生成発展していく甘露であり、大恩であります。また、教祖が声無き声を聞き、音に現わした生命の種・根・糧であります。

みおしえ 四二 四 三

「みおしえ」は、いのちの親のみ心は永劫不変でありますから、みおしえも亦永劫不変であります。

みおしえ 四二 四 四

万物生成発展の生命の種・根・糧としての「みおしえ」の神髄は、どうすれば悟れるか。それには、「捧誠感謝の自覚」と「神の子の自覚」と「活かされていることの自覚」と―この三つの自覚が確立したときに、おのずから無限無窮の「みおしえ」を心の底から信じたこととなります。

みおしえ 四二 四 五

いのちの親のみこころが教祖に直通してしめされたものが「みおしえ」、次に教祖の心を通じて表された言葉が「教典」、総裁の心を通じて表されたものが「教義」と、いつも申し上げます。

みおしえ 四五 八 一六

みおしえは親のみ心、大極のひびきであつて「声なき声」であります

みおしえ 四六 二 一九

「みおしえ」は世界人類のもの。

みおしえ 四六 五 二二

みおしえとは、太極の響きでありまして、また太極の甘露であります。

みおしえ 四六 一 七

声なき声、太極のひびきはみおしえであり、これをお取りつきする時は命がけであります。いいとか、悪いとか、なん回も考え直し、工夫体得して教え導くものではありません。こうしなさい、あししなさいと、瞬間、実行を示すものですから、驚く人、恐れる人もあり、百人入会して五十人が去ってゆくということもあり、また、感涙にむ

みおしえ ふ 四八 二 三

せんで実行し、行なう人も数多いのであります。
修養団捧誠会のみおしえは太極の響き、声なき声を万霊万物にお取次ぎする使命をもつ源であります。

みおしえ ふ 四八 二 一〇

みおしえは天の声であり、無限の財産であり、不滅の灯であります。朝は愛であり、昼は力であり、夜は徳であります。

みおしえ ふ 四九 二 七

教祖は、地球上の音によつて、太極の響きによつて、その音をききわけて、それを「みおしえ」として神の子におとりつぎしております。

みおしえ ふ 五一 三 六

みおしえは魂を肥らせる肥料であります。
教祖としての心構えと責任をもつて言霊を出した一音一音は「みおしえ」であること

みおしえ ふ 五一 四 二

を信じて聞き修める人が少ない。みおしえといえは、五七五七七と和歌の形式と七五調の漢詩の形式の言葉が合掌した文字と発音のみをみおしえと思つている人が多いようであります。

みおしえ ふ 五一 五 二

みおしえは天の声であると示されております。

みおしえ ふ 五二 七 四

みおしえはみのおしえであり、身につけるものであります。人に向けるものではありません。

みおしえ ふ 五二 一 一

みおしえは万物生成発展の生命の種・根・糧であります。万物が活かされ生成発展していく甘露であり、大恩であります。また教祖が声なき声を聞き、音に現わした生命の種・根・糧であります。言葉は音であり恩であり声であり肥であります。(裏表紙)

みおしえ ふ 五五 一 一二

大極の響きをみおしえと称し、その意義を学び修めて無条件実行することが私たちの使命であります。

みおしえ み 三四 一二 七四一

神仏の教えられるみ教えは何時の世も変わることも無く、誠の教えであり、天理なのであります。(十二月二四日)

みおしえ 敬 四二 一二 九三

神は万物普遍の霊でありますから、火・水・風にも万物にも霊があり、声があります。この「声」すなわち「音」は「温」であり「恩」です。万物の発する音はすべてこれ

みおしえ 敬 四二 一一 九五

「言霊」であって、この「言霊」が「みおしえ」です。
「みおしえ」は捧誠会だけに流されているものではなく、万人に流されるものです。ですから教祖として「国民に告ぐ」とも「万人に告ぐ」とも申しております。

みおしえ 振 四三 九 四

みおしえと云うものは、身の教えである。わが身につけるものである。人に向けるものではない。みんなわが事と受け取って、自分の身につけて、一つ一つ生活に織り込んで、楽しく、健康で、元気に、この人生を乗りこえていかなければならないのであります。

みおしえ 誠 四八 一一 二〇

「みおしえ」という言霊は「身の教え」と文字に現わしております。「みおしえ」は「身の教え」であって、これは、心と体であります。心は種であって体は物である。肉体は借りもので一代でありますから、お返ししなければならぬ。霊魂は永久であって、これは尽きることのない存在であります。そして「みおしえ」は、この大宇宙に存在する甘露であって、この甘露はまた、私たちの肉体に存在し、この肉体を造っている。

みおしえ 太 四四 一一 一三八

「みおしえ」とは、幾千年の後までも光り輝く経（すじみち）である」と言っております。すように、この経（すじみち―天地自然の筋道）を説くのが説経であります。説経であって説教ではありません。筋道を説くのでありますから字句の解説ではありません。また、その意味の説明でもありません。私はこれを味わっていきたいと思っております。「味講」といたしました。

みおしえ 導 三四 一〇 一五五

無極から大極を通じて現われてくる所の、清い正しい、美しい、にぎりのない言葉であります。美しい言葉を、知らずしらずに、汚して人に伝える事は、不徳の至りであります。如何に努力をしているようでも、美しい言葉を、我意を用いてにごして伝える事は、徳を積み、徳を流しているようでも、大きな不徳をつんでおりますから、かような人は、不徳の者として、裁きを受けます。

みおしえ 命 四八 一一 一〇五

親子、はらから、うから、やから協力して、相互の理解につとめねばならぬ。要する

みおしえ 命 四八 一一 一七九

にみ教えはみずからおさめ行うべきものである。無理に人に行わせるべきものではない。み教えは無極から太極を悟り、太極を法則とし、神法として守り行っている。時代により国の法則の変ることはあるが、神の法則は変らぬ。誠は天の道、これを行うは人の道といわれるところの誠の道は、永劫に変らない。

みおしえ 命 四八 一一 一九〇

神の啓示として享受した誓の詞並に綱領は捧誠会教義の根本であるがこれを人にむけて読めよとは教えてないはずである。このみ教えを自らの心の糧として各人が自分読みきかせ実行すべきである。

みおしえ 命 四八 一一 一九八

み教えには、先の先までのことが教えてある。二十年の後に救われるように徳を積まねばならぬ。一身一家だけを思い、物を貯えても貨幣も変り、価値も変る。子孫のため積むべきは徳の財産である。

みおしえ 命 四八 一一 二〇〇

み教えは、生れたままの丸裸の美しい気持と、和やかな心、大きな和で親しみ交し、徳を積み、徳を流して、安心して働き、生活してゆかれる教えであるのである。

みおしえ 命 四八 一一 二〇二

み教えは、天地自然の法則を本として自然の法則に違反せぬようにし、もし違反すれば直ちに反省し、感謝と実行によって、その犯罪を許していただくよう教えたり、教えられたりするのである。

みおしえ 命 四八 一一 二六三

み教えは魂の食糧である。現在、私たちには何が不足しているであろうか。物に関してはいろいろのものができ、あまり不自由を感じない。一番の不足は、何かといえど魂のご飯、魂の糧である。肉体の食糧はあっても魂の食糧が不足している。これをいただき、魂を肥らさねばならない。

みおしえ・とみしらせ 命 五一 一一 六

みおしえとみしらせは、文字も言霊も違いますが、二つで一つであります。呼吸も息通いでありまして、出すだけでいただくことがなければ、息づまるといふ言霊になります。

みおしえにつく 命 四一 一六 三

私に従いなさいとは申せません。私達の従っていけるのは「みおしえ」ただ一つであります。

みおしえにつながる 命 四八 一 四

みおしえにつながることは神の道であり、捧誠会につながることは、人の道である。両道につながり、学び修めて努力しなければなりません。

みおしえの根本 命 四八 一二 五九

みおしえの徳の光 命 四八 一二 五九

慢心せずいつも安らかな素直な心で感謝感激の気持を養うのがみ教えの根本である。自分さへ助けて頂ければよい、自分の家族さえ救って頂ければよいというような、貰いたい、欲しい、そういう気持だけで充滿している会員ですから、どんな指導を受けても、利益になる筈がない会員である。我執貪欲でみおしえに触れていたのでは、みおしえの徳の光に浴することはできません。この事は、日夜忘れてはなりません。この事は、親から子に、子から孫にとつないでゆかなくてはなりません。

みおしえの目標 命 四八 一二 五九

この地上に、太陽は一つ、月は一つである。世界三十億の人間にとつて、一つの太陽であり一つの月である。世界の人たちが、一つの心、―「まこと」―をささげていくならば、たとえ人種が異なっても、教養に差があっても、そこに美^{うつく}しい国造りがある筈である。捧誠会「みおしえ」の目標と根柢とはここにある。一つの希望一つの実行である。徳も力もないのに三つも四つも希望を持つから迷いが生じる。

みおしえを実行する 命 四八 一二 五九

み教えを実行する場合も、実ることをあせってはならぬ。いままでの不徳やその利息をお返しせねばならぬ人と、大して不徳のお返しが必要でない人とがある。実行して多大の徳をいただいても、それがこれまでの不徳の償いになっていることを悟らぬ人がある。

みおしえを伝える 命 四八 一二 五九

み教えは間違なく、狂いなく、人に伝えねばならない。いかに清い水も甕瓶で出せば呑む人はない。物を差しあげるにも、投げないで手渡してあげるようにしなければならぬ。それが真心である。み教えも心の扉を開いてからさしあげるようにしなければならぬ。

みおしえを通す 命 四八 一二 五九

みおしえを通すということは、神のみ心に通して、神人合一、無条件実行、これに尽きるのであります。

みおしえをにごす 命 四八 一二 五九

こうしなさいよと教えられたことを行なわなかったらどうなるか、ということは分か

みおしえをまもりつつ 三九 一一 三
親の心の「みおしえ」をそのまま行う、それが、ことたまのまにまに、みおしえを守りつつである。

みおや 四〇 六 三
「肉体」と「心」と「みおや」——この三つの原則を学び修めて頂きますことが、天地

みかがみ 四五 七 九
—み鏡が古くなりました。どうすればよろしいでしょうか。
—新しいのととりかえなさい。

—古いのをどうしましょう。

—本部へ収めなさい。

(中略) 古びてかがやきがなくなっても、生涯、まもりつつづけていかなければならぬように思いこんでいるから、新しくすることが悪いように定めている。

本部で「お受け」したのであるから、元の場所の本部へおさめるのが道である (中略) 元のところへ返す、これが自然の理である。

み鏡のお諭し 振 四二 二 五

一、御鏡を今日のおき日におさめるは うからやからの幸を示せり

二、御鏡を常に尊び愛するは 心修めるはじめなりけり

三、御鏡はあらゆる汚物浄化して 強く正しき道を示せり

四、御鏡は丸く正しく根強くて 慈愛のこもるしるしなりけり

五、御鏡は誠の道をよるこびて 神に仕えるしるしなりけり

六、御鏡はわが日の本の大和魂 丸く正しく徳を示せり

七、御鏡は神の御心現わして 己が心を磨くためなり

八、御鏡はこの世つくりし大神の まことの心教え示せり

み鏡の心 誠 四八 一二 一五四

み鏡の式典 振 四二 二 三

みかん 太 四四 一一 六八

ミキ(神酒) ふ 四四 四 八

幹 ふ 三七 一〇 三

右 ふ 三九 九 二五

右 誠 四六 六 一五五

見聞き み 三四 一二 二四〇

右と左 誠 四六 六 七五

九、御鏡は過去世の事がうつり来て 善きに悪しきに教え示せり
 十、御鏡は丸くやさしく美しく 平和の大道示すもとなり

あちら、こちらに足跡碑があり、また和石がありますが、世界平和の根源は、どこから見ても聞いても、「み鏡の心」である。それが、私たちの進んでいく目標である。このことを教えみちびいていく責任があります。

会員で「みかがみ」を頂いて、これを各自のご神前に奉祀する行事は式典である。それは支部長或は支部役員が指導して、導きの先輩、会員の方を招き、誓の詞、神法を拝読して、「みかがみのお諭し」を拝読し、神酒で乾杯をして、終りであります。

「みかん」の言霊は、「み」は万物の身であり、「かん」は神であります。

神酒は「みき」である。「みき」は「幹」であって、幹の働き根の働きあって、はじめて葉も茂り、花も咲き、実を結ぶ。花や実にのみ心をうばわれず、この根を見よという教訓であった。

幹とは元であり根であります。人にたとえれば、親であり祖先であります。

「右」―は過去のことを示す。だから「右の通り」と書く。

鼻は顔の中心になっており、二つの穴がついています。右の方に故障あれば「過去」のこと。左の方に故障あれば「将来」のことを教えられているのであります。これは鼻だけのことでなく、肉体すべてにおいてそうであります。左を患らえば、先き先きこうなってくるよ、と前知らせを教えてください、右を患らえば、過去のあやまちを教えてください、と前知らせを教えてください。

眼や耳を通じて心で見聞きするのでありますから、見たり聞いたりすることは各自の心が濁っている、響いてくるものが悪意になります。(四月二六日)

昔、右大臣、左大臣という官職がりましたが、左大臣が右大臣よりも上席であります。すべて「左」を「右」よりも重くするのであって、この肉体におきましても、やはり「左」の方に重みがあるのであります。「左」は目上である、また「将来」――

右眼の病い 誠 四六 六 六四

これから先きのことを示されるものであります。右の眼に故障がでてくるというのは、芽—眼をつぶしていくからであります。またつぶされていくからであります。どうか雨や風に不平不満をもたぬように心がけてください。雨風は万物が伸びていくための恩恵であります。

みごころ ふ 三九 六 三

「みごころ」というと普通には「御心」と解する人が多い。特に「いのりのことば」にある「おほみごころ」といえば「大御心」として天皇陛下の思召と解釈されやすいが、「みごころ」は「身、心」である。この思い違い、取り違なきよう、しっかりと見直して頂きたい。

身心 身心の養い ふ 四〇 六 二

身心（みごころ）、天地、陰陽—全て二つで一つであります。身は衣食住によって養われ、心は、本会の趣旨を信じて行いに表すことによって養われています。

みしらせ ふ 五三 一〇 三

みしらせと申しましても一様に悟れるものではないと申さず、二十のうち三つしか悟れないこともあります。すべてをみしらせとして学び修めることは、容易ではございません。たりないだらけのところを、懺悔して改めてゆくのが毎日でございます。みおしえ、身の教えという言霊でございます。

みしらせ ふ 五四 四 四

いのちの親は、自ら体験させるべく、誤り多い人生を自らみなおさせるべく、神の子たちにいろいろな試練を与えるのです。それによって、本人がみしらせだなと気づくのであります。本人が気づかなくては、みしらせとは申されません。

みしらせ ふ 五四 一〇 四

みしらせは、その当事者が、わが身に知らせてくれた事として、出来事を受取る所から、みしらせとして成立するのであります。みしらせは魂を浄めるために頂くのです。身にかかってくる病いを、みしらせと申します。魂が磨かれていないと色々なみしらせがある。それをみしらせとして、いのちの親が諭して下さっているんだと思えばよいのですが、とかく、文字通り病気になるって、気を病んでしまうのであります。心の中がくもっているからもつと磨け、思い違いをしているからもつと素直になれ、とい

みしらせ ふ 五五 四 四

みしらせ 五五七三

のちの親からみしらせを受ける。これは、大慈大悲であり、大恩であります。みしらせを頂くことは注意して頂くのでありますのに、ちようど、人から注意をされれば有難うと感謝をすればよいのに、お前だつてと反感を持つたり、不平不満を抱いたりするように、いのちの親にひたすら感謝の念を抱くことはできにくい。(中略) みしらせは、一番大切で、また、一番有難いものであります。みしらせの時は、感謝の誠を捧げて終生の奉仕に努力します。実行しますと誓ってゆくのが本会の趣旨であります。罪悪を起こすから法律によつて、それを戒める。また神の子であるから天地自然の法則によつて戒められる。それを「みしらせ」というてあります。天地自然の法則に反すれば、それはみしらせというてあります天変地変があります。

台風は誰も待たねど吹いてきて あらゆる汚物浄化するなり

これは天借を返すための「みしらせ」であります。

身しらせ 誠 四八 一二 一八四

この身体に教えられることは「身しらせ」と申します。病気とは申しません。いのちの親は、身に知らせて私たちを教えみちびかれるのであります。これをまた「教訓」とも教えられております。それによつて勉強せよということでもあります。

身知らせ 五 四五 四 一九

やるべきことをやらないでいると、親心で教えていただくのであります。ですから肉体の患いも、これは、叱つていただいでいることでもあります。

身知らせ 五 四五 一一 八

命の親が熱を出し、痛みを受けさせて諭される。この肉体に教えられることは身知らせといひます。病気とはいひません。命の親は身知らせとして、私たちに教えられております。また教訓として教えられております。

みしらせと教訓 五 五四 五 二

私たちは魂を頂いています。いのちを頂いています。また身体は拝借しています。こういう事を聞かされましても、本当にそうだと悟るまでは容易ではありません。学び修めている段階ですと、見たり聞いたりしたことを教訓として活かす事はできません。学びも、悟るまでには到達しません。借りものの身体にみしらせを頂く、自分や、また縁の深い人のみしらせによつて悟れるのであります。借りものの身体に、直接に起きて、

水 ふ 四六 一〇 一八

じかに体験した事は、見たり聞いたりした事よりもはるかに深いのであります。み
らせとは、自分の身に起きた事によって自分自信で悟ることを言うのであり、教訓と
は色々なでき事に触れて学び修めることであります。教訓とみらせとを混同しては
なりません。他人の事として見たり聞いたりすることが教訓です。教訓であっても、
それによって憤慨するような心であってはなりません。

水 ふ 四七 四 一六

水は切っても叩いてもなんらくずれない。いかに刃物で切ろうとしても切れるもの
はない。いくらハンマーで叩かれてもこわれるものではない。水には裏表がない。水
の心。水の心を養うのが捧誠会の行である。

水 ふ 四九 五 一一

この佐川には良い水がでる。水は強く正しく純粹で神聖であり神である。

水 解 二八 四

誠の心には裏も表もありません。水にも火にも風にも裏表は絶対ありません。水は
智慧であり、火は愛情であり、風は元氣であります。

水 誠 四六 六 一〇〇

“水”はすなお、と教えられていますから、人の道を学び修め、人の道を実行する
かには、水のような強さを持たねばなりません。水は火よりも強い、その力は人知の
及ぶところではありません。水の心、即ち誠であります。誠は天の道であり、天の道
を学び修めて行なうところにまた人の道があります。

水 命 四八 一二 七五

水のような素直な心になった時、知恵はただけるものである。(中略) 水は低き
につく。なに心なくさらさらと低きにつく水の心を学ぶべきである。低いところには
ものがたまる。(中略) 水は鋭い刃で切っても切れぬ強じんさを持っている。また
一滴々落ちて、ついには岩をもうがっ強さを見のがしてはならぬ。また水は裏表な
く清浄である。

水 命 四八 一二 一七七

容器の水もとりかえないと虫がわく。うらみ、ねたみ、にくみ、そねみ、ひがみ、ぬ
すみなどのさかしま心や、汚れた心は、早くとりかえるべきである。

道 い 一八 一〇 二三

道には正道と迷道とがあります。迷道即ち悪い道は忘れてもよろしいが、正道の良い

道は忘れてはなりません。

道 道とは神の道であります。「みち」というのは「身の血」であり、「身の内」であり、

か 四四 四 六九

これは「自身」であります。また自信であります。地震であります。

道 道もその人の通らねばならぬ道であり、神からいえば「通さねばならぬ道」

ふ 四二 四 一二

であります。霞のために行くてを一時ふさがれる場合もありますが、それは自らの信念の足らざるところを悟らねばなりません。己の足らざるを知らず、人を恨み世を恨むようでは道はひらかれず、いつまでも霞の中に悩み苦しみ、尊い人生を感じていかねばなりません。

道 日月の進行にも道があります。身体にも、血液が流れる道があります。道とは、すなわち、身、血であつて、道を外れては生命は成り立ちません。人生行路でゆきづまつた時、悩みの時、苦しみの時に、ただ、助けて貰いたいというような卑しい心であつてはなりません。道に沿つてゆけば、誠の道を進行していれば、手を合さなくても、いのちの親の大慈大悲は必ずや神の子の上に授かるのです。

ふ 五二 二 三

人生は万事に切れ目のない「つなぎ」が大事である。道を切るのは血管を切るようなもので、血管が切れると命はない。

道 「道は」生命であり、人生の生活であります。この道を迷いだし、疑いの心を以て行けば限りのない危険にもなり、恐ろしい事にもなり、又道がわかれば明朗和楽の心で崖道も坂道も安心して通れる事になります。道に後れる事は悲しむべき事であつて是こそ人生の一大事であります。平らな道を進み行なう時こそ安心のようであります

ふ 五二 二 五一

が踏み外す時があります。崖道や坂道は危険のようではありますが誠を捧げて協力すれば、無事無難で通られる事があります。国道の道も、人生の道も、後れては進み、又後れては進むようでは疲れはてて行き詰ることになります。

訓 一九 一二 二五

道は身血である。身血が無ければ生命もない。道はすべてのものの根源である。天地自然の法則はすなわち道である。道から離れば家庭は乱れ健康はそこなわれ、すべ

命 四八 一二 五六

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道	命	四八	一一	八六
道を切る	ふ	四二	六	一一
三つの自覚	ふ	五四	七	
道	命	四八	一一	一五一
みちの人	ふ	四五	三	九
みちびく	ふ	四五	三	八
導く徳分	み	三四	一一	二四七
道を歩む	訓	一九	一一	二七

てのことが狂ってくる。幸福とは向うにあるものではない。行なったところにあるのだ。徳をつむ生活をしておればその後に見えてくる。善行についてくるものである。道を行えば幸福は自然に成るのである。道（身血）は生命である。

肉体の中にも、外からはよく見えぬが血の流れる道がある。すなわち血管である。血の流れるところが道であり、みちの通わぬ時は私どもの生命も消える時である。みちは即生命ともいえる。真の道から離れて私どもの生命はない。また終生の奉仕に誠心誠意励むことは、われわれの守るべきまことの道である。

すべて世話をするのも、されるのもみな道である。世話をするのは、いずれの日にか、世話になっていたのである。借りたものを返すのは、当然のことではないか。

「みちの人」とは「身血の人」であって、みおしえによつて結ばれた「みちの人」たちの縁のつながりは、肉親や血縁の人たちよりも強く深い。

「みちびく」ためには共に行動してあげねばならぬ。「育てる」ためには、物心とも与えていかねばならぬ。それも一十月や二ヶ月のことではない。長い年月を要する。このひの「しんぼう」がまことに尊い。

世の人の足らない所を導いていくにも自己の徳分を良く弁えて、出来る範囲で世話をしたり、されたりしなければお互い同志が不幸に陥ることになります。（四月二十九日）道を歩む事は心が肉体を動かし足を運ばせるのでありますが、心の動きが、広くにも、狭くにも、窮屈にもなつて足の運びが疲れはてる時があります。心の運びと足の運びが相互に変わりなく、いつも仲良く心の運びの如く足が運んで居れば、如何なる道も安心して運べるようになります。大切なものを身につけて運ぶ時には形式に流されないようにしなければなりません。

道を切るといふのは、血管の道を切るようなもので、血管を切れば生命がなくなります。万物生成発展の種・根・糧としての「みおしえ」の神髄を、どうすれば悟れるのか。それには「捧誠感謝の自覚」と「神の子の自覚」と「活かされていることの自覚」と

三つの理 み三四 一一 一〇六

三つを知れ 命四八 一二 二九三

見透し ふ三九 六 二〇

みなおし ふ四五 一〇 二四

みなおし ふ四九 七 三

——この三つの自覚が確立したときに、おのずから無限無窮の「みおしえ」を心の底から信じたこととなります。(裏表紙)

天地の間には万物一切が生きて活かされて成長しております。その力は皆、無限の徳と力と愛であります。この三つの理を学び修めて行えば、誠に立派な平和が建設されるのであります。(二月二一日)

吾人は神の子である。すべてのものは借り物である。万事利息がつく。この三つを知るだけでもじつに尊いことである。

徳が出来ると、二年、三年或いは五年、十年の光が見えるようになる。それは心の中に宝石が光り輝くのであって、明日の日もわからないというのは、心の中が混とんとしているからである。

思い違い、とり違い、感違いから怒りや嫉妬心が出てきて心が濁ってくる。また捧誠会をはなれていく人が出てくる。そういうところから、それではならないと、みなおし会をやりなさいと示してきた。みなおしというのは確認せよということでもあります。

みなおしと世なおしはなんのため 文化の基礎をきづくためなり
と言霊による教訓を出しております。

朝おきて顔を洗う、髪をとかず、お化粧する、これも「みなおし」であります。着物を着替える、寝巻から普段着の洋服に、あるいは、よそゆきの着ものに着替えるのも「みなおし」であり、「みなおし」は毎日やっていることであります。また、皆さんの肉体が故障して、手術をしたり、薬のむのも「みなおし」、家がこわれて直す、機械がこわれて修理するのも、これまた「みなおし」であります。万事、修繕することが「みなおし」であります。そして、これは人の道であり文化の基礎をつくることでもあります。この「みなおし」は毎日毎日、かならず行わなければならないことであり、まとめていえば修養ということになります。(中略) 人格の完成とは、とりもなおさず、人づくりであり、国づくりということで、「世なおし」「みなおし」であ

みなおし 　　ふ 五〇 四 一〇

り、切れ目がないということでも無限であります。（中略）みずからが己を虚うして、その足らざるところを直していく、これが「みなおし」であります。

みなおし 　　ふ 五三 九 二

各人が、誤解したりされたりしたときは、天地自然の法則にもとづいて直ちに改めていくよう訓練するのでありますが果たしてこれができているかどうか、みなおす。できていなければ、やるように研修する。これが「みなおし」であり「研修」であります。いつ、いかなる場合にも、みなおし、そしてやりなおし、ということが必要な事です。朝起きて服を着る、出掛ける前にまた着がえするというように、服でもその場その場に適したものに替えてゆきます。

子どもの時には三年前の洋服をだしてみると、もう着られない、また、今はちようど体に合っても来年になるともう着られない、というようになるかもしれません。このように人生には成長がともなうものであります。

みなおし会 　　ふ 五一 四 三

みなおし会は、過去の誤ちを反省懺悔して、思い違い・取り違いしていたことを確認して、誤ちをくり返さないよう、法則に沿っていくべく修めるのであります。

みなおし会綱領 　　振 四二 八 四

昭和二十年八月十五日、終戦の日に出されたみおしえであり、東久邇宮内閣に謹告として出されたものである。

一、国民は万物を尊敬愛すること

一、国民は生命財産を尊び愛すること

一、国民は公共心を高め誠の業に励むこと

一、国民は生きて活かされる大恩と恩義を忘れぬこと

一、国民は親善交流を行うこと

一、国民は言語動作を慎むこと

一、国民は我執食欲の争いを慎むこと

一、国民は迷信を打破すること

一、国民は時間励行すること

一、国民は祖国日本を守ること

以上

みなおし会の目的 振 四二 三 五

みなおし会は本会のみ教え並びに教典、教義、この趣旨を学び修めております会員の方々が、己を虚うして徳を積み徳を及ぼすと同時に宣布普及をあやまちなきようすることを重点とする。

みなもと ふ 四四 二 一八

「みなもと」という言葉は、神の子としてすべての人が無から大極を見いだし、この世のはじまり、人造り国造り、平和を実現させようとの世がはじめられて以来の念願がここにある。

みなをし ふ 三九 五 二

みなをしの言葉 みおしえ二十首

目をとじて頭べを垂れてみなをしと 紙に示して人に教えり

世の中も心の中も見なをして 平和建設きずきゆかなむ

世の中は見る聞くたびに迷い出し 何が何やら何もわからず

何事もことなす時は見なをして よきことなせよよもの人たち

身にあまる徳をわすれていつまでも きずいきままは許されもせず

軽はずみ油断をせずに見なをして まことの道を進みゆかなむ

見なをせばよきも悪しきもわかるのに 努力もせずに迷いいるなり

いかほどに富や名誉がありしとも 年のわずらいに迷いくるなり

見なをしてあやまちなきよう融和して 進まにやならぬよもの人たち

身にかかる全てのことを見なをして 協力すればよみがえるなり

見なをしてまた見なをしてよしあしを 定めるために努力ましませ

わが事や人の事やと思わずに 見なをしながらはげみましませ

よしあしの事の道理を見定めて なお見なをして努力ましませ

世の中はくるくる変る変れども 見なをしながらおさめましませ

人の世はあやまち多きことなれど 見なをしながら融和ましませ

見なをして今日より始め努力して おやにむくいる心わすれじ
 大恩にむくいる心むねに抱き 見なをしながら進みませ
 見なをせばたらざるところ数あれど 努力をすれば後にかがやく
 こうすればこうなることとわかりても 見なをしながら進みませ
 よもの人見なをすことのなきときは 努力をしても行きづまるなり
 『見直し』は『身なおし』であり、『皆押し』であり、このことたまは実に深遠であります。

その実りも、秋になってから、豊年になれ、満作になれとどんなに祈っても、もう八分通りは決定してしまっておりませう。

四十八年をお迎えするにあたって一層明確にすることが大切であります。そこで、次のことを宣言します。

(一) 捧誠会歌・支部歌・壮年部歌・青年部歌・少年部歌・世界平和行進曲・国造り奉寿歌およびご真水歌をすべて誠歌と統一し呼称して、平和郷歌を世界平和郷誠歌と呼ぶ。また、これらの歌を斉唱する場合には、「誠歌拝唱」という言葉を使う。

(二) 捧誠会(本部)旗、本部おみな会旗、各支部旗、各壮・青・少年部旗は、「み旗」と呼ぶ。

(三) 因島白滝山平和一神、岐阜護国神社平和一神、松山椿神社世界平和、伊東蓮着寺世界平和誓願、高知兼山神社アジア開発、静岡浅間神社万物尊愛の六碑を和石と呼ぶ。この六碑の記念式典は、和石祭と呼び、建立何周年記念式典という従来の名称は廃止する。

捧誠会のみ旗は、教祖の無条件の意気(いき)が入魂されております。また、み旗は悠久なる世界平和をきずくための目標であります。

石耳と云って他の云うことは一向に入らない、又聞こうとしない、これは石耳であり

み旗 四八二一〇
 耳 振四三六五

耳鳴り 四七 一二 八

ます。鉄砲耳と云うのは通り過ぎてしまつて何んにも残らない。ざる耳はかすだけのこり、胃袋耳は聞いた事が消化が出来る。
耳鳴りは、雑音にこだわり、迷信におちいつてはならぬという戒めであるというおさとしてありました。

耳鳴り 四八 二 二七

耳鳴りは雑音、頭痛はとりこし苦勞なのであります。
耳鳴りは、私のきかん気、理屈屋、いっこく者だったことのみしらせである。

耳鳴り 五〇 九 一〇

教祖・総裁の言動を見聞して会員の皆様が、「自分は聞き分けができていない。聞いても、心に修めていない。行いも実行も足りない」と、一人一人の会員がさんげをし、

みなおしをし、研修をしているか否か」と、真剣になつていただきたい、これが念願

です。

土産 三八 一〇 一五

「土産」は「身上げ」に通じることたまの理から思案すると、一箱の名物よりも、み

土産 四八 一一 二六七

おしえに身上げた行いの方が、私には望ましい「みやげ」である。
土産は見あげてさしあげるべきものである。みやげは、みあげ（見上げ）に通じるものである。

見る 四二 七 一一

目でものをみるのではなく、心で観るのです。心にあるから、心にあるだけのものが

見る 四二 一〇 一一

見えてくるのであります。
見るのは見るだけの縁のつながりがあり、見ないのは縁のつながりのない人であります。

見る 四二 一〇 一一

人の悪い所を見れば、自分の心の中にも、これと同じものがあるという自覚を持つ。
そうして、その「持っているもの」を取り扱うように努力する。これで始めて向上の

見る 訓 一八 八 四七

道を歩むことになるのであります。
人は人を見るだけでなく万物一切を見て、それを己の心の修行として行かねばなりません。

見る 訓 一八 八 四八

どうしても目は前を見て行きますが、肉眼で見ると云うことにな
るのであります。己の心に邪念があれば、その通りの物体を見ます。心に在るから在

身を捧げて 　　ふ 四六 一 三〇

身を捨てて 　　ふ 四一 一 一六

実を拾う 　　ふ 五三 一 一

実を拾え 　　命 四八 一 二 二八七

民主主義 　　ふ 五二 八 四

民主主義 　　導 三四 一〇 四七

るだけのものが見えて来るのであります。(中略) 喜びを見ても悲しみを見ても同じ心の持ち方でなくばならないのであります。

太古に於て貝が通貨になつていたこともある。貝がその「み」を持ったままでは通貨にならなかつた。身を捨てて、身をささげて通貨になつていた。身をささげてこそ神慮に合一できるのであるが、人はみな、この身がかわいいから、それができにくい。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」といわれる。この場合、「身を捨てても」というのは「死ね」ということではない。「ほどこせ」という意である。これを「奉仕」という。

人のアラを拾うよりも、人の実を拾う勉強をしたい。人のアラを拾つていて、いつも明るい微笑をたたえていゝことはむずかしい。どんな場合でも、どんな場所でも、いつもほほえんでいられるのは、常日頃から人の実ばかりを拾つてゐるからである。ほほえみを忘れないように勉強するために、まず人の実を拾う勉強をしよう。(裏表紙)

「あらを拾わず実を拾え」というが、あらを拾つてゐると必ず実をこぼすようになる。実をこぼしてゐては進歩がない。

時移つて、今日は民主主義と呼ばれております。憲法でも民が主であると定められております。しかも、民が主となるのは、選挙を通してであります。にもかかわらず、票と金とが表と裏のようになつてゐるところもある。武力の争いが、財力の争いに変わつておりますが、争いは争いでありませぬ。しかも、その財力を提供する元になんという名がついておりましたか、財閥という。罪と罰であります。言霊にも文字にも間違ひは示されておられません。

お互いの気もちを尊敬し合つて、和氣霽靄として行く処に民主主義があると思ひます。自分の意見を主張して、人の意見を取り入れないで、自分勝手にして行く処に民主主義は無い。民主主義はお互いの心と心が融和して尊敬し合つて行く、愛して行くといふ処に合掌があるのではないか。

ム の 部

無 か 四四 四 六二 無は自然の姿である。自然は美しい。

六日 ふ 四四 二 一八 六日は無であり、無から有を生み出すことは無条件であり、まことなのであります。

無から有を 命 四八 一二 九七 無から有をうみ出すのは努力である。こだわらず、なに心なくその道に精進するところに有が生じるのである。無から有を出すには、誠の業を喜び励むのが第一である。

無条件で誠の業を喜び励みつとめるところに真の喜びがうまれてくるのである。

無関心 ふ 三九 一〇 四九 無関心な人が関心をもつようになるには体験をしなければなりません。それには、時機がこなければなりません。

麦 み 三四 一二 二五四 米は女子を現わし、麦は男子を現わします。それ故に米は炎熱の時に芽生えて参ります。これ即ち愛情を示します。麦は寒い霜の降りる時に芽生えて踏まれ乍ら成長致します。男子は度胸であり女子は愛嬌であることは、天地の理法であります。(五月二日)

麦と米 ふ 三八 一二 一七 麦の花は夜咲き、稲の花は昼咲く。男女に例えると、麦は男であり稲は女である。麦は酷寒に吹きさらされ、その上踏みつけられられるほどよく稔る。夜咲く麦と、

昼咲く稲と、寒さに稔る麦と、暑熱に稔る稲と、これは天地自然の法則である。いかに科学が進歩しても、麦の花を昼咲かせることは出来ない。

無窮 ふ 四八 八 一三 まさに地球の回転は無窮でありましょう。無窮は無給であり、無休にも通じます。給料をくれなければ動かないというわけでもありませんし、今日は日が悪いから休もうというわけでもありません。

無窮のみ教え 命 四八 一二 二八五 一、み教えは天壤とともに窮りなきものである。

二、み教えの及ぶところ天井なく、囲いなし。

むくい 誠 四六 六 一一八 大恩にむくいるには、終生の奉仕に誠心誠意の実行をあげむ。人の恩義に報いるには、身体的交流、物の交流、これを無条件にしていく。人の恩義につきましては皆さんは、だいたいできておりますが、もつとも根本的な大事である「大恩」には無関心であり

ます。そこで「毒舌」を流すことになる。大恩は尊い生命である、親の心であると信じ敬い愛していくことができたならば、毒説がいかに重罪にあたるかということも自らわかってまいります。

報いる 五 一 六 七

神の子であることの自覚をもち、人として人格を高め、天地自然の法則を学び修めていくことが、いのちの親に報いることであり人の恩義に報いることであります。

報いる勤労 二 八 七

報いる勤労こそ天地自然の法則にかないますから、災もなし・迷信にもとらわれず・誘惑にも誘われず・動乱も起きず・正しい・明るい・うるわしい生活が生れて参ります。

無形の真理 五 四 七 四

知らなくても信じる。わからなくても信じる。なぜかという、みしらせとして、現実の身にくるからであります。唾として生まれてくる。盲として生まれてくる。精神異常として生まれてくる。このような事がなぜ起こるかという、無形の真理にもとづいて起きているのであります。無形の真理は、人知でははかり知れませんが、

無限 三 四 一 二 一 三 〇

地球の運行は限りがありません。無限の徳も力も愛も果てしがありません。(中略) 平和とは何処までいってもこれで行き詰まるということは無いのであります。(中略) 切っても切れない水の如く、風の如く、火の如きものであります。無限の力を表すもので、過去の聖者は火水風を神とも力とも教えております。火水風がこの世から去った時には、万物は成長致しません。誠の道、誠の心、これこそ永遠に変わらないものであって、人の生活ではこの三つを心から敬い愛すべきであります。(四月二一日) 神は人々が、日月が悪い、方角が悪い、家相が悪い等と悪い言葉を出しても許されていること等は無限の愛であります。(十二月八日)

無限の愛 三 四 一 二 七 〇 九

無限の宝 三 四 一 二 六 二 九

心の持ち方、使い方、身の行い程尊いものはありません。これこそ無限の宝であります。(中略) 心の持ち方、使い方、身の行いは、限りなく尊いものでありますから万人の喜ぶようにしなければなりません。(十月三一日)

無限の徳と力と愛 三 九 一 三

神の道を修めて、みおしえを通じ実行することによって、無限の徳と力と愛とが各自に与えられることを「仕合わせ」と教えてあります。

無条件 　　ふ三八一〇　　二二

実行だ、ついて来なさい―（中略）支度だとか、鞆だとか、金の用意だとかいって、うろろうろする。それは無条件になっていない。親の命令だ、親の命令どろりに行動すればよいのである。後の責任は全て親がとるではないか。

無条件 　　ふ四四二　　一八

無から有を生み出すことは無条件であり、まことなのであります。

無条件 　　ふ五〇三　　三

自然の法則にのっとって生き、活かされている万物は、いきいきとしております。そしてすべて無条件です。人を楽しませ慰める草花は根から切り離されても、美しい粧いを続けます。鳥・牛・豚などは生命を失い、肉を刻まれ、骨をしやぶられても、無条件であります。

無条件 　　ふ五〇五　　一三

日月は無条件、時間、空間も無条件、人と人とは交換条件であります。

無条件 　　ふ五一五　　二

実行は無条件ともさとされております。無条件になるといふことは悟りであります。

無条件 　　ふ五一六　　五

地球が無条件で運行していることはご存じでしょう。日が悪い月が悪いという人は今でもありますが、日月は無条件で世界を照らしております。

無条件 　　敬四一一二　　五二

親は子のためには無条件である。感情（勘定）に動かされている間は無条件とはいえない。

無条件実行 　　ふ五一七　　五

無条件実行という言葉は知っている。それが何を現わす言葉かということ、学んでいる。いざ実行となったら無条件でやらせて頂こうということも、心に修められるまではできています。しかし、無条件実行の厳しさを知らない。

無条件実行 　　ふ五二一二　　四

無条件実行ということはいかに厳しいものであるか、そしてまた、無条件実行をすればどれほどの恩典を頂く事ができるか、という事実を一つ一つ体験してまいりました。

無条件実行 　　ふ五三二　　五

天地自然の法則にかなない、我執を去ってなす業には、いのちの親が後押しをして下さることは、事実であります。頼まずとも、祈らずとも、己を虚しくしてあらそうことなく親しみ交すという無条件実行を誓い、行うならば、かならずやいのちの親の後押しは頂けるのであります。

無条件実行 　　ふ五五三　　四

人は困った事に出あうと、霊光を送ってください、とか、救って頂きたいという依頼

無条件実行で救われる 五 五四 八 五

無条件則実行 五 三八 八 一四

無条件奉仕 五 四八 二 二四

無条件奉仕 五 五〇 九 九

無色 五 四三 九 七

無色 五 四六 一 三〇

難しい人 命 四八 一二 一七五

むすぶ 五 四四 五 一一

心だけに凝り固まってしまふ。いのちの親は神の子に色々な訓戒を与えて下さっているのだから、十のうちの一つでも無条件実行すればよい。そうすればあとの九つは、いのちの親が果して下さるという大恩をうけているのであります。それなのに、その一つも自ら無条件で実行しないで、助けて貰いたい、救って貰いたいというだけの根性ではならないのであります。

辛い時に、どうだこうだと申しているようではなりません。無条件実行で救って頂ける事を信じて下さい。

実行を示されて、これが無条件実行するためには常日頃の訓練が必要である。

先祖伝来、この天借はどれだけになっているか、計算もできない。その償ないが、無条件奉仕なのである。

無条件奉仕とは、私どもの生きてゆく上になくはならぬすべての物に対して感謝を抱くことから始まるのであります。

雪は白い。白い雪も解けてしまえば無色なる「無職」の人を浪人という。「無色」でありますから、無条件に行動ができる。無条件の行動には「肩書き」など不要である。火(熱)水・風は無色である。人でも無色——無職の人が「いしずえとこそ仕える」大きな働きをする。肩書あっても無色になればよいが、それはいい得てもなかなか難しい業である。自然は無色、だから大きな働きをする。時々刻々に変化きわまりない働きをする。これすべて読本の教材である。

難しい人だといわれるより、優しい人だといわれるようになれ。難しいことを勉強して、難しい話をする人を偉い人という。利口な人、難しい人の意である。まじめな人とは優しい人である。学を修め業を習えと教えているが、もし学を習えば、徒らに利口となり、理屈だけが多く、実行の伴わぬきらいがある。

「むすぶ」の言霊。「む」は無条件。「す」は「寿」であり「酢」であって、これはすなおということ。「ぶ」は「武勇」「武断」というように正しく強いこと。これを

無駄 三 四 一 二 一 八 一

天地自然の理でいうと、火・水・風です。すなわち徳と力と愛です。神とむすばれて始めて、無限の徳と力と愛とをいただける。

知恵を無駄にすれば神に対する不敬となり、肉体を無駄に使えば両親に対して不孝となり、富を無駄に使えば万人に対して不愉快な想いをさせることとなります。尚又、言葉の無駄遣いをすれば魂を汚し傷をつけることとなります。(三月二八日)

無駄 三 四 一 二 二 四 一

善いことを見、善いことを聞く、これが心にしみ込み、心の役に立ち、身の行いに役立つようであれば、見ることも聞くことも無駄となります。(四月二六日)

無駄苦勞 三 四 一 二 七 九

なぜ、このような無駄苦勞をするのか。それは「欲望」のためであります。自分の徳の分量をわきまえず、明るい正しい道を自ら破壊し塞いでいる人が多いのではないのでしょうか。

無駄使い 三 四 一 二 一 一

金にしても物にしても必要な時必要なものの授からぬのは、平素これらを無駄使いしているからである。貯え、土地、家屋などを無くするのは、無駄にしたことになる。肉体でも八十まで生きられるものを、三十年も早く亡くしたり、男は五十より六十にして実るというのに、五十で終わるといふことは大損である。女は三十三才から四十五才までが一番実るといふのに、病気をして早くに亡くなる人がある。なにごとにしても、無くすることは淋しいものである。すべてを無くすることは、先祖伝来、無駄使いが多いからである。心、肉体、知恵の使い方を無駄にせぬように実行すれば、いざというときに必要なものが、授けられるのである。

無駄使い 三 四 一 二 五

心の無駄使いをしてはいけないよとおっしゃいます。心の無駄使いをすることは神に対して不敬であり又肉体の無駄使いは両親に対して不孝である。そして言葉の無駄使いは人の気持を、相手の気持をきずつけてよごす。又物を無駄使いたしますと本当に不愉快な感じを相手にあたえます。

無駄使い 三 四 一 二 四 八

日常生活に必要なものは使ってもらうために作られているのである。我々はそれを喜んで使わして戴くことにより活かされているのだ。無駄使いをしたり、勿体ないとし

無駄使い 命 四八 一二 九三

まいこむから取り上げられるのだ。必要なものが与えられぬのは、いずれの代にか祖父母、父母が無駄使いをしたのである。(中略) 人生行路にはわからせるためにその果が出るのであるが、それを知らぬ人が多い。また知って行わぬ人もある。怒るな、不足をいうな、人を打つなといっても知りつつ行わぬ人もある。そしてさらに不徳の利息がつくわけである。

無駄使い 命 四八 一二 一五一

金にしても、物にしても必要な時、必要なものの授からぬのは平素これら無駄使いしているからである。貯え、土地、家屋等を無くするのは、無駄にしたことである。(中略) 常にその時、その場の出来ごとに誠捧げて勇往邁進し、整理整頓、あとかたづけを怠らず、すべてを活かして使うようにせねばならぬ。心、肉体、知恵の使い方を無駄にせぬように実行すれば、いざというときに必要なものが授けられるのである。求めずして与えられるというのは、平常修め養った徳と力と愛が現われるのである。(中略) あらゆるものを無駄にせず、活かして使うということは、捧誠会の大眼目であり、このことを命がけて実行すれば、必要な時に必要なものは、かならず授かるのである。人を見て法を説くようにしないと、み教えの無駄使いにもなり、また人の魂を傷つけて話をしたことにもなる。一方で徳をつみつ、また一方で徳を削ることになる。

無駄使い 命 四八 一二 一三〇

肉体にしても活かして使え、知識も無駄に使ってはならぬ。知が不足すれば物の判断力が無くなる。肉体にしても同様である。無駄使いが、われわれの生活には毎日ある。心の無駄使い、肉体の無駄使い、物の無駄使いが沢山ある。水を、薪を、ガスを、電気を無駄にしている。これらを活かし、役立てるところに知恵がある。あらゆる無駄使いをしてゆきつまり、これを助けてもらいたいとひたすら願い、その願いのかなわぬ時は、神も仏もないなどという人がある。

夢中と忌中 ふ 三九 七 一五

好きな女に夢中となる。或いは好きな男に夢中になる。夢中になっているのを、美しい姿だとさえ思っている。しかし「夢中」は「喪中」である。「喪中」はまた「忌中」ともいう。死んでつめたくなったから「忌中」であり、これは人間の行き詰りの最終

点である。

胸は棟に通じる。両親をたてぬことは一家の棟をつぶすようなものである。親をたてぬような人に胸を病む人が多い。

家の建てまえを「棟あげ」といいます。棟があがった、棟がさがった……こういう言葉もありますが、「棟」はやはり目上でありますから、胸の患い（呼吸器のわずらい―特に肺）は、心から生みの親にしたしみがもてない、こういうところに原因があります。両親をたてぬ人に胸をやむ人が多い。胸は棟である。棟をつぶしてはならぬ。

胸を病む人

命 四八 一二 二八七

命 四八 一二 二九四

無の實行

い 一八 一〇 四四

難しい環境でも無になって実行すれば睦くなる。時によれば自分は無理をしていないようでも他の人から無理をしているように思われる場合がありますが、無理をしているか否やは冷静になれば人に言われずとも自ら知っている筈であります。然し時と場合では無理と知りながら実行することがあります。

そのような時には少しでも休ませて頂き次の実行に移る必要があります。

無理

ふ 四二 一〇 八

無理

ふ 五一 六 五

「無理」は「無利」であって、その結果には「利」が生じません。無理は理が無い、文字通りであります。自然の法則には無理はありません。積尊の説かれた仏教では、無理はなく、無、すなわち裸の心。裸の心は空であって、取り越し苦労をしたり、迷信にとりつかれたり、またそれを人に伝えたりというようなことはありません。無条件は取り越し苦労もない、迷信もないのであります。

無理という文字は、理が無いと書きます通り、無理往生させるようなことは、相手に責めることであって、苦しめることになります。（一月十六日）

無理は自我であり、我執であります。（二月六日）

無理

み 三四 一二 五〇〇

浅薄な人の力や知恵のみで、無理をするから病めてくるなり
無理という文字は、した事が無駄で何の利もないことを、理が無いと書き示して教えてあります。（八月三十日）

「ない利」とも申します。折角苦心して実行したことが無理の為に「ない利」となっ

無理

訓 一八 八 四四

無理 訓 一八 八 六三

て何の効果もなくなりませす。
己の非をかえりみず、争闘しても見とめられようとする時もあります。それが結局無理となつてよき事も悪しき事になり、その結果は苦しみぬくのであります。

無理 訓 一九 一二 七

無理は理が無い事であつて実行した事が芽も出ず、光も現れず、徳にもならず、無駄になつて参りますから必ず肉体に悩みを生じ心に迷いを起して来るのであります。

無理 誠 四八 一二 五九

無理とは、無利であります。利がないのであります。利害をさらに考えない。こうすれば損する、いや得をする。こういう、とりこし苦労をしない。打算をこえて行動する。「利」をなくして誠のわざにはげんでいけば、必ず必要なときに必要な物も人も集まつてくるのだと、つねに教えているではありませんか。ですから「誠のわざ」ということは、「無利のわざ」と申せるのであります。

無理 誠 四八 一二 一八七

熱中する、真剣になるのもよろしいが、無理であるなら、それは我執貪欲でありましよう。私の熱中ぶりが、はたして我執貪欲であるなら、今日こうしてお話などでできません。我執貪欲の無理であるなら、天の法則によつて許されません。私は「大平和敬神」の神石を完成したい一心であります。この一心これは誠であります。この誠、この至誠はかならず天に通じるにちがいありません。

メの部

眼 ぶ 三九 五 二二

人の眼は日・月を現わす。右眼は月であり、左眼は日である。日・月も雲によつて、その光りをさえぎられることもあるが、日・月そのものの光りは雲の上に変わることなく光輝いている。

眼 ぶ 三九 五 二二

人間の眼に映るものは、その人の心の働きだけである。だから、「眼は心の窓」といわれ、その人の心を現わす。心が曇つておれば、眼に映るものも暗い。明るく楽しい

眼 三九 六 一八

眼 一九 一二 五

眼 一九 一二 七

目 四七 二 四三

ものが映らない。そこに不平不満もおこり迷信も生ずる。芽出たい、芽が出る、眼をかけてあげる、迷惑をかける…全て「眼」の言霊である。(中略) わざわいを喜び、わざわいから早くのがれようと焦らず、日月の進行のまま生活して行く正々堂々たる姿―そこに迷いはない。心の眼を開き、肉眼も亦その光を失わない。肉眼の白いところは「愛」であり、黒いところは「美」である。美も愛も明朗無限であつて、黒いところに白が滲みても、白いところへ黒が滲みてもならない。白も黒も明朗であつて始めて眼としての全き生命がある。どのように辛い仕事をいつけられて、「こうしなさい」「こうやりなさい」「こうしろ(白)」「といわれ、そこにどのような苦勞(黒)があつても、愛と美によつてなし遂げていく。そこに人生の光明が輝やく。

くらやみの中では眼があいておつても、物の姿は見えない。(中略) 我々の目は物が光りが添うて始めて見えるのである。『まことの光りが輝けば』そして『徳の光りが輝けば』―何が見えるかという、ことの良し悪しが判明する。

人の肉体に於いては眼は中心であります。又眼は其の人の心を現し實に尊く、おろそかに出来ず、取り扱いは何よりも大切になさるなければなりません。眼の言霊を申しますと、芽が出る、目出度い、心が曇つた時は迷信と云う事になります。眼をかけて上げる、即ち親切、迷惑をかける、即ち禍をなす。

人の肉眼の黒き所は美であり、白き所は愛であります。美も愛も明朗無限のものであつて、白に黒がしみても、黒に白がしみても、ならないのであります。白と黒とはどんなにつらい仕事を、こうしなさい、こうやりなさい、こうしろ(白)と云われ苦勞(黒)であつても、苦勞し遂げねばならない。即ち如何なる苦勞の人生も、愛と美によつて前途が光明正大に生活出来ると云う事を現わして居ります。

目は、物を見るための道具であるがくらやみでは、なにも見えないという事実から思案すると、目だけでは見ることはできないのだということがわかる。われわれの目は、物に光りが添うて始めて見えるのである。「まことの光りが輝けば」そして「徳の光

目 三三四 一六四〇

りが輝けば」なにが見えるかというところのよしあしが判明する。両眼のことを目の玉と教えられております。玉には白黒の刻印がしておいております。黒は夜であり、白は昼であります。(十一月五日)

目 誠 四六 六一〇七

「目星」という教訓であります。目は即ち魂であります。ですから、万事を正しく見る。広く明るく、その判断をあやまらぬように努力せよと教えられているのであります。

目 命 四八 一六五

目は心をあらわす。そして、また顔の微笑をあらわす。目に潤いがない時は顔の筋肉にしわがよったように見える。手ざわりがよく心にわだかまりがなければおたがい同士も親しく語りあえる。この手ざわり、肌ざわりは目によって示される。目の玉はまろい。これは自然の法則だ。(中略) 目の玉のしわには暖い日光、清い星の光、無限の光、無限の光明が必要である。そして、これらは修養によって与えられるものである。

目 命 四八 一六八

目は魂である。心の窓である。感謝一ぱいの目には潤いがある。悩みのある人は目に光が無い。うるおいのある目を持つことは目の実行である。横目、のぞき目をするために目は与えられたものでなく、物事をよいように見るために与えられたものである。

目 命 四八 一五五

目は円満をあらわすものである。角ばって見えてはならぬ、〇をあらわしているのだから、物ごとをすべてまるく見ねばならぬ。目は喜びを表わすもので、人をにらんだりするためのものではない。物を見て不平不満を思い、反感をもつなどは、目に対し不忠実である。物ごとを三角、四角に見、また曲ってみるから、目に故障がおきたりするのである。

目 命 四八 一六六

目を見る。目は魂である。心の窓である。「お蔭さま」と感謝一ぱいで見る目にはうるおいがある。争いをしたりして心に悩みのある人は目に光がない。

明治 命 四八 一六六

明治は、日月が治めるといふ時代でありました。

明治 命 四八 一六六

明治とは、日月が治めると文字によって論されています。日本は日の本、神国であり

めいしん

ふ 四二 三 六

ます。日の丸の国旗は、日月の象徴であります。迷うことのみが「めいしん」ではありません。「めいしん」の人とは、実行の足らざる人、行いのできない人、知らず知らずに他人に迷惑をかけている人、進歩のない人のことをいつているのであり、またそう教えているのであります。

めいしん

ふ 四二 三 一二

迷信

ふ 五四 三 五

「迷信」とは所謂「迷信」だけでなく「迷心」の意味もあると思います。迷信を打破する、と本会典範第三条にあります。これは強い心が必要であります。名前を変えなさい、方角が悪い、日が悪い、などといわれて迷い苦しみ悩んでいる人があります。心の迷い、我執にとらわれた判断では、天借をお返しすることにならなればかりか、かえって天借をふやすことになってしまいます。

迷信

み 三四 一二 二〇

迷信

み 三四 一二 三三七

迷信とは嘘であり誤魔化しであり、我執と食欲であります。(一月十日)
雨や嵐があれば不平不満がわき、又月や日が悪いなどという人があるが、これは不敬であり、神を否定することになります。相性が悪い、方位方角に反している、家相、墓相、或いは人相、手相、姓名が悪い等というようなことにこだわり、心を悩ませ苦しんでいる人が科学の進歩した文化の今日、しかも最高の教育を受けた人達の中にも数多いようであります。先ずもって他を批判するよりも自己の足りない処や実行の出来ない所を早く改め反省して、自らの人格を高め徳を積み及ぼすように心掛くべきであります。(六月十一日)

迷信

誠 四八 一二 一七八

「迷信」は「迷心」といえます。なぜ私たちの心は迷うのか、といいますが、肉体は借りものであって自由にはなりません。心は太極からいただいたもので私たちの自由になるからであります。

迷信

誠 四八 一二 一九〇

人は誰も楽をしたい、そこで、きびしいこの道をさけたがる。なるたけ近道をしよう、遠まわりでも楽な道を歩もうとする。その弱い心——それが迷心——迷信となってくる。そうして種を蒔く。天借を積み重ねるばかりで、花も咲かず、稔りもしないようなムダ苦勞をしている人がどれほどいるか知れません。

迷心 四三 五 五

迷信の打破 三四 一二 二〇

命名 五二 九 三

迷心という心の動揺は心の交通違反であります。これ（迷信）を打破して行く為には我執と貪欲を清祓し、天地自然の法則を学び修め、神の子であることを自覚し、聖者の訓戒を信じ、強く正しく忠実なる誠業に励み、己を虚しうして徳を積み及ぼして、各自の心を養うことを怠ることなく、協力互助と融和の精神がなければなりません。（一月十日）

命名は即ち姓名（せいめい）であり、生命であり、魂につけるものであつて、身体につけるものではありません。そのたびごとに私は、ま心でいのちの親にご指導を仰ぎますと、言霊によつておさとしを頂けるのであります。いのちの親から直接に頂ける言霊によつて命名しますので、わが意を用いて名づけたことはございません。この響きは、神の子であれば誰にもある筈であります。この響きに無条件で従えばよいのであります。

明朗和楽 命 四八 一二 一三四

明朗和楽の原素は感謝である。反省は低い心、謙虚な心、大地の心である。反省、感謝、実行があれば病いは克服される。反省は雑音のなやみを浄化する。

迷惑 四一 一二 八

「毒」は「劇薬」であると同時に、「名薬」である。「名薬」は「迷惑」である。こゝとたまたから思案しても「迷惑」かけられたというのは「名薬」をいただいたのであり、そこには只感謝あるばかりである。

迷惑 四二 三 一六

人に迷惑をかけるのも「めいしん」の教訓ですよ。

迷惑 四五 八 一七

心と言葉の交流、これは神の道であります。正しく、ま心もつて交流しなさいよ、と申していますが、毎日のように、人の言葉や思いをさまたげたり、聞きがちがい、取り

迷惑 四八 一二 一二四

ちがいで「迷惑」をかけています。「迷惑」かけるのは不徳をつむことであります。迷惑は迷心につながる。「迷い」に通ずる。（中略）迷惑は、人をおどかしたり誘惑すること、人の心に迷心を持ちこんでいく。どうか、人に迷惑をかけないよう、

人にも万物にも尊敬、感謝の誠をささげて、活かされている大恩にむくいていくように努力していきましょう。

恵まれる

み三四 一二 一六二

心は神を信じ、魂を磨き太らせ成長させることによって恵まれ、物は尊く生かして使わして戴くことによつて恵まれるのであります。(三月十九日)

盲

命 四八 一二 二六二

見るたびに腹をたて、不平不満をいうようでは、やがては差押えされるようになる。このような種子をまいてみると、盲の子孫が生れるような結果となる。

目出度い

訓 一九 一二 五

目出度いと云う時は喜びの時のみに考えるのではなく、迷惑をかけられる、即ち禍を受ける時も目出度い事なのであります。禍を受けて目出度いと感じる心こそは尊い日月の光と同じ如く誠心なのであります。

目にうつるもの

訓 一九 一二 五

人の肉眼にうつるものは其の人の心の働きによつてうつつて来るものであります。水の中に月がよくうつりますが、太陽は昼でありますからはっきりと映りません。夜と昼とは光も映りが變つて参ります。

眼の障害

訓 一九 一二 六

感謝の中に不足あり、心の悩みを遠慮して心で心を押さえ我慢して居ます事や、堪忍とか、忍耐とか、云う事が美德と思つて居ます事などが、眼の障害を受け悩むのであります。

芽生えぬ

ふ 四五 五 一〇

「芽生えぬ」という言葉は「会えぬ」であつて、欲しい子供に会えないのが「流産」である。なぜ種が芽生えないのか。「会えない」というのは「愛ない」であるから、つね日ごろに、愛が無いからである。

モの部

儲かる

命 四八 一二 八五

誠の業を喜び励むと儲かる。(中略) 儲かるのは可能の意で、自然にそなわつてくるのである。己を虚しうして働いておれば正利はかならずある。

儲かる

命 四八 一二 八九

夫の喜び、子の喜び、隣人の喜びをともに喜び、後姿に合掌する時、その愛情は誠である。み教えにそい、誠捧げて与えられた職分をつくせば自然にもものは授かるのであ

儲かる 命 四八 一二 八九

る。すなわち儲かるのである。

儲かるとは誠捧げて行うところにあらわれる。儲かるためには四つのものならば二つは人に差しあげ、残り二つをいたたく心でなければならぬ。出しっぱなし、もらいっぱなしではよくない。二と二で夫婦である。上肥、下肥も出し入れの法則通りである。力は地からで下にある。太陽は熱いが上にゆくほど寒い。宝は他からである。温い熱（愛）、徳、力、無限の資源は地下にある。

儲ける ふ 三九 四 二一

儲ける—というのは、もうける（蹴る）であって、人を蹴っている。儲けよう、儲けようと焦って損ばかりしているのは、蹴っているからである。

儲ける 命 四八 一二 八五

自分さえ良ければよいという方法は儲けるのである。もうけるは蹴るのだ。儲けるとは人間心の勘定（感情）である。

儲ける 命 四八 一二 九二

一、他人に迷惑をかけること。

二、うぬぼれて自分の徳の分量を知らず、栄耀栄華をすること。

三、自分一人で、正しく間違いなしと慢心すること。

四、勤労を惜しみ、物品を軽卒に取り扱い、人格を傷つけること。

五、親、兄弟、他人を悪く思うような心で働いていること。

この五ヶ条のような心で働いていると、利益を得ても儲けるということでは長つづきせず、いわゆる悪利である。

目的 目標 振 四二 六 三

反省、感謝、実行が出来ているか、どうか、足らざる所を改めて、我が意を持たず、みおしえを濁すことなく、目標は太極であり、目的は救済であり、他自共に、身心共に養い、物心共に健全に恵まれてゆく修養でなければなりません。

目的 目標 振 四二 八 三

万物是誠、万物はまことの心棒にならなければならぬ。まごころが目標であって、行なう目的が我が意を用いた時にどうなりましょう。目標がまごころであって、行うこともまごころでなければならぬ其処に合掌があり、融和があり、協力がありましょう。「みおしえ」を我が意を用いて濁すことなかれと教えております。「みお

目的 目標 ぶ 四七 八 一二

しえ」は「まごころ」です。その「まごころ」を我が意を用いて、即ち我執貪欲でいたならば、目標と目的がばらばらとなる。外れてしまう。最後の本会の趣旨を通じての目的と目標は、まず万物尊愛です。これは人の道である。そして万霊尊愛―万霊尊愛ということは説明だけではなかなか信じられない。偶像崇拜とか神も仏もないとか、そういうような心を持っている人が、もうなん億人いるかわかりません。そういうなかで、なるほど霊は目に見えなくとも、手に掴めなくともあるんだ、ということ信するまでには容易じゃございません。

目的 目標 ぶ 五一 四 四

目的と目標が混乱しては、何年経過しても進歩いたしません。捧誠会員としての年月は長くても、この目的と目標を誤っておりますと落伍者であつて、ゆきづまり、迷い、いつまでも我が意を用い感情的になり、我執貪欲が重なつてまいります。これは、自分自身にはわかりません。

目標 ぶ 四一 六 三

私達は「絶対」を目標といたします。(中略) 「みおしえ」は不動でありますから、信じて従いていけるのであります。

目標 ぶ 四七 三 三

今日まで数多くの碑を建立してまいりましたのは世界平和顕現のための目標としてであります。目標は、これ一つであつて他意はさらにもありません。

持ち腐れ 命 四八 一二 二九四

食物も紙に包んでしまつておいては人の体の栄養にならぬ。み教えも同様である。心に入れ実行にうつさなければ宝の持ち腐れである。

持つうちは、はいらぬ 命 四八 一二 二七一

「金が無い、物が無い、礼にこない、あいさつにこない」とおもっている間はいらぬ。からになればはいるのである。おもっている(持つ)うちは、はいらない。

もつたいない 命 四八 一二 九〇

この言葉使いは感謝のたらぬことが多い。茶碗一つこわしたとき、もつたいないというの、金か茶碗が惜しいためにいう場合が多いが、作った人の労苦に対してもつたいないというべきである。

本に従う 振 四三 三 三

天地自然の法則に基いて行動することが、本に従うことである。それは指導者に従うことでもあります。

物 命 五二 一二 二三

もともとは神が生まれ給うたのであって、人は神の子です。その人が作ったものはすべて、物です。

物 命 五七 一 四

呼吸がとまったら、なきがらとなります。尊い肉体は借り物と教えられております。また、論されています。物の拝借にしても、お金の拝借にしても、拝借したならば大切に取り扱い、また拝借した物はお返ししなくてはなりません。人の心の我執というものは、オレのものだ、人のものだと区別しておりますが、神さまのお諭しにはオレのものや誰のもの、はありません。みな、神のつくられたもの、即ち、神のものであります、と諭されております。

物と徳の計算 命 四八 一二 二九〇

物の計算と徳の計算とは中が違う。

物の交流 命 三八 五 一五

ものをあげても頂いても、気持ちよく上げられるよう、また気持ちよく頂けるよう、しっかりと勉強したいものである。

物の整理整頓 命 四八 一一 二七五

物の整理整頓をすれば身のまわりが清らかになるように、心の整理整頓ができれば心もさわやかになり、取り越し苦労もなく、感謝にみちてくる。

ものの使い方 命 四八 一二 二六二

物は使うべきところに使うようにできているのである。指にしても、手にしても、使うべきところに使えばよいのである。(中略) 目、耳、手、足など、すべて使うべきときに使えるからこそ楽しみがあるのである。(中略) その動きを、動かさずともよいところへ使い、行かずともよいところへ行くから、そこに事故が起るのである。魚や野菜を育ててくださる天地のめぐみ、これと養ない育てる人々の苦労、それが尊い。この尊さを没却しては、かたわである。

もののふ(武夫) 訓 一八 八 二九

負けるも勝つも武夫の智慧と云うのは、ただ武夫のみではありません。「武夫」と云う言葉のつながりは、「もろともに」と云うことで臣民もろとも智慧の力によって勝負がつくのであることを悟らねばなりません。

物の理 命 四五 七 一八

真理は神であり、物の理は仏であります。

物を大切に 命 四八 一二 二七三

物質に恵まれるには、まず物を大切にすること。

もめる 命 四八 一一 一三二

日常生活をしてゆく上に行詰つてくると、このさき、どうなるかと気がもめる。病気になるれば癒るかと気がもめる。人のすることをしながら気がもめる。もめるというのは争いの気持である。(中略) 他人の言動を見聞して気がもめるというのは争いである。見聞して気がもめる時は、極力努力し、反省し、感謝せねばならぬ。

ヤの部

役 命 四八 一一 二六八

どんな役でも喜んでさせていただかねばならない。役をつとめることは徳を流すことであり、ひいては子孫の四合せともなるのである。

約束 ふ 五五 一〇

これは、役目を即座にすみやかに果します。という意味である。「束(そく)は「即」である。今すぐである、いまは都合が悪いから明日にしよう。明後日にしようではない。「即」はまた「速」である。その日その時に果していく。それが約束を果す事であり、責任を果たすことである。(裏表紙)

厄年 敬 四二 一一 二〇

世間では男の四十二才を「厄年」として忌みきらう。大病にかかるか、災難にあうか、事業につまずくか、なにか人生の重大事が起こってくるという俗説のとりことなり、不安におびえる人が多い。そこで厄をのがれるためといっていろいろの祈禱やお参りの行事が行われる。私はこれを迷信として否定する。「やく」は「やく」でも、世のため人のためにお役に立つという「役」であると主張し、私自身、まず身をもって行い示してきた。

役年 誠 四八 一一 一二八

「厄年」とは単に運のまわり合せが悪く、病気をする、災難にあう、失敗する、といったことではありません。「厄」とは「役」であり、役がつくのであります。役がつくときにはいろいろな障碍がある。苦心がある。努力がある。役がつくまでは容易ではありません。四十二才—というのも、役がついて世に(四二)出るということである。

役に立つ 三 四 一 二 四 八

役に立つ 三 四 一 二 一 三 四

役目 三 八 一 〇 一 九

役割 四 八 一 二 八 六

やさしい人 四 二 二 六

八つの心 一 八 八 二 二

そこには、困難がある。だから、日々に新たに研究、努力して進んでいかねばならんと教えられていると信ずるのであります。

森羅万象悉く生あるものは、人が生きていく為に必要であり、お役に立って居るのであります。それ故に、人と生まれて、生きて活かされていく以上には、万物一切のお役にたかねばなりません。(一月二四日)

人が生きて行く為には、あらゆることを修め、学ばなければなりません。なれども学び修めて実行せねば、ことを知ったというだけで、役には立ちません。役に立つから生きられ、伸びられるのであります、役に立たねば生き甲斐ありません。

(四月二三日)

教祖の立場においては、おさとしを取りつぐ。これは命の親の電報配達。

総裁として御指導をする。これは魂の浄化でクリーニング屋。

個人出居清太郎として相談をうける。これは道案内で交通巡査。

内臓諸器官には、それぞれ役割があるように、人それぞれにもみな役割がある。この役割がすなわち道であり、また実行である。(中略) 役割である以上は、いかに重態であつても体の動く限りは努力せねばならぬこともある。かかる時こそ真の実行である。

「やさしい」のは弱いではありません。やさしい人は強い人であり、強い人はやさしい立派な人であります。

それはその人の心には何時も、ほしい、おしい、可愛い、憎い、其他怨み、腹立ち、慾、高慢、この八つの心の持ち方が間違ひなく働いて居るので、それが取り違ひを致しますと病となります。昔この心の持ち方を「病い」と教えられた時代もあります。

「ほしい」と申しましてその人の徳だけのものを欲しいと思うのはよろしいが徳もないのに、人が持つて居るからその人と同じように自分もほしいなどと、己の不徳を知らず身分を省みず勝手気儘の心からあれもこれもほしいと云うような信念を持つて

はなりません。

「おいしい」ともうしましても出しおしみ、ほねおしみ、出すべきものも出さず唯自己の欲望を發揮して居るようなことはいけません。

「可愛い」と申しましても、人の良し悪しに於いて、よき子は可愛い、悪い子供は憎いとか、我子は可愛い、他人の子は憎いと云うような信念を持たず、良き子も悪しき子も神の与えられた子である以上には同じ信念を以って取扱うように致さねばなりません。

「憎い」と申しましても、人を憎まず物体も憎まず、己の非を憎み、足らざる所を憎まねばなりません。神様より与えられた物に直面した時には憎むような信念はいけません。

「其他怨み」

「腹立ち」と申しましてもみだりに腹を立てることは勝手気儘の心の持ち方であつて、みだりに人の欠点を見たり、聞いたり、かんしゃくを起し腹を立てるようなことなきようにしなければなりません。

「慾」を申しましても、人をよくするとか、物をよくする、とか云う「よく」はないのでありますが、「我慾」「どん慾」「色慾」等の慾は最後にそのために、身を亡ぼし一家を破壊するようになりまますから、このような慾は取り去らねばなりません。病身になって苦しむ人は知らず知らずの間に天則に違反して居りますことは間違いないと思います。

そして最後に「高慢」と云うことは高振るような所から過ちを起すことが多いのであつて、つつしまねばなりません、勿論人に接し人に話をするにしても自分の体験を話しするなどは差支えないのであります。

夜尿症の子供は、母や女中を困らせようと思つてしているわけではない。母たる者は自分が取越し苦勞をしているのだ。無駄働きをしているのだ。反省、感謝、実行が足

らぬのだと思わねばならぬ。それらのことに気づけば、かかる子供が、わが子としてわが家に生れたことが喜びとなり、いつそう可愛くもなり、誠の心で愛せるようになるのである。

山 三三四 一二四二

海は母であり、山は父であり、海の幸を無駄にすれば母に不孝となり、山の幸を無駄にすれば父に不孝となります（一月二一日）

病い 三三八 一四

今いかに身が健全であっても、心のもち方使い方が狂えば、いずれか身の動きのできない結果があらわれてまいります。

病い 三三九 七一八

病い（やまい）は「矢前」（やまえ）である。矢が我が身の前に来ているのである。これを避けようとしてはならない。ボールをつかむように、感謝で受けとめることが肝腎である。

病い 命 四八 一二三四

反省、感謝、実行があれば病いは克服される。反省は雑音のなやみを浄化する。病いは心のかげである。びったりとした時にかげはない。つまり、伏せの姿勢である。地にびったりとした時は、地についた時である。しかして地につけば、地から力が湧き出るので。病いに負けてはならぬ。バイ菌を気にすることは負けることである。

大和 敬 四二 一二二五

人が生まれるとき「オワー」と呱呱の声をあげる。いわば、人がこの世に出てきた宣言である。「オワー」という呱呱の声は万国共通である。また、あらゆる人種にも共通である。「オワー」は「大和」である。大きな和である。和は輪であり、円であり、丸い。万人共通といえば人がこの世に生まれ出るとき、すべての人は頭から生まれる。頭は丸い。これは円であり、大和である。円は「零」であり「霊」である。

大和魂 大和魂 三三九 四三

本会の主張する「大和魂」とは、（中略）大きな和であります。和は円い。円には起点も終点もなく無限であります。

大和魂 大和魂 三四九 一二六

大和魂というのは、人をチョン切ったり、国を奪いあいたり、生命財産を略奪するのが大和魂ではありません。文字どおり大きな和です。それが大和魂ですから。

大和魂 大和魂 三四九 四四

大和魂―は万物の霊であり、太極の分霊であります。そしてこの趣旨にもとづくこと

大和魂 五三 二 四

は神の子の責任であり、義務であります。二千年を越える歴史を持った日本には、大和魂があると聞かされてきました。大和魂は、戦いに勝つためではありません。大きな和であります。この精神こそ、清き神であります。

大和魂 五四 二 二

大和魂という言葉は、大和(たいわ)の精神であり、天に輝く日月の精神であり、黙々としてこの世に光をともし精神であります。しかも、日月は悠久であって、いつ終るといふ時はございません。

大和魂 敬 四二 一一 二五

「大和魂」というと、日本人だけのもののように考える傾向がある。ことに戦後は、皇室中心、軍国主義を支える精神主義の代名詞だといって極端に排斥した。これは思い違いもはなはだしい。「オワー」という呱呱の声人が人として生まれ出た宣言である以上、これは広い世界のすべてが持っている魂の本質を表したものである。わけても大和精神を象徴した「日の丸」を国旗とする日本の人々は、世界の人たちに先がけて「大和魂」を発揮していかねばならない。

大和魂 告 二四 二 一

大和魂が武士道の精神であって、この精神を叩きなおして行かなければならぬと、斯う云うように考え違いして居る人があります。それが誤った考え違いであって、大和魂と云う魂はそう云う破壊するような、又破壊されるような、国民一般に迷惑かけるような魂ではないのであります。亜米利加の思想に叶わない、亜米利加の人達にご迷惑をかけるような思想ではないと云うことを皆さんに判って頂かねばならぬ。私達が何時も大和魂を発揮せよと云うことは、円満な気持、和やかな気持、朗らかな暖かい気持を発揮せよと云う事になります。この気持が大和魂であって、人をけつたり叩いたり、戦いを望んで争っている気持は大和魂ではないのであります。(中略) 捧誠感謝の心と云うものは誠の愛であります。誠の徳であります。誠の力であります。この三つが捧誠感謝と云うことになる。感謝が心に湧き出ることが出来ないとすれば大和魂が腐っているので大和魂が縮まって居ると云う事になる。

闇 誠 四八 一一 一〇

「闇」（やみ）という言葉は「病みわずらい」の「病み」に通じますが、闇で先きの見通しがつきませんから、病みわずらいになってくるのであります。

闇 命 四八 一一 一四六

妻は夫に理屈をいうな。理屈をいうことは、苦痛を夫に与えることになる。夫も妻に理屈ぬき、そこで夫婦相和となる。（中略）理屈をいえば、おたがいに苦痛となり、

闇の心 命 四八 一一 一〇九

心はまつくらとなり淋しい。心が闇になれば、やがて病みわずらいとなるのである。闇の心は不平不満の心であり、怒りの心、嫉妬の心である。いやしい、程度の低い心である。この心が交流している間は、家族も真の幸福とはいえない。真の幸福は心と心の合掌、つまりおまいりである。

病み患い み 三四 一一 一四一

万物一切は人の生きる為に全部を捧げ尽くしております。（中略）人が万物の霊長であり乍ら万物を愛さず、尊敬もせず、感謝もせず、しないのを当たり前として、我ことのみで気随気儘の行動をし、ついに病み患いをして不幸に陥ることは、万物の恩恵に報いることさえも実行も出来ないからであることを、万人認識して戴きたいのであります。（三月八日）

病み患い み 三四 一一 一五二

地球上に生ある物体は借り物であることを自覚するならば、争いも病み患いも少ないのであります。（三月十四日）

病み患い み 三四 一一 一五九

人の身に病み患いが出てくるのは、神が大きな慈愛をもって悟らしめ、正しい心で正しい行いをすべきことを教えられるのであります。又人の患いを引き受けて、病み苦しむこともありすが、それは自分自身が過去において、人を苦しめたことを、現実の苦しみによって教えられることを悟らねばなりません。（三月十七日）

病み患い み 三四 一一 一六五

一本のマツチ、塵紙と雖も、人の生活に役立たせる迄には幾多の苦心がこもっております。それを無駄に使ひ軽率にするから病み患いをして、不幸になっていくのであります。まず患いをした時には、物を粗末にしなかつたか、心の無駄遣いをしなかつたかを真つ先に考えねばなりません。（三月二十日）

病み患い み 三四 一一 四六九

神の道、人の道を学び修めるだけでも長い年月日がかかります。まして実行となりま

病み患い み三四 一二 七五五

すと容易ならざる努力が必要なのであります。万事知り尽くしておりましても実行が出来ないために病み患うて苦しむこととなります。(八月十四日)
 常日頃万物の恩恵に報いず、人の恩義を忘れ、我執と貪欲のみでおりますから、身によつて教え示されたもので、一日も早く幸福になれるようにとの神の慈愛であります。
 (十二月三一日)

病む ふ三九 八 一九

病みわずらいの「病み」は「闇」であり、くらやみ(倉闇)である。倉にはいろいろの物が入る。肉体でいえば、胃は倉である。いろいろの物を入れるばかりで消化せずにおいたら、肉体の患いとなる。これを「暗闇」というのである。

病む ふ四二 三 一三

「病む」或いは「病み(わずらう)」「は「闇(やみ)」である。闇の中ではわが身の姿も見えず、道もわからない。迷うてしまうのは当然である。

病む み三四 一二 三六

健全なる肉体と謙虚な姿とを保ち、自己の信念を善良ならしめるために病み患いがありまして、それによつて教えられるのであります。(一月十八日)

病む み三四 一二 四九四

何故神の子であるのに病み患いが出来てくるのか、それは天地の理法にそむき、基づかないからであります。(八月二七日)

病む 訓一九 一二 一三

心が病めるのも、肉体が病めるのも、神を中心に信じて行けない為に病み患いをするのであります。何よりも以上に撚りをかけて、寄合をして(即ち相談)是こそ忘ける事なく努力しなければなりません。

病む人も病まれる人も み三四 一二 三六

病む人も病まれる人も誠を捧げ、不平を思わず不満を言わず、慰めつつ、誠の愛情を捧げ尽しつつ、実行しなければなりません。病む人が不幸でもなければ、病まれる人が不幸でもなく、どちらも嘆き悲しむことなく介抱すべきであります。(二月十八日)

やめ(止)る ふ三八 六 三五

「止める」というのは切ることである。

やめる 命四八 一二 七七

生きてるのがいやになったり、ついには捧誠会もやめてしまおうというようなことになる。やめることは即病めることになる。消化できないような雑音は流してしまえばよいのだ。ただし、流すとは他の人に語ることでなく、感謝することはぬぐい去る

やります

ふ 三九 九 二二

ことなのである。
「出来ない」と思わず。「出来ない」といわず。やるという決心を持ちましょう。「やります」「やってみます」という心がまごころでしょう。皆、この心になりましょう。そうして「やります、やってみます」という言葉を使いましょう。

ユ の 部

ゆ（い）うのみ

誠 四八 一二 九二

立派な言論を吐いても、いうているだけではないでしょうか。「いうのみ」は「湯のみ」であって、お茶わんだ。いうのみであれば、お茶をのんでしまえば、それでおしまい。あとで、こう言ったね、と言われても、知らないと言えば、それでおしまい。

悠久

ふ 四四 二 二四

悠久

ふ 四九 一二 四

真刻の一瞬一瞬が悠久につづくのである。悠久であって永遠でない。皆さんの今の一代だけでなく、子のため、孫のため、世の人のために、一代一代と受けつがれていくものであります。時は変わり、人は変わっても、長くは千年・万年とつづいていかれて、始めて悠久という文字がでてくるのであります。

悠久

ふ 五一 一〇

天地自然の運行は一瞬一瞬のきれめなき連続である。一瞬は一神であり、この一瞬が神の行動である。典範に「悠久なる世界平和の顕現」とあるが、真刻の一瞬一瞬が悠久につづくのである。悠久であって永久ではない、悠久には一瞬のゆるみもない。悠久は厳粛なる一瞬一瞬の連続である。（裏表紙）

悠久世界平和

ふ 五二 七 二

悠久世界平和の建設は建物だけのことではなく、一人一人の心の中に平和が建設されなければならぬのであります。一人の人の心の中に平和が建設されれば、十人の心の中にも平和建設がなされてまいります。逆に一人の人の心が狂えば、百人の人の心が動揺し、悩み苦しむことになるであります。まして、指導者が誤れば万人にその影響が及ぶのであります。

悠久世界平和郷 　　ふ 五〇 二 一四

各国の代表者が、政治によって平和を築くのではなく経済力によって文化を築くのでなく、各自のいのちを中心にして汲めどもつきぬ宝である各自の精神を土台として、悠久世界平和郷を各国に築いていくことを、まず、本会から手本を示せといのちの親は、大正十二年九月一日の関東大震災を教科書として、教え諭されたのであります。

悠久世界平和郷 　　ふ 五一 八 二

この建設は、命の親のみ心に基つき、天地自然の法則に沿ってなされてゆくものであります。すなわち、神の道人の道の両道こそ大切であります。この建設がなされました趣旨は、いのちの親のみこころのままに、今までも折りにふれてお取次させて頂いてまいりました。(中略) 悠久世界平和建設におきましても、天地自然の法則に基づいて実行することと、人と人との間の契約をすることの両方が大切であります。この両道は、すべてのことに通じる真理であります。

悠久世界平和郷 　　ふ 五一 八 五

悠久世界平和郷は、とくに、壮青少年部の育成の場であります。これからは、すべての指導者が天地自然の法則を学び修め、それに基づいて自ら実践してゆくようであれば平和は築けないのであります。そういう世の中になるのであります。

悠久世界平和郷 　　ふ 五一 一 五

悠久世界平和郷は捧誠会の団体のものでなく、日本国民のものでもありません。世界の皆様の修養練磨するところであり、神・人合一の誓いをするところでもあります。

悠久世界平和郷 　　ふ 五一 五 一

ダルマ山に悠久世界平和郷を建設することは、天地自然の法則に基つき、命の親のご指示によるものであります。この建設を真心から行っておりますことは、世の人々が迷信に惑わされ身の借物も知らず、靈魂不滅も自覚せず混沌としている現状の建てなおしという目的目標をもっているのである。

悠久世界平和郷 　　ふ 五一 五 五

お互いに団結協力融和して暮してゆこうということをお誓いする場がだるま山の悠久世界平和郷であります。不平不満を浄化するのが富士を拝する心であります。

悠久世界平和郷 　　ふ 五一 二 六

この神里悠久世界平和郷は、手を合わせ、商売の繁昌や病気の恢復を祈る場ではありません。むしろ、苦しいときの神だのみと言われるような迷信的な考えを浄化する場所であります。

悠久世界平和郷建設 五 一 三 九

悠久世界平和建設とは、万霊万物尊愛、すなわち、徳と力と愛という無限の財産を蓄積して無条件交流にあり。

悠久世界平和郷建設 五 一 八 七

捧誠会は、なに派、なに派と分れてゆくことはありません。終始一貫 大極を神として崇敬し、運の健やかにして止むことのない天地自然の法則に基づいて、万物の霊長として人格を高め、神の子としての誇りをもつていかなければ悠久世界平和郷建設とはなりません。聖地ダルマ山での建設だけが、悠久世界平和郷建設ではありません。皆さんの言語動作が、魂が、磨かれ、成長させて頂けることをさとしてゆくことも、悠久な平和建設であります。建物だけではありません。我々の魂も成長して聖地にならなくてはなりません。

悠久世界平和郷建設運動の目的 五 四 九 一 二 二 六

悠久世界平和郷建設運動の目的は人づくりであって、建て物づくりではありません。

悠久世界平和郷建設の基本 五 五 〇 一 一 二

太極のみ鏡を通じ、霊山富士山を拝することが、神の子としての使命であり神の道を学び修め、人の道をふみ行うことがこれすなわち合掌であります。

富士山は末広であり、末広は無条件四合せであり、これが命の親のみ心であります。

このみ心に添い奉り、行動することが孝心であり、言霊によつて孝心（行進）は親交（進行）であり、親孝行であり、これが天地の理法であります。

晴れてよし曇りてもよし富士の山：その頂上には一里四方の丸い輪のくぼみがある。

大輪（大和）であります。その大和をみ鏡として太極を目標として悠久世界平和を建設するのであります。

悠久世界平和の建設 五 四 九 三 四

悠久なる世界平和建設を唱えておりますが、そのもとは家庭の平和、職場の平和、社会国家の平和からであって、要するに人格の完成であります。

悠久世界平和の建設 五 五 二 三 五

魂を浄めるための試練から逃れることなく、誠の感謝で通させて頂く私たちになることが悠久世界平和の建設であります。

悠久世界平和の根元 五 四 九 四 三

万物が生成発展して成長していかれることは、まさに大恩と人の恩義によるほかありま

悠久世界平和の根元 ぶ 四九 四 一一

せん。これは悠久世界平和の根元であり、万霊万物尊愛、人命尊愛の根元であります。悠久世界平和の根元である人の命を尊愛すると同時に、万物の生命を尊愛することであります。

悠久なる平和世界 ぶ 五七 五 二

悠久なる平和世界の顕現も、一人一人の心の平和が実現しなくてはなりません。一人一人の心に平和が実現すれば、家庭に社会に、広く国家に世界におよんでゆくことができる。

悠久の平和 命 四八 一二 二七八

実だけの幸福は人の肉眼で見ただけのもの、すなわちその場だけの幸福である。真の幸福は悠久の平和である。

誘惑 み 三四 一二 四四二

常に軽はずみで油断をし、協力も融和も出来ませんと、他人から嫌われ誘惑されるのであります。(八月一日)

行き詰る ぶ 三六 一一 二

ゆきづまって身の動きがとれないということは、重い荷物を背負って歩いていることでもあります。それはどん欲のために、どこまでもその荷物をになつて、死んでも物ははなさないという不徳が、過去に沢山あるからであります。物資はなくてはならない貴重なものであります。徳の足らざるものは、物に支配されて身心の悩み苦しみが、より一層深くなつてまいります。

行くべき道 ぶ 四二 四 一一

行くべき道は、どうしてもこうしても行かねばなりません。

油断 ぶ 三九 一 一四

「油断」とは「隙き」(好き)である。好きが「隙間」をつくる。隙から風も入る。雨も洩る。そこに思わぬケガをすることもあります。

油断大敵 命 四八 一二 二七五

油断大敵とは古くからいましめられていることであるが、決して油断してはならない。たいいていの場合、人々は隙だらけだ。油断をし、隙だらけであると、雑音が聞え、心を悩ませ、迷わせ、怪我のもととなる。

湯呑み ぶ 四四 四 八

「湯呑み」のように「いうのみ」であつて、行いも実行もできていない。

湯呑み 太 四四 一一 一一七

「この口から不平不満を出したらどうなるか。こうして現実に示さなければ気がつかない。これを全国の会員に示す。ここに反省、感謝、実行がある。宣布普及している

というが、このような状況では『湯呑み（言うのみ）』だ。教典にこうだ、みおしえにこうだと言うのみで、不平不満、ぐちをこぼしている。これを浄化していくのが本会の趣旨ですよ！

指 ふ三八 一一 二三

四本の指は隣りあわせでも、互いにその腹は合わせられない。四本の指がその腹を合わせられるのは遠く離れている只一本の親指だけである。（中略）だから会員の皆さんは、私という親の、その高天ケ原に出入りしなさいと、やかましくいつている。

指 ふ四一 六 一

四本の指が腹と腹を合わせられるのは、親指だけであります。お互い同士は腹と腹とを合せ得ませんが、ただ一つの親指には合わされます。即ち、「帰依」できるのであり、帰一できるのであります。

指 ふ五二 一一 四

手の五本の指のうちで人さし指から小指までの四本の指は互いに隣同志であっても互いに腹と腹とが合いません。親指は、ほかの四本の指とは遠くに離れているが、どの指とでも腹が合う。

指 振四二 一 三

四本の指は腹が合わないけれども親指には腹が合う。これ即ち合掌なのであります。話し合いとか、協力とか、融和と云う事は合掌でなければならぬ。人の感情的な理論屈では合掌出来る筈がありません。

指さす 命四八 一一 二二九

指一本で人の欠点をさせば、三本の指でみずからがさされているのである。指輪、和ですが、そこに飾られるダイヤモンドは、山で、川で、五千年も磨かれております。

夢 ふ五五 一一 二二

見ようと思つて見るんじゃない。夢は、む（無）でしょう。無条件でしょう。こわい夢を見るのも、うれしい夢を見るのも、みな、これ自然ですから。

ヨの部

よ	訓	一九	一一	九
世	ふ	四二	一一	九
世	ふ	四三	一一	二
良い声	命	四八	一一	二九七
良い種	み	三四	一一	七五一
良い使い方	命	四八	一一	二八二
よい方にとれ	命	四八	一一	二八九
良いよう	み	三四	一一	四八三
ヨウ(病気の)	敬	四一	一一	一五一

仕事をする時には先ず心構えと身支度用意が大切です。「よ」は働きであり、世の中でありませぬ。

「世」といいますが、己れみずからも「余」と申します。余という自分自身の心の中には他人はないはずであります。また自分自身の余の中といえは胎内の中のことでありませぬ。(中略) 故に他人ではありませぬ。

自分のことを「予」という通り、この自分は世界であります。「世の中」ともいいますが、これは「予の中」で世の中こそ自分の姿であります。

良い声をかけることにより、子供は心身ともに健康になる。声は肥料である。

良い種とは、己れを虚しうして善行を積み重ねること、即ち神仏、両親に仕える奉仕であります。(十二月二十九日)

心の持方を良くしないと、良い使い方はできない。

物事のよい方を見ること、何事でもよいようにとることもまた誠である。

人の言動を見聞きして、何事も良いように解釈し、教科書として自己の人格を高める糧とすることです。良いようとは即ち栄養であり、栄養は万物が成長して行く糧であり、これにより人の生活もよりよく幸福になつて来ることは事実であります。

(八月二一日)

首にでる「よう」は俗に「首切りよう」といわれ、いのち取りと恐れられていた。痛みは激しく高熱も伴っていた。それでも私は医者にみてもらおうという気はなかった。毎日机にもたれて坐りつづけ、二十日あまりも冥想にふけていた。——これでよい。実行だから無条件である。これでよい。全ては私がひきうけていってよいのだ。「よう」だから「用」に通う。まだまだこれから神の用をさして頂けるのだ…。と悟っていたので、いのちの不安におびえることは更になかった。

幼 命 四八 一一 一〇七

幼とは目下の者だけを意味するのではなく、自分に与えられた職分をもいうのである。職分に不平不満をいわず、慈しむべきである。

ようかつた 命 四八 一二 六六

よう勝った(勝った)という力は、産み出す力であり、産みおろす力である。私でよかつたと思う真心が救いのものである。人をいませぬ、己を悔い改めるのだ。よう勝った、よう勝ったと勝ちぬいてゆけ、そして、女は愛嬌をもち、親切をもち、禍を喜びにかえる強さをもつて進め。

溶岩 太 四四 一一 一七九

溶岩は、世一予一の融和(岩)であります。

幼をいつくしむ ふ 四五 一二 二〇

幼を慈しみということは、この世であります。又余、つまり自分でもあります。小さい子供だけじゃない、目下の者だけじゃない、幼を慈しみということは、この世に活かされている天地の姿に慈しみを持ちなさいということです。

よき縁 誠 四六 六 五五

「よき縁」とは、おたがい太極にそうていく心構えがあるかないか、おたがいに神に近づくよう、親に孝養をつくして人の道をあやまらぬようにいこうという決意を固めているか、いないか、—これによつて決まるのであります。

預金 ふ 三九 七 二一

いつ困ることがあるか知れないというので預金している人がある。その思いでたくわえた金は、やはり困ったことに会つて消えてしまう。(中略) お役に立つ為にと考えたらどうだろう。

欲 ふ 四二 四 一四

お互いに、よくなりたいと思わぬ人はないのであります。その慾にも、身欲、我欲、貪欲、色欲などは天則にかないません。

欲 訓 一九 六 一〇

「良く」と「慾」とは紙一重。人を良くしたいという気持を捨ててはいけぬ、生活に楽しみが無くなる。然し他人を差し置いて自分の慾を通したいと云う慾はいけぬ。人が生きていくために「欲」はなくてはなりません。欲は希望であり、この希望を失なつてしまつては前進も努力もなくなります。ここに「我執」の「執」は相手に迷惑

欲 誠 四六 六一〇四

をかけることであつて、相手を踏みたおし、踏みつぶすような、そういう心を持たぬように、よく学んでください。

欲 命 四八 一二 一五一

立派な、美しい欲を忘れず、正しい欲を、さらに大きく拡げてゆくところに、家庭も国家も真に進展してゆくのである。

翼 命 四三 三 八

翼（よく）は「欲」に通じる。人生において我執食欲のみでは片翼であって、片翼では飛行出来るわけがない。「他自ともに」「神のみち人のみち、この両道を学び修め」と、教えている。これは両翼であり合掌である。ここにはじめて平均と平和と安定とが生まれ目標に向かつての前進がある。

よくがふかい 命 四四 三 九

「欲」とは「翼」であって尊い言霊である。「ふかい」言霊もまた尊い。深い所に鯛は住むが、（中略）また欲を忘れてしまえば、生きていけない、死んでしまう。欲が深い——とは実に有難いこと、大いに深く入っていきこう。

欲心 訓 一九 六 五

良いところばかり取り入れて悪いところを取り入れないと云うのは欲心である。

よくない（病） 命 四八 一二 一五一

医師の診断をうけ「よくない」といわれたと語る一青年に「欲がないのだ。徳を積む欲がないのだ。己を虚しうして徳をつみ、徳を流すという欲がないのだ、ということ」を反省せよ」と教えたことがある。

汚れた水 命 四二 五 一〇

清き水、汚れた水と申しましても、それは、清き水が汚れ、汚れた水が清くなるのであって、絶えず循環しているものであります。この根本が悟れますと、清き水も、よごれた水も、共に尊しということが心の底からわかるのであります。即ち、いつも姿や形にとらわれることなく、この根元に心の目をむけていくことが大事であります。

よしあしの判明 命 三九 六 一八

くらやみの中では眼があいておっても、物の姿は見えない。（中略）我々の目は物に光りが添うて始めて見えるのである。『まことの光りが輝けば』そして『徳の光りが輝けば』——何が見えるかというと、ことの良し悪しが判明する。

四つで一つ 命 四四 六 七

天地自然の法則の原則として「四つの交流」を実行するように——と教えている。言葉の交流、心の交流、身体物の交流、物の交流という四つであるが、これは切れ切れではなく循環して一つである。四つで一つである。物の交流はできるが、言葉の交流ができないというのは理くつである。どの一つでも誠をささげて行えば、四つ循環し

四つの拍手

ふ 五〇 五 二

ていることがわかる。
本会では、ご神前におまいりする時に、四つ拍手を打ちます。ふつう、神社では二回うつのですが、本会ではこれを四合せ（しあわせ）として四回手を打ちます。

四つの交流

ふ 三八 二 二

本会は誠を捧げて実行せよ、と力説しております。その実行とは、心、言葉、肉体、物、この四つのものの交流を誠を捧げて行えよ、とくりかえし、なおくりかえし教えしております。

四つの交流

ふ 三八 八 一七

「あなたは、心と身体と物の交流をした。御馳走して差し上げたいという心、それを作ってここまで持って来た身体の動き、そして御馳走という物―三つの交流は出来ているが、言葉の交流を忘れていてしょう。「どうぞ、おあがり下さい」という言葉を忘れていてしょう。三つの交流が出来ても、一つ欠けていると、全くものになりませんでしよう」と教えた。

四つの交流

み 三四 一二 五七三

言葉の交流も物の交流も、自分が嬉しいから言葉を出す、物を出す、相手も喜ぶからということだけを考えて交流しますと、それがかえって他方面から妬み、恨みを受け、一時の喜びは悲しみとなり、迷いを起こし、戴きながら不安になり、差し上げたことが仇となり、無駄になることが多いのであります。（十月三日）

四つの交流

敬 四二 一二 二八六

聖 感

心の動きむだにせず 体の動きむだにせず

時の動きもむだにせず 物の扱いむだにせず

すべてを生かし尊べば 病んで苦しむこともなく

いきいき伸びるうれしさよ なんでこうなるなぜならぬ

悩み苦しむ人たちは むだにするから病めてきて

進歩もせずに行き詰まり 早く改め進まなん

四つの交流

敬 四二 一二 二八七

天地自然の法則

(心) 目には見えねど心こそ よきにあしきに動くなり

四つの交流	敬	四二	一一	二八八
四つの交流の趣旨	ふ	四三	一一	一七
四つの呼称	ふ	四〇	一一	一三
世なおし	ふ	四七	二	八
世の中	い	一八	一〇	一
世の中	ふ	三九	一一	一五

それを見定め理解して 心の交流するぞかし

(言) 言葉を常につつしみて まるくやさしく清らかに

出して出させていくならば 仇なす人もなかりけり

(体) 体の動きは機械なり 無理に使えばこわれゆく

よきことするもなさざるも 体の動きできまるなり

(物) 物の動きも生きるため 仲よく暮らす糧として

上げていただくその時は 誠捧げてつくさなん

四つの交流は天地自然の根源的な法則である

四つの交流の趣旨は物も言葉も身体も心もお役に立つように使うことです。

「みおしえ」で、命の親がわれわれに呼びかけられる呼称に四つの種類がある。

「おたがいに」「よもの人」「もろ人よ」「みちの人」である。

「おたがいに」―これは縁の近い人を指された言葉で範囲が狭い。

「よもの人」―となると、空気と光りと熱とを頂いている全世界三十数億の人々を指

されており、非常に範囲が広い。

「もろ人よ」―は一切の人々よという意味で、よもの人と同意義に受けとられやすい

が、その範囲は日本の人に限られる。

「みちの人」は―神の道、人の道を学び修めている人々、みおしえを聞いている人々、

即ち本会会員をいう。

「みちの人」は「身内の人」でもある。(中略) それほど親しい間柄である。

これまで歩んできた会員の道中をみなおしすることも、世直し(余直し)であります。

世の中は元来何事を為すにも心の持ち方とその行いに因って幸不幸が表現するものと

信じていますが、人は神様の懐中(フトコロ)のような世の中に生活させて頂いている。

世の中は「余の中」である。(中略) 世の中という場合、それは向うのことをいう

のではなく、自分のことである。

世の中 　　ふ 四一 一一 一〇

「世の中」は「予の中」とも言えよう。「予の中」に他人は一人もいない如く、世の中にも他人という人は誰もいない。みななにかにつけて縁の糸につながっている。

世の中 　　ふ 四二 一一 一五

世の中は神のふところの中のようなもので、温かく、尊い血が流れております。

世の中 　　ふ 四四 一六 三

世の中は「余の中」は自分のことですよ。世の中は外（そと）にあるのではなく、この高天ヶ原に世界があるのですよ。この高天ヶ原に「精神」があるでしょう。精神は精神であります。清き神であります。ゆえに、世界の平和は、この高天ヶ原にあるのであります。

世の中 　　ふ 四六 一一 二二

世の中というのは相手の世の中ではない、自分のことです。（中略）さらにいいかえればこの高天原にあるということですよ。

世の中 　　み 三四 一二 八

世の中とは、心の中、家の中、中その又、中のごとで、これを清く、美しく、正しくする為には、協力と融和がなければなりません。（一月四日）

世の中 　　訓 一八 一八 五五

己れ自身のことを「余」と申します。世の中と云うことは己れ自身の心の中とも申しましよう。心の中には他人はいない筈であります。又己れ自身の世の中と云えば、胎内とも云えるのでしょうか。胎内の胃腸心臓肺等は他人のように思いますが、働きが違うだけでつながって居ります。故に他人ではありません。世の中に他人はいない。親切をしたつもりがあだになっても、不平不満をもたず、いのちの親を信じて無条件実行をしてゆく人は、医師の診断で危篤と言われても、よみがえるのであります。

よみがえる 　　ふ 五四 一一 四

「よもの人」——となると、空気と光りと熱とを頂いている全世界三十数億の人々を指されており、非常に範囲が広い。

よりのも 　　ふ 四四 一二 一九

「よりのも」というのは、ひとすじの縄によりをかけること、よりをかけるということとは、誠心誠意であります。「しんぼう」であります、捧誠精神であります。これはただの名前ではない。私たち同胞は一丸となって平和の建設をしなければならぬ責任がある。（中略）会員一同は手本を示して行動していかねばならない

責任のあることを本年から自覚してください

夜 振 四三 三 二

夜は、よる、寄る、縊る、即ち集まること、又糸にしても、ロープにしても一本では縊ることが出来ない。二本以上の糸が合掌してゆく事を縊って行くと云う。即ち合掌して、相寄り、相縊ることが、夜と云うことたまになるのであります。

よろこび ふ 三八 一一 二七

よろこびは到るところにある。われわれの身边には喜びの種は無数にある。ただ人は、それに気がつかないだけである。

喜び み 三四 一二 二九二

お互いに喜びを分かち合っていくには、己れを虚しくして徳を積み及ぼすことであります。喜びは一時的のものでなく、終生の奉仕でなければなりません。(五月二二日)

喜び み 三四 一二 二九四

喜びも自己主義や自己満足のみの喜びが多く、己れの欲するものを人に与えるとか、我執食欲を取り去り、人を救おうとする心がけを持つ人が無いようであります。

(五月二二日)

喜び み 三四 一二 二九六

喜びを求めようと欲するならば、神の道を信じ行い、人の恩義を忘れず、終生の奉仕につとめ、人の協力を破壊してはなりません。(五月二三日)

喜び 命 四八 一二 九六

つらい、苦しい中から喜びを見い出せ。多くの人は見い出すことができないのだ。見出すべく努力をすればかならず見つけ出される。

喜び 命 四八 一二 九七

無条件で誠の業を喜び励みつとめるところに、真の喜びがうまれてくるのである。

喜び働く 命 四八 一二 二七九

真底から喜べば病気の身体でも起きあがることができる。

喜ぶ心と愛する心 命 四八 一二 二八五

一億の金を喜ぶ心よりも、十円の金を愛する心が尊い。

万ずの物 訓 一八 八 二四

この世の、よろずの物は大神様から拝借しているようなもので我物と云う物は「心」一つより外にないのであると云うことを悟るまでには中々困難であります。

弱い心 ふ 四五 一一 一四

この公害を消滅するためにきびしい道を通らねばならない。またきびしい道を親は通させてくださる。親は道を作らずして子供にこの道を歩めとは教えていない。命の親は神の子に対して道を作らずして通れというようなことは、絶対に教えてないのであります。しかし、その親が作った道はきびしいのであります。そのきびしい道を通り

弱い心

ふ 四五 一一 一五

越していられるように、ふだんから訓練をせよ、稽古せよ、ときびしくさとされるの
であります。そのきびしい道なるたけ通らずして、近道をしよう、遠回りしても楽
な道を通ろうという、その弱い心が迷心となつて、迷いとなつてわが心から種をまく。
天借を積み重ねて花も咲かず実りもないような苦労ばかりしている人が、どれほど存
在しているかも知れません。

本会の趣旨を通じて申しあげるならば、その会社の公金を使つて、その会社に迷惑を
かけて辞職するとはなにごとだといいたい。より以上に改めて一切を捧げてその会社
の復興のために努力する社員こそ、本会の趣旨を身に修めた誠の心の立派な社員では
ないかと、こう思うのであります。大失敗したから辞職すればいいんだ、というよう
な考えの持ち主の人は、これまでしばしば見受けられる。

弱い心

み 三四 一一 二〇八

不自由な時に、迷える時に、神頼み人頼みをするのはそれは弱い心で、失敗が重なる
ものであります。(四月十日)

弱い心

み 三四 一一 四〇二

苦難を悲しみ、苦難から遠ざかろうとすることは心の弱さであります。(七月十三日)
会員の中にも、失敗を歎いて、顔むけできないとか、敷居が高いとかいう弱い人がお
ります。こういう人が迷う。迷いやすい。この弱い気もちを改めて神の子である自覚
を持つ。天地自然の法則を学びおさめて、強く正しく、前進をする。

四十四年

ふ 五三 三 四

悠久世界平和郷建設が打ちだされたのは昭和四十四年であります。四十四年という言
霊は、四合わせであり、十は神と人とが協力・団結・融和して、神の子の人たちが、い
つまでもま心で世界の平和を築いてゆきなさいという、いのちの親からのお諭しであ
ります。

ラ の 部

楽 一八 一〇 四二

人は楽をすると云う事を取り違えたり感違いしたりすることがあります。楽をすると云う事を簡単に考えると怠けるように思う場合がありますが、楽しみなくして生活もなく実行も出来ず、楽しみあればこそ、為すべき実行も為し遂げてゆく事が出来るのであります。

楽 ふ 四四 八 二

楽な場所には真実がこもっていません。(中略) 楽を望み、楽な仕事に心がつながらようなときは、危険信号であります。(中略) 楽あれば苦あり——のたとえのように、楽をしようと思えば、かならずその後には大穴がある。(中略) 人の世に名誉や金や物がありますとたいへん楽で幸福だと思う人が多いのですが油断がありません。(中略) 活かされてゆく喜びしさを忘れてはならないと思えます。

楽 ふ 五五 九 三

楽と申しますが、楽の中に苦があります。苦楽ともいう。苦を避けて楽だけという訳にはいきません。むしろ、難を通らないと極楽にはならない。平和にならないのでありますのに、誰しも難を避けようとはばかりしているのであります。

落書 命 四八 一二 一三

不平、不満、悪口を他にいうことは人の心に落書しているようなものである。他人の家に行き不平をこぼせば、その家の人の心を汚すのである。汚されても洗える人ならばよいが、洗えない人のところでこぼせばその人の心に落書を残すわけで、その家の障子や壁に落書したのと同じことになる。

落伍者 命 四八 一二 八五

落伍者とは心の中に楽をしようと思うような人である。敗残者、落伍者にならぬよう実行を教えるのだ。

落第 い 一八 一〇 四一

落第は勤めの足らぬ証拠なりと申してあります。己の非を悟らず、己の勤めた事を偉そうに発表する人こそ落第するのであります。落第と申しますと、学生が試験に落第するように思われますが、この場合でも熱心に勉強した学生が落第する場合があります。唯学生だけの熱心な勉強だけではいけないのであって、その家庭にも落第すべき

落第

振 四三 八 五

行いをしていゝことを悟らねばなりません。如何程学生が頭脳明晰であつても、その両親のうちにて於いて落第すべきような事をしておりはしないかと考へねばなりません。又さほど智慧はなくとも落第をせぬ学生もありますが、そこには両親の功績がありその勤めを實行してゐる事を悟らねばなりません。(中略) 唯人は及第落第をその場の計算で、どうや、こゝやと申しますが必ずお互いに勤むべきところを勤め、証拠の見えるまで実行すべき事が肝要なのであります。

人生行路には幾多の障害も誘惑もあり、其の他、人災、天災あれど、其の中を乗り越へし生活して行く事はまことに厳しいのでございます。その厳しい事を避けようとしてはなりません。厳しい事を避けようとするような根性であるから墮落し落第するのであります。人生行路の厳しさを避けようとする者は、世の敗残者となる事を私は言明する。これは捧誠会の会員のみならず国民に告ぐと云う中に、数々其の言葉が出ている筈であります。

落第

命 四八 一二 七二

いかなる苦勞艱難も「いらつしやい」と喜び迎え、感謝してゆくようにせねばならぬ。楽なことだけを望み、苦勞は人におしつけるような人が多いが、これは落第である。

りの部

理

訓 一八 八 六一

昔から「理の下はくぐれない」と云いますが、理は奉仕と同じく絶対のもので、全能の神の御心を理に現したものであります。

理

振 四三 五 三

このことわりを、この理を、理くつでなく、理の下に「くつう」を付けないで、弁解しないで、理と云うものは絶対のものである。

理

命 四八 一二 一五四

理にかなつて始めて美しい、麗わしい生活ができるのである。よい気持で、よい言葉を使い、よい行いをするのが理であり、徳をつむことになるのである。

理屈 五十一 二二

理屈には文字どおり屈（くつ＝苦痛）がつく。理屈は相手の人に理解されないから、さびしい心になる。理屈は言うのみであって、実行と行いがともなわない人の言葉であるから、結果としては苦痛になってきます。理屈の理はことわりです。ことわりとは天地自然の法則です。このことわりがわかれば身の借り物ということがわかる。

理屈 誠 四八 一二 一七五

意地っ張りで「我」が強いと、どうしても理屈が多くなる。人の言葉を「裏ぎって」も、理屈をこねまわして、ごまかしてしまふ。理くつーというものは、裏を切る。表を切らなくて裏を切ってしまう。お召しものなら袂を切つしまふ。片袖を切つてしまふ。片袖きられた着物は見てわかりますが、言葉で切つたのは目に見えません。

理屈 命 四八 一二 一四

理屈をいうことは、相手に苦痛を与える。理屈をいうことは相手に苦痛を与え、そして不徳をつむことになる。

理屈 命 四八 一二 一四六

妻は夫に理屈をいうことは、苦痛を夫に与えることになる。夫も妻に理屈ぬき、そこで夫婦相和となる。理屈を抜きにすることが、子供を健康にする根本である。子供が弱くなるのは夫婦が理屈をいい合う生活で苦痛を与えあっているからである。

利口な人 命 四八 一二 一七五

難しい人だといわれるより、優しい人だといわれるようになれ。難しいことを勉強して、難しい話をする人を偉い人という。利口な人、難しい人の意である。まじめな人とは優しい人である。学を修め業を習えと教えているが、もし学を習えば、徒らに利口となり、理屈だけが多く、実行の伴わぬきらいがある。

利子 五 四六 二二 一一

善にも悪にも必ず利子がつく。（中略）天地自然の法則によって、私たちの言語、動作にも利子がつく。この利子のことわりがわからないから、人の世が「不公平」に見えるのである。

利子 五 五〇 一一 八

善にも悪にも、行ったことは利子が積み重なってまいります。それは天地の理法であります。

立派な人 一 一八 一〇 一二

立派な人とは素直で無条件で、各人の天職をその日その日実行して、神の道に従い、

立派な人

ふ五一 三 七

人の道を守り、人生を清く、明るく、生活してゆける人こそ立派な人であると思います。捧誠会では、徳高き人、真心の人のことを立派な人という。この結論は、信用であります。神の用であります。我が世ではなく、君が世であります。

理の力

訓 一八 八 六二

精神的の利息は何でもないようではありますが、それからそれへと重なって、精神的に行詰り苦労するようになります。何しろよいことも悪いことも理の力によって現れて来るのでありますから、人としての幸福を求めんとする人は精神的の殺人、強盗、誘惑などさらさら心に持たぬよう実行いたさねばなりません。

流産

ふ 四五 五 一〇

「流産」は「硫酸」である。硫酸がかかると、物が焼ける、燃える。焼ける、燃えるというのは摩擦が原因である。せっかく胎内にやどった尊い「いのち」が育たないというのは、いわば、種をまいても芽生えないのと同じである。「芽生えぬ」という言葉は「会えぬ」であって、ほしい子供に会えないのが「流産」である。なぜ種が芽生えないのか。「会えない」というのは「愛ない」であるから、つね日ごろに、愛がないからである。

良縁

ふ 四四 六 八

若い二人の男女が、たがいに神に近づいていこう、親の心に添うて行こう、教えを信じて行ない実行していこうと決意をかためていとすれば、これは最良の縁である。

(中略) もろもろの恩義さえも忘れたかのように勝手な行動をするなら、これは良縁ではない。

リレー(競技)

ふ 五一 一二 五

リレーの「リ」は天理であり、ことわりであり悟りであります。「レー」は靈魂で、魂であり、精神であります。リレーという競技とその言霊によってのおさとしは、このような人生行路なのであります。

淋病

誠 四六 六 二七〇

淋病というのは下の方の病気で、「りん」という言霊は金錢につながっております。円(炎)とか、銭(腺)とか、厘(淋)とか、すべて金錢につながった名称であります。が、とくに、「りん」はお金に近い筋合いをもった病気であります。

礼

ご苦労さまとはお礼の言葉である。礼は〇であり〓和〓〓円満〓〓始めも終りもなく無限である。零〓〓靈〓〓神〓〓靈〓〓神〓〓無限大である。言葉は言和である。和の言葉をおたがいにし合ねばならぬ。

靈

ふ 三九 七 三五

靈は礼であり、感謝です。

靈

ふ 三九 一 一五

この肉体に宿る靈は神のわけみたまであつて「誠」である。

靈

ふ 五四 八 二

一ヶ月の歴を見まして、九のつく日が、九日、十九日、二十九日と三回あります。九を乗りこすと一〇、二〇、三〇となります。これらには、どれも〇がつく、零は靈であります。私達は魂を頂いておりますが、すべての魂が悠久に頂いているわけではありせん。頂いた魂が打ち切られる場合もございます。

靈

命 四八 一二 一六

「靈」は「零」であります。「零」は「〇」であつて丸く正しい。計算の上でも、一、一〇、一〇〇、一〇〇〇…と書き示し、億、兆の上は数字としての名称はありませんが、〇をつづけていけば無限に大きな数を表現できるのであります。世に、奥行きがわからぬ、奥底がわからぬと申しますが、それは数字に表せない無限の力であり数であります。

靈

敬 四一 一二 一九七

靈は礼儀の礼にもつながります。人に親切にして頂き、その時に礼を申すことは、よく知って居りますが、反対に冷淡にされた時には礼を申すと云うような心はなくなつてしまい、反つてその人を怨み、憎む場合が多くあります。冷淡にされても礼を申し上げる信念があれば、靈魂は目に見えて来るし手にも取れて来るようになります。

靈

訓 一八 八 一八

靈その物は神の御心であり、神の御心は万物一切のものに流れているのであつて決して、人だから、草木だから、動物だからと云うて、神の御心が流れていけないわけではないのでありますから、神の御心の流れて居ります物体は総ての物体に対して決して廢物のとり扱いをして、粗末にすることなきように心掛けねばならないのであります。

靈 誠 四六 六一九五

人の道からいえば、靈は礼であつて、礼義を正しくする。神の道からいくと「甘露」であります。人の身体も甘露のような「つゆ」が元であります。種であります。医学上では「精虫」といいます。この精虫が、靈の作用によって—火と水と、即ち陰陽の徳と力と愛によって子宮の中で生長し、この肉体へと完成するのであります。この一滴の甘露—この甘露を育てていくところの胎内の甘露—これを靈魂と称するのであります。

靈 太 四四 一一 三二

神とは万物普遍の靈であります。靈は零であるとその書の初めにも申していますように、零は〇であつて円であり、無始無終の理を示しているのであります。起点なく終点なく、無限の循環であつて、生と死とはそれであります。生と言ひ死と言ひますが、本来は生もなく死もなくただ永遠の命があるだけであります。

靈感 ふ 三八 七 一五

みおしえや靈感の言葉を、まるのみにして判つたつもりでいる人が多い。こういう人は、金を無駄使いする、物の点でも無駄が多い。言葉の音をよく聞き、理解のいくところまで咬みしめていく。そこで始めて心が浄化されるのである。

靈感 敬 四一 一二 一九八

その力によつて、その「カン」によつて「あなたの病いの原因は親に反感を持ち、兄弟争いをなし、万人に迷惑をかけ、万物の恩恵に報いることもできない、その結果として現われるのです…」と判断した時には靈感となるのであります。(中略) 教祖の天稟の資質は、更にまた総裁の研修積徳によつて、一そう磨きあげられ、随時、随所、人にふれ、ものにふれて、靈感がひらめき、靈光がほとばしる。靈感の発動も靈光のほとばしりも、そこには人のはからいが無い。すべては、神のみこころのまにまにである。

励行 ふ 五〇 二 七

励行とはことたまからいえば礼交であり靈光である。

励行 振 四〇 七 一二

時の運行は待つたなし。一瞬一刻と狂いなく速からずまた遅からず運行している。時間の励行ができない人は、人生の徳を縮める。励行は靈光である。

励行 振 五〇 二 二

「時間励行」というおさとしをいただきました。時間を励行せず、遅刻すること、に

「ごれば地獄であるとも教えられています。励行はことたまから云えば礼交であり、霊交であると示されました。時間は待ったなし、おくれることは寿命につながり、又時間ばかりでなく、定められたおきてを守る事の励行、約束の励行、励行することによって守られる、御霊光も頂く。

一度も会ったこともなし本部へ運んだこともない娘さんに直接霊光をおくることはできない。電話でも中継局を経由しなければ継がらぬ場合があるように、その母親とおして送るしか道がないのである。そこで、母親に実行を示すのである。

霊光

ふ三八 一〇 三

無限の徳、力、愛。この三つを及ぼす時は霊光をさずけると教えられています。

霊光

ふ四四 一一 六

努力は動力である。(中略) 教組の身心を回転させ、そこに「霊光」と呼ぶ動力をおこさせるのは神である。(中略) 神が私を動かし回転させておられるのであって、

それゆえに動力が生じ、(だから高熱も出る、血圧もあがる、全身の骨がくだけるほどに痛む) 霊光が送れるのである。

霊光

ふ四五 二 一三

霊光をおくるには文字や言語では表現できないほどの「動力」がいる。電気がおこるのも大きな水の力が動力に変わるからであって、これと同理である。一般には、ご霊光を送るといふと、いつもご神前に正座して黙禱しているように思っている。そのような生マヤやさしい業ではない。全身に生マ汗がわくほど大きなエネルギーである。ボウリングをして肉体を動かす、あちこち歩いて肉体を動かす。ただ、なんとなく動かしているのではない。その動力を生むための行動である。

霊光

敬四一 一二 一九八

「霊光」とはその光、その人の積徳、即ち善行を重ねていく人は、その思いが必ず通るのであります。聖人が「至誠天に通ず」といい、その体験をしています。誠の念が相手に通ずるのは当然であります。しかし、その念も波長が違っていては駄目です。救おうとする人、救われたいと願う人、この双方の念が結ばれてこそ合掌になり、これが神意に叶い神人同一するから、そこに「救い」が現われるのであります。―水が光るといえば不合理にきこえる。しかし、水が電気となり電気が光るといふ順序を考

霊光 敬 四二 一一 一四四

えてみると「水が光る」ことが肯定できる。水が光る—その光りが霊光である。一般的にいえば「電子」のようなものである。

霊光 命 四八 一一 一九八

「霊光」は「霊交」です。霊の交わりです。心と心とが結ばれる。「思いやり」という心が霊交です。霊交によって行つてまいりますから「交わる」という字が「光」となって現れます。誠と誠の心の交流、霊の交わりによって行うところに「霊光」という徳が光ってくるのです。私、教祖のそばに寄れば霊光がいただけるというのではありません。たとえ海山を隔てておつても心の通い合いがあれば「霊光」となります。いざという時に身を守るのは霊光である。霊光は励行するところ、守り実行するところ、誠の道をふみ行うところにある。そして、誠のあるところ、かならず誠の光がある。

霊光とスイッチ ふ 四三 一一 一一

「ご霊光をたのみます、おねがいます」という声がひきもきらない。親にすぎるのは自然のすがたであるが、ご霊光は求めなくとも、いつも会員みなさんの身のそばにとどいている。スイッチを入れればよいのである。神法一と綱領一と、この二つの実行ができていたか、おこなえていたか、これを心の底から見なおす。これがスイッチである。スイッチさえはいれば、たちどころにご霊光は皆さんの身心に流れこむ。これを信じてください。身心の建設は各人の望みであるばかりでなく、いのちの親の切に望みたもうところである。この建設には、いのちの親は、手をさしのべてご協力くださるのである。

霊魂 ふ 四四 一一 一一

この世では同じ腹から生まれた人を血のつながりと申しますが、過去・現在・未来を通じて霊魂は不滅であり、この魂の縁につながる人の数はかぞえようもないほど大きな数字になります。

霊魂 ふ 四七 九 一五

命は無限であつて金にも物にも勝る尊いものが霊魂なのであります。それですからいのちの親は神の子に、人の命の尊さは汲めどもつきぬ宝なりと教えさとしております。

霊魂 ふ 四八 一 六

地球は丸く運行しておりますから、霊魂も不滅であつて、肉体は借りもので一代だけであります。ですから、ねたみ、そねみ、怒りというような魂をもちつづけていけば、

いく千万年までも悪循環をして利子が重なり、その利子を返さなければ、人の世でもいわれるように、人であつて人でなしということになるのであります。

霊魂があつて万物がある。霊魂と万物とは、悠久消えることなく無限に存在しているのであります。

人はまた、命の親からのわけみたまとして霊魂を与えられております。霊魂はまた精神、すなわち清き神であります。精神の迷い、苦しみは、命の親のわけみたまが悩んでいるのであります。この悩みは医師では救えません。医師の治療で助けることはできませんが、救うという言葉にはなりません。(中略) 霊魂は大海の水の如く尽きることなく、また地球の廻転のようにとどまることなく存在していますが、命の親からのわけみたまとしての存在であつて、作られた存在ではありません。先祖がその善悪の真捧をリレー競技のように、次から次へと渡して行くのが霊魂であります。

男女の区別なく、年齢を問わず、生まれて二・三日でも一代であり、百歳まで存命しても一代であります。しかし霊魂は無限であつて尽きることなく、万物に与えられております。

霊魂はいのちの親の賜であり、悠久であります。

霊魂は悠久の存在です。これを淨め磨くことは神の子の責任であります。このことを自覚しないで、ただ病氣治しだ、商売繁昌だという目的だけでおまいりをし、合掌をしたりしていた人が、その目的が適わぬとみるやたちまちに神仏を否定するようでは、悠久にはまったく反した心の持ち方使い方ではないでしょうか。

霊魂は悠久なりと諭されましても聞くだけ、知るだけで霊魂そのものは空気のようなものであります。しかし心の動きは肉体に現れてくるのであります。

霊魂は悠久であると諭されています。これは天地自然の法則によつて諭されたものであります。それですから神の子の自覚をした者は天地自然の法則を学び修め、無条件実行をして悠久世界平和郷建設運動を守らねばなりません。それですから神の子であ

霊魂 ふ 五〇 一 七

霊魂 ふ 五一 一二 三

霊魂 ふ 五二 一 三

霊魂 ふ 五三 二 一〇

霊魂 ふ 五三 四 四

霊魂 ふ 五三 六 四

霊魂 ふ 五五 八 六

霊魂 訓 一八 八 一七

霊魂は無限のものであって、これは、信仰に到達して森羅万象悉く悟ってみなければ判然と目にも見えず、手にも取れないのであります。然し悟りを開けば目にも見えるし手にも取れることは事実であります。

零時 振 四二 三 九

零時は○であり和であり誠であります。又白紙は拍手であり合掌であります。

霊水 誠 四六 六 一七七

私たちの血液の中には「霊水」が流れております。これを「エネルギー」といいます。エネルギーも目には見えませんが、このエネルギーが、どれほどの働きをしているか、人知では考えも及ばないのであります。

冷静 ふ 四〇 五 二八

互いに協力して働ける姿は、冷静—靈性（誠）である。

冷静 命 四八 一二 二〇八

み教えを有難くいただける時は、心が冷静（靈性、靈誠）に帰っている時である。不安な時はその反対である。み教えをいただく時は、わが意を用いず、冷静な気持が必要である。

冷静 命 四八 一二 二八五

冷静とは靈性とか礼誠に通じ、活かしていただいている恩を謝す感謝から出た気持をいう。

冷淡 命 四八 一二 二八四

冷淡とはうつり変る愛情、すなわち熱したり、さめたり、愛したり、愛さなかつたり、わかした湯のような愛をいう。

霊の交わり み 三四 一二 四七一

大宇宙は神の姿であり、生命の親であります。人は小宇宙であって、子であります。神は親であり、人は子である以上、神の子であることを自覚せねばなりません。親子の交流は霊の交わりとなります。霊の交わりは無限の光と力と愛を発するものであります。（八月十五日）

霊の交わり み 三四 一二 七四八

大霊と人の魂と交流することは霊の交わりと申します。これこそ目に見えませんが、偉大な力を現わします。肉体の交流も神慮に合一すれば無限の力が現れてまいります。

（十二月二十八日）

冷淡にされても礼を申し上げられる信念があれば、霊魂は眼にも見えてくるし、手に

歴史 　　ふ 四四 九 一〇

歴史 　　命 四八 一一 一三五

恋愛 　　ふ 三七 一〇 二

恋愛 　　ふ 四七 七 四五

ロの部

老化現象 　　ふ 五〇 七 七

もとれるようになる。(中略) 甘露―これは見えもしないし、手にもとれない。しかし、味わって始めてわかる。霊も亦、誠一つの体験を通してはつきりわかる。古きことは水に流して、くよくよ思うなよ、ということをかんに宣布普及している

人がありますが、歴史は新しきものを建設するための教科書である。

毎日の歴史が徳となり、光となり、利益となるのである。今日一日の心の動きはどうであったか。目耳手足がいかに動いたか。夜、寝につく時、考える知恵をいただいているはずである。

恋愛は人間に与えられた尊いものですけれども、とかく淋しい心から感情的に走りやすいものです。そうした淋しい心から生まれた感情的恋愛は、生け花のように根がありませんから、その時はうきうきと楽しいようではありますが、生け花ですからよく愛情の水が補給されないと、枯れてしまう結果になります。結婚はこんな生け花であってはなりません。神聖な根のある、永遠につながるものでなければなりません。

恋愛ということは男女の中の感情的のものじゃない。(中略) 男と女ばかりが恋愛じゃない。事業にしてもすべてそうです。物を愛するもの(中略) 恋愛です。(中略) 恋愛で心中するとか、恋愛で世の中に迷惑をかけるというのは、そういうのは恋愛じゃない。そういうのは不がついて不浄という。

科学的には「老化現象」であり、どうしようもないのでありますが、これを回転させる信念は「神の子の自覚」であり、(中略) このように肉体を回転させていくのは、やはり、「誠は天の道であり、これを行うは人の道である」という信念また、神の子であるという自覚これであります。

勞して功なし 　　ふ　三六　一一　三

勞して功なし 　　ふ　五一　五　六

勞働 　　い　一八　一〇　四

浪人 　　ふ　四三　一二　一七

六 　　か　四四　四　五六

六 　　ふ　五三　五　四

肋膜 　　誠　四六　六　一五〇

六根清淨 　　命　四八　一一　一二九

露命 　　ふ　四一　五　一一

世の人が勞して功なし、すなわち無駄苦勞をしているということは、自我と食欲のためであつて、かような努力は、まことの道でもなければ、まことの業でもありません。本会の趣旨に基づいて、天地自然の法則に反しない生活をしていけば、勞して功なしということとはございません。これは事実であります。

勞働は活動であり、活動する事は万物一切活動しているものであり、決して活動することには於いては神も人も変わりはないのであります。

浪人の浪(ろう)は勞、すなわち「ねぎらう」ことである。ねぎらうとは愛であり、万物を包容して養つていく神の心で、これは実に大きい苦勞人である。

六は「むつまじい」——六という数字は、点と一と八の組み合わせであります。動かざる点を打つて一を引き八という末広がりを書きます。この六が重なる、むつまじい事が重なるというのは、貴方もこちらも睦まじくであつて、皆が互いに合掌であります。

六はむ、無条件であり、睦まじくすなわち平和であります。和合とも申しませう。調和であつて相和する、合掌。これは助け給え、大難が小難、商売繁昌ということをして神仏に祈る合掌ではありません。

「肋膜」と書かれますが、「ロク」は「禄」であります。(中略) 現在では、「月給」とも「給料」ともいいます。この「禄」は「六」であり「六」は「む」であつて、「睦ましい」ことであります。むつまじい心、むつまじい生活——即ち「平和」であります。この平和に、幕をはる。交通を遮断する。あちらこちらに幕をはつて世の中を暗くする。——こういう勤勞でありましたなら「まじめな働き」と天は認めないのであります。

整理のつかぬ人は、そこに疑いが起るのである。聞き修め、広い心で整理することが大切である。六根清淨とは、心の中が立派に整理整頓されていることをいふのである。「露」はこの世始めからあり、これから先何億年たつても、この地上に宿る。露は水である。水は神である。人の命も露の如く、火・水・風によつて活かされ成長してい

る生命であり、露と同じく何億年もつづいていく。

ワの部

輪 五三 一 八

神里・悠久世界平和郷が目標としている富士山の頂上には一里四方と聞かされている大きな輪があります。この輪は、和であり、大和であり、大和魂であり、また日輪であり太陽でもあります。

和 四三 一 七

人のことばをつね日ごろから正しく聞きおさめて、身心（みこころ）の肥としておかねばならない。これが「和」である。人のことばに、疑いをもったり、腹をたてたり、うらみをもったりするのは和ではあるまい。和はどこまでも輪であって、丸い。かけるところなく丸い。

和 四二 一一 九九

よく「主人に内緒でお参りする」と言っている人がありますね。私はこれを許しません。家族の理解のもとに行う。これが和（輪）ではありませんか。

和 四二 三 九

零時は○であり和であり誠であります。又白紙は拍手であり合掌であります。

和 四三 一〇 二

和は無限であり、零である。地球の存在は和であって、日月の如く円満な姿、これを大和魂と云う。日本の国旗は日の丸であって、大和を象徴している。日本の国民は元来円満、平和な国民である。今日は、今日とは、ことたまのまにまにである。このことたまのまにまにと云うことは学校では教えていない。

和 四八 一一 一九九

和は円である。親子の縁、夫婦の縁、兄弟の縁、ただ人だけでなく万物すべてが縁である。和である。それが証拠には、生れる時オワーという声を出す。「大和」である。大きな和である。和は零であり、無限である。無限大である。各人が神から与えられている魂は和でなくてはならぬ。そして、日月のように美しく綺麗で、決して汚れてはいない。

和 命 四八 一二 二二二

今日一日の生活を明朗和楽にさせていただくことは、「和」であり、「和」は○であり、○は霊であり、霊は神であり、魂であり、清き神である。すなわち、美しい心である。そして、この美しい心が、真心であり、至誠であり、仏であり、菩薩であり、全智全能であり、絶対的なる愛善であり、無条件の力なのである。

若い 命 四八 一二 二八九

口と心が一つでつねに心の底から話合い、打ちとけ合って心の和解のできる人はいつまでも若い。

和解 命 四八 一二 一六二

相互に自分の足らぬ点を詫び合い、相手に感謝の言葉が出れば始めて心と心の交流となり、真の和解がなりたつのである。

和解 命 四八 一二 一九八

原水爆を持つていても、和解さえすれば使用するようなことはない。和解とは感謝の心を捧げ合うことである。協力、合掌は平和である。誠の姿である。誠の道を進みゆけば、病める心も健やかとなり、日々なすことがみな幸となるのである。

わが意を用いた聞き方 命 四八 一二 一六

同じ話を毎日つづけて何回も聞くと、ああまたあの話しかと、講師も話しも軽蔑してしまう。これが百回も二百回も聞くと、どうだろうか。「もう、その話はわかっている。」と否定することにもなりかねない。それは、話を聞くのに「我意」を用いているからである。我々は生まれてから死ぬまで、同じ味の空気を吸い、水を飲み、米のご飯を食べている。それでいてあきることがない。真心で話し、真心で聞くなれば、同じ話でもあきることはない。始めて聞いた時の感激も、百回目に聞いた時の感激も少しも変わらないというのが、「まこと」の聞き方である。

わが意を用いる 命 四八 一二 二六七

遊ぶときにはわが意を用いてもよいが、実行の場合には決してわが意を用いてはならない。

わかった 命 四八 一二 二〇九

「わかった」とは「和勝った」である。物をいただくよりも、謎のとけたうれしさは筆にも言葉にも尽せぬものである、これが悟りである。学問により知を磨き、世のあらゆることを知る道もあるが、この謎をとくのは学問ではできない。

わがまま 誠 四六 六 二四八

わがまま、というのは、自我を通すことです。自分の考えも行動も正しいとして人を

我がまま 訓 一九 六 三

わがまま心 命 四八 一二 六〇

わかれる 命 四八 一二 一七〇

別れる 導 三四 一〇 九九

別れる 命 四八 一二 二六六

和合 訓 一八 八 六三

災い 命 三四 一二 一五

否定する。これ、すなわち「わがまま」であります。「気まま」は自由です。気ままを止められますと、自由を束縛されてしまうことになります。善、悪ということばでいえば、わがままは悪であり、気ままは善であるといえましょう。

時によると利害の為に、傲慢の為に、身勝手の為に、慢心の心から人を侮り、「我」の心の為に美しき人から離れてしまうような言葉を出したり、行いをするなれば其の人こそは不幸な人となります。何時も変わりなくやさしい、美しい心で神の御心、親の心に叶いますよう近づき離れないように努力する事を忘れてはなりません。

万事思うようにゆかぬ時、腹を立てるような心の持主に神は力を与え給わぬ。思うようにならぬ時、腹を立てる人はわがままな心の持主であるため、神は力を与え給わぬのである。かかる時、反省し感謝する人にこそ神は力を与えてくださるのである。

雑音を聞いたり、きかせたり、怒ったり、怒られたり、悩んだり、悩ませたりすると和がかけることになる。丹精して花がまさに開かんとしたとき、枯れたらどんな気がするか。(中略) かくならぬよう日ごろに修養があるのである。言葉も労力も喜ばれるように、感心されるよう、信頼されるよう、信用(神用)されるよう使わねばならぬ。おたがいにみ教えにつながり、和を枯らさぬことが大切である。

離れ離れになった時にどうなるか、これは別れる(輪枯れる)九州の言葉ではどうか知りませんが、別れる、和枯れる、和は円であります。この和が枯れるという事は離れ離れになる。

別れるとは和離れる、和枯れる。○離れることである。円(縁)が切れることである。人生の最大不幸である。人生に大切なものは和である。

天地が和合して自ら実行し、人々に示して居る事を忘れて居りはしませんでしょうか、仲良く和合して居る子供を罰するものではありません。

病む人も病まれる人も、我執貪欲を取り去り、自然の法則に基づいて無条件実行をすれば、災い転じて幸福になれることは間違いないのであります。(一月七日)

災い 三四 一一 一五〇

災厄を逃がれようとの努力はしましても、現れてくる災厄の根元を悟るだけの自覚を忘れて居ります。種を蒔いたことを忘れ、現れてきた結果だけを見て、早く解決し整理せねばならぬという心になるのであります。(三月十三日)

話術 四〇 一一 一六

話術は天の和(話)と地の和(話)の合掌である。天の和(話)だけでも、地の和(話)だけでもいけない。天は徳、地は愛―どちらに片よつても話は聞きにくい。

患い 三八 一 四

心の動くままに肉体は動きますが、さかしまな心の場合、心身の一致がこわれてしまします。そのように心のうごきが法則にかなわず、我執貪欲の心である時は、器である肉体は破損してしまします。これすなわち肉体の患いでありま。

患い 三四 一一 五二

肉体の患いは、魂を患うから、それによって肉体が不自由になるのであります。(一月二六日)

忘れては 五四 二 四

忘れてはならないことは、家族一同が団結・協力・融和してゆくことであります。家の長を敬い、幼をいつくしみ、相互の理解に努めよというお諭しであります。このような家族の団結は日本の社会の秩序のものであつて、長い伝統を持つております。

忘れねば 五四 二 四

忘れねばならないことは、うらみ・ねたみ・そねみ・にくしみの心であつて、これは一時も早く浄化して忘れ去らねばならないことであります。このような邪念、つまり、さかしま心で迷い苦しむことは病み患いのものであつて、日常生活では、このような心の浄化はもつとも必要なことであります。

忘れる 一八 一〇 二二

忘れることは智慧の足らざるためであり、智慧のたらざる人は、我欲傲慢であり又いらざる所に心を配り、己のなすべき道もなせず、人を見て、どうや、こうやと理窟の心で、人を裁き戒め、苦しめ、悪く言いそのくせ己を省みぬ人があります。このような人こそ神から智慧を取上げられてしまう為に、尊い道順も己の為すべき務めも忘れて損害を受けるようなことになってしまするのであります。

忘れる 一八 一〇 二二

忘れると云うことにも善と悪とがあります。万事に於いて忘れるような場合即ち迷つて迷い抜いてしまふようでは何事も完成することが出来ませんが、心配すること即ち

迷いながらも努力して、その迷いから悟ることによりて何事も完成して行くのであります。

忘れる 〃忘れる〃とは「迷い」である。

忘れる 命 四八 一二 二七〇

「忘れるとは、心が亡びると書く。今日多くの人は大切なものを忘れていく。大切なものが亡びると、幸せもなければ、文明文化の建設もできません。第一は、活かされていることを忘れていく人が多い。生きることにのみ心をくだいて活かされる大恩を忘れている。活かされていることを忘れていく人に、現在の環境に感謝ができるはずがありません。感謝ができないばかりか、不平不満ばかりだ。いいかえると「人の命の尊さは汲めどもつきぬ宝なり」ということを忘れていく。

和石 命 四八 一二 二七〇

貫つたことは忘れてはならない。しかし、差しあげたことは忘れよ。

和石 命 四八 一二 二七〇

和石の和は、大和（たいわ）であり、輪であり、円であります。日月も、地球も丸であります。円には、始めも終わりもありません。つき目もないし、角（かど）もない。大宇宙も、この世も、すべて丸い。悠久であります。

私（総裁） 命 四八 一二 二七〇

丸は零であり、霊であります。石は意志であり、心であります。意志も心もそれ自身では目に見えません。それが、言葉となり、動作となると、初めて目に見えます。和石は、大和への意志を、丸い円満な平和な心を象徴してると言ってもよいのであります。

私（総裁） 命 四八 一二 二七〇

私は道案内者であります、その道も人生の行くべき道の案内者であります、（中略）み教への親が遠くの方から霊光を送って、洗い清められるように助けを致します。

私のもの 命 四八 一二 二七〇

私の子供だ、私の妻だ、私の主人だと言っても、私のものではありませんから、私の自由にはならない。私の子供なのにそんなことをして、といくら思っても、一人の神の子でありますから、やはりそれは何するか分かりません。私のものだという考え方が、常識というか、感情でありまして、みおしえを通じて申しますと、そういう思いは我執貪欲であって、もっとも慎まねばならぬものであります。

私の病い 　　ふ 四三 六 六

私の患いは、神のお叱りではない。尊い教訓である。私にとつては、なににも代え難い尊い宝である。だから「見知らせ」がある場合は、いついかなるときでも感謝でいっぱいである。感謝して受けるのは誠であり、不平や疑いで受けるのは誠ではない。

私の靈感 　　ふ 四三 三 八

雷は天空のひびきであり、大音（大恩）を発する。雷が鳴れば稲光りもある。稲光りをうけて、いねは稔る。大極のひびきは正に大音（大恩）であり、これを実行すれば必ず稔るのである。私の靈感はこのように尊厳である。

和服 　　ふ 四七 一〇 一二

日本の伝統的精神は「和を以つて福となす」和服という姿で終始一貫きびしい中を過ごしてまいりました。

ワラ 　　ふ 四七 九 一四

米を実らせる尊い親とも申しましょうか、ワラとも申します。ワラへ実るということは、ほほえみながら働くという教科書でありまして、これすなわち平和の第一歩であります。

藁 　　ふ 四九 四 七

稲穂の元は藁であります。「藁へ稔る」ことは、すなわち「笑え・実る」であり、日出ずる日本の国であります。

笑い 　　訓 一九 一二 一〇

笑えない時には「笑え」と云う注意を頂きます。藁は米の実を結ぶ草であります。この草は熱い炎天の時に成長して参ります、温かい誠心からの愛の気持なくしては子供たちの教育は出来ないのであります。母親は米のなる草であり、子供達は米であります。藁と米とは親子のようなもので、親は子の為に、子は親の為に心を込めて笑え笑えと生活を続けて行かれます事が如何に尊く、総てに勝ち抜く第一歩であります。

笑い歌い踊る 　　ふ 四一 三 三九

「笑いなさい」ということは、捧誠感謝しなさいということ、
「歌いなさい」ということは、全てを消化（唱歌）し、無実の罪をきせられてもウラミやネタミを持たず素直な気持ちをもってということである。また「踊りなさい」ということは、立派な社会人になるために、身軽るに無条件で働きなさいという教訓がふくまれている。

笑う 　　訓 一九 一二 一七

平らな道でころんだ人、亦それを見た人も、自然に笑い出す時があります。自分の恥を自分で笑えるようになるなら人も喜んでくださるのであります。自分の恥をかく

すから人に憎まれるのであります。己の足らざる所を喜べば人に尊敬されるのであります。

笑う 命 四八 一二 五一

笑うというのは手のひらをひろげることと同様である。笑うと心持が開いてくるのだ。掌が開いてものがつかめるように心が開くと甘露が心に入ってくる。そしていただいたら閉じねばならぬ。これが極意である。つかんだものは懐ろに入れるのでなく、それぞれ置き場所があるはずだ。入れたら扉を明け放しではいけない。一たん入れれば鍵をかけしまいこむ。それからあちらこちらへ出すのである。

悪い種 命 三五 九 五

今までまいた種は必ず生えてくる。悪い種を早く掘り出すのは、実行より他ないのである。

悪いだろうの心 命 四八 一二 二九八

ご馳走になったら悪いだろう、世話になったら迷惑だろう、というのは自由の心でない。束縛している心はつらいものだ。ありのままの姿、ありのままの気持こそ環境に順応した明るい心である。

シの部

シ 命 四四 三 一二

シというのは、本会の趣旨においては、運行の健やかにして止むことなき、天地自然の法則のよって生ずる大極を神として崇敬せよ——と教えてある。交流です。

あとがき

父の学びの友を見てこれを完成させようと思いつてから早五年の歳月が流れてしまいました。

パソコンでは表計算しかしていない私ですが文章の打ち方から入り体裁等を考えこれで良しと始めましたが途中での体裁の変更とかを何回も行い試行錯誤の連続でした。次は原稿の不鮮明さに判読に判読を重ね前後の文章から判断したのもや、別冊の本より少しでも判読ができるものを探し原稿に忠実である様にと心掛け悪戦苦闘の連続でしたが進むにつれて次第に分るようになり入力も進んでまいりました。

しかしその後教学院様より支部長藤井禮子様を通じて書かれている文章は私考を入れず総てご本の通りでなければならぬとお達しがあり、また最初から見直すことになりました。困っていた私に支部長様が杉並支部きつてのパソコン通の方々をご紹介戴きました、当時杉並支部六十周年記念の準備に忙しい中にも拘らず此処まで辿り着けたのも夫々得意な分野を活かしご協力戴いた賜物であった事に深く感謝する次第であります。

今回「学びの友」として一編より三編までの三冊分より「ことのわ」のみを辞書形式にして一冊に纏めたため各々発行年数毎に記載されていた項目を一つに纏めることが出来ましたので、ご覧になりやすくなったと思います。

これまでに本部顧問藤井寿章様、本部教学院様を始め杉並支部長藤井禮子様、高橋拓夫様、小菅宣良様、弘瀬忠夫様方々のご支援とご協力を得てここまで参りましたことにあらためて御礼申し上げる次第でございます。

平成二十三年十二月 吉日

修養団捧誠会 杉並支部 片桐康喜

ことのわ

非売品

発行日 平成二十三年二月三日

編纂者 片桐 康 一
修養団捧誠会 杉並支部 会員

発行者 片桐 康 喜
修養団捧誠会 杉並支部 会員
住所

〒一六六・〇〇〇四
東京都杉並区阿佐谷南一、四四、三
電話 〇三、三三一、五一六五

印刷所 株式会社 芝光社

題字 梶原寿安